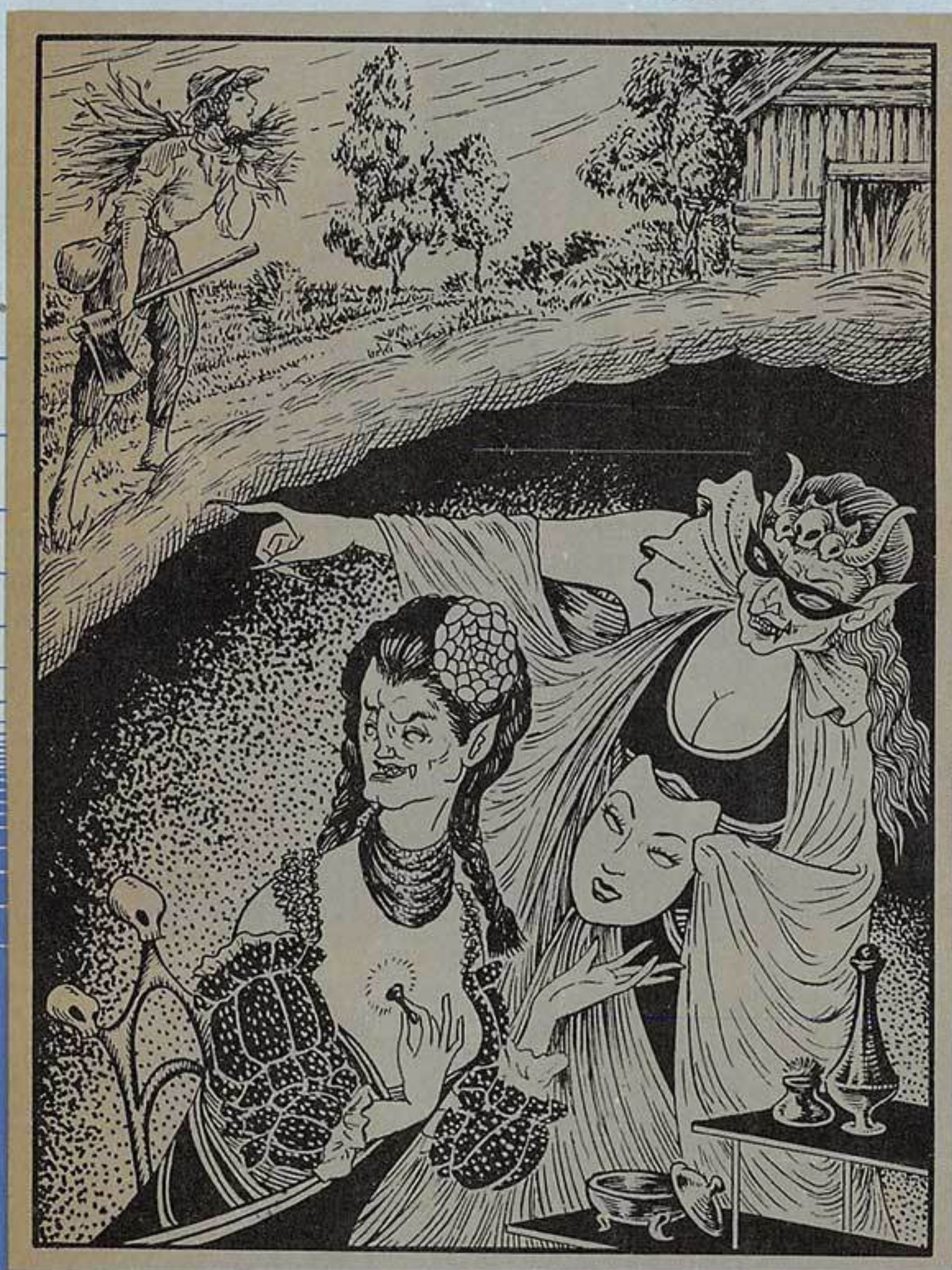


9月号



69
9

作・六・鬼 団

好評の傑作集大成第四弾刊行!!

花と蛇

特集号

定価 五〇〇円 略号 『花』

団鬼六作長篇サディズム小説『花と蛇』は、昭和37年8月号の奇譚クラブ誌上より現在まで引続いて連載し圧倒的人気で満天下のSファンを沸かせた傑作であります。過去三回に亘って発行した特集号も悉く売切れとなる人気でありましたので、ここに新しく昭和42年1月号以降の分を一括登載、堂々三百数十頁の特集に加え四馬孝画伯筆の秀麗きわまりない口絵を添えて御覧にいたします。

四馬孝画 口絵

美女羞恥責 花と蛇 画集

- 一、恐ろしい浣腸の末排泄を強要される美女
- 一、中腰で縛られた美女の品定めする調教師
- 一、清純な美女に初めて縄掛けしていたふる
- 一、剃毛の羞恥責めに悶える地獄部屋の美女
- 一、全裸の開股縛りで深窓の美少女を責める
- 一、俵のように縛られて宙吊りにされた美女
- 一、股間縛りの全裸責めにされる絶世の美女
- 一、足吊りで強制浣腸を施される全裸の美女

本文内容見出し

発端 美女を狙う狼たち

第一章 清純な令嬢の屈服

(カメラと令嬢・女奴隷・口惜しき陶酔)

第二章 人身御供の令夫人

(燃ゆる美体・狼の酒宴・人身御供)

第三章 深窓の美少女とズベ公

(赤いしごき・再び奈落へ・奸計)

第四章 小夜子への執拗な調教

(鈴と縄)

第五章 変性色事師の登場

(二人のシスターボーイ・化物の計画・京子の哀泣)

第六章 生れかわるスター京子

(崩潰する京子・夏の毘・地獄の宣誓・まんじの舞)

第七章 激しいスターへの訓練

(奈落への道・美女と白痴)

第八章 低脳男と令夫人の結婚

(奴隷の花嫁・二対一)

第九章 愛弟子を調教する静子夫人

(蛇の巣・悲しき決意)

第十章 羞恥と屈辱の日本舞踊

(美花の踊り・薔薇と百合)

第十一章 悪魔たちの哄笑

(白い関係・調教日記・手鏡)

第十二章 地下室の羞恥と汚辱地獄

(甘い調教・挫折)

第十三章 珍芸を開陳する令夫人

(おとし穴・筆と硯)

第十四章 淫靡な時代劇ショー

(三人の風来坊・時代劇ムード・牢獄にて・フランス式)

第十五章 華々しきショーの展開

(ショーの開幕・楽屋の中・桧舞台)

第十六章 野卑な妾二人のいたぶり

(珍芸・姐の上)

第十七章 ズベ公達の邪悪な責め

(美女と野獣・ある日の回想)

第十八章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち

(美女崩潰・別離)

第十九章 悪党の執拗ないたぶり

(鏡の部屋・卑劣な録音)

第二十章 文夫と小夜子の屈辱的対面

(鏡地獄・断髪令嬢・悲しき対面)

第二十一章 勝ち誇る悪党一味

(受難の姉妹)

第二十二章 中国伝来の秘法

(鬼女よりの招待・中国の秘法・羞しい唄)

第二十三章 緊縛された美女の涕泣

(三悪女の狂態)

第二十四章 新しい餌食への触手

(義兄弟)

第二十五章 苦痛と屈辱の生地獄

(肉の媒介・美津子の号泣・同志討)

第二十六章 恐怖の責め続く

(地獄の接吻・巨大な責め)

第二十七章 結末なき責めの結末

(調教柱・復讐劇・肉の拷問・京子の珍芸)

〔最新版〕 美貌女体緊縛写真コレクト集

X組百態 大手札型印画紙(9×13寸) 極鮮明焼付

各組 一組一枚(送料共)

四組四枚 五〇〇円
十組十枚 一〇〇〇円
二十組二十枚 一八〇〇円
五十組五十枚 四〇〇〇円
百組百枚 七〇〇〇円

郵便番号 545-91

最近撮影の新しいモデルの緊縛写真の中で一粒選りの美しいものばかりを集めました。各組一枚です。お好きなものをお求め下さい。御注文の際の御指定はX組の何番とお書き願います。

☆

1 正面強烈亀甲縛(大島 照代)
2 美貌は鞭に泣く(関谷富佐子)
3 襲う影に慄く(佐々木真弓)
4 弾む裸身に縄目(佐々木真弓)
5 柱縛りで鞭打ち(関谷富佐子)
6 縛られて困るわ(金原奈加子)
7 私を襲わないで(左近麻里子)
8 縛られて嬉しい(中河 恵子)
9 麗わしの縛女体(中河 恵子)
10 蒲団の上に狂う(関谷富佐子)
11 豊満女体の縄目(大島 照代)

12 二つ折りの裸身(川越美佐子)
13 痛打に哭く美貌(関谷富佐子)
14 長身の脚を伸す(佐々木真弓)
15 若肌は縄に美し(長井葉津子)
16 恥らいの女体美(中河 恵子)
17 何故私を縛るの(金原奈加子)
18 感泣する胴縛り(ローズ秋山)
19 猿ぐつわの悦虐(関谷富佐子)
20 荷造り縛りの女(中河 恵子)
21 足指はく字に(佐々木真弓)
22 麻縄の柔肌責め(金原奈加子)
23 美しき亀甲縛り(左近麻里子)
24 柱縛りの隙間見(長井葉津子)
25 緊縛全裸の極美(左近麻里子)
26 海老責めの苦悶(佐々木真弓)
27 全裸の縄は輝く(佐々木真弓)
28 猿轡と縄に泣く(川越美佐子)
29 縄に喘いだ童顔(長井葉津子)
30 出脐を晒す縛り(佐々木真弓)
31 後手吊りの全裸(長井葉津子)
32 首膝縄にあえぐ(長井葉津子)
33 大の字で晒す裸(関谷富佐子)
34 全裸緊縛の哀愁(佐々木真弓)
35 高手小手の全裸(佐々木真弓)
36 真迫の縛プレイ(ローズ秋山)
37 豊満な裸身縛り(左近麻里子)

38 竹棒責めに悩む(大島 照代)
39 亀甲縛りで寝る(左近麻里子)
40 縄目に喘ぐ表情(中河 恵子)
41 開股縛りの正面(中河 恵子)
42 猿轡に喘ぐ緊縛(左近麻里子)
43 縛りの肌を見て(金原奈加子)
44 私は縛りが好き(金原奈加子)
45 強烈縛りを味う(金原奈加子)
46 麗身を横たえて(左近麻里子)
47 二つ折に弾む胸(佐々木真弓)
48 柔肌に縄は厳し(長井葉津子)
49 柔肌に痛む麻縄(左近麻里子)
50 全裸の女体引廻(中河 恵子)
51 開股縛りを諦観(左近麻里子)
52 突き出した尻(中河 恵子)
53 あどけなき緊縛(金原奈加子)
54 首縄股間縛の女(長井葉津子)
55 強烈後手で括る(佐々木真弓)
56 恥しい縛り初め(金原奈加子)
57 海老縛りで悶ゆ(関谷富佐子)
58 罵られる緊縛女(長井葉津子)
59 豆絞りの猿轡で(金原奈加子)
60 もう虐めないで(金原奈加子)
61 畳に転す股間縛(金原奈加子)
62 女体は縄に映ゆ(左近麻里子)
63 全裸の縛を見て(長井葉津子)
64 答は柔肌を乱打(関谷富佐子)
65 臀部に答は炸裂(関谷富佐子)
66 この裸身を捧ぐ(佐々木真弓)
67 諦観の縛り表情(長井葉津子)
68 足吊りで晒す肌(長井葉津子)

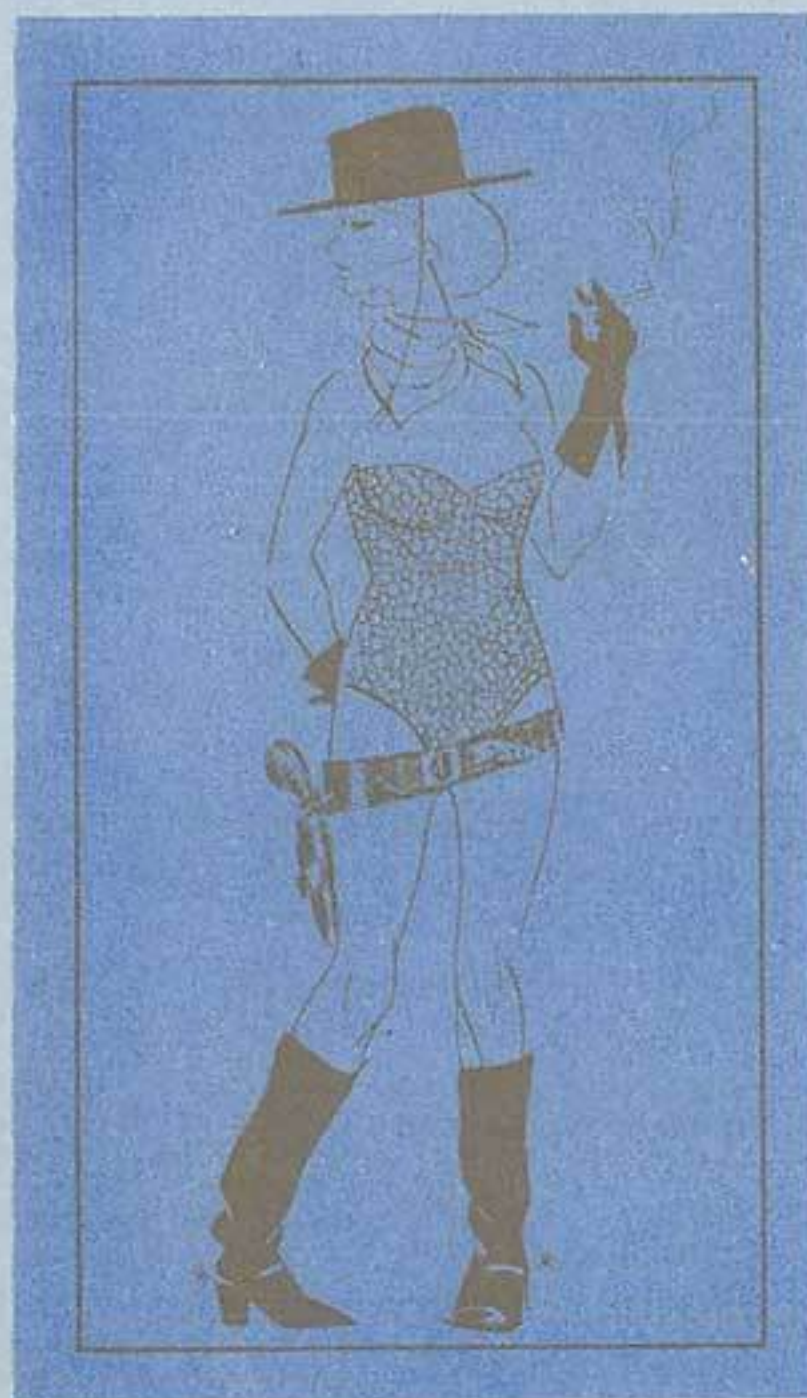
69 美体は縄に映る(中河 恵子)
70 遅ましき臀部晒(左近麻里子)
71 両手吊りに喘ぐ(長井葉津子)
72 左近麻里子の裸(左近麻里子)
73 開股縛りの羞恥(中河 恵子)
74 捧げられる女体(中河 恵子)
75 鉄砲責めの女体(左近麻里子)
76 麗わしの肌を縄(佐々木真弓)
77 後手縛りの連続(ローズ秋山)
78 開股の股間縛り(大島 照代)
79 強烈な縄目の女(川越美佐子)
80 逆エビ責め地獄(ローズ秋山)
81 豊麗な裸身の美(関谷富佐子)
82 羞らいの流し目(佐々木真弓)
83 肌を喰い込む縄(長井葉津子)
84 胴締縛りと猿轡(長井葉津子)
85 投げ出された裸(金原奈加子)
86 正面の亀甲縛り(左近麻里子)
87 開股縛りの女体(左近麻里子)
88 後手縛りの全裸(中河 恵子)
89 柱に晒す強烈縛(長井葉津子)
90 羞恥の脚挙げ姿(佐々木真弓)
91 豊かな乳房誇示(佐々木真弓)
92 美しい女の縛り(佐々木真弓)
93 股間縛りに羞う(長井葉津子)
94 ホステスの緊縛(佐々木真弓)
95 椅子坐開股縛り(中河 恵子)
96 無防備な両手吊(関谷富佐子)
97 息づまる猿轡 (川越美佐子)
98 人身御供の乙女(長井葉津子)
99 両手吊で晒す肌(金原奈加子)
100 爪先立つ強烈縛(ローズ秋山)

奇譚クラブ
昭和四十四年八月二十日印刷 昭和四十四年九月一日発行 九月号（第二十三卷第十号）毎月一回一日発行
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十二日国鉄大局特別扱承認雑誌第二〇号

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukisyupan

Osaka Japan



定価三五〇円

9月号 ￥ 350

〔最新緊縛資料写真一覽〕

梁からの両手吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(ろふ)

床柱に宙吊り縛り

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(ろへ)

開股股間縛り正面

大手札二枚一組 三〇〇円
山原 清子 略号(ろほ)

二女連縛責模様組写真

大手札十枚一組 一五〇〇円
大塚・山原 略号(ろそ)

二女連縛煩悶場面組写真

大手札十枚一組 一五〇〇円
山原・大塚 略号(ろひ)

股間縛り刺青競艶

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(ろさ)

股間縛り正面妖美表情

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(ろす)

喰込む股間縛りの縄目

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(ろせ)

手 宙 吊り

大手札三枚一組 四〇〇円
梨花悠紀子 略号(つた)

オムツの股間縛り

大手札四枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号(むく)

強烈責、被虐の果

大手札五枚一組 八〇〇円
梨花悠紀子 略号(りお)

乳房 いじめ

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(とお)

激痛ノ逆エビ責め

大手札四枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号(きえ)

美貌の裸身に縄目

大手札三枚一組 四〇〇円
絹川 文代 略号(きん)

腰元吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円
村井知可子 略号(こり)

腰元間諜の拷問

大手札四枚一組 六〇〇円
村井知可子 略号(こく)

椅子 エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(おき)

六尺 縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(ろは)

弓 吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円
梨花悠紀子 略号(つき)

狙われた和装の娘

大手札十二枚一組 二〇〇円
愛川 悦子 略号(ねい)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
水本 茂美 略号(えひ)

ゴム衣 緊縛

大手札三枚一組 四〇〇円
水本 茂美 略号(みす)

抓ねりと樂ぐり責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚、東浦、木村 略号(きし)

バンド 責め

大手札五枚一組 八〇〇円
東浦ひかる 略号(はん)

夫人の表情

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号(せや)

後手吊り足挙縛り

大手札五枚一組 七〇〇円
東浦ひかる 略号(うら)

二つ折りエビ責め

大手札五枚一組 七〇〇円
東浦ひかる 略号(うり)

足挙げ椅子責め

大手札五枚一組 七〇〇円
東浦ひかる 略号(うる)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(えり)

鼻の穴責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大手 啓子 略号(なく)

鼻 なぶ

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ない)

鼻責めの陶醉

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(なは)

完全逆さ吊りフオート

大判判三枚一組 一五〇〇円
木村 洋子 略号(さつり)

両足首括り逆さ吊り

大判判五枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(さか)

逆さ吊り女体折檻

大判判五枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(させ)

手足逆滑車宙吊り

大判判五枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(さと)

啓子をいじめる清子

大手札八枚一組 一五〇〇円
山原、大塚 略号(うの)

啓子を縛しめる清子

大手札八枚一組 一五〇〇円
山原・大塚 略号(うな)

山原を責める大塚

大手札八枚一組 一五〇〇円
大塚・山原 略号(うね)

逆さ吊り正面と背面

大手札二枚一組 四〇〇円
増田みゆき 略号(つる)

煙草責めの裸身

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(たく)

乳房責め五態

大手札五枚一組 七〇〇円
山原 清子 略号(てら)

全裸麻縄強烈縛

大手札十枚一組 一五〇〇円
山原 清子 略号(いね)



奇譚クラブ

△第二三卷 第十号・通刊第二五七号▽

(昭和四十四年) 九月号 目次

△本 文▽

団鬼六・辻村隆・千草忠夫・芳野眉美・白鳥大蔵

「常連作家を批評する」……………山本 八郎…(10)

告白 ひそかな愉しみ……………伊里賀 透…(18)

連載小説「大噴火」(第十二回)……………千葉 青鬼…(22)

S・C・R△性問題相談室▽回答欄

「金魚などを用いた女性のオナニーについて」弓削 達人…(30)

連載M小説「ピエロ床屋」(7)……………鬼山 絢策…(34)

私の理想像 美しい緊縛十則……………桜井洋一郎…(43)

小杉千恵さんに共鳴「水圧」……………座頭 孝司…(48)

告白 私の最近のゴムプレイ……………梅川 幸子…(59)

文芸切腹 史△殉死篇 2▽……………中康 弘通…(64)

わが「切腹」体験……………桑島 大人…(69)

スケ・スケ・ルックのキキ……………芳野 眉美…(70)

セミ告白 「ジャングル温泉」のいじわる……………小杉 千恵…(77)

鬼六談義 △奇妙な性の話△……………団 鬼六…(80)

奇クサロン……………編集部構成……………(232)



珠江夫人羞恥責私案……………東山 大作

フォト通信 「私たちのプレイ」……………橋本 二郎

サロン楽我記(第六十三回)……………辻村 隆

S・コレクション「しろい涙」……………豪 城二

テレビと雑誌に見る女性上位時代……………麻曾比須人

イメージ画 「獲物」……………宇都宮 宏

イメージ画 「給料日」……………春川ナミオ

私の選評 恍惚の映画……………佐藤 光雄

最近の緊縛映画……………東山 映史

浣腸シーンの登場映画……………南美川 喬

私の不満……………赤ちゃん

告白「甘い空想」のつづき……………有田久美子

編集部だより……………編集部

フォト「愛妻ゆう子」……………新田 英雄

奇クへの短信 カメラハントへの願望……………小杉 千恵

僕のイメージ画集「追憶」……………室井亜砂路

五色の甘夢を詩う「女装の悦び」……………中村 純

肥満女体愛好 「私の描く絵」……………肥美 好也

テレビ画面のフェチズム……………牧 高志

女性乗馬フォト アマソンの面影……………佐野 寿

悦虐の詩 「這松の褥」……………葉月由紀夫

告白 私達の浣腸プレイ……………藤岡江根真……………(88)

レンズの中の女「十人十色」……………(第五話)……………泉野 薫……………(92)

読者論稿 昇華の妙薬……………新宿 町人……………(101)

男性虐待快楽術(第八話)

BAR・SADO物語(後)……………馬族 保……………(104)

映画批評 「責め地獄」を見て……………絵面優美子……………(117)

連載小説『花と蛇』……………(続篇第五十七回)……………団 鬼六……………(124)

S・Mは「上げ底」?……………予世場良三……………(144)

珍書探訪 見捨てられた艶笑資料……………斎藤 夜居……………(146)

マニアの気持「新しい縄」……………早木 夢二……………(151)

SMカメラ・ハントへ小池美喜の巻

「飼育の愉しみ」……………辻村 隆……………(152)

我が要望 責め・断層……………矢吹 弾……………(171)

妊婦礼讃 「契約妊娠」……………高野 原美……………(178)

フェチ小説この胸のときめき……………日本 武士……………(180)

懸賞告白 エッセー「疑問」……………ワタナベ……………(192)

創作 暗い森が燃える……………木暮加奈子……………(199)

私の体験記ふんどし物語……………鈴木ゆり子……………(206)

懸賞入選作品『白い牡』……………(2)……………麒麟 欧二……………(216)

読者通信……………編集部選……………(252)

(目次カット「ウシの市」……………室井亜砂路)

(扉カット「遅いわネ」……………日本武士)

編集部特写初産婦若妻臨月の資料案内

昭和四十三年三月号の奇クサロ
ン誌上で「或る願望に托して」と
いう告白を發表して、本誌の緊縛
モデルになりたいたいというM女
性の緊縛姿は、その希望通りにし
た金原奈加子氏の緊縛姿や、山本
氏のカメラの前で、その緊縛姿を
開陳した八月号の「カメラハン
ト」記事にあるように、カメラは
妊娠した若妻の女体を、カメラは
「アニアの方々は勿論のこと、満
つと考へ、ここに編貴重な資料と
なると、試みたので、御希望の向
きには、代金同封の上お申込み願
いたい。

妊婦緊縛の部

逆吊りの臨月妊婦

大手札三枚 一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 一組 略号 八〇〇円
初めの完全なる逆吊り写真。M
女性としての金原奈加子の決死的
な協力があつてこそ成功すること
が出来た稀有の妊婦資料。

両手吊りの臨月妊婦

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 一組 略号 八〇〇円
大きなお腹を前面にさらして両
手を高く吊られた無防備な姿態
はM女性奈加子のマゾ心をこよな

くくすくるのであった。

若妻初妊娠の哀歎

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 一組 略号 八〇〇円
後手高小手に厳しく縛った胸
の縄目は脂肪のついた柔らかな
顔に、豆絞りの表情がにじみ出
る。哀愁の表情がにじみ出た

妊婦全裸縛り全身

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 一組 略号 八〇〇円
小柄ながら均整のとれた肢体の
奈加子で、あつたが、今は臨月
太鼓腹を突き出して、その全裸
全身像は一種異様なエキセント
ックの美を、初産婦の全身を見
手に縛られたこの集をおすめす

妊婦腹の緊縛側面

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 一組 略号 八〇〇円
今まさにちきれそうに便々た
るお腹を誇らしげにさらして、
りきりと肌に喰ひ込む縄目を甘
した若妻は、淋しくうむきなが
ら自分のさがを悔いている。

強烈縛り妊婦責め

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 一組 略号 八〇〇円
沢山の縄を用いて皮下脂肪の豊
富な肌を埋もるばかりに力一杯縛
り上げた若妻の臨月腹を中心にし

て鮮鋭なレンズの目は産毛一本も
余まざりばかり執拗に妊婦の神
秘をあばきだしてゆく。

若妻の緊縛妊孕美

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 一組 略号 八〇〇円
裸の全身に、その肉を生理的な
はるが、妊娠という変化に、非
さは更なる女の肉を、荒々しく
情なせに、女のその変化に、非
はぎとて、女のその変化に、非

膨満妊婦乳房責め

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 一組 略号 八〇〇円
授乳の準備が、乳房を更なる
すかり膨大に、乳の周りを、
も締め上げ、乳の周りを、
はりきつて、乳の周りを、

妊婦全裸姿態の部

臨月腹全裸晒人形

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 一組 略号 八〇〇円
二十才の若さに溢れた女体が、
裸像を惜しげもなくカメラの前
に晒して見せる者の好奇心をそ
で選んで、この全裸姿態の中

躍動する妊婦裸像

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 一組 略号 八〇〇円
胎動する胎児を宿して、若々
たは、腹部をさらして、若々
と、指をさす、若々
の動きを追って、次々と躍動
婦の姿態を、次々と躍動した

妊娠という異常美

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 一組 略号 八〇〇円
女の冷たい事実は、この可憐な
に満ちた女体を、この可憐な
この出で、この可憐な
高に、この可憐な
来、この可憐な
異常美に、この可憐な

見てほしい臨月腹

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 一組 略号 八〇〇円
恥かしげに、とき、
に、女性だけに、とき、
に、女性だけに、とき、
に、女性だけに、とき、
に、女性だけに、とき、

妊婦全裸全身肢体

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 一組 略号 八〇〇円
妊婦のマニアの中には、
妊婦のマニアの中には、
妊婦のマニアの中には、
妊婦のマニアの中には、
妊婦のマニアの中には、

奇 譚 ク ラ ブ

昭和 44 年 9 月 号

(1969年・9月号<第23巻第10号・通刊第257号>)



本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
として編集しておりますが、青少年の保護
育成に関する条例には抵触しないよう、十
分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの
は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
載した文章は十二分に検討を加え、いやし
くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
めの努力はいたしません。

△団

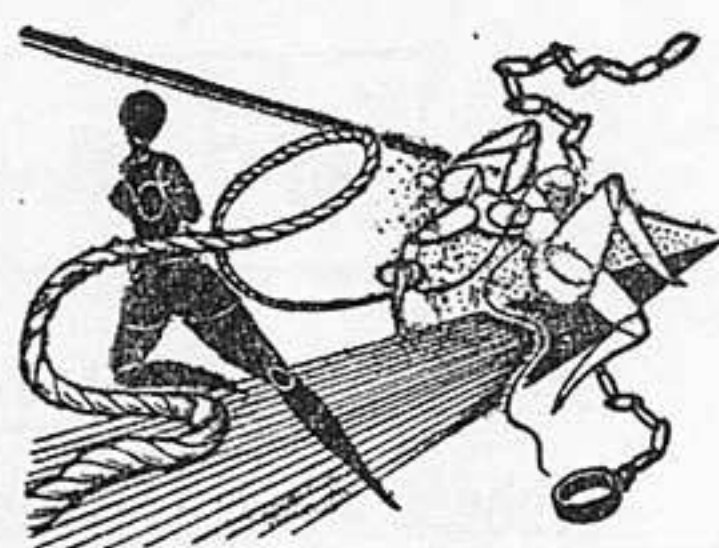
鬼六 || 辻村

隆 || 千草

忠夫 || 芳野

眉美 || 白鳥

大蔵▽



常連作家を批評する

山 本 八 郎

僕は奇譚クラブの古くからの読者であり、

松井籟子、岡田咲子、鬼山絢策、吾妻新、飛

田良二らが常連作家として活躍していた時代

からの愛読者であるから、僕も奇譚クラブと

共にかなり年をとり、もう五十才の声を聞く

ようになったので、この辺で奇譚クラブとの

縁を切ろうと思っていますのですが奇譚クラブ

の持つ麻薬のような魅力はなかなか思い切れ

発売日が楽しみにになり、自分でも苦笑してしまいう事があります。

そこで今日は何か自分も奇譚クラブに書いてみたいと云う思いにかられてペンを取り、それも常連作家を批評しようとしているのだから、何をか云わんやであります。

現在、奇譚クラブは何人かの常連作家に占められて来ていますが、その人達の中には僕の好きなものもあり嫌いなものもあり、全部を批評することは出来ませんが、短刀直入に、思ったこと感じたことを卒直に申し上げます。

作家の方々に對し、或は失礼なことをと、お叱りを受けるかも知れないし、又その半面

没になるのを覚悟で書く原稿ですから、平に御容赦下さい。

あれは、たしか……。

奇譚クラブの全盛時代は昭和二十六、七年だったでしょうが、前記の常連作家が一番活躍していた頃だったと思います。悪かったどん底は、古い読者なら御存知の白表紙時代！もう間もなくこの雑誌も廃刊か……と僕はそんな感じを抱いたのですが、それが今日、悪書追放等の運動で、大きく発行部数はのびなかったが、それでも現在の美しい装丁本を見るに至った見事なカムバック振りは、唯々箕田編集長の御努力！その御苦勞は並々なら

ぬものであったらうと想像出来ます。

しかし、編集長だけがいくらきんでも人氣作家が続々と登場して来ない限り、雑誌の発展は望めないし、まして、グラビヤ廃止と云うことになれば殊更でしょう。

団鬼六——この作家の登場は正に奇譚クラブにとっては旱天の慈雨と云った処で、救世主と云っても過言ではないでしょう。

「花と蛇」の第一回が登場した頃の雑誌の、何とうすっぺらで寒々しかった事か！ それが号を重ねるに至って雑誌は次第に重量感を増し、読む雑誌として読者を引きつけ、発展を遂げて来た感じがするのです。

「花と蛇」が続く限り奇譚クラブは安泰なりと感じるのは僕一人ではないと思います。

かつて、千草忠夫氏が、奇譚クラブ三百円のうち、二百九拾円は「花と蛇」のために払っている、と評論の中で書かれていたが、現在、雑誌は三百五拾円に値上りしたけれど、僕も三百五拾円のうち、三百円は「花と蛇」のために支払っていると思っています。

この小説が僕の魂をとらえてしまった理由は、此処で長々と多弁を弄するまでもなく、千草忠夫氏や九鬼二郎氏のような筆致のうまい人が上手に説明して居られるし、又読者通

信でも殆ど毎号「花と蛇」に対する賞讃の聲が出て居ます。奇譚クラブの歴史からみてもこれ程息の長い小説は初めてだろうし、又、これ程問題にされた小説も初めてのことでしょう。

足かけ八年の長きに亘って読者の人氣を、かくも持続していると云うのは他に、その例は無いよう思われます。

僕が感心させられるのは、サワリの場合に於ける団氏の描写力です。あの蛇のようにネバッコイ、ネチネチした細かい描写は、団氏独特のものなのでしょうが、クライマックスに於ける、あれだけの綿密な描き方は、著名な作家であっても、一寸、真似の出来ない妖しい芸風を感じさせます。

又、女の肉体を描かせて、あれだけ強烈にムンムンする官能描写が出来るのは、奇譚クラブ二十年を通読して来て団氏の右に出る作家はありません。

この小説が読物であるとか、雑文であるとか、そのムードの理解出来ない人達の攻撃を受けたことがあります。団氏自身が随筆の中で「花と蛇」は描写以外の何ものでもない、と、卒直に云って居られるし、こうした描き方をする事によってこの小説（団氏は自

分で珍小説と書いているが……）は、成功すると最初から計算を立てて居られるのです。千草忠夫氏の評論に、こんな事が書かれてありました（本誌二月号所載）「ボルノグラフィ（Vより）……」。

「花と蛇」の読者で、そのストーリーの展開だけを楽しんで読んでいる人が何人いるだろうか。みんな、そこに表現されていない意味あり気な伏字を読んでいるのではないかし、そうだとしたらその人達は「花と蛇」をボルノグラフィとして読んでいたのであるV

僕もこれに痛く同感する者ですが、此処で一つ見逃してならないものは、団氏が、「花と蛇」ではストーリーの展開を無視した手法をわざと使って、描写を売物にされて居るように見えますが、彼自身は大変なストーリーテラーと云うことです。毎回、いつも必ず登場するクライマックス。そして、次回はどうなるかと気を持たせる結び、これもストーリーテラーでなければ出来ない芸当でしょう。それでなければ五十回、六十回と続くものではないと思われれます。

「花と蛇」より少し話はそれますが、僕は団氏の脚本によるピンク映画を数本見たのです

が、団氏のピンク映画は他のピンク映画にくらべてストーリーがしっかりしております。その代り小説に見せるあのネチネチした描写と云うものを、映画の方では完全に無視しているのです。大体ピンク映画と云うものは、ストーリーより描写を重んじるようで、ストーリーのしっかりしているものは余り見当りませんが、団氏は必要以上にストーリーにこだわっているような処が見受けられます。ですから「花と蛇」のあのねばっこい描写に期待して団氏の映画をみると、期待外れと云うことになりますが、最後まで観客をあきさせない、面白いストーリーをもち込んでおられるのが何よりの特徴です。

従って、映画の描写に迫力が見られないといっても、それは監督さんの責任でしょう。団氏の最近、奇譚クラブに発表された「伊藤晴雨物語」は素晴らしい作品でした。たまにはこうした文芸作品を常連作家にも書いて貰いたいものです。

随筆の中で、団氏がこんなことをいっておられました。(三月号八皮むけばVより)
 “「花と蛇」が小説じゃないとか、読物だとか、雑文だとか、むきになって何かピント外れの事を叫んでいる人がおられるようだから

俺だって小説まがいなのは書けるんだぞ、と別に気負った訳ではないが、これは小説であるなどと、恨みでも返すつもりで最初に断った訳である……”

このユーモラスな筆致に、思わず苦笑を洩らしたのですが、「花と蛇」の作者が書いたものとは思われない、重量感と文芸性のある「伊藤晴雨物語」を読んで今更乍ら団鬼六と云うこの作家の実力に驚かされました。ストーリーテラーとしての団氏の面目が大いに発揮されているのではないのでしょうか……。

又僕は、団氏の鬼六談義の愛読者であり、団氏もこの随筆の中で「花と蛇」を書く時より、鬼六談義を書く時の方が筆はスラスラ運ぶようだと書かれてあったが、非常に気楽な気分での随筆を書かれているようです。この鬼六談義には不思議と妙に魅力を感じさせられるのですが、それは語り口のうまさでしょう。

団氏の人柄が髭髯としてくるような、実に軽快な語り口……。それでいて、何か人生を指摘している処があるのがこの随筆の魅力だと思えます。奇譚クラブ寄稿家の中でも、「花と蛇」に共感を持ち得ないが随筆には敬意を表すという人がかなり居られるようです

が、僕が初めて団氏の随筆を読んだのは、大分以前の作品ですが、「夜の寒鳥」でした。

相場で大失敗した私(団氏)が、暮れの大晦日に、あてもなく新宿の街を放浪し、場末の飲屋で知り合った二人のチンピラやくざについて行き、狭くて寒々とした、アパートの一室で実演ショーを見せられると云う話ですが、ユーモアとペーソスを盛り込んだその語り口のうまさには思わず引き込まれ、深い感銘をうけました。

火の気の全くない寒い部屋の裸電球の下で水漬をすすりつつ冷酒をのんで、やくざとその情婦との実演をみているうち除夜の鐘が鳴り出し、その鐘の音に合わせて、やくざが情婦を攻め立てると云うくだりは、おかしいような、鬼気が迫るような、不可思議な迫力が盛り上るのです。それが果たして実話なのかどうか知りませんが、こうした人生の断片をスケッチするのが実にうまいと思いました。

その他、何処へ行っても仕事のなくなった落目の監督が、ブルー映画に情熱を燃やしてこさえようと努力し始め、遂にそれにも失敗したと云う八瓢箪の話V!

サジストの元教師が、その教え子の女生徒が結婚すると云うので式場に駆けつけ、女生

徒の花婿は、サジストではないかと心配する
△化物の話▽……。

ピンク映画に初めて出演した十七才の少女が、アルバイトでロケーションに参加した学生に、こんな仕事をしていては駄目だと口説かれてピンク映画から足を洗い、緊縛モデルにしようとして意気込んでいた団氏の許から逃げ出すという△カメラ嫌い▽……。

大会社の重役であり乍らドサ廻り劇団の後を追いつ返し、チンドン屋までやってのけると云うような奇妙な性癖のある人々△ドサ廻りの話▽……。

こうした人生の断面と哀感を、団氏は軽妙な文体で語り、読者の胸に何かしらの感銘を与えるのです。

奇譚クラブに於ける団鬼六氏の仕事は「花と蛇」よりも「鬼六談義」にある、と、かつて常連の寄稿者が述べて居りましたが、さもありなんでしょう。僕にとっては「鬼六談義」と「花と蛇」が一緒に掲載された時の奇譚クラブが一番楽しい気分になります。

何と云っても団鬼六氏は現在、奇譚クラブの大黒柱であることには違いありません。団氏の御健筆を心から祈るものであります。

辻村 隆——。この作家も奇譚クラブにと

って欠くことの出来ない常連作家の一人と云えるでしょう。

現在の奇譚クラブをたとえば、新国劇になぞらえて考えれば、団氏と辻村氏の存在は、島田と辰巳の両巨頭に等しいと思われます。

SMカメラハントは企画として大成功した感があります。グラビヤが徹廃された今の奇譚クラブにあっては、このカメラハントがグラビヤの役目を果たしているように受け取れます。

何といってもカメラハントの魅力は、辻村氏が実際に足を使い、苦勞して女性を口説き落として、緊縛写真を撮るというノンフィクションにあります。

それに、その場のスケッチも適確で文章もしっかりしています。読むうちに僕自身が辻村氏のカメラハントの手伝いをしているような錯覚に陥るほど、釣り込まれてしまうことがあります。欠点を云えば、何時何処でどのような女をどんな風にして料理した……と云うことを、辻村氏独特の文章で描写されていると云うだけに過ぎず、「鬼六談義」のように人生の断面にメスを入れると云う文学性が全くないと云える所でしょう。

この作者にとって、それは必要でないこと

かも知れないが、もし辻村氏がもう少しモデルの女に対して鋭い目を向けて、作家としての視野を充分に発揮し、これをとらえたならば一層に活を入れたものになるのではないのでしょうか……。あれだけの文章を書く力があるのですから、単なるスケッチに止まらず、何かピカッと光るものが欲しいと思います。

ハントした一人の女性を料理する過程を描くだけでは、自然と文章も水増ししていかねばならなくなり、そう云う欠点が作者とモデル嬢との長たらしい会話の中に出ています。書かなくてもいい事を長く書かれている処があり、もう少し辻村氏の作家的主観が欲しいと思います。

辻村氏の動作を描写される筆は非常に冴えをみせていますが、人物描写は余り上手ではないようです。カメラハントに登場してくる人物がすべて同じように見え、同じようなことばかりしゃべっているのが、いささか気になります。その殆どが関西でハントされているのに、女性がみんな齒切れのいい東京弁を使っているのが、何か空々しく作りごとらしく感じられるし、出てくる女性の一人一人に言葉使いや感覚的な相違を見つけるべきだと思います。

いささか失礼な批評を申し上げましたが、自分の肉体をフルに使い、体当りでカメラハントに取り組みれている処が他の作家と違ってそれが何よりの辻村氏の特徴であり、又、うらやましい処です。お世辞ではなく、正に現在の伊藤晴雨ではないでしょうか……。

団氏と仲もよいようで、去年は団氏の紹介で東映に、緊縛指導の形でスタッフとして協力されたそうですが、ますます伊藤晴雨の域に近づかれたようです。文章をこなすと云うことだけではなく、緊縛指導者として映画や舞台で活躍される処が、辻村氏の辻村氏らしい処だと思います。

長い奇譚クラブの歴史からみて、このような珍事ははじめてで、時代も変わったものだと思います。今年もどうか、御活躍と辻村氏の御健康を切にお祈りいたします。

千草忠夫——。この作家は、最近毎月きまって書かないようですが、僕の注目している作家の一人です。この人の書いた「縄のある蜜月」は仲々捨て難い味わいがありました。

千草氏が最初「のおと・あと・らんだむ」と云う評論をひっさげて奇譚クラブに登場して来た時は、これは大変な作家が現われたものだと思ったのです。才気が溢れて、低迷を

続けていた奇譚クラブに一発活を入れるために乗り込んで来たと言ふような気迫が、文章にみなぎっておりました。

「のおと・あと・らんだむ」の、その若さとパンチのきいた文章を読んだ時、僕は、石原慎太郎のような若い新人が、いよいよ奇譚クラブにも乗り込んで来たのか、と云う楽しい気分になりました。

これだけ重厚で、明朗な論理が奇譚クラブに登場したのは久方振りだと思います。欠点と云えば、この作家は三島由起夫のように頭が切れ過ぎるのではないかと云うことで、いささか、僕なんかにとっては難解な文章があったと云えるでしょう。『俺の理念にケチをつけた奴は来い！ 相手になるぞ』……と云うような意気込みがありました。この作家と論争して勝つ自信のある人はいないでしょう。

大分、以前の事になりますが、西条操氏が「思う事」と云う一文を発表し、それに対して千草氏が、「のおと・あと・らんだむ」その第四回目ですそれに反撥を加えましたが、相手の論法を一刀両断に叩き斬り、眼にもとまらぬ早業で刀を鞘におさめ、血を拭いた紙をパツと宙に投げ捨てたような、実にあざやか

な反論で、胸のすく思いをさせられました。これじゃ相手はグーの音も出ないでしょう。

千草氏の論法は、唯ありきたりの事をもっともらしく語ると云うのではなく、何か新味と云うものがあります。いささか型破りの説がとび出す処も、この人ならではの感じがし、それが又、読んでいて一層楽しくなります。

たとえばいうなら「花と蛇」をユートピア小説と論じ、また最近ではポルノグラフィと決めつけるあたりに、この作家の並々ならぬ才能が伺えるのですが……。博学多才と云う点では確かに千草氏は群を抜いているようです。

このような論文をものにする人は普通、理論だけにこだわって、自分では小説を書かないものですが、いや、書こうとしても書けないのでしようが、千草氏は小説の分野でも、その腕の冴えを見せました。「縄のある蜜月」又最近では「愛妻記」ですが、理路整然たる論文とは逆に、诗情溢れる好篇でした。

文章も実にうまい。夫妻関係と云うものは考えようによればSM関係みたいなものですが、それを千草氏は流麗な文章で、小説化しているのです。小説になりにくい題材と取組むと云うことはマイナスの様でも、こういう

一組の男女間のさり気ないSM行為を描くのが千草氏の好みでありましょう。

唯、現在の奇譚クラブにあっては、汚辱と羞恥責めの如何なる小説が登場しても「花と蛇」の人気を凌駕することは、まず不可能であらうと思われまゝ。千草氏のように才気のある作家は、S小説と云うものを、文芸的な高度のものにすすめた作品に今後大いに取り組んでいただきたいものです。そういう可能性を千草氏の小説からは充分感じとれるのです。

団氏は何時か随筆の中で、「花と蛇」は独身者のオナーニの素材になるだけでも満足だと云うようなことをいわれていたように思いますが、お恥かしい次第ながら、僕もいい年をして「花と蛇」を読み、うずきを覚えてしまふ次第です。併し、このうずきを他の作者の作品に期待しようとは思いません。

敢えてそれを云うのも、読者の願望を的確につかんで、さわりの場面に全力投球しているのが「花と蛇」なのですから、描写力に於いて、サワリの場面で「花と蛇」と太刀打ち出来る作品の出現は、到底望めないのではないのでしょうか……。

千草氏は、このさわりを何か別の角度から

小説の上に表現しようとしていているようですが、愛妻記にしても、最初から実に緻密な計算のゆき届いた書出しになっていました。云いたいことを云おうとする真面目な態度に好感が持てました。僕は千草氏の作品から、SMの本質とは何か、と云うような文学性をうずきより以上に発見したく思うのです。

“ムードは客観的に其処に縛られた女がいると云うだけでは醸成されるものではなく、主観がそれに没入することが絶対条件として必要なのだ。お前が白い素肌のすみずみから立ちのぼらせる羞恥の霧で私の目を曇らせることが、逆に私がその霧をよしとして進んで曇らされようとする態度が絶対に必要なのだ”

……（愛妻記より）

こうした若々しい表現が千草氏の魅力でしょう。読者の嗜好がこのようなおとなしい作品に集まるかどうかはさて置き、千草氏には「愛妻記」や「縄のある蜜月」のような美的な短篇S小説の仕事が続けていただきたいものだと思っております。

千草氏のスタイルからみて、長いものより短篇の方が力量を発揮しやすいのではないかと思います。御健筆を祈ります。

芳野眉美——。この作家も奇譚クラブの中

では才能派の一人ではないでしょうか……。大変古くからの寄稿者で、松井籟子などが活躍していた頃から作品を発表して居られましたから、相当な年令に達していると思われるのに、その作風は何時も若々しく新鮮です。

僕は芳野氏の「早熟なる少年の幻想」というのを覚えて居りますが、昭和二十七、八年頃だったでしょうか、その当時の水々しいファンタジックな筆致が現在も持続されているようです。この作家は詩人のように精神に年令を感じないのでしょう。常に新鮮であり、現代的な感覚の持主で、詩人の描いたように鋭い処があります。

僕は前記の千草氏と芳野氏に何か共通点があるように思われるのです。それは二人共、若々しい才気があり、ロマンチックなムードを生かした小説を書くという処と共に、玄人っぽい処があるということです。

二人の差と云えば、千草氏がS、芳野氏がMと云うことになるんでしょうが、千草氏は同じロマンチストでも男性的、芳野氏は女性的な論稿にて、一つの問題を取り上げる場合でも、千草氏の真っ向上段から振り下ろすような、自信あり気な文章と違い、芳野氏には一種の、はにかみがあります。

濡れにぞ濡れし……で、芳野氏は独特なスタイルを発見し、軽妙洒脱な筆を走らせることになりましたが、これも絶えず新しいものを発掘しようとする芳野氏の態度が伺えて面白い。コントでもなく随筆でもなく評論でもなく、何かガラクタ市場みたいな濡れにぞ濡れしですが……、これは、奇譚クラブの中にあって一種のいいこの場になっていて捨て難い味があるでしょう。特に、会話の羅列が軽妙なムードをかもし、芳野氏のお家芸と云った感じがします。

芳野氏の、随筆の中だったと思いますが、「鬼六談義」は面白いが「花と蛇」は小説でなく読物だからつまらない……と云ったとか何とかで、彼は一時「花と蛇」のファンから攻撃されたことがあったようですが、本人は何も悪気で云ったのではないのに、奇譚クラブの論壇が、「花と蛇」問題で一時、大変に賑いました。

日頃、小説を発表されている諸先生方までが、誌上で色々、意見を發表されましたし、一体、誰がこの論戦の口火をきったのかと調べてみると、意外や芳野氏だったのですが、面喰らったのは芳野氏と鬼六先生でしょう。最後には鬼六先生まで、この問題を取りあ

げ、そんなものどっちでもいいじゃないか、俺はY本のつもりで書いてるかも知れない……と云う風に書かれたので、この騒ぎも一応静まりましたが、全く面白い時期でした。それだけ、芳野氏の文章も読者に読まれていると云うことですが、みんながそうして騒ぎ立てた時、口火を切った芳野氏は、その事に関して沈黙を守っていたと云うことは、やはりはにかみ故でありましょう。

無駄な人間達には口を利かない、俺は自分の云いたいことだけ書くのだと云う、我れ関せずとした処が芳野氏にはあるようです。

真っ向から、論戦を受けて立つというのはMである芳野氏は性格的に嫌いでしょう。いざ、ござんなれ！と論戦を受けて立つのがSの千草氏のように思われます。僕はネクタール趣味と云うのがよく判らないので、芳野氏の小説の理解者ではありませんが、その真面目な筆致と、軽妙な話術には感心するので、八濡れにぞ濡れしVと云う題名なんかも如何にも芳野氏らしく味わいがあるではありませんか。芳野氏は、千草氏と共に知性派の一方の旗頭でありますから、今後ともその才能を大いに生かした作品を發表して頂きたいと思ひます。御健筆を祈ります。

白鳥大蔵——。この作者は編集後記に、かつて奇譚クラブで活躍した人と書かれていますから、相当な年配の方だと思いますが、僕の記憶にはありません。

「緋縮緬地獄」の連載は、時代ものが少なくなつて来た今日、企画としては面白く思いますが、この小説の中に、お静やお京という女が登場する処からみても、作者はかなり「花と蛇」を意識して書いておられるように感じられます。

しかし、「緋縮緬地獄」にいささか物足りなさを感じるのは、どうしようもないスタイルの古さと描写力の不足です。僕は時代ものは好きなのですが、この小説を読んで失望したのは、時代劇特有のムンムンとする色気が感じられないからで、どう云う訳かと考えてみますと、白鳥氏は動きの描写とテンポに重点を置き、官能描写をまるで無視して、その上、登場人物の容貌や、着ている着物の描写もさりと流して、直線的に責めに入っているのです。

ああした、こうしたと云うだけでは、どうも作者だけが判っているようで読む方は全くつまらない。やはりS小説を手がける人は官能描写に、ある程度意を用いてもらいたいです。

のです。特に時代劇は、女の着物、髪の毛などから色っぽい描写を引き出すことは出来るものです。

今、此処に「緋縮緬地獄」の第一回が掲載された昭和四十三年五月号がありますので、それからお京が悪者に着物をはぎ取られるくだりを抜粋して見ましょう。――

“……お京は前かがみになって抵抗した……その弱腰を、うしろから源次がしたたかに蹴りつけた。お京は前のめりになって頭からめった。ずると帯が解け、それから後の作業を源次はらくらくとすすめた。お京の身体から着ているものがはがれる度に、いい臭いの風がおきて金網行燈の灯がゆらりと揺れた。風がやんだ時、緋縮緬の腰のもの一枚だけがお京の肌に残されていた……”

時代劇で、女が着ているものをはがれる時はクライマックスですが、白鳥氏はそれを勿体ない位にさらりと書き流しているのです。

お京が黄八丈を着ていたのか、緋縮緬を着ていたのか、そんな事は白鳥氏の場合どうでもいいんでしょうが、私達、時代劇ファンにとっては、腰紐一本に至るまで、こまかく描写されれば喜ぶもので、そこをまるでシナリオみたいに簡単にすまされてしまうと、全くつ

まらない。

時代物のS小説の色気は何と云っても女の着物や下着類、そういうものが並べられるだけでも効果があるもので、自然にはがれて抵抗する女性にも色気がにじみ出てくるものです。時代劇作者は、武家娘、町家娘、鉄火姐御などのスタイルに鋭い眼を向けて欲しいものです。

千草氏も云われましたように、奇譚クラブの読者はストーリーの進展を喜ぶ者は居ないので、クライマックスに重点を注ぎ、濃厚な描写をして頂きたいと思うのです。それは、マニアであると同時に文章をうまくこなせる人でなければなりません。白鳥氏はその文章はうまいが、マニアではないのじゃないかと云った感じがします。

少々、失礼な批評を申し上げたかも知れませんが、僕は時代劇のファンなので、ファンの希望として聞いて頂きたいのです。「緋縮緬地獄」の第一回目が掲載された、昭和四十三年五月号に「花と蛇」の着物略奪シーンがありますので、対比的に此処へ紹介してみましよう。

“……悦子のする事に呼応したように、マリと義子が狂乱して身をゆする静子夫人にまと

いつき、帯じめを解き、キューキューと音をさせて幾本もの腰紐を抜きとり、渋い茶がかった佐賀錦の帯を、くるくる廻し乍ら解き始めると、夫人は戦慄して絹を裂くような悲鳴をあげた。

素ッ裸にするには一度、縄を解いた方がやりいいわよと、朱実が楽しそうに笑っている。着物の支えを失った、静子夫人の縄を一旦、ズベ公達は解いたが、やっと両手の自由を得た、その時の夫人の抵抗がまた凄じかった。

柱の根につまずいて、土間に両手をついてしまった静子夫人にズベ公達はおどろかかき支えのなくなった着物を、よってたかつてスッポリと引きはがしてしまったが、目もさめるような緋の長襦袢姿にされた静子夫人は、ズベ公達の手の中をかくぐるようにして逃れ、百姓家のはげ落ちた土壁を背にして迫ってくるズベ公達の手をさけ、目に沁み入るような白い足袋で土間を蹴り、右へ走ったり、左へ走ったり、その度に燃えるような緋の長襦袢の裾前が乱れて、その中より覗いた、うすら縮緬の湯文字が、動きにつれて風を呼びまるで歌舞伎にでも出てくるような、美しい一幅の絵であった……”

鬼六先生の文章を此処で参考に出したのは衣類強奪シーンが、時代劇のクライマックスという僕の持論ですから御容赦下さい。

随分と長いようですが、以上の文章には無駄が一つもなく、この一節には時代劇の迫力があります、しかも、静子夫人は長繻絆姿になっただけで、これが湯文字一つにされるまで、団氏は相当な枚数をかけておられます。

マニアでなければ書けない文章ですが、こういう色っぽいシーンがあつて、サワリの場面に近づいていく……。此処が読む者をうづかせる「コツ」とでもいうものではないでしょうか。「緋縮緬地獄」が力作の割に話題に

ならないのは、以上、申上げたような描写のネバリ不足で、その点、留意して頂ければと思います。

官能描写のうまい人は、それがS小説であつてもマゾの味も判る人でなければなりません。団氏や千草氏の小説を読むと、男っぽさと女っぽさがうまく表現されて、女の作家が書いたのではないかと思われるような緻密な描写があります。責められる女の心理描写もあつて、それよりほのかなお色気が立ちこめてくるのです。

白鳥氏の場合は、女っぽさはなく、男っぽさだけでぐいぐい畳み込んでいくので、完全

なS小説でしょうけれど、妖艶なムードが感じられないのです。もう少し、前戯というものにも留意して欲しいと思います。しかしながら、これは作家のもつ芸域なのですから、それぞれの好みも、行き方もあり、仕方がないことでしょう。

……以上、ほめたり、けなしたり、常連作家五人を俎の上に乗せましたが、自分の好みから批評したことです。諸先生方、何卒お気を悪くならないで下さい。

以上の五人の作家が奇譚クラブの重要ポストを占める実力派であろうと僕が注目している故、感想をのべさせて頂いた訳です。

白

な 愉 し み

賀 透

女子高校に勤務している友人に用件があつて訪れた時のこと、用談半ばで友人は授業に行かねばならなくなった、ヒトミシリをする私は職員室で待つのが厭で応接室に居たかったのだが、応接室も他の来客があつて出なくてはならなくなり、困っていると、友人が隣の室から出て来た女の先生と何やら話していたが、私に、保健室が空いているから良ければそこで待つて居るようと言う。その女の先生は養護教諭とかで、授業があり、無人の保健室でのんびりと待つことにした。

南向きの明るい保健室で、薄いクリーム色のカーテンがかかっていてやわらかい雰囲気をかもし出している。衝立で区切られた向こう側には四台のベッドがあり、ベッドとベッドの間はカーテンで仕切られてある。私は養護教諭用の机に向かって坐り、ふと机上に目をやると、「保健日誌」と記された一冊の帳簿が置いてある。開いてみると、保健室を利用した生徒名から病名、処置が記載されている。

学校のこととて一番多いのは軽い外傷で、

告

ひそか

伊里



処置も外用薬の塗布としか記入していないが、次いで多いのが頭痛と腹痛。生理痛というのモかなり多い。頭痛や腹痛の中にも生理によるものが四割位あって、カッコ内に生理によると書かれてあり、グレランとかサリドン等の鎮痛薬の服用が処置欄に記入されている。二千人の生徒数なのだから、生理期間五日としても、最低二割の生徒は生理に当たっている訳で、セーラー服のスカートの下に、生理

帯を着けているであろう女子高校生を想うと生徒というより女性を感じてしまう。

腹痛の原因として生理による以外のものは？と見ていくと、あったのだ、便秘というのが。処置欄に目が行く。私の予感は的中した。浣腸という文字が目にとびこんでくる。

谷村玲子三年五組、便秘による腹痛、グリセリン浣腸100cc施術、多量の排便有り、腹痛なおる。

大崎啓子一年八組、生理と便秘による腹痛、グレラン三錠、グリセリン浣腸60cc施術後、腹痛軽くなる。

川崎栄子、便秘による腹痛、石けん浣腸400cc、浣腸中に苦痛を訴えるので、150ccで一旦中止し、少量の排便の後、250cc注入。

以上は、四月十日から私の訪れた五月七日までの日誌に記載されていたものであるから年間を通じたら、この女子高校で生徒が処置として受ける浣腸例は、かなりの数になるだろう。

私はこの簡潔な日誌の記事を読みながら、浣腸される時の女生徒の羞恥の表情や、姿態をあれやこれや想像し、甘美な世界をしばし漂っていた。

400ccの石けん浣腸とあるが、イルリガート

ルを使用したのだろうか、私はあたりを見廻してみたが、イルリガートルは見当らなかつた。薬品や器具を入れて置く戸棚の前に行つてガラス越しに中をのぞいてみる。ガーゼを敷いたトレイの中には、各種の注射器が入っているが浣腸器はない。

戸棚の下ひき出しを開けてみた。トレイが入っている。音のしないように静かにふたを開けてみる。あった、20ccと30ccの浣腸器が。30ccの浣腸器を手にしてみる。柔らかな曲線を持った嘴管、その中に薬液が少し残っている。或いは浣腸器を洗った時の水の残りがかも知れないが、ごく最近使用されたことは確かだ。

もう一つのひき出しを開けてみる。ゴムのエネマシリンジが入っていた。多量の石けん浣腸はエネマシリンジを使用したのだ。何故川崎という生徒だけは、石けん浣腸をされたのだろうか。便秘がひどかったのだろうか。それともグリセリンを切らしてしまったからだろうか。薬品棚をもう一度見てみる。グリセリンの大瓶には半分程のグリセリンが残っている。すると、養護教諭の判断で石けん浣腸にしたのに違いない。石けん液はおそらく洗面器に作ったのだろうか。

横臥しスカートをまくられ、エネマシリンジの硬質の嘴管に恥ずかしさで消え入りそうな女生徒。その横でゴム球を握り、石けん液を注入している養護教諭。途中で苦痛を訴え中止しているところから考えると、おそらくその女生徒にとって浣腸は初めての経験なのではなからうか。

少量の排便ありと記されているところからみると、浣腸を中止して便器を当てたのだろう。初めての経験で我慢することが出来ず、注入された浣腸液のほとんどと少量の便を排泄し、それでは効果がないので、残り250ccを注入されたのに違いない。

私の推測はあとからあとから湧いてくる。浣腸器を手に行っているところを誰かに見られるとまずいので、トレイにもどし、ひき出しをしめた。この時私は、女子高校生の浣腸に使用したその浣腸器を、私のコレクションの一つにしたい、という強い誘惑にかられたことを白状しよう。

グリセリン浣腸100ccをされた生徒は、20ccの浣腸器で五回注入されたのだろうか。30ccの浣腸器を使用したとすると、四回目は10ccになる。それとも二本の浣腸器を交互に使用したのだろうか。四回ないし五回注腸された

とすると、時間もかかり、羞恥の時間も長びく訳だ。浣腸中に他の生徒が入って来なかっただろうか。……などと、私の空想は果てしなく続く。

「谷村さん、貴女の腹痛は便秘によるものですかから浣腸しましょうね」

「先生、我慢しますから、それはしなくて結構です」

「いけません、浣腸しなければ痛みは直りませんよ。浣腸なんて、少しも痛くないのですから。それに、休み時間になると他の生徒も入って来ますよ。いいんですか、浣腸されているところを見られても。四日間もお通じがないのに、よく我慢しましたね。すぐ浣腸が済むようにグリセリン浣腸にしてあげましょう。本当は、貴女の場合、石けん浣腸と言って、石けん液を400cc位注腸しないと効果が薄いのですが、グリセリン100ccを浣腸しますから、ベッドに横になりなさい。さあ」

耳まで真っ赤になりながら谷村は、先生に強制され、仕方なくベッドに横たわる。

「パンティを膝の下まで下げなさい。横向きになって。こちらの膝をおなかに着くように曲げるのです。そうそう、そういうふうにして体を固くしては駄目よ、楽な気持ちで、口を開

けて大きく呼吸しなさい。そうです、じゃ浣腸しますからね。その份、動かないで」

先生は30ccの浣腸器で浣腸する。

「なんでもないでしょう。続けてしますからその份動かないでね」

「先生、もう厭です。やめて下さい」

「何言うんですか。この浣腸器では一度に30ccしかお薬を入れられないのですよ、100cc入れないと効果がないと言ったでしょう。これです、60ccなんです」

「いやーん。アッ、アッ、厭、厭、やめて先生、お腹が変な気持ち、アッ！」

谷村、涙を流して、手で浣腸を拒否しようとする。

「いけません！ 動いては。ほら、浣腸液がこぼれてしまうではありませんか。なんです三年生にもなって。ききわけをしなさい。あと、二回で終わるのですから。あばれることも浣腸の回数をふやしますよ」

100ccの浣腸終る。先生はこんどは優しく、「よく我慢しましたね。まあ、涙なんかこぼして、先生が拭いてあげますわ」

「先生、オトイレに……」

「今終わったばかりでしょう。直ぐオトイレに行くと、お薬ばかり出てしまつて、もう一度

浣腸しなければならなくなるの。先生が脱脂綿で押えていますから、もう少し我慢しなさい。それに、便器を当てておきますから」

「駄目よ、駄目よ。先生、もう……。厭、厭先生の意地悪。アッ、アッ、嫌い、先生なんか嫌い。アッ、アア、知らない、知らない、もう駄目……」

こんなことを空想しているときりがない。

浣腸器にばかり心をとられて気がつかなくなったが、戸棚の横に「エリゼナプキン」と記されたボール箱が置いてあって、「必要の生徒は十円入れて下さい」と書かれた小箱が、その箱の横に置いてある。学校で不意に生理になった生徒のためのものだ。十円硬貨が沢山入っているところからみると、不意に生理になる生徒の、かなり多いことがわかる。

事務機のひき出しを開けてみる。各クラスの生徒名一欄表があって、名前のわきに、No. 3とかNo. 5とか書いてある。よく見ると生理帯の注文表ではないか。一人で四個も注文している生徒もある。

現物は無いかと二番目のひき出しを開けてみる。色刷りの生理帯カタログと各種の生理帯が入っていた。そのカタログが実に素晴らしく楽しい。生理帯の大字しと生理帯を着けて

いるモデルさんの写真が出ているのだ。市価六百円の生理帯が、学校一括販売価格四百円とある。これが一番値段が高く、二百円前後のものがほとんどで、こんなにも生理帯って安く買えるものかと驚く。

色も、黒は一種類だけで、白、ピンク、ブルー、花模様、網目、替えゴム付、ゴム無しと多種多様で、はじめじめした血の臭いの感じられる生理帯の意識は、ふっとんでしまう程の華やかさだ。それぞれ、ビニールのこれまた美しいケースに入っていて、折りたたまれた大きさはポケットに入る位。一つ一つケースから取り出して広げてみたい誘惑にかられたが――。

三番目のひき出しには、「安全アンダーパット」という簡易生理帯（普通のパンティに取りつけて使用するもの）が三十個位入っている。ナプキンと同じく、学校で急に生理になり生理帯を用意してない生徒のためのものだろうが、現在の女子高校というのは、細かい所にまで気を配っているものだと感心させられる。

机上の本立てに「薬品購入簿」というのがあったので開いてみると、「イチジク浣腸」30g用三十個とあり、備考に修学旅行と書いてある。

である。

一週間近い修学旅行では、便秘の生徒も必ず出てくるだろう。そのために、軽便浣腸薬を購入したものと思う。保健室の一隅に携帯用の薬品バッグがあるので開けて中を見た。イチジク浣腸が五箱残っている。ということでは修学旅行で二十五箱使用したことになる。一箱二個入りだから、五十個は使用しているのだ。一回の浣腸に二個ないし三個使用した生徒もあるかも知れないが、少なくとも三十人以上の生徒はイチジク浣腸をされたことになる。五百人の修学旅行生徒数から考えるとその位はあっても不思議ではないだろう。

ところで、どのようにイチジク浣腸は使用されたのだろうか。便秘の生徒、或いは浣腸を必要とした生徒に与え、各自がトイレで使ったのか。養護教諭が教師の室で、他の女の教師のいる前でしたのか。友達の居る生徒の室ではおそろしくなかっただろうが。これまた空想は、あとから浮かんでくる。

あれこれ空想の世界を楽しんでいるうち、ベルが鳴り、友人は授業を終え、私のところにもどって来た。保健室を出る時、養護教諭がもどって来て顔を合わせたのが、若い美人なので、ますます楽しくなってしまった。

帰 国

どんなに巧妙なメイキャップを施したところで、イーラの美しい顔を、女子山岳隊員の一人に変装させるのは不可能だった。そこで苦肉の策として皮膚病に仕立てることになった。山地を歩いているうち、悪性のカブレに罹ったという設定である。適当にホータイを巻いて色眼鏡をかけると、勿論、誰が誰だか判らなくなった。一人ならば怪しむ風態であっても、六人のグループでは、それ程の問題にはなるまい。念のため、もう一兩名にも、

顔に膏藥を貼りつけたり、軟膏を塗ったりさせた。

こういうときには、こうしろ。ああでもない、こうでもない、と厳しく命令を受ける度に必ず強迫があるので、五人は生きた気もしない。人質にされた友人を助けるためには、是が非でも替え玉になったイーラを守って、無事に東京へ届けなければならぬのだ。体内に保管させられた宝石包み、鍵のかかった金属性の輝。これらが齎す気の狂いそうな悪感が、絶えず五人の女に、そのことを思い出させずには、いられないのである。

あらゆる危険を想定した特訓を受けたのち



第十二回

前号まで「单身ミサイルを駆って南支那海に飛んだエミー司令こと星恵美子は香港の秘密結社「青帮」の頭目蔡樹理に救出され、彼女等のマスター有明との再会を知らされる。ジャンクは途中、中共側武装船に襲われ皆殺しに会った僚船を発見する。只一人若い周月鏡だけが水にかくれて助かった。一方、イーラはデリーの市内にある麻薬シンジゲートの秘密の家に案内され、そこで因われの女子京大生六人に会う。イーラはその一人にスリ替えられて東京へ帰ることになる。五人の女性達は宝石を体内に保管させられ貞操帯で封印された。

漸く五人は縛めを解かれ、夫々の衣服を着けることを許された。イーラは人質が着ていたものを下着からソックリ着た。登山服だから實用一点ばりだったが、イーラには、それがお姫様の衣裳のようにも思われた。彼女が裸にされていた二日間に受けたショックは、まるで一年間もそんな目にあっていたような苦痛だったからである。

残酷なことに、六人は人質にされた女子大生が閉じ込められている地下牢に案内されて一時の別れを告げることが命じられた。そこは鉄格子のはまった四畳半程の石室だった。両手は自由にされていたものの、依然として丸裸のままの姿で、その娘は大声で哭き、子供が駄々をコネるような仕ぐさで地団駄をふんで自分の不運を呪った。イーラをのぞいた五人も、格子にとりすがって涙にむせび、交々、必ず助け出すから安心して待っていてほしいと慰めるのだった。この悲痛な別離は、男達が降りてきて、無理矢理に一人ずつ格子から引き離すまで続いた。

再び、もとの部屋に連れ戻された五人は、五つの小皿に五つずつ、直径十ミリ程の真珠のような錠剤がテーブルに置かれてあるのを見た。ボーイが水を入れた五つのコップを運

んできた。

覆面をつけた十五号が待っていたように言った。

「あんた方、これもついでに運んで貰うことになったわ。これはね。特殊なプラスチックでくるんだダイヤモンドなの。カラットはご想像にまかせるけど、相当に高価なものよ。羽田に着いたら、わたし達の仲間がちゃんとお出迎えして、準備した場所に案内するわ。全部出し終わるまでカンヅメになって貰うけれど、レポート整理とか何とか、口実はいくらでも作れるでしょう。さー、一人五個ずつ全部で二十五個。一個なくなっても人質は帰さないからね。サア、お呑み」

五人は蒼白になった。中にはヘタヘタ坐り込んでしまうものもあった。あれほどの屈辱分だけではまだ足りないで、消化器にも運ばせようというのである。

ゲシユタボの例でもわかる通り、極端な恐怖は人をかえって従順にするものだという。五人は、むしろ争うように真珠色の錠剤を呑み込むのであった。

両眼を丁度、鼠を押えつけた猫のように、サジスチックに輝かしながら十五号がいう。「よろしい。呑んだものが排泄されるまでに

はタップリ十五時間以上かかるでしょう。今すぐ空港へ行けば午後一時五十分の東京行きオランダ航空機に乗れる。そっちの方はチャンと渡りがつけてあるから問題ないよ。東京まで大体十二時間半かかるから、つまり、飛行機の中では何度便所へ行ってもいい。けど羽田へ着いてからあとは、組織の許しなしに絶対大きい方の用をしてはいけないよ。いいかい、人質が心配だったら、必ず云う通りにするんだよ」

全く偶然の一致だったが、新津謙介もこの六人と同じKLM—DC8に乗り合わせるこ

とになった。

女を追ってパリまで行った彼の旅行は、帰路になって、女による様々の事件に巻き込まれてきた。星恵美子を追跡した近東での事件も、何か遠い過去に飛び去ってしまったような気がする。それ程、イーラにあった印象が強力だったともいえるであろう。絶望に打ちひしがれたイーラの顔は、新津には愛し子の死を見守るピエタのように思われた。その瞬間から、彼は警察官としてではなくて一個の男としてイーラを愛し始めていたのだろう。忘れようとしても、忘れようとしても、イー

ラの大きな眼が脳裏に灼き付いて離れない。それは人の世の苦しみを余すところなく表現しているかのようにだった。

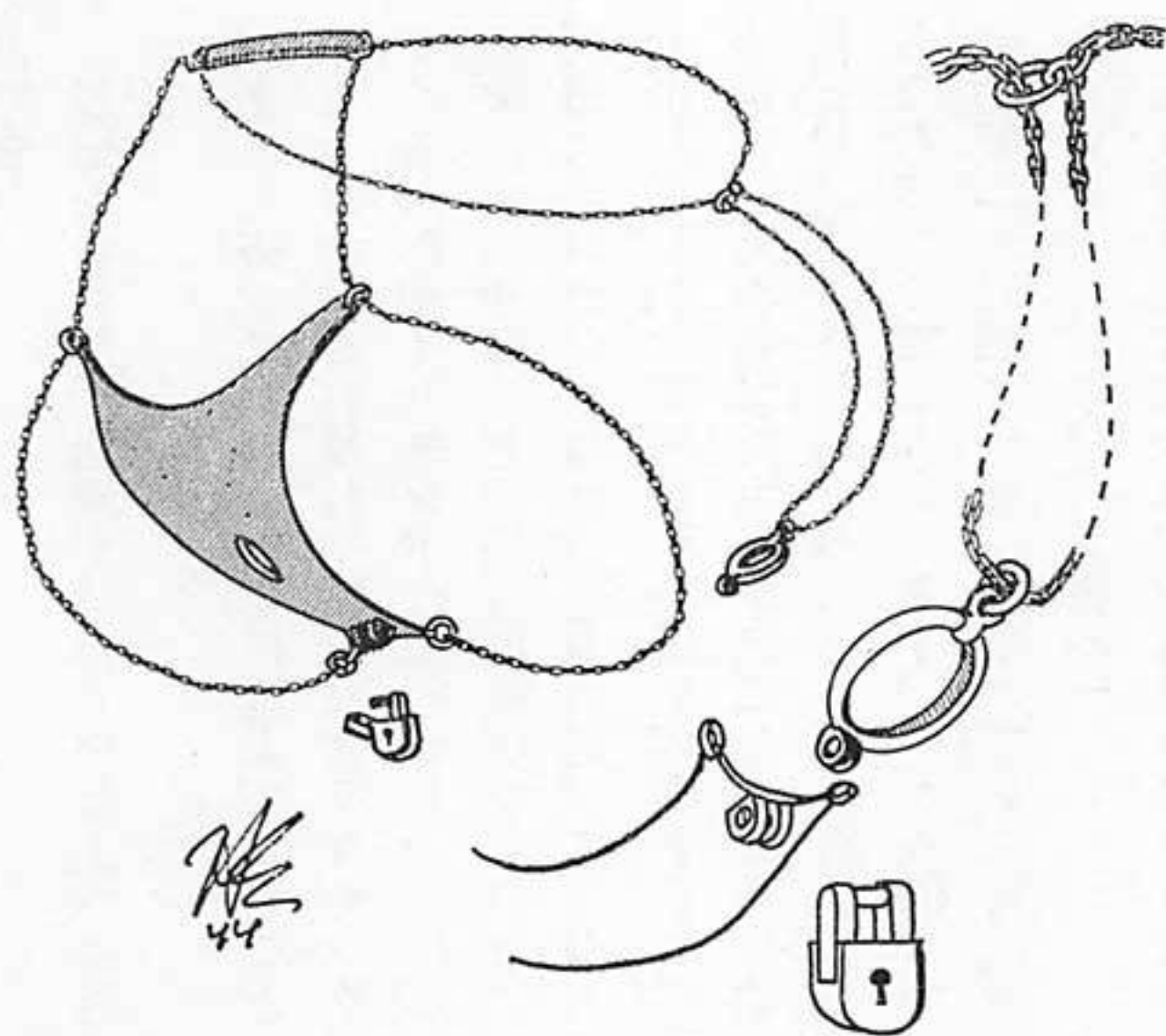
当節のことだから、日本人の団体客が声高に話し合っている光景は、国際線では珍しくないことだった。それにもかかわらず、片側三人ずつのシートを二組、占領している六人の娘たちは、むしろ正反対だった。若いことから、普通ならば真っ先に騒ぎ立ててもおかしくないのに。その上、懐しい故国への帰り道だというのに一様にムツツリとおし黙ったまま、時としては涙さえ浮かべているではないか。まるで通夜の客のようにさえ見えた。

新津ばかりでなく、この奇妙な六人連れの一行を不審に思った者も少なくなかったのも道理である。

当の六人は、いや実際はイーラを除いた五人なのだが、下腹部を締めつける鎖の感触と保管する宝石のもたらす不愉快な圧迫との斗いに必死だったのである。人質にされた一人の友達を、何としても救ってやらなければならぬ。その恨みは、多少スジが違うとは解っているイーラになりすまして同行しているイーラに向けられざるを得ない。しかも、イーラは彼女達のようにおぞましい貞操

帯を穿かされてもいないし、又、例のカプセルを吞まされてもいない。いわば、他の五人がカツギ屋なのに、イーラ一人だけが手ぶらなのである。

さすがの新津謙介でも、巧みに変装したイーラを見破ることは出来なかった。しかし、機内前部の雑誌架からタイム綴りを取り出して帰ってくる新津を一目見た瞬間、イーラは忽ち自分を訊問するために訪ねて来た日本の



警察官を思い出していた。法を破っている今の立場からいえば、新津は敵にちがいない。しかし、イーラは新津に何か心惹かれるものがあつた。あまりにひどい目にあつていたあの時、新津がかけたやさしいたわりが、彼女の心に暖い感情を芽生えさせていた。敵と思つてはみても、何故か少しも怖ろしくなかったのである。

その上、変装していること自体が、かえつてイーラを大胆にさせていた。便所へ立ったついでに、わざとよろけるふりをして新津の腕に身体をすりつけるような、しぐささえ試してみる余裕があつた。自分が思いつづけていたイーラが直ぐ脇にいるのに、そんなことは露知らない新津は、依然として雑誌に目を落としながら、心では矢張りイーラの事を考えていたのである。

マニラへ行かなければならない新津はホンコンで乗り替える予定にしていた。したがって、このままでは新津が知らないままでスレ違ってしまうことになる筈だった。だが、運命は一寸したいたずらを思いついたらしい。というのは、何の前触れもなく機体がグラリと落ち込んだからである。エアポケットにでも入ったものか。あちこちで悲鳴が聞えた。

立っていたイーラは、たまたま新津の上に倒れ込んでしまった。

それは、よくあることだったし、すぐ機長からのアポロジャイズも放送されたし、飛行状態も平常に戻ったことだから、乗客達も安心して笑い合った。

しかし、新津だけは違っていた。電気にかけられたように身体を硬直させ、アッケにとられたという風に、口を半ばあけてイーラを見上げていたのである。

一旦、倒れ込んだイーラは、勿論すぐ立ち直って、ひとこと

「失礼いたしました」

と新津に詫びたのである。その一言が、もしやという疑惑の裏付けとなって、忽ち一切のヴェールをはぎとってしまった。専門家の新津にとって、声の特長を覚えることは朝飯前のこと。その上、強い印象を蒙ったイーラの声だ。忘れようとしても忘れることはできない。たったひとことで、イーラは見破られてしまったのである。

今やイーラと新津は、互いに相手を認め合ったばかりでなく、互いに相手がそれと知っていることを確認し合ったといってもよい。イーラは直ぐ自席に帰ったけれど、胸の高鳴

るのをどうしようもなかった。思えば馬鹿な事をしたものだという後悔が浮かんできた。

何といっても、相手は警察官である。しかも麻薬事件に関してイーラを調べに来た。だからその気になれば、只今でもイーラを緊急逮捕することすら出来る筈だ。そして、再びあの地獄へ連行されるに違いない。そう考えるとイーラは全身が総毛立ってくるのを、どうすることも出来なかった。隣の京大生がそれと気づく程の激しさで、イーラはガタガタと震えはじめた。

新津の考えも全く同じだった。警察官としての職務に忠実ならば、直ちにイーラを逮捕しなければならぬ。しかし、何故か彼は金縛りに合ったように動けなかった。デリーの麻薬捜査官事務所でイーラが受けた屈辱は大體、想像出来る。イーラが、それを真面目に苦しんでいたこと自体、彼女が無実であることの証拠と見てよい。シャヒ達は何といおうと新津は、イーラが事件に関係ないと確信していた。

インド警察は、頭からイーラを「運び屋」としてしか考えていない。そこにイーラが受けた辱しめの原因があった。ここで新津が彼女を逮捕したところで、彼女をインドに押送

しなければならぬ。それでは、あまりにイーラが可哀そうだ。彼女は東京に行くらしいから、東京でなら、何とか正しい裁きによって彼女の黒白がつけられるものと思う。こんな風にアレコレ考えるうちに、新津の決心は固まって行った。つまり、この際は見て見ぬ振りをして、イーラを泳がせておこうということである。

いつまでたっても新津がやって来ないのでイーラはホツとしながらも、半ば気が抜けたようになってしまった。そんなイーラの素振りをみて、あとの五人は気が気でない。若しものことでもあると、自分たちが酷い目にあうばかりでなく、人質にされた友人の身の上はどういうことが起こるかわからないからである。ゴソゴソ小声で相談しながら、イーラを監視する目つきが次第に険しくなっていた。

そうこうするうちに、KLM機は無事ホンの啓徳飛行場に到着した。通過する乗客も一時、機外へ出なければならぬ。六人も時間待ちにロビーへ歩いて行った。

イーラは新津から目を離さなかった。その視線を背後に痛い程感じながら、新津は足早やに入国カウンターの方へ歩み去って行く。

ドアの前で、ふと振り返ると、これも立ちどまっていたイーラの視線とピッタリ合ってしまった。テレパシーのようなものが交差する。二人とも暗黙のうちに了解するところがあった。五人が戻ってきて、イーラを取り囲むようにして去って行った。

逆襲

あれ以来、蔡は一言も星に話し掛けなかった。激しい眼差しで海の一角を睨みすえたまま立っていた。彼のジャンクは帆とエンジンの両方を駆使して全速力で西航していたのである。

すでに他の僚船とも連絡を尽してあった。

細密な諜報網は、李船長のジャンクを襲った武装海賊の巢窟をほぼ突きとめていたのである。いつかは攻撃しなければならぬ目標だった。だとすれば、僚船を陵辱され、李船長までが殺された今が一番の潮時だと蔡は判断したのである。味方は一様に憤激していた。仲間の仇を討とうという意気が、末端にまで滲透しているのを見てとったからである。

ホンコン時間の午前二時頃になって、漸く陸地に近づいた。月もない曇り空なので肉眼

ではそれと見えないが、レーダーは目的の島影をはっきり捉えていた。敵にも当然レーダー位の設備があると見なければならぬ。満を持した蔡は沖合遠くジャンクを仮泊させてレーダー可視範囲に入らないように命じた。青幫には命を物ともしない鉄の規律があった。選りすぐった十名の決死隊が直ぐに水中服に着替えて蔡の命令を待っていた。蔡も今度は自らこの決死隊を率いて行くと言った。

「失敗したら」

微笑を含んで星に語りかける蔡の態度は、万が一にも失敗はしないという自信に溢れていた。

「失敗したら、私達にかまわず船を返して下さい。あなたの命令に従うように言っておりませんから」

黒いスキューバに身を固めた蔡樹理以下、十名の決死隊は水中艇に分乗して姿を消して行った。

万山群島中の小さな島にすぎなかったけれども、武装船のグループがそこを根拠としてから、見違えるように改造されていた。丁度三日月型をした島で、南北に長く、外洋に凸出して、内側、つまり大陸に向いた西側が広

い入江になっていたのだが、東向きの外洋から見ると何の変哲もないように見えて、事実には要塞のような設備を完備させて、あらゆる外敵に備えている。

仮りにも中共政府が、このような私掠船を公認するわけには行かないので、一応黙認の形だったけれども、実際は資金も武器弾薬も秘密に供与されていた。しかし、そんな援助を必要としない程、この商売は利益の多いものだった。

本土から逃げて行く人々は、いずれも虎の子を持参していた。それも嵩張らないように宝石とか貴金属とか、稀には秘密情報など大した金蔓になる筈だった。それらを捕えては、片っ端から取り上げてしまう。重要人物だったら、本国へ送致すると相当な礼物が届けられて来た。男女は白い三角帽子をかぶせて、反省の色が見られるまで無給の苦力として使役する。反抗すれば容赦なく死刑にして差支えない。これでは儲らない方がどうかしている。

首領の呂以下、幹部は財宝に埋れ、酒池肉林の快楽を享受していたのである。捕虜のうち若く美しい女を引き抜いて枕席に侍らせるのもお定りのことである。

ここでは女は単に消耗品に過ぎない。徹底的に絞り上げた挙句、潤いのなくなった女体は容赦なく処分された。実際、捨てても捨てても供給は豊富だったから、少しも惜しむにあたらないのである。そこには飽くなき搾取があった。犠牲者達は万に一つも息を抜く余裕を与えられなかった。

林美玉は十六才の少女である。大胆にも、サンパンの積荷にかくれてマカオへ脱出しようとしていたところを、船頭の密告によって、この私掠団に売られてしまった。よくあることだが、頭を切りつめて男装していたのだけけど、天性の麗質は容易なことで隠しおこせるものではない。

磨きあげてみてその美しさに驚喜した呂は、早速、自分専属の女として夜伽するように命じた。ところが相手が悪かったといわなければならぬ。大抵の女なら、泣く泣く自ら溺れて行くのだけれど、美玉はまだあどけなさの残ってシャープな肉体の中に、鋼鉄のような意志の強さをかくしていたからである。おどしても



すかしても言うことを聞かない。とはいっても、もはや自分の籠の中へ入れてしまった小鳥だから、呂としては少しもあせる必要はな

い。無理無態に凌辱するのは容易だけれど、こんないい女は長く保たせておきたいと思った。それにしても、一方では自分、すなわち呂親分の怖ろしさを徹底的に灼きつけておかなければならないから、わざと怒ったふりをして、無残にも着衣をハギ取って波打ち際まで引きずって行き、一晚、木枷で締め上げることにした。

鉄道の枕木のような船材を二本、雌雄として合わせ、あらかじめ穿っておいた半月形の穴に手首足首をはさんでカスガイでとめる古めかしい代物である。美玉は股を大きく開き内側に両手を揃えて、脊中を丸めた姿勢のまま固定されてしまった。材木の巾が十五センチ以上もあるので差込んだ手首、足首の角度を変えることすら不可能となる。激しい日ざしに余すところなく曝露した脊中は、忽ちフライパンで炒ったように焼け爛れた。一方では、陰微な場所がジカに砂に触れて、そこへヒタヒタとさざ波が打ち寄せてくる。臀部が次第に濡れた砂の中に沈んで行く。冷い水滴が直接、内臓へ伝わって行くような気がしてひどく不快に感じられる。それどころか、暫くすると尿意と便意が代る代る萌してきて、下腹部にキリキリと疼痛が走る。呂に嘲笑さ

れることを思えば、死んでも出すまいと心に決めた。その我慢が又、自らを苦しめることになった。

それでも林美玉は泣きわめくようなことをしない。ただ唇をギュッと噛みしめて上下から襲ってくる熱、冷の苦痛をこらえていた。

しかし、そのけなげな忍苦も長くは続かなかった。思うように歎き叫ばないのが、一層、呂をいらだたしくしたのかも知れない。彼はいきなり腰のバンドを抜きとったかと思うとハッシとばかり、それを林美玉の脊中に叩きつけたのである。焼爛した皮膚がペロリと剥げて真赤な血がトロトロと流れた。息もつがさず第二、第三の打撃が飛ぶ。気の遠くなるような痛みに、思わず声が洩れるのをどうしようもない。同時に、こらえにこらえていたものが絞り出てきて、臭気が鼻をついた。それと気づいた呂は、はじめて残忍な笑いを浮かべたが、そのまま声もなく屈辱にもだえる美囚の尻と砂の間に、きたならしい長靴の爪先を差し込むと、エイとばかりにそれを持ちあげたものである。絶叫とともに、林美玉の臀部は宙を躍って、枷を中心として半回転してしまった。今度は血だらけになった脊中が水の中に漬かる。砂を噛んだ唇が音をたてな

がら汐を吹く。不自然に押えつけられた手足がひどく痺れた。あたらしい体位に再び興奮した男の手が皮ベルトを振りあげる。女体を持つ敏感な柔肌を、殊更にねらう鋭い打撃が林美玉の声を、とことんまで出しつくさせるのであった。

どのくらい経ったのであろうか、ふと林美玉が気づくと、すでに月明の夜となって、胸乳のあたりまで水に沈んでいた。気絶している間に、潮がさしてきたらしい。もう少し経ったら顔まで水中に入って窒息してしまったかも知れない。蒼白い光に仰向いたままかしてみると、わが身と信じられない体に、尾が生えているように見えた。心臓が締めつけられるような驚きと恐怖。よくよく見ると長さ二十センチほどの腐った小魚が半分程突出て、銀色の尾鰭を上を立てていたのである。ゾーとするようなおぞましさに全身がガクガクと慄えてくるのをどうしようもない。血が臍のあたりまで流れていた。シクシクと針を指すような痛みが、そのあたりにあって、美玉を一層みじめな、打ちひしがれた気持ちにさせるのだった。塩水にしみる脊中の傷も苦痛だったけれども、それより大事にしていた乙

女の肉体に加えられた破廉恥な凌辱を憤り苦しむ、心の傷の痛みが余計、切なかったであろう。まん円い月を真上に見ながら、林美玉は熱い涙を流しつづけた。

突然、近くの水面がザワザワと波立ったかと思うと、黒い人影がヌツと頭を出した。それを横目で見ても、今の美玉には怖ろしいと思う余裕さえなかった。その人影こそ、復讐心に駆られて、ひそかに潜入してきた蔡樹理だったのである。瞳をこらして、林美玉の置かれていた状態を観察すると、低い声で、何故こんなひどい目にあったのかと尋ねた。キレギレに林美玉は自らの悲劇をうったえた。それを聞きながら蔡は短剣の刃をカスガイにこじ入れて、それをはずすと、美玉の下肢はハジかれたように躍って水中にかくれた。反射的に上体をおこすと、おぞましい魚を抜きとろうとする。ところが腐った魚は鰓のところで干切れてしまった。歯を喰いしばって不快感をこらえながらコジリ出すと、狂ったように遠い海面に投げ棄てるのだった。悪感が催してきて、歯がガチガチと鳴る。

あまりにもみじめな美玉の苦悩に、ぼう然として佇む蔡。

やっとのことで異物をとり除くと、もう彼

女の裸身は萎えたようにぐったりして、半ば水と砂に埋れるように斃れてしまった。

かなり離れた木立の中にある小屋で、戸口が開いたらしく灯がこぼれた。続いて、誰かがヒタヒタと歩いてくる気配である。とっさに蔡が鋭く私語した。

「静かに！ 今までの姿勢にもどって。そのままじっとしていच्छい」

カスガイを外した木枷に、わざと手足を入れさせる。蔡が水中に姿を消すのと、足音が近づくのと殆ど同時だったかも知れない。それは、いうまでもなく酔い痴れた呂親分だった。彼は情婦数名を素裸にするとサジスティックなプレイを強制し、その悲鳴を肴にして支那酒をあおっていたのだったが、昼間見た林美玉の清潔な美しさが目先きにチラついて一つも楽しめない。逃げまどう女共を虐待すれば虐待するほど空しくなる。とうとうたまらなくなって、様子を見にきたのであった。そして何が何でも林美玉の肉体を手籠めにし、しまおうと決心していた。

月光に濡れた裸身を白々と輝かして、半ば水にかくれた林美玉の姿を見ると、たまらなくなつたのか、いきなりその上に飛びかかって行った。その瞬間、プスツという低い音が

したかと思うと、呂の太った身体はもんどり打って水中にはまり込んでしまった。丸太を転がしたように波にもまれる呂の身体を蹴とばしながら立ちあがった蔡の手に麻醉銃が握られていた。次々と同じ服装をした部下が集まって来る。

「予備のスキューバを、この姑娘に着せてあげろ」

含み声で蔡が命ずると、誰かが持っていた袋の中から、ゴム服を出して林美玉に着せてくれた。やぶれた皮膚がゴムに触れて、思わずウメキ声をあげる。そんな彼女を、いたわるように浜辺に残して、黒い連中は風のように素早く、しかも音も立てずに小屋に向かって散開して行った。

翌朝、何事もなかったかのように蔡のジャンクはホンコンに向かっていた。船橋に立った蔡は満足した様子で、顔を輝かしていた。その視線は、李船長と全く同じ姿、赤裸で帆桁にブラ下っている呂親分の死体に向けられている。因果応報と言おうか、全くのところ昨日は人の身、今日は吾が身であった。

船室では、医学の心得のある星が大活躍だった。救出された人々の大半は、半病人のよ

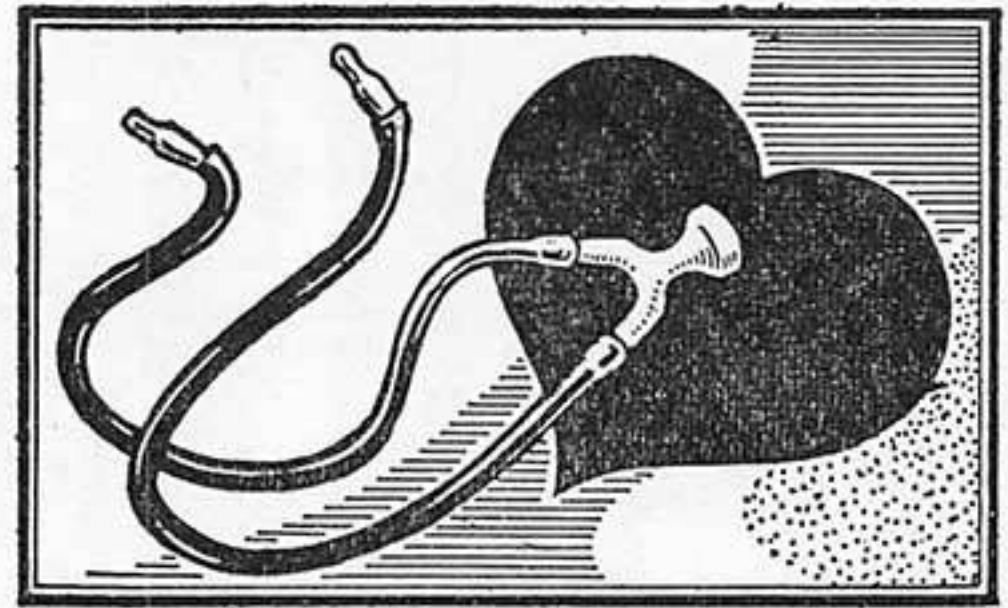
うになっていたからである。特に林美玉は、はりつめた心もゆるんだのか、又は痛み止めの効果があつたのか、ジャンクに運ばれてから、こんこんと睡りつづけている。

呂の死体を彼女に見せてから、鍾りをつけて海に沈めようというのが蔡の意見だった。

昨夜、不意をつかれた私掠団の連中は、大した抵抗もなく、蔡等の攻撃に屈した。そして、虜囚は悉く解放され、財宝、武器、弾薬などは蔡のジャンクに収納された。その上、彼等の根城は、船もろとも火をかけ、跡かたもないまでに破壊し尽したのである。

一方的な裁判が浜辺で開かれ、呂の部下達は一人居らず吊し首にされた。枝振りの手頃なところには、大抵、死骸がぶら下って、この海辺の林は、時ならぬ人間の果実がなったように見えた。呂親分だけは、生きたままジャンクに連行され、そこで殺気立った青幫達に、死ぬより苦しい辱しめを受け、一寸きざみに血をしぼりとられたあげく、李のジャンクでたった一人生き残った周少姐の手でトドメを刺されて帆桁に首を吊るされたという次第である。

(未完)



|| S・C・R 〆性問題相談室〱 回答欄 ||

金魚などを用いた

女性のオナニーについて

医学博士 弓削 達人

|| 質問 || (原文のまま) 女性、独身、OL、健康。

私はオナニストです。でも、オナニーの一般的な害についての質問ではございませんので、思い違いをなさらないで下さい。その行為は、24才の女が良識によって行なうのですから、女学生に対するような忠告は不必要でございます。

私は自慰するに当って、左記のようなことを行なっていますが、その、一つ一つについての危険性の大小を、比較しながらお教え下さい。

1 三面鏡に裸身をうつしながら、指頭に、

コールドクリームをつけて行ないます。コールドクリームのは非について？

2 直径3糎のコケシ使用を、最近直径4糎(暖かいお湯を筒の中にいれておくことのできる)の生ゴム製秘具に切り変えました。太さについてのご注意をお願いします。

3 鏡を見ながらベビーオイルを塗って、広げたりして、悦虐を愉しむこともあります。ベビーオイルは無害でしょうか。

4 ベビーオイルを塗れば、直径何糎まで、巨大な責具を使用可能でしょうか。

真径6糎の生ゴム製秘具が入手できるので、
すが？

5 いちじく浣腸を自ら施している時に、感じてしまっ、一度だけ、前部へ一コ施してしまい、その感じが忘れられません。ベビー用一コぐらいならかまいませんか。

6 頂点に達したら、ガラス製浣腸器で人肌の牛乳を、擦っていた箇所へ、注入する時もあります。深く挿入さえ避けられ、よろしいでしょうか。

7 金魚を時々使用します。尻尾は必ず出しておきますから安全でしょうか？

8 一度、蛇の無害な種類を、頭だけいれてみたいのですが、ショーにもあるとか、生理学上、可能ですか。

(注) 匿名にて誌上回答をお願い致します。

6以降が誌上回答困難でございましたら、カット下さっても結構です。

巨物許容の限界にしましても、ベビーオイルや浣腸に致しましても、興味本位の週刊誌では危険で信用できませんし、まさか、お医者様にお尋ねするわけにも参りません。そうかといって、私にとっては、倒錯の自己愛撫は欠かすことが不可能で、その方法は大きな関心事であり、心配事でもございますから、放置するわけにもいきません。お助け下さるつもりで、ぜひ御回答下さい。

自宅へのお手紙は、人目に触れますので、本当にすみませんが、誌上をさいて頂けないでしょうか。何卒よろしくお願い致します。

以上

○ ○

〓回答〓

御質問の個々のことについて具体的な回答に入る前に、まず最初に考えて見たいことがあります。

あなたは「この行為は24才の女性が良識によって行なう」のだから「女学生に対するよ

うな忠告は不用です」と言っておられます。

然しこの考えはそれがそのままに一般の社会に通用するものでしょうか。私にはあなたの気持がよくわかるつもりです。精一杯に「忠告は不用だ」と言っているあなたの気持は痛いようによくわかっていくつもりです。恐らくK・K誌の他の読者もそうでしょう。「一般社会に通用しなくともよい。われわれの間にのみ通用すればよいのだ」という意見も理解できます。

然し、医者として助言し回答する立場に立つと、それをそのままに承認するわけには行かなくなるのです。

すなわち、どのようにあなたが、「成人女性」の「良識」に基いて行なう行為なのだと強調されても、それが自傷行為に類するものになる場合には、私はそれをお止めなさいと言わなければならないのです。

それはたとえば、自殺をはかろうとする人を見かけたときは、その理由の如何にかかわらず、誰でもがその自殺を思いとどまらせようとすると全く同じことです。

「自傷行為」というのは、ある種のノイローゼの人か、ノイローゼ的性格の人達が、自身自身の体を、いろいろな方法を用いて傷つけ

いためることをいいます。終戦後間もなく事故死？ した某高級官僚の陰部に自傷のあとがあり、ためにノイローゼによる自殺ではないかといわれたことがありました。

勿論、私はあなたをノイローゼあつかいにするわけではありませんが、あなたがなさうとしている、またなしている行為は、自傷行為のその限界まで来ているのです。

したがって私は、あなたの好まれない忠告をするようなことになるかも知れないし、またどのような種類の忠告でも多くがそうであるように、女学生に対するような、教訓的なあまりクスリにならない忠告になるかも知れません。

ともあれ、次に具体的な注意事項を書いておきましょう。

(1) 外陰部か腔に塗布し、あるいはこれを洗滌するものとしては、イチジク浣腸、ベビーオイルが安全でしょう。

コールドクリームは人によってはピラシすることが心配されます。

牛乳は、刺戟することはベビーオイルと同じく少ないのですけれども、使用後、残ったものが腐敗することが考えられます。腐敗しても、乳酸醗酵して酸性になるわけ

ですから、もともと酸性である膣内壁が、アルカリ性になって雑菌が繁殖するということはなく、その点については安心だと思えます。

(腔にはデーベルライン桿菌という細菌がいて、これがグリコーゲンを乳酸醗酵させて乳酸として腔内を常に酸性に保つ役割をしています)

(2) 使用するコケシの大きさですが、これは4センチ位が限度で6センチというのは無理ではないかと思えます。(産科学教室の意見でも6センチということは常識的に考えられないといっています)

然し常識的に考えられないことが起こるのがわれわれこのK・Kの世界であり、私達の体です。従って私は必ずしも不可能ではないと思えます。

然しその際に気をつけなければならないことは、大きな胎児の出て来る処だから、これ位の大きさのものは大丈夫だろうなどと安易に考えないことです。出産の場合には、10カ月の月日をかけて、生体全部がその娩出の準備をしているということです。器管の充血の度合い、平滑の程度も異っています。また内部から出るのと外から押し

こむのとの違いもあります。

だから、普通なんでもない時に、あまりに巨大なものを無理に押し込んだり、規則的に出し入れしたりして刺戟することは、会陰裂傷といった不測の外傷を生ずる恐れがないではありません。

(3) 金魚を用いることは細菌感染のおそれがあります。またウロコ、ムナビレ、殊に背ビレによる裂傷、刺傷が予想されます。

(4) 蛇の頭だけを入れること。このことも、ウロコなどがあり、また細菌感染の心配も金魚と同じであり、危険な方法だと思います。

然し、うす気味が悪いということを別にすれば、金魚を入れることよりも外傷の危険性は少ないかも知れません。

(5) 次にオナニー後の処置について述べて見ましよう。

オナニー後は、男性と違って内部に触れたわけですから、十分に消毒する必要があるような気がします。然し実はその必要はあまりありません。というのは、前に述べたように、デーベルライン桿菌などにより自浄作用(生体が自分から自然に清潔を保とうとする作用)が行なわれ、雑菌などの

侵入を防いでいるからです。

けれども、しばしば不自然な行為することは——ことにあなたのように、金魚、蛇の頭といったようなものを用いる場合には傷外を受ける恐れが多く、それによる慢性炎症を生じ、自浄作用が低下していることも考えられます。

従って1〜2%のホーサン水で軽く腔洗滌をしておくことが必要であるといえましよう。

(但し洗滌はあまりしばしば行なう必要はなく、むしろ産婦人科領域では、過度の洗滌は自浄作用を弱めるといわれているくらいです)

(6) 最後に、外傷を受けた時の処置を書きましよう。

①ヒレがささったときは恥ずかしがらずに診察してもらうことです。その時は「イタズラをしていたら、なにかがささったようにある」といえばよろしい。手なれた先生は、決して深くは質問なさらずに必要な処置をして下さるものです。

②普通のヒツカキ傷ができたような場合にはマキューローを塗っておくだけでよいでしょう。心配になる時は、クロマイ

S.C.R. (性問題相談室) 案内

担当……弓削性科学研究所長 医学博士 弓削達人先生

他人に打ちあけ難い悩みなどについて

編集部の長年の懸案であり、近時急速にその必要に迫られていました性問題相談室 (Sex Counselling Room 略称 S.C.R.) を開設致しました。

この欄は無料相談であり、結婚生活一般から夫婦問題、さらにホモ、フェチ、サド、マゾなど性的倒錯に関する悩みの打ちあけ、巾広いカウンセリングに応じます。また誌上公開をはばかれる方には、転送先を明記すれば仮名で解答して差支えないとの御好意あるお申出をいただいております。担当の医学博士、弓削達人先生については、公的な身分はさしひかえますが、某民間病院附属の性科学研究所々長であります。

○ 本誌の愛読者の方で、医学博士弓削達人先生に性問題に関しての解答をお求めの方は、御遠慮なくお便りをお寄せ下さい。

○ 個人の秘密については絶対御迷惑はお掛けいたしません故、御安心の上、何んなりとお尋ね下さい。

○ 誌上に掲載するものについてはすべて匿名とし、御希望によっては先生の御都合のつく限り、直接の解答も致して貰います。

○ 御相談についての診断及び回答についての費用は一切不要です。

○ 宛先は編集部気付、弓削達人先生として下さい。

御遠慮なく相談をお寄せ下さい

軟膏などを用いてもよろしい。

③もし発熱するような時は、クロマイの内服薬を服用するのも一方法でしょうけれども、矢張り診察を受けることをおすすめします。

さてこのように書いて来て、また考えこまずにはいられません。『24才の女性が、どうしてこれほどまでの自虐と自己愛撫をなさねばならないか』回答を書くたびに、筆を重くするこの種の疑問の前に、燈火の暗くなるのを感じずにはいられないのです。

オナニーするのは悪くないと思います。然しそれが、これほどまでの自虐をわが身に強いねばならぬということは、なんとかならないものでしょうか。

あなたの質問からは、そのことに対する解決のいとぐちは勿論うかがい知ることとはできません。またあなたも、そのようなことは希望してもおられません。

然し、同じ孤独なセックスであっても、もう少し明るいセックスであっても、よくはないのでしょうか。

「御意見無用」とは、相談をうける私自身が悲しくなってしまうです。

連載 M 小説



年のひけめ

政吉は栄子のこの頃の変わりようについて考えてみた。

栄子という女は、確かに浮気で淫蕩な女である。一度、結婚に失敗し、バー勤めをして多くの男を知ったことが、彼女の本来の性を目覚めさせたのかもしれない。だが決して、悪女ではない。

笑うと白い歯並びの上から、上あごの歯ぐきが、かなり露出する。歯ぐきを見せて笑う女は淫奔だと、何か人相の本で読んだことがある。

ピエロ床屋

(7)

鬼^き 山^{やま} 絢^{けん} 策^{さく}

その代り物事を隠しておくことができず、秘密をつくっても直ぐバレてしまうような、正直なところがあると言う。

栄子という女は、全くそんな女だった。情にもろくて、好きな男には身銭をきってつくす、世話女房的なところがある。

結婚してから三、四年は、うまく行っていたのだ。自分を愛してくれだし、商売にも身を入れて、二人で一生懸命、働いたものだ。栄子が急に威張り出したのは、一年ぐらい前からだ。

何となく、妻に満足を与えられないというコンプレックスが 政吉自身の心のうちに芽生えたのだった。果たして、それが本当に栄

子を不満にさせるほど衰えたのか――。

いま、冷静に考えてみると あながち、そうでもなかったような気がする。

政吉が一人で、そう決めこんだ時から、それが次第に事実となって、裏づけられてきたのだ。

そして、栄子は浮気した。

最初、遠慮がちに文句を言ったが、栄子に逆襲されると、手もなく譲歩し、浮気を黙認するようになった。

“あれがいけなかったのだ”
とも思った。

“栄子は決してサジスチックな女ではなかった。それが今はどうだろう。俺を奴隷のよう

に扱い、殴ったり蹴ったり、羞かしめたりすることによって快感を感じる、完全なサジスチンになってしまっている。

だがそれも、もとはと言えば俺が種を播いたのかもしれない。十五も年が違ふというひけめから、女房の御機嫌をとりすぎて、増長させてしまったのだ。

奇妙なもので、妻が嗜虐性になると、それ

——前号までのあらすじ——

斧田政吉(53)若く美しい浮気な妻に悩まされながらも我慢して働く理髪店主。しかし善夫が現われては浮気で済まなくなつたので苦境に立たされた。

斧田栄子(38)5年前に政吉と結婚し、故郷大田原市で店を出す。善夫とは浮気のつもりが、次第に深みに陥り、今は政吉か善夫か、いずれかに決めなければならぬ立場に追いやられてきた。

富岡善夫(33)好男子だが、女には堅いという評判の男。栄子の再三の誘惑に負けた形で、結婚することを条件に係するが、そこには計算された野心が隠されていた。

現時点では、政吉は栄子に弱く、栄子は善夫に弱く、善夫は政吉に弱いという三すくみの状態だが、いずれこの均衡の破れる日が間もなく訪れる。

を受けて快感を感じるようになった、マゾヒズムの傾向があることを自覚するようになった。

“そうじゃない、俺はそんな変態じゃないんだ。栄子がそうして喜ぶから、あまんじて御相手をしてやってるだけなんだ”

そう思う反面、

“ほんとうに、それだけか”

と政吉の良心が問いかける。

“苦しさや、屈辱への憤怒の渦の中で、それを官能的な快楽に切り替えて、昂奮しているじゃないか。あれはなんだ”

と問い詰められると“変態ではない”と言いきれない気持ちにもなるのだった。だが、

“俺ぐらいの年になると、程度の差こそあれこういう心理になるものなんだ。何も、こっちから望んで奴隷を志願しているわけではないし、苦痛は、あくまでも苦痛。屈辱には激しい憤りと反撥を感じているんだから 変態ではない”

と弁護を試みた。

だが、過去は過去として……。

現実には直面して、政吉は当惑した。

“一体、これからどうなるんだろう”

栄子は「妾の言うことをきかないんなら、いつでも別れてやる」と言った。だが、あれはそのときのはずみで出た言葉で、本心からではないだろう。でも自分が、あくまで反撥すれば意地を張って、別れるところまで行ってしまうかもしれない。

とすれば、栄子に反抗することは避けるべきだ。

“だが、この頃のように堂々と密通されるのでは、いくら何でも堪まらない。もはや「密通」ではないのだ。何というのか「公通」というのか「開通」とでもいうのだろうか、

政吉は、自家製造の名詞に苦笑した。

政吉の良心は、善夫を攻撃することには、一片の躊躇があった。

もちろん当面の恋仇として、感情的には憎悪で一ぱいである。

だが冷静に自己の感情を抜いて過去の事実を省れば、悪いのはあくまで栄子であって、善夫が避けに避け、逃げて逃げているのをつかまえて、ものにしたのは栄子である。

まじめに働いているし、自分を旦那と立ててくれている。

だが政吉のポジションから攻撃できるのは栄子が不可能だとすると、善夫に鋒先を向け

るしかない。

「やっぱり栄子が何と言おうと、善夫を遠ざけるしか他に手段がない」

説 得

「善夫、ちょっと顔を貸してくれ」

栄子が風呂へ行ってる間に政吉は、前にも行った飲み屋へ、善夫を連れ出した。

「一体お前はこういう風に考えているんだ」

「……」

「俺とあれだけ堅い約束をしておきながら、また気が変わられちゃ困るじゃないか。そりゃ清太郎がもう半年のばしてくれただとしても半年経ったら、どうするつもりなんだ」

「……」

「結局、東京へ帰るんだろう。清太郎が栄子にどう言っただか知らないが、俺からことをわけて清太郎に直ぐ引きとってくれと頼めば、お前はどうしても、東京へ帰らなきゃなるまい。だが、そのためには、お前と栄子のことを打ち明けなきゃ、ならない。それは俺としても辛い事だし、お前にとっては身の破滅だろう。そりゃ現在の法律では姦通罪はなくなった。なくなったからと言って、それで済む

もんじゃない。世間が許してくれないよ。昔なら、重ねておいて四つに叩っ斬っても構わなかったんだ。まして主人の女房と間男すれば、三日晒しものにした上、打ち首になったんだぜ。お前だって良心が咎めるだろう」

「……」

「栄子は、あの通り浮気者だ。そりゃ今はお前に熱をあげて夢中になってるかもしれないが一人の男で満足している女じゃないんだ。それにお前の方だって、何も選りに選って、人の女房で五つも年上の女と、くっつかなくとも、お前ほどの美男で腕もいいんだし、もつといい嫁さんの来手は、いくらでもある筈だ」

善夫は盃も手にせず黙って聞いていた。

「栄子は俺にとっては命だ。栄子を取られたら俺は生きて行けなくなる。そんな罪をつくってまで人の女房を構取りしなくてもいいだろう」

「そりゃ、よく分ってます」

「分ってるんなら、このまま東京へ帰ってくれ。いま帰るんなら、俺が清太郎に何も言わなくても済む。皆、円く治まるんだ。なあ善夫、分ってくれよ、ここんところを。な、帰ってくれるだろう」

「……ハイ、帰ります」

「帰ってくれるな」

「……ハイ」

「いつ帰る？」

「……」

「まあ明日というのも急な話だから、三日待ってやろう。三日のうちに必ず帰ってくれ」

「ハイ」

「ありがとう。ほんと、お前が悪いんじゃない。みんな栄子が悪いんだ。また栄子にそんな真似をされて文句も言えねえような俺がいくじなしなんだが、まあそこは勘弁してくれ。じゃあ今度こそ、はっきり約束してくるな」

「……」

善夫は無言で首を縦に振った。政吉は今度こそ大丈夫だと安心した。

荒れる栄子

その夜、また栄子は荒れた。

晩飯をつくっても二人は帰って来ず、栄子は一人で酒を飲んでいた。

そこへ、あかい顔をした政吉と、あおい顔をした善夫が帰って来た。

「どこへ行ってたのさ！」

善夫は頭が痛いからと、飯も食わずに二階へ引き上げようとした。

「お待ちよ、善っちゃん。逃げるのかい」

「イヤ今夜は頭が割れるように痛いんです。勘弁して下さい」

栄子の止めるのもきかずに、二階へ逃げて行った。

「ちき生、卑怯者」

と罵ったが、深追いはしなかった。

「あんた、一体、何をしゃべったのさ」

「別に何も言わないよ」

「ばか！ 飲み屋で一時間もしゃべって来やがって何を言ったんだよ」

政吉が黙っていると、いきなり栄子の右手が伸びてパチンパチンと両頬に鳴った。

「サ、言ってごらん。言わないつもりかい」肩を掴んで揺すぶり押し倒すと、胸の上に股をひろげてデンと跨った。

「サアお言い！ 言わないとひどいよっ！」

続けざまに頬をピシピシと叩いた。政吉の顔が真っ赤になった。

「善夫のほんとの気持を聞いてみたんだ」

「何の気持さ」

「お前をどう思ってるかと言うことだ」

「善夫、何て言ってた？」

「お前が想ってるほど善夫は、お前が好きじゃない。それと俺に申し訳ないと謝ってた」

「嘘だっ！ こん畜生ッ！」

栄子は狂ったように上から、また叩いた。

顔ははれ上ってきたが政吉は冷静だった。

「道に外れたことをしでかして良心が咎めているんだ」

「何言ってやがんだいっ！」

両膝を立てて跨っていた右足をあげて、踏んづけるように政吉の顔を蹴った。

「お前が善夫を責めたんだろう」

「イヤ、俺は責めはしない。ただ、ありのま

まの、ほんとのことを言っただけだ」

「ちき生、また余計なこと言やがって！」

栄子は右手で政吉の鼻をもぎるようにねじった。痛さに顔を歪めながらも、政吉は平静を失わなかった。

「善夫は、どうしても東京へ帰すよ。でないと、清太郎に合わす顔がなくなる」

「清太郎さんは半年、のばすことを承知してくれたんだよ」

「じゃあ半年経ったら、帰すつもりか」

「そりゃ、その時のことさ」

「清太郎がどうしても返せと言ったら、返さなきゃならない」

「フン、そうは行かないよ」

「お前と善夫の関係を俺が清太郎に話したらどうなると思う」

「アハハ、面白いじゃないか。話せるものなら話してごらん。何だい、この口で話すのかい」

栄子は、上から口をふさいだ。

「ホラ、しゃべれるもんなら、しゃべって見ろ。このドスケベ野郎！」

足掻き蹴く政吉を上からおさえつけて、栄子は煙草に火をつけた。

「清太郎さんがいくら主人だからって、善っちゃんに奴隷じゃないんだからね。本人の意思をまげることとはできないよ。それに、妾だって清太郎さんをウンと言わせて見せるさ。フフフ……」

イザとなれば奥の手を使えば清太郎も栄子の頼みを断われない——という自信をもって

いた。

「政吉が自分の恥を清太郎に話す筈がない」と、たかをくくってもいた。

「この意気地なし野郎は何をする気力もないんだ！——」

十六貫の体重で、圧伏してやれば、反抗心も萎えてしまうのだ。

そう思っで見下ろすと、いつもは目をつぶって素直に苦役に服す政吉が、下から目をあけてジッと栄子を見上げている。その目に探るような、なじるような色が見えた。

栄子は無性に腹立たしくなった。

すっていた煙草の火がポツと赤くなったところを矢庭に政吉の額におしつけた。

「ヴヴヴ……」

口をふさがれたままの政吉が、目を大きく見ひらき、額に何本もの皺が刻まれ、悲鳴にならぬ悲鳴を体内にこもらせた。

途端に、しびれるような刺戟が栄子の全身を走った。

平静だった政吉がこの時は栄子をはね返そうと暴れた。だが平べったくひろがった巨大な太腿は、それをビツタリと抑えつけた。

栄子は政吉を殺してやりたいような憎悪の目で、政吉の怒りの瞳と対決した。

政吉の自由に動けるのは僅か3センチの肉片のみであった。それが痛さにピクピク動きまわるのが、栄子を恍惚境に誘いこんだ。

この奇妙な上と下の睨めっこも、結局は政吉の敗北であった。

政吉は力なく目を閉じて、いつもの服従の表情に戻った。

同時に栄子のエクスタシーも潮のひくように退いて行った。

つぶった政吉の両眼から涙が溢れてきた。

煙草の火の痕が、まばらな灰をつけて、あかく脹れあがっていた。

完全に屈伏した夫の姿を目で見、身体で知ると、栄子は本来の女らしさに戻り、政吉が可哀想になってきた。

鏡台の抽出しからメンソレを出してきて傷あとの灰を吹いたあとへ塗りつけた。

「栄子、俺に何をしようと構わない。だがお前の本心を聞かせてくれ。俺を捨てる気か」

「捨てやしない。苦労してつくったこの店じやないの。乱暴してごめんね」

栄子は政吉の頬へ接吻した。近頃ゲッソリとやせた政吉の頬は、ザラザラしていて生気がなかった。

「栄子……」

政吉は栄子を抱いて、自分が男性である存在を栄子に示した。

そのまま栄子は政吉に全身を委ねようとして、ハッと気がつき、階段の左上の隅に下っているレースのカーテンの方を見た。

こっちから見ても分りっこないのを自分で確かめて知っていたいながら、やはり目は其処へいつてしまったのだ。栄子は立ち上ってパチンと電燈を消してしまった。

暗闇の中で、やわらかい栄子の肉体を思いきり抱きしめた。弾力のある乳房が快く胸をくすぐった。幸福感が政吉の全身をかけめぐった。

野望の烙印

翌日、善夫は頭痛がすると言って店を休んだ。栄子が店そっちのけで看病に当たったので政吉が一人、二階を気にしながら客の頭を刈っていた。

「オヤ、今日は旦那一人かい。善ちゃんは」
「何だか具合が悪いと言って、休んでるんですよ」

「おかみさんは？」
「ええ、居ますよ」

しつこく尋ねる客をうるさそうに、仏頂面をして政吉は、ひげを剃っている。

「そんなら、いいや。俺あ、また、かみさんと善ちゃんが駆け落ちでもしたのかと思っただ。アハハハ」

冗談で言ったのだが、政吉は皮肉られたようにドキリとした。

何しろ狭い田舎である。店では素振りも見せぬ善夫だが、栄子の方が何かにつけて色に出る。人の口に扉は立てられない。世間では勝手な臆測を立てて噂してるかもしれない。いや、その臆測が存外事実であることも、ま、あるのだ。

政吉は気が重かった。

その頃、二階では栄子が、昼の食事を持って行き、一本つけて善夫に酌をしていた。

「おかみさん」

「イヤだよ、おかみさんだなんて」

「俺は、やっぱり東京へ帰るぜ」

「どうしてさ」

「俺は昨夜、あんたの正体を見ちまったよ」

「妾の正体は、あの通りさ。あれが悪いの」

「そうじゃねえ、あのあとだ。俺に見せまいとして電気を消したろう」

「何だ。そんなこと怒ってるの」

「そんなこと軽々しく片づけられることじゃねえ。俺には、ショックだった。結局は、おかみさんは俺をおもちゃにする気だろう。俺との仲は浮気の範囲から出ていないということを知ったんだ」

「たしかに「正体」を見られた」

と栄子は、そのとき、はじめて気づいたのだった。

実のところ栄子自身、善夫に「結婚してくれ」と言われた時、結婚してもいいと思ってた。だが善夫と一緒になるということは政吉と別れることである。そのところが自分でも何だかボヤツとして、本当に別れるための具体的な考えというものは、もっていなかったのだ。そこを善夫につかれたのだった。「そうじゃないよ。あんたが結婚してくれると言うから、妾は本気にしてたんだよ」

栄子は両腕を善夫の首に回して唇に接吻しようとした。善夫は手荒く、はねのけた。

「よしてくれ。そんなことしちゃ、旦那に悪いぜ」

「あんた、妾が嫌いになったの」

「死ぬほど好きだ」

「じゃ、どうすりゃいいのさ」

「いいかい、前にも言っただろう。俺も三十三で、そろそろ身をかためなけりゃならねえ。あんたとは浮気でつき合うんならご免だと言った。そしたらあんたは結婚すると言った。そうだろう。それなら、そのように証拠を見せてくれ」

「だから、ああやって、あのバカ野郎に愛想づかしをして見せてるんじゃないか」

「あれは、愛想づかしなんていうもんじゃねえ。夫婦の遊びだ」

「妾、昨夜、あいつの額を煙草の火で焼いてやったんだよ」

「それも遊びさ。その証拠に、あとで俺に見られてはならぬことをしてたじゃないか。いいかい、そんな気持でいたんじゃない政吉にやかなわねえんだぜ。後には清太郎旦那の目も光ってるんだ。俺が、あんたを好きになるには考えに考え、悩みに悩み抜いた上で決心したことなんだぜ。俺はな、清太郎旦那に店の後継者として、行く行くは一軒の店を委されるほど信用されてるんだぜ。だが、あんたと、こんなことになったのが旦那にバレたら、それもオシヤカだ。俺は出世の道も何もかも棒に振って、あんたを欲しい。あんたと一緒にすることに踏みきったんだ。だから俺とほんとに結婚する気なら、あんたも、はっきりと覚悟をきめてもらいたいんだよ」

善夫の熱情に栄子は打たれた。

このとき、いままでボヤツとしていた自分の行く道が、はっきり一本に決まったことを栄子は自覚した。

「わかったわ。いいわよ。妾、政吉と別れるわ、それでいいんでしょ」

「そう簡単に言うけどな、政吉はお前さんを離さねえぜ。その時や、どうする？」

「二人で、とび出そうか」

「ホラ！ それだから、だめなんだ。思いつきでものを言うなよ。俺と、あんたの将来を決めることだぜ。もっと、よく考えてくれ。いま、すぐでなくてもいいからよ」

「じゃあ、どうすんのさ」

善夫は、いきなり栄子をギュッと抱きしめそのまま折り重なって倒れた。

荒々しい男の動きに、栄子は、まるで素直な「女」であった。

「妾に向かったら、こんなに強いのに、どうして政吉の前に出るとペコペコしてるのさ。あんな意気地なし野郎にさ」

「強く出ようと思やいつだって出られるさ。もう渡さねえ。あんたを奴にや渡さねえぞ」
激しい息吹き、情熱のありったけを叩きつけた。

「うれしい。だから奴にも強くなっておくれよ」

善夫は栄子の上からネットリとした口づけを何度も交しながら、

「俺達は、いまから、はっきり夫婦だ」

「そうよ。夫婦だわ」

「いいか。だったら奴とこれから夫婦の交わりを結ぶことは許さねえ。夫の俺としちゃ、我慢ならねえことだからな。いいか」

「わかったわ。もう、あんな奴に身を委せないよ」

「ただ奴をからかってやることは構わねえ。洩^{はな}もひっかけねえんじやあ奴も可哀想だからな。そして、はっきり別れ話もち出して、ケリをつけてくれ」

「だからさ、妾達それからどうしたらいいのさ」

「問題は、この店だ。あんたが苦勞して築いた「エイコの店」だから、あんたの城だろ。これをどうするつもりだ」

「分ったわ。この城のあるじは妾だから、奴を追いつ出してやる！」

善夫はニヤリと快心の微笑を洩らした。

その目のかげに悪魔的なひかりがチラと、のぞいたのを、夢中になっている栄子には全然、気がつかなかった。

あとは言葉もなく、めくるめく官能の嵐の中で、善夫は栄子の気の変わらぬように、念を入れて自分の野望を栄子の肉体に植えつけ

た。

「栄子、……栄子」

下で政吉が呼んでいる声も聞こえず、昼下の情事に、うつつを抜かしていた。

政吉は舌打ちしながら昼飯をかつこみ、また一人で仕事を続けた。

二階では汗みどろになった二人が、油蟬のジイジイ鳴く音を聞きながら眠っていた。

身をつつむ孤独

いままで政吉よりも一時間ぐらい早く起きて店の掃除や支度をしていた善夫が、起きてこなくなった。

しかたなく政吉が七時頃に起き出して、掃除をし、店を開けるのが八時頃になるので、朝早く来る定連の客達から文句を言われるようになった。

九時になっても善夫は起きてこない。ムシヤクシヤした政吉は、一たん開けた店を閉めて「臨時休業」の札を、ぶら下げた。

昨夜も栄子に責められ、しかも栄子は二階へ上ったきり、朝になっても下りて来なかった。二人が、まだ抱き合ってたまま寝ているんだらうと思うと、自分一人だけで仕事する気

政吉は匕首を抜いて、鏡の前の板にプツリと突き刺した。

「何のまねですか、それは。それで僕を殺そうとでも言うんですか」

「俺は昔、この匕首でやくざを斬ったことがある。こんなものは使いたくねえが、お前が栄子を奪うつもりなら、俺としても生きてる甲斐がねえからな」

「冗談じゃない。ばかばかしい、子供だましの脅かしは、やめて下さい。店が休みなら僕は出かけてきます」

善夫は政吉も匕首も無視して、店の人口のカーテンを捲って錠をガチャガチャと乱暴にはずして出て行った。

政吉は、わざと大声で

「おい待て！」

とは言ったが、あの調子で善夫がとり合わないのでは引っこみのつかぬ恰好となるところだったので、それ以上は、とめようとしなかった。

一人になると、我ながら大人気ないことをやったものと、突き立っている短刀を眺めながら腕組みをして考えこんだ。

「ああ、俺も落ちたもんだ。若い時は女の二人や三人に、いつも追い廻されてたもんだ。どうして切れようかと考えてばかりいた俺がいまは、たった一人の女に死ぬほど想いつめ

て、足もとにすがりつくような気になっている……」

奥で物音がしたので、政吉は慌てて匕首を抜いてしまった。しどけないシュミーズ姿で栄子が出てきた。

「あら、どうして店を開けないの。善ちゃんは何……」

「出かけたよ」

「また何か言ったんだね。しょうがないね。」

サッサと店をお開けよ」

おかしなもので、善夫がいなくなると、政吉は仕事をする気になって「休業」の札をひっこめた。表に立っていた客が、

「アレ、なんだい、休みじゃないのかい、お

じさん」

「エ？ イヤ、その、やっていますよ。さあ、どうぞ」

政吉は、どぎまぎして、テレ臭そうにカーテンを引いた。

客が立て混んできた。

栄子も白衣をつけて、店を手伝った。二人で働くことに楽しい。政吉は夢中で仕事に精を出した。

夕方になって栄子は奥に引っ込んだ。

飯の支度をしているのかと思った政吉は別に気にもとめなかった。七時頃になって客も途切れたので、店を早仕舞いして部屋に入ってみると栄子がいなかった。

飯の支度もしてなかった。二階に上ってみると蒲団が敷きつ放しにされ、ビールびんが三本からになってころがっているだけで、誰もいなかった。

政吉は奈落の底へ突き落とされたような暗い気持ちになった。

風呂へ入ったが、飲み屋に行く気にもならず、あり合わせのものでお茶漬けを食べて、一人でテレビを見ながら栄子の帰りを待っていた。

テレビの番組が、どれを見ても詰まらなく見え、目に入らないのでスイッチを切ってしまった。

あたりは一ぺんに静かになった。やるせない孤独感が、ひしひしと総身に迫り、牢獄のような絶望感に胸をしめつけられ、政吉の目はあつくなくなり、涙が頬を伝っても、拭くことさえ忘れていた。

(続く)

私の理想像

美しい

緊縛十則

桜井洋一郎

糸



真暗な部屋にベッドランプがほの明るく照らしている。その真紅の敷布の床の上に、まっ白な女体が身も世もあらぬ風情をみせながら蛇のように身をくねらし、あるときは足をつつぱってのけぞり、あるときは双丘をつき立てて身悶えし屈辱にむせびつつもかすかに悦楽の歓喜を感じはじめて、また一層の恥かしさに嗚咽する。これが私の理想の美しい緊縛像である。

相手のコンディションと時間や場所の都合で、いつもこうは理想的にゆかないが、私は「緊縛の美の極致は羞恥責にある」といつの

頃からか堅く信ずるようになった。そういった私個人の好みをも、他人に押しつけることはできないけれども、美しい緊縛プレイをするための相手女性の条件と責め方の要件を、次の十則にまとめてご披露する。男性・女性を問わず大いに文句をつけていただきたい。

一、必ず素人の女性であること

部屋にはいるとすぐ「じゃあ脱ぎましょうか」とパッパッ脱ぎ捨て出したり、「こんな恰好でどう?」と巧みに手足で要所を隠蔽して、型にはまったヌード写真的なポーズをとる女性がいるが、これはいただけない。私は

緊縛のモデルにバーの女の子やプロのヌードダンサーなどは絶対に使わない。そのへんにいくらでもいるOLとか、まだあどけない感じの女子大生やごく普通の家庭の主婦といった女性こそ羞恥責めに最適である。そんなことは絶対に恥ずかしくて嫌だけど、一度ぐらい水着写真のモデルになってみたいと心の奥ひそかに願望をいだきながらそんなチャンスもなく、平凡な暮らしに明け暮れて少しあきがきていくというような女性は、実はいくらでもいるものである。そんな女性を私は多年のカンでさがしだす。

こうした素人の女性をじょうずになだめすかしてビキニ姿を撮りながら、ふとした拍子にサッとブラジャーをはずしてしまう。目隠しをしておいてひょいと水着のチャックを下ろしてしまうと、キャーッと言ってももうおしまい、耳を染めて胸や前を手でおさえながらしゃがみこんでしまう——そのなまめかしさが私にはたまらない魅力なのである。だからふだんから官能的なムードの中で暮らしていて、平気で肌をさわらせたり露出したりして羞恥に不感症になっている女性などは、いくら簡単に縛らせてもなんの興味もおこらない。

二、やや痩せ気味の女であること

身長一六八センチ、バスト九〇などというエンタープライズののような女性が、豊臀をゆさゆささせてドタリとひっくり返ったりしたらそれこそ興ざめである。あまり大柄な女は雄大過ぎて可愛げがない。脂肪のゆるるほど肥えた女は、豚のようでかえって動物的不潔感がある。私の好みは身長一五八センチぐらい、肉はついていてるがたるみがなく、全体のつり合いから見れば少し痩せ気味かと思われるくらい女性の、いかにも楚々として何とも言えない。

掌にあまるようなボインを好む人もあるがそれは乳房マニアにまかせる。ほんのりとふくらみそめた乳房とか、みずみずしい含羞にみちた乳房がよい。乳量もまっ黒でなく淡いピンクで小さく、乳首も直径一センチの干ブドウがくっついていてるようなのでなく、どこから乳首ともなくポーツと三角に尖っているというようなのが最高である。双丘は脂がのっているが深く切れこんで、えくぼが少し出くらいのを最上とする。全体に小柄ですんなりしているが、前後左右に自由に曲がり、はねかえる弾力性は充分ないといけない。

三、色白であること

多少ふとり気味の女性でもやむを得ずがまふすることのある私も、色の黒い女だけは絶対にいやで、肌の色だけはどうしても白くないと困る。琥珀色の肌とか小麦色の肌に脂がのって、ぬめぬめと汗に光るのを美しいと見る場合もないではないが、やはり動物的な匂いが先に鼻にきて、オットセイでもひっくり返しているようで、いやな感じだ。

すきとおる程とまではゆかないにしても、胸も腹も太ももまで真白な肌を、ほのかに紅く羞恥に染めてのたうち悶えるさまは、これこそ人間肉体美の極致であると思う。特に襟足とうなじ、胸部、腹部は白くなくてはいいない。のけぞった時の喉の白さ、内腿のやや細っそりした白い肌に、薄く青い静脈がすけて見えてブルブル慄えているのや、色褪を強制されて、紫でも紅でも、真白い双丘に深く食いこんでクッキリと対照をなしている、鮮かさなどはすばらしい。またホロホロこぼした涙の玉が、白い胸から腹にかけてこまかい生毛の上をコロコロと光ってころがる美しさはいうまでもない。また妊婦も手足はすんなりして色白なのが、乳首や妊娠線だけが異常に黒く、とび出た腹とともに本人自身も非常に恥ずかしく思っているらしいのが見もので

ある。

四、毛深い女であること

色の白いことと大いに関連のあることなのだが、夏に街を歩いていてもノースリーブの腕から手まで色白の肌に、こまかいが、ふさふさした纖毛がいっぱい生えている女性やスカートから二本こただけは夏冬なしに出ている脛に薄いストッキングを通して男のように黒々とした胫毛がすけて見えるのは妙にエロティックで、そういった毛深いのを、また恥かしがって、できるだけ隠そう隠そうとしている—そんな女が、いかにもいじらしい。

こういう女性は必ず腋毛も密生していて、いやだいやだという腕をむりに上げさせて両手吊りにしたりすると腕のつけ根の内側の白さとのコントラストが鮮烈である。またこんな女性は乳房にも乳首の付近にきつと一、二本の長い毛が生えていて、しかも、それを切らずに大切にとっているもので、そんな胸を押しひろげられた時の彼女の恥かしい狼狽の悲鳴は何度も耳に残っている。体中のあちこちに毛深い女の本性を残しながら、肌は抜けるように白という女はすばらしい。ただし髪の毛も含めて、漆黒が上々で、赤茶けたのはいくら毛深くてもグロテスクでしかない。

五、美女でないこと

「私はきれいだ」とか「うちは可愛い女の子や」とか少しでも自分の顔に自信のある女を私は使わない。醜女ではないにしても、前歯が少し出ているためにちょっと狐みたいだとも言い我も思っているのか、お母さんはどうしてこんな鼻ペチャに私を生んだのかしら」と怨みに思っているとか、とにかくいわゆる美人でなく、普通そこらへんにいくらでもころがっている顔がいい。第一項とも通ずるができるだけ素人っぽい方がいいのである。平素はとも手の届かないような濃艶な美女を、思いきりヒュー言わせてみたいという人も多いだろうが、いわゆる美女はたいてい自己顕示欲が強く、こちらがほめて当り前、ほめなければ不満に思っている。こういう女より、美人と並ぶのをいやがり、写真をとるのも家族以外とは苦にするくらいの女の方が、むしろ私にはよい。

顔の問題は、要はその構造ではなく表情にあると私は思っている。意外な痴態をさらけだしたために目を堅くつぶり、眉根をよせたしかめつらが耳元からポーツと染まってゆく様子や、責めが進むにつれて、ウツと口をへの字に食いしばって耐えていたり、反対に押

さえに押さえていた声が思わずアーツと出てしまつて、口を小さくあけてうめく、その夢中放心の恥ずかしい表情がほしいのである。いくら「いやいや、許してエ」と叫んでも、いかにもポーズをとった顔や「最高！」と唸つても、わざと悦虐めいたようなゆがんだ顔を演出したのではどうしても迫力が出ない。巧まずに自然と、本当に恥ずかしくてたまらない境地に追いこむと、顔の表情だけでなく全身が、足の指先まで微妙に反応してくる。こういう時の私の陶醉は言いつくせない。

六、なるべく少なく縛ること

私の緊縛はお仕置きではあるが、罪人のようには縛らない。黒々とした縄や、いかにもいましめの縄と言った感じの荒縄などで、胸から腹に数本もかけ、手足もギリギリに縛り上げるといふのは縄目の間から盛りあがる肉感を楽しむのであろうが私の趣味ではない。私はできたら、ハンカチ一枚でなるべく済ませたい。

廊下の柱を後手にかかえさせ、ハンカチで手首を軽く縛って動けなくしておいて、胸のボタンを一つ二つはずし、片方の乳房を露出させたときのやるせなさとか、頭のうしろでハンカチで手首を縛り、両足の親指と親指を

包み紙の紐で縛り合わせただけで、スカートをはらりとまくり上げられたときの女の狼狽とかを好むのである。全裸で縄を使つても、せいぜい腹を一巻きして股をくぐらせ後でひきしめるだけ。このたった一本の縄で動けないといったくやしきの身ぶり。首に一巻きした縄を伸ばして、あぐらに組ませた両足首を一巻きしてまた首に戻す。ごく簡単な海老縛りにあられもない恰好にされて身悶えするなど、縄を使つても一本にとどめたい。このほか、全裸に手拭い一本の、ミニ腰巻姿の、はりつけ。時には眼医者でもらった眼帯を二本つなげて、アンネパンティの代りにつけてやるだけというところでもない恰好にさせられてどうにも身の置きどころのないくやしさに悶える姿を味わいたいというわけである。要は縛られた痛さ苦しさより、身にまとうものの少なさ恥かしさが私の狙いなのである。

七、何か一つ身につけさせること

全裸というのは、なるまではものすごく抵抗を感じるが、いったん全裸になつてしまつてしばらくするとどうにでもなれという気になつてくるものである。まして風呂場などではなんの恥かしさもない。ところが日常の姿の一部を残しているというのは、いくら慣れ

てもたいへんつらいらしい。頼るべき庇護物が無いことや、場違いを痛切に意識させられて、それが強烈な羞恥感に繋がるのだろう。

白い肌に黒靴下を片方だけ残し、赤い靴下どめもそのままにしてあとは全部脱がせて「気をつけ」をさせると普通の女はほとんど直立できないほど恥かしがる。和服だったら足袋はそのままはかせておくのもかえってなまめかしい。上は全部剥き出され白足袋の先だけがくの字に曲って耐えている姿は、いかにも粹である。ブラジャーだけ残して下は全部はいでしまふとか、パンティだけさせて万才させるのも私は好ましい。上衣はそのままでシュミーズをたくしあげ、スカートを下げさせたりすると可愛らしい色気がある。OLの上半身は脱がせて、Gパンのチャックを十センチほどさげさせてお臍をちょっとのぞかせたりすると格別である。民謡を踊ってくれた旅館の女中さんに片肌脱ぎになって貰ったら、まぶしいほどの腋毛と乳房一つを隠しかねて真ッ赤になっていたのも魅力があった。

八、ほの暗い場所がよいこと

太陽が明るく照りつけ、木々の緑の色、鮮かな山辺のちょっと人里から離れた所で、若い女性を裸にして木にくくりつけた事があっ

たが、はじめ少しためらったものの、いったん思いきって脱いでしまうと、あまりにも健康的な雰囲気の中でいかにもさわやかで、私に必要なはにかみが消しとんでしまつて面白くなかったことがある。また夜の旅館で年増女中を煌々たる灯りの下で脱がせて、あぐら縛りにしたところ、これもしばらくすると図々しくしなだれかかってきて、情緒もさめ果ててしまったこともある。

部屋は日本間でやはり四畳半かせいぜい六畳の小間で、軒先が長く出てやや薄暗く、障子ごしに僅かに外の明るさを吸っている溶暗の中に、ほの白く浮かぶ女体の妖しさはなんとも言えない。ほの暗い翳の織りなす不思議な世界にこそ、美しい縛りのエクスタシーも生ずる。女性も白日の下や煌々たる電灯の下よりも、こういう所では意外と抵抗なしに被虐の世界に泣けるらしい。白々とした豊臀のほのぐらさに恥じらいつつひそかに息づいているしとやかさ。胸のあえぎの激しくなるにつれて乳房の織りなす明暗のあえかさを、私はこの上なく愛する。

九、肉体を傷つけないこと

鞭をピシッと打ちこんだときのあの弾力的な手ごたえや、打たれた瞬間ピクッと身をち

ぢめて、次の瞬間ギャウーとのけぞるときの悲鳴。そして白い肌に赤紫の筋が見る見るうちにパーッと浮き上ってくる妖しさを知らないのではないが、どうも私には女性を肉体的な痛苦にあわすに忍びない気持が強い。それを喜ぶ女もあることは確かだが、そういう変態的マゾ女性よりも、ごく正常普通の女性がふとしたことで私の術中にいつしかひきこまれ、意外な仕打ちに精神的にたまらない羞恥にさいなまれる、そのときの顔や全身があらわす表情は、もはや単なるエロではなく、芸術美であると思う。これこそが私の狙いである。

だから私は鞭とか針とか女性の肉体に傷をつけるものは一切使わない。柔らかなクリップでそっと乳首をつまんだり、可愛いリボンを結んだり、キャンドルを使って燭台代りにしたり、おどけたけし人形やヴァイブレーターなど、多少の小道具は私も使うが、狙いはあくまでも想像も絶したことをさせられる羞恥心を高めるための、アクセサリーに過ぎない。

十、自分から脱ぐようにしむけること

よくやくざ映画で、むりやりに娘や人妻が監禁され、乾分たちが寄ってたかっていやが

る女を丸裸にしてゆく場面がある。むりに裸にされるのはもちろん辛かろうが、私は暴力を使って女性を脱がせたり縛ったりすることにはほとんどない。これと目をつけた女性にチャンスを待って近づくと、後は誠意と愛情をもって、くり返し彼女の情感を刺激し、どこか一つでも魅力のある点をほめ讃え、いつか私の要求に女自身が、自分の全心身をあげてこたえねば済まないような気持ちをおこさせ遂に拒みきれなく自分から脱ぎ、自分で手をうしろにまわして坐りこんでしまうようにしむけることにしている。

こうして私の部屋なり旅館なりに入った女性も、必ず「脱ぐときだけはお願いだから見ないで」と懇願する。よしよしと承知はするがもちろん見ないふりをしつつ、一番の見どころであるから瞬時も油断しない。上着を脱ぎスカートをはずすと、ここで決心がちょっとゆらいで一時中休みする。「どうしても全部脱がなきゃいけないんですの」「僕を信頼するかどうかだ」と断乎として宣言する。ようやくシュミーズに手がかかりスリと落ちる。それでもそもそとブラジャーを外して片手で胸を押さえ、ここで又「もういいでしょう。これだけは許して」と哀訴する。そこで

「あなたの誠意に嘘がないのならいいんだ。ごめんごめん。もういいよ。今日はよそう」と言い放つ。するとたいていは「いいえ、私こそごめんなさい。でも恥かしくて」と言いながら最後の布切れを落とすはめになる。しおしおと何度もためらいつつ一枚一枚と脱いで結局丸裸になる——そんな含羞の高まりゆく過程をこそ味わいたいのである。ところでこの間私自身は絶対に衣服をとらない。平常のままでいて相手にだけ異常な裸形をとらせる。これも女の恥かしさをそる大切な要件と思う。「あたしだけ脱ぐのは恥かしいからあなたも……」という言葉も出ようというものである。

— ○ — ○ —

以上の十則は私の好みに偏していることを免れないが、前述のように「美しい緊縛の極致は羞恥責にある」という信念からすべて割り出した原則である。だから私は同じ相手といつまでも何度もプレイを続ける事はない。いくら初めての時は身も世もあらぬ風情を見せた女も、二度三度と重なると多少の悦びの期待を持つようになる。人に恥かしめられる喜びを知る素質を、どんな女性も必ず少しは持っているらしい。さんざん身悶えした後で

「もっと恥かしめて」と言いだすようになったら、もうおしまいである。

とにかく兼好法師ではないが、あまりに完全十分なる開花はかえって見どころがない。いよいよプレイに入る前の小鳩のようにふるえている姿から、さんざん恥かしい目にあわせた後、身じまいをしてから向かいあって、どこに隠れようもないてれくささまで、その全過程が滋味津々たる場所である。当然、相手の女性とセックスの関係は一切持たないことにしている。さめて後のいぎたない寝顔や、太腿まで見せて眠りこけているぶざまな姿態を見るに耐えないからである。一瞬の後には消えてゆくほのかな含羞の媚態こそ、私には女のすべてであり終りである。

奇クの愛読女性のなかには、そんな責められかたをしてほしいと思う方があられるかもしれないが、私には奇クを一目見ただけで眼をそむけるような人をこそ、責めて責めてヒューン言わせてみたい。

——以上——

(カット・辻 梶太郎)

× × × × × × × ×

『小杉千恵さん』に共鳴して

水

圧



座 頭 孝 司

カ ッ ト ・ 日 本 武 士

七月号の『お風呂の出来ごと』を拝見して
グイグイとその中にひきずりこまれていくの
をどうすることも出来なかった。

千恵さんは、通信文でも“自分のものを飲
んでみた”と言っておられる。そして“丁度
よいお塩かげんでおいしかった”と。

私も自分のを試してみたくなった。昼食の
後、ラーメンの空鉢を水洗いして、その中へ
自分のものを入れてみた。見たかぎりでは二
級酒のようだった。味わってみるとやっぱり
塩からい。誰のでも同じようだなと思う。

私は若い頃の夏、よくプールで暑さを凌い
だ。毎晩男女合せて十人位が常連であった。
近隣の大人達が私達のことを不良のグルー
プだと言っていたらしいが、私達は何もそんな
悪いことはしていなかった。ただ、知らん顔
で女の子の脚にさわってみたり、水の中をも
ぐっていった女体のどこかにさっと触れてや
ると、女の子達がさわぐので面白かっただけ
だ。女の子達も、それがお目当でプールにく
るのだろう。お互いが目的を果たすんだから
それでいいのだと思っていた。

或る晩、いつものように女の子の脚をさわ
りに行った時、急に私はその脚で首をはさま
れてしまった。なかなか強い力で、水の中で
苦しかったし、もがいているうちに顔のあた
りが何かしら生暖かい感じがした。やっと力
をゆるめてくれたので水面に顔を出すと、彼

女はニタニタ笑っていた。
「どうだった。今うちがオシッコしたけど、
あんた感じた？」

やっとさっきの事が解った。その女、光子
はその頃私より年上で、二十才位であった。
その晩から毎晩のように、プールの中で私は
光子にオシッコをひっかけられた。

そして光子は、いつもお風呂の中でオシッ
コをするんだと笑っていた。とても気持が
いいから……というものだから私もそうして
みた。この感じは自分でやってみないと文章
には表現出来ない。それが病みつきになって
今でもお湯に入ると、無意識のうちに時々や
らかす。

その光子が、その頃東北地方から埼玉あた
りまで、行商に廻っていたので、グループに
入ることをさそわれ仲間になった。

大きな旅館には泊れないので、つい商人宿
に泊るのであるが、六畳位の大部屋に男二人
女五人の七人がザコ寝をするのである。結局
それまでは仲間の和夫と言う一人を相手にし
ていたが物足らず私をさそったらしかった。

一部屋であるので当然着替えなんかも皆の
前でやらねばならなかった。始めは恥かしか
ったが一週間もすれば私も慣れてしまった。
夜は皆で花札をひいたりするのがいつもであ
るが、突然五人の女が私と和夫をとりまいて
馬のりになったりし乍ら「カイボウごっこ」

と称する遊びの相手をさせられた。私が行ってからは、和夫よりも私がめずらしいのか、四回に三回までは、私が選ばれた。そのようなことから、私もだんだんと慣れて、平気で女の子の前でも裸になったし、彼女達も私達男性と向かい合って話をしながらパンティのはきかえもすればアンネの手当もする。私と和夫を比べて、どっちがどうか、臆面もなく女達は、しゃべっている。

私達男性はいつも彼女達のお古のパンティをはかされた。そしてパンティやアンネバンドの洗濯はいつも和夫と私の役目であった。夜は当然のこと乍ら、代る代る女達の相手をするのだけれど、大抵二人か三人を相手にしなければならず二カ月もすると私はグロッキーになりそうだった。そのうちに私にもあきたのか、あまり相手をしなくてもよくなったので、どうにか三年間は彼女達と一緒に行商出来たのである。

大宮市に泊ったのは、三年目の六月から十月までだが、暑い時は帰って来ても部屋がムシ暑くてどうにもならない。扇風機があるわけでもない、皆裸になるより仕方がないのだ。彼女達もスリッパ一枚になると、パンティまで気持が悪いといってぬいでしまう。それで、ひざをたてて腰を下ろし、うちわでパタパタとやるさまは堂々たるもので、ここまできると女性なんてものではなく、何か別の

星の生物がおどそかに私を見下ろしているように思えた。

旅館の風呂はかなり大きかった。湯舟は三人位しか入れないが、流し場は七人全員で使ってもまだ余裕がある。私達はいつも早めに帰って一番風呂に入った。そしていつも上るときには彼女達の誰かが私の肩にのり上ってオシッコをするのだった。湯舟の中でも十分にその圧力を感じることが出来た。また頭を洗っていると、必ずその頭の上のしかかるようにして、誰かがやらかすのだ。そんなことがいつもだったのに、この三年間を通じて直接に彼女達の神酒にあずかったことはなかった。ただ光子ともう一人洋子だけはめったにペーパーを使わないから、洗濯する前にそれを吸いとったことはある。

今、小杉千恵さんの告白を読んで、千恵さんなら、きっと直接下さるのではないかと、ふと、そんな気がする。

羞恥責めについては、こよりで擦ぐるのもいいが、親指と中指を使うといいと思う。又片方の脚を椅子か机に固定して、他の足指を上にあげさせて、蛍光灯のスイッチを引かせるともやってみたい。鏡を下にひいて、その上にしゃがませて用を足させる。それをファインダーに捉えて私はシャッターを切るだろう。更には丸裸のままレインコートを着せて街中を歩き、バスにのせ電車にのせる。ホー

ムではキャッチャーのような姿でしゃがませてみたいと思っている。

男性には、女性の汚したパンティか、バンドをつけさせ、ももまでのゴム長とレインコートだけで歩かせるのもいいと思う。ハンカチの代りにコートのポケットにはパンティの汚れたのを入れておいて人の多いところで顔を拭かせるのだ。出来ればその傍で、パンティでこの人、顔を拭いてる、といった意味のことを大声で言ってみると、もっとも効果的かも知れないが、言う方にも一種の羞恥があって、むづかしいことかもしれない。

ともかく、私はSMのどちらも好きだ。女性に恥かしめをうけるのも、又私が女性に加えることも、共に随喜の中の大随喜と思う。

しかし乍ら、あくまでもプレイであり、相手に対して十分な愛情をもつことがその第一条件である。従って、直接肉体に傷をつけるようなことは私は好まない。責めても、責められてもお互いの愛の中にこそ、その充実感があるのである。その点、千恵さんなどは、責めと言うよりは、陶醉の部だと思う。

千恵さんの「しっぺ返し」に浸れた少女こそ、大の幸せものだと思ひ、むしろその少女に対してジェラシーを感じるくらいである。

(おわり)

連載時代伝奇小説

緋

ひ

縮

ぢり

緬

めん

地

じ

獄

ごく

(第十六回)

白鳥大蔵

苦悩の夜

この時代の日本には、およそ四百四病の薬物が、唐の国から輸入されていた。

まず、万病に効くといわれる人参をはじめとして、胃腸薬の大黄、甘草。

性病薬の山帰来。癩病に効く大楓子。

妊婦のつわりの薬、大腹皮。

歯痛の妙薬、山奈。神経痛の薬、杜仲。

痔の薬の雄黄などは、最も多く輸入されたものである。しかし、需要が多いにもかかわらず、幕府は輸入の制限をしていたので、こ

の時代の人間たちが必要とする薬の量は、まだ不足していた。

その足りない分を補うために、どうしても抜け荷が必要となってくる。つまり、密輸入である。この時代に摘発された抜け荷の商品のうち、最も多いのがこれらの薬であった。

大津屋彦兵衛がとり扱っている抜け荷の品物は、これらの薬に限られていた。

それゆえに、ご禁制の商売ながらも、彦兵衛には一種の使命感があり、誇りのようなものさえあったのだ。

もっとも、彦兵衛が抜け荷に手をだした最大の理由は、やはり利益のためであり、わた

しはこの商売で、多くの江戸市民を病苦から救っている、というような自負や誇りは、その結果において、自然に発生した大義名分であった。

しかし、さすがの大津屋彦兵衛も、この数日間、眠れない夜がつづいた。

——弱ったことになった。どうしたらよいものか。

と、めったにもらしたことのない弱音を心のなかで吐く。

眠れるはずはない。はじめに、娘のお絹とお雪がさらわれ、姉のお絹だけはようやく取りもどしたが、お雪はまだ久六の手中にあっ

て、行方不明になっている。さらに、女房のお静までが誘拐されてしまった。

安否もわからぬうちに、つぎの抜け荷の取り引きの日が、刻々とせまってきた。

唐船が佃島の沖へ着くのは、あと三日後である。それまでに、割り符であるオランダ歌留多の半片を取り返しておかないと、こんどの取り引きはできないのだ。

金額にしても五千両に及ぶ損害だが、長年築きあげてきた大津屋の信用が、このような不始末によって失われるという痛手も、また大きい。まして、取り引きの相手は、唐の国の商人であり、一度失った信用を回復させることはむずかしいのだ。抜け荷の取り引きほど、信用がものを言う商売はない。

——なんとしても、あと三日のあいだに、割り符を取りもどさねば……

あせった彦兵衛は、岡ッ引きの五郎蔵を呼び寄せて、女房と娘の奪還を依頼した。

むろん、五郎蔵には、オランダ歌留多の秘密を話すことはできない。

お静とお雪が監禁されている場所さえわかれば、歌留多のゆくえも当然わかるだろうと彦兵衛は判断したのだ。

しかし、その五郎蔵からの音沙汰も、まだ

ない。立花屋久六は、いったい、どこへ消えてしまったのか。

彦兵衛には、久六がお静とお雪を誘拐していった理由が、よくわかる。みのしろ金を請求し、さらに歌留多の半片を利用して、大津屋の身代をゆするつもりであろう。

ゆすられたら、彦兵衛は、だまって、相手の言いなりに金をだすつもりでいる。

一万両、とふっかけられても、いまの彦兵衛だったら、二つ返事でだすだろう。

女房も、娘も、そして抜け荷の割り符も、彦兵衛にとっては、金銭に代えられない、大切なものばかりである。

金は働けば、また入ってくる。しかし、女房や娘のいのちは、かけがえない。商人としての信用も、ときによっては、いのちと同じくらいに大切だ。

しかし、そのゆすりの要求が、いくら待っても、どこからもこないのだから、彦兵衛は困惑し、懊悩するばかりなのだ。

商人には似合わない豪放な気性で、身代を築きあげてきた彦兵衛だったが、こんどばかりは、眠れない夜がつづいた。

廻米問屋としての仕事のほうは、忠助という実直な番頭の下に、手代、小僧をいれて十

数人が精をだして働いているので、支障はない。

彦兵衛の毎日は、いまのところ、オランダ歌留多をめぐる懊悩だけに占められている。

——もうそろそろ、あの岡ッ引きが、目星をつかんでもいいころなのだが……

黒縄の五郎蔵にたのんで、お静とお雪の行方をさぐらせたのは、あるいは危険だったかもしれない。しかし、いまの彦兵衛の心は、その成果を待つだけなのである。

腐臭の密室

土蔵の下の地下部屋には、八木沢左内とまむしの源次の死体が、まだ残っていた。

隅田川に近い石浜神社裏の草深い目立たない土地に建てられた立花屋久六の別宅の裏庭である。

土蔵の床下をくりぬいて、巧妙につくられた地下部屋は、たとえ役人が踏みこんで屋敷じゅうを調べまわったとしても、発見するとは困難であろう。

二個の死体には、ウジがまっ白にたかってもぞもぞとうごめき、ものすごい腐臭がたちこめている。

土蔵のゆか床がこの地下部屋の入り口にな
っていて、ほかに空気のかよう窓はひとつも
ない。

人目を避けて隠れるには絶好の密室だった
が、死体の腐臭が充満するのは当然だった。
「ひどいにおいだな。これはたまらぬ」

寺尾半九郎が、顔をしかめながらいった。
そして、政にむいて命令した。

「おい、政、この二つの死骸をかたずけて掃
除しろ。土蔵の前に古井戸がある。死骸はそ
こへ投げこんでこい」

気の小さい政は、半分腐ったウジだらけの
死体をみただけで、蒼白になっていた。

「だ、旦那、か、かんにんしておくんなさい
よ。あ、あっしゃ、こんな腐って目玉のとり
けだした死骸なんて、見ただけでもう、胸が
むかむかしてくるんで……」

「いやだというのなら、斬るぞ。斬りたい
か。お前だって、死んでしまえば、こうして
ウジがたかり、肉が腐り、目玉がとろけだし
てくるんだ」

半九郎は、刀の柄に手をかけた。半九郎の
腕を知っている政はふるえあがった。兄弟分
の定がたった一太刀で斬り殺されてから、ま
だ一刻とたっていない。

政の目には、半九郎の姿が厄病神のように
みえてくる。

「やります。やります！」

政の両足の膝は、立ってられないほど、
ふるえている。それでも、どこからか、むし
ろを一枚ひっぱりだしてきて、二個の死体を
包むと、地下部屋から運びだした。

政がかつぎあげたむしろ包みから、灰色の
ウジ虫がぼろぼろとこがり落ちてくる
「ひとまず、休息とするか。久六、どうだ、
傷の痛みは？」

隅のほうに寝ころがっている久六にむかっ
て、半九郎が声をかけた。

立花屋久六、大津屋の女房お静、そして娘
のお雪の三人を、無事に岩松の家から脱出さ
せ、この花屋敷とよばれる別宅の地下部屋ま
でつれこんだ半九郎だった。

お静にとって、この部屋は初めてだったが
お雪はこれで二度目である。恥辱に満ちたお
そろしい記憶が、壁にも、天井にも、柱にも
悪夢のようにこびりついている。

哀れな母娘は、久六とは反対側の壁の隅に
よりかかり、固く抱きあっていた。

「久六、痛みはどうかときいているんだ」
半九郎が、やや声を大きくしていった。

「ああ、だいぶ、よくなった。……それより
も、寺尾さん……」

久六は、お静に突かれた右眼の上を、左手
でおさえながらいった。

よくなつたとは言ったが、それは虚勢で、
久六の体力は、前よりもいっそう弱り、衰え
ていた。ただ、気力だけが、この男を支えて
いた。

「なんだ？」

「とぼけちゃいけねえ。歌留多だ。れいのオ
ラング歌留多を、こっちへ渡してくれ」

久六は、肩をあえがせながらいった。

岩松の家の裏庭の通用口から、駕籠の中に
かつぎこまれ、夢中で逃げてきた久六は、気
にはなりながらも、それを言いだすひまがな
かったのだ。

「そうだ、うっかりしていた。廁の落とし紙
のあいだに、たしかに歌留多はあったぞ。ま
ったく、うまい所へ隠したものだ。いかに
も、きさまらしい。待て、いま渡してやる」

半九郎は、片手で懷中をまさぐった。

久六の左眼が、猫の目のように光って、そ
の半九郎の手もとをみつめた。期待と不安を
半分ずつ秘めて光る久六の片眼である。

「ない。……妙だな。ないぞ」

半九郎は、こんどは両手を使って自分の懷中を調べながら、つぶやいた。

「ないではすまされませんよ、旦那」

久六の声が、凄んだ。猿の干物のようにやせ細った四肢から、無気味な殺氣がほとばしった。

「どこかへ落としたらしい。これは、面倒なことになったな」

と口ではいったが、それほど面倒なこととは思わない半九郎だった。もともと、オランダ歌留多の争奪などに、重要な意味を感じていない半九郎なのだ。

「旦那、まさかあっしを、だます気じゃないでしょうねえ」

久六の声が、ぞっとするほど陰險なひびきを帯びてきた。

「いや、本当に落としたらしい。さっき、岩松の家の裏庭で、岩松の子分をひとり斬ったときに落としたんだ。そうだ、それにちがいない」

「本当ですかい？」

久六の胸底から、どす黒い疑惑が突きあがってくる。

半九郎の釈明を、久六は信じない。この浪人者も、結局はあの歌留多を狙っているのか

と思うと、怒りと絶望に四肢がふるえてくるのだ。

しかし、この腕の立つ用心棒を、いま自分の敵にまわすことはできない。

駕籠にゆられたせい、右腕のつけねの傷口が、また激しく痛みだし、熱がでて胸のあたりがしめつけられるように苦しくなってきた。かんざしで突かれた目も、ずきずきと疼いている。

とにかく、いまは我慢して、この用心棒を自分の側に引き寄せておき、手もとから放さないことだ。こいつを敵にまわしたら、うるさい。久六は、自分で自分に言いきかせた。

歌留多を落としたなんて、子どもだましみてえなこと言やがって、どうせ、てめえの考えていることは、たかが知れている。そのうちに、しっぽをつかまえてやるから、おぼえていやがれ。

眼が無くたって、腕が無くたって、立花屋久六、てめえのような素浪人に、トンビに油揚げをさらわれるような真似をされてたまるけえ。

「まあ、落としたものなら、早くひろってやることだな。あの歌留多をおれの手に渡してくれねえうちは、約束の千両は、とても旦那

に差しあげられねえから、承知してくれ」

残っている片眼で、半九郎をせいっぱい睨みつけながら、久六がいった。その片眼の視力、もうだいぶ弱っている。

「久六、それでは話がちがうぞ。礼金のあと千両は、歌留多とはべつに、お前のからだを無事にここへ運びこんだらくれるという約束ではなかったのか」

半九郎も、やや憤然としていった。

久六は、熱のためにひからびた唇を、無理にねじまげて、せせら笑った。

「あっしはね、そんなお人好しじゃありませんよ、旦那。とにかく歌留多をさがしてきておくんなさい。そのときに、きれいに千両お渡ししますよ。さあ、早く行っておくんなさい。ぐずぐずしていて、だれかにひろわれたら大変だ」

半九郎は、苦笑した。

「しぶといな、久六。おれはお前の、そんなところが好きだ。だが、いまここでおれが怒り、お前を斬ると言ったら、どうする？」

「あたしを斬ったら、千両の金はとれなくなりますよ」

「どうせ、金は、この屋敷のどこかに隠してあるんだろう。おれが自分でさがす」

きよろきよろと周囲をみまわす半九郎に、久六は、口をあけて嘲笑した。

「この屋敷の広さは、旦那もよくご存知のはずだ。ざっと、千二百坪ばかりありますぜ。金はあつしが知恵をしぼって、この千二百坪の中でも、とくにむずかしい場所に埋めてある。旦那がさがすのは勝手だが、この屋敷の中には、地下部屋だって、まだほかにいくつもある。あっちこっちを掘り返したり、壁をひっぺがしたりして、十年ぐらい探したら、出てくるかも知れませんがねえ……」

久六は、ふてぶてしく居なおった。

半九郎は、二の句がつけない。これが死にかけている男の言うことか。半九郎にはこの久六が、本当の化け物のように思えてくるのだ。

「久六、きさまには負けたよ。おれは、もう一度、岩松の家へもどり、本気になって、あの歌留多をさがしてこよう」

しかたなく半九郎は笑ったが、二人のあいだには、救いようのない不信感が、いっそう強く横たわったのだ。

「おっと旦那。出かける前に、そこにいる二人の女を、ふん縛って置いておくんなさい。あつしはこの通りのからだで、いまはなにを

されても動けねえんだ。せつかくの人質を、逃がしちゃ大変だからね」

「おれは、縛るなんて面倒くさいことは嫌いだ。政を置いていくから、そんなことはあの男にやらせろ。あいつは、あれで結構、役に立つ。逃げだしたら、おれが追いかけて行ってぶった斬ると脅してあるから、めったなことで、ここから逃げぬ。臆病な男だから使いやすい。こき使ってやれ」

半九郎は、吐きすてるようにいうと、階段をのぼりはじめた。これ以上しゃべっていると、衝動的にこの男をたたき斬るかもしれないと、自分を怖れたのである。

も だ え 縄

八木沢左内と、まむしの源次の死体を始末した政が、死人よりも青い顔色になってもどってきた。その政へ、待ちかねたように、久六がいった。

「おい、政。そこにいる二人の女を、逃げられねえように縛りあげてくれ。いまこの女に逃げられたら、追いかけることもできねえ。どうしても動けねえように、柱に縛りつけておかなければならねえのさ」

「へい、親分、ごもつともで。……あつしとしても、あんなウジ虫だらけの死骸を運ぶより、こっちのきれいな女を縛る仕事のほうがどれほどいいか、わかりやしねえ」

「無駄口をたたかず、さっさとやれ」

「かしこまりました。あの、縄はどこに？」

「あたりを見まわしてみろ。手ごろなのが、あちこちに散らばっているじゃねえか」

「へい。なるほど、こいつは、おあつらえむきだ」

政は縄をひろうと、お静とお雪母娘の前へそりそりと近寄っていく。

「へへへ……すまねえなあ、お静さん。またおれに縛られてくれ。だけどう、あのときお前さんたちを助けようとした気持ちに、嘘はなかったんだぜ。あのときは本気で、定兄哥といっしょに、お前さんたちを大津屋まで送りどけようと決心したんだ、それがまあ世の中は一寸さきは闇だというけど、定兄哥はあんなにかんたんにバツサリやられてしまふし、岩松親分も殺されちまったと言うし、おれだって、まさかこんなところで、腐った死骸をかついで古井戸の中へすてる仕事をやらせられようとは、夢にも思わなかったんだ……おたがい、不運な身の上だと思って、

あきらめようじゃねえか。なあ、お静さん、わるく思わねえでくれよ」

政は、手にした縄を束にして、お静の目の前で、ぶらんぶらんとふって見せた。

「ま、まっておくれ、政さん」

お静は、隅の壁に背中を押しつけ、思わず逃げた。

お雪は、お静の右肩にとりすがって、政から目をそむけている。二人とも岩松の家から連れだされるときに、あり合わせの着物をきせられている。それだけが、せめてもの救いだった。

「なに、待ってくれだとう……それが駄目なんだよ、お静さん。この久六親分のいうことをきかねえと、こんどはおれがバツサリやられちまうんだ。あの寺尾半九郎という浪人者は、まったく短気でおそろしいやつなんだ。まるで地獄の鬼みてえな野郎だ。おれだって本当はこんな所から逃げてえと思うけど、あの野郎の刀がこわくて、どうしても逃げられねえのさ」

「政さん、いまなら……いまなら逃げられるじゃないか。あたしとお雪をつれて、ここから一緒に逃げておくれよ！」

お静は、必死の思いで哀願した。

「それが駄目なんだよ。おれはどうも、あの半九郎ってやつがこわいんだ。意気地のねえ話だが、まるで蛇に睨まれた蛙みてえに、どうにも動きがとれねえのさ」

「政、なにをぐずぐずしゃべっていやがるんだ。早くふん縛れ！」

いらいらして、久六がどなった。

政は首をすくめ、久六にふりむいて、ぺこりと頭をさげた。

「観念するんだな、お静さん。さあ、両手を背中にまわしてもらおうか」

政は、縄をしごきながらいった。久六が裸にして縛れ、と命令しなかったのが、政には不満だった。

だが、いまは勝手なことはできない。政は左手でお静の肩さきをつかんだ。

「お願いです、もう、乱暴なことはやめて」

お静の肩はふるえていた。その感触が政にはこころよかった。

「お前さんがいやなら、お嬢さんのほうから先に縛ってもいいんだぜ。おれはどっちが先でもかまわねえんだ。お雪のほうなら、なんにも言わずに、だまっておれに縛られるぜ。なにしろ、お雪とおれとは、もう他人じゃねえんだからなあ。うふふふ……」

政は、岩松の家の土蔵の中でのことを言っているのだ。その言葉に、お雪は耳たぶをまっ赤に染めてうなだれた。

お静は、観念した。政の手を借りて逃げることは、もうあきらめなければならない。

こうなったら、たとえすこしの間でも、お雪の苦痛を先へのばしてやることだ。それが彦兵衛に対するお静の義理で、お雪に対する継母としての、せめてもの愛情だった。

「政さん、どうしても縛るといふのなら、あたしから先に縛っておくんなさい」

お静は、政に背中をむけると、自分から両手を腰のうしろにまわしたのだ。

「だめだよ。もっと手首をかさねて、上のほうへあげるんだ」

かさにかかって、政はいった。

お静は歯をくいしばって、そのとおりにした。自然に首がうなだれた。

背中がかさなっている細い白い手首に、政は、いきなり縄を巻きつけた。

お静の肩が、びくつとふるえた。悪寒が、手足の指さきまで走りぬける。このおぞましい感触は、いくどくり返されても、慣れるということはない。お静は、声をあげて、わあッと泣きだしたいのを、奥歯を噛んでこらえ

る。

手首をひとつに縛りつけた政の縄は、その手首を一度高く上へ吊りあげておいてから、つぎにお静の胸を、きりきりと締めあげた。

「う、うううッ」

お静は、上半身を前にかがめて思わずうめいた。くやし涙があふれた。

乳房の上下に縄を巻きつけ、政はその縄を力まかせに引きしぼってくいこませている。

「わるく思わねえでくれよ、お静さん。おれはこんなことはしたくねえんだけどよう」

そんなことを言いながら、久六の目を盗んで、むっちりと隆起しているお静のやわらかいところへ手をのばし、すばやく楽しんでいる政である。

「くッ、くくッ！」

「お静はその手をふり払うように、からだを極端に前へ折ってもだえる。そのもだえる胸に、縄は生きている蛇のように力を増して、くびれるほど冷酷にくだいこんだ。」

もがけばもがくほど縄はきびしく責めつけてくるということを知らないお静ではなかったが、いまはもう嫌悪と苦痛の本能だけだった。

吊り地獄

お静を縛り終えると、政の目がこんどはお雪にむいた。

「お雪、こんどはお前の番だぜ。おっかさんを見習って、さあ、おとなしく両手を背中にまわすんだ。ぐずぐずしていると、痛い目を見るぜ。ここは地獄の地下部屋だ。泣こうがわめこうがお前の勝手だが、おれの言う通りにしたほうが、身のためだぜ」

お雪は、肩をすくませておびえた。

この男が、岩松の家の土蔵の中で、自分のからだに、どんなに苛酷で恥知らずな折檻を加えたか、忘れようとしても、もう一生忘れることはできない。

「かんにんして。お願いです。もう縛るのだけは、かんにんして……」

お雪は、絹糸のように細い声で哀願した。

この男は、自分を縛ったあとで、かならずまた、おそろしい、身の毛もよだつような悪戯をはじめにきまっているのだ。

「縛るのだけは、もう、もう、やめて、かんにんして……」

もう半分、泣いているお雪だった。

政は、そのお雪の細くて白い衿首をみおろしながら、残忍な微笑をうかべた。ついさっき、半九郎に脅されて縮みあがったことなどケロリと忘れて、別人のように傲慢な顔つきになっている。

「おれは、かんにんしてやってもいいだけだよ、そこにいる久六親分が、どうしてもお前を縛れと言うんだ。まあ、あきらめることだな。お前のおっかさんだって、これ、この通り、両手をうしろにまわして、素直に縛られたじゃねえか」

政は、べつの縄をつかみあげると、もっともらしく、お雪の顔の前で、ぎゅうッとしていた。

お雪は、泣きそうな顔になって、目をとじた。いくら哀願してみたところで、すべては無駄だということを、この娘はもう知っている。政のいうことは、その意味では正しいのだ。こうなったら、もう縛られるより、しかたがないのだ。

お雪は、おずおずと両手を前にだし、手首をかさねた。

「おいおい、ふざけるんじゃない。前で縛るんじゃないよ。手はうしろへまわすんだ。前で手を縛ったところで、口を使えばすぐ解け

ちまうじゃねえか。やい、お雪、おめえ、おれをだまして逃げる気か。ふてえアマだ。そうはいかねえぞ。さあ、背中へ手をまわすんだ。さっさとまわすんだ。ちくしょう、へたな考えをおこしやがると、俵くりに締めあげてやるぞ」

政に手首をつかまされると、お雪は早くも小さな悲鳴をあげた。

「ごめんなさい、ごめんなさい。あなたの言うことなら、なんでもききますから、もう、

手を背中に縛るのだけは、かんにんして！」

お雪の目から、涙がぼろぼろとこぼれた。

「かわいいなあ。おめえはまったく、かわいい娘だぜ」

政の唇はうっとりひとひらかれ、目じりはだらしなくさがって、可憐にふるえるお雪の白い首すじを見おろしている。

「だけど、しかたがねえ。久六親分の命令なんだ」

いいながら、政はお雪の肩に手をかけ、強

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表

したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたものの、事実の裏付のあるものが大切だと思えます。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

引に背中を自分の前にむけると、左右の腕をねじあげて、縄を手首に巻きつけた。

お雪の細いからだは、たちまちうしろ手に縛りあげられて、痛々しい姿になる。

二人を縛り終えたとき久六が、政のうしろから首をのばしていった。

「おい、政。おめえも知っているだろうが、このお静は大津屋彦兵衛の後妻で、お雪は死んだ先妻の娘だ。つまり、お静とお雪は、実の母娘じゃねえんだ。それなのに、彦兵衛に妙に義理立てしやがって、本当の娘みたいにお雪をかわいがる。おれはどうも、それがしやくにさわってならねえんだ。そこで、おれは考えた。この母娘が、たがいに憎み合うような折檻の方法をな。われながら、こいつはいい思いつきだぜ」

「へえ？」

「上を見る。この部屋の天井には、ふとい鉤がぶちこんである。お静とお雪の縄じりをつないで、その縄のまん中あたりを、あの鉤にひっかけるんだ。いいか、政、おれのねらいがわかるか。この二人の女を半吊りの形に吊りあげて、片方が楽になると相手が悲鳴をあげるように細工をするんだ。わかったか。わかったら、やってみろ」

久六は、自分の思いつきに満足したような顔で、政に命令した。

「なるほど、わかりました。こいつはおもしろそうだ」

政は、すぐに納得してうなずいた。こういう仕事となると、妙に頭の回転がよくなる男なのだ。

この地下部屋の天井には、檜材の梁が縦横に張りわたされてあり、そこに数本の鉄製の鉤が打ちこまれてある。久六は、それを利用しろというのだ。

政は、天井の高さや、女の背丈を目で計りながら、二人の女のうしろ手の縄じりをつなぎ合わせた。縄じりは、合わせて六尺ほどの長さになった。

踏み台を持ってくると、その縄のまん中あたりを、天井の鉤へひっつけたのだ。見世物師やレッケの岩松の子分だった男だけに、こういう仕事はいかにも手慣れていて、すこしのソツもなかった。

「ああッ！」

二人の女のからだは縄に吊られ、悲鳴をあげて同時に浮きあがった。

母と娘が背中合わせになって、天井から吊り下げられた形になった。お静をうしろ手に

縛った縄は、背中から上へのびて、天井の鉤をわたり、そこから下へおりて、お雪を縛った縄の、うしろ手の手首のところまでつながっているのだ。

政の目算に、くるいはなかった。

縄に吊られて立ちあがったお静の足は、床を踏んでいたが、お静よりも体重の軽いお雪は、両足のつまさきが、床の上にとどくか、とどかない、すれすれまで縄に吊られて浮きあがったのだ。

「ああ、痛い、痛いッ、おっかさん！」

縛られた手首から腕を逆にたかだかと吊られ、さらに、つまさき立ちになった苦痛と恐怖に、お雪はたちまち悲鳴をあげた。

「お雪ちゃん！」

お静は、背後をふりかえって愕然とした。

娘のお雪が、自分とまったく同じ姿で縛られ、しかも、足のつまさきすれすれまで吊られてのびあがり、痛烈な泣き声をあげているのだ。そして、娘のからだを吊りあげているのは、まぎれもなく自分なのだ。

お静は、あわてて膝をそろえ、自分がつまさき立ちになった。

すると、天井の鉤にわたされている縄がゆるんで、お雪のからだは下へおり、足のさき

がようやく床にとどくのだった。女ざかりの自分の肉体の重みよりも、十六歳のお雪のほうが軽いのは当然だった。

この意地の悪い仕掛けに気づいたとき、お静は慄然とした。娘の苦痛をやわらげようとすると、こんどは自分の身に、たちまち激しい苦痛が襲いかかってくるのだ。

「ああ、お雪ちゃん！」

つまさき立ちのつらさに耐えきれず、お静は踵を床につけた。すると、たちまちお静の背後で、

「ひいッ！」

という声があがって、お雪のからだは吊りあがるのだ。体重のすべてが一本の縄にかかり、胸や腕にかかっている縄が、非情な勢いで肉のなかへ、ぎしぎしとくいこんでくる。

お静が、ちょっとでも膝の力をゆるめて、楽をしようと思うと、お雪の両足のつまさきは、完全に床から離れ、宙吊りになってしまふのだった。

「鬼！……外道！」

お静は、久六のほうへ顔をねじむけて、火のような呼吸とともに、ののしった。

—(つづく)—



告

白

私の最近のゴムプレイ

梅川幸子

初夏のむし暑い、じっとしていても汗ばむきょうこのごろ、ゴム装束に身を固めてゴムプレイに耽溺する喜びは、また格別でございます。私は最近、お手伝いさんを雇いましてゴムプレイの味を覚えさせ、二人してSMプレイを楽しんでおります。

去年の春、田舎の中学を出てから町工場的女工をしていたれい子をお手伝いさんに雇ったのはこの四月中ごろ、桜が盛りを過ぎたころでした。今まで一人暮らしの気楽さで、誰にも見られず、お部屋の中でゴム装束になって秘密のプレイを楽しんでいたのですが、れい子が来たために当分プレイはできなくなりました。

そして何とかして、れい子をゴムマニヤに調教し、二人で思う存分プレイが楽しめたら……と考える日が何日か続きました。山ほど

持っているゴム引雨具をタンスの奥に隠していつになったらまた身にまとうことができるかしら、と思う切ない毎日でした。れい子の外出中、私はゴム引雨具をそっととり出し、特有のにおいをかいだり頬ずりをしたりしました。けれども私は、れい子に私がゴムマニヤであることを、おくびにも出しませんでしたし、れい子も又、夢にも思っていないようでした。

そうした日が続いたある日の午後、雨になりました。私は雨の音を聞いていると、ゴムプレイを中断してきた辛抱も限界にきていることを知りました。そして、きょうこそは、と決心して、夜になったら、先ずれい子にゴム引雨具を着せて調教しようと考えました。私は、れい子に酒屋さんへ行ってビールを六本、買ってくるように命じました。

「アラ、ずい分、雨が降っているわね。一寸待って」

と、買物籠を下げて玄関に佇んでいるれい子を持たせて奥の間にいき、タンスの底をかきまわして「何を着せてやろうかしら」と、あれこれ選んだあげく、つぎの三つの品を、とり出しました。

ハイレインII婦人用ゴム製ブーツ。普通の婦人用ゴム長よりも、いく分、長目で、爪先もスッキリと細く、かがとも高く、はくと膝下まで隠れ、非常にスマートにできていて魅惑的なブーツです。同じ商品名で、あちこちのメーカーから出ていますが、アサヒゴムのハイレインがいちばん長目でスマートです。色は赤、黒、白の三種類で、サイズは、いちばん大きな二五センチ(一〇・五文)を各色一足ずつ、計三足持っています。この中から

赤いを選びました。

婦人用ゴム引レインコートもう、くどくど書く必要はないでしょう。色は赤いハイレインに合わせて、ピンク色を出しました。サイズは特大。(普通サイズより着丈が六センチ長い)

男物ゴム引マントⅡ自転車に乗った男の人が着ていた黒いゴム引きの防水マントで、裏はゴワゴワした木綿地になっています。着丈は一メートル二十五センチの特大。

これらの品を抱えてきて、玄関に佇んでいるれい子の前に、ドサリと音を立てておくと「これを、おはきなさい」と言っ、赤いハイレインをさし出しました。

「まあ、いいブーツですわね」と、れい子は喜び、いそいそと両足にはくと「傘は、どこにありますの？」と、たずねました。

私は含み笑いをしながら「傘は全部こわれちゃって、満足なのがないのよ。困ったわね……」と言いながら「これを着てお行き」と言っ、ピンク色のゴム引レインコートを着せてやりました。

「アラ、このレインコート、ゴムの合羽ですか？」と、珍しそうに眺めながらボタンをはめ、腰のベルトを結びはじめました。

何しろ、十年以上も前に流行したレインコートだけに、若いれい子が珍しがるのも無理もなく、しかも特大サイズ(私の持っている

ゴム引雨具は全部、特大)ですので、引きずるように長く、膝下をおおい隠し、袖口も指先まで隠しています。私は、れい子がゴム引レインコートを着るのを舐めるように、しげしげと見つめていました。ほんとうに最近では、若い娘さんがこんなレインコートを着ているのを、めったに見ることができませんから、皆さんもご同感だと思っています。

れい子はフードをすっぽりとかぶり、そのまま買物籠を下げて出て行こうとしました。

「ああ、お待ち！ 貴女それじゃ、だめじゃないのヨ。手に持った荷物が濡れるじゃないの。しよのない子ね。貴女はレインコート着てブーツはいてりゃいいけど、荷物が濡れちゃうわヨ」

と意地悪く、呼びとめました。

「だって、傘はないんですよ。傘がないから私、このレインコート着たんですよ」

「そうね、じゃそのまま行っちゃい」

「でも……こんなダブダブのレインコートじゃ恥かしいですわ」

「じゃ、上からこれを着てお行き。すっぽり隠れて恥かしくないでしょう？ 手に持った荷物も濡れないし」

私は、れい子の肩から男物のゴム引マントを、すっぽりとかけてやりました。れい子これがまさかマントだとは知らず、しきりに手を伸して袖をさがしているので、「これは

マントよ」と教えてやりました。そしてフードをかぶらせ、フードについているマスクをはめボタンをしめると、世にもこっけいな姿になりました。

世の男性よ、奥さんや恋人を、こんな恰好にしてごらんない。

若い娘が流行遅れのゴム引レインコートをまとい、フードを目深にかぶり、その上から引きずるような男物のゴム引マントを着ているのですもの。

れい子の全身は、頭からスッポリと大き過ぎるぐらゐのガバガバとしたゴム引マントに包まれ、フードのマスクで鼻から下は隠れ、わずかにのぞいた、まつ毛の長い、おどおどした目と、裾からチョッピリ見える赤いハイレインの爪先が、若い娘であることを示しています。

「早く行っちゃい！」

明るいお部屋から真暗なドシャ降りの戸外へ出た、れい子は後も振り向かず、歩くたびにバタバタとゴム引マントの裾を踏みつけ、うつ向き加減に雨に打たれ、ズルズルと滑る泥んこ道に足をとられながら、泥水をビチャビチャ跳ねて出て行きました。

それから三十分後、れい子は帰ってきました。私は急いで玄関へ出ました。

れい子の黒いゴム引マントは雨に濡れてテクテクと光り、フードのひさしから、したた

る、しずくと汗で顔も光っています。

「ママさん（れい子は母娘ほど年の違う私をこう呼んでいます）はい」

と言って、ゴム引マントの中から買物籠に入ったビールびん六本を出すと、先ずマントのマスクを外してフードをとり、ボタンを外して脱ぎはじめました。私は若い娘の雨で濡れたゴムマント姿を、心ゆくまで一挙手一投足まで喰い入るように眺めるのでした。

「ずい分、濡れたわね。ブーツは玄関に脱いでいていいわ。マントとレインコートは、お風呂場へ持って行って、乾いた雑巾でよく拭いて、ぶら下げといてね」

れい子が雨具を抱えて、お風呂場へ行ったあとには、濡れてテカテカ光った赤いハイレインが土間にニュッと立っています。つい今しがたまで素足ではいていた、れい子の汗ばんだ体臭を、ほのかににおわせて……。

私は思わず片方を両手で宝物でも持つように、そろそろと持ち上げ、ポッカリと大きな口を開いているところへ顔を近づけました。そして、それにちょうどマスクをはめるように顔を当てがい、鼻と口をその中に隠しました。汗を含んだ、ゴム靴特有の裏布のにおいとゴムのにおいに、うっとりとなり、息を吸い込むとハイレイン全体が内側に凹み、息を吐くと逆に、はち切れそうにふくらむハイレイン。しばらく続けているうちに恍惚となり

顔はじつとりと汗ばみ、えもいわれぬにおいと快感で、身も心も天国に遊ぶ思いでした。

「ママさん」と、お風呂場から、雨具の後片づけを終えた、れい子が近づいてくると、ハッとして顔に押しつけていたハイレインの片方を玄関の地べたに下ろし、そ知らぬ顔をして、とりつくろうのと同時でした。

何くわぬ顔でハイレインを置いた私は、二人して夕食の用意にかかりました。

夕食後、れい子にゴム引雨具をまとった感想を聞きますと、ゴム引レインコートはゴムがヒヤリとして気持がいい。また、だんだん汗ばんできて何ともいえない快感がある。ほんとうにゴムマントは、すてきだった。外国映画に出てくる、魔法使いか尼さんか、お姫様みたいだった……等々、ハキハキと、のべるのでした。

そして私は、れい子に、私がゴムマニヤであること、ゴム衣裳にくるまって色々な秘密のプレイに身も心も歓喜に悶えることなどを語りました。れい子は驚き、笑い、感心して熱心に聞いていましたが、聞き終ると目を据えて真面目な顔になり、

「ママさん、私も一緒にプレイを楽しみたいですわ。そして私を存分に虐めて頂戴。私もママさんのお手伝いをしますわ」

といって、私の手を握るのでした。

「それじゃ、早速はじめようじゃないの。よ

くわかってくれたわね」

と私は、れい子に感謝して、ダンスの中から、あるだけのゴム雨具を畳の上に出して、山とつみ上げました。れい子は、いそいそと自分で腰のベルトを結ぶとフードをかぶり、三面鏡に自分の姿を写して色々としなをつくらせて見とれています。

「これをはくのよ」と私は、田植仕事のお百姓さんがはいているゴム長をはかせました。このゴム長は表裏とも総ゴム製の、しなやかなもので、はくと腰まで届き、底は平たく、つま先は足袋のように二つに割れています。その上から黒い男物のゴム合羽（裏は茶色）を着せました。そして両手には肩まで届く大きな茶色のゴム手袋という、私のゴムプレイ基本の姿にさせました。何といっても特大の男物ゴム合羽は大きく、フードをかぶると目が隠れそうで、裾が畳につくほどです。れい子は腰のベルトをキリリと結び、フードについているマスク（男物ゴム合羽、ゴム引マントは、すべてフードに鼻と口を隠すマスク・ベルトがついています）のボタンを、はめようとしていますので、私は「ああ、お待ち」といって、真紅のレインコートを収めてあった同色の同生地（女性用ゴム引レインコート）には必ず付属しています）を裏返してゴムの部分を表にし、れい子の顔にあてがい、ゴム製マスクをはめ、そしてゴム合羽のフードの

マスクのボタンをとめました。そして、その上から、先ほどと同じように男物ゴム引マントをすっぽりと着せ、フードをかぶせフードのマスクのボタンをとめると、先ずは出来上りです。

れい子は、鼻と口をおおうゴムマスクに激しい息づかいをしながら、三面鏡に写った自分の姿に見とれています。

「じゃあ、私も貴女と同じ恰好するわね」

と私も、れい子を見ている前で同じゴム引雨具をまとい、数分後には二人のゴム引マント姿が誕生しました。数えきれないぐらいのゴム引雨具を集めていますので、一人で一日に何回も、そして二人でプレイを楽しむにも何の不自由もないわけです。

「先ず、ダンスをするのよ、わかる？」

私は、れい子に顔を寄せて、女性が独りでひそかに快楽にふける秘密の楽しみをするように命じました。たちまち、れい子は真赤に顔を染めて「イヤイヤ」と首を振りました。「何いってるのヨ。それじゃ、ゴムプレイの味がわからないわよ。私が、お手本を見せるから、貴女も一緒にやってごらん。貴女だって経験あるでしょ？　ないとは、いわせないわヨ。ほら……」

私は、れい子と向かい合って股を開いて立ち、はだかり、上体を少し前にかがめ、膝を曲げました。すると、れい子も次第に私の真似

をしています。

それから二人は、ゴム引マントにくるまった体を激しくけいれんさせ、だんだんと崩れるように畳の上にへなへなと坐りこみ、横に寝てゴムマスクの下で、あらぬたわけたことを口走り、うめきながら快楽の淵に沈んで行きました。二人とも全身汗にまみれ、素肌に着たゴム引レインコートは、ぐっしりとまとわりつき、ゴム合羽は汗とゴムのにおいにむせかえり、ゴム手袋とゴム長の中は、汗がポタポタと流れて溜っていききました。

「つぎは何をしようかしら」と思いながら、横たわっているれい子をそのままにして起き上がると、浣腸用具一式とコーラの空びんを用意しました。これからトイレ（洋式）に連れ込んでアヌ責めと、浣腸プレイをしようというわけです。

ゴム引マントを脱がせて、合羽姿のれい子を後手に縛り、トイレに連れて行って便器に跨らせました。便器に坐らせると、その上からまたゴム引マントを着せ、フードをかぶらせると、便器に坐ったぶざまな姿が、きれいに隠れました。私ですか？　私は、さっきのダンスの時のゴム引マント姿のままでございます。ゴム装束で後手に縛られ、大きなゴム引マントを着せられて便器に跨ってうなだれている、れい子の後に立った私は、ゴム手袋をはめた手で存分に責めさいなんでやりま

した。もぞもぞとゴム引マントが異様に揺れて……。

「さあ、お風呂に入ってキレイにしましょうね」

今度は、れい子をお風呂場へ引き立てて行きました。後手に縛った手をほいてやり、ゴム引マント姿の二人はお風呂場へ行き、よい加減に沸いているお湯に入りました。

異様な姿の二人の女が、深夜の薄あかりで入浴するさまを、ご想像下さいませ。

首までお湯につかって、マスクを外し（フードはかぶったままです）ゴムくさいお湯を口に含んで口うつしに飲ませあったり、お湯の中でお互いに抱きあって、入浴のひとつきを過ごすのでした。

お風呂から上がると外出です。外出は雨の降る夜中に、泥沼の中でダンスをするというゴムプレイの極致ともいえるものでございます。着れるだけゴム引雨具を着込む——思っただけでも楽しいことじゃございません？

お風呂から上がると、濡れたゴム引雨具を脱ぎ捨て体を拭き、ひと休みしてから二人はつぎのように身を固めるのでした。

一、婦人用ゴム引レインコートを着る。（フードをかぶる）

二、男物ゴム合羽（短）ゴム引ズボン、どちらも総ゴム製を前後、逆につける。

三、腰まで届く田植用ゴム長、お台所で使う

ゴム手袋をつける。

四、漁師がはく胸まで隠れるゴム長をはく。

(腰のベルトを結ぶ)

五、ゴム前掛けを二枚。一枚はお尻を覆い、一枚は前につける。

六、男物ゴム合羽(長)を前後逆につける。

七、男物ゴム合羽(長)を着て、フードをかぶる。

八、肩まで届くゴム手袋をはめる。

九、男物ゴム引マントを着て、フードをかぶる。ただし、フードは特別大きく別に作ったもので、マスクの部分が首まで隠すよう巾広く作り、ボタン三つで止める。

二人は、お互いの異様な姿に笑いこけながら、ゴム引雨具を重ね着するのでした。

以下、簡単にその後のプレイを書きましよう。

一、ゴム引マントを脱がせて、泥沼の中に後

手に縛って正座させる。胸か、あるいは首ま

で泥につかっているの、うっかり体を動か

すと、倒れて起き上がれない。全身をしめつ

ける泥の圧力と噴き出す汗。足はしびれ、尿意を催す苦しさ。フードを打つ激しい雨の音

は、耳をつんざくように感じ、フードの縁か

ら滴れるしずくは、容赦なく顔を濡らす。

二、後手に縛った手首と片足から縄を長くの

ばし、岸の上から泥沼の中を、あちこち歩かせる。時々、縄を意地悪く引っばると、ぶざまな恰好で泥沼の中に倒れ、沈み、泥まみれになって起き上がり、命じられたままに歩き廻る。

三、岸の浅いところに四つん這いにさせ、その上にゴム引マント姿で女王様のようにどっかりと跨り、あちこち歩かせる。馬は、女王様を乗せて、首がようやく出るぐらいの深さのところを、息も絶え絶えに歩きまわる。

天星社刊

△限定版グラビア写真集▽

在庫案内

山原清子『刺青の魅力を探ぐる』一部一〇〇〇円(送共)略号「美7」

◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集『女王様に飼育される日々』一部一〇五〇円(送共)略号「M特」

◎M男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のかずかずを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

四、泥沼のプレイが終ったら、きれいな水の

流れる川に入って体をゆすって泥を落とす。

冷たい水は、何重にも重ね着したゴム引雨具と水中胴長靴をしみとおすようで、泥沼とは違った水圧が体をしめつける。

水中胴長靴をはいて何重にもゴム引雨具を着ているのですから、じかに泥沼の水が中に入

入ることはありません。又、たとえ少しぐらいの水が入ったとしても、水中胴長靴の腰の

ベルトをきつくしめていますと腰から上にだけ水がたまり足許の方には流れ込みません。

もし、腰のベルトがゆるくて足許の方に水が溜りますと、両足がまるで鉛のように重く感じ、動きがとれにくくなります。マニヤの方

で水中胴長靴を使ってプレイをなさいますときは、私達のように何枚もゴム引雨具を重ね

着して腰のベルトを強く結んで下さいませ。また泥沼や池、川は、一番深いところで、立

って顔の出るぐらいのところをお探しになつてからになさいませんと危険でございます。

五、帰宅してお風呂に入り、二人とも首までお湯につかって、お湯の中で一枚一枚着ているものを脱いでゆく。そして、心ゆくまでお湯の中で接吻、抱擁ETC。

六、就寝。素肌ゴム引レインコートをまとい、両手にお台所で使うゴム手袋をはめ、田植用のゴム長(腰まで届くもの)をはく。

以上、私とれい子のプレイを簡単に申し上げます。



田宮 虎彦氏

「鷲」

慶長八年十一月十一日夜亥の下刻、その春二月源氏の長者として征夷大將軍の職をおそい名実ともに天下人となりおおせた家康を、晴れの上洛の途に迎えていた遠江国掛川城の大手門内、千年杉根方で、城主松平隠岐守定勝の嫡子、遠江守定吉が腹かき切って果てた。

「愛のかたみ」「足摺岬」「絵本」「菊坂」などの名作で、その豊饒な詩情と冷徹な知性に恵まれた現代性を謳われ、反面、「落城」

文

芸

切

腹

史

殉

死

篇

(二)

中

康

弘

通

「霧の中」など、一連の歴史小説で、その抑えた筆致がかえって生み出す深い余韻をもつて武士道の悲壮美を描く田宮虎彦氏の「鷲」は、十九才の若殿が切腹を決行するに至った経緯と、彼に殉じて追腹を切る人人の物語である。

定吉の切腹は、その昼、家康を迎えた千浜の砂丘において、一羽のだいさぎを射落しかえって家康の叱責を蒙ったからである。

定吉は、「万一射損じたらば弓矢の恥辱」と罵る家康の一言を耳にしたとき、翌未明かならず家康が通る千年杉の根方で、腹かき切って果てている己れの姿を思い浮かべた。

小春日が西風に合わせて、天守山の老松に

風音をわびしく聞きながら定吉は、特にその夜の宿直として残した、氣に入りの近習、星野武右衛門、川上泰助、佐々木謹之介に「生命をくれ」と云いつつ涙を落とした。「ありがたき仕合わせ」と覚悟を告げる三人に衣服を与えたのち、定吉は千年杉の根方におもむいた。

そこで主従四人が腹を切ったが、定吉は家康から拝領の脇差を避け、義助銘の先反の短刀を左の腹に突き立て、臍の下まで引いたとき、武右衛門の介錯を受けた。定吉の首は眼をカッと見ひらいたまま、杉の根方に白絹を敷いておかれた。次いで佐々木謹之介十九才川上泰助十七才が割腹した。星野武右衛門二

十三才だけは短刀を使わず、三人を介錯した美濃兼次、二尺六寸の業もので腹を十文字にかき切り、返す刃で咽喉を左から右へ突き抜いて果てた。彼らの死貌はいずれも両眼を見ひらき、微笑しているように見えた。

それより半刻先に、定吉の祖父から拝領の栗田口国広で切腹した附家老久松対馬は、定吉の切腹を予想し、諫止しようとしてのものであった。

五十六才の対馬の腹にはまだ老いは弱おちていず、脂腹であった。対馬は筒反の短刀を見事に左腹につきたてた。白い膩がにじみ出たのを、懷紙で拭いとるようにながら、その短刀を右にひき、鳩尾まではねあげた。五郎兵衛がその時、対馬の首をおとした。

この家臣市村五郎兵衛も、後刻対馬の諫死が空しかったことを知るなり、直ちに割腹して対馬に殉じた。

家康が定吉を罵ったのは、単純に突きつめれば老いの焦りであった。二十数年の昔、武田勢の拠点高天神の城が陥ちた朝、千浜の砂丘を点点と血ぬって、腹かき切っている武田勢の姿を、家康はそののち合戦に勝つたびに思い出していた。

そのとき三十代の壮気が溢れていた己れの今は六十二才となっていることに、家康は、ゆえ知れぬ焦りを覚えていた。千浜の砂丘にだいさぎを見ながら、家康は内心の焦りと静かに闘っていた。その焦りを怒りに変えたのが、静謐を破った定吉の一とこと、「弓を持て」であった。家康にとって、定吉を賞めることなど思いもよらなかったのである。

是より近習十八名のうち、残った十五名が次々と追腹を切った。

最年長の浅井治兵衛二十八才は、翌朝登城のとき様子を察し、すぐ菩提所に入って切腹した。

久松外記二十才、同じく掃部十八才、河村三右衛門二十才、内田長左衛門十九才、近藤頼輔二十二才は、その夜、定吉の遺骸が茶毘に附せられた松林の傍で腹を切った。火が木の間がくれにチロチロと見える暇である。

外記と掃部は定吉の復讐兄弟、三右衛門は小田原の落人で、当時七才だったのを定勝の家来が拾いあげ、定勝が定吉の遊び相手に選んだのだった。

松尾館の広間を出るとき、

「お情けをいただいておらねばおのれは七つの時に死んでいたものを」

と呟いた。それを聞いて忠左衛門は、

「おのれは曾祖父の曾祖父からお情けをいただいておるわ」

といった。頼輔は星野武右衛門と親しかったので、彼の死を知ると己れも生きて甲斐なしと観念した。むしろ武右衛門への追腹と思った。

十二日の夜、野村三之丞十八才、石川左近十九才が月明の千浜で切腹した。

二人は向かいあって腹を切っていた。

共に左腹に脇差をつきたて、真一文字に右にひいて、鳩尾まで見事にはねあげてあった。そして、お互いが互いの心の臓を抉りあっていた。吹きあれた風に砂が二人の傷口を埋めていたので、そんな死屍がさほど見苦しくなかった。

十九日の夜、冷雨にまぎれて城に入った瀬戸格之介二十才、関沢準平十八才、小笠原源司十七才が千年杉の根方で切腹した。

二十日には胸を病んでいた鶴見左兵衛十八才が、咯血の身を喜んで切腹した。永くない生命と観念した彼にとって、この追腹は死華の機会であつたろう。その父権兵衛は、「だいさぎに追腹にも及ぶまい」といったのが知れて、所払いになった。

二十一日には原玄蕃二十七才が切腹した。玄蕃の腹の切りようは定吉の追腹を切ったもののうち、際立って見事な切りようであった。

切腹には介錯のないのが古法である。玄蕃は古法どおり、介錯をこわって己れ一人で十文字に切った。

先ず先反の短刀を左の腹に突立て、真一文字に引きまわし、その刀を引きぬいて取直し、鳴尾に刃を下にむけて突立て柄を逆手に持ち、仰むけに手を持直して押しかえし、大剛の力にまかせて柄頭を握って下へ押しさげ、臍の下一寸五分のところまで豎に切りさげた。

そして、再び刀をぬいて、心の臓につきたてて果てた。

傷口をはみ出た腸から、前夜、夜を徹して飲んだ酒がほとばしるように匂いを放っていた。

追腹を、「埒もない意地立てよ」と玄蕃と言いかわしていた横川市兵衛も、玄蕃の追腹を聞くと、彼同様に鳥を射ちに行き、才の数だけだ・い・さ・ぎを射落してから、十二月の三日に腹を切った。

近習のうち、もっとも疎んじられていた小

野与十郎は、その夜に失踪した。切腹しなかったのは彼ひとり、翌朝、定吉の室、おとわの方の侍女がひとり自害したのが、彼に係があると取沙汰された。十一日になると、御鷹方二人、御馬下衆一人が追腹を切った。元和年間に至って、定吉の墓標が建てられた。それには、為白照院遠州大守甲天英額居士とある。

家康はすでに没していた。

「鷲」は是だけの物語であるが、武士道の意気地と倫理感の交錯するなかに、無意味と知りつつみずから死に就く人人を、非情簡潔を極わめた筆致で描く格調の高さは、鷗外の、「阿部一族」以来と云ってよいであろう。殊に、切腹の作法が種種の形態で描かれてゐるのは興味が深い。

滝口 康彦氏

「高 柳 父子」

天山に雪もよう延宝七年十二月、小城藩主鍋島加賀守直能は垂死の床にあった。

君側に侍る何びとも口を聞かぬなかで、近習の一人が、

「殿……。高柳外記、追腹つかまつりと

う存じまする……」
昂奮し青ざめていた。

追腹は天下の御法度なるぞ、と老臣どもが声を励ましたとき、外記は一座を見廻すと、

「大不覚人の、父高柳織部に代って、追腹つかまつりたいとは、外記が積年の志なにとぞ、お聞き届け下さいますよう……」

町重ななかに冷然たるものを潜めて云う。
今年二十九才の外記は直能の近習であったが、胸を患って致仕し、ここ四年ほど、寝たきり起きたりの生活が続いていた。はげしい気性を忘れたように、おだやかに病を養っていた外記が、友の中小路八弥が昨夕、直能危篤の知らせをもたらしたとき、見る見る蒼白い顔に血の色を上らせ、喜悅の表情を見せたのであった。そして今日、病軀を推して彼は登城したのである。

「織部の武勇は家中の者みな承知のことそれを卑怯みれんと誰が申そうか。しかも、祥光院様御逝去ののち、百力日を待って、見事に追腹いたしたものを……」
鍋島兵部が諭すように云うのへ、外記は虚ろな笑いで応えた。人人は外記の考えに気づいて不安を覚えはじめた。

「父の織部は、詰め腹を切らされた。寄つてたかつて詰め腹を切らされた。兵部殿……。その父の不覚、父の恥辱を、外記はすすぎたいのでございます。よしや公儀のお咎めがあらうと、お家がどうなるうと、外記は必ず追腹つかまつりますぞ。」

苦しい咳をおさめて外記は、ずばりと云つてのけた。

外記の父織部は、寛永十四年の春、十三才で先の小城藩主、鍋島紀伊守元茂に小姓として召出された。立居振舞のきびきびした、凛然たる気品を保つ美貌の少年は、豪毅果断の元茂の意に叶った。島原の乱では年少ながら抜け駆けして兜首を取り、一旦は叱責されながら後日、帰国とともに元茂から賞された。織部が十五才の春、元茂が住居とする陣屋の広庭で散策中、ただ一人したがった彼は、うなじを蜂に刺された。元茂は、

「蜂じゃとて、油断すなよ」

と織部の頸を吸った。それを垣間見た朋輩の口から、主従に衆道の関係があるかに沙汰されたこともあった。

織部は剣を学んでも天性の資質を示し、家

老で新蔭流の使い手村川宗伝にも認められていたが、たまたま宗伝のもとで五指に屈せられる深見佐吉郎の、「色小姓の殿様剣法」と罵る蔭口が織部の耳に入った。

勝負は織部から申込まれ、意外にも、顔立ちの優美な「女めいたなまめかしさ」の持主織部は、「短軀」「闘志の塊り」のような佐吉郎を打ち据えた。

「殿様剣法」という皮肉を元茂から咎められた佐吉郎は、介錯人に織部を指名して切腹した。切腹に際して、声をかけるまで待て、と念を押して佐吉郎は、一文字に腹を掻き切り「よいぞ」と声をかけた。織部が白刃をかざした次の瞬間、佐吉郎は、体を前に傾けていた。

介錯の仕損じを狙ったのである。しかし織部は、間一髪見やぶって、刃を宙にとめていた。「お静かに」織部は冷静に云った。佐吉郎は敗北を感じ、あらためて介錯を受けた。

織部三十三才のとき、承応三年十一月はじめ、元茂は五十三才で病死したが、君寵誰よりも厚い織部は殉死しなかった。「商い腹は真ツ平」と平常より云い切っていた織部だからである。彼も元茂の葬儀の直後、殉死を考えたが、親しい朋輩の一人が、

「用心せい、血気の連中が、おぬしに詰め腹切らせいと息まいているそうじゃ」と囁いたとき、すでに殉死した十人近い人の中にも周囲から迫られて死んだ者があるのを思い出し、彼は敢然と己れに殉死を拒否したのである。

翌年早一小城に戻った彼は、妻信乃の父兄とも義絶してまで殉死を拒んだが、ほどなく二月の寒夜、師村川宗伝を訪ねた帰途を十二名の若侍に襲われた。

殉死せよと迫る彼らに織部は道理を説いたが、思慮浅い人人は無二無三切りかかった。「喧嘩両成敗じゃ、一人死ねばそれで済む」と。

絶望した織部は一同を制止した。

「待て、腹を切ろう」

粉雪の散る路上に立ちほだかったまま、

「もっと近く寄れ、腹はこうして切るものだぞ——」

と叫んだが、人人は彼の全身からほとばしる殺気に、かえって後ずさりした。

織部は今一度、ずいとい一同を見廻して「ただし、念のために言うておく」

腹をくつろげると、すらりと刀を抜いて逆手にとった。

「殉死ではないぞ。覚えておけ。毛頭、殉死ではないぞ。くそっ——」

言い終ると同時だった。

左の脇腹に、ずぶりと刀を突き立てると、きりきりと右へ引き廻し、今度は、刀をとり直して、鳩尾から臍へ、ぐうつと切りさげたのである。

風がしきりに粉雪をたたきつけた。

「見たか、うぬしら！」

刀を杖に、塀にもたれた織部は、最後の力を振りしぼって叫んだ。色を失って立ちすくんだ十二名の者へ、さらに言葉をはげしく浴びせかけた。

「覚えておけ、高柳織部、毛頭、追腹切った訳ではないぞ」

花びらのような雪が、高柳織部の凄絶な死の姿を降り包んで行った。

それから二十余年、外記は織部そのままの激しい気性で育った。そして今、当代直能の死を目前にして、彼は父の横死を語り出したのである。

鍋島兵庫はじめ現在、藩政の枢機に携わっている人人の大部分が、当時は十二名の行動を支持し、同調したのであった。

外記が無言で席を立とうとしたとき、兵部はじめ二、三名が跡を追った。

「さっきも言うたとおり、追腹は公儀の御法度じゃ。めったなことをしてくれまいぞ」

「同じその口で、方々は、てまえの父高柳織部に詰め腹切らせられた……」

「やむを得ぬ。気の毒じゃが時世がそうさせた……」

「時世がさせた……。都合のよい言葉があるものよ」

外記は皮肉に笑った。一同の心配を他処に外記はひたすら機会を待った。八弥が「御臨終」と知らせたとき、外記は歓喜に顔を輝かせた。

おくれ彼は、今は通夜の席となった部屋へ戻った。「御一同に申し上げる」と前おきして、

「鍋島兵部どの、水町喜内どの、その他ここにおいでの方々は、てまえの父、高柳織部とは異なって、いずれも誠忠無比のお方ばかり。いかに公儀の御法度とは言いながら、追腹の儀かなわぬは、まことに不本意のきわみでござろう。てまえの父ならば、命拾いをしたとて定めし喜ぶこととてござろうが——」

「かく申す高柳外記は、父の織部が、不

覚みれんの汚名をこうむったにもかかわらず——」

「十五才の折から、加賀守様側近に召し出されましたことを思うとき、殿の高恩ただかたじけなく——」

苦しげに息を吐いた外記の青さに人々が気付いたとき、

「その加賀守様の御恩を思うとき、外記は、外記は——。たとえ公儀の御法度にもあれ、お家のいかなる大事ともなれ、追腹いたさずにはおれませぬ——」

痛烈な皮肉の、語尾がすうっと消えるようだった。

ああっと、血相を変えて、数名の者が外記に飛びついた。席に戻る直前に、外記は一文字に腹を切っていたのである。

血が溢れて、べとべとに衣服をひたし畳にもこぼれた。

「口外無用」と叫ぶ老臣たちの声を、薄れゆく意識の底で捉えたとき、外記は会心の笑みを浮かべた。延宝七年十二月廿六日である。ここには三つの切腹の相が描かれている。命じられての切腹。

スケ・スケ・ルック

の キ キ

芳野眉美

A

キキのミニドレスは全部ビニール製で、オッパイもオシリも、ちらちら見えてしまう。肌がすけて見えてしまうのに、キキはミニドレスの下に何も着ていない。

堀口大学の詩に、
「乳房は掌のために造られた／掌は乳房のために造られた」

というのがあるけれど、キキの乳房は、男

が掌を丸めたとき、その中にすっぽりと入ってしまう。理想的な半球ということになる。

キキのオッパイの谷間で掌を拡げると親指と小指が二つの乳首に届く。だから片手で用が足り、片手は空けることもできる。

オッパイロジからいうと、男への献身、男から与えられる愛のバランスが最高に正しいらしい。

キキの大好きな肉体の部分だから、どうしても人に見せたがる。露出癖があるといわれ

ようが、美しいものを誇示するのは自然の条理で、キキのお脳を疑うことはない。

オシリの割れ目がちらちらするのは、ちょっとばかり刺激が強すぎるかもしれない。人によっては猥褻に感じることもある。

でも、赤ちゃんのオシリの谷間はなんと可愛いことだろう。あどけない甘えん坊のキキは、赤ん坊のようなところがあるから、ちらちらするオシリの割れ目も、SEXを感じる前に、おしめでかくしてしまいたい欲望を感



じてしまう。

キキがブラジャーをしないのも、パンティを穿かないのも、キキがオッパイとオシリに自信を持っているからにはかならない。

ブラジャーは乳房の形が悪い女のためのものであり、パンティは恰好の悪いお尻をかくすためのものとキキは思っている。ヒップアップなどくそくらえだ。

スケスケルックで白昼、街にとびだした時不意にうしろからコートをかけた男がいた。

「困るんだよ、そのカッコで歩かれちゃ」

若い男はにらみつけるキキの肩を抱くようにしてささやいた。髪を洗ったばかりの匂いがした。

私服のデカだった。

キキは急にこの若いデカがほしくなった。

「友達のマンションまで送って」

怒ったような声でいった。

「どこまででもお送りしますよ。コートを返してもらわないと困りますからね」

まるで手錠をはめられたようだった。キキはマンションまで、一ことも口をきかなかった。

放浪癖のあるキキは、自分の部屋を持っていない。別に寝るところに困らないのは、シ

ヤルマンなキキにひれ伏す男が沢山いるということだろう。

カギのかかかっていないマンションの部屋をキキはドアのベルも押さないで入り、コートを羽織ったまま、ずかずかと寝室に上がりこんだ。キキの右手は若いデカの手を握ってはなさない。

不意の侵入者に、ベッドで寝ていた貴婦人は驚いたらしい。あわてて羽根布団で胸をかくした。

かくしたようすから、ベッドの貴婦人は何も着ていないように見受けられた。あまりにも小さくて、バラの蕾かと一瞬思ったほどの丸められたパンティや、孔雀が華麗な翹翰^{はね}を拡げたような透明でゴージャスなネグリジェが、無造作に脱ぎ捨てられてあった。

「ママ、ベッドをキキにかしてよ」

「あらあら、キキったら……」

「失礼しました。ワイセツブツチンレッザイの容疑でオジウサンを保護しました。あまり露出的な軽装で外を歩かないように、よくしかって下さい」

横を向いて若いデカは、ようやくいった。顔が赤くなったのを二人の女性に知られなくなかったのに違いない。

「ママっていつでも、本当のママじゃありませんわ」

と裸の貴婦人はくずれた髪に手をやった。「わたくしのお店を、気がむけば手伝ってくれますの。ねえ、キキ」

「帰ります。コートを下さい」

しゃちこばって、若いデカは、いった。

「キキのいうことをきかないうちはコートを返さない」

「窃盗罪で逮捕しますよ」

「いいわよ、逮捕してちょうだい」

「失礼ですけど」

と貴婦人が若いデカにいった。

「ベッドの下に室内履きがあると思うのですが、もぐって取って頂けませんこと」

「はあ」

若いデカは、じゅうたんに四つ這いになる^とと深々と垂れている羽根布団をかきわけてベッドの下を覗いた。真下に、金色のハイヒールの室内履きが底を見せていた。

若いデカが上半身をベッドの下にもぐりこませたとき、誰かが腰のあたりにまたがったようであった。キキのようであった。

室内履きをつかんであとずさりし、ベッドの下から頭をだそうとしたとき、やわらかな

はてった腿で首を締められて、彼は思わず呻いた。犯人は貴婦人に違いなかった。死にたいほどふくよかな貴婦人のお尻が彼の頭を踏みつけ、

「室内履きをはかせて下さるわね」

と媚びたような甘い声が頭の上でした。

金色のあでやかな室内履きを両手ににぎったまま、若い男はどうしていいのか判断に苦しんでいるようであった。

頸と背中と同時に女二人に乘られたとしても、柔道五段の彼にははねのけることは簡単なことであった。

しかし、それがどうしても出来ないのだ。

まるで魔術にかかったように、お尻で頸を踏みつけられている。

「どうかなさったの？」

あまりにも貴婦人の声が優しいので、抵抗する気力が失われてしまうのかもしれない。

貴婦人の足のうらが顔をまさぐり、やわらかな土踏まずが男の唇をやわやわと押した。

金色でペデキュアされた形の良い足の指がつとまがって、鋭い爪が男の頬をつつき、男の鼻を下駄のはな緒をつつかけするように足でつまんだのである。

「足のうらを舐めて下さらないこと」

と、貴婦人は容赦なく足のうらで男の顔をまさぐっていた。

「裸で寝ているレディの寝室に、ことわりもなく侵入した罰。わたくしに処罰されたって仕方がないわね」

ベルトがとられたような気がして、はっとして上体を起こそうとしたとき

「動かないで」

激しい叱責が飛び、男は強く首を締められて、おもわず貴婦人の足を噛んだ。

「痛っ」

歯型がついたようであった。ストラックスが下げられ、ブリーフの上から皮ベルトがたたきつけられた。

腰から跳び下りたキキの仕業らしかった。

「だらしがない男。ママにどんなことをされたって、何も出来ないんだから」

せつかく寝てみたくなってベッドを借りに来たのに、あっさりママに取られて、キキはくやしくなったらしい。ママを怒るわけにもいかないから、男にやつあたりをしているらしかった。ベルトの金具が太腿にあたり、呆気にとられて声も立てなかった男の口から、はじめて呻き声が洩れた。

「だらしがある男なら、二人ともなぐられて

いるわよ」

皮肉にも聞こえる貴婦人の言葉だったが、男は腹も立たなかった。二人の変った女に侮辱されているのが、侮辱とは感じられないのだ。つまり遊びであった。

キキと貴婦人の思いのままにされているほうが、怒るよりもむしろ忍耐がいると思われる。勿論、本当の理由は、この若いデカ本人にもわからなかったのに違いない。

この童貞の男には、SEXはあまりにも神秘的でありすぎた。

そして、男の首を締めつけ、足のうらを舐めさせている貴婦人は、この男にはあまりにも美しく気高く見えたのに違いなかった。

ブリーフまでずり下げられ、男はキキの皮鞭をさんざん受ける羽目になった。

男は幼稚園の若くて美しい先生から、砂場で四つ這いにさせられて、いたずらのお仕置にお尻を手でぶたれたことをなつかしく思い出しているのかもしれない。

いたずらとは、オニゴッコで先生のスカートにもぐりこんでしまったことで、こんなことが先生をあんなに怒らせるとは、このいたずらっ子には理解出来なかったのである。

いきなりスカートの下にもぐりこまれて、

驚いた先生がオナラをしてしまって、逆上してしまったんじゃないかと、後年になってようやく気がついたことであった。

羞恥が学校を卒業したばかりの若くて美しい先生を怒らせたので、若い女性は便秘がちだから、この記憶は正しいかもしれない。

キキに尻を打たれながら、両手で金色の室内履きを握りしめ、彼は無理やり口をこじあけて中に侵入してくる貴婦人の足の指をしゃぶっていた。

首筋に突如異変が感じられ、彼の頬につたわってくるものがあつた。刺すような芳香が拡がった。

「いかが？ わたくしの体内で蒸溜されたネクターは」

楽しそうに笑う貴婦人の声が遠くで聞こえ若い男は息も絶え絶えに、唇にあとからあとから流れ込んでくるものと斗わねばならなかった。

「ママったら、ずるい」

キキはベッドに跳びのり、ビニールのスケケルックのミニドレスのまま、貴婦人を押し倒すと顔にまたがった。

「あっ、キキ、だめよ」

ロングブーツのままでベッドの羽根布団を

踏みつけるという乱暴さで、キキは貴婦人の顔に坐っていた。

「苦しい、キキ」

キキはミニドレスの下に何も着ていない。貴婦人が叫ぶ毎に、キキの燃えるような柔肌で口に猿ぐつわをされるはめになる。

「キキ、許して」

貴婦人の足の力がゆるんで、飛び起きた男は脱がされたスラックスをさがそうともせずミニドレスのキキとなにもまもっていないベツドの貴婦人の、あられない格闘を呆然として見つめていた。

格闘といってもキキの一方的な責めで、キキのまるまっちいお尻で顔を潰されている貴婦人は、足をばたばたさせてもがいたのはほんの一瞬で、キキのいいなりになっているらしかつた。

貴婦人の乳房は上弦の月のように反っていて、乳首がプリンと上を向いていた、オッパイロジからいうと「性感の振幅が大きく、SEXが楽しく得がたい女性」となる。

貴婦人の春草は美しい正三角形で、上部が炎のようにもつれて忿怒し、これを毛相学からいうと「精力絶倫、男ごろしの上品相」ということになるらしい。

我に返った男がスラックスを穿こうと床からひろったとき、

「逃げると撃つわよ」

貴婦人の顔にまたがったキキが振り向いて叫んだ。

キキの手には、いつのまにぬき取られたのか、若いデカ愛用の拳銃が握られていた。

B

ベツドから跳び下たりキキは、若いデカの胸に拳銃をつきつけ、

「裸になれ」

と威嚇した。

「こんなものみんな脱いでしまえ」

ネクタイを引っぱり、ワイシャツのボタンを拳銃でびんびんはねるのだから、若い刑事がその気になれば、拳銃などキキの手から奪うのは簡単なはずであつた。それができないのは白昼のハプニングにすっかり肝を奪われたからかもしれない。

ベツドから起き上り、孔雀の翹翰のような華麗なすきとおったネグリジェを素肌にまとった貴婦人に、キキは理想的なまるまっちい半球をふるわせて命令するのである。

「手錠をとりあげて」

目茶苦茶にくずされた髪をいそいでアップにまとめ、貴婦人はキキの命じるままに若いデカから手錠をとった。

「この男を逮捕するのよ」

若い刑事の両手首に、金属製のひんやりした感触がまわりつき、締めつけられた。

スーツの上着は脱がされていたが、ワイシャツとブリーフのまま手錠をされた彼は、ベッドに押し倒され、勢いあまって、ベッドを越えて頸が逆さまに床についた。

かろうじて腰がベッドの端にかかり、首をねじまげられて呻いている彼の口中に、キキは銃口をしゃぶらせて一瞬彼を蒼白にさせたのである。

「ロープを持って来て」

ベランダの戸をあけ、昼の明るい光線にまぶしそうに顔をしかめながら、貴婦人は洗濯用のロープをはずしてキキに差し出した。

「ちょっとピストルを持っていて」

「いやよ」

「こわいの」

「こわいわ」

「そうね、暴発するかもしれないわね」

「いやよ、殺しちゃ」

「味をみないうちは殺しやしないわ」

「それもそうね」

「足を縛って」

貴婦人は豪華なネグリジェの裾をひるがえし、いそいそと若いデカの足首をまとめて、ロープでくくりつけた。

「ベッドの下から手錠に結んで」

ビニール製のミニドレスから顔を出すキキのまっ白なオシリが、みるみる悩ましく紅潮してきた、

彼はベッドを横断してベッドにくくりつけられたわけである。首は下がったままだったが、少し上に引きずられて顔を上げる自由はわずかだがあった。

キキがようやくピストルをソファアにほうり投げ、ハサミを持ち出し、彼のブリーフを切り裂いた。

ベッドから垂れ下がった彼の頸を、ジュータンに坐った貴婦人は、さもいとおしそうに膝枕にすると、彼の頬を両手で愛撫しつつ、顔を伏せて荒い息を吐く熱い唇に接吻した。

前手錠され、頭の上からうしろにロープで引っ張られた恰好になり、唇を濡れ濡れした甘い唇でふさがれて、若い男は息苦しそうにもがいた。逆エビに反り返って背筋に激痛が走った。

床に垂れ下がり、貴婦人に頸を抱かれていたのではキキが何をしているのか、彼にはさっぱりわからなかった。貴婦人がひやかすので、その意味がかるうじてわかる程度であった。

これが薛敖曹せつどうそうだったら、則天武后に「請うす・うを休やすめて、これを牝中いんちゆうに入れよ」といいたすのだろうが、童貞の彼がこんな高級なテクニクを知るよしもない。

唐の則天武后、初めは太宗の後宮に入ったが、太宗の死後、高宗の皇后になった。高宗が没するや、中宗・睿宗、二帝を廢してみずから帝位につき、則天大聖皇帝と稱し、国号を周と改めた。在位十六年。

女傑、好色で、薛敖曹のしゅ柄へいをためすと「甚だ我が意に如かなう」と、年号を『如意』と改元した。その如意五年、武后、七十四歳。(しゅ、大鹿。その尾でほつす私子をつくる。私子はしゅ尾ともいう。禅僧が手に持って談話している。しゅ柄、転じて何かとなる。スコブル難解デアル。)

まったく、この頃の則天大聖皇帝ときたら若くて美しい待女ばかりを集め、女たちの環視する中でしゅ柄を口にふくむという遊びを考えだし、舌がくたびれると、かわるがわる

侍女たちに、しゅ柄をにぎらせるのである。

中国文学の駒田信二先生の説によると、武后が考えだした新手のテクニックは、ソワサントヌッフ、フランス式らしいというのだが原文など読めないから、たしかなことは知らない。

ともかく、武后と侍女たちは、薛敖曹のしゅ柄をたらいまわしにし、武后は、「お前たちは下手だねえ」とかなんとか、すこぶる得意の態であつたらしい。

寝台をぐるりととり囲んだ侍女たちは、口を掩いくすくす笑いながら、武後に女上位で責められている彼をひやかすのである。

頭が逆さまで血が下がるのに加えて、貴婦人に頭をかかえられて、ぬめぬめした舌で口中をこねまわされるものだから、若いデカはすっかり逆上して叫んだ。

「殺せ、なまごろしはいやだ」

「それだけ元気があれば、二人を相手にしたって大丈夫よ」

貴婦人は彼に頼ずりしながらささやいた。オッパイとオシリをちらちらさせながら、スキスケルックのキキは、ロングブーツのままベッドに跳び乗った。

「お望み通り殺してやるよ、アンチャン」

キキがパンティを穿かない本当の理由は、案外この辺にあるのかもしれない。スリル、スピード、セックスがキキのスリース。

その瞬間、若いデカの血をしぼるような、悲しい、アンニュイな呻き声がし、

「なんだ、こいつ、ニワトリか」

と軽蔑しきったキキの不可解な言葉が、彼の頭上に舞い下りてきた。

ベッドから跳び下りたキキは、

「ママ、交代よ」

と貴婦人をベッドに追い上げると、半分逆吊りで首をあげ、荒い息を吐いている男の顔をロングブーツで踏みつけ、なにかうらみでもはらすように、首をぎゅうぎゅう踏んで男を激しく悶えさせるのであった。

キキと交代した貴婦人は精力絶倫の男ごろしの毛相学の裏付けよろしく則天武后の化身の如く振舞う。

若い男の首のあたりにまたがったキキは、

「キキのも飲ませてあげるよ」

と男を見下ろしてニヤリとした。

「ママのを飲んだのだから、キキのホットなネクタールだって飲めないことないわね」

「ネクタール」という言葉が何を意味するのか、少し前に貴婦人に飲まされてうすうす理

解はしたが、まともに浴びせられてはたまったものではない。

いやいやをしたが、それがかえってキキの反感を買い、すっかりキキを怒らせてしまったらしかった。

「キキのは、いやだというのかい。生意気よ」

いきなり彼は顔に浴びせられて、眼をつぶった。顔が下がっているから、口にめがけてキキが排泄したにせよ、口からはねあがって鼻のわきから眼に流れ込んだ。

「馬鹿、飲むんだよ。じゅうたんが汚れるじゃないか」

キキの叱責に、男はあわてて口をぱくぱくさせたが、全部を受けるのは不可能なことであつた。

うがいをしているように男ののどが鳴り、海水の満干を利用した水責めにあっていような錯覚にとらわれて、彼は本当に失神しうになった。

干潮のときに、海岸の杭に首だけ出して囚人を埋めたり囚人を逆吊りの磔刑にしたりして、満潮を待ち、口へ鼻へとしだいに海水が流れ込み、囚人は水を吹き上げながら、やがて水没してしまうという刑罰である。

貴婦人のは、あまり抵抗なく、受け入れら

れたが、キキから立ったままどつと浴びせられては、まるで拷問で、このまま窒息してしまふのではないかという恐怖心におそわれたらしかった。

多くはじゅうたんを汚すものになってしまったが、ベッドの貴婦人は、別に気にする風もなく、幾重にもうすいひだを重ねた孔雀の翅翰をひろげたような、華麗なネグリジェの裾をひるがえし、美しく優雅に責めたてるのである。

BC二万年の最古の体位図は、女が四つん這いになり、そのうしろに男が立っているというのが、正常であり、BC七千年の農耕牧畜の開始によって食生活が安定してくると、これにバリエーションができ、男女が向かい合うことが正常とされるようになったそうである。

それが現代では……SEXはますますその種類を増すように思われる。

キキのように、処女喪失はメンスのあった小学最上級生の頃で、相手は知らないオジサマで、白昼の公園だった、ということになっているが、実は、キキが大好きだった、パパの弟、即ち本当のオジサンで、それも両親のいないとき、家であっさり自分からあげてし

まったという、恐るべき早熟さを見せるのである。

大好きなオジサンから口止めされていたからでもあったが、母親から身体の異常に気がつかれて、多少の出血があったのだろうが、でたらめにしゃべったのがそのまま信じられてしまった。

医者にみせられたが何事もなく、小学生にしては肉体はすでに成長したおとなだと変なところで感心される始末であった。

放浪癖のあるキキは、その道のベテランから、知らず知らずのうちにいろいろなテクニクをおぼえさせられてしまったのだろうが男の顔にまたがって放尿するなどというようなことを、キキに誰が教えたのかそこまでは知らない。

この頃の青少年少女向きの週刊誌は、

——君も女の子の小便をのめ！

などという見出しがあってギクリとさせられるのがしばしばだから、キキも週刊誌でおぼえたのかもしれない。

ともあれ、何も知らない童貞男にとってはさんざんな災難といわなければならぬだろう。

——女が犯すとき

という週刊誌の記事があった。

『コーラを飲むみたいにセックスがしたくなることがある。仲のいい女友達の家へ行って裏切るつもりはなかったけれど、つい、彼女のボーイフレンドと寝てしまった。たぶん、ノドがかわいていたんだ』とは詩があっけない。

『女友達といっしょに、ひとりの男を誘ったとき、アタシは異常に興奮した。人が見ていると、すべてがちがう。女友達はのたうちまわった』とは少しデキすぎている。

『一対一である限り、強姦されたなどという告白は信じない』これは同感だ。

『これだという男を見かけたら、私は絶対に逃がさない。さり気なく並んで歩き、相手に誘われる。最初は先方に主導権を与える感じにして、自然にホテルのあるほうに連れて行けばいい』……

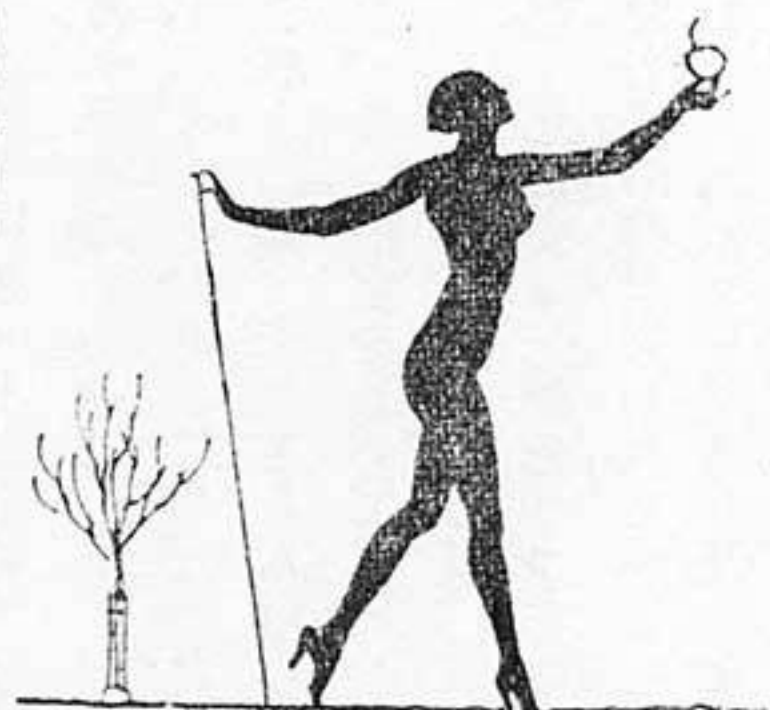
キキが、マンハンターのテクニクの参考書にことかかないわけである。

その犠牲者が若い刑事だった。

——(終)——

カット・春川 ナミオ

セ ミ 告 白



「ジャングル温泉」

の

いじわる

小杉千恵

脱衣室の鏡に向かい砂ぼこりに汚れた旅装を解き、ゆっくりと櫛を使いながら、私はいつも旅をする度に感じるアバンチュールへの憧憬を、までもじわじわと感じていました。

夜九時前の女子脱衣室は静かでした。たぶん女の人は皆、個室のバスを使用しているのでしょう。ジャングル風呂とは名ばかりで、家族風呂のような小さなタイルの浴槽の周りに、熱帯植物の鉢植えが数箇、置かれているだけのお粗末なものでした。そして、大風呂の方に出られます”と書かれた札をぶら下げたドアがあり、押しボタン式の鍵がかかっておりました。殆どの旅館が、この様な仕組みになっているそうですが、皆様もご存知の通り、大風呂の男女別の区分は形式だけにすぎないようです。

私はそっと、ドアを開けて覗いてみて、誰も大風呂に居ないのを確かめてから出てみました。大きな湯舟がドーナツのようにグルリと輪を造り、その真中に大きな熱帯樹が蔭にまきつかれた姿で、何本も茂っていました。輪の middle に小さな棚があり、どうやらそこからこちら側が女湯らしい様子でした。大風呂の気持良い湯量の中に身を沈めながら、私の居た女子浴室の方をみますと、それは大風呂

のほんの一角を、ダイヤガラスで囲んだものでした。厚生省の通達に、地方によっては混浴は可なるも必ず女子浴室を設けること、というのがあるようですが、それがこれに当るのかも知れません。

女子浴室のダイヤガラスに、鉢植えの熱帯植物のシルエットが美しくうつっていて、ガラスに近い葉などは全く緑の一枚々々さえ、はっきりと目に映じているのでした。何気なしに、ぼんやりとそれを眺めていた私は、はっと致しました。もし、私があゝの状態で、ガラスの近くに立てば、はっきりとシルエットがこちら側から見えるのに気がついたからです。近頃の娘は、ちらちらとシルエットが写ることぐらいなら私ならずとも恥かしがりませんから、これで良いのでしょうか、若し、私が意識して、ガラスと密着するかのよう接近して立ったら、どうなるかと思うと牀中が火照って参りました。おそらく、こちら側からは丸見えになってしまうことでしょう。

がやがやと男の声が脱衣室の方から聞こえて参りましたので、私はあわてて女子浴室に戻りドアを閉めました。が、押しボタン式のシリンドー錠が自然にかかったのを知り、再びハッと致しました。先程、大風呂の方に出て

行った時に、ボタンと強くドアを閉めていたら、鍵が自然にかかってしまい、ここへ戻る事が出来なくなるところだったのです。

女子浴室には、未だ誰も入浴していませんでした。この浴室を改めて見廻しますと、二方がダイヤガラスの仕切りで、ガラスの傍らに、立ったままで全身をうつすことの出来る大きな姿見の鏡が置かれていました。その鏡の上にブランケット入りの大きな蛍光灯が輝いていましたが、これが仕切りガラスにシルエットをはっきり浮かばせていた犯人だったのです。大風呂の数人の男達が口笛を吹くのが聞こえて参りました。私のシルエットに対してに違いありません。それを意識しますと私の身内に妖しいうずきが這いのぼって参りました。

お恥かしいことなのですが千恵はもう二十四才なのに、悪癖が治らないのです。好奇心から始めたわるさなのですが、もう、その誘惑から逃れるすべを失ってしまい、それどころか、方法等にいろいろと工夫すらこらすようになり、SM、アブ、倒錯と、その求める欲望は果てしなく広がり続けているのです。

私は光線がなるだけ自分の全身をくまなく照らすように、鏡とダイヤガラスとに斜めに

軀を向けた上、出来る限りダイヤガラスに接近しました。大風呂の人達がきつとシルエットに注目しているに違いないという意識が、私に被虐的な幻想をもたらしことになったのです。大風呂の方はシーンと静まりかえっておりましたが、私は、男の人達が入浴を済ませて上って行ったのではなく、私のシルエットの動きに息をのんで見入っているのだと想像して、自己悦虐のパントマイムを頭に描きながら、いつもの悪癖に溺れこんでいったのでした。

姿見の面に交わっていた視線が乱れ、あたりがぼっとかすみ、ナルシスの恍惚感が訪れました。立っていることが困難になり、私は思わず、その場に踞みこんでしまいました。

やっ和被虐の幻想が消え失せ、自分を取り戻した私がお湯につかっていますと、二十才前後の日に焼けたブロンズ色の肌をした娘さんが一人、浴室に入って参りました。むっちりと盛り上った乳房と豊かな双臀に、くっつきりと白いビキニの跡がとてもかわいい感じの女の子でした。小さな浴槽に驚いたらしく、「あらあ」とつぶやき、更に、お湯に首までつかって、下方からじっと見つめている私の視線に、少し、ためらったのち、「すみませ

ん。失礼します」と断りながら恥かしそうに私と並び、その可愛い裸身を沈めました。私の雪白人肌に対し、彼女の肌は、こんがりした小麦色をしているのが大変魅惑的で、私の一旦納った悪癖が、また別のうずき方で騒ぎ始めたのです。

並んでいる彼女を横目に眺めて、私は衝動にお腹に力を入れていました。水圧をはね返して放出したもの。それは水流となって彼女に達し彼女のすばらしい肢体を包み、私のさり気ないお湯のかき廻しで逆のぼり、かわいい乳房にまでとどいたに違いありません。弱ったことには、小さなお湯の量は知れたものでしたので、私にもわかる程、お湯が匂いはじめたのです。

私は、とっさに彼女に話しかけました。

「このお風呂は、小さすぎるし汚いわね」

「ほんとですわ」

「何か匂わないかしら」

「私も変な匂いがあると思っていたの、お姉さまも、そう思われますの」

彼女がお姉さまという言葉を使ったのに、甘さを感じ、満足を憶えながら、私は、なおも、会話を続けました。

「さき程、子供連れの人が入浴していました

のよ。だから、子供がオシッコしちゃったのじゃないかしら」

彼女は、まさか、目の前のきれいなお姉さまが、悪戯したとは夢にも思わないのでしょ。う。無邪気に、お湯を両手に掬って、くんくん、嗅いでいましたが「いやーねえ、やっぱり、オシッコの匂いだわ」と云って笑い出しました。

「シャワーもついていないわ、幻滅」

「ここから大風呂に行けるのよ、私はさっき入ってみたの。とても大きなジャングル風呂よ、一緒に行って体を洗ってきましょう」

「でも、男の人が居ると困るわ」

「大丈夫よ。仕切りだけだけど男女別にはなっているし、今、とても静かだから、きっと誰もいないと思うわ」

まだ、躊躇している彼女を、強引に押し出す様にして、私達は大風呂に入って行きました。私は、ドアの押しボタンを押しておいて勢いよく、バターンとドアを閉めました。

これで幾ら騒いでも、私達二人は、このドアからは女子浴室に戻れないのです。次の女子が浴室に入って来て開けてくれない限り女子更衣室に戻るためには、男子更衣室を通り、いったん廊下に出た上でなければなりません。

せん。

私にとってもサイは投げられたのです。私はぞくぞくするような被虐感に、胸がドキドキして、体中が赫々と燃え上るようでした。

大風呂には、むこうの方に三人の男の人が入浴していましたが、隅の方にひとかたまりになって、小さくなりながら、時々、こちらをうかがっている様子でした。

彼女も小さくなって、お湯につかっている様子。私はナルシズムに酔いながら、流し場で体中に石けんの泡をたてていました。

暫くすると、二十人近い男達がドヤドヤと大風呂に入って参りました。きっと団体客の宴会でも終わったのでしょう。彼女は、女子浴室のドアにとびつきましたが、勿論、開きません。

お湯につかっている私の隣りに、あわてふためいて身を沈めたものの、どうしようと、もう、半べそをかいていました。

騒がしい男の人達はどこかの会社の慰安旅行だったのでしょうか。酔っているのか、酔ったフリをしているのか、私達を認めて無遠慮に声をかけてきたのです。私達が体をかたくして、わざと無視したようにしていると、中年の特に野卑な男が近づいて来てニヤニヤ

しながら顔をのぞきこむようにするのです。さすがの私も、期待していた以上の状態になってしまったことに多少とまどいました。しかし、胸の中は期待にふるえています。私は彼女に「すぐ、旅館の人を呼んで来るから、待っていてね」と嘘をついておいて立ち上りました。

浴室を出るまで、数人の男達の視線に全身が熱く火照りましたが、心とはうらはらに身を屈めて走り抜けました。彼女は私の跡を追う勇気もないらしく、小さくなって湯舟につかったままでいたようです。

私は更衣室で半時間ばかり費しましたが、あの子は現われず、彼女の白い下着がカゴにきちんと積み重ねられ、その下の方に、ちょっぴり白いパンティが恥かしそうに顔をみせていました。

もういいだろうと思って女子浴室へ入り、例のドアを開いて彼女に声をかけてあげ、彼女がのぼせて赤くなった顔がこちらを見たのに合図しておいて、さっさと自分の部屋へ引揚げたのですが、あの半時間ばかりの間の彼女の羞恥を想うと、またもや、いつもの悪癖の誘惑がうずき出す一夜でした。



鬼——六——談——義

奇妙な性の話

セックス

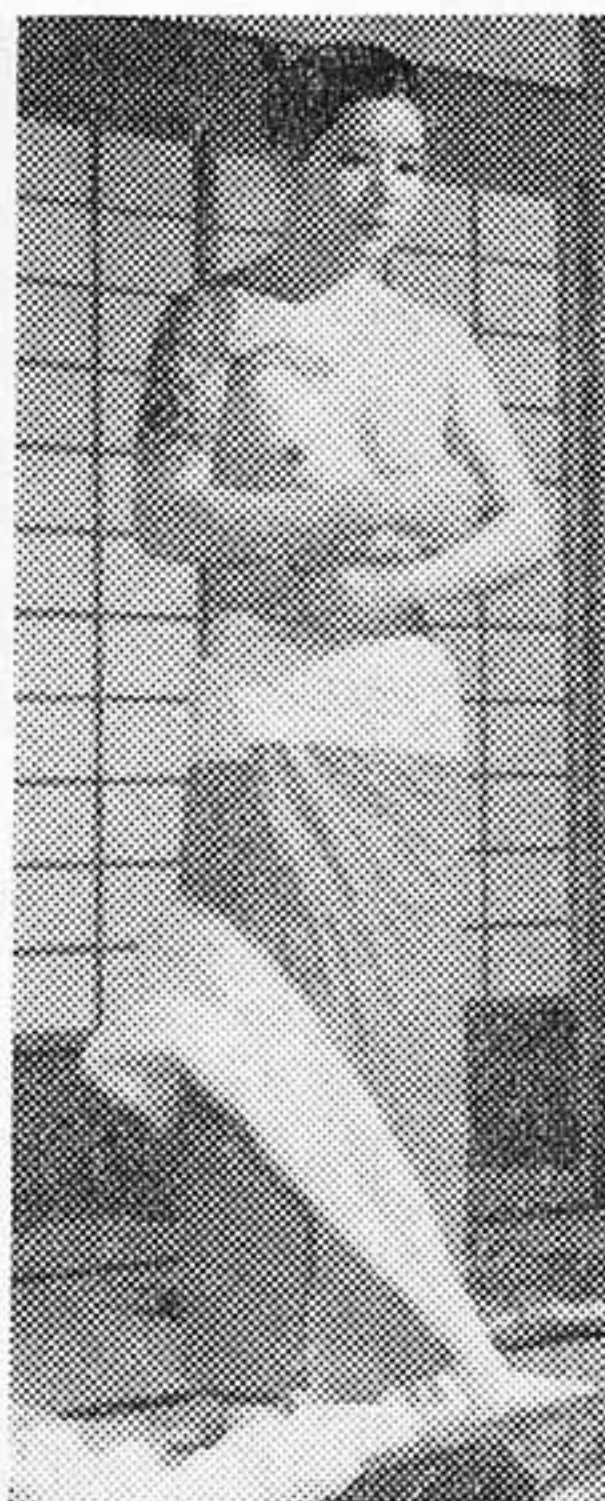
団

鬼 六

六邦映画（ピンク映画である）の「好色二十八人衆」のロケで、伊豆の長岡に賀山氏と同行した。これは、清水の二十八人衆を書い
てくれというピンク映画にあるまじき奇妙な
注文を社長から受け、しかも、現代物にしな
ければならず、とにかく、田舎やくざがワア
ーワアー喧嘩するものでいいんだろうと思っ
て書いていると、役者のてっぱり（他社出演）
と撮影日がかち合ったため、二十八人も出せ
なくなったと監督があわてて私の所へかけこ
んで来たので男女合わせて出演者が二十八人
というケチな清水の二十八人衆が出来上った

別に清水港にしくてもいいだろうと思って
山麓をロケ場にした山賊的やくざに書き上げ
たのにこの試写を見ていると、冒頭のシーン
に富士山や茶島が出て来てへ唄はチャッキリ
節、男は次郎長と唄まで挿入されており、内
容とは少しもマッチせず、「好色無法松」と
同じく羊頭をかかげて狗肉を売ったような感
じで、冷汗の出る思いだったが、試写に集ま
った映倫の人や配給会社の社長連は、そのイ
ンチキに文句はいわず、いや、実に面白い映
画であった、と感心した顔つきだったので、
この商売もなかなかやめられぬと思った。

このロケに好色紳士、賀山氏を同行したの
は、あわよくば、ピンク女優と何かをやらか
そうという目的があったからで、これがあれ
ばこそこんな商売を何時までも続けているの
かも知れない。もう一つ、その大分以前に東
映から連絡があって、例の責め地獄であるが
東京方面の緊縛師を一人紹介してほしいとい
って来たので、賀山氏を紹介したのだが、間
もなく撮影所の方で助監督連のゴタゴタが起
こったりして、賀山氏の起用は日を改めてと
いう連絡がプロデューサーよりあった。責め
地獄の中で、辻村氏と賀山氏の緊縛競演が見



られる所だったのに残念であった。そこで、待機していたのにすっぱかされた賀山氏に、そのかわりといってはおかしいが、ピンク映画の方の緊縛指導を依頼したわけである。

この撮影は、役者のスケジュールに合わせるため、徹夜につぐ徹夜の強行軍で、辰巳典子も林美樹も、くたくたになっている。こっちはそんな事は人事みたいに考えて、賀山氏と一緒に野天風呂へつかったり酒を飲んだり、主演女優が忙しいので新人女優を部屋へ呼び口説き落として股間縛りにし写真をとって遊んでいたが、こんな事している内、賀山氏もいつかの島田氏みたいに体がうずき出し、このままではおさまりがつかなくなってしまうのだ。島田氏と同じく東京へ電話し、辻村氏に紹介されたというM女性をこの温泉場へ呼び寄せたのである。彼女は、商社会社に勤めるBGで、嬉しいわ、夕方の新幹線ですぐ

そちらへ行きます、と電話の声ははずんでいた、という賀山氏もまた心を浮き立たせ、早速、私を連れて近くの商店街を下駄の音を鳴り響かせてほっつき歩き、浣腸器とか羽毛とか、色々な小道具を仕入れるのだった。

そんな時の賀山氏の顔は、遠足に持って行くアメ玉を買う時の小学生みたいに実に幸せそうであった。

おかげでこちらは、そのお相伴しょうばんにあずかったわけだが、一人の女を二人の男が楽しむなど、知らない人に話せばびっくり仰天することでも、マニヤにとっては別に不自然なことではないのである。勿論、そういうことされて、悦ぶ女性でなければまず出来ないことだが、その点、ここへやって来る彼女は、何の気兼ねもないM女性だという云い方を賀山氏はするのであった。M女性だから、気兼ねはいらない、という云い方も変だが、大体完全なM性を持つ女性というものは、衆人環視の中で、責められることを望む、ということとを最近、私は知るようになった。花と蛇の中では、随分とそうした場面を書いて来たがあれはS性を持つ男性願望かと思っていて、

つまり、私の願望故あつた場面を描いたわけだが、Mの女性も、多数の男に責めさいなまれる場面を空想するようである。

一度、花と蛇のファンだという女性と軽いプレイを行なったことがあったが床の間の柱に私好みの立縛りにし、その縄に締め上げられた胸の隆起や、羞かしげにモジモジさせているムッチリした腰から太腿に至るまでを凝視しながら、一人酒を飲んだことがある。あとで彼女に聞くと、やはり、そういう晒し者になっている間は、花と蛇に出てくる鬼源や川田それに田代や森田親分などが周囲にぎっしりつめかけ、これからどの手で責めてやるかと相談しているような状況を空想していたそうで、そう空想することによって、情欲的な高まりを感じ出していたと云うのであった。

とはいえ、賀山氏が呼び寄せた、私にとっては初対面の女性に厚釜しくも喰らいつくなど、私の紳士性？ が許さず、わざと遠慮して見せて、寝る時は部屋を別にしようとしたくらいだったが、賀山氏に叱られた。つきあいの悪いこというな、というのである。一人より、二人で遊んだ方がどれだけ楽しいかわからぬ、などこれもマニヤでなければ云えな



い科白だが、間もなくホテルに着いた彼女も賀山氏と私が一緒にいるのを見て、今夜はこの二人とプレイするのだと悟ったらしく、よろしく、と媚態めいた微笑を作った。

映画のスタッフ達には、彼女を賀山社長の秘書だ、と紹介しておき、渡り廊下を越えた一室で三人食事をとったが、これがM女性だとはどうしても信じられぬ位明るく、子供のように無邪気なところのある女性であった。なんだかんだと快活によくしゃべるが、ふと急に黙って、ぼんやり窓の方を見つめる時、そのぼんやり見開いた大きな眼は、ふと情欲的に熱っぽく潤んで、そんな所に、そのけのある女性ということがうかがえる。

これがM女性独特の眼というのだろうか。時折、夢見るような空虚な瞳になるのがその特徴であった。

これはカメラ・ハントでないから、彼女をどうした、ああしたとくわしく書くことは差しひかえるが、とにかく、食後、ダンスをしたり酒場へ行ったり、三人の気持がほぐれ、一つに結ばれて来た所で部屋に戻り、珍プレーが行なわれることになる。大きな円卓に彼女を大の字縛りにして、まず賀山氏は神妙な顔つきで剃毛をお始めになった。彼女は拒否するでなく、首肯を示すでなく、甘いうめきを洩らして、一寸腰をひねったり突き上げた

り——私は、責め三昧境に浸り切り、少し剃ってはバイブレーターを当てがい、また少し剃ってはバイブレーターを当てがって彼女に喜悦の涙を流させる賀山氏の手練手管を、さすがにベテランは違うものだと言を巻く思いで眺め、一つの仕事に集中する人間の姿は何と美しいものと、剃刀を細かく動かせる賀山氏の真剣な横顔をまじまじと見つめていたがぼんやり見ていないで何かした

らどうです、と賀山氏に云われて、私は、ああ、ああ、と切なげに首を動かせる彼女に、おとなしくしろ、などと頓狂な声をはり上げて、せいぜい剃り落としたものの後始末ぐらいしか出来なかった。というのも、こっちは情ない程、不器用なので「さ、このあとはこちらで剃って頂きましょう」と賀山氏に剃刀を渡されても、大事な所に傷をつけてしまうかも知れず、尻ごみしてしまうのだ。

お風呂へ行けなくなってしまったじゃないの、と彼女は鼻を鳴らして、モジモジ身を揺すっている。ブツブツ云うな、と私はそこでどなるのである。直接手を下さず、私は彼女を叱咤する事で、責めの役割を務めていた。花と蛇の筋書き通りやりましょうや、と賀山氏は、最も恥ずかしい所の名称を彼女に口に出して云わさせようとする。

「云え 云わんとこれだぞ」

賀山氏は、部屋を見廻して、私が昼間、温泉町のみやげ物店で買った怪しげなコケシ人形を見つけ、それを手にすると、彼女の鼻先へ突きつけたのである。

彼女は眼を閉じ、唇を半開きにして、ひっそりと、それを口にした。

こんなことをロケ地のホテルへ来てやって

いると、阿呆らしくてピンク映画など作ってられない。やがて賀山氏と私は、彼女を円卓から解き、床柱を背にさせて立縛りにした。

「こういうのが先生のお好みでしょう」

賀山氏は、そう云って笑うと、人形の玩具を手にして、立縛りにされた彼女の膝元へ腰をかがめて行く。彼女は小肥りの肉体で、乳房の形も決していいとは思えなかったが、太腿あたりの筋肉は、オットセイみたいに生臭い野性味をもっている。

いや、もうよそう。こんなことをくどくど書いているとまた花と蛇になってしまふ。

とにかく、久しぶりでおかしな遊びをやってしまった。こちらがフウフウ息を切らせている時に助監督が私達の部屋をノックして、これより階下の広間で辰巳典子の責め場がありますからお願いします、と云って来たが、こっちはそれどころではなかった。とりこんでいる時に何を云ってやがると腹立たしくなってきたが、スタッフ達に怪しまれても困るので彼女にへばりついてしまった賀山氏は気の毒だから、そのままにしてあげ、私一人ドアの内鍵を外して外へ出て行った。ピンク映画の緊縛指導に来た筈の賀山氏は、こういうとりこんだ事情で、結局、何の役にも立たな

かったのである。

助監督のあとについて階下の大広間へ行ってみると、辰巳がやくざ連中の酒盛りの席で廻りものになっているシーンの撮影だったが、どういふ風に縛ろうか、と監督に相談されて辰巳典子の両手を鴨居にくくりつけ、それだけで私はカメラの横へ坐り、せんべいを噛ってぼんやり見ていたけれど、何とも退屈であった。渡り廊下を越えた一室で、今頃、汗水流して熱演している賀山氏と彼女のことを思うと、本物と贋物とではこうも違うものなのかと阿呆らしくなってきたのである。

その翌日、賀山氏と彼女、それに私の三人はロケ地より一緒に東京へ戻ったのだが、喫茶店の中で、また、近い内に三人一緒に遊びましょう、と幸せそうに笑って握手して別れるなど、これも普通の神経では考えられない一幕である。SM関係というものは、いじめたりいじめられたりするだけの単純なものではなく、昂進すれば、もっと複雑で歪な性関係に結びつけられていくものかも知れない。

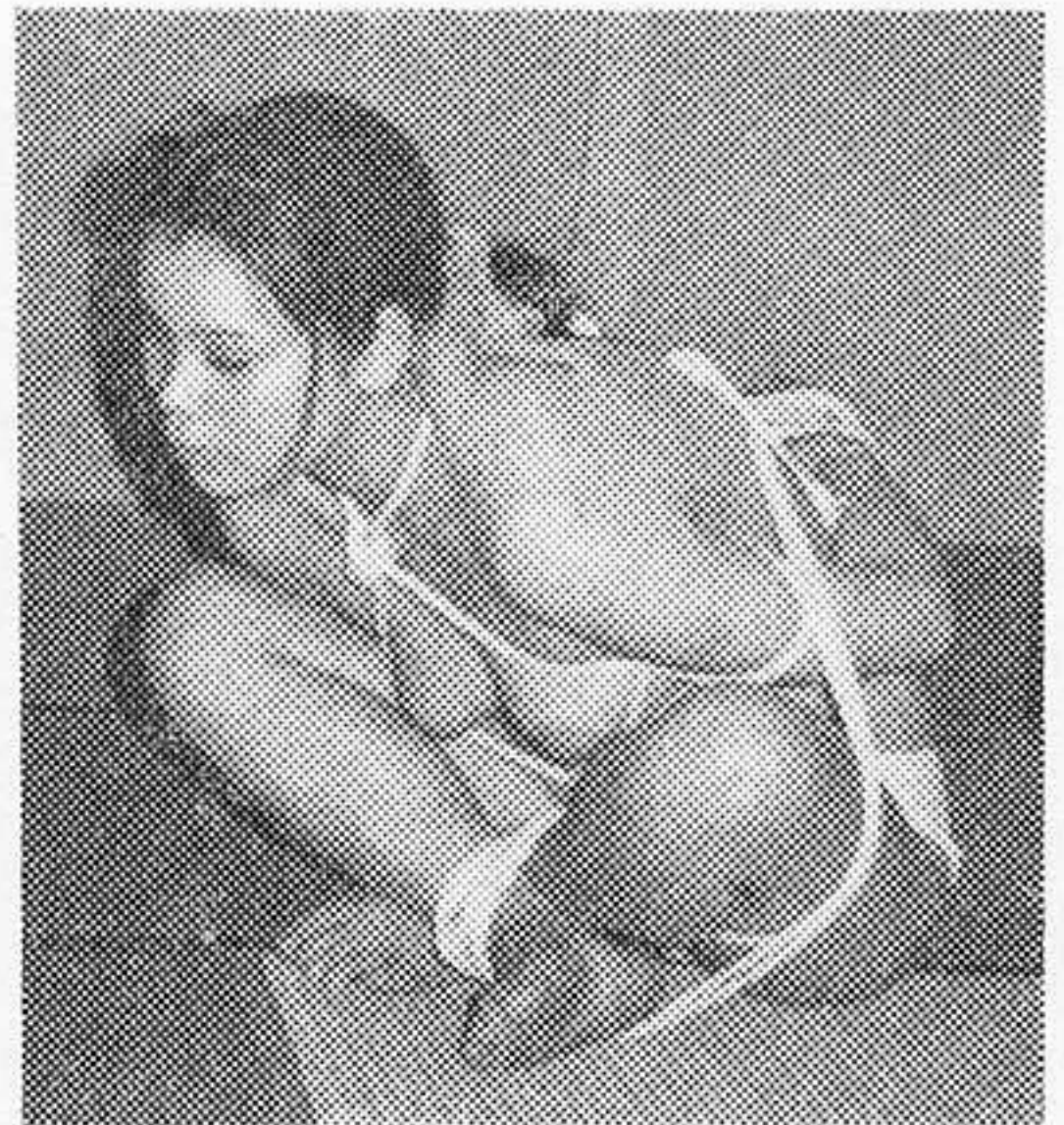
遊んだあとは、最近、きまって何か空しい感じに見舞われて、いい年して、何を阿呆な事やっとなのか、と後悔めいた気持ちになるものだが、それも、ほんの一瞬で、わかってい

るがやめられないのがこの道なのだろう。また、マニヤの仲間に誘いを受けたりすれば、性こりもなくノコノコ出かけていくなど、我ながら浅ましくなる。

この道を愛する人々（つまりSM）と親しく交際するようになってから、私もおかげで色々な体験を得たし、ピンク映画のような低俗な社会で蠢き始めてからも、数々の奇妙な現実を眼にすることが出来た。世の中は複雑怪奇である。SMを含めて、現実の歪な性関係を手さぐりで探究し始めると、山の麓の深林地帯に行きくた観さえ呈してくる。

さっきいった一人の女性を二人三人でいたぶりごっこすることなど、花と蛇の中では私は好んで書くけれども実際にそんなことを妥協し合って行なっている人々がいるということとは知らなかったし、そうした仲間と一緒に遊ばないかと誘いをかけられても、何年か前の私の神経では到底ついていけないものではなく尻ごみするばかりであった。近頃では大分こっちも厚釜しくなっていて、そんな催しがあれば真っ先に参加するし、いや、それどころではなく一度自分が乱交パーティーに似たものを企画した事もある。それはこういうわけだ。場末のキャバレーの女に、十万円借してく

れ、と泣きつかれて、その女は、自称キャバレーのナンバースリーとか云っていたが、別にこっちは気があるわけじゃなし、それどころか、かなり図々しいので不快に思っていたくらいだったので、もとより十万円も一人で損する気にはなれず、俺の助平仲間が三人いるが、その連中と一晩ずつ交渉して、つまり一回三万円にでもして、小刻みに稼いでいったらどうだ、何ならその連中紹介してやるぜと相手の自尊心を傷つけるような云い方を私はその女に最初したのである。ところが彼女は、十万円の金は緊急を要すので、そんな悠長なこととしてられないから、その人達と寝る約束はするから、私にその金を立替えて今払ってくれとまた図々しいことを云い出すのであった。急を要するといっても色男に貢ぐ金が欲しいのだろう。そんならこうしたらどうだ、とこっちも相手の図々しさに対抗する気で、一度に三人を相手にしてみろよ、と無茶なことを提案した。彼女は最初、その意味がわからず、眼をパチパチさせていたが、いくなれば、輪姦パーティーだ、と私に聞かされてさすがに顔をしかめるのである。そうすれば俺を含めての三人が、会費として、その日、三万円ずつ支払うことになるのだから、てっ



とり早く一日で稼げることになるではないかと私は彼女に話し、こういう輪姦パーティーは今まで俺は何度もやってるが、そう心配したものでもない、などと阿呆なことを云い、とにかくその気になったら連絡しろ、と云って一旦、彼女と別れたのだが、それから幾日もたたず彼女からまた電話連絡があり、背に腹はかえられないから、この間の話、お願いします、と云うのである。こっちは半分、冗談で彼女に話したつもりでいただけに、呆れてしまったが、よし、それまで云うなら、と私も意地になり、早速、仲間に連絡して会費を出し合い、街のホテルへ彼女を呼び出した。

あれやこれやと何時間かけて、彼女をいたぶり、フウフウ汗水たれ流したのだが彼女は肉体的には思ったより貧弱で、ちと高い買い物だったとあとで仲間同志ばやき合ったものだ。しかし、がめつく、図々しい女を無茶苦茶にしてやったという心理的な快感はあった。

だが、それも、一瞬の興奮を通り過ぎてしまえば、また馬鹿な真似をしたものと白々しい悔恨の念がわいて来て、ああした情景は空想していた方がよほど楽しいものだ、と唾棄すべき所業を恥じ入り、それにしても、如何に金のためとはいえ、輪姦プレイなどやらかしたあの女は、後味の悪い思いに悶々としているのではないかと気がかりになり出し、しばらくたって、私は、彼女の勤める安キャバレーへひょっこり出かけてみた。けろりとしてやがるのである。ボックスに坐った私の傍へニコニコしながらやって来た彼女は、この間はどうも、などと云って、ぺたりと坐ると、相変らずの図々しさとかめつさを発揮して、朋輩のホステスをテーブルへ呼び寄せ、勝手にボーイに注文して、どんどんビールを持って来させ、ポンポン景気よく栓を抜くのであった。



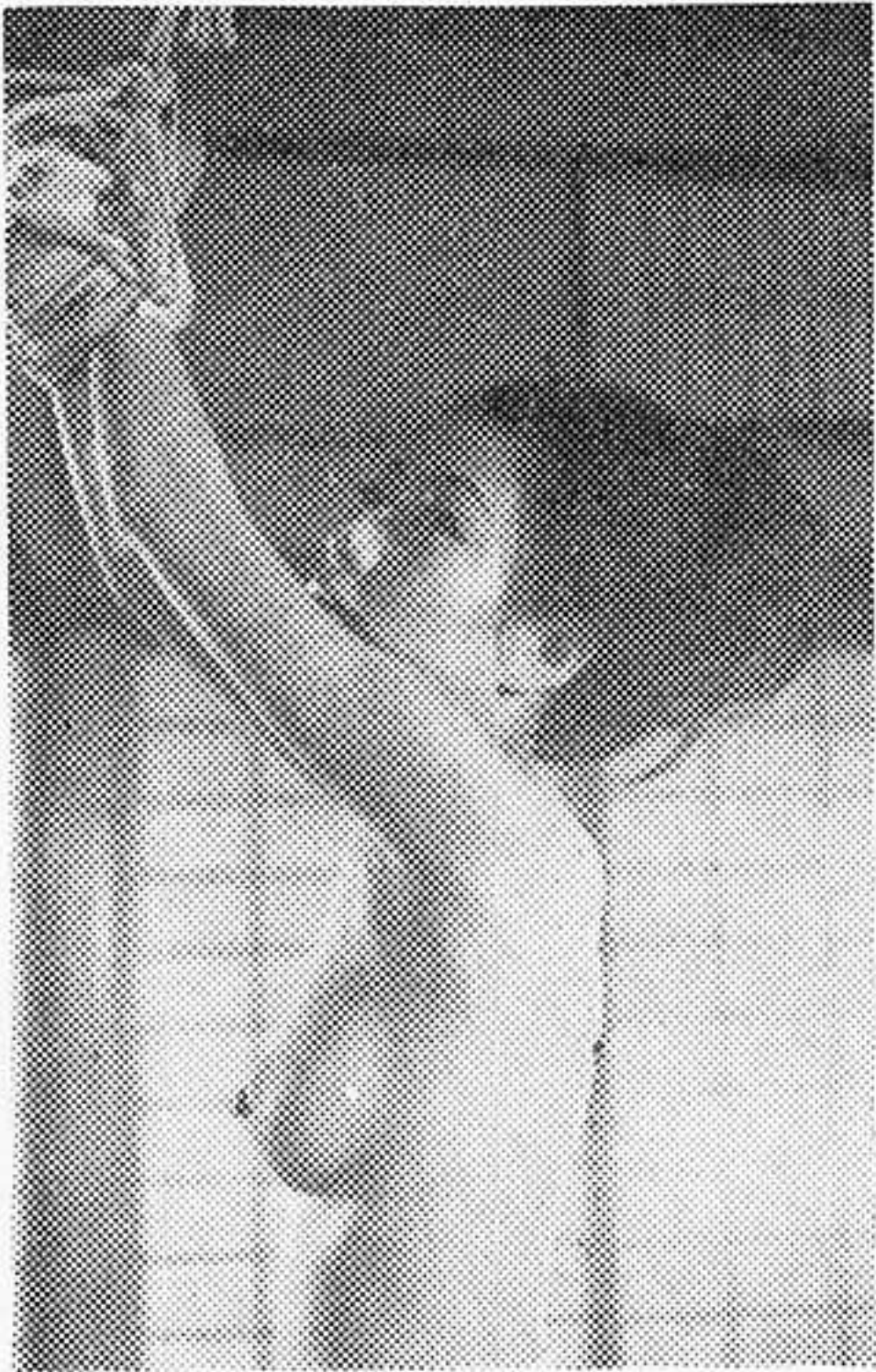
人によって感じとり方も違うだろうが、こんな女などセックスをスポーツのように思っているのかも知れない。この間のようなものはかなり疲れるわね、としゃあしゃあとした顔で吐かすのだが、まるでレスリングのタッグマッチでもしてきた調子であった。女が、あした性行為を演じて、嫌悪の情が走ったか走らないかは、つまり、知能程度の問題になるのかも知れないが、このキャバレーの女の場合は、ああいう変質行為を演じて、十万円にもなったという取引の満足があっただけのようなのである。あんなことを平気でやらかす馬鹿な女はいるものだ、遊んだあとで、仲間同志、自分のことは棚にあげて、話し合ったものだが、女の方は、あんな下らない遊びをして、三万円も払う阿呆な男がいる、と向こ

うは向こうで笑っているのだろう。何でも金があれば買える世の中になったことは有難いものだが、こういう輪姦までさせる女が買えるとは、思いもよらなかった。

金だけの問題ではなく、大仰に云えば、性的倫理の頹廢、若い女性もセックスに対して貪欲になってきたのは事実である。どうせ、セックスをするなら、快感を味あわねば損だと、酒場女の猥談も随分と露骨になってきたようだ。私も、どうせ遊ぶなら、生きているこの瞬間を遊びたいものだと思願しているのだ、最も生きのいい現代的な娘をハントするよう心掛けている。現代的なセックスなんてどんなものかわからないが、古くさい埃をかぶったような懶惰で無気力なセックスより、世相を知る意味においても、ピチピチした現

世的な若い女性とセックスする方が面白い。と思うものの、何度か云ったように、あとに残るのは、空しさと阿呆らしさだけだ。彼女達の図太い神経には辟易することがある。この間、テレビで未婚の女性百人に対するアンケートから、その八〇パーセントが成人式前に処女を失っ

ていることを発表していたけれど、肉体関係にこだわりの感じなくなったのは、いいとしても、私の体験によれば、羞恥心まで欠如してきたようだ。奔放になるのは結構だが、やはり、セックスの場合は、或程度の羞恥心を残しておいてほしいものである。『女性の羞恥心は、女性の本能なのではなく長い間の直接、間接的な教育効果によって与えられた女性の精神的アクセサリーである』と謝国権の本にも書いてあったが、この教育効果がなかった故か、妙ないい方だが、まるでそのコツのわからないのが多く、セックスに入って、羞恥を感じていては、性的魅力が失われるものという風に解釈しているような所がある。たとえば、さっきのキャバレーの女にしろ、ま、これは半玄人みたいなものだったが、丸裸にされて、テーブルに縛りつけられ、両足を二人の男に開かされ、一人の男に棒状の玩具で攻撃を受けるとくすぐったそうに泣くのではなく、笑って、もっと、しっかり、しっかり、などとはざくのである。色気も何もあったものではなく、責めている男の方は何だか小馬鹿にされているようなやり切れない気分になり、私は、ぼんやり礫台に乗った時の国定忠治のことを思い起こした。死刑執行人



の突く槍の手先が狂うので、腹を立てた忠治が、もっとしっかり突け、とどなったという話だが、酔った男の突き出す責具が狂うと、しっかり、しっかり、と音頭をとるなど、全く阿呆らしくなってくる。こんなとき、女はどういう風に悶えれば、男性は官能的に高まるものかということと花と蛇に出てくる鬼源みたいなコーチするのもおかしいので、何だか、気分の乗らぬ思いで、私はひよろひよろ動き廻っていただけだったが、このように淫風渦巻かねばならぬ最中に国定忠治の伝説を思い出させるような女が多くなったようだ。

昔は、性に関心を持たないことが汚れなき人間だという風に若い女性に道徳教育をしていたようだから、それに伴う悲劇もあったようだが、今は性に関心を持たぬ女性も、時代おくれのそしりを免れぬらしい。だが残念ながら頭脳と肉体の発達が並行しないようだ。まるで我が世の春が来たように最近の温泉マージョは昼といわず夜といわず繁昌し、セックスの乱舞時代といった感を呈している。

私が東京にいる時は、ほとんど毎夜、入り浸っている六本木のスナックで、何時だったか顔なじみの学生に逢うと、彼は女子大生二人とスタンドで飲んでいたが、眼くばせして私をトイレの方へ連れて行き、親指でスタンドの女子学生の方を指さしながら、あの右の席に坐っている女の子と今夜、つき合っても

はいかないと云う。つまり、彼女二人は、アパートで一緒に住んでいるのだ。自分と遊びたければ、この友達にもパートナーを紹介してやってほしい。そうでなければ、残念ながら彼の要求を受入れるわけにはいかない、とまあ、こういう事情で、もたついているらしかった。私としては、はからずもお相伴にあずかれるわけだが、残念ながら、その夜は先約があり、学生の希望を受入れるわけにはいかない。それを話すと、学生は弱った顔して誰か適当な人いないでしょうかと云うのだ。誰でもいいから、私の知った人をB子に当てがってくれ、と云い大学に通っているこの学生は、まるでポン引みたいな調子であった。

といっても、女子学生は娼婦みたいに金をとるわけじゃないんだから、お互に遊び合う、という風に気軽に受取ればいいわけで真に男にとつては結構な話なのである。スナックを見廻したが、その夜は相憎、私の知人は見当らなかった。学生は、己むを得ぬといった顔つきでそれからまたしばらく彼女ら二人と酒を飲んで談笑し合っていたが、やがて彼女ら二人と一緒に腰を上げ、勘定をすませて表へ出て行ったのである。

それから何日かたって、そのスナックで私

は学生とまた顔を合わせた。「あれからどうした」と私は、B子に適当な男があの夜、見つかったかと聞いたのだ。学生は、気まり悪そうに首を振り、「仕方がないから、三人でホテルへ泊っちゃいましたよ」と云うのである。あの二人の女子学生と一つ部屋で一緒に寝てしまったということは彼女ら二人と同時に交渉したということ、私はあきれてしまった。勿論、彼は最初のうちはそんな気持はなく、B子の相手を探していたのだけれど、それが駄目だとなると、止むを得ず、A子とB子と一緒に連れてホテルへ入ってしまったのである。A子とだけセックスすればB子がひがんでしまうから——それを彼に告げたのはA子だそうで——彼は、A子とB子二人に依怙^{えい}最^{さい}負^ひなしに愛情を注ぐことになってしまったそうだ。いい加減、疲れましたよ、と学生は云ったがそりゃ疲れるだろう。弱ったことに、自分が最初から眼をつけたA子の方は終始消極的なのにB子の方が積極的で、せっかくA子に当てがっているのをB子が横から手をのばして引ったくり自分の方へ当ててしまふので腹が立った、などと学生は苦笑するのだ。一体、この若い連中はセックスを何と心得ているのだろう。

私も昔は人に教えてもらって、二人の娼婦を同時に相手どったことがあったが、これはかなりその道のベテランがやらかす方法で、この行為にも色々と型があるそうである。だが、こんなことを二十才前後の、しかも、大學生の男女がふと行きずりに知り合い、己むを得ずそんなおかしなセックスしてしまったとすましてこんで人に語る神経には、こっちはとうていついて行くことが出来ない。A子とB子は親友で、AのものはBのもの、BのものはAのものだというぐらいの仲だそうだが何も男性まで共有しなくてもいいように思うのだが。一人の男性と同時に交渉したりしてこの二人の女性は一層親愛感がつのるのかも知れない。それは、一人の女性と互に交渉し合った男達が、貴様と俺とはなんとか兄弟だなどと云ってるのと同じと思われる。道德の上から律っしていけば、こんなセックスなどまるで無茶苦茶だが、私は別にそれは罪惡だとは思わない。性がこんな風に大胆になるのは賛成だが、女性の羞恥心がなくなっていくことを悲しむのだ。いくら、興奮して前後の見境いがなくなっただけとはいえ、人が一生懸命狙っているのを横からひたたくって自分に向けさせたりしてはいけない。また、しっ

かり突け、などというはしたないことを口走るものではないと思っている。私が、マニヤの誰かに羞恥小説とか羞恥責めとかいう名で呼ばれる花と蛇をえんえんと書きつづけて来たのは、こうした現代女性の羞恥心の欠如を歎き、その反動としてではないかと……いや、これは冗談だが。

しかし、A子やB子のような歪^{いびつ}な性関係がいよいよ蔓延するようになった場合、A子やB子がそれぞれ結婚したときを考えてみる。仲のいいA子とB子は時折、逢って自分の亭主について語り合うだろう。そして、片一方の亭主が肉体的につまらないことがわかった場合、じゃ、うちの亭主を使って楽しんでみないかと友情を発揮して自分の亭主を時たま彼女に貸し与え、時には、三人で、まんじどもえのプレイ。おいてけぼりを喰った亭主は真に気の毒な話だ。いや、知らぬは亭主だけで、こんなことはあちらこちらで、たとえば団地夫人の間でも行なわれている、と或る人に聞いたが、まさか、と私は思いたい。いくら男女同権、性的倫理が崩潰した現代だからといって、アブノーマルな世界は、我々マニヤだけの「専売特許に」しておきたいと思うのだ。



告

白

私達の

浣腸プレイ

藤岡江根真

私達夫婦は結婚して七年になります。妻は現在二十七才になりますが、素直な女だと思っています。私のいうことをよく聞いてくれるので、素直ということには違いないのですが、多少、マゾ的要素が強い方だと判断しています。

私はとくにサド的だと思いませんが、普断は人並みの愛の交換でも、土曜の夜だけは決って「プレイ」を行なうことに、特殊な楽し

さを覚えています。

私はこれを、夫婦だけの秘密として、ここ数年間、大切に守ってきたのですが、妻と話し合った上、一度投稿してみることにしました。そのプレイは「浣腸」で、とくに目新しいことではありませんが、私達のささやかな楽しみとしてお読み下されば、有難いと思います。

毎日、多忙な生活環境の中での生活は私ば

かりではないでしょうが、仕事の関係で出張が多く、時には数カ月も家を留守にすることもある私にとって、この「プレイ」は何物にも勝る夫婦愛のキズナになっています。

しかし、異常なムードに酔い痴れ、心からの愛情を注ぎ合える幸福感に溺れながらも、背徳の意識が多少ないとはいえません。時には、こんなことでよいのかと、自責の念が生じることがあるのも事実なのです。

○

彼女が、人一倍のハニカミヤで羞恥心が強い性質にもかかわらず、「浣腸」を好むことを、私なりに推察してみたこともありましたが、勿論、これという結論が出るわけはありません。ただ、そうではないかと思えることは、結婚後三年目ぐらいに、ちょっとした体の変調から、病院で思いもかけなかった浣腸をかけられ、初めて受けたショックの強烈さが特殊な意識と、心理的な影響を与えたのではないかと。ということなのです。

元来、彼女にはマゾ的要素があるようですが、そこへもってきて生まれて初めてのイルリガートルの洗礼は相当なショックだっただろうと思われます。そしてそれ以後、勿論体の調子のためでしょうが、私の留守中に軽便

浣腸を使うようになったらしいのです。

近頃では「浣腸が好き」ということも時たま口にしますが、その当時は「カンチョウ」の「カ」の字も云いませんでした。病院でのことも、あの時に「下しをかけられた」といっていただけで、ショック云々は私が想像するだけで、今だに話をしません。

「軽便浣腸も、出張から早く帰って来た折に使用済みのカラを私がみつけたから、わかったことでしたが、まだ「体のため」と純粋に思いこんでいたのです。だが、その時の私の心の中に、彼女の一人で浣腸をする姿を思い浮かべ、ドキッとするような気持が働いたことは事実でした。

それからしばらくして、何かの拍子に私が「浣腸してやろうか」と、カラカイ半分であったところが、本気で「貴方に浣腸をかけてもらうことを夢にまでみていた」といいだしたのには、却っておどろきました。

その夜が、私の手で妻にしてやった初めての浣腸プレイ？ となったのは勿論です。使用したのは妻が買っていた、市販のイチジク浣腸でした。

内気な彼女が、自らいい出したものの、いざとなると無意識に羞恥を覚えるのは無理な

いと思いますが、それをやさしく抑えつけて白い双丘を眼にした時、私自身が急にS的要素を持った浣腸マニアになりきったような錯覚？ で思いがけぬ感激に浸りきってしまったことを不思議に思います。やはり、それまで具体的に意識しなかっただけで、私にはマニアの素質が十分にあったのでしょう。

その後、日数を経るにしたがい、30ccガラス製浣腸器から始まり、エネマシリンジ、イリリガートル等、いっぱしの浣腸マニアなみの器具類が揃ってしまい、彼女を私が、飼育しているような気持になってきました。

貴誌を知ってから、実感を感じて浣腸記事を読んでいきます。妻は貴誌については無関心のようにふるまっていますが、実際は相当に興味を持っています。

現在は、前述の器具の他に、特に彼女の好む石鹼浣腸のため、イリリガートルは二千cc用で嘴管は十センチほどのフランス製硬質ガラスのものを持っています。この嘴管は貴誌にも余り紹介されていないようですが、先端の太いところは直径約十八ミリもあります。

フランス人は浣腸を好むのでしょうか、色々な嘴管があるそうです。これを使用しますと独特の手ごたえがあり、妻も、他のものとは

ずい分違うといっています。色は茶色です。

カテーテルはネラトンの13号と15号を所有していますが、私は常に施術者で、彼女はあくまでも患者の立場での、大人の『お医者さんごっこ』というムードで、これらを随時、使いわけているわけです。

近頃では、完全な浣腸マニアとして、こと浣腸に関してのことは医学的にもいろいろ研究し、大体、普通の医師程度の知識は覚えたつもりです。

その上で、彼女の体に悪影響を及ぼさないよう常に細心の注意を払いますが、土曜日のプレイの為には前日からコンディションを整えることにしています。つまり、意識的にトイレに行かず、人工的に便秘状態にさせて「プレイ」の効果を、体には無理をさせずに高めるわけです。

○

妻は、風呂上りの火照った体を、ブルーのネグリジェに包んで、布団の上に横たわっています。私が傍らで浣腸の用意をしているのがいやでも眼につくのでしょうか。頬を上気させ、わざとあらぬ方向をみつめたままじっとしています。期待に慄えている胸のたかなりが、ありありとわかり、充分、私の気持をか

きたててくれるポーズなのです。

最初はガラス製30cc浣腸器によるグリセリン浣腸ですが、用意しながら、私達の間にはSM的要素にみちた会話が交され始め、それは、私の手が彼女のネグリジェにかかり、パントイを脱がしても尚続くのです。

やがて私の手の、えもいわれぬ光沢をみせる冷たい浣腸器によって、グリセリンを送りこまれた彼女の表情は、幸福そのもののような恍惚とした風情をみせ始め、軽い吐息が聞こえ始めるのです。私はそんな彼女にわざと悪魔的な言葉を続けて投げつけてやります。妻は、その言葉のいたぶりを受けながら、徐々に効いてくる薬液のため、物心両面からの実感に複雑な表情に変わって、羞恥の悶えを見せ始めるのです。

○
布団の上につり下げられたイルリガートルの中には、真白い石鹼液が約千五百ccの目盛りまで満たされています。黒いゴム管がヌメやかに光り、先端にはすでに朱色の15号ネラトンカテーテルが連結され、ワセリンの鈍い輝きに包まれています。

彼女の好む石鹼浣腸の準備が備ったのを、伏せた顔が感じとって、うなじが薄紅を散ら

せて慄えている風情は、私をいつの時も言葉に尽せない気持ちに導きます。

私は、例によってS的言葉を投げかけながら、彼女の両手をとって後手に組ませ、赤いしごきで軽く縛ってやります。そうして置いてから横臥の形に半身を引き起こしてやるのですが、顔だけは何とか伏せたままにしようとねじ向けている彼女の風情は、私を宇頂天にさせてくれる可愛さ充分です。

やがて、30センチはあろうかと思われる朱色の15号ネラトンカテーテルが悪魔的な言葉と共にジワジワと襲いかかって行くと、彼女の不自由な後手を、もがかしての身悶えが始まるのです。押えている私の掌に、ピクピクと反応を感じさせながら、彼女のもだえが大きくなって行きます。

○
攻撃するのは直径10ミリはある軟質嘴管。襲われるのを期待しながらも、どうしても羞恥にもだえる彼女。

この瞬間こそ、私達夫婦の「プレイ」の最高雰囲気といえるのです。

○
イルリガートルの中の石鹼液は、ゆっくりと水面を下げて行きます。

それにつれて、彼女の白いうなじにまとい

ついているおくれ毛がブルブル慄え、滑らかな肌に汗がにじみ出し、微かだった吐息が、だんだんと激しくなってきました。

ウネウネと這っているゴム管が、彼女の悶えにつれて、生きもののように見えます。

ブルーのネグリジェ、白い汗に光る肌、黒いゴム管。この鮮やかな色彩のコントラストに加えて、「もう……だめ。ゆるして」ときれぎれに哀願しながら、後手に縛られた体をくねらす妻の姿は、強烈なイメージを私に記憶させるのです。

○
このコントラストは、時によりピンク系のネグリジェや浴衣の色模様で変わりますがそれぞれに美しく私の目を楽しませてくれます。

○
千五百ccの石鹼液を満たしていたイルリガートルが空になっていきます。その下の容器に戻されたネラトンカテーテル。15号は、やはりいつ見ても大きく感じます。

私はそれらの器具に注いでいた視線を、妻の依然として後手に縛られたままの姿に移します。

ハッキリとふくれたことのわかるような腹部。必死になって石鹼液の効力をこらえているらしく、白い太腿をピッタリ合わせ、すん

なりした足が伸びたり縮んだりしています。

痛々しい感じがしなくもありませんが、こんなポーズでもがいている時こそ、妻が、じわじわと攻め昇ってくる特有の陶醉感を味わっているらしいのです。微妙なくねりをみせるその白い脚を、後手の両手同様、赤いしごきで縛ってやりたく思うのですが、こちらの方は、どういう訳か彼女は同意しないので、思うだけでまだ実行したことはありません。いずれは実現出来るでしょうけれど……。

呻きや、喘ぎは、どうしても止まらないでしょうが、嘆願することは彼女の場合、よほどの切迫感に迫られなければならないようで、それだけに「我慢出来ない」となれば、限界ギリギリのようです。

自らが望むだけあって、我慢の上に我慢している様子がよくわかります。最初の方で、彼女にはマゾ的要素があるようだと言いたのも、この時の様子から察せられるからです。

上気した頬をゆがめて、固く閉ざした眼や口許にアリアリと耐え忍んでいる表情をみせながら、後手に縛られた体をくねらせ、白い双丘をブルブル震わせて耐え……、いや、楽しんでる彼女の姿は、眺めているだけでも思わず力が入り、一緒に苦しんでいるような

錯覚に陥ります。

○

私達の「土曜のプレイ」は、むろん、その時々で多少の変化はありますが、大体は以上のように二度の浣腸で、時間は平均一時間ぐらいが普通になっています。

S M的な会話は欠かせないものですが、言葉ではずい分強烈なサド候的な私も、実際には本格？ 的に縛り上げたということもないし、ムチ打ちなど考えたこともありません。いわば私達の自己催眠術とでもいうようなもので、あくまでも浣腸の効果を高めるための補助に過ぎません。

妻もマゾ要素は疑いなく持っているようですが、緊縛とか責めとかにこれほど反応するかどうかはわかりません。いずれ一度は試してみようとは思いますが、今のところ妻は、浣腸のダイゴ味を味わうために縛られてもかまわない、という程度で、貴誌の記事にあるように、責めの手段としての浣腸とは、全く逆なように思います。

私もまた、興味や関心はありますが、責めることを目標とするよりも、現在の「浣腸プレイ」の方が性に合っているようです。

○

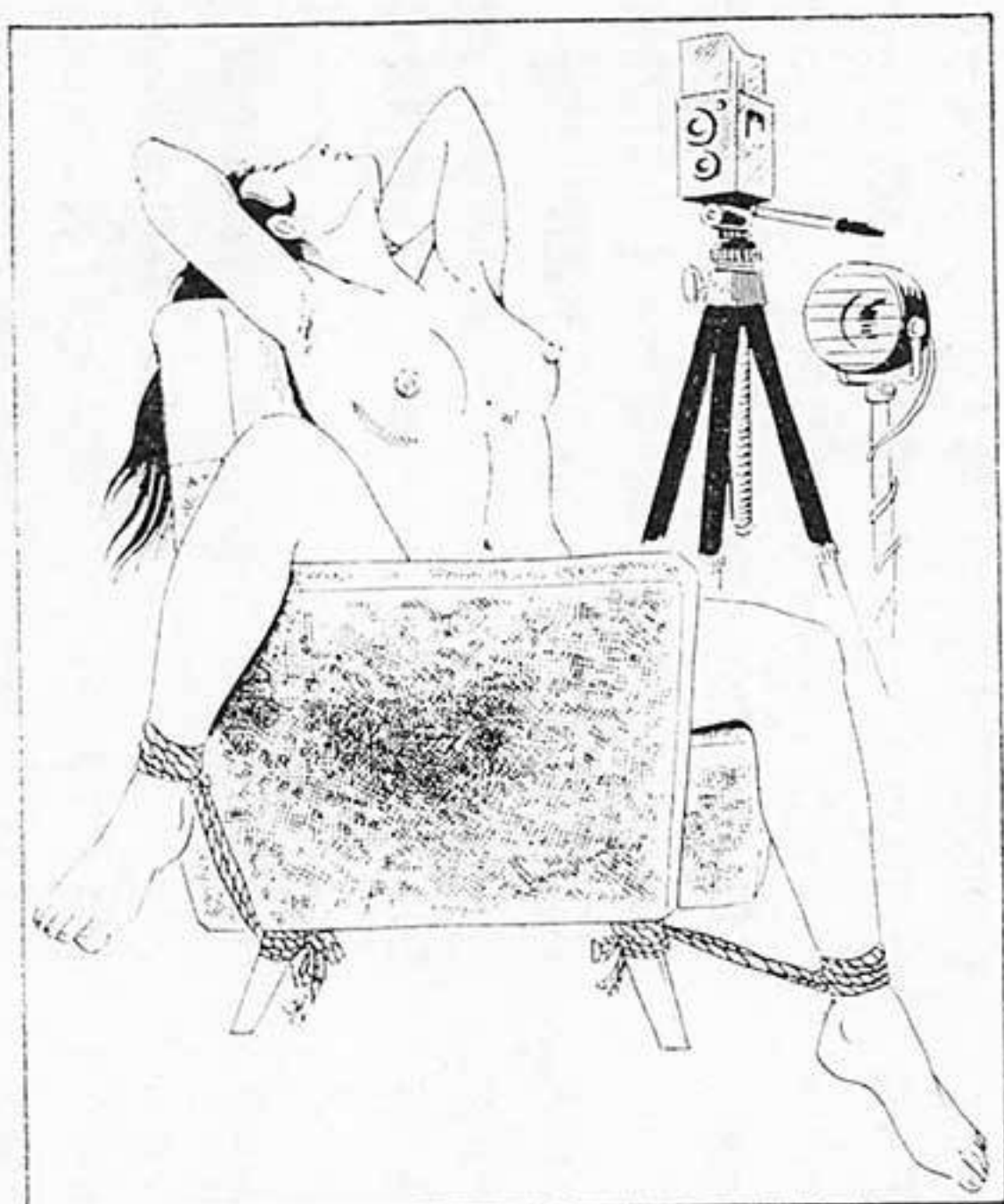
さらに、私は浣腸をすること自体にはずい分とマニアになりましたが、どうもフェチにはなりがたいように思います。貴誌に限らずよく雑誌などには「愛する者であれば、その排泄物も不潔感はない」というような意味のことが書かれているようですが、私は妻を愛している気持は十二分にありますが、浣腸の後始末を眼の前で見たい気持は少しもありませんし、やはり不潔感を覚えます。

その点、女性に最大の羞恥を与えるために浣腸して排泄させるのを見物する……というような小説には、全面的に肯定しかねる気持です。

ですから、前述のように「浣腸の知識」とか「浣腸器具」には大変興味があるし、もっと集めたい気持は強いのですが、便器に関しては欲しいと思ったことはありません。したがって私の家には一つも便器は置いていませんし、妻も「浣腸の処理」は、いつも一人でトイレの使用以外にしたことはないのです。

たまに長い出張で「土曜のプレイ」の出来ない時は、旅館の天井を眺めて、一人味気ない思いで過ごしますが、それだけに帰ってからのプレイは一層高まって、夢のような時間を送れることになるのです。

—おわり—



レンズの中の女

十 人 十 色

第五話 葉子の巻

泉 野 薫

先日、見知らぬ女性から一通の手紙を受け取った。

「前略。突然、見も知らぬ者がお便り申し上げる、ぶしつけを、お許しくださいませ。

わたくし×月×日付××新聞の求人欄で貴方さまの御広告を拝見した者でございます。

二カ月前、不測の交通事故で夫を亡くし、

それ以来、頼るべきものもない身をパートタイマーなどして支えてまいりましたが、この度の貴方さまの御広告に、前後もかえり見ず

お便りをさしあげた次第でございます。

わたくし、当年二十六歳、子供は生んでおりません。もちろんモデルの経験は皆無でございます。わたくしのような既婚者で、しかも未経験な者でも、御写真のモデルがつとまるものでございましょうか。

まことに、おはずかしいものではございませうけれど、わたくしの写真を同封いたしましたので御覧いただき、このような女でも使つてやろうとおぼしめされましたならば、おそれ入りますが、御一報をおねがい致したいのでございます。

夫を失い、この身ひとつを頼りに生きてゆかねばならない、あわれな女とおぼしめしてなにとぞ、よろしくお願い申し上げます。

草々

泉野薫さま

英 葉子拝

なかなか達筆なところはうれしいのだが、どうも内容がベタベタしすぎていて、顔を見ない先から、もうこんな女をモデルにしたら後にどんな事が起こるか、おそろしくなる位のものである。

しかし、同封の写真というのを、ひと目、見て私の心はおおいに、そそられた。

文面のなよなよしているのとは反対に、これがなかなかのグラマーなのである。

多分どこかの海水浴場で写したのだろう。

彼女は膝のあたりまで水に浸して、にこやかに立っている。背景はゴチャゴチャした裸の人の群れだ。モノクロなのが、もったいないほど美しいセパレートの水着姿に、私はしばし見とれた。

フェイスはもちろん、胸のふくらみ、腰のしまり方、ヒップの張り、太腿から下の曲線みな申し分がない。あらわなお臍の恰好まで気に入ってしまった。

二十六歳の家庭の主婦といえ、そろそろどこもかしこも、たるみかけてくるものである。ところが彼女には、それが無い。縄をかければ小気味よく喰い込みそうな、引き締まった肌の持ち主なのである。こんな美人の女房を残して死なねばならなかった亭主は、さぞ死んでも死にきれなかったろう。

私の食指は、いやおうなく承諾にかたむいた。電話一本ですむ事を、わざわざ丁寧な手紙で問いあわせる古風さ、その内容のちよつと薄気味悪いくらいの湿っぽさなども、もう気にならなくなっている。

(こんな女こそ、本当に男泣かせなのかし

れんぞ)

ガラにもなくワクワクして来た。

二

数日後、私をすっかりとりこにしてしまった写真の主は、私の家の応接間で、消えも入らたげに、うつむいていた。

どこか野暮ったいページ色のスーツに包まれているので、もちろん素肌のプロポーションは、うかがうすべもないが、私の目は着衣のあわいをくぐり抜けたくて、ムズムズしていた。

彼女にも、それがわかるのだろう。この部屋に入ってから、うなだれたきりで、ほとんど目も上げていない。私の質問に、「は」とか「いいえ」とか、蚊の鳴くような——というより、なにか吐息をつくような声をあげるだけなのである。

もっとも、私の方も例の下心があるものだから、部屋を飾る写真を最も露骨なものに取りかえておいたせいもあるだろう。

縄を喰い込ませて異常にゆがんだ乳房。

縦に縄を噛まされて悶えている尻。

恍惚の表情。

くくり合わされて、何かに耐えようと握り

しめられた掌。

激しい嵐に吹きなびいている茂み。

これらのクローズアップが、部屋の四方八方から、彼女におおいかぶさっているのである。普通の女だったら、誰でも目を上げられないに違いない。

しかし一方では、素人を相手にしてすこし薬をきかせ過ぎたかな、とあやぶむ気持ちがな

いわけでもなかった。
(こないないモデルにイヤだと言われたら、泣いても追いつかないぞ……)

内心自戒しながらも、もう気持は、やむにやまれぬ方に向かっている。

私はとうとう、モデルに引導を渡す時に使う例の緊縛写真を数枚出して、
「こんなのを撮らしていただければ、普通の倍は、おあげできるのですが」

彼女の金ほしさを刺戟することを忘れなかった。

テーブルに置かれたその写真を手に取ろうともせず、気弱げなまなざしで見ている彼女の頬からうなじにかけて、じょじょに血の色がのぼってくるのを、私はじっと見つめていた。

きめの細かな肌が奥から濡れてくるように

しっとりとうるおいを帯びはじめたと思うと白みかけた空に暁の色がさしはじめるようにほんのりと匂いをおぼらせてくる。

このように微妙な羞恥の色を見せる女を、私はかつて知らない。それとも、彼女にだけ私は特別な関心を持っていたのだろうか。

「どうですか」

全身を羞恥に匂いたたせながら眼を伏せてしまった彼女に、私は返事をせがんだ。

うなだれたまま、彼女の胸がおおきく喘ぎ始めるのがわかった。

膝の上に置いた手が、握り合わされる。

彼女が一生懸命に耐えようとしている内心の激動の激しさが、ちょっと意外だった。がその美しさもまた格別で、私はそれに気を奪われていた。

いまにもとけてしまうのではないかとさえ思われた彼女の姿の中で、うなだれた頭だけが、ようやく固まりかけた決心を見せて、コクリとうなずいた。

「承知してくださるのですね。ウワア、万歳だ」

おおげさではなしに本心からの声だった。恋を打ち明けて、それが受け入れられた時の気持と同じであった。

私の、このはしたないよろこびようで、彼女は遂にたまりかねたように、真っ赤になった顔を両手で覆ってしまった。

その風情を見て、私は、

『ああ、これはいかん。これはいかんぞ』

溺れ込んで行きそうになる自分を、しきりに力なく、しかりつけていた。

三

スタジオに入ってカメラをセットしたりしているうちに、ようやく興奮もおさまってきた。

衝立の向こうに入った葉子は、なかなか現われない。

どたん場になっていやだと言いつくすのではないかと、また心配になってくる。万が一にも、そんなことになったら、たたきつけてでも縛りあげてやるぞ——と、およそプロ・カメラマンにあるまじきことを考えたりしたが、ようやく出て来た。しかし、パンティはおろか、ブラジャーもスリッパさえ着たままだ。

私の思わずけわしくなった目の色におびえたように、葉子は胸を抱いた。

「あの、どうしても脱げないんです……」

膝をちぢめるようにして哀願する。

「まあ、はじめはいいでしょう」

彼女にというより、むしろ自分のいきり立つ虫に言い聞かせた。そして、縄を握むと、

グズグズせずに葉子の傍に寄った。

「背中に両手をまわしてください」

「ああ……」

消え入るようなのだ声をあげて、うなだれながら、それでも両手をオズオズとずらせてくる。

それを引っ握んで、私は素早く手首をくくり合わせた。

棒のような吐息が、なよやかな肩を喘がせている。たったそれだけの縛りなのに、葉子の膝は力を失って、幾度かそこに崩れ落ちかけた。

手首だけくくって、私は葉子のからだを引きずるように部屋のまん中へ連れ出した。そこでゆっくり胸に縄をかける。どうせ一度解いて全部、脱がせなくてはならないのだからと思い、首縄までにとめておく。

「ベッドにあがってもらいましょうか」

背中を押した。葉子はフラフラとベッドに尻をついた。

「膝をくずした恰好で……そう……」

うまいことに、まとめ上げていた長い髪がうなじのあたりに崩れかけた。ガックリうなだれた姿によくマッチしている。

そのままのポーズでアングルを変えながら数枚、撮った。

縄でくびられて突き出た乳房は、なかなかみごとなのだが、スリップとブラで二重に覆われているので、どうも今ひとつ気にくわない。スリップの肩紐を、はずす。大分、よくなった。それだけで、肩のまるみが、いたいたしく、あらわになった感じが、よく出る。「もう少し顔を上げてほしいな。苦しいのを我慢しているように……目をつむって……唇をわずかに開いて……」

指導しなくても、恥ずかしげに上げた葉子の表情は、私の最も望むものになっていた。

美しい眉根をわずかに寄せて、喘ぐようにあごを心持ち突き出した表情は、苦痛と恍惚の入りまじった心の波動をそのまま伝えていくようだ。白い前歯の先端をわずかにのぞかせた唇が、ぬれぬれと光っている。

(経験者かもしれない……)

そんな疑念が、ふと私の脳裏をよぎった。

プロのモデルならともかく、はじめて縛られた心は、なかなかこんな表情はできないもの

だ。苦痛よりも恍惚よりも羞恥の方が強烈で自分をかばおうとするあまり、体の線や頬のまるみが、どうしても固くなってしまふ。

葉子のからだは、羞恥をたたえたまま恍惚の中に、とろけんばかりの風情さえ見せているのだ。

「すごいいいよ。そのまま、そのまま……そう……もっと腰のあたりをよじったように……」

言葉に羞かしさをかき立てられるのか、燃えるように頬を色づかせながら、喘ぎを深くしている。

(亭主が死んでから、どれだけになると言っただけ……ムリもないかもしれん)

勝手にみだらなことを考えながら、私は幾枚となく撮った。

「もう脱いでいただけますか」

いい頃だろうと思って、たずねる。

ハッと葉子は顔を伏せたまま、ウンともスンとも言わない。

「返事をなさらなければ、ぼくの考え通りにしますよ」

無言――

「いいんですね」

念を押しておいて立ち上がった。

葉子がおびえたような目を上げて、何か言いかかったが、もう私の気持は彼女が何と言おうと引込みのつかないものになっていた。

「あ、なにをなさるおつもり……?」

身をかばって俯伏せになったのに半ば馬乗りになって、私はスリップに手をかけると、肩紐を引き千切り、レースの裾をめくり上げて引き裂いた。

「いやですッ、そんなッ……」

「下着ぐらい、いくらでも買ってあげる。自分で脱ごうとしなかったのが悪い」

私はモデルに対するカメラマンという立場を忘れて狂暴な気持に駆りたてられていた。

下着を引き裂くという生まれて始めての行為が、異様な興奮を誘い出したのだ。

私はズタズタに引き裂いたスリップを、縄目の間から引き出しては捨てていった。

「いや、いや……ひどい、ひどいわ……」

半ば泣き声になりながら、この未亡人というにはあまりにも若く美し過ぎる女は、しなやかな身をまるで挑発するようにくねらせている。

ブラジャーのストラップも千切られ、背中

あらわになった背中、くくり合わされた掌が、充血して握りしめられている。

胸のふくらみはブラジャーの上からでも、はち切れそうな弾力を見せていた。それを双の掌でおおうようにして、ゆっくりとずり降りしてゆく。

「ゆるして、ゆるしてエ……ああ……」

必死に髪を振り乱して、葉子は羽搔いじめの腕の中で、小鳥のようにもがいている。

あらわになった乳房は、予想よりはるかにみごとであった。鎖骨の下あたりからじよじよに高まりを見せた双の丘は、そのあわいに深く悩ましい切れ込みをのぞかせて、息苦しいまでの高まりに続いている。その裾を横に区切っているいましめの縄は半ば没し、そのためにやや上向きによじれた丘。頂点の愛らしい木の実のはじけんばかり。ぶるぶる慄えて高ぶりを訴えかけている。

「はずかしい……」

紅の色が、首すじから肩先にまでも拡がった。はずかしいと言ったのは、乳首が内心をあらわに見せているからに違いなかった。

私は我を忘れて、その羞ずかしげに何かを訴えかけてくるボタンを押した。指の下で、それはこころよい、すね方をして見せた。

「いやよ、ね、そんないたずらなすっちゃ、いや……」

うわごとのように口走りながら、顔をグッと仰向けにのけぞらせた。濡れた唇は明らかに口づけを求めている。

「ああ……」

唇が重なった瞬間、葉子は張りつめていたものが私の唇を通して吸い取られたかのように、体の力を抜いた。

棒のような吐息が、おおいかぶさった私の頬に当たった。腰がよじれ、膝が大きく割れた。

私は、ねばっこく吸いついてくるものを強いて突き放すようにして、立ち上がった。

「ひどいかた……」

そう言って顔を伏せた葉子の声も、その姿も、すでにすべてを許している女のそれであった。

再び葉子が年若い未亡人であることが、めくるめくような連想をともなって、私の脳裏をかき乱した。

ファインダーを通して見る葉子の、なにがおののいているような姿は、まさに緊縛の悦楽を絵にしたようであった。

（相手が望んでいるんだ。落ちてしまえば写

真ぐらい、いくらでも撮れるじゃないか）

自分の職業意識を呪いながら、私はシャッターを押した。しかし一方では、

（落ちようとしているからこそ、こんなにいいのが撮れるんじゃないか。一度許してしまつたらなれあいはどうしてもまざってくる。

羞恥と欲望のせめぎ合いの中に身も世もなく悶えている所がいいんだ）

私自身、タンタロスの苦しみをなめているようなものであった。

私はいつも、自分の目がカメラだったと思う。これだ——と思う瞬間のポーズなり表情なりを、そのままフィルムに写せたら、と思うのだ。

ところが実際は、カメラに向かえばモデルは冷えてしまふし、モデルと格闘しているとカメラがのぞけない。

ただのヌードだけなら、こんな悩みは全くないのだけれど、緊縛ものとなると常にこの悩みにふりまわされることになる。

四

葉子の場合、未亡人であるということがまず私の心のタガをゆるめた。そして、縛つてからの彼女自身の様子が更に私をかきたて

た。事ここに到ってなおカメラを忘れなかったということ、カメラマンとしての私の良心を認めてほしいものである。

とにかく私はトコトンまで行くことを決心した。だがしかし、ひとりの女が——男を知った女が——禁欲の果てに我にもなく乱れて行くさまをカメラに灼きつけることだけは忘れまい。

私は葉子の縄尻を取ると、柱の所へ引きたてた。立縛りにしようというのである。あの水着姿で知ったプロポーションの素晴らしさを生かすには、それしかない。

葉子は、ぐったりと為すがままだった。上半身をあらためて柱に縛りつけられても、下半身の力が全く抜けてしまったようで、ともすればずり落ちそうになる。そのくせ膝はキツチリとよじり合わせているのだ。

長い髪を利用して、それを柱に巻きつけ、顔を伏せられないようにした。

「痛い、痛いわ……やめて」

「うつむこうとするからさ。観念して美しい顔をカメラに向けたまえ」

カメラを真正面にセットして、長尺レリーズを取りつけた。

「いやよ、ね、こんなところ撮るのいや」

自由な下半身をよじって訴える。

「今さらなに言ってるんだい。ほら、こうするんだぜ」

パンティのゴムに指をかけて、臍の下までズリ下げる。

「あっ、それだけは……」

ピクッと全身を痙攣させる。

「水着姿の写真を送って来たくらいだから、ヌードには自信があるんだろ」

「そ、そんなこと……あ、もう許してッ」

一瞬一瞬を克明に記録しながら、私は柔らかな布をズリ降ろして行った。私の手の中におさまったそれをあらためた時、私はどうして葉子があれほどまでにいやがったのか、その理由の大半がわかったように思った。

「きみが、あんなに羞かしがったわけがわかったよ」

私は意地悪くそれを突きつけて、言った。

「いやッ」

真っ赤になった。

「きみは、もう一番はずかしい姿を何もかも見られてしまったんだよ」

「ああ……」

「それだけじゃない。そんなところを残るくまなく写真に撮られるんだ」

羞恥の切ない喘ぎが、すすり泣きに変わった。

私はパンティを捨てて、後ろにまわった。

私は鼻を芳香の中に埋めた。両手も遊ばせてはおかなかった。柔らかく重みのある、なつかしいふくらみを、心ゆくまで味わった。

葉子の抵抗は、もはやないに等しい。甘い鼻声をもらしながら、しきりに肌を押しつけてくる。

下肢が誘われるままにゆるむ。膝小僧があののいている。

「う、うッ……いや……」

ピンと葉子のからだだが硬直し、汗とはちがう強い匂いが立ちのぼって来た。

それから後は、あれほど固く決心したカメラのシャッターをおす事も忘れてしまった。私の心は金泥の中をころげまわった。

「あなた……あなた……」

私はハッと顔を起こした。

葉子は睫毛をふるわせ、小鼻をひろげて喘いでいる。その表情からして、さっきの呼びかけは、私に向かつてなされたのでないことは明らかだった。

「ね、いや、止めちゃいや……」

声ばかりでなく、全身でねだっている。

(おや、おや……)

いくぶん冷えかけた気持で、私は内心苦笑した。やつかみ半分に、私はカメラマンの仕事を手を捨てて奉仕者にならざるを得なかった。

(チエツ、最初からこちらは、ていのいいロボットだったようだな)

ぼんやりと「あなたの面影」にひたり切っているような葉子の全身をあらためて見やりながら、この女の実体をあらためてみせつけられたような感慨がわくのを止めようがなかった。

可愛くはあるが、反面あさましくも思えてくる。一時間前にはじめて会った男に、羞かしげもなくこんな姿をさらすなんて――。

私は立ち上がって、別の縄を手を取った。念入りに、女のおさましさを罰する縄をかけてやった。

葉子は恍惚の中に眉をひそめて、かすかに呻いた。いましめが骨身にこたえるのであるう。

が、それだって、いつ快楽に変わらないものでもない。女体に巢喰う魔ものを追い出すことは、遂に不可能であろう。

私は妙にしんみりした気分になって、写真を幾枚か写した後、柱にいましめてある縄だ

けを解いた。

葉子はしゃがみ込もうとして、あっと声をあげた。

いましめが、あらためて存在を知らせたのである。

私はじゃけんに縄尻を引きしぼって立ち上がらせ、小突かんばかりにしてベッドに導いた。ほんのわずかの距離なのに、葉子は幾度か膝をつこうとし、そのたびに呻いた。

五

情感が高まると、まず膝の力が抜けてしまふというのが、女のからだの構造であるらしい。「しゃがんじゃう」という状態である。

それを越えると、皮膚の内側に幾千匹というミズムシが発生したような状態になって、全身が言うことをきかなくなる。自分のからだは別の生き物に占領されつくして、本人はただの傀儡になりさがる。経験のある女だと、自分であられもなく乱れ始める。

縛られてそんな状態になるのは、よっぽど官能の激しい女か、縛られるのに慣れた女でなくてはならない。そうでなければ、縛られたことによって反射的に生ずる自衛本能が、なかなか官能におぼれ込んでしまうことを許

さないのだ。

私は葉子の状態から、縛られた経験ありとにらんだ。それを頭に置いて考えれば、彼女のふるまいは、すべて納得がゆく。

私は、やつかみ半分に、縄をじわじわと締め上げたり前後にずらせたりして、たえだえの呻きをあげさせながら、そのことを聞きだしにかかった。

「さっき、あなた、あなた、なんて甘い声をあげたのは、誰のことなんだい」

葉子の美しい顔は苦痛と恍惚のあいだを行きつもとどろつしながら、微妙な表情の変化をさらけ出している。

「え、なんとか言えよ。そいつにこんなことをしよっちゅうされてたんだろう?」

「あッ……いや、よして……」

ひたいに深いたて皺が寄って、唇がピリピリふるえた。

「言わないんなら鞭でハタきつけるぜ」

「そんなッ、ね、いやよ」

「フン、そんなこと言っていながら、かえって、ほら、こんなふう挑発しているんじゃないか」

「ヒーイッ」

弓なりにのけぞって、葉子は膝をよじり合

わせた。そのまま豊かな双丘を見せて俯伏せに、からだをよじる。

「ぶってほしいんだな」

葉子のそんなしぐさが、自然から発したもののなか、演技なのか、私にはもう見きわめる力を失っていた。

ベルトを抜いて短く持つと、ピシッとうごめく肉塊に打ちおろした。

「ゆるしてッ、いたいッ」

脚をバタバタやる。が、声は全然いたがっているようではない。

（なんだ、やはり、ていよく遊ばれてるんじゃないか）

ピシッ。

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

「いたッ。そんなところをぶっちゃいや」

「なにを、贅沢言うな」

力をこめて、たたきつけた。

「ヒーイッ」

大分こたえたらしい。汗ばんで光る丘の肌に淡紅色のあとが焼きついた。

それから、私は何発か続けさまに打ちすえた。

ピリッと肉体が反射運動をすると、それが肌縄の苦痛を生じ、進退きわまった状態に追い込まれる。葉子は声をあげて泣き出した。

全身が、紅に光り輝いている。この上なく、みだらな、ながめであった。

私は乱れ切った葉子の髪を掴んで引きずり

起こした。なぜか狂暴なものをかきたてずにはおかぬ彼女の姿態だったのである。

「死んだ亭主に仕込まれたんだろう」

掴んだ頭をグラグラゆさぶった。

濡れてかすんだ瞳が、シバシバとまたたいて、かすかにうなずいた。同時に、ハッと胸

打たれる程に強い羞恥の色が表情を彩った。いまましいなにも、いじらしさが迫った。

た。

「ぼくのところのモデルに応募したのは、お金がほしいばかりじゃなかったんだろう」

葉子は髪を引かれて眼尻の吊り上がった顔をハッとそむけた。

「羞ずかしがらずに言えよ。言えないんならこのままあぐら縛りにして引っくりかえしたうえで、剃毛で責めることだって出来るんだぜ。もっとも、そうされる方が、うれしいのかもしれないがね」

「いやです、それだけは許して……」

「じゃ、あらいいらい吐いちゃうんだな。悪いようににはしないよ」

どうして、こんないやらしいことを言ってしまったのか、私にもわからない。「悪いようにはしない」とは、いったいどんなつもりなのか。

この女と深間にはまり込みそうだということが予感されたのかもしれない。それにしても、いやな言葉だ。

葉子が事の真相をかくさず話してしまったのは、私と彼女が他人ではなくなってからのことであった。その時彼女は、もう幾十年の間そうして来たもののように、私の腕の中にすっぽりおさまって、甘えかかっていたのだった。

わかってしまえば、そこら辺によくある話であった。

何も知らずに結婚した彼女は、彼氏の出勤後、本棚の奥からショッキングな雑誌を発見して、こわくなる。

居直った夫はプレイを迫る。勿論、いやらしいそんな要求を受け入れるほど彼女はスレていない。

「あくまでそんなことをおっしゃるなら、別れていただきます」

だが、一度くつついたものが、そう簡単に離れられるものではない。なんとなくズルズル生活しているうちに、或る日、気がついて見たら、夫がなんだか自分につめたくなっている。

夫の心をわが身に引き止めるために、嫌悪と屈辱をのみこんで、いましめを受ける。もっとも、そうまでして引き止めたい彼女の心の中には、深い愛情が芽生えていたに違いないのだが。

一度許せば、もはやそこには飼育と調教への道しか残っていない。彼女は次第に、いましめの中に、めくるめくような快感を見出すようになってゆく。そして、その果てには、もう夫の要求に応えるためにそうしているの

か、自分のいやまさりゆく果てしない欲求を満たすためにそうするのか、わからなくなってしまう。

「でも、はじめはすごく悩んだのよ。そりゃ固い家庭に育ったんですもの」

「悩むのさえ楽しみのひとつになる、ってやつさ」

「そんなんじゃないわ。とても悪いことをしているようで……」

「悪いことをしていると思っているからこそそれだけ楽しさも強いのだ」

「そうなのかしら。夫もそんなこと言っていたようだけれど」

「孤闘の淋しさに耐えかねて、趣味と実益をかねたアルバイトにお出ましというわけか」

「そんな気楽なものじゃなかったのよ。ずいぶん迷ったわ」

「ぼくが、そのケのあるカメラマンだってことは、夫君の遺産のなかで、先刻承知というわけだ」

「想像していたよりひどいことなされたわ。いやらしいひと」

「ゆうべはワクワクズキズキで眠れなかったんだろう」

「いやッ」

「旦那は、どんなのが好きだったんだい」この返事が聞けたのは、もう大分後になってからのことであった。ということは、やはり私が予感していた通りのことになってしまったということである。

もともと世話女房型の女だったのだろう。それに私はそれまで、未亡人をモデルにしたこともなかったし、縛ったことはもちろんない。だから、葉子とできてしまったらどんなことになるか、考えさえもしていなかったのだ。「悪いようにしない」などといったのはほんの口から出まかせであった。

ところが、結果は世話女房をひとり背負い込んだかたちになってしまったのである。もっとも、いたって軽い荷物ではあったが。そして、いつのまにか私が世話をしているようになかたちになっていた。

別に苦情を言っているわけではない。が、このことがヒョんな事件を起こすきっかけになってしまったのである。

張本人は前の第四話に書いたキキとミミなのだが、そのことは次の回にゆずることしよう。

読者論稿



昇華の妙薬

新宿町人

毎朝の新聞を開けば、血なまぐさい犯罪ニュースが多く、三億円犯人に、共感と賞讃と羨望の拍手を送る人々。……罪の意識はうすれ、モラルは地に落ちた。なんともひどい、殺伐な世相といえる。

友人と二人で新宿を歩いていて、ひっぱり込まれた「ヌード・スタジオ」で、いきなり一人二千元宛を請求された。暴力バーさながらの風景。四千元をフンダクられた二人の前で、いなかのウドン屋にふさわしそうなチンコロネエチャンが、ヤケクソみたいにカーデガンとスカートを脱ぎ、怪しげなポーズらしき形を、チヨコチヨコツととって見せたかと思うと「ハイ、おしまい」ときた。

一杯きげんの友人が口をトンガラカス。

「ナニってんのよ。二枚ならこれが相場じゃない。モット見たけりゃあ……」と、ブスは、にくたらしく手を出す。

ぜんぶ脱がせるには五枚……それも、色黒で小便可さいチンコロネエチャンが、だ。

呆れはてて逃げ出したが、街行く若い男たちが皆、欲求不満そうに見えた。

○

私の工房は、編集宣伝企画の立案業。一言でいえばアイデア屋である。ここに二十五才

を中心とする青年が三人、働いてくれているのだが、まだ技術的に一人前とはいえないだけに、充分の待遇はしてやれない。

手取り四万八千円でいだから、アパートの室代を払い、セビロ、クツ、その他モロモロの月賦を払うと、あとは喰うのが精一杯というところらしい。年頃の彼等だからエネルギーも旺盛だろうが、キチキチ生活ではデートも容易なことではないはずである。

十五年前当時の自分を振り返ってみた。

あの頃には特飲店（赤線とよばれた）という合法的インスタント恋愛場があった。ペイは、たしか五百円からだったと記憶する。その当時の二十代の青年の平均日収が、やはり五百円だったと思う。

それが、いまはどうだろう。かりにトルコを例にとってみても、五千円はなければ、いい顔はされない。芸能人か、プロスポーツの選手ででもなければ、青年が一回の入浴に五千円の大金を投ずるのは不可能に近い。

当時一万五千円の平均月収が、現在は三倍になったとはいえ、遊興費の方が十倍ではアンバランスもいいところである。

コーヒー一杯が百五十円という現代で、懷中に十円しかなくても、一着二万八千円のセ

ビロを着て歩かねばならぬ青年層にとって、人間らしいエネルギーの処理などは、高嶺の花に近く、まったくユメも希望もない。

結婚なんかユメのまたユメ。一回のデートだって、お茶代、映画代、食事代、交通費を計算したら三千や五千はかるく消える。恋愛は、おカネで左右されないものだというのが、しかし、おカネがなくては充分にエンジョイ出来ない……と、青年のひとりには、やりどころのない不満をブチまけていたが、もっともだと同情出来る。

○

本誌を知って十七年。私は本誌の愛読によって、エネルギーのかなりの部分をうまく昇華させてきたと、かたく信じている。とにかく誤解されやすい奇ク誌だが、しかし、用いた一つで、クスリも毒となり、毒物も良薬と変ずる道理で、あたまから悪書よばわりするのはどうかと思う。

卒直に言って、私の体内にはMとSが同居しているようだ。そう、Mが七でSが三というところか。だが、私は全面的にSMにおぼれきっているわけではない。アブの世界に興味はもっているが、平常は健全なマイホームに、平凡なワイフと、こども三人をもつ、こ

くありきたりの小市民なのである。

ただ、時と場合により、SとMの血がたぎることがあるのだが、しかし、私はこのSとMを、常人よりよけいもつことを、けっして恥じたりはしない。ことさらに声を大きくしてPRすることもないから、湧き上る欲望を私なりに、ひっそりと昇華させる手段をとっているだけのことだ。

ズバリ言って、その昇華手段とは、本誌を読み、また投稿することであった。

○

おりにふれての投稿は、すでに継続十一年を経過した。エッセイ、告白、小説、通信といった形で、私は自分の欲望をブチまけた。奇ク誌はこの昇華方法を受けとめてくれた。私の知友で、ある実話雑誌の編集者がいるが、この君いわく……「まったくこの雑誌はよい読者をもっている。プロの寄稿家のよせ集めなんか足もとにも及ばない」

都合で、この君には私が投稿者の一人であることは話していないから、このプロ編集者の奇ク誌評は、公平なものを受けとってよろしかろうと思う。

○

なぜ、こんなことを書くかというと、話を

戻させてもらうが、ちまたには欲求不満が原因で頭にきそうな青年がウヨウヨしている。この現実には、為政者は目を向けて貰いたいからである。

自制心のない人間は、不満が嵩じて痴漢的行為に走るかも知れない。そして多少とも教養を身につけ、自制心のある、私のオフィス青年達のごときは、そうした実力発揮もできず、かといって昇華手段もたぬまま、欲求不満のドロ沼に落ちざるを得なく、爆発の危険性を深めはしまいか。

青年たちのことばではないが、ゲバ棒をふりまわす学生のなかの何パーセントかは、あまりエネルギーのはけ口をここに求め、石を投げ、ムダな血を流し、文化資料を破壊し、そしてつかまっているのではないだろうかと思うのだ。

度を越した抑圧は、いつの日か必ず暴発する。それは恐ろしい結果を生むにきまっている……といえないだろうか。

○

奇ク誌7月号が「悲報」をつたえた。

サスペンス・ミステリーマガジン。略してS・M。また発行所の所在地から、私の仲間では「中野」の愛称で呼んでいた。この異色

ある雑誌が、5月号を以て姿を消したのだ。

最近の同誌は、看板どおりのサスペンスものや、宇宙船を舞台にした荒唐無稽とまではいわないが、いささか喰いたらない読物の比重が重くなり、物足りないくらいはあるにはあったが、ひとところの同誌は、十分に吾々の血を沸かせてくれる存在であった。

私としては、惜しい、というより悲しいきもちで一ぱいである。私の知ったところでは一時カンぐったような、ある筋からのどうのこうのというようなことは全然関係なく、まったくの同誌の内部事情に依ることだというから、これは諦めるしかないと思った。

このように同誌の廃刊を悲しく受取る私のとき存在もあれば、逆に「運動」の成功と受取って意気あがる「識者」もあるのではなからうかと想像する。

人はさまざま。うけとりかたも両極端に分れるのは致し方のないことだろう。

○

奇ク誌が、悪書ときめつけられていることはご存知だろうが、私は、くり返し小論を展開するとおり、奇ク誌を悪書だとは断じて思わない。

存在価値のないものなら、二十年以上も読

者に支持されることはないだろう。古書市場で、単行本ならいざ知らず、モノによっては定価の三十倍の価格で、なお全冊揃いを入手することなどは不可能に近いという事態を生ずるわけがないだろうからだ。

問題は、その扱いかたにあるだろう。

○

かつて「相対」という機関紙があった。現在の存否は知らないが、この相対、および刊行者についてのエピソードは、本誌にも発表されていた記憶があるが、同誌は会員制で、指名者以外は絶対に手にとることもゆるさずいかなる場合でも、貸出禁止。親兄弟といえども、本人が見せた事実があったら即刻、会員資格、剝奪。以後送本停止。というようなきびしい戒律が守られていたそうである。

心ゆるす先輩A氏の手許に、この「相対」があると聞いて、きわめて親密な交際をよいことに、それまでの気楽な「秘蔵資料拝見」同様に頼みこんだ。しかし、これだけは頑として諾いてもらえず、内心不服に思ったものだったが、前記の戒律があることを知って、驚嘆と納得と感心とを同時に味わった思い出があるのだ。

なぜ、相対の発行所は、かくまでもきびし

い戒律を読者に強いたのだろうか。

悪書だから——？

絶対に「ノウ」である。

タメにならないから——？

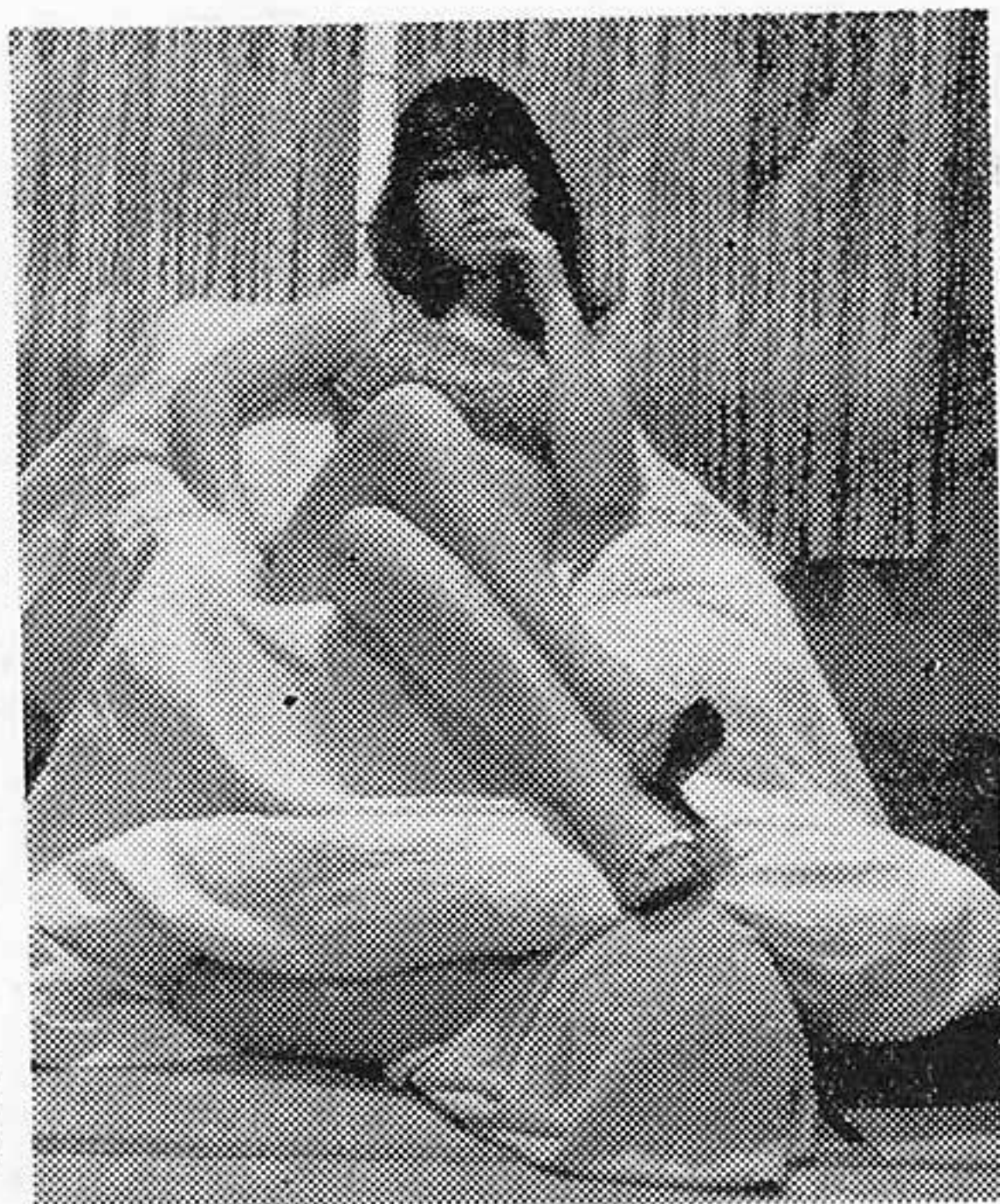
冗談ではない。りっぱな研究書として、学界からもその業績を認められていると聞くほどのものだ。にもかかわらず、一部に誤解されたまま、今日に至っている。

しかし、あの時、断わられながらも私は、A氏の断乎とした態度をリッパだと思ったものだ。

○

書かれてあることが、誤解を招くおそれがあれば、その扱い方を慎重にすることも必要なことで、本誌も、悪書とか、誤解だとかを議論することとは別に、扱い方に気を配るべきだろうと思う。絶対にそんなことはないと思うが、かりに本誌が「識者」のいう「毒」だとしても、使い方一つで「無二の妙薬」になるのだ。私はこの「妙薬」を益々繁茂させたいと願うものである。

サスペンス・ミステリー誌休刊の報に、本誌の重要性を一そう痛感するままに、ペンを走らせた次第である。



男性虐待快樂術 (第八話)

BAR・SADO物語

前篇

馬族 保

(六)

一昨年の十一月、名越真澄は、東京の新橋にあるSMバーを訪ねたことがある。

SMはスタンドバーだった。奥まったところにテーブル席が一つあるきりで、あとはカウターの固定椅子が十脚ほど並んでいた。

壁には誇示するように二カ所に鞭の飾つけがしてあったが、そのほかは普通のスタンドバーと何ら異なるところはなかった。違ってるといえば、備えつけの書棚に、SM雑誌が発行ナムバー順にキッチンと整理されている

風景ぐらいなものだ。

真澄がドアを押したのは、午後八時すぎであつたが、まだ客はなかった。若い女が二人いらっしやいと声を揃えて迎えた。カウターのの中には、ママらしい三十代の女とバーテの男が食器を洗い、つき出しの料理を準備していた。

テーブルの席を占め、ビールを命じたときから、名越真澄は、来るのではなかったという後悔が先に立った。

お目当ての女達は何よりもお粗末だったことだ。ママは三十代、小柄で色が黒い上に、

瘦っばち……如何にも皮膚がカサカサに乾いた感じだった。ふたりの女はママよりもっと若く、京子が二十一、二、もうひとりとは二十四、五だろう。真澄の記憶に残っている女は京子ぐらいである。京子は身長一五八センチぐらいだったが、肉付きがよく、丸顔の笑うとエクボの出る可愛い魅力があった。

京子は、彼女の本名だといった。『痴人の愛』の安田道代の話が出ると、「京子も、ナオミという名にしとけばよかったわ」といったり、

「ムチあとのミミズ腫れを作らない打ち方が

あるの。ムチを何本も結びつけてうつよ」
問わず語りに体験の片鱗をチラッと覗かせたり、

「Mって、男のくせに、女に撲られたり踏まれたりされながら、怒ることも知らないみたい。ほんとうに馬鹿みたい」

と、こちらの底から蔑むように罵倒したりした。

「お客さんは、Mでしょう」

「そうだ」

真澄が小さな声で答えると、

「そうでしょう。京子、すぐわかったわ。Mは、どことなく気の弱い、臆病な眼をしてるの。好みは、どんな？ ムチが好き？」

「僕は、ムチは嫌い。美しい脚が好きです」

「ふうん。ネクタール飲む？」

「いや、飲まない。汚いと思う。ただし、最高級のハイ・レディのなら、飲むかもしれない」

「じゃ、何がほしいのよ。ちっともハッキリしない男ね。あたま、カチ割ってやろうか」
名越真澄の脳裏に、現在もはっきり灼きついている。そのときの京子の眼に、あらしのように横切った狂暴な光りを、忘れることが出来ない。真澄は思わず身ぶるいした。彼の

場合は、まだ歳も若く、M趣味も薔薇色のロマンチズムでしかなかったし、あこがれでもあったのだから、重症患者とは程とおいへだたりがあった。

真澄は、あわてて話題をかえた。

「ママとあのひと——もう一人の女——はMですか」

「ううん、SもS、ママさんののは、年期が入ってるの。それはもう、凄いんだから」

「へーエ。いくらSだからって、あんな痩せぎすの、何の色気も感じない女では、魅力ゼロだな。僕、帰るよ」

会員になるようにとすすめる京子をふり切り、すっかり不愉快になって、高いビール代を払うと、真澄は外に出た。

今もそのSMバーは、雑誌に広告を出している。しかし真澄は、上京しても二度とその店に寄る気にはなれなかった。うす汚い、何か貧しい職業の匂いをかぐ思いがし、薔薇色のあこがれが、むざんに踏み荒されたような、うそ寒さだけが、淬になって溜った。

名越真澄は二十九才の今日まで、永いあいだ理想の女王像にあこがれていた。

美貌だけではためである。長身のグラマー

でなければならない。ウエストが美事にくびれていること。乳房が前方に真っ直ぐ張り出していること。脚は太腿を中心にWの字型に発達し、ふくら脛から足音にかけて優美に延び切り、甲はあくまで高く、指の線がキューツとつまっている。足の爪は、磨きあげた貝殻のように、さくら色を帯びて列び、指の関節のくぼみが可愛いエクボのように蠱惑的であること。従って脚は肉付きよく、なだらかに長い。足は甲高で、土ふまずが深く切れている。どんな美貌でも、肉体美でも、扁平足では落第である。

それから、最も肝腎なことは、女性上位の思想の持主であること。貴婦人の驕慢さと残酷さを具えていること。旺盛な性的快楽者であること。

名越真澄は、虹の幻想を追って、現実の世界を遍歴する。現実の女神像は、容易に発見できないことを百も承知していながら、優美への憧れは年とともに募るばかりである。

名越真澄は、これまで幾人かの美女の足許に跪ずいて、女王の座に君臨してくれるように懇願した。すると、彼と恋仲にいた女性までが、その瞬間から、遠のいてしまうのだった。

真澄は深く悩み、大きな苦しみへのたうつ十二月上旬であった。——街には、早くもジングルベルの音楽が拡声器から流れ出していた。

秋日和のように空の青く晴れあがったある日、川端商店街を歩いていると、はからずも十字路の街角で、二組の男女の演ずる愛憎の葛藤劇を目撃することになった。

(七)

三十二、三の皮のジャンパーを着た男は、うしろから蹤いてくる背の低い、彼の妻らしい女が、接近して何か口走ると、いきなりその頬を撲りつけた。女の身体がヒヨロヒヨロと泳ぐ。それでも、女はベソをつくり、男の傍に武者ぶりつくようについてゆく。男の横に並ぶと再びその太い拳が女の頬を、強い力で打ちのめした。女の身体は、アツという悲鳴をあげて、路上に横転した。鼻柱をしたたかに打たれたとみえて、みるみるうちに鼻血が噴き出した。往来の人群りが人垣をつくった。女の眼から、とめどなく涙が溢れ出した。女は小さく瘦せた肩を、波のようにふるわせながら、嗚咽した。

もう男の姿は、二〇〇メートルの先に距た

っていた。

醜い女は嫌われる。どんなにところが美しくとも、容姿の貧しい女は虐待される。

真澄は胸の奥からこみあげてくる激しい憤りに、遠ざかる男のうしろ姿を、ぐっと睨みすえた。

そのときである。

名越真澄は倒れた女の哀れな姿を如何にも嘲笑するようにすくと立って冷たい微笑さえ浮かべながら見降ろしているミンクの毛皮を着た長身の美貌の女性を、そこに認めた。

名越真澄は、これほどの女性と今まで会ったことがなかった。

名越は女の脚をみた。ミニのスカートから露出した脚は、すうっと伸び切っていた。肉付きがよく、長い。銀色のブーツを穿いているので、足の恰好は見えないが、ふくらませる線から想像して、垂涎の美しい足にまちがいない。

真澄の視覚が、ポーッとかすみ、あたまたに血が昇った。

女は商店街の左側の通りを祇園町筋の方向にあるき出した。実にさわやかなスタイル、足捌きであった。

名越真澄は、チヨダ・マンションが祇園町

にあることを、むろん知らない。そして、女が、そのマンションに住む鹿沼妖子であることも。

真澄は、十メートルも離れない間隔を置いて尾行してゆく。

川端通りを抜けて、路を左に曲り、櫛田神社の石段下まで来たときだった。うしろから追いついた新車が、音もなく停まった。

車の後部のドアがあいて、一人の青年が降り立った。車は、そのまま馳り去る。

「妖子さん！」

青年——福童健一は、あたまを下げた。オドオドとしたその態度には、一種の卑屈な感さえ、漂っている。二こと三こと話していたが、男が、女のミンクのオーバーを引っ張って、どこかへ誘っている様子であった。

「馬鹿っ」

たしかに女は、そう叫んだように思う。しかし声が小さいので、名越の耳まで届いたわけではない。女の手首がしなって、男の頬に平手打ちがピシリと音をたてたとんだ。男の身体が崩れた。女のブーツの足許に両掌をつくと、額を地面にすりつけて哀願し始めた。

女は、哀願する男のあたまを、ふみにじるつもりだったのだろう、ブーツの足をあげた

が、その光景を凝視している真澄の姿に気づくと澄ました表情で、すたすた歩き出した。

「凄い！」

真澄は夢中だった。そこから百メートルと距てないチヨダ・マンションまで、女のあとに蹤いてゆき、三階の妖子の部屋の三〇五号室のチャイムを押した。

「もう、どうにでもなれ。当って砕けろだ」
恥も外聞もなかった。遮二無二、彼の心情を訴えたいと思うのだった。異常な興奮がそれを少しの抵抗もなく、実行させた。

「どうぞ」

拍子抜けがするほど、案外、スラリと返辞が来た。

ドアの把手を引いて中へ這入る。

「いいわ。お上りなさい」

「上っても構いませんか」

「どうぞ。尾けているの判っていたの。その椅子に坐って、待っていらっしやい」

女は隣の部屋で着換えをしているらしい。

真澄は、真紅の絨緞の応接セットの椅子に腰をおろした。深呼吸を三回し、気を鎮めようと努めた。

二十分ばかり経つと、女——鹿沼妖子は、絹ピカのガラガラ光るガウンに着換えて現わ

れた。足には、ガラスの透明のサンダルを穿いている。

「おお。——」

名越真澄は、おもわず感歎の声をあげた。前の椅子に掛け、高々と脚を組んだときの神々しいばかりの性的魅力に、眼がくらんだ。

「お願いです。僕を、……僕を、……」

絨緞の床に跪いた。

「わかってるわ。わたしの奴隷にして欲しいのでしょう」

妖子は、耳飾りの琥珀のユラユラ揺れ動く顔を、ほころばせながら、うなずいた。

「——」

名越真澄は、妖子の顔をあおぎみた。

「わたしの足許へおいで」

妖子は細巻をくわえた。

「火」

真澄は急いでテーブルの上のライターを点火する。妖子はさもおいしそうに深く吸いこみ、ゆっくり紫煙を吐き出した。

真澄は膝行する。

「奴隷、恭しく、わたしの足にキスおし」

ガラスのサンダルの足の前につき出して命令されると、真澄はその足を両掌にうけ、人間が神様に命を捧げる儀式のように、体中の

情熱を唇に集め、妖子の足の甲に接吻した。香水の匂いがする。三分……五分……無我の時間が経つ。

「ああ、気持ちいいわ」

妖子は足をひいて、真澄の後頭部をふみ、床に押えつけた。

「お前の職業は？」

「写真業です。ナゴシ・スタジオ」

絨緞に伏せた顔を、辛うじて横にしながら答える。

「ふうん。——年令」

「三十五です」

「名前」

「名越真澄」

「わたしの奴隷になりたいか」

「はい」

「わたしには、奴隷が五匹いる。お前で六匹目だ。犬になるか」

「——」

「犬だよ。わたしの快樂のために、奉仕する犬になるな」

「はい」

「わたしは、第一級の貴婦人だから、贅沢だよ。女王の贅沢のために、お前の財産の一部をわたしに献げるか」

「――」

「献げないときは、ふみ殺してやる。ほら、こうしてやる」

サンダルの踵を立てて、後頭部を錐もみにふみにじる。

「あっ、痛い。女王さま、お許し下さい」

「ふ、ふ、ふ」

「お許し下さい。あっ。――献げます。必ず財産の一部を献げます」

「ようし。――それでは、洋服を脱いで、下着一つになれ。奴隷の資格があるかどうか、試してやる」

名越は上着を取り、ズボンを脱いだ。

「奴隷第六号、名越真澄。褒美を取らずぞ。」

妖子女王さまの足の裏を万遍なく、お前の舌で拭き清めろ」

灰皿にたばこを揉み消し、妖子は、下着をとおしておくる男性の変化を観察しようとするのだった。ズボンを外したときから、もう名越の下着は、はっきりした徴候を示していた。

鹿沼妖子は、真澄の奴隷を確認すると眼を閉じ、彼女の魅力のとりことなった男を、意のままに従わせる愉しさで陶醉していった。

(八)

直接に手に持って拭くりノリウム油の雑布は、凍るように冷たい。まして十二月である。しかも驚いたことに、客の靴底でよごされたリノリウム床を掃除している里見晃吉は、跳足^{はだし}だった。

奴隷に憐憫は禁物だ。木暮ナナの貴族趣味はそこまで徹底していた。彼女の贅沢と美貌と快楽は、すべて男の犠牲によって、培われる。晃吉のみじめな姿を目のあたり見ることで、あらゆる享楽の源泉に繋がるのである。

晃吉は、かじかんだ指に、ハア、ハアと息を吹きかけて、わずかな暖を探る。

彼は広島市の郊外に広大な果樹園を持っていた。五十歳といえば、これからの人生だ。娘夫婦に果樹園の経営を譲って、楽隠居し、のんびり余生を愉しめばいいのに、何を好きこのんで、木暮ナナの奴隷を志願したのであろうか。

性の受難者――里見晃吉の黄昏の縮図が、そこにはある。

預金通帳と印鑑を晃吉から取りあげると、ナナは、隣接の靴屋の敷地一〇〇平方メートルを買収した。それから、店舗改造に着手した。B

AR・SADOは、一カ月半を経ずして、目も奪う新装に衣更えした。

天井の二カ所に、ミラーボールが屈曲した光彩を投影しながら、ゆっくり廻っていた。カウンターに向かって椅子が二十脚ばかり並び、ボックスが五、テーブル八というホール^{ホール}の広さにかわり、客の趣味を充分生かしたサービスに切り替えた。ホステスも十名増員し臨時に鹿沼妖子の応援を得て、花を添えることもあった。

里見晃吉は、リノリウムを拭きあげると研磨機に電気を入れて、最初に拭いた半乾きの床から、磨きはじめる。

昨夜泥酔して、密室に泊りこんだナナが、外出の装いをし、豹の毛皮を纏い、階段をコツコツと靴音をたてながら降りて来た。あたまた、白いターバンを巻いている。

ジロリと視線を晃吉にくれる。晃吉は、研磨機の始動のボタンを切って作業をやめ、床の上に膝座すると、二つの掌を揃えて伏せ、その上に額をつけて、おじぎをした。

「――」

ナナは小鼻をふくらませるようにして、空気を吸った。リノリウム油の匂いがツンと

鼻孔を刺す。ナナの視線は、床の隅々まで視廻して、落度がないかをたしかめる。

老醜の人間ボロがナナの美貌の威厳にうたれて、濡れた床に平伏している。髪の毛のうすい頭をナナの眼の下にさらしながら。

木暮ナナは、晃吉を豚のようになぶり殺しにしたいと思う。ハイヒールの踵を後頭部に突き立てて、ふみ殺したら、どんなに気持がいいだろうと思う。

晃吉が、性具になって奉仕するときは、使用人ではなく、ナナの恍惚の刺激剤に変身する。ナナは、晃吉の肉体を答うち、快楽の生贄にするために苦痛を与え、陶醉の頂上をきわめる。

三時間もかかって、責めさいなむ。

一週に三回の割で虐めぬく。

里見老人は、日毎に憔悴し、痩せ細ってゆく。

「じじい！ 早く死ね。しゃぶりながら、死ね」

足の裏で咽喉を締めつける。舌の奉仕のときは、背にムチの雨を降らせながら、豊かな双つの腿の下に挟みこみ、体中の重みを加える。

晃吉はゼイゼイ咽喉を鳴らしながら、眼を

閉じて陶醉するナナの快感のために、精魂のすべてを捧げつくすのである。

ナナは、今も、冬の冷たい床に這いつくばっている哀れな男の姿を見ると、ムズムズと加虐の情炎が燃えあがって来るのだった。

「じじい、今晚十二時にマンションに來い。不老長寿のくすりを飲ませてやるから」

ペツと床にツバを吐いた。

「犬、吸るんだよ」

里見晃吉は、それを吸い取った。

興奮から醒めて、彼にあたえられた六帖一間きりの部屋に帰ると、ひしひしと襲いくる孤独感のなかで、身を揉み、身体をふるわせて泣いた。

外出は一切厳禁である。

部屋の壁に、木暮ナナの水着の裸身が、大型のエア・チェアに脚を八〇度にかけて掛け、その足下に、端間泉の額をすりつけて押込んでいるうしろ姿の等身大の写真が貼ってあった。

ナナは、晃吉を十日も近づけないときがある。

そんなとき、晃吉はナナの写真を見て、興奮し、自慰に耽るのだった。里見晃吉が、いつか蒸発することはまちがいない。

國その日のために、ナナは彼女を受取人とする千五百万円の生命保険に加入している。

「おいぼれめ、いい加減にくたばれば、いいのに」

「最近、目立ってくたびれて來たみたい。ナナ、あいつを喰いものにしてるのと、ちがう？」

「ううん。わたしが喰わしてやってるの。以前、わたしの経済を少し助けて貰ったことがあるから、わたしは、恩に着てるのよ」

「フーン。ほんとかしら」

「本当だってば」

「それにしても、ナナの責めかたは、普通じゃないわ」

「助平じじいよ、あいつ」

「ほんとうかしら」

「ほんとうだったら。妖子のばか」

木暮ナナと鹿沼妖子が、ある夜、店をしめたあと、取り交した会話である。

(九)

むかしの赤線地区、福岡市の花街を柳町という。昭和四十一年秋、柳町の中央に『北京飯店』が中国風の意匠を凝らし、地上五階に建ちあがった。夜景が殊のほか豪華だった。

あおい水色の照明が、建物をくっきり浮彫りにし、まるで竜宮城が宙にうき出したような景観を添え、柳町の方角が一目でわかった。

鹿沼妖子は北京飯店の娘で、男二人、女三人兄妹の末っ子に生まれた。

父は中国人、母は日本人だった。

高校三年のとき処女を失った。

高校生時代から、彼女は奇行が多く、先生の間では、いつも問題の生徒だった。

肉体の発育が早く、その瑞々しい性的魅力は男の生徒達の憧れの的になった。三年の夏好きになった大学生と海岸に出かけたが、あっさり肉体の交渉をもった。

むしろ、妖子から挑んだのである。

その恋人の大学生も、始めての経験だったらしく、ぎごちなかった。妖子は失望した。

セックスってつまらないわ、と思った。それを機に、妖子は他の男とも関係をもった。

妖子の金放れのよさは、眼を瞞るばかりだった。ボーイフレンド達は、彼女を女王として崇めていた。妖子の意に従わぬ男は、ひとりもいなかった。

ある冬、金沢に旅行し、酔っぱらった妖子が、五人の男達に彼女の暖を探るために、人間寝台になるように無理強いたところ、男達

は遊戯のつもりで、キャツキャツと笑いながら、受入れたことがある。

桃井先生との交渉ができたのは、その直後だった。桃井先生は、そのとき二十八歳、独身だった。

妖子は前々から、女生徒間にたいへん人気のある桃井先生が好きであつたが、ある夜、街角で桃井先生と会い、食事に誘われてフランス料理を食べたあと、そこで妖子から、彼に対する好意の言葉を聞いた。

「僕も、前々から妖子が好きで好きでたまらないんだ」

桃井先生は、眸を輝かせていった。

ホテルへ誘ったのも妖子であつた。

「教師と生徒の恋愛は、ご法度だ。子供でも生まれたら、たいへんだ。いまは肉体交渉をもたぬことにしよう」

桃井先生は、妖子の軀をバス・ルームで洗ってやり、寝台に横たえて全身マッサージを施し、全身キスから、舌の愛撫を行なった。

鹿沼妖子の性的開眼は、桃井先生によって初めて開花に達したのだった。

鹿沼妖子の熟れ切った肉体は、三日ともたなかった。彼女は快樂の道具に、六人の奴隷

を飼っていたが、単調に飽きると、面食いの妖子は、氣に入った男なら、積極的につまみ食いも辞さなかった。

相手が熱をあげてくると、もう、いやになった。典型的なラブ・ハンターである。

そういえば、あれから、もう一年経っていた。

福童健一の境遇も、妖子の奴隷に落ちていた。

恋をするなら、本気に惚れてしまわぬことだ。健一のように、妖子に首ったけの感情を必要以上に告白したのでは、危険である。なべて若い女は、煽てられると、すぐつけあがり、相手の男を低く評価する本能をもっているからだ。

鹿沼妖子は、健一を征服したときから、童貞の男に味をしめ、童貞狩りに主眼をおくようになった。童貞をいたぶるときの愉しさ。ヒイヒイ悲鳴をあげ、鼻にかかる声音をふるわせて哀願し、すすり泣くりズムは、腿を直接に羽毛で撫ぜられるときのように、腹の底まで泌み入る快感を覚えるのだった。

妖子には新発見であつた。そんな男に限って、自己を律するにきびしく、惚れた女性には寛大である。恋する女に節操を守りとおす

のである。

妖子のところが、健一から離れてゆくと、彼はもう裏切られたように、面罵し、怨みつらみの言葉を吐き、きつと死んでやる、とどこか騒ぎようであったが、妖子は平然としていた。一ことも反応を示さなかった。結局耐え切れなくなったのは、健一だった。床に跪ずき、妖子の両脚を抱いて、オイオイ泣き出したのであった。

その場になり、初めて妖子は口を利いた。「健一の顔、見るのもいや。吐気がするわ。わたしの傍にいたいんだったら、一つしかないわ。わたしの奴隷になるのよ。それなら、傍に置いてあげてもいいわ」

決定的な宣言だった。

福童健一が、こどものように激しく泣きじやくりながら、美しい魔女の、輝く二本の円柱の間に屈伏し、舌の奉仕を続けるときの快感は、そこから、魂が脱けてゆくのではないかと思うほどであった。

鹿沼妖子は、これが最高にぜいたくな快樂だろうと思う快樂を、ほしきままにした。

妖子が童貞狩りに味をしめたのは、それ以来のことである。

名越真澄は、妖子には、思い設けない拾い

ものだった。彼は理想主義者である。二十七歳のとき、あるキャバレーのホステスと恋仲になり、童貞を捨てた。情事の最中に、女から唇を求められたが、不潔感が強くて、許さなかった。二人の仲は、間もなくだめになった。名越は、女性に失望した。理想の女神へのあこがれは、いよいよ募っていった。真澄の唇は清潔である。それを知ったときの妖子の欣喜ようは、たいへんなものであった。

「そう。そういえば、確かにそのようだわ。その唇も、わたしのものになるのね。ああ、興奮しちゃうわ」

目下、名越真澄は、△鹿沼妖子のすべて▽を、アルバムに収めるために、彼女の希望するポーズで制作中である。

妖子は部屋にくつろぐとき生まれたままの姿でいるのが好きだった。ボインが直線を描いて、分厚い胸の前面につき出し、恰好よくすわっている。腰がぐっと大きく張り出し、それと対照的にウエストがキューツと細まり太腿から膝にかけての線は、砂糖菓子のように艶をふくんでなだらかにつづく。膝を区切ってふくら唇、足首へとつながる。それから名越真澄ほどの理想主義者が一目でぞっこん参ってしまったという、きわめつきの甲高の

足。よく磨かれた爪が、さくら貝のように艶を帯びて、足指の一本一本に鏤ちりばめられていた。

妖子が、彼女の奴隷達に、全身美容の手入れをさせるときも、そのスタイルで寝台に横たわるのが常であった。

アルバムに収めるポーズを、妖子は水着にしたいが、真澄の意見はどうか、と訊いた。珍しいことである。妖子さまなら、どちらのポーズも、カメラマンの立場なら、撮りたいところでしょう、と彼は答えた。

妖子も同意見であった。早速、水着のポーズから撮りはじめた。

——ポーズ第一景。

高い背張りの肘付の大型の籐椅子に、洋ふとんをかぶせ、その上に凭れ、長々と下肢を伸している妖子。椅子の下には、福童健一が俯伏せになって、カメラの正面へ頭を向けて臥している。その姿勢は、ふとんの下から、頭と肩の部分が露出し、妖子のサンダルヒールの足の先が健一の頭をふみ敷き、右掌を腰に当てがい、左手はたばこをくゆらしている。そのポーズは華麗であった。

名越は、同じポーズを二枚ずつ撮ることにした。

——ポーズ第二景。

前景と同じ道具を使用する。

前面に健一が、両膝を揃えて正座し、二本の腕をつっかい棒にして首筋を立てると、その頭をサンダル足台にして、一方の脚を高くと組んでいる妖子。今度は左手を腰にあて右手にたばこを挟んでいるポーズである。

前景のきびしい表情と違って、ニッコリ笑っている。

——ポーズ第三景。

小道具が、赤と黒のだんだら模様の化粧台の坐椅子とかわる。位置は寝台の上である。

健一は坐椅子を胸に抱いて、首を坐椅子にうつ伏せに押し、その首根っこを跨いで妖子が騎り、両掌を太腿にあてがい、脚を六〇度にひらいて、険しい眼差しで正面を見据えている表情であった。鹿沼妖子の独壇場の高貴のポーズだ。

——ポーズ第四景。

奴隷の健一に、脚線美を開帳し、サンダラスの妖子を拝ませているポーズ。

——ポーズ第五景。

健一の肩車に騎乗し、髪の毛をむずとつかんで、サンダラスの下で、高慢の笑顔をつくり、やや反り身になっている妖子のポーズ。

書いていたら際限がない。要するに妖子自身は、彼女の美貌と肢態美を最大限に発揮したポーズを、録画しておきたいのであった。その演出効果をあげるには、勝者と敗者、艶麗と醜悪のコントラストを強調することだ。奴隷の姿がみじめであればあるほど、妖子の肢態は光り燦やくのである。

世の男達よ、わたしの美貌、わたしの魅力をトクと御覧。——それは、未知の多数の男性への挑戦のポーズでもあった。

鹿沼妖子はその夜、もう三日間、男の肌に触れていなかった。

軀中に妖しい疼きがみなぎり、嗜虐と性的興奮で、撮影を終りしだい、福童・名越の二匹の奴隷を使って、溜った精力を発散する腹づもりだった。

そこへ落永嘉明から電話がかかった。今晚お訪ねしたいという。性具の数がもう一つふえることに、もとより反対するはずはない。妖子は快諾した。

鹿沼妖子は最近、理想の態位像を夢に描くようになっていた。というのも刺激の通増^{ていぞう}からくる欲求であったが、いってしまえば、奴隷を完全に飼育し得た結果、それを要求する側、要求される側の異身同体の心理が、容易

に実現できる可能性を生じるからであった。

性欲というものは、不可解な心理をもたらすものである。妖子の美貌が快感にしびれ、朱い唇をゆがめながら、陶醉の表情をうかべると、もう男達は、自分達の行為が妖子という美女を快樂の泉に曳きこんだことで、彼等もまた興奮し、陶醉に達する。

妖子が、その態位を思いついたのは、つい最近のことだ。

×の形に奴隷四匹を四つ這いにして、それを女王の玉座とし、あとの二匹は、かわりばんこに奉仕役をつとめる。

妖子が一と休みして、沐浴^{ゆあみ}しているところへ、一刀徳、守中逸郎、帆足勇の三匹が、陽気にはしゃぎながら訪ねて来たが、妖子女王さまのご機嫌伺いに参上いたしました、と帆足勇が、入浴中の妖子へ、硝子越しに報告していた。

鹿沼妖子が、かねて夢想していた態位像を実行しようと思いついたのは、実はそのときだった。

まさしくチャンス、グッドタイミングであった。

「健一、バスタオル」

「はァい」

福童健一が浴室に這入ってゆく。

間もなく、鹿沼妖子の裸身が、湯気を立てながら、現われた。陽気だった三匹をふくめた六匹が、ハーツとその場に平伏した。

妖子の裸身はベッドの上に倚る。

六匹の奴隷は、たちまち鳴りをひそめ、鏡台のマッサージ用のクリームを掌に取り、胸部と乳房——豊かな太腿の分水嶺の丘——ふくら脛——足の甲、指と土踏まず——左右から寄り添うようにマッサージしてゆく。丹念に櫛を入れての化粧である。香水をシューッと散布し、女王の高貴のために、匂いをつけることも忘れなかった。

妖子の眸が、上気し、うるんでいる。

「守中、一刀、落永、帆足の四匹は対い合って坐るの。両手を前に突いて、頭をくっつける。……そうじゃないったら。顔を下に向けて合せるんだよ。そうそう、その姿勢。人間椅子になるの」

妖子はリボンで縛った長い髪を肩のうしろへ波うたせながら、サンダルの爪先で奴隷を蹴とばし、椅子の位置を決めてやる。人間椅子は×の形に並び終った。

妖子女王は、人間椅子の座に腰かける。

「健一と真澄は、お湯でうがいしておいで。」

舌が温まったら、替るがわる奉仕をするの。——真澄、このポーズは、あとで撮影するんだよ」

鹿沼妖子の理想の態位像は、かくて実現した。陶醉状態が、しだいに高まってゆくと、妖子はうっとり閉じた瞼の奥に、白い気球のような幻覚が、ぐるぐる廻るのを見た。

「おい、奴隷ども！ 用意しろよ」

許可が出た。すると、一斉に六匹の肉体の旋律が妖子の裸身の下で蠕動し、さざ波のように押し寄せてくる。陶醉の深みに沈んだ底から、妖子の絶叫にも似た声がもれた。

(十)

里見晃吉の老衰は、最近、目にあまるものがあつた。

毎夜のように、娘の里枝のかなしい顔が夢に出て来た。

『お父さん！』

はらわたを裂くような声で、里枝は晃吉をよんだ。

晃吉は、その声で眼をさました。びっしょりと盗汗を掻いていた。このまま、ずるずるとナナの魔力のとりこでいたら、殺されてしまふ。逃げよう。しかし、晃吉には、広島ま

での旅費すら、身につけていなかった。たばこ、食事、晩酌、すべてナナの現物支給だった。

現金といえば銭湯代ぐらいなものである。

とにかく、広島に帰ろう。無賃乗車してでも、里枝夫婦のところへ帰ろう。

発見されても事情を話し、娘に広島駅まで迎えに出て貰えば、無賃乗車にはなるまい。

一週間前のことだった。

里見晃吉は、意を決して、サドを出た。ちようど、店に客のたてこむ時刻だった。

だが、里見晃吉は純情すぎた。

駅からナナに電話をかけて寄越し、最近、健康がすぐれぬから、一度広島に帰りたい。回復しだい、また福岡に出て来ます。ナナさまも、お元気で。——と別れの挨拶をしたのである。

ナナは血相をかえた。つとめて平静を装っていたが、電話が切れると、つばめのように表にとび出した。タクシーを拾って博多駅にかけつけてみると、待合室のベンチに晃吉が下駄をつっかけた姿で、しょんぼり腰をおろしていた。

ナナは、例のエクボの出る愛くるしい顔に微笑をうかべ、

「広島に帰るのなら、明日の昼になさい。娘さんに電報打つから。——身なりも、それでは、みつともないわ。切符も用意するわ。悪いようにはしないから、明日になさい」

晃吉は、まんまとナナの甘言に乗ったのである。

翌日のひるすぎだった。その日は店を休み由美たちに映画の入場券を配り外出させた。晃吉が肩で呼吸^{いき}をしながら床の掃除をしていると、ナナが赤いブーツを穿いて現われ、表の扉に音をたてて掛け金をかけた。

「犬、そこへ四つ這いにおなり」

ナナは細身の皮のムチを握っていた。

「じじい！ お前はなぜ逃げようとしたか。

わけをいえ！」

ピューッとムチが唸りを生じ、老人の背中を続けざまに打ちすえた。

「お、お許し下さい、女王さま。逃げようとしたのでは、ございません。娘に会いたくなっただけです」

「馬鹿野郎！」

ブーツの足が、晃吉の白髪あたまをふんづけると、あとはムチの乱打だった。

晃吉老人は、アッ、アッと悲鳴をあげて、苦痛にのたうつ。

「馬」

木暮ナナは手綱もちゃんと用意していた。馬の口にかませ、ムチで馬の臀をうちのめしながら、リノリウム^{リノリウム}の床を騎り廻した。その形相はただごとではなかった。激しく、むごい調馬である。

幾度となく馬は倒れた。ナナは、すかさず手綱を絞って引き起こした。ゼイゼイ呼吸を切らして匍い廻る哀れな馬に、ムチをくれながら一層激しく駛らせるのである。みるみるうちに、晃吉のシャツとズボンの全身は、どろどろに汚れてゆく。泥沼を匍いずり廻る馬の背から、皮膚が破けて、赤黒い血糊が地図を描き出した。

「ウーン」

晃吉老人は、とうとう視覚が暗黒になって失神した。

あれから、六日経っている。

げっそり痩せこけた里見晃吉は、寝たきりであった。

寝返りをうつにも、全身の節々が音を立てて軋む痛さだった。破けた皮膚は、ようやく傷のあとに、新しい皮膚のまくを張り、入浴できるまでに肉があがっていたが、なによりも困ったのは、夜半厠にゆくときの苦痛だった。

た。昼間は端間泉が何かと世話してくれるので、助かったが、ひとりきりになると、両肘に全身の力を集中し、五体を曳きずっての作業であった。

サドの床の上に気絶した泥んこの血まみれの晃吉を、ナナは、マンションの端間泉の部屋に搬ばせ、面倒をみるようにいい渡し、さっさと引き揚げていった。

四日目の深夜、ナナはへべレケに酔って、晃吉の部屋に現われたそうだ。泉はあとで、晃吉から、その話を聞いて、知った。

ナナは酔うと、更に残忍性が強くなった。片っ端から衣裳を脱いでゆき、ブラジャーとパンティだけを残した姿になると、

「ふ、ふ、ふ」

愉しくてたまらない、というように身をよじらせ、悦に入ったふくみ笑いをもらして、晃吉の顔にゆっくり騎乗した。

香水の芳香が、プーンと晃吉の鼻孔をついた。いわゆるヒップ責めだった。

晃吉の鼻と口を、ナナの偉大なヒップがふさぐと、もう空気の這入るすき間はどこにもない。ウ、ウ、ウ、晃吉は必死にもがく。熱い息が、ナナの太腿の下から吹きあがってくる。呼吸ができないから、晃吉の顔は右に左

にゆれ動き、酸素を求めて死物狂いにあがきにあがく。

「ああ、いいわ」

失神寸前で、ナナはお臀をもちあげて、空気を入れてやる。

「ハッ」

と、晃吉の顔色が、水を得た金魚のように生気を取り戻すところを、またも、ぴたっと呼吸をふさがれた。身もだえがしだいに弱まると、心得たもので、ぞんぶんに空気を与え口をあけさせ、つばきを飲ませる。

「どう。苦しいか」

ナナのピンクの頬が、エクボをうかべて、ほほ笑む。その笑顔は、まるで、かれんな十七歳の乙女の媚態だった。

晃吉は眼で笑って、うなづく。

「苦しいけど、いい気持でしょ」

晃吉は、またうなづく。すると、ナナのヒップが晃吉の顔を掩い、前と同じ動作をくり返しはじめた。

「ウ、ウ、ウ」

「じじい！ キスしたいか」

「はい。ナナ女王さま」

「ようし。舌の先を長くし、一ぱいに伸すんだよ」

陶酔が嵩まってくると、ナナは二つの掌を使って、奴隷の頬をペシッ、ペシッと交互に打ちのめした。

里見晃吉は、ムチがきらいであった。しかし、あとになって、ヒップ責めにナナがムチを使い出してからは、女王の刺激を強めるために、こんなときのムチが、如何に優美な弧を描く生きものであるかを、知った。

「もっと強く、もっと強く」

晃吉は、うわ言のようにムチの刺激を求めた。

里見晃吉は、もうナナから遁げることはとうていできないだろう。それは、ナナに取って、願ったり叶ったりであった。蒸発！ 里見晃吉の蒸発は、娘の里枝を悲しませない、最善の方法でもあった。

ナナは、三日隔きぐらいに、晃吉の枕もとに君臨した。

「犬、お前はナナ女王さまのために死ね！」

わたしの門の下から、天国に向かって昇天するんだよ。いいか。随喜の涙を流しながら、天国へ行きな」

上から見おろすナナの朱い唇から、白い歯並がこぼれ、真っ白い胸の真珠のネックレス

が冷たく、華麗な光彩を放って、妖しく揺れた。

BAR・SADOの夜は歓楽裡に更けていた。ナナは白い蝶のように、テーブルからテーブルへ、羽根をひろげながら、ヒラヒラと跳び廻った。

「ママさん！ このあいだは、みごとにふられたけれど、今夜こそ、ウンといわせてやるから、そのつもりでいろよ」

「ターさんの浮気が、また始まった。その手には、乗らないわよ」

「だから、その堅いママさんを物にしてみたんだよ」

「あら、あら。こわい」

奥のテーブルの客の、ナナを呼ぶ声がつつぬけて来た。

「おい、ママさん！ 不公平だぞ。こちらテーブルにも来てくれよ」

「ハイ、ただ今」

そこへ、今日子がナナのテーブルに近づいて来て、耳うちした。

「ママさん！ 十二番のお客さんが、呼んでるわよ」

ナナは十二番のテーブルの客に手をあげ、

「フーさん、ごめんなさいね。後で行くわ」
木暮ナナは、テーブルからテーブルへ、花の蜜をもとめて飛び廻る蝶々のように、彼女の美貌に群がる男達のあいだを、うきうきした声音を発し、愛嬌をふり撒きながら、客を捌いてゆく。

(十一)

その頃。――

鹿沼妖子の童貞狩りは、いよいよ本格化していた。

一くせも二くせもある妖子の勇氣に会ったら、男なんて、コロリ、コロリと降参した。面白いほどであった。中には、その段になってホテルから逃げ出した男もいるにはいた。それも、マンションの電話番号を覚えておくと、二、三日あとには、必ず非を詫びて、電話を寄越して来た。男という男は、童貞を、いつ捨てるかを待っている。妖子ほどの近代的美女に、童貞を捧げて、悔いることはないのである。

妖子は、最近、六匹の奴隷で人間寝台を造り、その上で眠ることをおぼえた。最高の寝心地だった。

童貞狩りにかかった獲ものたちは、飽きが

くると奴隷に格下げされた。

妖子の部屋の照明を水いろにし、その神秘の光線の中で、夜の十時定刻、人間椅子を玉座にした妖子が、彼女の足下に新参の奴隷を跪ずかせて、拝謁を申しつけていた。

「奴隷十号、お前の名をいえ」

「佐々木誠也と申します」

「わたしの奴隷になるか」

「はい。誓います」

「声が小さい」

「はい。誓います」

「これから、お前は妖子女王さまの性具になるんだよ。いいな」

「はい。性具になります」

「人間椅子はわたしにふさわしいと思うか。」

「正直にいえ」

「本当にふさわしいと思います。素晴らしいです」

「女王さまが陶醉することなら、お前はよろこんで、わたしのネクタールを飲むか」

「ネクタール」

「そうだ。わたしの玉体からの黄金の神酒」

「――」

「飲むな」

「はい。飲みます」

「ようし。その絨緞に額をすりつけ、それから、かしわ手を打って、わたしを拝め」

チヨダ・マンションの妖子の部屋に、一つの専制国が誕生した。鹿沼妖子は、その国の女王だった。奴隷達は納税の義務を課され、妖子女王の快樂の具となって、労役に服さねばならなかった。そして、彼らは、妖子の制定した憲法を守り、女王に対し殉死すること、いとわないのであった。

妖子女王さま万歳！

いま、鹿沼妖子は、人間寝台の上にのびのびと横たわり、しずかな充ち足りた寝息を立てながら、深く眠っていた。

その時刻。――

木暮ナナは、その神々しい雪白の裸身を、里見晃吉の視野に置いて、彼の願望を叶えてやるために、饗宴を展いたところであった。

(第八話おわり)

――懸賞尋ね人――

本名 永井節子。

年齢 二十一才位。

身長 一六七センチ位。

容氏名 眞理子(熊本に居住したことがある)

容貌 嵯峨美智子を若く、グラマーにしたような容貌と体格。美人。

僕は辻敏郎です。もしかしたら、出身地の京都、または神戸、大阪辺にいます。馬族保あてごん。心当りの方は、編集部経由、馬族保あてご一報下さい。一万円をお礼いたします。

(馬族 保)



映画批評

徳川いれずみ師

『責め地獄』を見て

絵面優美子

映画を観念的に批評する酷さを前記（奇ク五月号）で述べましたが「キネマ旬報（四月下旬号）性と残酷のかなたに」（石井輝男、井沢淳対談）——では石井監督と井沢淳氏が興味深いやりとりをしていた。ちょっと触れてみたいと思う。

○

今度はエロではない！——井沢「今度の日活の『昇り竜・鉄火肌』を入れて、これで何本くらいとっているのかな」

石井「六十本はこえているでしょう。新東宝

時代に三十数本ありますから」井沢「その新東宝にいいのがあるんだ。いや、大体みんないいんだけど、何で墮落して『鉄火肌』とか女を裸にしたり、フンドシをはかせたりするかを聞いてくれというのが旬報のご注文で。

（笑）『網走番外地』みたいな、非常にすぐれた映画をとっているのに、なんで日活まで出向いて、エロな映画を撮って喜んでいいのか（笑）『鉄火肌』もおそらくリンチのところなどは相当どぎつく撮ると思うし、撮るでしょうな」——注。この（笑）が問題である。新聞記者一流の揶揄というか、皮肉たっぷりの歪んだ嘲いが眼に見えるようで佗し

い」

これに対して、石井監督の言葉が、ふるっている……

石井「いえ、今回は全く一般向きの文部省推薦のような映画です（笑）」井沢「女囚部屋があるでしょう。あそこは相当グロかエロになるでしょう」石井「いえいえ全くありません」井沢「牢名主みたいなのが出て来てそうすると『徳川女刑罰史』みたいなことになりかねないよ」石井「全く、今回は、そのにおいなしです（笑）」井沢「いや断っておくけど、ぼくはそれは、かまわんといっているんだ」（中略）

——注。本当に、井沢氏は、そう思ってい

るのだろうか。警察の誘導尋問のようで気持ちの悪い限りだ。いいとすれば……おかしな考え方だと思う。決して倫理的によろしい場面ではないと思う。やはり……よくないと云うべきだと思うのだ。それを、特に……僕は……と強調して……構わんと云っているんだ……と断っている処が、如何にも狡猾で肯けない

私見ではあるが、雑誌や何かに発表するとなれば、やっぱり、こう云うやりとりにならざる可なりなものであろうかと、おかしくなった。

とにかく、こうした対話があつて井沢氏は一応は石井監督の作品経歴なり、製作態度を認めているようであつた。が、最近（といっても去る四月十四日）に、東映京都撮影所の助監督全員が、石井監督の、このシリーズ物を批判する声明を出した。その内容は「いわゆる、異常性愛路線と呼ばれる一連の作品はもはや映画としての本質を失い、俗悪な見せ物と化し、厚顔無恥な金もうけ主義の道具となり下がっている」と云うのであつた。

だいぶ以前だったが同じような声明事件があつた。石原慎太郎氏の『太陽の季節』をきっかけとして起こった一連の『太陽族映画』

の製作に関する、松竹大船の助監督部だったか？ 石原監督の起用に反対したことがあつた。結局、何てこともなく、製作は続けられた。大当りした実績がある。

いったい、これは何を意味するものであつたろうか？ 私は、監督昇進が第一目的の助監督氏たちにとって大変な邪魔者が出現したわけで、邪魔者を消すには好材料が揃ったわけ、いわば、彼等の生活権の擁護にほかならないと考える。それが証拠に、彼等がひとたび監督に昇進すれば五十歩百歩の作品を製作しているではないか。

人間と云う動物は脳味噌が働くだけに、やり方が知的で、それはインテリゲンチヤほどうまい。

私見としては出来ることなら、声明など出すより監督に協力して、出来るだけ見られる作品に仕上げるよう協力を惜しまぬことだと思ふ。それが芸術家としての真摯な姿であり助監督として当然、行なうべき義務であると思ふ。

声明は空念仏であつてはならないと思ふ。声明さえ出せば、それで済んだように思ふ無責任な社会の風潮が目だつ。実行力のない時代ではある。恰好よさだけが本命のような、

それでいて、機動隊が出れば雲を霞みと逃げ散る若者たちの世代に、せめて骨のある監督への協力者が出てこそ、凋落の映画界は復興するのである——と私は云いたい。

○

また、東京通信——五〇六三号・四四年五月二三日（金）——に掲載の、

“TVに無いものだけが必要。ここを、もう一度考えよう”と題する、戸山三平氏の次のような談話があつた。

「全興連会長の山田敏郎さんいわく『五社はこういう映画を作ればいいかって？ かんたん明瞭、テレビに無いものを作ればいい』——このほかにいうことは何もない、といった言い方だったが、五社たるもの興行者のこの言い分をもう少し真剣に考えてみる必要がある。テレビはタダだ。タダで見られるものに金を払うバカはない。当然のことだ。が、まだわが映画界はテレビ的作品、テレビ並みの作品でお金を頂戴しようという態度だ。山田さんはこのところを衝いたのだろうか。実際、五社の中にはまだ甘っちょろい製作態度のところがある。

然らば“テレビに無いもの”“テレビでできないもの”とは一体何だ。考えてみても考

えてみなくても超大作であり、徹底的なるやくざものであり、エロ、グロものであることは自明である。それも並みの大作やエロ、グロやくざではダメで「超」がつくか「徹底」がつかなければ「テレビに無い」ものとはいえない。

いま人気のNHKの「天と地と」などは相当の大作であり、最近、各民放はエロ、残虐に相当の工夫をこらしている。東宝と東映はそれぞれ「テレビに無い」超大作と刺げきのエロ、やくざもので利益を出している。東映の如き史上最高といえる当りぶりである。株式会社は利益追求を目的とする。株主はもうけるつもりで資金を出した。株主の信頼を裏切り続けることは許されない。背に腹かえてもうけなければならぬのだ。ここにおいて「わが社にはこの道しかないからこの道を行く」と実篤ばりの哲学を掲げて、刺げき路線の陣頭にサッソウと立つ岡田茂東映映画本部長の胸中、分かり過ぎるほど分かるのである」(原文のまま)――。

また、映画情報(6月号)では――最近、いわゆる「五社ピンク」といわれる露骨なセックス描写や、ハダカを売り物にする作品が目立っている。五社ピンクとは、もちろん成

人映画をつくる独立プロでない邦画五社のつくる、そうした種類の映画を指している。あれは、もはや映画ではない、いやあればお客の求めるものをつくっているのだ、とある人は否定、ある人は肯定する。

この論議はともかくとして、五社のなかでもっとも強気に、この種の映画の製作をつづけている東映が、ゴールデンウィーク作品として撮影中の『徳川いれずみ師・責め地獄』はその題名どおりの、すさまじい内容と話題をよんでいる。

『責め地獄』は、これまでつくられてきた、『徳川女系図』『徳川女刑罰史』『元禄女系図』など異常性愛路線シリーズの第6作目で演出も前記の作品と同じ石井輝男監督――(中略)――いれずみ女がたむろする女郎部屋、同性愛、貞操帯、その道の専門家が指導する「緊縛」「責め」など刺激的なシーンは作を重ねるごとにきわどく、エゲツなくなっている。

その内容はヘタな説明をするより、ここに載せた写真をもてもらった方が、手っとり早い(大小とりまぜ8枚のスクリーン写真を掲載している――続いて、既に本誌上でも紹介済の、由美てる子と片山由美子の主役交替のい

きさつの紹介があつて)――いくら近ごろの女優が、思いきりよく、ハダカも平気といっても、こうした異常なシーンがつづいたら、おかしくならない方がふしぎだ。まさに女優残酷物語である。

ともかく、エロや残酷に対する興味は、より強い刺激を求めるようになるのは、とうぜん、このシリーズも一作ごとに手をかえ、品をかえて、よりどぎつく、残酷になつてきている。

こうした折(前記の東映京都助監督全員の声明書が発表されたのであるが――)これに対して石井監督は「わたしは、わたしの考えだけで、このシリーズを、つくっているのではない。こうした批判は企画している会社につけるべきで一監督に向けるのは、まちがいだ」と反撥していた。

成り行きは別として、いまの映画界は、腹中に、いろいろな問題を抱えて新しい生命の結晶を生みだすべく陣痛にのたうちまわっている。その槍主が何時も現場側にのみ向けられているのは「裏目」であつて「見当違い」のそしりは、まぬがれまい。

○
続いて「やくざ路線とセックス路線につい

て——

井沢「なっていない。なっていないんだけど監督というのは因果なもので、あんたみたいに相当いい作品が過去にあると、それについても何たることかといわれたす。監督としての責任が出てくる。今度の日活のは、どうなるか知らないけど」石井「それは、あくまで監督としての、ぼくが進行形にあるというふうに見ていただきたいのです」井沢「あなたの場合は、世のPTAとか教育ママが一番文句をいいそうなくざ路線とエロ路線に両足をかけているから、世の指弾を浴びているんだけど、実は、世間は実際のものを見ないで怒っていることもある」石井「ええ、そういう向きが多いですね」井沢「教育ママとか、何とかいう問題では、何とも思わない？」石井「何とも思いませんね。だから、さつきから井沢さんがおっしゃる、やけくそみたいに見えるというのは、そうじゃなく、逆に挑戦したいという気持ちがあるんです。道德をいうのは楽ですよ」井沢「楽だ。セックス路線とか、カッコでくるんで考える奴が、むしろ退廃してるんで、押えるやつに限ってほんとうはインチキなんだ。つまり彼らの考えている善悪の逆転した、善悪があるわけよ」(中

略)石井「井沢さんがおっしゃったようにオースドックスなことはやさしい。でもぼくはそういうものに、非常な嫌悪感を持っていた」井沢「つまり、昭和元禄の背景になっているものは、オースドックスでマイホーム主義なわけよ。そこを爆発させて、破壊するのは建設につながるんだけどね」石井「セックスの問題にしても、種族保存という基本から発していたわけです。それからモラルがつくられたけど、いまはくずれてきているし、本来の目的じゃないところで、いろんなことがあるわけです。それはとめようとしても、どんどん広がるものだと思います。だから、その過程の中で作品のよしあしは別として、そういうものを通して何か別なものを出そうとそのはしりをたまたまやっているの、いろいろな攻撃が集中されるということもあると思いますし、そういうことを抜いても、作品自体としてりっぱでないということも、もちろん含まれていると思うんです。まあ、ぼくはそういう試行錯誤を重ねながら、何か出てくるんじゃないかという気持ちでやっているの、決してやけくそではないんです。

(笑)「井沢「これはどうしてもそうなるんだけど、日本の女のからだは、きれいじゃな

いでしょう。セックス路線というと、その裸を出さないといかんのだけれど、その場合、できるだけきれいにとる技術を、もうちょっとポリシーしていかなくちゃならないのじゃないか。つまり、エロでなくグロになってしまいうこと。グロを目的としていれればいいんだけど、そうでない場合がある。そこに監督の努力があっただけいいんじゃないか」(原文のまま)——。

まことに、当を得た発言だと思う。私は以前「残酷美」と云うものについて強調したけれど、お金をかけたならば、かけたなりに、それ相應に「美」の追求は出来るわけで、いわゆる「五社エロ」の方が「三百万円の成人映画」よりは、より立派に描けるのではないかと云ったのは、こういうことをいったのであって、だから直接製作に当る監督さんや助監督さんに、一層の奮起を望みたいと願っているものである。

○

次いで、佐藤忠男は観念バカ?——は面白い。

石井「むづかしい問題ですが、非常に傲慢ないい方をする、へたくそなやつが一生懸命エロチックに撮ろうと思うと、グロになって

しまうことがある（笑）稚拙だとそういう感じになる。この間のぼくの映画なんかも、稚拙の口だったと思うんです」井沢「そういわれれば怒りようもなくなる。これは逃げられたようなものだ（笑）」石井「旬報の11月下旬号で佐藤忠男さんが『徳川女刑罰史』をや

り玉にあげていましたが、これも具体的にここがいけないといっている部分が少ないんですね。ぼくは、それに対して納得できないわけです。最初から、こういうものはけしからんという前提から、ご自分のものさしでおっしゃっているわけで、ある一つの自分の固定観念で、すべての作品をおしはかる。ズバツと言わせてもらうと、観念バカじゃないかという感じがするんです。ぼくには、何々劇場に上映されるものなりっぱであるとか、何とか座の芝居なりっぱであるとか。固有名詞は避けますが、某監督だったなりっぱであるとか。そういう考え方がどうも分らない。納得できないんです。ですからそういう意味で、こちらもちろん力が足りないから、いろいろいわれなくちゃならないわけですけどこれからの作品は、一作一作やりたい」井沢「あなた自身の作品をふくめてヤクザ映画についてどう思っているの？」石井「ぼくは映

画でだれかを啓蒙してやろうという考えには全く反対だし、かといってそういうものを否定するということじゃないんですが、いろんなことがあっていいわけです。だから極端に言えば何もテーマがない映画があってもいいじゃないかと考えるわけです。全部お説教して、だれかを高めてやるという考え方は、傲慢だと思うんです」井沢「とすると今度のは昇り竜のきれいな入れ墨というテーマだよね耽美的なものだろうね。それでぼくはいいと思う。ただ、六百万も七百万も刷っている新聞で、それをいっちゃいけない。平均的日本にはいっても通用しないから（笑）ちょっと怒ってみななければいかん。これはつらいところだ（笑）」石井「それと、残念ながら映画がそれほど影響力を持たないと見ています。非常にこれは残念なことですけど、映画が流行の先端もいかないし、影響力もそれだけないと思います。井沢「影響力がないから影響力をもたせるべく、あんたは、ますます徹底してやる」石井「いやいや、とんでもない」井沢「君の代弁をすれば、映画って、それほどやけくそになって、命がけでつくるものではない、サラリーマンで撮っていいこうという考えがあるんじゃないの」石井「まったくない

です」（原文のまま）――。

この後、黒沢明監督やパゾリーニ監督（イタリヤ）「アポロンの地獄」などを中心に、映像化への核心に触れた対談が続くのであるが、それは割愛するとして、最後に「徳川女系図でピンク女優を使った意図――ああいう作品で登場してくれる女優さんが、実際いなかったわけです」「ああいうかたちで、衰弱した五社に刺激剤を与えようという魂胆があったのじゃないか――中略――ぼくは、全くそういうことはないと思うんですけど。ただ芸術ということではなく、別の次元で、観客に楽しんでもらうことに対して、ぼくなりの非常にまじめな祈りがあるつもりです――中略――」

――ぼくの場合は東映が多いですから、製作本部長の岡田茂さんの考えが相当入っていますけど――あの人の場合は、うしろから進めていっているのではなく、自分が先頭を切っていますからね。実は、ことしは二人一緒に悪役でいいこうということで、いわゆるオーソドックスな線だけでなく、そういう方面に活路があるのではないかという考え方でやっているのです。若い人にも同じ考えの人がいるわけ、大いに、そういう人たちを糾合して、企業内ハレンチ派というものをつくって、こ

としては大いにハレンチ派を伸ばしていこうと思っているわけです——それが映画のエネルギーとして燃焼していけばいいんだがね（後略）——」（原文のまま）——。

と云うような結論で、終わっていた。

○

私は「奇ク五月号」『残酷映画ただいま絶賛上映中』でも述べたけれど、教育ママとかPTA関係者の観念的な批判の功罪については眉をひそめている。見もしないで、見ないでも分かる主義の物の考え方が現在の若者たちの性格を如何に歪めているか——。私も幼い頃からの経験で（教育制度の失敗かも知れないけれど）のびやかな生活を体験出来なかった——と記憶している。そうした旧教育制度でうけた頭脳で、新教育制度で成長した若者たちを拘子定期的に計測したり、押えようとしたりする矛盾を、教育ママたちは少しも反省しようとはしないのである。石井監督や井沢氏の云う、つまり『昭和元禄の背景』とか『爆発』、『破壊』とか『建設』とかいう不気味な字句の表面だけを眺めていたら、やはり、なぜやくざ路線とかセックス路線が抬頭しはじめたのか？ 見当もつかないであろう。若者たちだけの責任ではなく、それをは

ぐくみ育てきた大人たちの世界に果たして手本となるべき生活なり倫理が存在したであろうか？ 大人たちの世界を、じっくりと眺め批判の眼を育てて来た若い世代の『爆発』をはたして『破壊』とだけで、すまされてよいものであろうか？ 問題は映画界だけに限ったことではない——残念なことである。

○

さて問題の「責め地獄」——であるが、流石にプロローグから、物凄い。『はりつけ』『鋸引き』など封建時代の刑罰を現実に見る感じだったが、凄惨さが身にしみてエロとかグロなどと思う余地すらなかった。やはり、それだけ画面に迫真力があつた——とでも云えるのでしょうか？ その時代の感覚に引ずり込まずにはおかぬ描写力には感服したがだが……それ以上の何かが必要ではないかと思つた。

例えば、刑死する女囚の表情や姿にしても悲しみも哀れさも、滲み出ていなかったし、女囚の姿や無慈悲な役人たちの執行状態などから眺めて、もう少し、時代の哀れさとか、女囚たちの諦観とか、観客に何かを訴えようとする演技力が欲しかった。ただの凄惨さだけでは、低俗味しか印象に残らないのではな

いだろうか？ 単なる、見世物的映画から脱却するためには、刑罰の実態の再現も必要であるが、ムードとか、井沢淳氏はポエジーなと云っていたが、そう云った方面への細心の演出が今後に残された課題になっているように思えた。だが、活字とか絵画などでしか見ることも出来なかった当時の刑罰の面影を動く画面とカラーで見せて貰い——興味津々たるものがあつたのは私だけではあるまい。特に若い女性の観客も多かったのに驚き、もし、新時代の有難さを、しみじみ感じた。

またラストシーンの『女体竹裂き』は、人形を使つての演出だったが、文献の再現を観る想いで、呼吸もつまる悲壮感が漂つてはいたが、お竜というその刑死人に扮した——藤本三重子の逆吊りの表情が、あまりに暢気（のんき）すぎて現実感がなかった。おそらく、いまかいまかと股裂きにあう女の運命を待つ刑死人に——とては、その一秒一秒が苦痛であり、まさにその表情には悲壮というか諦めに似た悲鳴とか、起こるべき苦痛に対する予感などで、尋常な顔つきではなかった——と思う。

そういった内面の機微とか、動揺する心情などが、演技されていなかった。

役者の演技は「内面の吐露」の充実にある

と思う。

こういった特殊な映画の俳優陣に、そういった細かな芝居を求めるのは無理かも知れないが——残された今後の課題として提出せねばならないと思った。

また、無理にストーリー化しようとする面と刑罰を見せようとする両面作戦が、思うようにミックスされていなかったようで、何となく中途半端な作品に終わっていた。

やはり映画はどちらかにウエイトを絞るべきであり、公開上、どうしても筋を売らねばならないという世間への銜^{てら}いは忘れて欲しい

☆奇クサロン ☆原稿募集

一、大好評の『奇クサロン』の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

と思った。

「刺青地獄絵」を見せるのだったら、なにもの長崎あたりの租界を場にしくなくても描けたであらうし、異人との交渉を中心に描くのだらたら、それだけで、また奇抜な映画の一本も出来ようと云うもの——どうも和洋折衷^{わようせつちゆう}は元来うまいかないもので……この映画に関する限り、どちらかに材を集中すべきであったように思う。

ただ、こうした異常な世界を描く映画が、洋の東西を問わず喜ばれ（？）観客を動員出来るという秘密は、やはり時流が、ちょうど

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に対しては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対しましても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供にしましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。

そういう処に来て居り、人々の見たいと希^{ねが}うものが一致したことに他ならないと思うのである。

「責め地獄」を見て感じたことは、見世物的だと思われないほどの文獻的な時代考証——とか役者の演技力の充実——特に内面的心理の描写——そういったものの掘り下げを行ない——形式的な刑罰模様だけに終わらない——充足感を観客に与える映画に発展させるべきで、現時点ではその「暁が開けた」と云った感ではないかと思った。

「酷い映画を製作したもんだねエ！」とか、「凄げエ！ 凄げエ！ 見ちゃアいらねえよ！」

などと、はしたない言葉が一部の観客の口から吐き出されるようでは、まだまだ不十分だと思う。

石井監督の提唱する「企業内ハレンチ派」も結構である。井沢淳氏も云われる通りそれを「如何に燃焼させていくか」に、こうした映画の今後が掛かっているのではないかと思うのである。

カッター・南彦造
(終)

に来て頂戴——

珠江夫人は胸の中で祈りながら、くるくる長襦袢の伊達巻を解いていく。

カチンと硬質陶器のように硬化した表情のまま、華美な長襦袢を脱ぎ出した珠江夫人は周囲に陣どる野卑な男女に、蔑みを帯びた冷淡な瞳を時折、燐光のように光らせて差し向けた。

さすがに肌襦袢までは取りかねて、珠江夫人は、体を丸くして、その場にちぢかんでしまったが

「モタモタするなと云ったろう」

川田は吉沢と眼で示し合い、身も世もあらず、俯伏している珠江夫人に襲いかかったのである。

「あっ、何を、何をするのですっ」

「令夫人のおしとやかさが頭にくるんだよ」

川田は、珠江夫人の upper body をひっぺ返すようにし、強引に肌襦袢を剥ぎとった。

「あっ」

珠江夫人は、ひきつったような声を出し、あらわになった乳房を両手で抱きしめる。

突然、獣の本性をむき出しにした川田達の残忍さで、珠江夫人は忽ち湯文字一枚残すだけの裸身に剥がれてしまったのである。

水色に白菊を散らした湯文字一枚にされた珠江夫人の素肌は、思った通り、眼に沁み入るばかりの冷たい白さと清麗な滑らかさを持つていた。

「さ、触らないでっ」

上へ引き起こそうと川田と吉沢が、その美麗な肩や背に手をかけると、珠江夫人は二人の手の中で、狂ったように体を揺さぶるのである。

「おい、朱美、縄をかせっ」

「あいよ」

朱美は、部屋の隅に用意しておいた麻縄の束を川田に投げつける。

「そら、おとなしく両手をうしろへ回しな」

川田と吉沢は、必死に胸の隆起を押さえている珠江夫人の雪のように白い、陶器のように冷たい二つの腕を、強引にうしろへねじ曲げていく。

珠江夫人は苦痛と屈辱に美しい眉を寄せ、うめきつつ身悶えしたが、二人の男の力には勝てず背中の中程まで手首をねじり上げられてしまった。素早くそれに縄がかけられる。

「友子さんっ。ああ、直江さん！」

珠江夫人は、川田と吉沢にヒシヒシと縄をかけられながら望みの綱の救援者である二人

の女中の名をうわ言のように呼ぶのだった。「たまらねえな。きれいな肌をしてるじゃねえか」

かっちりと後手にきびしく縛り上げた珠江夫人の縄尻を、吉沢は力一杯ひいて立上らせると、その幻想的なまでに色白の夫人の美肌に眼を見はった。

「一まず、その柱に」

田代はゆっくりと煙草の煙を吐きながら、土蔵の奥の一段高い祭壇のようになっていた所を指さした。そこには、静子夫人と京子が数々のいたぶりを受け、苦悩の汗と脂を滲ませた二本の柱が立っている。

「あ、あなた達に、こんな羞かしめを受ける理由はありせんわっ」

珠江夫人は、祭壇の上へ押し上げようとする川田と吉沢に抗って、必死に身を揺さぶっている。

「ブツブツいわず、早く上らねえか」

川田と吉沢は、身を振り続ける珠江夫人を叱咤し、水色の湯文字に覆われたふくよかな腰のあたりを足で蹴った。

「あなた達は、け、けだものだわっ」

珠江夫人は、ひきつった声をあげて、がっかり左右から体を押さえこむ川田と吉沢を罵

倒したが、遂に背を丸木の柱に押し当てられる。

川田と吉沢は馴れた手さばきで、別の縄を使い、珠江夫人を柱へ縛りつけるのだ。

珠江夫人は、憤怒と羞恥の入り混った悲痛な表情で血の出る程かたく唇を噛みしめていた。

まるで絹餅のように柔らかそうな二つの乳房の上下に、数本の麻縄をからませた珠江夫人は、陶器のように冷やかな美しい裸身を口惜しさのため一層硬くさせ、白蠟のような頬を昂奮のため、わなわな慄わせているのだ。

「や、やめて下さいっ」

川田がニヤニヤしながら、珠江夫人の湯文字の紐に手をかけると、彼女はまるで火でも押しつけられたように狂おしく優美な腰を揺さぶって、絹を裂くような悲鳴を上げるのだった。

「こ、これ以上、淫らな真似をなさると舌を噛みます」

川田は珠江夫人の激しい怒気にはじかれたように手を引いたが、すぐに笑い出した。

「静子も最初はお前さんと同じように気位の高い女だったぜ。それが今じゃ身も心も俺達に捧げ尽して一生懸命ここで働いてるんだ。」

そのうち、きつとお前さんも——フフフ」
川田は、舌で唇をなめながら、白い頬を牽ひきつらせている珠江夫人に云った。

田代が、ゆっくり台上へ上って来る。

「奥さん。約束じゃありませんか。その腰のものもこっちへ渡して頂かないと、ここにいる血の気の多い連中は地下のお嬢さんに対して何をしかすかわかりませんよ」

珠江夫人の身につけているものを一枚残らずここで競売にする約束だった筈だ、と田代は口を歪めて笑うのだった。

珠江夫人が、こみ上って来た憤辱に肩を慄わせ、美しい顔をねじ曲げるようにして、こらえ切れず繊細なすすり泣きを始めると、川田と吉沢は、心地よい痺れを感じながら、
「泣いてばかりいちゃわからねえ。脱ぐのか脱がねえのか、はっきりしろい」
とわざと凄んで見せ

「へへへ、俺達はな。お前さんみてえな気位の高い貴夫人や御令嬢の素っ裸が見たくて、うずうずしてるんだ。俺達の身にもなってくれよ」

などと云って笑ったりする。

「待って、待って下さい」

珠江夫人は、再び、左右より、にじり寄っ

て来た川田と吉沢に気づき、戦慄したように頬を震わせて云った。

「もう少し、お願いです。時間を下さい。必ず、友子さんと直江さんはここへ参ります」

川田は、吹き出したくなるのをこらえて、田代の顔を見た。珠江夫人が、命の綱だとしている鈍重な二人の女中は、葉桜団の振舞酒に酔い痺れ、二階のホーム酒場でとくに酔寝している筈だ。

しかし、田代は、そんな事はあくまでもとぼけて

「よろしい。じゃ、あと一時間だけお待ちしましょう」

と云い、床の上に散乱している珠江夫人の色とりどりの衣類を銀子達に集めさせ、一カ所へうず高く積ませた。

「つまり、奥さんに一時間、時間を稼がせてあげるわけです。そのかわり、それでも女中達が現われなかったら——」

田代は、必死に顔をそむける珠江夫人を面白そうに凝視しながら、

「御主人にしかお見せにならなかったものを我々にも観賞させて頂く。いいですね」

珠江夫人の背筋に云いようなないおぞましい戦慄がよぎった。

「それから、いいですね。地下のお嬢さんもここへ連れ出し、生まれたままの——」

「わ、わかりましたわっ」

珠江夫人は、田代のネチネチした云い廻し方を封じるように、強い語気で云った。

「友子さん達は、必ず参ります。何もおっしゃらず一時間だけ待って下さい」

珠江夫人は激しい調子でそう云い切ると、再び、さっと赤らんだ顔を横へそむけ、小さくすすり泣くのであった。

「僕達としては、女中がここへ現われない事を祈りたい気持ですな」

田代はそんな事を云いながら、楽しそうに腕時計に眼をやるのである。

うず高くつまれた珠江夫人の衣類の競売がまるで前座の余興のような調子で行われた。

「この豪華なお着物はどうか。裏地にしたって、緋に金小紋のついた豪勢なものだ。さすがに博士夫人のお召しになるものは違うじゃねえか。さ、誰か、いい値をつけてくれ」

吉沢が、ねじり鉢巻などとして、おどけた調子でセリ売りを始める。

「私が全部引きとろうじゃないの。二十万でどうなの」

そう云ったのは、大塚順子であった。

「へえ、二十万。それなら、文句はありませんや。ねえ、社長」

吉沢は田代の方を向いて、ニヤリとした。

順子は、ハンドバッグの中から札束を取出して田代に渡すと、花のように積まれた珠江夫人の衣類を抱きかかえ、柱に縛られている珠江夫人の、さも口惜しげな顔を楽しそうに眺めるのだった。

「約束通り、奥様のお着物は全部、私が買い取らせて頂きましたわ」

そして、順子は田代の顔を見て、おかしそうに、

「もうそろそろいいのじゃありません。奥様のお湯文字もこっちへ頂きたいわ」

田代は、顔をいやしげにくずして腕時計に眼を向けた。

「約束の時間には、まだ少し間があるんですよ。もう少し待ってやって下さい」

それから、田代は鬼源を呼び寄せて、ヒソヒソあとの打合せを始めるのである。

「せいては事を仕損じると云いますからね。ま、あわてず、こちらのペースに巻きこんでいきましょや」

鬼源は黄色い歯をむき出して笑い、田代の肩をたたくのである。

「あと十分だぜ。え、奥さん」

川田は、口笛を吹きながら腕時計を見、かつちり柱に縛りつけられている珠江夫人の周囲を浮き浮きした表情で歩き廻るのだ。

珠江夫人は、固く眼を閉ざし、何か祈るように端正な顔を正面に向けている。

「何だかこう、体中がムズムズして来やがった。早く見てえもんだな」

吉沢がたまりかねたように、珠江夫人のたった一枚の布に覆われた腰のあたりに手を触れさせた。

「な、何をするんですっ」

この辺だろう、などと吉沢が湯文字の上から掌でさすると珠江夫人は、かっと頭に血がのぼったのか激しい声をあげて、電気にも触れたように全身を痙攣させた。

激しく身をよじり、豊艶な腰を揺さぶったため、珠江夫人の白梅ちらしの湯文字の裾前はパツと左右に割れ、眼に泌みるばかりに雪白の美麗な夫人のふくらはぎから内腿あたりまでが、あぶな絵のように露出する。

「こ、このように自由まで奪った女を、あなた達は賜りものになさろうというのですか」

珠江夫人は、柳眉をあげ、端正な頬を蒼白にしてはじき出すように云った。憤辱のため

か、夫人の艶々しい肩のあたりが激しく息づいている。

しかし、吉沢と川田は、えへらえへら笑うだけで、乱れた湯文字の間からのぞいた内腿の、青く浮かび出た血管の模様のような美しさに見とれているのだ。

そうがつついちゃいけねえよ、と森田が川田と吉沢を制した。

「あと何分かたちやあ、この奥様は、生まれたまんまの素っ裸におなり遊ばすんだ。悪戯してえんなら、それからの方が面白いんじゃないか」

それもそうだ、と川田と吉沢はうなずいて珠江夫人より手を引いた。

「へへへ、といってる内、あと三分だぜ。女中の事はそろそろ諦めた方がよさそうだな」

川田にそう浴びせられた珠江夫人は、心の軸がポッキリ折れたように深く首を垂れて、シクシクとすすり泣くのである。

——貴方、珠江は一体どうすればいいの。ああ、早く助け出して。そうでないと、私、貴方の前へ出られない女になってしまいますわ——

珠江夫人は動乱する胸の中で、血を吐くように囁くのだった。

「さ、時間がきたようですね、奥さん」

田代は含み笑いしながら、珠江夫人に近づき、腕時計を示した。

「約束の一時間がきましたよ。待てども援軍きたらず、お気の毒だが覚悟して頂きましようか」

田代がそういうと、川田と吉沢は、再び、舌なめずりして、珠江夫人に迫り出したが

「買ったのは私よ」

と大塚順子が、二人を押えて、珠江夫人の前に立った。

「悪く思わないでね。奥様。このお湯文字、私が頂戴しますわ」

順子は腰を低めて、珠江夫人の腰布の紐に手をかける。

「大塚さんっ」

順子が結び目をゆっくり解き始めると、珠江夫人は、さすがに狼狽し、上ずった声をはり上げた。

「あなたって方は、何という卑劣な人なの。ここにいる悪党達と一緒にあって、私を笑いものになさろうというのね」

順子は、平然とした顔つきで、

「ま、何とでもおっしゃるがいいわ。千原流生花を応援して、湖月流を馬鹿にした罰だと

思ってた下さればいいのよ」

順子の手で、遂に結び目が解かれ、たった一枚、珠江夫人の身を守る布はハラリと夫人のぴったりに合せている足首の上へ落下する。うっと珠江夫人は羞恥に悶えて、美しい顔を横へ伏せた。

珠江夫人は、その下に和服用の薄い絹パンティをはいていた。

「こんなもの脱がせて頂戴」

順子は、傍に控えている川田と吉沢に云った。よし来た、と二人の男は左右よりゴム紐に手をかける。

優雅な線を描く腰部より、それがずり下げられて行き、艶美な雪白の太腿を伝わり、華奢で削いだように優美な下肢の下まで引き落とされて行くと、珠江夫人は火のついたように真っ赤になった顔を左右に振りながら、切なげな身悶えにすすり泣きの声を混えるのであった。

「へへへ、どうだい。むしろ、さっぱりした気分だろ」

川田は珠江夫人の陶器のように繊細な足首からそれを抜き取って床の上へ置くと、眼を細めてすすり泣く珠江夫人を見上げるのだった。

ふっくらした乳房の上下へきびしく巻きつけている麻縄以外、一糸も身にまとわぬ珠江夫人である。全身が白銀色に輝いて、艶々しい肌の色、胸の隆起から鳩尾を通して、臍より腰に至るまでの柳のようなしなやかさ。

ぴったり閉じ合わせている柔軟で緊まった太腿など、どれを見ても、男心をうずかせるような煽情的な匂いに満ちていた。とりわけその優美な太腿にぴったり押しつけられているふっくらした纖毛の煙ったような柔らかさを眼にした男達は、ごくりと唾を呑みこむのである。

「たまらねえな。綺麗な体をしてやがる。人妻とは思えねえぜ」

男達は吸い寄せられるように何一つ覆うもののなくなった珠江夫人の傍へ寄って行く。

「ち、近寄らないで、寄らないで下さいっ」

珠江夫人は、男連中がぞろぞろ寄りたかって来ると、逆上したように緊縛された裸身を震わせて叫んだ。

「水くさい事云うなよ。眼の保養ぐらいさせてもらうぜ」

やがて、男達は、一せいに身をかがめて凝視し始める。

珠江夫人は、男達のそれに向けた射るよう

な視線に狼狽して、なよやかな、線の美しい太腿を、しきりに、もじつかせるのだった。

突然、珠江夫人は、けたたましい悲鳴をあげて、狂ったように身を揺さぶった。

川田がいやらしく指を曲げて、夫人に触れようとしたのである。

「け、けだものっ」

珠江夫人は、川田に唾でも吐きかけるばかりの勢いで面罵したのである。

「けだものだ」と

川田は、急に顔色を変え、いきなり珠江夫人の頬を激しく平手打ちする。

「よさねえか、川田」

森田は、いきり立つ川田を押えて云った。

「今夜のところは強引に出ねえ方がいい。奥様が素っ裸になって下さっただけで充分だ」

「しかし、親分、俺はこの女のために——」

川田は包帯した片手を森田に示し、これ位じゃ腹の虫が治まらねえ、と云うのである。

「わかってるさ」

森田は、川田の耳に口を寄せて

「さっきも話したようにこの女は、最初、お前に抱かせてやる。今夜はもうおそい、明日の事にしろ」

苛酷な運命

揚戸の開く音。つづいて階段を降りて来る何人かの足音。

牢舎の冷たい床に泣き伏していた美沙江はハッとして顔を上げた。

田代に森田、それから大塚順子達が何か高笑いしながらやって来たのだ。

美沙江は、ぞっとして、牢舎の隅に後退する。

「お嬢さん。面白いものを見せてあげるわ」

順子は、うしろを振返って眼くばせした。

川田に縄尻を取られた珠江夫人が震える素足で石の階段を踏み、引き立てられて来たのである。

「さ、早く歩かねえか」

川田は丸裸の珠江夫人の背を邪慳に押し立てる。

「あっ」

美沙江は、何一つ覆うもののない全裸を無残にも後手に縛られた珠江夫人を見た途端、顔から血の気がひき、思わず振袖の袂で顔を覆ってしまった。

「さ、ここへいらっしやい。奥様」

順子は、尻ごみする珠江夫人の艶やかな肩に手をかけて、美沙江の監禁されている牢舎の前へ立たそうとする。

「おば様を、こんな——あ、あんまりです」

美沙江は袂に顔を埋めたまま、肩を慄わせて号泣するのだった。

珠江夫人は、川田や吉沢達に肩や背を押されて、美沙江の入っている鉄格子の前へすくくと立たされてしまったのである。

珠江夫人は、その美しい象牙色の裸を美沙江の方に向けて立たされると、涙の滲んだ長い睫を固く閉じ合わせ、顔を横に伏せたままシクシクとすすり泣いている。妖しいばかりの優雅な悩ましさを持つ腰部から太腿のあたりまでが、屈辱の極にブルブル震えているようだった。

「ねえ、お嬢様。おば様って、綺麗な体をなさっているわね。そう思わない」

順子は、そう云って、しげしげと珠江夫人の、輝くばかりの白磁の裸身を見つめるのだった。

美沙江の前に、一糸まとわぬ裸身を晒さねばならぬ羞恥に珠江夫人は、身を振ったり、美沙江と視線の合うのを恐れて、ねじるように赤らんだ顔をそむけたりしているのだが、

美沙江も、まるで自分も丸裸にされてしまったように赤らんだ顔を横へそらし、慄えつづけるのだ。

「大分、夜も更けたから、お嬢様の方の着物の競売は明日にしたわ。みんな今夜はお嬢様の丸裸が見られるというので、楽しみにしていたんだけどね」

次に田代が、おびえ切っている美沙江を面白そうに見ながら

「その代り、おば様もこうしておとなしく素っ裸になって下さったのだから、お嬢様も明日は素直に脱いで下さらないと困りますよ」そう云って田代は、長い睫を慄わせて一きわ激しく泣きじゃくり始めた珠江夫人の横顔をちらと見て、川田に眼くばせを送った。

「来るんだよ」

川田は、夫人の縄尻をとって、美沙江の隣の牢舎へ押し立てて行く。

吉沢が牢舎の扉を開いた。

「入るんだよ」

川田が背を押すと、珠江夫人は、ふと牢舎の中を見てギクツとしたように足を止めた。

牢舎の中の周囲の壁には、ぎっしりと怪しげな写真が張りつけられてあった。壁だけではなく、床の上にも足の踏み入れる場がない

程、男と女がからみ合った卑猥な写真がばらまかれていたのである。

珠江夫人が土蔵の中で衣類を剥がれている間に、田代が井上に命じて、こういう細工をほどこしたのだったが、

「こういうものを毎日御覧になっておれば、退屈されないと思ひましてね。それに、我々の仕事に協力しようという気分にも次第になってくると思うんです」

と田代は、太鼓腹を揺って笑うのだった。

珠江夫人は、冷たく整った頬を屈辱に上気させながら、憎悪のこもった瞳を田代に向けた。

「あなたは人間じゃないわ」

「左様。私が如何に恐ろしい人間かは明日ぐらいから骨身にこたえる程、おわかりになると思いますよ。これ位で驚いちゃ駄目ですよ奥さん」

川田は、珠江夫人の怒りを含んだ硬質陶器のような容貌をふと腹立たしく思い、

「素っ裸にされても、クソ生意気な女だぜ。全く」

と吐き捨てるように云うのだった。

羞恥と屈辱に打ちのめされ、みじめな自分に口惜し泣きするという事があっても、持前

の驕慢さと負けん気の意志の強さで、それを押し殺し、屈伏の哀泣だけは流さない珠江夫人のふてぶてしさを川田は憎く思うのだ。

今に見ろ、電気に煌々と照らし出されたその下で、臓物までむき出させ、驕慢と虚飾の仮面を剥ぎとって、女である事の悲しさを思い知らせてやる、と川田はむきになるのである。

「一言、御注意申し上げておきますが——」

と田代は、わざと慇懃な口調で云った。

「恐らく二人の女中はここへ戻って来ないと思いますよ。当てになさらない方がいいでしょう」

見る見る珠江夫人の表情は、血の気が引いたように硬張っていく。

「も、もしも、そうだとしたら、お嬢様と私は——」

一体、どうなるのか、とあとは言葉にならず、珠江夫人の唇は慄えるのだった。

「我々を騙した罰として、お二人とも我々の奴隷になって頂く。つまり、永久にこの屋敷へ住みこんで頂くってわけです」

「な、なんですって」

珠江夫人は、一瞬、目まいが起こりそうになるのを辛うじてこらえ、精一杯の反抗の色

を顔に浮かべて、田代を睨むように見た。

「縄を解いてあげろ、川田」

田代に命じられて、珠江夫人の縛しめを解いた川田は、すぐに夫人の肩や背を押して、強引に牢舎の中へ押しこむのだ。

ガタンと鉄の扉がしまり、吉沢がすぐに錠をかける。

珠江夫人は、ふくよかな二つの乳房を両手で覆い、牢舎の片隅へうずくまるように坐った。怒りと羞しさのため、夫人の透き通るように白い背がブルブルと慄えている。

「ホホホ、檻に入った美しい人魚ってところね。可哀そうに、これからここで素っ裸のままお暮しになるのよ」

大塚順子は、鉄格子の間から珠江夫人を見て溜飲を下げたように笑い出すのであった。

「この名札はここへ打ちつけておこう」

森田は小脇にかかえていた木札を、珠江夫人が監禁された牢舎の入口に釘と金槌を使って打ちこみ始めた。それには、太い墨字で、折原珠江（三十一才）と書かれてあり、その下には元、医学博士夫人とされるである。

「こうして見りゃ、如何にも動物園だな」

森田は自分が打ちつけた木札を見て、ゲラゲラ笑った。

「動物なみで気の毒だが、便はこいつですましてくん」

吉沢は、鉄格子の間から古びた洗面器を投げこんだ。珠江夫人は、振り向きもせず、牢舎の隅で身を縮めている。

「お嬢さんの方は、着物の競売がすむまで人間扱いにしてやろう。三時間毎に見廻りに来るから、お小用はその時に云うんだぜ」

森田は、美沙江の方の牢舎に向かってそう云った。

順子や男達が立去ると、床に泣き伏していた美沙江はフラフラと立上り壁をたたいた。

「おば様、ね、おば様っ」

泣きじゃくりながら美沙江が必死に壁をたたくと、珠江夫人も、すすり上げながら、

「お嬢様。私、私、口、口惜しい——」

と歯を噛みならし、こらえにこらえた慟哭が胸をついて溢れ出し、わっと両手で顔を覆って肩を慄わせるのだった。

「ど、どうして私達、こんな恐ろしい仕打ちを受けなきゃならないの。ね、おば様」

美沙江もキリキリと歯をきしませながら、冷たい壁に額を押し当て涙に咽ぶのだった。

互いの鳴咽の聲が、一層二人の慟哭を引き起こし、涙はますます溢れ頬を伝わるのだ。

「何という恐ろしい人達なの。おば様をそんな羞かしい姿にしてみうなんて」

そう云って泣く美沙江であったが明日はその恐ろしい運命が自分にもふりかかるのだ。

美沙江はふと鉄格子の上に泣き濡れた顔を向けた。そんな羞かしめを受ける位なら、いっそ死んで——と思った途端、帯紐を上鉄の柵に結びつければ首を吊れる事を思いついたのだ。

「おば様、許して。美沙江は、もうここで生きる勇氣はないのです」

生恥を晒すぐらいなら、その前に自分の命を断とうと決心した美沙江は、帯のしごきを解き始めた。

気配を感じた珠江夫人は、

「いけません。いけません、お嬢様」

と、胸の隆起を押さえたまま立上った。

「お嬢様は私と同様、キリスト教信者ではありませんか。御自分の意志で命を断つなんて事は神に抗う事です。いけません、お嬢様」

珠江夫人は、狼狽して、美しい裸身を鉄格子へぶつけるようにしながら隣の牢舎へ向かって声をはり上げるのだった。

「だって、だって、おば様」

いけません。明日になれば、きっと私達救われますわっ」

珠江夫人は、美沙江に希望をつながせるべく必死になって声をはり上げるのだった。

肉体の悪魔

翌日——千代の部屋では、朝から千代に葉子、和枝、順子の四人が麻雀を始めていた。

ガチャガチャ、牌をかき廻す悪女四人は、もっぱら昨夜、珠江夫人に加えた、いたづらを話題にしている。

「とにかく千原流の後援会長を素っ裸にして檻にぶちこんだのだから、あんたも溜飲が下がったろう」

と千代が順子に話しかけている。

「そりゃそうよ。それに今夜は、千原美沙江をむき上げるんだから、まあ笑いが止まらなといった所ね」

ね、一寸、新聞をござんよ、と和枝が傍にあった朝刊を順子に示した。

それには、昨日の千原流生花の新作発表会が家元の令嬢、美沙江が最後まで姿を見せなかったため、收拾のつかない状態になった事を報じている。同時に、後援会長の折原珠江

も遂に姿を見せなかった事も記事になっていた。つまり、かなり大きな見出しで千原美沙江と折原珠江の行方不明を新聞は書き立てていたのである。

「ざまあみると云いたいわね」

順子は鼻で笑って、ぽいと新聞を横へ投げ捨てた。

「折原珠江と千原美沙江の二人が、この屋敷へ監禁されてるって事は、お釈迦様でも——」御存じあるめえ、と四人の悪女は哄笑しながら麻雀をつづけるのである。

その時、隣の部屋から襖ごしに、静子夫人の甘美な呻きが聞こえて来る。

「い、いたいわっ。ねえ、やめて」

うるさいわね、と四人の悪女は顔をしかめて、襖の方を見た。

次の間では、静子夫人に対する朝の調教が春太郎と夏次郎によってすでに開始されていたのである。三日間は、千代達の監視のもとこの部屋に身柄を拘束され、調教を受ける静子夫人であった。

「何をしてるんだらう。一寸、様子を見てみようか」

四人の悪女は、腰を上げた。

次の間の襖を開けた途端、千代と順子は、

思わず口に手をあてて、ぷっと吹き出した。

天井よりたれ下がっている二本の鎖に繫縛された裸身を支えられ、板敷の上に静子夫人は立たされていたが、そのうしろにまるで守宮^{もり}のように全裸になった春太郎がまといつこうとしているのだ。

近くの椅子に腰かけて、それをぼんやり見つめている夏次郎も裸であった。

「案外むつかしいものなのね。もうそろそろ使えてもいい筈なんだけど」

と春太郎は、試みるのであった。

静子夫人は、美しい富士額にべっとり脂汗を浮かべ、それでも最初は何とか与えようと美しいカーブを描く双臀をゆるやかに廻転させたりするのだったが、すぐにまた火傷でもしたような悲鳴をあげ、拒否的に下半身を激しく震わせてしまうのだ。

「無理よ。ね、無理ですわ」

昂ぶった声でそう叫んだ夫人は、世にも悲しげな顔になり、上気した頬をそむけて、シクシクすすり上げるのだ。

そんな惨鼻な行為を強制される事が悲しいのか、努力しても受入れられない自分の肉体が口惜しいのか、そんな風に身を振らせて鳴咽する静子夫人を、千代達はうずくような思

いで見つめている。

「出来ない筈はないんだけどな」

春太郎は、夫人から身を引くと、不満そうに口をとがらせたが、部屋の中をのぞいている四人の女に気づくと、あわてて自分の前を両手で隠した。

「嫌だわ。調教をごらんになるなら、一言とわって下さいよ」

千代は、それに答えず仲間と一緒に部屋へ入って来ると、鎖に縄尻をつながれて立っている静子夫人の周囲を取囲むのだった。

夫人は、もう千代が眼前に顔を見せても、特別の感情は示さず、無言のまま視線をそらせるだけである。

「今朝の調子は如何が、奥様」

千代は、口にした煙草に火をつけて、夫人の気品のある鼻先へぷーと煙を吐きかけた。

「今、こういうお稽古をなさっていたの？」

ね、くわしく聞かせて頂戴」

千代に頬を指で押されても、静子夫人はただ美しい彫像のように黙ったままであった。

麻縄数本にきびしく繫めつけられた夫人の乳房は、珠江夫人の柔らかく半球型にふくらんだ端麗さとは対照的に、豊満に盛上って妖艶さを感じさせる。腰部から太腿にかけても

珠江夫人のそれは華奢で触ると指が吸いこまれそうな粘着力を秘めていたが、静子夫人は見るからに肉感的で、むっちり肉がのり、心を溶かすような官能味を湛えているのだ。

昨夜見た珠江夫人の美しい裸身を思い出し千代と順子は、比較するようにまじまじと静子夫人の裸身を凝視するのだった。

「ちよいと、私が聞いてんのが、わからないのっ」

数々の責苦に遇いながらも、未だに損われない静子夫人の美貌とその裸体美に、またもや嫉妬がこみ上げて来た千代は、憎々しげに眼を閉ざしている夫人の横顔を睨み、次にびったり閉ざしている優美な夫人の太腿の付け根あたりに眼を落とした。それは数々の調教を受けたとは想像出来ないつつましさと、男心を挑発するような妖艶さを兼ねている。

二人の元、大家の令夫人を一度コンビにして——という着想が千代の脳裡をかすめた。

「何時までも黙っていちや失礼じゃないの。さ、御主人様にどういう調教を受けていたかお話しして頂戴」

夏次郎が、静子夫人の艶やかな肩に手をかけるようにして云った。

静子夫人は、そっと眼を開くと、千代の方

へ気弱な視線を投げかける。

強制され、叱咤されるまでもなく、夫人の心には、もう千代に対する身構えなどなかった。川田や千代の云う事に服従する事が、今の生甲斐みたいなものになったのかも知れない。朝早くからの調教で、全身が蒸されたように上気していた静子夫人は、そのあつい熱に息づくような潤んだ瞳で甘えるように千代を見たのである。

「——お尻を使って、あの——」

あとは言葉に出せず、ぽーと耳たぶを染めて千代より眼をそらせる静子夫人である。

千代は、そんな風に情感的に成長した夫人を見るのが好きであった。

眼を細めた千代は、夫人の乳頭を指で弄んだりしながら、

「それで、うまくいったの」

夫人は、羞ずかしげにうなだれて左右へ首を振るのだった。

「駄目、駄目でしたわ。ごめんなさい」

そう云って、消え入るように頭を下げる静子夫人を見て、千代は、随分長い間かかったが遂に静子を屈服させたぞ、という何とも云えぬ爽快な気分になったのである。静子夫人は自分が奴隷である事をはっきり知悉し、千

代を主人とも飼主とも感じるようになったのだ。精神的にも肉体的にも、遠山静子という女性はここに至り完全に生まれかわり、別個の女として再出発したのだ、そう感じた千代は、遂に勝った、という満足感で一杯になったが、わざとそっけない顔して、

「駄目でしたわ、じゃすまないわよ、奥様」と、不満な口調で云うのだった。

静子夫人は、千代に強い言葉を吐きかけられられても、柔らかい睫を悲しげに慄わせるだけで、空虚な表情をぼんやり前方に向けているだけだ。その夢でも見つめているような空虚な表情と、薄く開いた情感に潤んだような眼の色は、ふと、マゾヒズムの陶醉に浸っているような感じに思われて、千代は、楽しい気分になるのである。

「あれだけ何度も浣腸させたりして、随分と鍛えてもらった筈なのに——」

千代はわざと舌打ちして、量感のある夫人の尻をピシャリと平手打ちするのだった。

春太郎が夫人と千代の中に入り、
「大丈夫ですわよ、千代夫人。今日の夕方までには、この奥様、きつとコツを呑みこんで下さいますわ」

と千代に云い、夕方には、千代達にすばら

しい実演をお眼にかけける事が出来るから、期待していてほしい、とつづけるのだった。

「へえ、何を見せてくれるというの」

千代が興味を示すと、春太郎は、
「私と夏次郎が同時にこの奥様を抱くのよ。私達が実演するなんて大サービスよ。だからごらんになるのは、御婦人方だけにして頂くわ」

それは楽しみね、と四人の女達は、はしゃぎ出した。

静子夫人は、そんな連中の話を、聞くのもなく聞かぬのでもないといった虚脱した表情で、熱っぽく潤んだ美しい瞳を気弱にしばたたかせているだけである。

春太郎は、そんな夫人に近づいて

「だから、わかったわね、奥様。夕方まで、これからみっちりお稽古しますわ。私ね、女が殿方を悦ばすには三つの方法があると思いますの。一には云うまでもなくこれね。それから、これでしょう」

春太郎は、夫人の花びらのような形のいい紅唇を指で押した。

夫人は、ポウと上気して顔を伏せた。

「この二つは、申し分なしにお上手になられたんだけど、あと一つ、ここの要領を覚えて

下さらなきゃ——」

春太郎は、夫人のうしろへ廻って、美しく盛り上った双臀を撫でるのだ。

やり方によれば、三人の男を同時に——と云って夏次郎は笑い出す。

とにかく、今夜は、立位のままで同時責めにする。と宣言した春太郎は、一応、静子夫と肉の関係が、そういう事情で自分達と生ずる事になるが、御承知願いたいと、千代に許可を求めるのであった。

「そんな事、何も気兼ねはいらないわよ」

と千代は笑って答えるのであった。

「前でもうしろでも、あんた達の思うがままにしたらいんじゃない。この女は私の奴隷みたいなんだからね」

「でも、捨太郎っていう亭主のほうはいいんですか」

春太郎が云うと、ああ、あの薄馬鹿の亭主ね、と千代は小鼻に皺を寄せて、静子夫人の傍に薄笑いを浮かべ、にじり寄るのだった。

「この前、奥様は鬼源さんとうちの兄さんの二人を相手に浮気したわね。ついでだから、この二人とも浮気しちゃいなさいよ」

そして、千代は夫人の耳に口を寄せ、

ね。ホホホ」

じゃ、今夜を楽しみにしているわ、と千代は順子達をうながして、次の間へ戻ろうとしたが、ふと思いついたようにもう一度静子夫人の方へ近寄り、

「それから、一つ御報告しておくわ。奥様の親友だった折原夫人、昨夜、とうとう丸裸にされちゃったのですよ」

しかし、それを聞いた夫人は昨夜見せたような狼狽の色は示さず、取乱したところで、もうどうしようもないのだといったように、一切を断念した無表情さであった。ぼんやり空気でも見るように、しんと澄んだ美しい瞳を前方に向けているだけなのだ。

「今夜はいよいよ家元のお嬢さんが素っ裸におなり遊ばすのよ。二人の調教が開始される事になれば、また色々奥様の協力をお願いするわね」

千代はそう云ってから、更につけ加えて、「折原夫人も、男達をうっとりさせるような美しい体をなさっているのよ、田代社長も大喜びよ。鬼源さんも、こりや第二の静子夫人になるぜと張り切って、今日から調教にかか

るわけだけど、いい後継者が出来たわね」

千代は、片頬で笑って、次に静子夫人の柔らかなで滑らかな腹部をそっと手で触るのだった。

「となると奥様は、別の形でショーのスターになって頂くわ。この調教を卒業されれば、すぐに人工受精を致します。いいですわね」

今までもうすら冷たいぐらゐに沈黙を守っていた静子夫人であったが、千代のその言葉に全身をギクツと慄わせた。

「何もおどろく事ないじゃありませんか。毎日色々な男達と交渉し、それに加えて人工受精、そうすれば、どっちにしろ、誰の子かわからない子を奥様は生む事になる」

千代はそう云って、面白そうにクスクス笑うのだった。

「はい、お邪魔さま。お稽古を続けて頂戴」

と千代は春太郎に告げ、引揚げようとする

と、静子夫人は「お待ちになって、千代子さん」と、何とも云えぬ物悲しい微妙な眼差しを千代に向けたのである。

「どうしたの。私の云う事に文句があるというの。これは前からの約束だったじゃない」

千代がきびしい顔つきになると、静子夫人はおびえたように首を振る。

「いいえ、そうじゃありませんわ」

夫人の哀しげな頬に一筋の涙が伝わった。

「静子はもうどうなっても仕方のない身、何でも、おっしゃる通りに致します。でも」

静子夫人は、胸にこみ上って来たものをぐっところえながら

「でも、父親のない赤ちゃんを生むという事は、ああ、嫌、嫌ですっ」

静子夫人は、遂に耐え切れなくなったよう肩を慄わせて嗚咽しながら

「千代さん。静子も女なのよ。どうしても、赤ちゃんを生まなきゃならないなら、後生です、父親のある赤ちゃんを生ませて、ねえ、千代さん」

遂に激しく号泣してしまふ静子夫人であった。

「女として、それは当然な事だわ」

と葉子と和枝は哀しげな言葉を吐いて泣きじゃくる静子夫人に、ふと同情的な眼差しを向けるのだ。

「じゃ、たとえ相手が、あの薄馬鹿の捨太郎でも、ここにいて少し頭の変なシスターボーイでもかまわないというのね」

葉子がそう云うと、春太郎と夏次郎は「少し、頭が変なとは失礼じゃない」とふくれるのだ。

「たとえ相手が誰であっても、父親のない赤ちゃんは生ませないで。ね、わかって下さい千代さん」

涙にむせび、悲痛な表情で云う静子夫人の顔を、千代は呆然として見守りながら

「案外と古風なのね。でも、奥様らしい考え方で私、気に入ったわ」

とにかく、この秘伝をシスターボーイに伝授されたあとで、ゆっくり考えてあげるわ、と千代は仲間を連れて次の間へ引っこんだ。

「じゃ、お稽古しましょうか」

春太郎と夏次郎が、煙草を灰皿に押しこんで立上ると、静子夫人は、氣持を取直したように泣き濡れた美しい顔をすっと上へあげ、「ごめんなさいね。また、あんなに泣いたりしちゃって」

と翳の深い黒い瞳を、ギラギラ涙で光らせながら小さく云うのだった。

「いいのよ。奥様の氣持もよくわかるわ。千代夫人も大分氣持がほぐれて来たようだから悪いようにはしないわよ」

「奥様が、私達の教える芸当を完全に覚えて下すったら、千代夫人の奥様に対する氣持も大分優しくなると思うわ」

二人のシスターボーイは、そんな事を云い

ながら、隅の棚の上から二つの桐の箱を取り出して来た。

「同じ形のものを、同時に使って見ましょうよ。夜の実演のために、みっちりお稽古しとかなきゃね」

ぴったり閉じ合わせている夫人の足首の前にそれを置いた春太郎は、夏次郎と一緒に夫人の左右に立って、

「さ、も一度、最初からやり直しよ」

麻縄に上下を繋め上げられた二つの豊満な夫人の乳房の一つ一つに、左右からシスターボーイの手がかかった。

「ねえ、教えて。静子、どういう風にすればいいの。悪いところは直しますわ。で、ですから、ねえ、教えて」

静子夫人は、ゆっくりと二つの手を乳房に受けながら、さも切なげになよなよとうなじを揺るがせ、わなわな唇を慄わせて、甘えかかるように云うのだ。

柔らかく寄って行き、耳たぶや首筋に軽い接吻をして、乳頭に柔らかい刺戟を加えるなどまた始まったと思ひながらも、シスターボーイの巧みな操作にじわじわ燃え上って行く静子夫人である。

以前はこうした陰湿ないたぶりを、ただ苦

痛としてしか受取れなかった夫人だったが、今では精神的な抵抗も弱まって、いや、むしろ、大脳に精神的抑制が作用すれば、それが一種の性的快感を惹起する事にもなって、こうした屈辱的な愛撫刺激を加えられれば加えられるほど、自分が自分でおかしくなるばかりに、夢中になってしまふのである。もっと羞かしめられたいという願望が、熟れ切った肉体の中をかけめぐるので。と同時に、このようなマゾの陶醉を悦ぶ肉体に作り変えられてしまった口惜しさのようなものが熱っぽく喉元にこみあげてくるのである。

雨を降らすような接吻と指先の攻撃を、夫人の艶々しい優美な裸身に注ぎかけていた二人のシスターボーイは、火に煽られたように白い頬を充血させて、甘く激しい身悶えを見せる夫人を気もそぞろになって見つめる。

「ね、奥様、ね、奥様ったら」

と、上気した夫人の頸筋に春太郎が手をかけ、自分の方へ引き寄せた。

「キッスして、ね、奥様」

夫人は眼を閉ざして、強引に押しつけてくる春太郎の唇に、柔らかく包むように唇を押し当てたのである。

熱い吐息と共に夫人は押し入れてくる春太

郎の舌先に甘く柔らかな舌先をからませる。心も溶けてしまふような甘美な夫人の口吻に、春太郎は有頂天になってしまふのだ。

「ね、私にも」

夏次郎が春太郎を引離して、夫人の口を吸った。

陶醉の火照りで、赤く染まった優美な裸身をくねくねと揺らせつつ、甘い香ぐわしい鼻息と共に、しっとり濡れた舌先を夏次郎にも堪能するほど吸わせる静子夫人である。

全身が痺れたようになって、ようやく唇を離した夏次郎は、

「何だか私、気持がとろけちゃいそう。それに今夜、奥様は私達二人と秘密を持つ事になるんですものね。考えるだけでも胸がときめくわ」

二人のシスターボーイは、本格的な調教にかかるべく、相変わらずあちこちに微妙な刺激を加えながら、体を沈めていく。

モジモジさせている妖しいばかりの悩ましさを持った夫人の二つの太腿に、彼等の手が左右からかかった。まるでマッサージでもするかのよう、ねっとり脂肪を乗らせた成熟し切った付け根のあたりより、形のいい膝頭のあたりまで、万遍なく指先は這い廻る。

夫人の切なげな身悶えは、一そうあらわなものになった。

「ねえっ、気が、気が変になりそう！」

静子夫人は、情感に潤んだ瞳を開いて妖しく酔い痴れたようにわなわな唇を慄わせた。

悩ましい腰のうねりと共に息づく絹のよう……の微妙な美しさに心を吸いとられる思いになった夏次郎は、そっと――

「ああ」と甘い悩ましい呻きを上げて、しっとり潤む瞳を宙に据える静子夫人。

「ね、奥様。私の赤ちゃんを生んで下さらない。ね、奥様」

夏次郎は、いつか京子に対して要求した時のような血走った気分になり、涙をポロポロこぼして口走るのだった。

「私ね。自分の赤ちゃんがどうしても欲しいのよ。さっき奥様は、千代夫人に父親のわかる赤ちゃんを生みたいとおっしゃったわね。私なら駄目なの。ね、返事して頂戴」

何かにとり憑かれたように夢中でそんな事を口走る夏次郎を春太郎は、また悪い病気が出たという風に酸っぱい顔で見ながら、夫人の後方へ回り、その妖艶なばかりに美しい曲線を描く双臀に手をかけるのだった。

「うっ」と、夫人は、春太郎の攻撃を受ける

と、美しい額を歪めたが、すぐにこの責めを甘美な快感として没我の境地に我が身を引き入れるべく、ためらいがちな身悶えや挑みかかるような身動きをくり返すのだった。

夏次郎は、執拗なばかりに求愛の行為と共に先程の奇妙な要求をくり返しているのだ。「私はね、奥様、孤児院をふり出しに随分と苦労して来たのよ。だから、それだけに夢があるわ。美しいものに対する憧れというものがしら。奥様のように貴族的な暮しをつづけてこられた美しい女性に、自分の赤ちゃんを生ませたい。ね、わかって下さる？」

その貴族的な気品と美貌を兼ね備えた静子夫人は、今や抗す術もなく、二人の変質者の攻撃で城を侵略されるがままとなっている。「奥様なんて、云い方は嫌。静、静子とおっしゃって」

静子夫人は、とろりと妖艶に潤む情感のこもった瞳をねっとり夏次郎に注ぎかけて、ハスキーな声をふるわせるのだった。

煽られて肉体が火柱のように燃え上ると同時に、そうした識らず識らずのうち身についた男の官能をうずかせる媚態というものを、夫人は発散するまで成長して来たのだ。

「ね、奥様。いいでしょ。私のために美しい

奥様そっくりの赤ちゃんを生んで頂戴」

「———そ、そんな事、ああ、静子、一体、どうすればいいのっ」

「私は、こんな風に奥様の何もかも知ってしまったのよ。もう嫌とは云わせないわ」

夏次郎は熱病にうなされたように口走りながら、マッサージを続行するのだった。

おびただしくあふられた態を夏次郎と春太郎の貪るような視線に晒しながら、妖しいばかりに激しい啼泣を夫人は口から発した。

「奥様を口説くのはあとにして、早く要領を教えこもうよ、お夏」

春太郎は夏次郎に叱るように云うと、いそいそと桐の箱を開き始める。

静子夫人は、ねっとり脂汗を浮かべた乳色の肩を大きく息づかせながら、情欲にむせた妖艶な眼差しをチラとその方へ向けた。

二人が責具を手にして、再び近寄ると、夫人は、うっとり眼を閉ざし、

「———優しくしてね。ひどいなさり方は嫌」

と、羞らいのこもった甘い声を出し、彼等の仕事に協調して、暖かそうに輝く乳白色のむっちりした太腿をさも羞かしげにそっと左へ開き始めるのだった。

地獄の門

津村義雄の寝室に当てられていた、二階の一室を川田は一日借り受け、珠江夫人に対して恨みを返す事になった。

「ここは、小夜子を骨抜きにした色地獄の間とでもいう所かな」

義雄は、川田に色々と部屋の構造を説明する。ベッドのシーツを義雄が剥ぐと、四隅には仰臥した生贄を大の字に引き裂くためのベルトが取りつけてあった。その上、ベッドの横には生贄の四肢を更に大きく割るためのハンドルがあつて、それを操作する事によって生贄の足首を縛った皮紐は自由に伸び縮みするようになっていた。

「こりゃ面白いや」

川田は、ハンドルを動かしながらホクホクした顔つきになった。

更に川田が驚いたのは、ベッドの真上の天井に張りつけてある大鏡である。

「このベッドに、あの気位の高い折原夫人を縛りつけるのだと思うと、何だか、今から胸がわくわくして来ましたよ」

川田は、楽しそうにベッドの上をたたくの

である。

「こんなものもあるんだよ」

義雄は、一方の壁を覆っているカーテンを引いた。すると等身大の鏡が現われる。その二米ばかりの手前には、天井に打ちこまれてゐる鉄環に先端をつながれたロープが二本、無気味に垂れ下がっていた。

「成程、寝鏡もあれば立鏡もあるってわけですね」

「僕は小夜子を、この鏡の前で剃ってやったよ。なかなか愉快だった」

義雄はその時の事を想い出して、ニヤリと口元を歪める。

「じゃ俺も、折原夫人をここで剃りあげる事にするか。だが、俺をハジキで射ち殺そうとしゃがった女だ。ただ、剃り落とすだけじゃ面白くありませんからね。一本一本引き抜いてやろうかと思ってるんです」

ハハハ、と義雄と川田は顔を見合せて笑った。

「折原夫人は、千原流の後援会長として、湖月流を敵視し、ケツの毛まで抜こうとしたという罪名で、大塚女史に折原夫人のケツの毛を引き抜かせるといふのはどうだい」

義雄はそんな事を云って腹をかかえて笑う

のである。

「そりゃ傑作だ。何としても実行させましようや」

と川田も手をたたいて笑いこけるのだ。

そこへ、葉桜団のズベ公達が、よいしょ、よいしょ、と掛声して大きな木馬を押して入って来た。

「ごくろうだったな。そこへ置いてくれ」

川田は、ズベ公達が運んで来た木馬を部屋の隅へ押し進めて行く。

「木馬責めにもかけるとは、なかなか念の入った事だな」

と、義雄が云うと、川田は手を振って、

「いや、これはそんなものに使うんじゃない」

折原夫人のおまるなんですよ」

へ、おまる？ と義雄が不思議そうな顔をする、川田は、卑屈な笑い方をして、

「鬼源が発明した、貴婦人用のおまるってわけ」

木馬責めの木馬ってものは、それに乗せられる罪人に苦痛を与えるため、大抵、荒けずりされているものだが、それは丸太に角材の足を四つ取りつけただけの簡単なものであった。だが、丸太の背の中央部には大きな穴が開けられていて、この穴の上に折原夫人を乗

せ上げれば、それで立派に彼女のための便器になる、と川田は、得意になって、義雄に説明するのだ。

「ね、おわかりでしょう」

川田は、木馬にあげられた穴の下へバケツを置いて義雄に示した。

「こうして、穴の下の床へバケツを置いておけば、あの令夫人、大きい方でも小さい方でも、自由にたれ流す事が、出来るってもんですよ」

そう云って川田が高笑いした時、今度は田代が鬼源と一緒に入って来る。

「お申し込みの品物を今朝方、取寄せておいたぜ」

鬼源は、小脇にかかえていた風呂敷包みの中から、大きな皮箱を取り出した。

「一体、何なの、それ」

と、のぞきこんだ銀子や朱美は、鬼源が皮箱から抜き出したものを見た途端、「まあ、いやらしい」と肩をすくめて笑い合うのだ。

「アメリカ製で、三万円からする代物なんだから、どうだい。この削り具合。まるで本物そっくりだろう」

鬼源は、ふざけてそれを朱美のスカートへ押し当てた。

キヤーと悲鳴を上げてとび退った朱美は、
「冗談じゃないよ。こう見えても、こっちは
日本娘だからね。そんなごっついアメリカ製
が合うわけないよ」

と、ムキになって怒るのだ。

鬼源は、それにはかまわず、次に好奇の眼
を向ける男達に見せびらかし

「こりゃアメリカの女の兵隊のために作られ
たっていう代物ですが、実によく出来ていま
してね。温めた牛乳なんかを、こっちの方か
ら注ぎこんでおきますと、一層、効果がある
んですよ」

鬼源は、用意して来た牛乳瓶を風呂敷の中
から取出すと、横の穴口からゆっくりと注ぎ
こんだ。そして、わざと川田の方へ差し向け
うしろにしているボタンを押した。

「あっ」と川田は、顔に牛乳をひっかけられ
びっくりする。

田代も義雄も、ズベ公達も大口を開けて笑
いこけた。

「まるで、水鉄砲だな」

田代は感心した顔つきで、そのアメリカ製
の玩具を取上げ、も一度ボタンを押すのであ
る。かなりの勢いで再びそれは発射された。

「ね、よく出来てるでしょう。それにどうで

す。この先端の固くもなく、柔らかくもない
感触。三万円の値打はあると思いませんか、
社長」

と、鬼源は悦に入っている。

「こんなものを使われりゃ、あのツンと取り
すました折原夫人だって、さめざめと女らし
くお泣き遊ばすに違いありませんぜ」

「だが、最初からこんなもので責めるのはど
うかな。あれだけ自尊心の高い貴婦人だ。頭
にきて、狂い出しちまうんじゃないか」

「ま、その点は俺に任せておいて下さい。社
長」

川田は、田代の手から玩具を取り、愉快そ
うに眺めながらいった。

「それから社長。今日一日だなんてケチな事
をいわず、あの女、三日ばかり俺に預けちゃ
くれませんか」

手傷を受けた恨みと、この種の女に落とす
べく肉と心を改造してやるため、三日間徹底
した訓練をほどこしてやりたい、と川田はい
うのである。

「あの令夫人は、ニグロとコンビを組ませる
予定なんです。だから、早いとこ、みっちり
仕込み上げなきゃ」

と、鬼源も田代にいうのだった。

静子夫人も、千代の部屋へ三日間拘束され
て、特別調教を受けているのだから、珠江夫
人も少なくとも三日間はこの部屋へ拘束させ
て欲しいという川田の要求なのである。

「いいだろう」

田代は、うなずいた。

「そのかわり、商品として通用するような身
体に、早く仕上げるんだぞ。鬼源と吉沢を川
田の助手という事にしておこう」

へい、わかりました、と鬼源はペコリと田
代に頭を下げた。

静子夫人は、千代達の女三人に調教指導さ
れ、珠江夫人は川田達男三人に恐ろしい調教
をほどこされる事になったのだ。

「そうきまれば社長、善は急げとかいいま
すからね」

川田は、うずうずして、土蔵の地下に監禁
してある珠江夫人をすぐこの部屋へ移したい
という。

「じゃ、お迎えに行くとするか」

田代は、煙草を横に啞えながら、先に立つ
て歩き始めた。

土蔵の地下室——二つ並んだ牢舎の、中の
一つには千原美沙江が涙も涸れた空虚な瞳を
ぼんやり宙に向けながら悄然と坐り、隣の牢

舎には一糸まとわぬ珠江夫人が、雪のように白く、陶器のようになめらかな裸身を隅の壁を背にして縮めている。茎のように細い、華奢な両手を交錯させて胸の柔らかい二つの隆起を押え、繊細な美しい曲線を持つ二つの太腿をすり合わすようにして立膝している珠江夫人は、何か悲しい思い出にでも浸っているかの様に涙に潤んだ綺麗な睫をそよとも動かさずにじっと一点を見つめているのだった。

「おば様。ね、おば様」

隣からの美沙江の喉をつまらせた声に珠江夫人は、ふっと自分を取戻したように顔を上げた。

「おば様、大丈夫？ 寒くはありません」

「こんな姿にされてしまった羞かしさと口惜しさで、寒さなど感じるゆとりもありませんわ」

珠江夫人は、そういつて気弱な自嘲を含めた笑いを口にした。

「私、何だか恐ろしい夢を見ているような気がするのです。夢なら、ああ、夢なら、早く覚めてほしいわ」

美沙江の断続的なすすり泣きが、また聞こえてくる。

「お嬢様、気を強く持たなければいけません」

わ。今日は必ず、私達、救われます。希望を捨てないで下さい」

半分は羞かしさと悲しさで気が狂いそうになる自分を励ますつもりで美沙江に云ったのだが、昨夜、遂にここへ姿を見せなかった二人の女中の事を考えると、珠江夫人は、暗い疑惑に心臓は再び高鳴り始めるのである。だが、これから身に振りかかる恐ろしい運命を珠江夫人は夢にも想像出来なかっただろう。

「誰か、誰か来ますわ、おば様」

美沙江が、おろおろした声を出した。

かなりの人数の、階段を降りて来る足音がある。

珠江夫人は、さっと全身を硬直させ後退すると、壁の方を向いて、再び、小さく身を縮めた。

田代に川田、吉沢、鬼源の四人がゆったりした足どりで入って来、そのあとに、銀子に朱美、マリ達が大塚順子と何か面白そうに語らいながら入って来たのだ。

美沙江も珠江夫人も、生きた心地はなかった。

彼等の中には、やはり友子や直江の姿は、なかったのである。

「気の毒だが、お二人とも、とうとう救いの

神に見放されたようだな」

田代は、二つの牢舎をのぞきこみながら、おかしように云った。

ヒィーと悲鳴に似た泣声をあげ、美沙江は袂で顔を覆ってしまふ。

「こうなりゃ、あんた達二人、こっちの好きなようにさせてもらうぜ」

吉沢は、鼻の下をこすりながら、得意になつて云うのだ。

「ホホホ、ね、そこにいらっしゃる素っ裸の折原夫人。そんな所で小さくなつていず、こちへお向きなさいな。お尻ばかり向けているなんて失礼よ」

大塚順子は、珠江夫人を鉄格子の間から見て楽しそうに云った。

「奥様の方は、これからすばらしい所へ御案内するぜ。さ、出て来な」

吉沢は、夫人の牢舎の錠前を外した。

「よ、出て来るんだよ」

しかし、珠江夫人は、壁に顔を向け、立膝したまま動こうとはしなかった。

「おい、聞こえないのか」

吉沢は、手にした麻縄の束をくるくる廻しながら、顔をしかめて叱咤する。

「では、何か着るものを与えて下さい」

珠江夫人は、相変わらず二つの乳房を両手で覆いながら、冷ややかな口調で云った。

「着るものを寄せせだと」

川田が舌打ちして、つかつか夫人の牢舎へ入って来る。

「相変わらず生意気な女だぜ。手前、俺にあらんな事をしておきながら、よくそんな勝手な事がいえたもんだ」

川田は、いまいましてそんな顔つきで、透き通るように白い光沢を持つ夫人の肩先をどんと手で押した。

珠江夫人は、肩を押さえ、背中を突かれても、優雅で白蠟のような頬を凍りつかせ、ぐっと屈辱に耐えて唇を噛みしめている。

「奥様のお着物は、私が競売で全部引き取らせて戴いたじゃありませんか。そら、一寸ごらんになって」

大塚順子は、何時の間にか、珠江夫人の着ていた藤色の織縮緬をちゃっかり着こみ、同じく黒の丸帯までしめていた。

「どう、私にこの着物、似合うかしら」

順子は、珠江夫人の前へやってくると、しなを作り、くるりと一廻転して見せる。

珠江夫人はふとそれを眼にすると、さも口惜しげな顔つきになり、奥歯をキリキリ噛み

しめるのだ。

「こういう立派なお召物を着た時の奥様は、まるで博多人形みたいな美しさだけど、生まれたまんまの姿になられた奥様だって素敵だわ。ほんとに宝石のように綺麗な肌をなさってらっしゃるんだもの」

順子は、そんな事を云って、チラと吉沢の方に眼くばせをした。

珠江夫人の背後に回っていた吉沢は、いきなり、さっと身を沈めると、乳房を覆っていた夫人の優美な両腕を抱き上げるようにし、素早くうしろへねじ曲げたのである。

あっと珠江夫人は驚きと狼狽に満ちた声をはり上げたが、かまわず吉沢は背中へねじった夫人の両手首を重ね上げる。川田も鬼源もかけ寄って吉沢に手を貸し、キリキリと夫人を後手に縛りあげていくのだった。

「何を、何をなさるのっ」

と、激しい身悶えをくり返す珠江夫人を、ようやく後手にきびしく縛り上げた男達は、乳房の上下へ巻きつけた麻縄に手をかけて、強引に夫人を立上らせる。

「こ、こんな姿のまま、何処へ、何処へ私を連れて行こうというのですっ」

珠江夫人は、左右から体に触れさせてくる

男達の手を必死に身を振って払いのけながら狂ったように叫ぶのだ。

「うるせえな。来りゃわかるよ」

川田と吉沢は、珠江夫人の縄尻をつかみ、まるで牛でも追い立てるように牢舎の外へ押し出した。

「一寸待って」と銀子は、外へ連れ出されようとしている珠江夫人の前に立ち、ジープンのポケットから、ハート型をした薄手のバタフライを取り出した。

「向こうの部屋へ行きつくまでの間、大切な所を保護するため、これを借してあげるわ」それを鼻先へ押しつけられた珠江夫人は、ひきつったような顔になる。

「何もそんなに驚く事はないじゃない。丸出しで庭を歩かされるよりはましでしょう」

珠江夫人の両肩を左右からがっしり押さえてつけている川田と吉沢に、しっかり押さえていてね、と云った銀子は、朱美と一緒に夫人の足元へ身を沈めて、とりつけにかかるのだった。

優雅な線を描く、ふくよかな乳色の二つの腿が、反射的にびったり閉まり、バタフライの紐が通されるのを拒否する珠江夫人を銀子は笑った。

「あら、隠さず、見せびらかして歩きたいとおっしゃるの」

珠江夫人は、たまらなくなつて、真っ赤に上気した顔をさつと横へそむけ、さも口惜しげな啼泣を洩らすのだった。

「フフフ、そんなに羞かしがる事はないわ。ね、いい子だから」

ふつくらと盛り上つた柔らかい鬚りにそれは当てられ、腰につなぐビニールの紐が股間をくぐっていく。

珠江夫人は、繊細な頬の線を慄わせながら全身を充血させて、この羞かしめを耐えているのだ。

「まあ、よく似合うわ」

仕事をすませた銀子と朱美は、顔を見合せて笑ったが、とりわけ喜んだのは大塚順子であった。

「博士夫人のバタフライをつけた姿って、おつなものね。一度、奥様の御主人にお見せしたいものだわ」

と、笑いこけ、「さ、一度、その傑作な姿をお嬢さんにお見せしましょうよ」と、珠江夫人の滑らかな背中を押し、美沙江が閉じこめられている鉄格子の前へ正面に向け、引き立たせたのだ。

「ああ、な、なんというむごい事を——」

美沙江は、血の気のひいた顔つきで、恐怖にわなわな唇を慄わせ、打ちのめされたように顔をそらせてしまう。

珠江夫人も、固く眼を閉ざし、この憤辱に肩を慄わせているのだ。

全身、雪を溶かしたような滑らかな肌、麻縄で痛々しいばかりにくびられた二つの柔らかい胸の隆起、愛くるしい感じのする臍、そして、すぐその下に、ハート型に縁^{ふち}どられた挑発的な桃色のバタフライを妖しいばかりに優雅な腰へびったりとはかされている珠江夫人である。

必死に美沙江の視線から顔をそらせている珠江夫人を心地良げに横から見つめていた順子は、

「どう、折原の奥様。三十才になって初めてストリップの姿になった心境は？ 若返ったみたいで万更、悪い気はしないでしょう」
そう云って、珠江夫人の可愛い臍を指で突くのである。

「大塚さん」

珠江夫人は、耐えかねたように眼を開けると、眉のあたりを怒りに震わせて、
「このような羞かしめを私に与えて、それ程

貴女は楽しいのですか。貴女は狂人だわ」

強い語気で、反撥するように云ったものの珠江夫人は、今にもどっと溢れ出そうになる涙をこらえて齒をキリキリ噛みしめている。

「何を云ってるのよ。奥様が本当の辱かしめを受けるのはこれからなんですよ」

と、順子は、せせら笑って、「さ、向こうの部屋へ連れて行きましょうよ」と、川田の方を見るのである。

「さ、行こうぜ」

川田と吉沢の手が再び、珠江夫人の肩先にかかる。

順子は、牢舎の中に、よよと泣きくずれている美沙江に向かって云った。

「これから三日間、折原夫人はあちらのお部屋で女としての修業をつまれる事になったのよ。しばらく、奥様とは逢えなくなるけれど淋しがらないでね」

珠江夫人が男達に取囲まれて連れ去られようとする、美沙江は泣き濡れた顔を上げ、鉄格子に両手で取りすがった。

「嫌っ、嫌ですっ。お願い、おば様を連れて行かないでっ」

と、せっぱつまった声をはりあげた。
「お嬢様っ」

珠江夫人は、男達に縄尻を引かれながら、のけぞるように振り返る。

「決して、決して短気を起こしちゃいけませんわ。どんな事があっても、生きるのよ。いいですわね。必ず救われる時が——」

すすり上げながら、哀しげな言葉を吐いて美沙江を励まそうとした珠江夫人だったが、

「うるせえな。早く歩かねえか」

と、吉沢は邪慳に、夫人の縄尻を引っ張るのだ。

S M は「上げ底」？ 予世場良三

KKベストセラーズ社刊行の「なんの本だろう」というポケット版の末尾で、著者たる有名な医学博士「奈良林祥」先生が書かれている。曰く

「……男絶対有利の国の昭和元禄なるムードの中に浸っているうちに、ニッポンの男たちは、いつの間にか、男らしさ、男っぽさ、という、支配欲の表現を見失ないかけてしまっているのではないだろうか。その証拠に、サディズムだの、マゾヒズムだのといった、マル秘的残酷趣味による「心理的上げ底」のお力添えがないと、セックスがスムーズにいか

地下の階段を取囲む男達の手で、押し上げられるようにして昇って行く珠江夫人は、やがて、竹藪のわきの小道を白い素足で踏みしめながら、美しい象牙色の頬を硬く凍りつかせ、屠所へ向かう小羊のように、たどたどしい足どりで歩き始めるのだ。

バタフライのビニールの紐を深く喰いこませている珠江夫人の美しい双臀に眼を落とした川田は、何ともいえぬ甘い陶醉がこみ上げて来て、唇を舌でしめすのである。

「一体、どこへ私を連れて行こうというのです。はっきりおっしゃって下さい」

珠江夫人は、じっと前方へ眼を注ぎながら冷やかな口調で、左右に寄り添う男達に声をかける。

「行きゃわかるさ」と男達はニヤニヤする。

珠江夫人は再び冷たい凄艶な表情で黙々と歩き続けるのだ。

——(未完)——

語義は詳述されているが割愛」と、ゲキを飛ばしておられるのだが、暴力的に、女を征服せよという意味でないことは明白である。ヤロウ共、そんなことはやめて、しっかりしろということだ。

私はこの書のことについてどうこういうのではなく、ドクターが揶揄的に書かれたこの数行に、つい考えこんだ。

むつかしいことは別として、「縛られた女体を好ましい」と思い、美しいと感じ、セックスを覚える」ということは、やはりセックスをスムーズに行なうための「心理的上げ底」なのだろうか？ ということである。

その道の権威者の云われることだから、間違いないだろうとは思うのだが、どうもこの一言には、セックスを成功に導く法を説かれ

……あなたの夜と昼を華麗かつダイナミックなものに塗り変え、あなたを心の底から蘇らせる本（著者自身の広告の言）……として、他の項目ほどの、同意感を得られなかった。つまり、この一言だけには、イチャモンをつけたくなったのだ。

この道の好事家、つまり緊縛マニアのうちで共通の人が何%居られるかは知らないが、私の場合には、サディズム行為——女を縛るということが、これにあてはまるとして——がないとセックスを感じないというのではない、セックス面でもより華麗に充実させる手段として、縛りを附加したのである。

心理的に、そういうものが働いているのかも知れないが「男っぽさ」とか「征服欲」を意識して「縛りたい」と思ったことは、一度もないと断言できるつもりである。（だから「駄目なんだ」ということかな？）

従って、私の場合には「犯すための縛り」ではない。強いてセックスとの直結をいうのなら「ペッティング」の一種である。しかも私の一方的強行では心酔出来ない。相手の女性が必要しもマゾでなくても、強い嫌悪を覚えずに許容できるらしいことを感じとらねば駄目だという条件がつく。つまり、彼と共に楽しみを増加させるために「縛り」を愛戯の一つとして採用したいということだ。寝室のムードに気を配ったり、照明度を考えたり、

カラー下着で効果を高めたりするのと大差はないと思っている。

セックスを感じるから縛りたくなるのか、縛ったから刺激されるのか、ということになると、自分ながらハッキリわからない。しかし「縛りがないとセックスがスムーズにいかない」ことは、ということだけはハッキリしている。縛りを伴ったほうが充足感が深いということであって、もしかりに「縛りさえしなければホテルへ行ってもいい」というボインさんの囁きがあれば、一も二もなく「縛らない」約束のもと、目尻を下げてついに行く。そしてそれはそれなりに、モテタ充足感はあるのだ。

しかし、もう一つかりに、前記のボインさんの囁きと、「セックスさえなければ、縛られてもよい」というカワイコちゃんの申出とがぶつかったとしたら、私はためらいなくボインさんをソデにする。縛りさえしてしまえば、セックスなしの約束なんかケトバシテ……というようなサモシ根性からではない。縛りなしのセックスだけなら、多少くたびれはしていても女房で十分……ではないにしろ我慢出来ないことはないからである。

つまるところ、私に限ってのことかもしれないが「縛られた女体」に、非常な魅力を感じ、愛着を感じはするが、それが「セックスに不可欠」であるとはいえないのだ。なるほ

どセックスアピールは受ける。しかし、奈良林先生のいわれる「心理的上げ底のお力添えがないと……駄目ではないのだ。もし先生に相談すれば「キミは、巷の蔓延部族の一人ではなくてヨカッタね」といわれるだろう。

ヨカッタかワルカッタかはともかく、私は「縛られた女体」は好きであるが、サディズム行為は好かない。そして「縛る」ということで、女体がさらに美しく感じられるということとは、和装がよいとか洋装が好ましいなどということと、どれほどの差があることなのだろう？ と考えてしまう時もある。

害意なく、敵意なく、他意もなく、ただその姿形の上に自分の好ましい「女体の被縛」を求め、名画の前で受ける感激と同様の……というキザだから、もう一方の事実であるところの、セックスアピールに陶醉するとしても、それが、美人女優の演技によだれを流さんばかりの一般ファンの心情と、どれだけ違うものだろうか。

奈良林先生のいわれる「心理的上げ底」の意味とは違うかも知れないが、自己鞭撻や、男女の上位争いに関係なく、ただ形式上の縄が、何物にも優る雰囲気創りになる人間も居るということはいいたいのだ。たとえ形だけにしろ「縛る」ことは異常だ、ヘンタイだといわれても、それが生活に（性生活だけでは）潤いをもたらすのだから妙なものだと思ふのだが、どうだろうか。



珍書探訪

見捨てられた艶笑資料

斎藤 夜居

文芸というものは、作者がひとり自分ばかりをいい子にして書いていると、読者の方はたまったものではない。我慢にも読み進むことができなくなって、その本なり雑誌を投げ出したくなってしまう。

所が、此処にまったく論評を度外視した人春本Vの世界があつて、これは如何に心地よく愉快に物語の主人公を性交場面にまで導いて行くか、そこに作者の手腕やら苦心があり読者側には喝采があるという、洵に云つてしまえばたわいのない一場の夢物語に過ぎぬものであるが、これが実に紆余曲折していて、

仲々一概に単純だとばかり云つて、笑つてすまされぬものだ。

併し、この世の中で春本式の作をも、若し文芸の一種と見做すならば、これ程に読者の寛大さに甘え切ることが出来る作者は先ずあるまいと思うのである。なぜ、そんなことを考えたかと云うと、春本には駄作が多いことと、数多くの駄作を読み漁った果てでなければ、また仲々佳作にぶつかる機会が得られないということからである。確かに、そこにはガイドも批評家も不在であるが、文芸界の通有性ともいふべき仲間褒めやら依怙最良もな

い代りに、文学大賞もない。もっとも、それは当り前の話だが……。

所で、春本の世界というのは、何処の馬の骨が書いたのかは知らないが、作者対読者が密室で対話しているに等しい関係だけであつて、其処から一步も外には出ないものだ。艶笑味の濃い文芸や読物というのは沢山あるが純春本そのもののズバリ、ということとなると閨房内の読物である場合もあるうが、多くは孤独な性生活を余義なくさせられている人たちのもの、と解すべき場合が多いと私は思うのである。

それを読む人の年齢層は勿論青少年が断然大多数であろうが、また必ずしもそうではなかった。たまたまその種の冊子を高価な金を出して購入したとしても、オブ・シーンに眼がくらんでしまって、単に自慰の手助けをする位のもので、作の良し悪しにまで思いが至らない、——というのは若いうちだけで、読み巧者にもなり読書歴を積み、やがてもうその種の俗悪なスウハア物にまでは、ぜにを出さなくなる。其処が年期というものだ。

おそらく罪は作者にあるのだろうが、春本作品の主人公というは、(常に作者自身を精神肉体共に極端に理想化した人物が登場することになっている)まったくいい気なものでよくもまあ続くと思う程に、三人四人以上の女性を相手に淫蕩の限りをつくし、無反省しかも無軌道きわまる人生観を主張し、不埒の限りをつくして、恥じるところがない。何時いかなる場合でも、男女が対し合って坐れば口説かなければエチケツトに反するといった思想が前提条件となっているのだから。

さて、では何故そんな愚にもつかぬ春本なんか読むのだろうか? 好奇心だと云ってしまえばそれ迄の話であるが、どうもそれだけでは無さそうである。時には私たちは自分の

周囲を取巻く社会規制や自己規制のすべてから脱出を計画したくなるように、法律やモラルや家庭生活がうるさく感じられる。そんな時、私は思い付いたように灰色の巷(ちまた)で買い漁ったガリ版刷りの春本類を読むことにしている。

まるで雨が降っているような傷跡だらけの古いエロ映画の場面を、繰り返しくりかえし眺めているように、むなしい肉体の幻戯を倦かず見つめて「あい変わらずやってるな」というなつかしさや、「俺よりもっと惨めな奴がいる」という最低の優越感もあるし、更にはまた青春の日のセンチメンタルもあるという次第なのである。——このごろは敗戦直後とは違った意味でのエロ本ブームで、低俗な週刊誌や風俗雑誌やら、△春本▽とまでは言わないが△春本まがい▽の印刷文化の氾濫でもう今の時代では、私がむかし買ったような膽写版刷のお粗末な春本なんか必要じゃないし、たとえ盛り場の暗い街角から横丁へ入って行ったら、もう売ってはいない。

およそ秘冊のうちでも、いちばん軽んじられる種類のものは何か? と云うに、これら街頭の暗い片隅で売られたり、通信販売で売られた粗末な△春本▽や△写真▽ではなかつ

たか——。それに保存がきかないという点では、映画館の古いプログラムにも似ている。いまも尚消え去った映像を追うべく、イメージの恢復に役立たせる手掛りが無い……全然無いというのではないとしても、乏しいのは事実である。従ってそれらをも艶笑資料として見る場合、それは穴場でもある。若し新しい発見や、過ぎ去ってしまった青春の日を再認識できたとしたら、まったく一時的な気まぐれであったにもせよ、其処になつかしい喜びが感じられたとしたら、それだけでも飛んだ拾い物をしたと思わなければなるまい。

少年時代に見た写真、性的玩具、ハンカチーフの肉筆春画、石版刷のもの等々、それらはいずれも安手なものばかりではあったが、一つの驚異であったことには間違いはない。特に、西洋婦人の美しい全裸写真など、息をのんで凝視したおどろきの念を今も忘れることができない。

併し、こういうものは△人物▽としても散佚し易いが、記憶の世界からも忘れ去られてしまふ。再び求めにくいものである。私が初めて読んだ春本は「新妻の書簡」と題したものであった。これは花嫁日記・新婚日記・新婚の綾子より花子へ・花嫁の手紙・等々いろいろ

ろに改題されたのがある。内容は大同小異で
 謄写版、活版、孔版タイプ等印刷も多種多様
 製本も素人の手作りからセミプロの造本まで
 年代も昭和初期から敗戦後まであって、この
 作品はたくさんの人々に読まれていて、これ
 の記憶を語る人も多いが、さてモウ一回読み
 たいとなると、こうした見捨てられた読物を
 探し出すことは容易なことではなく、辛うじ
 て数点を需め得たが、印象の深い二つの作の
 概略の気分のみ、読者各位のご参考までに紹
 介してみましよう。

◇ ◇ ◇

『新妻の書簡』 謄写版、半紙二十一頁

「花子様、あなたが御承知の通りわたしは秋
 山と改姓いたしましたわ……ですけど今まで
 通りお親しくお願い申します。再々懐しい
 レター頂きましたすぐにお返事と思いまし
 たけれど、貴女からは閨房内の秘事とその感
 想とを最も露骨に大胆に忌憚なくそして赤裸
 々にとの御注文でしょう。お姑さんや夫のい
 る処では書けないのですもの」

と云う書出しより始まり、縁組がきまる迄
 の経過を述べ、無事に挙式を了え、ふたりだ
 けの座敷におちつき、

「お床の間には蓬莱山の軸、その下には蔚と
 姥の島台が飾られ、その傍らには金時絵のみ
 だれ箱が一对、衣桁が立っていて、金屏風が
 引き廻わされ、その内部の方には羽二羽の夜
 具がのべてあるでしょう、アラッ……と思
 ったわ。お床の上には括り枕と塗り枕とが行
 儀よくチャンと並んでいるんですもの」

万事すべて古風に、おめでた尽しである。

此処でふたりは床盃を済ませて、粹人の良人
 は早くも床に入って、敷島（煙草）を吸いな
 がら花嫁をよぶ。屏風の蔭に入って、手早く
 帯や着物を脱ぐ、良人はそれら衣裳を衣桁に
 かける手助けをしてくれる。

「わたしはその温いお手にすがってお床にま
 いりましたの。そしてね、良人は左わたしは
 右に、云うまでもなくコワゴワながら、初め
 て異性に添寝しましたの。わたしの身体はふ
 るえていました。花子様、わたしという女即
 ち綾子という処女は此夜限り永久に宇宙に存
 在しなくなるのです。一種悲哀の感性、胸の
 鼓動、それは刻一刻と高鳴って行くばかりで
 す。此時の意識を分解してみますと、恐怖と
 悲哀が七分三分というような結論に到着する
 のでしょうね。良人は優しい眼でジットわ
 たしを見つめて「綾さんはふるえているね。」

そんなにこわがることはない筈だ。もっとそ
 ばにお寄り」と手をかけ引きよせ、熱い熱い
 キッスをして下さるの。そうしてわたしの襦
 袢の襟から手を入れて袖をまくりなさるの。
 わたしはどうなるかとワナワナふるえていま
 すと、アラッ、どうしよう、今度はお腰巻を
 おまくりになるじゃありませんか」

次第に場面は高潮してきて、前戯の描写が
 しばらく続き、良人の行為を随分乱暴とのみ
 思う中にも、接触と手指による快感にしばれ
 良人が自分に対して如何にして快感を与えん
 かという熱心な努力を悟って、感謝すると同
 時に、

「花子様、この春頃に一緒に性慾学の本を
 読んだ時、自瀆を研究的に試験して見たこと
 がありましたわね。あの時、未熟ながらも性
 の快味に目覚めたことの嬉しさに、相抱いて
 喜んだことを記憶してございましょう。アレ
 からというものは、一週間一回を限りとして
 実行していましたが、到底あんな無味な薄弱
 なものではありませんの。トテモトテモ、実
 際そのことに当たったものでなければ諒解でき
 ないことよ。要するに、それは、とても……
 いい気持よ。花子様もここまでお読みになっ
 たら、貴女様も必ず充血して、つよいつよい

衝動を御自覚なさることだと思ひます。何故ならば私はこうしていてさえ非常に昂奮するのですもの」

と、大いにその友を羨ましがらせている。そして、一儀が完了するまでの描写と感想が以下縷々綿々として、その新婚の女性の手によって綴られて行くという点に興味の進行がある。良人は帝大出の外交官ということになつていて、恐怖を混えた尊敬の念が△結婚▽という、神聖なるヴェールによって包まれ、男女たがいな肉体相接するよろこびに感動する様子が、まったく俗なわかり易い筆致で伝えられている。

「綾子さんもやったかね」と仰るの。わたしはそれが何であるか意味がわかりませんから、「わたしは存じません」とお答えいたしましたの。だってその時は本当にわからなかったのですもの」

——ご投稿下さる方へお願い——

各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に氏名を書かれずに送付されると、稿料送呈その他で整理がつかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作(イメーヅ画も)毎に、住所、氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用縦書きと共にお願い致します。

云々。

「花子様、わたしは尊い清い処女と斯くの如くにして永遠に袂別したのでございます。しばらくして良人は肌と肌を合わせて抱いて下さいましたが、そのまま睡りにおちて仕舞いました。眼を覚ました時は朝日が窓のカーテンを透して、赤い光線を室内に投入していました。わたしは上半身を良人にのせかけ、良人はしっかりわたしを抱いていて下さいました。意識せぬ睡眠中にも、偉大なる愛の力によつて互いに抱擁していた吾等二人を見出したわたしは、驚喜せずにはいられませんでした」

初夜はかくして了り、二日目になると、「其翌晩は十時にお床に就きました。良人は昨夜と同じ位酔っていられました。綾さん丸髷が非常によく似合うよ、僕は昼の内からどんなに抱きたかったか知れない。早く着物を脱いでおいで」と、今晚はもうわたしを始めから裸になさるお積りなの。わたしもそういつまでも恥かしがってばかり居られませんから、お腰巻ばかりになってお床に入りましたのよ。スルトお待ちかねの様にお腰巻をとつておしまいなさるの。わたしは昨夜にこりていましたから、ネルのお腰巻をお床の上に

敷いたわ。ダッテ、そうしないとお布団に地図のような斑点がところどころに残るんですもの」

どうも、この△お腰巻▽というのが気になるが、この花嫁さん二日目にしては大分さばけたものである。こうして新婚三十三日目にしてやっとペンを取った手紙だと、以後毎夜々々の楽しみを記したということになっている。

「月経三日間、中止したばかりなの」

という熱心さで、いまはお互いに変わった態位の研究に熱中している。

「今夜は、どんなことをなさって下さるかしら。今からそれがたのしくて、夜になるのが待兼ねてなりません」

と。そして人生の目的は愉絶、快絶、その瞬間、その刹那のよろこびであることを強調し、筆を結んでいる。女性側の報告というより、男が、女からこうしてもらいたい、と云う一つの理想像(妻の)を描写しているようだ。

『鴛鴦の手枕』 謄写版・半紙五十四頁

これもまた実によく坊間に流布された作品で、新妻の書簡が場面描写オンリーにくらべ

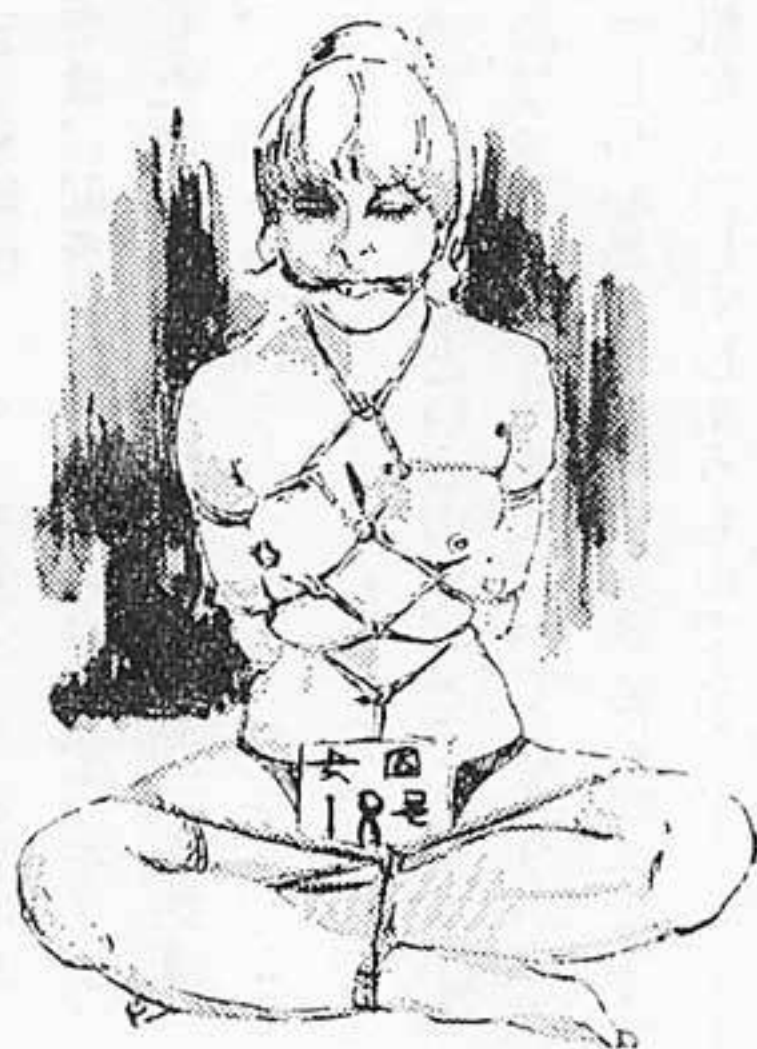
折しも年の頃二八とおぼしき娘、一力の裏にはちより四辺の様子をうかがい密かに忍び込む。これぞ内蔵之助の一子、主税義包が女装をなして、父より連絡の謀計をさずけられんがため、の仮の姿だった。ところが勝手知らぬ部屋々々をうろろするうち、怪しまれ、逃げんとするも多勢に囲まれ押えられてしまう。取調べられても白状しないので、物置にしばらく押し込まれてしまう。

其四。小花は翌日朝のうちに早速に父に見えて、昨夜の女性は怪しい者ではなく、実はわたしが近衛さまのお屋敷に上っていた折の姉にも等しい友であったと嘘も方便、父の許しを得て居間に連れ込み、人目につかぬを幸いと、むしかえしの楽しみに耽っていた。

其六。内蔵之助のなじみの芸妓は桃世という音に聞えた京美人で、（実は上杉の家臣脇坂甚内の娘で女スパイ、内蔵之助の暗殺をたくらんでいる）この桃世との床の喜悅の場で「つやつやしくも真白で、その濃き所は、雪の朝の庭石に鴉のおりたる風情にて、きめはこまかく鴨川で、さらしあげたる羽二重のよう、すべすべとやわらかく、指に気味よく、目に心地よく、内蔵さんもはやたまりかね」云々。別にどうと云う文句ではないのだが、一種の名せりふで、長く脳裡に残っていた言葉である。この「鴛鴦の手枕」は第十三章まで、討入りで了るという珍しい作であった。

春本式のものが、なぜ早く人に倦きられ易いかという原因を考えたが、それは場面描写があるだけで、人生（哲学）に乏しいからだ
と、この不十分な二篇の紹介でお分かりかと思ふ。併し、そこには眠られぬ夜の遠い日の
△郷愁△だけは、ちゃんと保存されていた。

……マニアの気持……



新しい縄

早 木 夢 二

新しい縄を買いに行った。

私の好きな、やや太目の綿ロープが、キリと束ねられて店先にブラ下っているのを見るごとに、慶子の肌を連想していた物だ。

やはり、ちょっと気怯れを感じて、無言のまま指差した。ついこの間まで八十五円の価格がブラ下っていたと思うのだが、女店員は百円だという。縛りもだんだん値上りするワイと思いつつ、包んでくれるのを待っていたが、レジのおやじとその女店員が、クスクスと笑っている感じがした。

いつか慶子が買って来たとき話していた。あれこれと手にとって選んでいたそう。すると店員が来て、何にお使いになるんですか？ と訊いたそう。アドバイスして

やろうといわれたって、まさか「私の肌にしっくり合うのを」とはいえずに、慌ててそこそこのを買って来たそうだった。あの時、私は腹をかかえて笑いこけたが、今、包みを受取るなり、どうしても足速やになる自分がかしかった。スネに傷を持つと、変なふうに気をまわすものだった。

私の後姿を見ながら、あの二人が心得顔でニヤニヤして、きつとそうなんだよ。あの縄ならよく締まるわね。なんて話してるんじゃないか？ あの二人もひょっとして。だとしたら縄はよりどりで便利だろうな、などとロクなことは考えない。

この頃のように女が裸で縛られている写真や映画がハンランすると、あの女店員が一束

の縄からそれを連想しないとは、いいきれないものの、まさか、縄といえはすぐ縛りに結びつけるわけがないと打ち消しはしたが、やはり、その目的で買うことはテレくさい。

ひっそりと胸に秘めて漁っているつもりになれた頃のこと、なつかしく思い出されてしよかった。

ともあれ、その新しい縄は、その夜慶子の裸身にまといついた。やや太目なので柔らかい肌に喰いこみながら、なお盛り上っているような感じで、くっきりとした区切りをつくっているのが、見慣れた私の眼にも鮮かで、新品の値打ちと、ぎこちなさがあった。

「きょうからは百円の縛りだぜ」

私はご機嫌で、そんな冗談が出た。

あの店の二人に、どうです、この縄はこんな美しい使いかたをするんですよ。といってプレイを見せてやりたい気持ちもした。

そのくせ、あれから何日か経って、又あの店の前を通りかかった時、あの女店員の姿が眼につくなり、慌ててソッポを向き、無意識に足速やに通り過ぎてしまう私だった。

しかしまた、次の縄もきつとあなたの店で買いますよ、と、内心で話しかけて、そっと振り向いて見て、負けめをとり戻したような気になったのだった。

(カット・志羽 利也)

S M カメラ・ハント……小池美喜の巻

『飼育の愉しみ』

辻村隆

昔、髪結床——今、理髪店。この男の溜り場では、顔を当たってもらいながらホノボノとしたい気持ちになって、世間話から始まって、そのうちつかうかと、プライバシーのことも喋ってしまうものだ。自分の髪型を知っている床屋というのが、どうしても馴染みになって、ゆきつけになってしまいうから、いつしか心易くなって、秘密めいたことすら何気なく話してしまうものである。

私の家から三百米ばかり離れたら理髪店もその例にもれず、もう十年來のゆきつけの理髪店であった。四十年配のマスターは、私が

イレブンPMに出たことも、東映の仕事をしていた、それが緊縛指導という、嘗て類例のない、誠にもって奇妙な職種であることも知っていたが、彼自身さしてSMの気はなく、唯、面白可笑しく合槌をうつ程度であった。

是非一度、撮ってきたフォトを見せてほしいなどいいながら、もう数年以上もその俚になっている。私にしても、理髪店を一步出れば忽ち赤の他人めいて、つまらぬ話したものと、軽い悔恨の念にすらとられるのがオチであるのに、数週間すぎて又ぞろ髪が伸びると、いつものように同じ会話を繰り返してい

る。ひそひそ話ではなく、かなりの大きい声で喋っているから、住込みの三人の若い連中も、或る程度は、私という人間の正体を知っている模様であった。

住込みの一人は十七、八才の青年で、残る二人が女性であるが、小池美喜は明朗な、ハキハキした可愛い娘である。もう一人のK子はチンクシャで、これは問題にならない。マスターが髪を刈ったあとの、髭剃り洗髪が彼女等の仕事である。最後のドライヤー、この整髪が又主人という段取りで仕事が運んでいる。



運命の神様は、時々思い掛けないいたずらをなされるものである。

× ×

四月の下旬の夜八時、もう閉店間際であったが、馴染の顔で、入口の閉じたカーテンを潜って店内へ入った。東映の『責め地獄』の仕事が連日続き、やっと今日一日暇を見出したので、夕食後、フト髪を刈る気にな

ったのであった。

髭剃りがチンクシャ娘に当る時もあるし、青年の時も、小池美喜の時もあって、とりわけ指定しない私は、その三人の内の誰でもよかった。それでも可愛い娘の美喜に顔を撫でられ、ひっぱられ、つままれている時は、何となく悪い気はしなかった。彼等同志、お互いに牽制し合っているのか、私を特定の客として扱わず、それだけにとりわけ私語することもなかった。

美喜がこの店に勤めたのは一昨年の春からであるが、既に二年以上の顔見知りでないが、まさか彼女をハントの対象にしようとは過去二年間、夢にも考えたことはなかった。

閉店近い時間ともなれば、流石に一日中の仕事の疲れが出るのか、日頃は愛想のいいマスターも余り喋らず、少しは東映の仕事振りなど、吹聴する気であった私の期待も外れて、そそくさと頭を刈り終ると奥へ引込んでしまい、そのあと美喜が私の顔を当り出した。青年もチンクシャも辺りを片付け終って食事に奥へ姿を消し、珍しく広い店の中は私と美喜の二人きりになってしまふ。

顔を近々と寄せ、息吹きすら感じる至近距離で私の髭を剃りながら、二人きりの気易さが、いつになく美喜を雄弁にした。彼女は

私をセンセーと呼ぶ。

「センセー、又東映のお仕事なんですよ」

「ああ、そうだよ」

「毎日、若いスターさんと一緒に楽しいですよ」

「うん、確かに楽しいね」

「私、センセーのイレブンPMに出たの見ましたわ。サンガラスなんかかけて、まるで人が違うみたいでしたよ」

「そりゃどーも。店の連中皆で見てたの？」

「ウウン、偶然に私一人——。みんなお風呂にいったって、留守番してたの、あの時」

「どう思った？」

「ウン、すごく面白いと思った。私残酷ムード好きなのかしら、女のくせして変でしょ。いろいろのスターさんと喋ったり、縛ったりして、センセー嬉しそうでしたわ」

「へえ、顔に似合わず、柄になく変わった趣味があるんだネ」

「センセーはずっと以前から、いろいろの女の人を縛ってるんですってネ」

「誰に聞いたの？」

「マスターが奥さんと喋ってるの聞いたわ。それに、お正月にやってた『元禄女系図』に、センセーの名前ボスターに出ていて、緊



ネ。ニューフェイスで、主役に抜擢された子が、或る日、突然行方を晦ましテンヤワンヤ。急拠代役で撮影やり直しなんだよ」

と、ハプニングスター由美てる子と急拠抜擢の片山由美子交替の顛末を聞かせてやる。彼女は、眼を輝かせて話にききいり、カミソリの手を休めて、左手はしきりに私の頬を無意識に撫

でていた。

縛指導って書いてあったじゃないの。どんな指導するの？ 私も一度、見学してみたいなあ。連れてって」

「女人禁制のスタジオだよ、見学はお断わりなんだ」

「だから尚更見たいの。センサーの顔でならいいんでしょ」

「そんなにみたいかね」

「ええ、見てみたい」

「恰度今、『徳川いれずみ師『責め地獄』』

というゴールデンウィーク映画の撮影中で、実は毎日行ってるんだよ。先日も突然ハプニングな出来事で、主役交替の一騒動があった

この娘は私という人間に、すっかり興味を抱いている様子である。そうなると例によってムラムラと觸手が動き始める。いつしか私には、この娘をあわよくばハントしてみたいという不逞な意志が蠢き始めていた。『責め地獄』の話の内容は、所詮責めと緊縛とSMに終始することは論を俟たない。否応なく話題はそんなことばかりであることが、この際都合よかった。いつしか美喜の頬は羞恥と昂奮で紅潮していた。

「……だから、若いスターさんの殆どは全裸に近いよ。いろいろの、サイケ調のいれず

みで妍を競うんだからね。人間屏風だとか、動くいれずみとか、夜光刺青、残酷刺青と、若い女の肌は五彩に輝き、一方次々と、刺青女郎が、八角部屋の中央で、全裸でさまざまに緊縛されて責められる。謂わばこれは、緊縛の集大成ともいうべきものだよ。どうだね美喜ちゃんもこんなことに興味があるのなら一度縛ってやろうか？」

「縛られてもいいんだけど、ハダカになるんでしょうね」

「着ていても差支えないが、やはり脱がないと感じ出ないね。スターを目指す人だって、殆どが脱ぐ時代だよ」

「ハダカになるのは構わないんです。でも私ちっぽけで、体、貧弱だから恥ずかしいの」

「体はチツポケでも、いいボインしてるじゃないか」

首を動かして、胸に眼をやって冗談いうと「あっ危ないわ、動かないで——。カミソリ滑っちゃうじゃないの」

私は美喜と二人きりで、こんな会話を交している時間が愉しくなってきた。何でもやってみたい、知りたい年頃なのだろう。未知のアバンチュールを、怖いくせにそっと味わってみたい、そんな好奇心にみち溢れているよ

うであった。

「美喜ちゃんは何年生れ？」

「いくつに見える？」

「さあ、昭和二十三、四年頃かな」

「当たった、昭和二十四年八月、丑年生まれ。」

だからノンビリしてるんでしょね」

とすると、十九かハタチというところか。

ハントしたところで、勿論最初から大したことも出来っこないが、ぼつぼつ飼育すればものになるかも知れない。思い切って小当りに当ってみる。撮影所見学にでもかこつけて引っ張り出すとするか。

「じゃあ、美喜ちゃん、お望み通り一度連れてってやろうか？」

「本当——嬉しい。私こうみえたって誰も彼氏いないの。だから、デイトの愉しみっていうのを知らないのよ。センサーとデイトするなんて最高——。月曜日ならお休みだから、朝早くからだって出られるわ。きつとよ。ねセンサー」

早速、乗り気で念を押してくる。これなら脈がある。

「じゃあ善は急げで、次の月曜日にしよう」

「四月の十四日ね、いいわ」

或いは東映の仕事があるかも知れないが、

その時はその時のことだ。何とかなる気で、腹をきめる。

「この付近で待合せをすると、すぐ噂が立つぞ。美喜ちゃんの顔は売れているからね」

「どっか離れた処で待ってますわ。ああ嬉しい……」

無邪気に喜ばれてこのセンサー、内心いささか良心が咎める。

「縛るかも知れないぞ」

ハントを仄めかしておいたら、

「いやーん、そんなこと別にして遊びに連れていってエ」

「ウン、よしよし、でもみんなに内緒だよ」

「分かってるわ、任しといて。それよか、どこで待ち合せしましょ……」

私達はヒソヒソ話になって、月曜日の待合せ場所やら時間をきめた。秘密めいた愉しみの中に私は急に美喜に女を感じ始めていた。いつもは白い仕事着に蔽われている彼女の、思いがけぬほど成熟した肌を剥き出しにして、ギリギリと縛り

上げてゆく妄想に捉われて、いつまでも同じところを繰り返して剃っている美喜の手を頬にジカに感じて、眼を閉じた瞼の奥に、未知の白い裸身を鮮かに描き出すと、ひとり胸を疼かせていた。

食事をすませたマスターが店に現われたので、美喜は忽ちよそよそしくなり、急いで襟筋を剃ると、私を洗髪の位置に案内した。かなり長い時間をかけたわりに、あちこちに剃り残しのザラつきを掌に感じて、私は美喜の心の動揺を思い、苦笑して店をあとにしたのである。

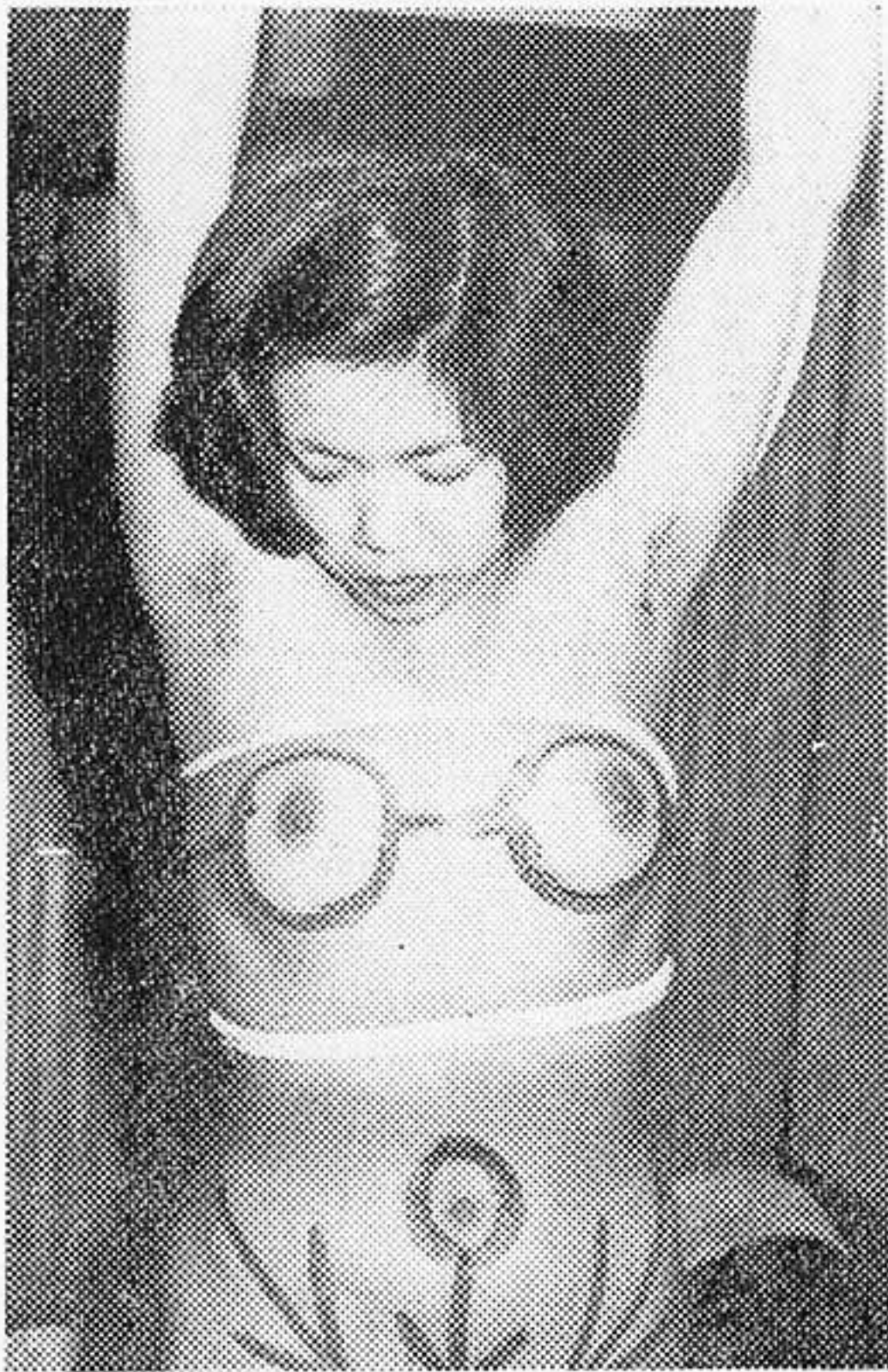
× × ×



デートの当日、矢張り予測した様に、東映の最後の仕事待ち構えていた。女刑罰史にも出演して駿河責めをやった、外人のうら若き娘ハニー緊縛の日である。仕事の合間、彼女に見学させているより仕方あるまい。スタッフには同好者の娘とでもいっておこう。しかし年若き娘が、ハレンチのシーンをみつめているとすれば、スタッフの大半はハハーンと感ずくかも知れない。

家からかなり離れた街角で、午前九時きっかり彼女をのせると、私は一路京都の太秦へと進路をとる。

小池美喜は、私の傍らでチューインガムボ



ンをしゃぶりながら、すっかりドライブ気分である。

定刻を一時間遅刻して到着、直ちにセットの附近まで車を走らせて、入口近くで傍らにとめておく。

一步踏み込んだセット内は真暗で、雑然とした足許が危ない。美喜の手を引いて、やっとなライトの光る撮影中のセットに近づく。待ちかねていたように進行さんや助監さんが、ハニーの緊縛を依頼してくる。この模様は別項で詳述したので省略するが、かなり長い時間、美喜は光の当らぬ位置から、喰い入るように、ハニーの裸身をみつめていた。

こうこうと照らし出されたハニーの白皙の緊縛の裸身は、美喜にとって予想以上に強烈な印象を与えた様であった。

午前中の撮影を終って、このシーンは午後にも続く予定であったが、緊縛の構成は午前と同様であったので、石井カントクさんにそつと耳打ちすると、笑って私の肩を叩いた。

東映の食堂で食事。所員用なので安くて旨い。TV映画で顔馴染のあの人、この人が、昼休みに右往左往しているので、美喜の眼は忙しい。

かなり未練を残している様であったが、今更珍しくもない風景に、私の心は美喜と二人の次の行動へと移りたがっていた。東映の京都撮影所から嵐山は近い。走って十分、たちまち河畔に到着する。春のひざしは燦々とふりそそいで、水もぬるみ始め、休日の翌日では人影も流石に少なかった。散策し乍ら、辺りに人影のない場所を選んで腰をおろすと、美喜は私に寄り添うようにして坐った。

「どう、『責め地獄』の感想は？」

「凄いのネ。あの外人の娘さんは、未だ若いんでしよう。日本語も上手だし、縛られても長い間、辛抱するのね、痛いんでしよう」

「縄が堅いからね。緊縛も綺麗だろう、ああしてみると」

「ええ、素敵だわ。あんな体なら私だって縛られてみたい」

「美喜ちゃんだっていい体だよ、自分勝手に卑下しているだけで、どのモデルの人にくらべてもさして劣らないと思うがね。参考に数十枚フोटを持ってきたけど、見るかね」

「ここで大丈夫？」

「ああ、誰も覗きに来やしない。さあ——」

持参したフォトを袋からとり出すと、彼女の反応を確かめるべく手渡す。美喜は、その一枚、一枚を丹念に鑑賞していった。極端な露出ポーズは避け、緊縛を主眼にしたものを選んで来たので彼女の表情にさして羞恥は浮かばない。既にショックなセット内でのシーンをみてきただけに、緊縛に対して幾分精神は麻痺していたのかも知れない。しかし心の動揺は、かなり激しいようであった。

「これみな、センサー撮りはったの？」

「ああ、そうだよ」

「こんなにきつく縛ると痛くて苦しいでしょうね」

「そうでもないんだ。縛り方にコツがあつてね、きつそうに見えて、その実さほどでもないんだが、フォトではさも痛そうみえるところが緊縛指導の指導たるゆえんさ。だから我慢じゃないが、痛くないようにだって縛れるよ。嗜虐という点から考えると、それは本質でないかも知れないが、緊縛によって程よい快楽を与えることさ。女優さんだって、ドン・ドン縛られる時代だよ、性愛路線で単なるヌード時代は過ぎたといってもいいね。ものは

ためし、美喜ちゃんも私に縛られてみたら分かるんだが……」

ああ、何と小娘を飼育するシンドサよ。近頃は、既に緊縛を承知した女性を撮る機会ばかりに恵まれているので、一から口説くとなると、何となく気骨が折れる感じであった。

「きつとそれを言い出すと思った。センサー余ッ程縛るのが好きね」

「ああ好きだね、うれしいね。女の人によってみなそれぞれに反応が違うからね。羞恥の快楽を観賞するのは、緊縛を以て第一となすだよ。美喜ちゃんならきつと可愛らしく、美しいと思うよ」

「私なんか本当にダメよ。もっとグラマーだったらセンサーに縛られてみるんだけど——でも、それなら理髪店なんかに勤めていないわね」

縛られるのは構わないし、プレイとて時と場合によっては辞さない気持でいながら、美喜は己れの体にひどく自信がないようであった。それが言葉のハシバシで、いつも自分を卑下していた。ましてスター達の緊縛を垣間みて、彼女の心は尚更に沈潜していったのではなからうか。もっと自信を持たせて、思い切ってアバンチュールへ突入させる勇気を与

えなければならなかった。

「それは美喜ちゃんのひがみだよ。市井に埋もれた中にも素晴らしい人は星の数ほどもいるからね。スターだって素顔の時は世間の女の子とちっとも変わりやしない。演技力と勇氣と度胸がスターの座を保っているというのかな。東京へ行った時、妊婦の女性がいった言葉だけど、単に縛られているのは、和服を着付けて、数本の腰紐やしごきでギューギュー締めつけているよりラクだって。その人は内心プレイを求めているただけだね」

「プレイってどんなことをするの？」

無邪気に問い返されて、ぐっとつまる。純粹のSMのプレイもあれば、フォトの緊縛もプレイの範疇だし、SMをとまったSEXだって、プレイという言葉でいわれる此頃である。いやむしろ、SEXそのものをプレイと称する様になった昨今、この難かしいPLAYなる語義を、ハタチ足らずの娘に何と説明すればよいのであろうか。

「さあ、どう言えがいいか——。縛って一寸いじめてみたり、觸ってみたり、単なるフォトだけのものでなく、フォト以外の、一種の秘かなる戯れといったらいいか……。兎も角プレイの定義は広くてむづかしいね」

「センサーもプレイするんでしょ」

「勿論、緊縛のフォトを撮るだけじゃなく、オアソビもするね。正直いって、過去十数年あらゆる縛った写真は、とってとって撮りつくして来たからね、フォト自体より、プレイの方に興味は移っているといってもいいね。美喜も、もう少し大人になれば分かるよ」

「ウウン、ちっとも分からない、センサーのいうこと」

彼女は首をかしげて、正直判断のつきかねる顔つきになっていた。オカッパに近い断髪で、化粧もホンの口紅程度のこの娘は、未だ浮世のそうした裏街道は、何ひとつ知らないのが本音であった。私は根よく誘導してゆくより仕方がない。最近は頓にもぐさくなつて、初歩からの飼育は余りやらないが、この娘にだけはどうしたわけか感興をそそられ、珍しくも、悠長な気持になっていたのだった。勿論、今日初めてデートして、それでいきなり成功するとも考えてはいなかったが、或る程度のとてくればしめたものであった。

現在地点に於ては、小池美喜は少なくともノーマルに近い状態であった。この年頃の娘が、誰しも一度は遭遇する、大人の世界を知りたいと希う思春期の欲求が、私の様な男に

憧れに似た淡い思慕をよせオジサマ的な安心感の信頼をバックに、未知の世界を覗きたい欲望にかられるのではなからうか。近所の毎月顔を見合せる素姓の知れた安心感と、一対一となった私が、何をするか分からないという軽い不安感の交錯した渦の中で、小池美喜は右顧左眄^{べん}して迷っているかのようにであった。

全裸で縛られることによって、自分を防衛するものが何もなくなくなる、その刹那が怖いのはなからうか。中年の人の好きそうなオジサンが、いつ不意に野獣と化して、牙をむき出して飛びかかってくるかも知れないという不安が、本能的に乙女の心の夢を硬く閉じていたのかも知れない。

「せいてはことを仕損じる」という格言通りに、ここらでじっくりと機^{はたけ}の熟するのを待つ方が賢明なようであった。

この娘は、こうしたプレイに、確かに興味を抱いているのを私は知った。そのくせいきなりその世界には飛び込めないのだ。こんな



時深追いして執拗く迫ると、かえって逃げ腰になるだろう。チャンスはいつか必ず巡ってくるという、漠然とした、それでいて妙に確信めいた気持を抱いて腰を上げる。

「さあ、じゃあそろそろ引揚げようか」

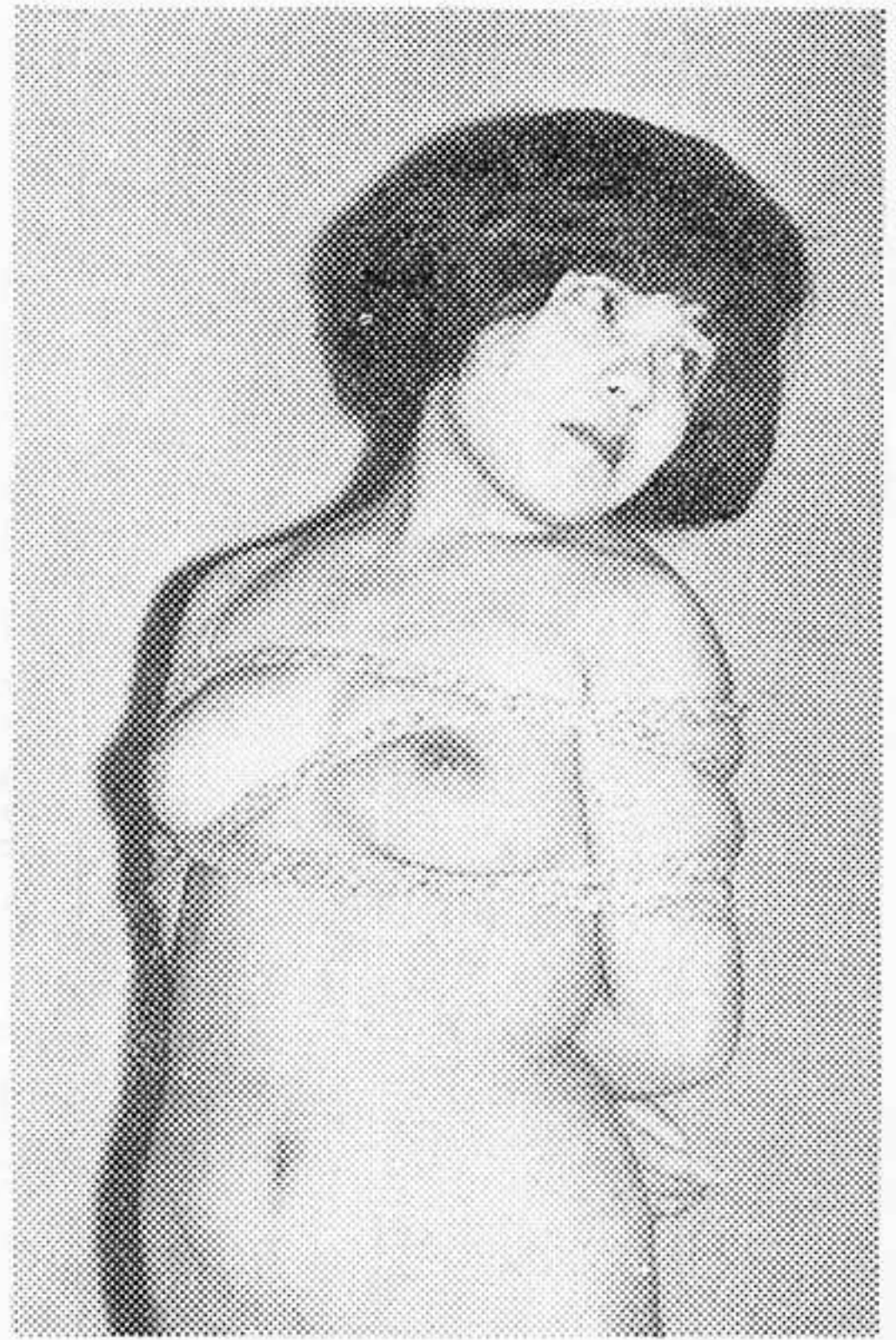
「あら、もう帰るの。未だ二時前よ」

「引返したら恰度いい時間になるだろう」

美喜は急に思いつめた顔付になると、一気にいってのけた。

「センサー、ちょっとだけならいいわ。何だか縛られてみたくなった……でも、縛ってヘンなことしないで約束してね」

「いいのかい？」



て車へ向かう。嵐山は私にとって馴染みのない土地であった。御多分に洩れず連込みホテルも数あるのであるが、やはり私は日頃行きつけている岡崎公園の方へ車を走らせることにした。

× ×

美喜にとって、この種のアベックホテルは始めてであるらしかった。小さい間取りの小部屋を、さも珍し

「いいわ。センサーに無理いって、撮影所見学したり、私の我儘きいていただいたのだもの。少しぐらいはきかなくちゃ……」

美喜は紅潮した頬に、硬い笑みを泛かべていた。

「後悔しても知らないぞ」

「後悔なんてしないわ。シャシンとったからといって、どうってことないんじゃない？」

一旦腹を据えると、美喜はかえって大胆になっただけ。未知へのアバンチュールに飛び込むとして、この娘は、武者震いのようなものすら、ちっぽけな体に、漂わせていたのである。大きく頷くと、私は美喜の手をとっ

げに、キョロキョロみている。奥の間の、白いシーツに二つ枕の間の床が乙女の心を刺激したのか、襖を開いてチラリと覗くと、ピシヤリと勢いよく閉めてしまった。

備付けの浴衣を手渡すと頃合いをみて私は美喜に入浴を奨める。モジモジして、一向に入浴する気配をみせない。

「どうして入らないの？ さあ行っておいでよ」

なじるようにすすめると、やっと重い腰をあげて、浴衣を抱えて立上ったが、

「センサー、御免ね。わたし今アレなの」

「何だって？」

「昨日から始まったの。だから気が進まなかったのだけど、センサーに悪いと思って……縛るぐらいなら、アレだって差支えないんでしょ」

やれやれ、どうも私は運が悪い。確率にすると7/30で、一カ月のうち二十数日は何事もない筈であるのに、ハントした女性が、いつもよりによってその週間に当たっていることが多かった。それならそうと、最初からいってくれれば、又日も変えるのに、ホテルに入ってから白状されたのでは、ノメノメと素手でも帰れなかった。

彼女に入浴をすすめるのをあきらめて、代りに私がちっぽけな風呂につかる羽目になった。鳥の行水で上ってくると、美喜は素肌に着衣を纏って、チャブ台の向こうにチョコンと神妙に坐っている。私を見上げてハニカンで笑った。

「無理しなくていいんだよ」

「大丈夫。タンポン入れてあるから、洩れないと思うけど……」

ひたむきな彼女の協力ぶりに、私は苦笑しうなずくと、寝室との境いの襖を外す。この狭い小部屋では、クローズアップ以外一寸無理であった。

「こちらへ来ないか」

闇の方へ招くと、何を誤解したのか美喜はハッとした顔付きになった。若い娘のセックスは、本能的にダブルの寝床を警戒しているようであった。

「何もしないよ、さあ——」

再びいざなうと、やっと立上って、のろのろと白いシーツの上に坐る。

手早くストロボをカメラに装填して、私は何気ない美喜のそのポーズに、数回、閃光を走らせた。

顔をそむけるようにして、彼女はみじろぎもせず硬いポーズをとっている。一条の縄をとり出すと私は美喜に近づく。やや手荒く、浴衣の襟をはだけると、予想通り、その下は全裸であった。

かたちよく盛り上った乳房が、やわやわと揺れて、美喜は一瞬たじろぐ。彼女の両手をとると、無雑作に体の前で両手を合せて、ぐるぐる巻きに縛り上げる。浴衣を肩からずり下げて、立膝した膝頭に両手をのせさせ、美喜の頬に両手をかけて、カメラに正対させる位置に戻ると、彼女のクリクリした円らかな瞳は諦観の念を浮き上らせて閉じられていた。自分自身の羞恥の姿を正視出来なかったので

あろうか。

「両脚を、あぐらに組んでごらん」

無言で娘は腰を振ると、縛られた両手で前を蔽うようにして、いわれた通りあぐらを組んだ。平凡この上もない、緊縛ともいえぬこのポーズも、小池美喜にとっては、必死の思いのポーズであったかも知れない。

未知の娘を飼育することの、何とわずらわしきことよ——。ホッと吐息を洩らす思いでそのくせ、無垢の、プレイに染まぬこの娘を刻々と私の思い通りにしてゆくことで、疼くような快感が身内をつらぬいてゆく。

「恥かしいかい？」

意地わるく聞くと、正直に美喜はコクリとうなづく。

「映画の方じゃ、こんな程度では、問題にも何もならないんだよ。衆人環視の面前で、女優さん達は、もっともっと凄く縛られているんだからね」

「分ってます。でもやはり恥かしいんです」
美喜は思いつめた口調で、吐き出すようにいった。

するするっと縄をといてやると、小池美喜は、たったそれだけのことで、いかにも疲れ果てたといった風に、ドタリと寝床に仰向け

に倒れた。乙女の羞恥に、浴衣を引き寄せ、両手で、そっと押えて眼をつぶっていた。

ガバとその体にのしかかりたい野望をぐっと押えて私はその肢態をじっと見下ろしていた。フトきざす疑問の心——。ひょっとするとこの娘は生理と言いつて、危険を予測して偽っているのではなからうか。若い女がよく使う逃口上だ。事実私は、彼女の生理の実態を未だこの眼で確かめてはいなかったのであった。

途端にムラムラッと激しい嗜虐心が湧き上ってきた。確かめて事実なればあっさりと切上げもしよう。しかし若し虚偽であれば、あとは野となれ、思いきりこの小娘をいたづてみたい気持ちにかられたのである。

激しい心を努めて殺して、私は美喜をそっと軽く抱き起こすと両手を浴衣の袖から抜き出していった。どうするのだろうかという、美喜の不安げなまなざしを無視して、白いロープをとり出すと、彼女の左の手首に縄をまきつける。

美喜の不安は声になった。

「いや生理だからハダカは羞かしいんです。浴衣、脱がさないで……」

「アンネだって、タンポン挿入していたら、



ハダカとは関係ないよ。美喜ちゃんも先刻そういってただろう。アレだって縛るのに差支えないって……だから、一度縛ってみるんだよ。今更いやとはいわさないよ」

強引に言いきって、私は美喜の体を持ち上げるようにして直立させる。腰に纏わりついていた浴衣がハラリと落ちて、始めて私は美喜の初々しい裸身を、この眼で判っきりとみきわめていた。小柄なりに総べてにバランスがとれていて腰のくびれもホドよく、発育した女体はすっかり女のすべてを備えていた。清純な乙女の肌から、若々しい香気が立ちのぼり、ちっぽけな乳首は桃色に色づいて、

微かに震える胸のふくらみが、小池美喜のはじらいを如実に現わしているようであった。

襖のかもいに、両手を高々と挙げさせて縛り、腕を縛っておいた余った縄で胸と腹をまき、背で結んで、双丘の谷間から股くぐりして腹の縄に結び合わそうとした時、美喜は激しく腰を振って抵抗した。

「いや、いや、それだけはしないで……今日はいや……」

股縛りを極度に忌避する原因が生理にあるのか、羞恥にあるのか——。股へ回す手を止めて、私は近々と、顔をよせる。微かに漂う女臭——。そして、チラリと覗くタンポンの引き紐。まぎれもなく美喜の生理の事実を、私はこの眼でたしかめたのである。縄の残りをダラリと腰に垂らした俣、正面、背面からこの立縛りのポーズをカメラに納めた。美喜が何か呟いたようであった。

「えッ、どうしたの？」

「もういや……帰らせて——」

美喜は、泣きべそを搔いた表情になっていた。閉じた瞳がピクピクとケイレンして、必死に屈辱に堪えている様子であった。

盛り上りつつあったSの出鼻をくじかれた思いで、私の気持はスーッと白ける。もう美喜とは、或いはプレイすることもないかも知れない。

大人の世界の好奇を探求する気でも、所詮小娘の限界はこの程度であった。ふとさす悪魔めいた心が、このアンネの体に烙印を押せ押せと囁きかけていた。何かの折にとバッグの底に用意しておいた絵具のケースを開くと、ブラックのチューブから、ニユルニユルと、黒の排泄物を湯呑の中へ押し出す。生憎と絵筆の準備はなかった。お茶を少しそそいで、人さし指でニチャニチャとこね廻し湯呑片手に背へ回って、巨大な、猥ら絵をなすり描きする。美喜は何を感じたのか、悲しげにうなじを垂れて、私の為すが俣に、身じろぎもせず、じっと臉をかたく閉ざした俣であった。

乙女の汚れなき肌を冒瀆した私の指先は黒く汚れて染まり、醜い斑点を両手一杯に撒きちらしていた。

飽くことなく、美喜の前へ回ると、臍窩に

ぐるりと円を描き、矢印をなすりつけ、左右からも大きく矢印を指で描いて、右腿に「生理中」「左腿に「一卷の終り」と落書きして、双つのオッパイにメガネをかけ、このハレンチ極まる女体を、バカバカとカメラに入れていたのであった。この行為によって、小池美喜とは恐らく、一卷の終りになるであろうと自嘲をも含めての、太腿の落書であった。バッグの中の、猿轡用の豆絞りの日本手拭を絞ってきて、女体を拭うと、全身が、暗灰色にどす黒く汚れ、白い柔肌はみるかげもなく汚染して、猥らなボディペンティングの後始末の女体は、余りにもみじめであった。

縄を解くと美喜はさっと両手を前に合わせ、て藪い、チラリと我が身に視線をやると、さっと顔を伏せてバスに走り込んだ。ザブザブと激しい湯を使う音が流れてきて、それはかなり続いていた。フィルムにして一本も撮ってはいない。何も知らぬ乙女をMに飼育する手段としては余りにも女心を傷つけ、乱暴極まりない私の所業のようであった。優しく温かくいたわり乍ら、徐々に飼育していったところ、女は歓喜と悦虐に悶えて、Mに開眼するものなのに、私の今日のやり方は無茶苦茶に等しかった。何故こうした粗暴な行為にいき

なり出たのであろうか。それは何時もの私にも似げない振舞いであった。強いて弁解するならば、東映「責め地獄」の緊縛指導の熾烈さの直後であったのと、意馬心猿の欲望が、生理という女の業ではぐらかされたのが、私をこうした粗暴さにかり立てたのかも知れなかった。

可愛い童女めいた小池美喜との、最初のプレイは、こうした、あっけないもので幕切れになったのであった。

× × ×

髪が伸びれば、理髪店に足を運ばざるを得ない。小池美喜と顔を合わせるのが面映い気持で、それでもノコノコと出掛ける。あの日から三週間後の昼下りであった。

店内を見渡したところ、幸か不幸か彼女の姿は見当らない。淡い危惧に襲われて、さりげなくマスターに、彼女のことを訊ねると、「それがねセンサー、急にやめたいといましてね。手不足の折柄、懸命に引止めたのですが、遂にやめてゆきましたよ」

私はドキリとする。あの日ホテルを出てから一言も口をきかず、妙に沈んだ美喜の、悲しげな表情が臉に蘇ってくるのであった。そして別れ際に手渡した紙幣も、美喜は強く押

し返して受けとらなかった。家の近くで彼女を車から降ろした時、さよならもいわずに美喜はうつむき加減に、そそくさと小走りに消えていったのを思い出し、あの朗かな美喜がこの店をやめたのも、その原因は或いは私にあるのではなからうかと、何か済まない気持ちで一杯になった。髪刈る度に訪れる私と顔を合わすのが嫌さに、この居心地のいい理髪店をやめていった様に思えてならなかったのである。

「それは残念だったね、いい娘だったのに」
努めて平静に感情を押しこらして私は応える。私と美喜との、束の間のプレイのひとつきをマスター始め、若い徒弟達は知る筈もないと、たかをくくっての返事であった。美喜が喋らぬ限り分かる筈はなかったが或いは撮影所見学などの話をしたとなると、私が美喜と一緒にいたと、薄々は気付いているかも知れないのであるが……。

顔を剃ったのは、チンクシャの娘である。さりげなく、

「美喜ちゃん、ここをやめて、何処へ行ったの？」

ときくと、このチンクシャは、いとも気軽に声をひそめて、

「あのネ、マスターに内緒ですけど、美喜ちゃんとは国家試験に合格して、インターンも終ったので一人前やけど、ここの給料安いんですよ。もう前から止めたかったってたんよ。今、梅田のHビルの理髪店で働いてはるわ。忙しいけど給料すごくいいんやて。でも、これマスターに内緒よ」

「ああ内緒にしとくよ。よく教えてくれた」「美喜ちゃんから頼まれてたもん。今度センセー来はったら、そのことそつと伝えておいてくれて……」

「美喜ちゃんが？」

私の心はパツと明るくなった。私のせいではどうやらなさそうである。しかも私に伝言を頼んでゆくところを見ると、幾分心には掛けている証拠でもあった。客としてか、一個人辻村隆にか、それは分からない。私は兎も角髪が伸び次第、一度訪れることに心を決めた。粗暴さを謝まるものは謝まり、心あらば今一度という、厚顔な慾望が憶面もなく頭を抬げてきたのであるから、私という人間は、どこまでもよくよくハント好きらしい。

その癖、惰性の様に、それから二度マスターに頭を刈ってもらって、小池美喜と



は会う機会もなく、心の片隅では、いつも美喜のことを思い浮かべながらも、本職に追われ続けていた。

六月の下旬、東芝の招待観劇で、さして気も進まなかったが、やいやい契められ、忙中閑のつもりで、梅田コマ劇場の夜の部をみることになり、弁当おみやげつきという言葉に

喰気をはってノコノコ出掛けたが、時間が少し早い。その時突然、さながら神の啓示の如く小池美喜のことが頭にひらめいた。散髪に一寸早いとその気になって、Hビルの地下へ降りると、理髪店はすぐ分った。

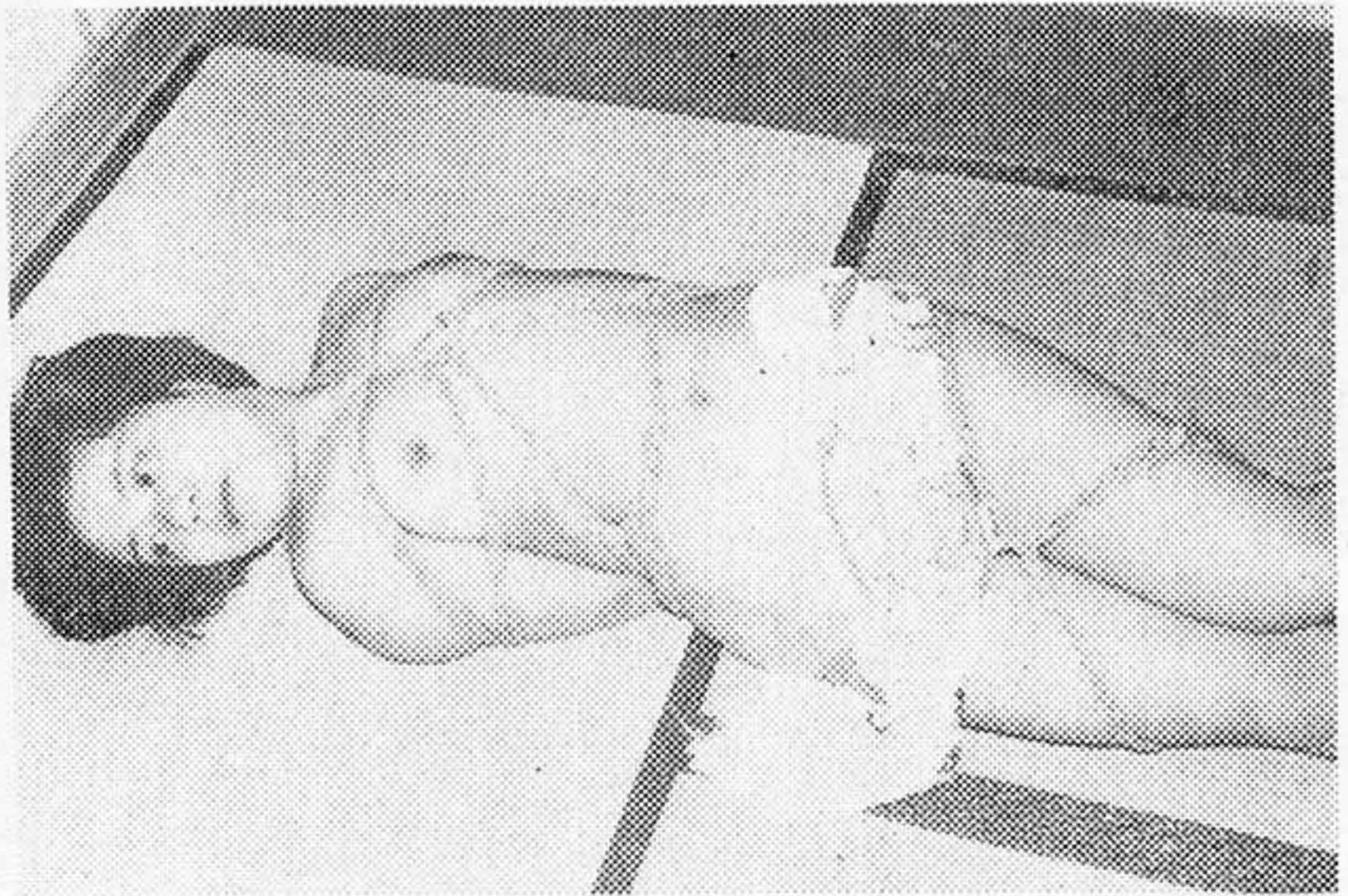
四月十四日に会って今日が六月二十六日、もうあれから二カ月以上会っていない。チンクシャの言葉を信じて店の扉を開く。

男性理髪師数人の中に混って女性二人、さかんに頭を刈っている最中。先客もあるのでソファに凭れて観察すると、背の低い断髪の娘はまぎれもなく小池美喜に違いなかった。まるで見違えるようにテキパキとした立居振舞いで仕事も早い。環境が代り、仕事に責任を持たされるとこうも違うものであろうか。彼女の一心に髪を整えるポーズは、潑刺としていた。男にしろ、女にしろ、働く時の姿は実に、いきいきとして美しいものである。

時計をみると午後四時——。コマ開演の五時半には未だ大分、間がある。少しぐらいおくれていったとて、どうということもない。

私は傍らのレジスター兼接客係の女性にきいた。

「あのネ、以前から知ってるんだけど、指名出来るの？」



「ええ、構いませんと、何ならお伝えしときましようか」

「じゃあ、辻村とって下さい」

接客係は小池美喜の傍らまで歩みよると、そのことを伝えていた。美喜がハッとしてこちらを振り向き、あッという顔付きになって、

遠くからペコリと頭を下げた。

順番を一人あとにずらせて、私は久し振りに美喜と、鏡に向かって顔を見合わせた。

「あの時はどうも——美喜ちゃんに謝まらなくてはならないネ」

それには応えず、ペロリと舌を出し、

「センサーもっと早く来ていただけたらと思ってましたのに。あの子に頼んでおいたのよ」

「ああ、すぐ聞きましたよ。だけど田舎者は梅田までは遠くてね」

「本当に嬉しいわ、来ていただいて。私ももう一人前よ。センサーの髪刈るの始めてただけど任しといて——」

美喜は、たしかにイソイソし、浮々としていた。

「梅田へ何か用事？」

「ああ、コマ劇場の招待でね」

「まあいいのね。今、江利チエミの『八百屋お七』よ。私も行きたいわ」

「連れてゆきたいけど、出られないだろう。今すぐ……」

「そう、多分ダメでしょうね」

私の髪型を心得ていて、美喜は意外なくらい馴れた手付きで髪を捌いていた。ここは髪刈りから洗髪、仕上げまで、担当者の一貫

作業である。

仕上げで、美喜は客の預り品だという、M G5の男性化粧品を次々使用してくれた。私も美喜も、意識してあの日の事には触れなかった。シークレットの話題は、近々と動き廻る左右の男性理髪師の耳に入っても困るからであった。

「近鉄すごくいい調子。首位にのし上って、センサー嬉しいでしょう」

私がプロ野球の、近鉄のファンであることまで、この娘はチャンと覚えている。一本立したこの娘を、私は改めて見直す気持であった。

「センサー、私今、豊中でアパート借りているの、このお店の女の人と二人で——。だから案外、自由きくのよ。コマ劇場がはねた頃劇場の出口で待っています。構いませんか？」

「私は、いいけど」

「それじゃ、きつとね」

短い会話でデートの約束は終わった。

念入りに仕上げてくれて、私は心嬉しい気持ちで、美喜に送られて理髪店を出る。思いがけぬデートが数時間後に私を待っていた。

花登匡作の『八百屋お七』は、私にとっては期待外れの出来であった。森川信、清川虹

子、小泉博、谷幹一など、いい脇役ベテランを揃えてい乍ら、も一つ盛り上らないのは、脚本の無理と現代解釈の不自然さに起因していた。いっそ、このメンバーで、やり馴れた「サザエさん」でものせた方が、反って笑えたかも知れない。我慢して最後まで見終わって劇場を出る。子供達より父の日に贈られたガスライターを落としたことに気付いてガツカリして出口をウロウロしていると、

「センサー」

と美喜がかけよってきた。コロコロした感じになって、二カ月ばかりのあいだに、一周り太ったようである。私がジロジロ美喜の体をみつめてみると、

「いやーねセンサー、肥えたといいたいんでしょう。近頃エサがいいせいで、それにのんきだから……。少し美容体操しなくちゃ」

つぶらな眸をくりくりさせて笑っている。

美喜は以前にもまして、明るく陽気な娘になっていた。

「何処へ行こう？」

「何処でもいいわ。センサーお車なの？」

「ああ、阪神ホテルの向かいのモータープールに預けてある。車だから私は余りのめないが、美喜にうんと御馳走してやろう。しかし

余りおそくなるとモータープールが閉まるので、少し早いめに切り上げないとね」

私はこの時程、無精を感謝したことはなかった。一週間許り前に、中村万里さんを撮って、その俵革袋をコルトのトランクに入れ放しにしておいたのである。フィルムも未だ三本ぐらいはある筈で、縄も数本入っていた。それは突発的な美喜とのデイトの結果、どう進展してゆくかも知れない、プレイへの淡い期待であった。

梅田の地下街を抜けて曾根崎へ上ると、お初天神筋のニッカのスナックバーへと足を運ぶ。暗い灯影に腰をおろすと、私は軽く小ビール一本、美喜はさして呑めないというのでバイオレットを注文する。紫の芳香がさわやかに私の嗅覚をくすぐる。のめないのではなく、のむ様な機会がないのだろう。仄暗いワインのムードの中で、美喜はこの口当りのいい、芳香の漂う、バイオレットを忽ち空にした。お代りはきついピンクレディ。これとて口当りはいいから、酔いの廻るのも知らずにのみ乾すだろう。

若い男と女の群れ集う中で、美喜の頭の回転は、徐々に朦朧と乱れ始めてきた。頹廢的なムードが、彼女のハートを妖しくも大胆に



していったのであろうか、美喜は前触れもなく、いきなり私の耳許でささやき掛けた。

「センサー、何だか縛られてみたくなった。

ちよっとだけ……。いけない？」

「いけなくはないさ。何だって急に又——」

「この前の時、私アレだったでしょう。何だかセンサーに悪くて。あの時何も言うことき

いていないんだもの。そのかわり縛るだけで私の体にいたずらしないって約束して」

「そりゃ約束はするさ、だけどいいのかい」

「ハイ、いいんです」

いやに判っきりした返事をして、美喜は甘い酒で紅潮した頬にフト猥らな笑みを泛かべた。既にピンクレディのグラスは空っぽである。酒の酔いを知らぬ娘は、次々とグラスをあけているが、その結果、肉体にどのような変化をもたらすかに気付いてはいなかった。

「未だのむ？」

「ウウン、もういいの。何だか頭がボーッとしちゃった」

「酔ったんだよ」

「お酒に酔うってこうなるの」

まるで、初めて呑んだような口吻であったが、或いは美喜にとって、甘い酒はその夜始めてであったかも知れなかった。

「じゃあ、気の変わらぬうちにしようか」

腰を上げた途端に、美喜は大きくよろめいた。慌てて手を貸してやっと表へ出ると、モータープールに向かって歩く。私自身はチビチビなめた小瓶一本のビールに気も心もシャシとしていたが美喜に歩調を合わせてやる。甘い酒の酔いが、美喜を大胆にしていた。

閉店間際のモータープールから車を出し、

十三じゅうそうに向かって走り始める。おそくなった

場合に、美喜を庄内のアパートまで送ることを考えての方角であった。

カーラジオが、今夜も近鉄が一昨日につづいて阪急に連勝し、一ゲーム差をつけたことを告げていた。判官びいきで、弱い近鉄を応援する気になってもう十年。今ではすっかりファンになっている私は、近鉄の為に乾杯でもしたい気持で、私の軀に頭をもたせかけて半醒半酔の美喜に、勝ったよといったが、彼女の返事は、かえってこなかった。

けばけばしい五彩のネオンに彩られた、アベックホテルの林立する一面にのり入れ、駐車場に車を置いて、美喜を抱きかかえるようにして、革靴をさげてエレベーターに乗り込む。腕を貸している美喜が、やっと体を立て直して、虚ろな眼を見開き、

「ここ、どこなの？」

と、のんびりとときく。

「十三のホテルで、唯今、上昇中だよ」

「酔ったのかしら私——。酔うってこうなるのね。すぐく眼が廻るのよ」

ピンクレディが、美喜の五感を痙攣させ始めたようであった。

× × ×

駄々子だだこをなだめるようにして、バスにつけてやる。あなた任せで美喜は全身を私に預けていた。酔っている時には長風呂はよくない。軽く洗ってやって、エンコラサと体を抱きかかえてバスを出る。

「どうしたのかしら私……。足がふらふらして頭ボーッとして、ああ苦しい」
バスタオルで体を拭う間も、美喜はふにゃふにゃと、骨なし人形のように、左右に揺れた。

「さあ、始めるよ」

「いやーん、そうせかささないで。センサーゆつくりしていいんでしょ」

美喜はいいやと体を振ると、床の間に続いた張り出しの棚板に全裸の尻腰をおろし「センサー、私のヌード撮ってエ。うまく撮ってねえ」

と、プリプリした体を広げた。

私は苦笑して、慌しくカメラをとり出し、ストロボを装填して、中村万里の撮り残しのフィルムに、美喜の裸像をパチパチ納めてゆく。酔いがそうさせるのか、美喜は大胆奔放で、思いきりよく広げた開股図は私の眼に眩しかった。眼が据わってトロンとしているの

が、むしろ美喜を猥らに美しく見せた。

「センサー、ヌード写真頂戴ね、きつとよ」

「ああいけど、どうするの」

「みせてやるのマキに——」

「マキって……？ 恋人？」

「ウン、好きな子なの、大好き」

「へえ、お安くないね。そんなハダカのフオトみせて大丈夫？」

「ああ大丈夫。センサー勘違いしないで、マキって女の子よ」

「なんだ、レズの仲間か。やれやれ」

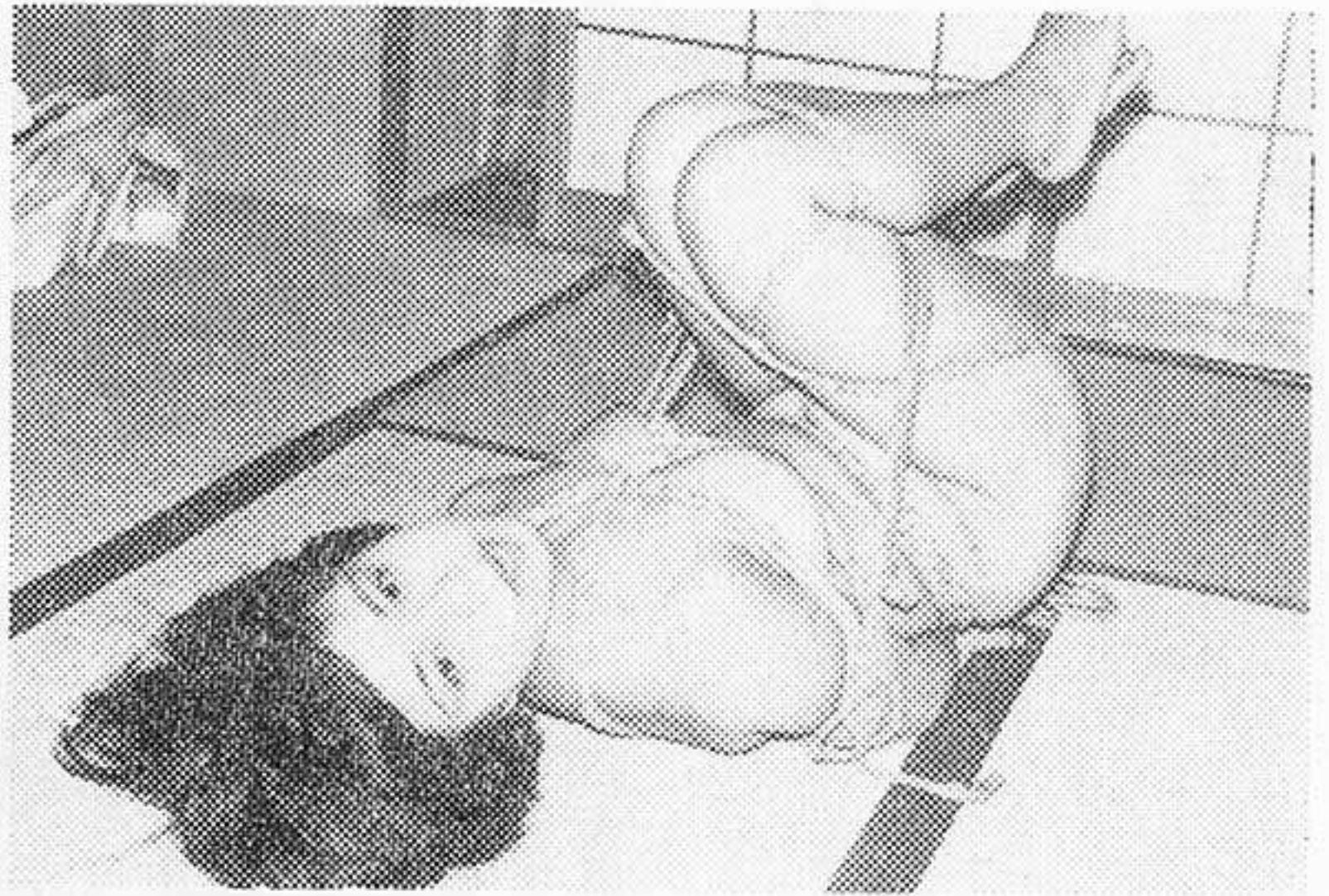
「今のお店にもう一人いたでしょ、あの子なのよ。一緒にアパートに住んでから、急速に仲良くなったの」

「よくあることだ、紹介してもらいたいね。」

そのマキって子もプレイ出来そうかね」

「脈があるわ。私と二人で、センサーの指導した『責め地獄』見にいったんですもの。その晩マキから求めてきたわ。虐めてほしいって判っきりだったのよ。私、マキのお尻をベルトでぶってやった。ヒイヒイって転げ廻ってたけど、凄くハッスルしてるのよ」

「二人で一緒に撮りたいね。美喜がマキを縛って責めるんだよ。美喜にそのケがあったのかな」



「私って変な子よ。センサーになら縛られたいの。そのくせ、マキなら妙に虐めてみたくなるの、縛ってみたいくなるの。そんなのってある？」

「SM両性で、こりゃ益々頼もしいね」

私は、未だみぬマキの姿を脳裡に描いて、心がくずれていった。こんなことなら、夕刻

理髪店を訪れた時、もっと判っきりと見定めておくのにと悔まれてならない。近頃の若い娘にこうしたレスビアンが多いのも現代の特徴であった。佐々木真弓も庄内で、しかも同様、レズに耽溺していた。女同志アパートの一室に起居を俱にすると、自然にこうした形態が生まれてくるのであろうか。

「さあ、早く。センサー早く縛ってエ——」

私の肩を押すようにして美喜は緊縛をせがむ。これは又何という変わり様であろうか。途惑いつつ私はそそくさとまだらの紐をとり出し、先ず手始めに素早く後手縛りにして胸縄をあっさり掛ける。レズが美喜を女にしたのか、二カ月前にはついぞ感じなかった妖しい色気が、美喜の全身から漂っていた。少し縄をかえて、乳房の下縄を、その谷間でねじって肩にかけ坐らせる。酔いにうるんだ眸が艶めかしく光り、美喜は縛られた俥、のどの渴きを訴えた。

コップに水を汲んでやり、縛った体を抱きかかえて唇にあてがうと、彼女はゴクゴクとのどをならせて、さも旨そうにのみほした。

「少しシャンとしてきたわ」

フーッと、酒の香りの漂う息を吐き乍ら美喜はその言葉の下からいきなりドサリとタタ

ミに転がって仰向けに寝そべってしまった。とりようによつては、どうにでもしてくれといわん許りの奔放な姿であった。

「ねえ、センサー」

「何だい」

「私にもミリヨクある？」

「ああ、あるとも、抱きしめたいよ」

「沢山の女の人を撮って、どの女の人にも、そんな旨いこといつてゐるでしょ」

酒がいわせる女の本心なのか、美喜はうるんだ瞳で私をじっとみつめた。いつしか豊かな太腿が離れて、挑発的に腰が揺れている。

「いやいや、こんな縛り方、ちっとも感じない。センサーもっと縛ってエ」

駄々をこねるように美喜はタタミの上を、軋々反側すると、ドタンドタンと両足でタタミを蹴る。

「よし、容赦しない。雁字搦目に縛ってやるぞ」

私もいきり立って、転がる美喜にのしかかり、両膝から腿へと揃えてしっかりと縛り、腹から股へも雑然と縄をかけ廻して、ボンと足蹴にしてやった。クルリと引っくり返って、亀の子のようにヨタヨタする美喜の、真白い臀部を、縄むちでピシリと一発くれてやる。

「ヒューッ、いたいッ」

「痛い——」

「ウン、大丈夫」

「よし、もう一つ」

「ああ、もっと……」

ヒイヒイ絶叫して、のたうち廻り乍ら、美喜に悦虐の歓喜が湧然とわき上ってきたのを私はこの眼で判つきりと確認していた。猛り狂ったように、ぐいと両脚を胸に屈曲させると、更に

一本の縄をかけてぐいぐい引き絞ってゆく。両脚がピンと空を蹴り、美喜は痛い痛いと呼びながら、やめてくれとは叫ばなかった。海老縛りの乱責めをやり終って、横転してむき出しになった臀部に、縄束に代る私のベルトが一発二発と小気味よい音を立てて飛び交う。ベルトを投げ捨て、矢庭に下り気味の両足首を掴むと、吊り下げるようにして高々と持ち上げる。美喜はヒイヒイ悲鳴を挙げ乍ら、辛うじて肩で体重を支えていた。

「どうだ——」

「ウン、痛い——もう解いて……」

乱暴に縛った縄が、皮肉をきつく締めつけ



て行ったのか、いつしか二の腕の縄は、深々と喰い込んでいた。

縄を解き乍ら、

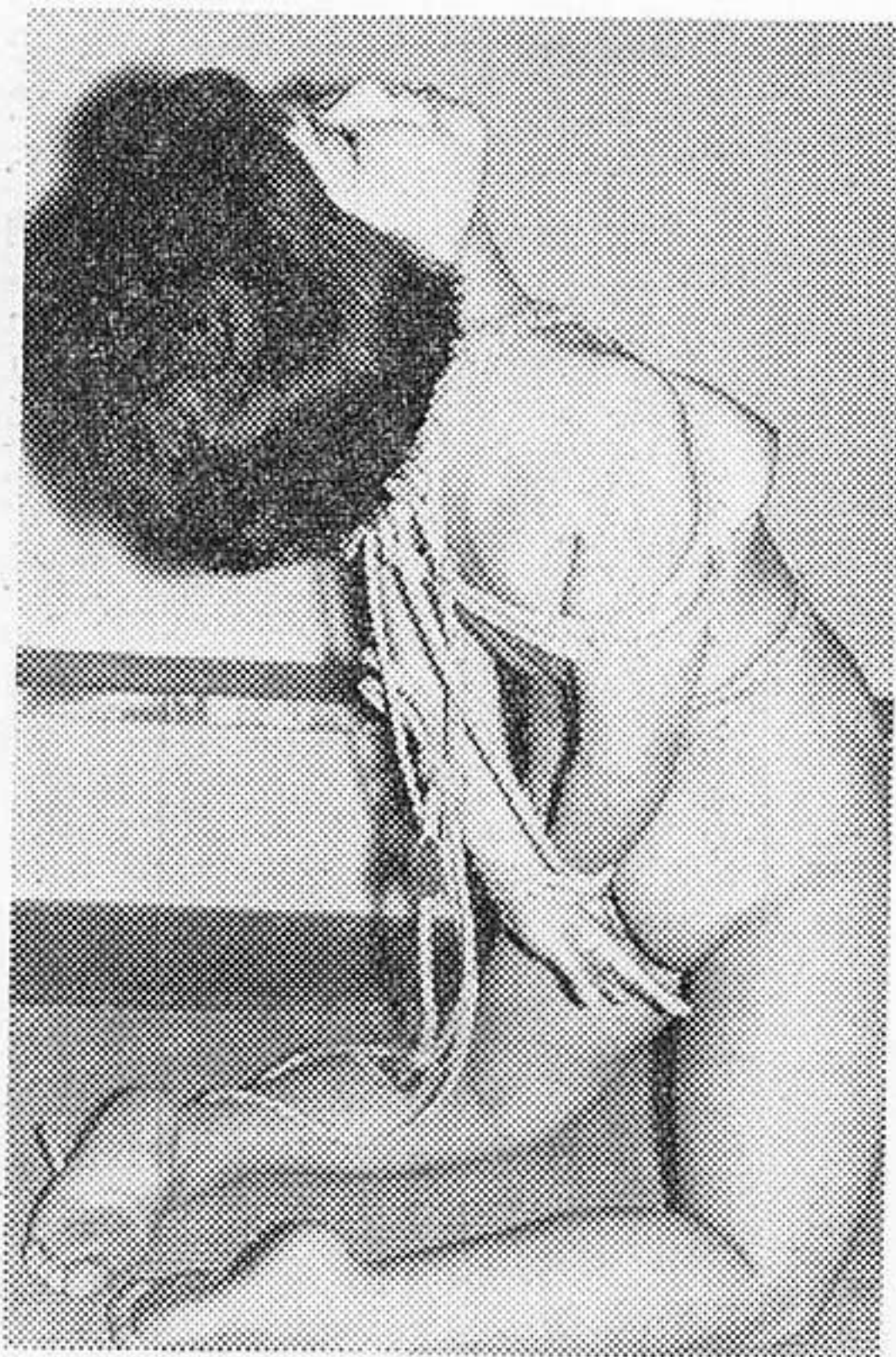
「変わったね、美喜ちゃんも」

感にたえぬ口調で言うと、

「センサー笑わないで。始めて縛られたあの時から、いつかこんな日のあることを希っていたの。あの日も覚悟してたんだけど、生理が私を狂わせたのだから。本望よ、私」

「私は又、急にあの店をやめたから、私から逃げ出したのかと思った」

「住込みだったでしょうあそこは。私もっと自由がほしかったの。そしてもっとお金も。」



今なら、夜はいつだって会えるのよ。私自由だもの。その自由さが、私という女をのびのびとさせ、マキが私の心を変え、私という人間を大胆にさせたのだわ。前のお店にいたならセンサーとロクロクお話も出来なかったじゃない。人の眼ばかり憚ってさ。あんなの嫌い。分かってくれはる？」

「ああ分かるね。しかし若い娘にとって、自由は又危険でもあるのだよ。こんなプレイをしてお説教めいた言葉もヘンだけど、余り自由過ぎて、行き過ぎないようにね。自由の履き違いが往々にして身をあやまるからね。むしろ自由過ぎるのが怖いんだよ」

「センサーの年代らしい言葉だわ。でもそのことはチャンと考えています。センサーの仰るプレイということ、今夜こうして出来るのも、今の自由あるからでしょ。だからセンサーから、そんな親みたい言葉きくのきらいよ」

自由の履き違いを、私自ら犯している今、彼女の言う通り、私が兎や角いう資格はなかったかも知れない。そのくせ、同年令の娘を三人も持つ私にとっては、プレイし乍らも、こうした老婆心めいた言葉が口について出ること自体に、私は独り自己嫌悪すら感じるものであった。あとは野となれ山となれと思ってやった京都でのひとときではなかったか。そんな勝手なプレイをしておき乍ら、今更彼女の自由に対して云々することは、成程美喜の言う通りおこがましいことに違いなかった。

私も美喜も、このひとときのSMのプレイの束の間を、すべてを忘れて耽溺しておればよいのであった。縄目の跡もいちじるしい

肌に、私の嗜虐の炎は更に燃え上り、やや酔いのさめた美喜の女体を犇々と首縄にして締め上げていった。二の腕に縄は喰い込み、乳房は縄目からはみ出してぽっかりと盛り上り文字通りの緊縛を終えて、美喜は上半身をのけぞらせる。

倒れまいと両膝をしっかりとふんばり、大きく股を開いて、美喜の上半体は徐々にのけぞってゆく。私は憑かれたように、側面から、背後から、そして開股してぽっかりと盛り上った下腹部を真正面からと、夢中でとりまくっていた。

飽くなき緊縛の執念は、更に胸の谷間に縄を継ぎ足して、くびれた胴で菱形に割り、臍下で結び目をつくって、縄がかくれる許りに深々と股縄をかけて、後手縛りの縄に強く結びつけた。

膝立てしてとったポーズに、私は緊縛の真髄を見出していた。美喜のうるんでいた眸はいつしか判っきりと瞳孔を見開いて、この被虐に耐えて、忍耐をつづけていた。いつまで続けても、今の美喜にとってはすべてが未知で、飽くことを知らなかった。

「ウウン、モーレッツね」

美喜は伏目勝ちに、おのれの雁字搦目の姿

をみて、愉しそうに呟いた。

「どうだ、痛いかな」

「いい気持。思いつき縛られてみたら、何だか心がカラッとしちゃった」

「抱いてやろうか。犇々と縛られてのセックスもいいものだぞ」

「それとこれとは別よ。でもセンサー私を抱きたかったら、抱いたっていいわ」

「よし、抱いてやる」

カメラを放り出すと私は彼女にかけよる。

ギクツとした表情もすぐ消えて、美喜は眼をつぶった。膝に抱き上げて唇を近づける。何の抵抗もなく、熱っぽい吐息が私の鼻孔をくすぐり、甘い粘液が私の口中に泌み渡っていた。

そっと革袋に片手を伸ばして、袋の中をまさぐり、バイブレーターを握りしめると、ビーンという響きが、女の突起した乳房の上で蠕動を始めていた。

絶えいるような歓喜の呻きが洩れ、甘い疼きが全身を走るのか、美喜はおこりのように体を震わせ、激しくのけぞった。大きく反りきった左右の腿をふるわせて、私の握りしめるバイブはうなり続けた。

×

×

×

午前一時半——流石に若さを誇る美喜も、

ぐったりしていた。男性を知らない肌も女性同志の欲びによって性に目覚めた女の肌は、携帯美容器の洗礼によって熱く濡れそぼっていた。

濡れた肌をヒタと私の胸に埋めて、美喜は再会を強くねがっている様であった。

「センサー、何もしなかったのね結局——」

私ばかり燃えさせておいて……」

「その約束だったのだろ」

「糖尿でダメなんでしょう、本当は」

「かも知れない」

「センサー、私バージンだといっても本当にする？」

「かも知れないね」

「男性は知らないの。でもマキとああったら、矢張り処女の喪失なのかしら」

「となると、オナニーも出来ない。知ってるんだろ」

「教えてもらったわ」

「案外カマトトかも知れないな、美喜は」

「私、結婚までは大切にとっておくつもり。

でも、若しセンサーが先程、その気になっていたら、分らなかったわ」

「信じるでしょう。美喜はいい子だ。可愛い

人だ。どれ、そろそろ、帰るとするかね。マキが待ってるだろう。アパートの近くまで送って行くよ」

「泊らないのね」

「ああ、滅多にね。朝が厄介だ」

「又、会って下さる？」

「会いたいよ、マキも一緒にね」

「紹介するけど、好きになっちゃ嫌よ。センサー、プレイしたらマキにも電気かける？」

「分からない——」

「いやーん、私一人よ」

犇としがみついてきて、唇を求めてくるのを、そっと軽く受けて、私は立上る。この唐突なハプニングを妻は知る筈もない。コマ劇場から何処へ脱線してるのやらと、氣を揉んでいるに違いないと思うと、私の心は、もうジェキルに還りつつあった。

縋りつく様な美喜をそっといなしで、ホテルを出る。

ネオンは消えて、エンジンの音を闇に響かせて車は一目散に庄内へと走る。

それでいいのだ、それで——。今頃寝もやらず待つ妻の不安の表情を臉に浮かべて、私の心は帰心矢の如く、ただひたすらに闇に向かつて、ひた走っていた。



『奇譚クラブ』の六月号を一通り読んだところで、感想を述べてみたいと思います。

いつもそうですが、『奇ク』を手にするとまずパラパラとページをめくってみて、写真を見ることにしています。今月はどのくらい写真が入っているだろうか、どんな素晴らしい写真があるだろうか、と期待に胸をふくらませながらページをくっていく時の感じは何とも言えません。そして期待にたがわず、ドキリとさせられるような好みの写真にぶつかった時などは、もうそれだけで実にシアワセな気分になることができます。しかし、写真の数も少なく、これといったものもない月は拍子抜けしたようで、本当に淋しい思いがします。

我が要望

責

め

矢

断

吹

想

弾

ぼくにとって、『奇ク』の魅力の半分は写真にあるといってもいいくらいです。ですから、いつも、もっともっと質・量ともに写真に重点をおいてもらいたい、と心の中で願っています。

六月号はわりあい写真の数も多く、ぼくの好みに合うものもあったので、たんのうすることができました。『SMカメラ・ハント』は言うに及ばず、『我がSMプレイの実態』（幸崎健治）にも筆者自身の撮影によると思われる写真がありますし、『鬼六談義、或る女優の話』のなかにもピンク女優の緊縛写真がかなり入っており△奇クサロン▽では、山口登『夫婦プレイの最初、私達の記録』と大磯S夫『プレイ・フォートの楽しみ』が、と

もに写真つきで夫婦プレイを報告しているといった具合に、盛り沢山とは言えませんが、かなり充実しています。

『SMカメラ・ハント』で辻村氏は、『しんどのだよ本当は——。確かに私は、もうかなり草臥れている』と本音をもらしています。が、その気持はぼくにも十分察せられます。しかし、たとえそれが本音であっても、どうか『SMカメラ・ハント』だけは末長くつづけてほしいものです。『SMカメラ・ハント』が『花と蛇』とともに『奇ク』の二本柱であることは誰も否定できないでしょう。どちらが欠けても『奇ク』の魅力は半減——いや、もっと減ってしまうに違いありません。最近“カメラ・ハント”がマンネリ化して

きたと言われているようですが、ぼくも一方でマンネリ化を感じつつも、しかし、ここ数号での「カメラ・ハント」はマンネリ化を脱する方向をはっきりと示していて、素晴らしい出来栄えだと思います。マンネリ化を脱する方向については、おいおい述べることにして、六月号の『カメラ・ハント』をみてみましょう。

今月は左近麻里子嬢が三たび登場です。左近嬢といえば、かつて『奇ク』誌上で、山本章氏の『この人と』によってはじめて紹介されて以来、その均斉のとれた、ひきしまった肢体と大胆なポーズによって、ぼくの心のなかにやきつけられている女です。その後、『オニ六大いにしぼる』で、再度その麗姿をみせてくれた時のことも忘れられません。辻村隆、団鬼六の両氏と一緒に熱海に遊んだ左近嬢が、一夜、辻村、団の両男性の前に裸をさらして、命ぜられるままにさまざまな羞恥のポーズをとり縄目を受けてもだえる姿がフオートによって見事に定着されていました。なかでも、後手高手小手に縛られた上にひしひしと縦縄をかけられて二人の前に立っているのをうしろから写したフオートはいまだに忘れられません。うしろ姿でしたけれども、

前からまわってきた縄が上にあがって手首に結ばれているその感じが、何とも言えない、いいものでした。その縦縄はひきしぼれるだけひきしぼったという感じで、こんなにきつく縦縄をかけられた左近嬢は一体、どんな気持ちでいるのだろうと思ったものです。左近嬢はこの恐ろしい緊縛に必死に耐えながら、その恥ずかしい姿を二人の男の前にさらしていたのです。二人の男、辻村氏と団氏は、そんな哀れな左近嬢を眺めながら、露骨な言葉で批評し合ったことでしょう。

そして、さんざん罵りものにしたあげく、最後にそのままの姿で部屋の中を歩くような命じた筈です。どんな格好で歩くかをみて大いに楽しもうというのが、二人の男の最初からの計画だったのですから。「それだけは許して」と目で哀願して立ちすくんでいる左近嬢の、上下を縄目にしめられてプリンととびだしている乳房の先端に、辻村氏の指が伸びてつまむと、「歩けと言ったら歩くんだ」と言いながら、力を入れて引っばるのです。「あっ、痛いッ！」と思わず叫んで、左近嬢は、一步、二歩と足を踏み出してしまいます。こうして哀れな左近嬢は、いやいや部屋をひとまわりさせられてしまうのです。

と、まあこんな風な空想をして、ぼくは楽しんだものです（辻村、団両氏をとんでもない悪役に仕立ててしまっただけで申し訳ありません）ぼくにとってのフオートの魅力は眼前の一枚のフオートの素晴らしさ、ということもさることながら、こうした夢想の自由な飛翔を助けてくれるところにあるのだ、ということがこれでおわかりいただけたかと思います。

こんな訳で、ぼくにとって忘れることのできない左近嬢の登場ですから、ぼくがどんなに期待に胸をはずませながらフオートを眺め文章を読んでいったか想像がつくでしょう。左近嬢はまったく期待通りに、以前と変らぬ素晴らしいポーズの数々を、みせてくれました。そのなかで、ぼくの特に気に入ったものと言え、一五ページのフオートと一九ページのフオートのふたつです。

この女体をどんな風に責めようか。空想は限りなくひろがっていきます。まず踏台を持つてきて、ぼくの顔が、左近嬢のちょうど真前にくるようにします。さて、それからおもむろに責めにとりかかるのです。この場合、どこを責めるかは、もう言うまでもないでしょう。左近嬢は恥ずかしさと恐ろしさで声も出ずに、ふるえながら、ただじっと責めを待

っただけです。ちょっとでもからだをうごかせば、落ちてしまうのですから、どんなに恥ずかしくても逃げることはできないのです。ぼくは、まず左近嬢の太腿を思う存分撫でてやりま。それから接吻をくりかえすのです。

これは、これから始まる責めの、いわば前奏なのです。そこでぼくは「麻里子、お前の乳房はとっても可愛いよ。ほら、こうしてあげようか」と言いながら、責めを開始するのですが、麻里子の口からは「ああ……いや……うう……ああ……」という声があえぐようにもれてくるのです。それを聞くと、ぼくの血はカアツと燃えあがってきて、「ほら、今度はこうしてやろうか、どうだ……これではどうだ……」と呟きながら、執拗に責めつけま。さまざま責めを加えられながら、なお、それを身動きひとつせず、じっと甘受するしかない哀れな麻里子。しかし、いまやサディストの本性をあらわにしたぼくは、責めの手をいっかな休めようとはしません。いつしかぼくの手には、一本の筆がにぎられています。「いいか、麻里子。女からだは男のためにあるんだ、ということをお忘れなよ。こうしていま、おれの目の前に開かれて

のではないのだ。それは男のものなのだ。男をよろこばせるためのものなのだ。そのことを忘れてはいけない。お前からだは素晴らしい。だが、もっともっと磨きをかけなければならぬ」ぼくは一本の筆を器用に動かして、麻里子の肌をそりそりとなでまわしてやります。何度もなでやるうちに「ああ……あ、……」麻里子の口からは消え入りそうなうめきがもれてきます。そこで、いよいよ、最後の責めに移ります。筆はいつの間にか小型のバイブレーターにかわっています。バイブは、かすかな音をたててうなっています。それをみた麻里子は「あっ、いやです、それだけはかんにんして……お願い……いや……」と必死に叫び立てるのですが、それにはおかまいなしに、ぼくはバイブをゆっくりと使って、麻里子のうめきが次第に細く高くなっていくのをききながら、やがて訪れる瞬間を待ちます。

こうして左近麻里子嬢に対する幻想の責めは、ひとまず終るのです。でも本当はもっともっとみだらで羞恥的な責めの数々が、ぼくの頭の中ではくりひろげられているのですがそれらはとうていここに書くことができないようなことばかりです。女体に対する数ある

責めのなかで、ぼくのもっとも求めているものは、肉体的苦痛を与えて、苦しみもだえさせることであるよりは、むしろ精神的苦しみ（羞恥心）をかきたてることによつて身も世もなくもだえさせることなのです。つまり、羞恥責めです。ですから、ぼくの責めが、女性のいちばん恥ずかしがる方向に向かうのはきわめて自然なことではないでしょうか。

話が横道へそれましたが、元へ戻して、六月号の「カメラ・ハント」のなかで、ぼくの好きなもう一枚のフォートへ移りましょう。一九ページのフォートがそれです。まったくこのフォートを眺めていると頭がくらくらしてくるほどです。これは逆に言えば、女性にとってこれ以上の被虐ポーズはないと言ってもいいようなものであるに違いありません。そこでの麻里子は、浴衣がわずかに両肩にかかっているだけの姿で部屋の片隅の木杵が直角になったところにあおむけに寝ています。といっても、ただ寝ているのではなく、左右にまっすぐのばした両手に、それぞれ左右の足がぴったりと揃えて縛りつけられていて、ということとは、ちょうどでんぐりがえしをする時のような格好で、首と両肩だけを畳につけて尻を高々と突き上げているわけで、その

まま動きがとれないように木杵に縛りつけられてしまったというわけなのです。両手両足をひろげてそれぞれ縛り合わされたらどんな格好になるか、しかもそれを頭を下にしてやったらどんな強烈なポーズができあがるか。これはまさに、その見本のようなものです。

これによく似たポーズは、三月号の「カメラ・ハント」にありました。その時は女子大生の志摩桜子とその可憐な姿を、賀山社長と辻村氏という二人のS紳士の前で全裸にむかれて、二人にかわるがわる、徹底的に責めぬかれて悶絶したのですが、その最後に賀山社長が命じてとらせたポーズがそれでした。

(一五三ページM)『否応なく開ききった美体に私の視線は焼きついていった』と辻村氏は書いています。

しかし、今度の麻里子のポーズは、からだの折り曲げ方がもっと深くなっていますし、これこそまさに正真正銘の「羞恥の極のポーズ」です。

さて、従来のいわゆるマンネリ化したと言われる「カメラ・ハント」ですと、ここではぐ次のポーズへと移っていつてしまうのですが、最近では次へ移る前にプレイが行なわれるようになってきました。いま、ちょっと引き

合いに出した志摩桜子の場合も、賀山社長は縛っただけでは満足せず、ローソク責めを加えていました。また、四月号の「カメラ・ハント」でも、五月号のそれでも必ずプレイが行なわれています。四月号の渚マリは鞭うちとパイプの洗礼にあい、五月号の飯田カオルは二度もパイプ責めに見舞われています。これは、辻村氏のハントに賀山社長が加わったことによる特例なのでしょう。ぼくの正直な気持としては、ここ数カ月が特例であったにしろ、これを特例に終らせないでほしいと思います。ぼくは最近の「カメラ・ハント」をはっきり支持します。ぼくがこの文章の最初で言った、「マンネリ化を脱する方向」というのは、まさにこういうことなのです。従来ぼくが不満に思っていたのは「カメラ・ハント」が緊縛にのみ終始していたことです。

もちろんその目的が緊縛フォートにあることはわかりますが、それだけということになると、あとは対象(女体)の変化とポーズのエスカレートしかありません。対象の変化とポーズのエスカートをぼくは歓迎するものですが、やはり、ぼくにとっては緊縛はそれ自体としては目的にならないのです。緊縛も責めにはちがいませんが、ぼくの場合は、

緊縛しておいて責めるという関係で緊縛を考えておりますので縛りあげただけでošimaiというのでは、とても物足りない気持です。

そこでぼくは「カメラ・ハント」の緊縛写真を眺めながら、その後につづく責めの場面を空想のなかでつくりあげることによって、自らを満足させるしかありませんでした。しかし、それはそれで、またぼくにとって解放された楽しい時間であることも、また確かではあります。ですから、不満といったところではそれはまあないもののねだりのようなものなのですが、それでもやはり、実際に、こう縛りあげてこんな風に責めたのだぜ、という記述があると、それはぼくの空想を刺激して、いっそう興趣を高めてくれることにまちがいはありません。これから、プレイの場面をどんどんとり入れてほしいと願わずにはいられません。

閑話休題。辻村氏が、麻里子を縛りあげた上で、望むべき最高の責めを容赦なく加えたことを、そしてその模様をあざやかに描き出してくれたことを、ぼくは心からうれしく思います。これこそぼくの望んでいたものです。

ローソク責め。この責めをぼくは好んでい

ます。

ローソク責めならば、よほどひどいことをしない限り女体を傷つける心配はありませんと、同時に、女体に与える刺激は強く激しいものがあり、一滴ごとに悲鳴をあげ、呻き、あえぎ、もだえる女体は、嗜虐の血をたぎらせてくれるのです。

女体に立てられた真紅のローソク。屈辱の人間燭台。めらめらとゆらめく炎。蠟涙が、一滴、二滴と流れはじめる。

「あッ、熱っう……あッ、あッ……」

今度は、ローソクを手にして双丘をめぐけてポタポタと蠟涙をたらすのです。はちきれんばかりの双丘を赤い蠟涙が染めてゆく。防ぐこともできず、よけることもできず、熱い蠟涙の攻撃にさらされている見事な双丘の白さ。対照的な蠟涙の赤。ローソクはだんだんと下へさがってきて肌に近づく。近づくにしたがって熱くなる蠟涙。あえぎ、もだえる豊かな女体。蠟涙に染めあげられた双丘の痛ましさ。しかし責めは終わらない。

今度は革バンドのムチ打ちだ。たちまちでさる数条のムチあと。そしてバイブによる責めで仕上げがほどこされる。

×

×

×

この場面のフォートは、かんじんかなめの部分がカットされているので、双丘の蠟涙の跡をみることができないのは誠に残念というほかありません。ここでまた希望を言わせてもらえば、こういう場合のフォートは、やはり全身を出してほしいのです。もちろん、全裸で正面から撮っているのですから、無理だと言われるのはもっともですが、それならば工合いの悪い部分は手拭で隠すなどしてはどうでしょう。現に『我がSMプレイの実態』では、四枚の写真のうちの最後の一枚は全裸開股椅子縛り正面向きですが、これは白布を利用して全身を写しています。このポーズはぼくの好みのポーズですが、いままで「カメラ・ハント」で何度もこのポーズがとられながら、いつもフォートは下部がカットされていて、そのたびに不満に思っていました。今度、ぼくの記憶でははじめて、このポーズの全体像が掲載されたわけですが、このことをぼくはよろこびたいと思います。今後こうした試みをも是非実現してほしいものです。

目の写真はちょっとはつきりしませんが、どうやら後手縛りでうつ伏せにした女体を、ローソク責めに行っているところのようです。背景の関係で男が手に持っているローソクがはつきりしないのが惜しいのですが、しかし、ローソクを持った男の手だけが写っていて、その手は黒手袋をはめているというのは、責めの効果を高めるのに役立っていると思います。次ぎの写真はクローズアップしたものでこれはよく撮れていると思います。双丘の形などなかなかいいですし、蠟涙の跡も点々とはつきり写っています。麻里子のローソク責めは、フォートではそれを見ることができませんでしたが、この写真によってそれを補うことができた気がします。この「我がSMプレイの実態」のような告白が、写真つきでどんどん寄せられることを期待しています。

×

×

×

ローソク責めが出たついでに、ぼくの好きなローソク責めの構想をひとつ紹介してみたいと思います。

まず女（仮りに京子としましょう）を一人登場させます。肉付きのいい、弾力的な肉体の持主である京子は、その形のいい、はずむような乳房が自慢なのです。小さくはなく、

かと言って大きすぎるということもない京子の乳房は、若さにはちきれんばかりです。薄桃色のみずみずしい乳首がツンと、とりすましたように突きでています。

「さあ、手をうしろにまわすんだ」

わざと乱暴な口調で言い、京子の両手を荒々しくつかんで背中にまわして、素速く後手に縛りあげ、さらに乳房の上下を谷間で交錯するようにして縛ると、豊満な双つのふくらみは、ロープにはさまれてプツクリと突き出てきます。残ったロープで乳房の下をぐるぐると縛り、そこに別のロープを結びつけて前面の中心をまっすぐ下へのぼします。京子は両脚をびったり押しつけています。

「こら、脚を開くんだ」

「いや、かんにんして……」

必死で閉じ合わすのを無理矢理にロープをくぐらせ、背中にまわしてきりきりと引きしぼってやります。

「ああッ……いや……いや……」

京子は叫び声をあげますが、

「どうだい、縛られた気分は」

と言いながら、ぼくは縛り具合を観察してやります。

「さあて、縛りはこれでよし。いよいよ責め

を始めようか」

「いや……ゆるして……」

「さあ、おとなしくあそこのソファアに行くんだよ」

と言いながら、京子の肩をドンと押すと、

京子はよろけるように隅のソファアの前まで歩いていきます。そこでぼくは、京子を抱きかかえてソファアの上にあおむけにねかせてしまします。

「ふふふ……いいからだだ。どこから責めてやろうか」

「おねがいです……かんにんして……」

ロープにはさまれてプツクリと突き出ている乳房に手をのぼします。

「お前が自慢しているだけあって、いいオッパイだ」

「あっ、いや……やめて……」

京子のあえぎは次第に官能的になって来ます。そこで、ぼくは用意しておいたローソクに火をつけて高々とかざしながら、

「今日は、この高慢な乳房を責めてやる」

と言ってローソクを京子の真上にもっていくのです。

「あッ……いや、いや……やめて……おねがいです……」

身をよじってのがれようとする京子を左手でおさえつけておいて、右手に持ったローソクを徐々に傾けていきます。最初の一滴、二滴は乳房の谷間へ落としてやります。

「あッ、あッ……あッ」

悲鳴がほとばしります。ぼくは悲鳴をおさえるため、いそいでさるぐつわをほどきます。そして今度は、乳暈にねらいを定めて、ローソクを傾斜させていきます。熱くたぎった蠟涙はねらいをたがわず目標に落ちます。休む間もなく蠟涙は落下して、乳暈はだんだんと白い斑点でおおわれてゆくのです。さるぐつわの下であえぎつづける京子のうめきが次第に高まってきます。ぼくは徐々にローソクを乳房に近づけていきます。それとともに蠟涙は熱さを増していきます。やがて、左の乳房の乳暈はすっかり白い斑点でおおいつくされてしまいます。白い蠟骸の中心にそこだけあざやかなピンクの乳首が覗いています。しかし、乳首だけは残しておいて、今度は右の乳暈にむかいます。左の乳房と対照的にピンクの尖端をみせていた右乳房も、ポタポタと落ちてくる蠟涙でたちまち乳暈がみえなくなってしまう。京子のあえぎは細くときぎれときぎれになってゆき、首をはげしく揺り動

かしています。

左右の乳暈が蠟骸で完全におおわれた乳房を眺めていると、ぼくの嗜虐の血はわき立ってきて、さらに強烈なものを求めるのです。ぼくはローソクを乳房にぐっと近づけると、そこだけとり残されていた乳首にポタポタと熱い蠟涙を落としてやります。ひととき鋭いうめきをもらして、京子のからだがピクリとけいれんします。左の乳首が蠟涙のかたまりでみえなくなってしまうと、こんどは右の乳首へ移り、こちらもちまちのうちに蠟涙でおおってしまったのです。京子のうめきはとぎれ、首もふらなくなつて、失神寸前の状態です。

× × ×
 こういうことが、もし実際に出来るとすれば、それはよほどのM性の進化した女性とのナレ合いのプレイか、もしくは自分の一生の社会生命を賭けるかしなければならぬでしょう。おいそれと実行の出来ることではないので、余計に夢が華麗になるのかも知れないと思います。

だからこそ、ぼくが、こんな構図を「カメラ・ハント」に期待し、写真の上にこんな夢とシアワセを見出そうとしているのが、おわ

かりいただけるでしょう。

ここでも、ぼくが京子のイメージとして思いうかべていたのは、四月号の「カメラ・ハント」に登場した渚マリです。ピンク女優というだけあってフェイスもいいですし、からだのプロポーション、肉付きなど文句なしです。からだ全体の丸味をもった線がいいですし、乳房もとてもきれいです。

ところで、渚マリのフォートで、ぼくのとでも気に入ったのがあります。それは八七、八八、八九ページのフォートです。辻村氏の記述を借りると、『今、眼の前に佇立するマリの裸身は、自由になぶって愛玩したい魅惑のニンフだった。乳房の盛り上りを強調して縛った後手は低く垂れてはいるが、腹部につないで垂直に下降したロープは、深々と喰い込み、双丘で両手に繋がっていた。この腕もろとも、乳房の上下を巻きしめたロープが、かなり強烈に腕をしめつけている』という姿です。

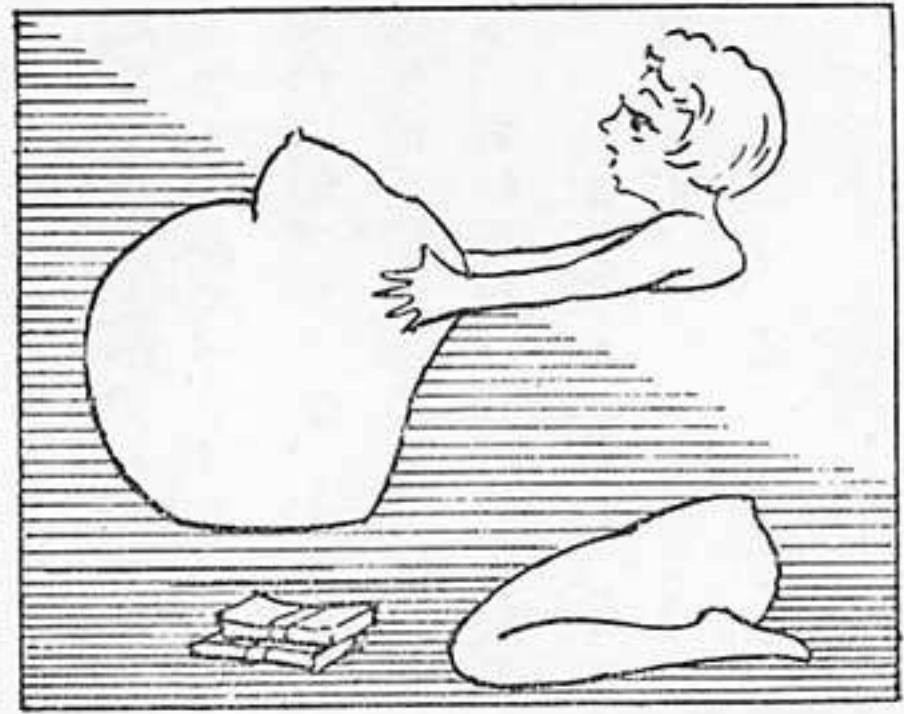
この八七ページのフォートは斜めうしろから撮ったもので、ロープのかかり具合がよくとらえられており、豊かな乳房がロープにくびれて突き出ている様子がよくわかります。つぎの八八ページのフォートは、斜め前から

のものです。真白いロープがひしひしと乳房を縛りあげ、へその上あたりからまっすぐ下へさがっています。例によって、下腹部はカットされていますが、ぼくはこれが一番気に入りました。それは、マリの表情が何とも言えずいいからです。首を横に向けて羞恥と苦悶にゆがんだ表情をみせているのですが、この表情を眺めていると、ぼくの空想は強く刺激されるのです。このような表情のあるフォートというのはなかなかチャンスがむつかしいと思いますが、これからは是非おねがいしたいと思います。

ついでに言います、五月号の「カメラ・ハント」で飯田カオルの表情だけを写したフォートが二枚ありましたが、あれはとても良かったと思います。あの表情をみていると、この時どんな風に責められていたのかを想像したりして楽しいものです。それから、カオルの乳房をパイプで責めているフォートがありました。あれも良かったですね。責めているシーンというのも、これから、どんどんとり入れて下さい。

どうも、ダラダラと書いてしまいました。妄言多謝。

——(おわり)——



妊 婦 礼 讃

契 約 妊 娠

高 野 原 美

妊婦の姿は、何時見ても魅力に充ち溢れている。

みずみずしい若妻の、妊娠のために肥って弾力感とふっくらした官能美を漂わせた身体
の中心が、異常なほどの膨大した丸味をみせている姿は、余りにも動物的であり、その反面、女性だけの持つ生殖—生命の創造という神秘的な生理が恐れにも似た威圧を感じさせるのである。

夏を目前にして青葉が萌えるとともに、薄着になった女性の大きく膨れた妊娠腹が、反り身になって重心を保たそうとする女体の真中で堂々と偉大さを誇り、その輪廓が明確に見えだした。これからは妊婦マニアの最も眼を楽しませる季節となる。街にも、野にも、

山にも堂々と偉大な腹を突きだした妊婦が溢れることだろう。

それにしても雑誌等のマンガで、フリーセックスの影響もあって、妊娠した娘たちのヌードが出現するようになり、私もマンガ自体の面白さよりも、妊婦ヌード（妊婦でなく妊娠した娘たちのヌード）の丸く膨れた美しい腹の線に楽しみを覚えている。

H誌のマンガに、「ゲバラにつづけ」と書いたヘルメット姿の大学生が持つプラカードの前に、腹の膨れた同じく学生が、その妊娠腹を指さしながら、チョットあんなア……ゲバラもいいけど、あたしのデバラをどうしてくれるのさア……」と抗議しているのがあつた。

た。

ゲバラとデバラを引っかけた時代諷刺の面白さは抜群であるが、現体制を認めぬ学生も女性の妊娠と云う現実的な生理現象にはとまどう姿が、矛盾を秘めており面白い。フリーセックスも革命も、一人の女の妊娠と云う生理現象の前には、いかに無力なものであることか。

それ以上に、ただ一色の墨で描かれた、簡単な一本の曲線であるが、マンガ家の手によって半球に膨れさせられた娘たちの腹の膨隆は、可愛い妖精を思わせ、カラッとした色気が微笑しく美しいものである。

一方、海の方このロンドンでは古本屋さんの手によって、この三月初め「PWIN」と云う妊婦雑誌が発刊されたという。

これはプレグナント・ウーマン・イン・ヌード（妊娠女性ヌード）の頭文字をとったものという。

記事によると誌名のとおり、腹の大きい女性のヌード写真ばかりで百二十頁を埋めつけた、妊婦マニアには咽喉から手の出るような素敵な雑誌であるという。

モデルは全員がシロウトで、あらゆる妊娠月の女性が登場していると云うことである。是非とも入手したいものであるが、方法も

ない。マニアのため貴社のご努力を願うところである。

外国では、想像以上に妊婦ヌードが、写真家の手によって芸術写真として撮られているようである。最近、私が店頭で見たのも二誌あった。一つは現代写真家の国際展のフォート集であり、もう一つはプレイボーイに掲載されていた。

われわれが妊婦ヌードを美しいと感じるのであるから、芸術家が美の対象として創作意欲を燃やすのは当然のことであろう。マニアとしては、写真の大家の手になるカラーによる妊婦ヌードが、カメラ雑誌の巻頭を飾る日を待ちわびるものである。

臨月腹のぱんぱんに張り切って、丸い窪みを失った臍がその全容を露わにした、暖かい血の通った丸い小山。暗がりの中で、その丸い臨月腹に強烈なピンクの光線をあててポツカリと浮き上らせて鋭く焦点をあてて……。

青、赤、黄、緑、多彩な光線を浴びて、あらゆる角度からムッチリと脂肪がのって、重たいばかりに固く緊張して膨れた、臨月腹の女性の演ずる魅惑のポーズを……。

この妊娠ヌードの先鞭をつけた奇ク誌にお願いしたい。今までに分譲された全妊婦ヌードフォートを、一冊のフォート集にして発刊されんことを。

増田みゆき夫人の双胎臨月腹と妊娠前のフォートを対比して見たいものである。全て可能な限り、妊娠腹と妊娠前の引き緊った腹を対比して掲載されるなら。その上に欲を云うならば、腹囲等のサイズを入れられるなら申し分ないだろう。一度、この種の企画を検討されんことを願いたい。もし採算に不安があるようなら、先に申し込みを取って限定出版にする方法もあることだし。

× ×

何時頃だったか忘れたが、女子大生が契約妊娠して依頼主より百万円を貰い、その金をもって渡米したと云う記事を読んだことがあった。

夫婦間に子供が産まれないと云うのは不幸なもので、最近は男性に不能の原因がある場合には、他人の精子による人工受精が行なわれているようである。しかし、女性に原因がある場合には仲々一筋縄では行かない。

金持ちの場合は、奥さんの公認で、若い女性を妾にして子供を産ませ、籍を入れると云うことも行なわれているようであるが、これは妾の一生を見なければならず、性関係の上で問題が生じる。

この点をドライに考えて、契約妊娠と云う方法が生まれたようである。性関係は契約した女性が妊娠する迄で、あとは妊娠中の生活

と母胎の栄養等の問題を考えて、十分な生活費を保証する。誕生と共に子供は奥さんの手に渡され、女性は契約金を受け取ってサヨナラとなる。

女性にとっては、その身体をはっての商売であり、危険性も伴い、肉体は消耗するだろう。しかし、試験管の中で人工受精をさせて誕生させることもできない現在では、こう云う商売も一方では当然考えられる。

最近のN誌に、一カ月三十万円で妊娠契約した実話が掲載されていた。これこそ徳川時代の「女の腹は借り物」と云う思想を実行に移したものと云えよう。

米国の宇宙技術は、月世界に人間の足跡を印すと云うところまで進んでいるが、人間創造ということは、どうしても女体の内臓を借りなければならぬ。そのため「私のお腹は今丁度空いているから借して上げるわ」と云う商売も成り立つ訳である。男はどうしても女に頭が上らない。

私が若い女性であつたら、契約妊娠でも請け負って、妊娠したら刻明に妊娠の記録を写真家に撮らせてやるのだが、と考えるが、残念である。そのような女性が出てこないものかな……。

フェチ小説この胸のときめき (4)

日本武士

(カットも)



七

夢などなかった。

ユリの鞭で暗闇の世界、すなわち夜になり又、ユリの鞭で明るい世界に引きもどされるという状態であった。

身体中、傷だらけだった。外部はもちろん内部までも——こちらは、全部はき出させら

れたためであり又、空腹のためでもあるが——痛んだ。

いつもであると、目を開けると、目の上に明るい光が輝いていて、そこにユリ

が立っているのだが、今は——朝なのか、昼なのか、又は、夜なのか、全く見当がつかなかったが——頭の上の方から、うすぐらい光が、私のまわりに小さな円を作っていたし、目の前には、ユリの姿はなかった。

私は、まわりを見ようとして首を回そうとしたが、ほとんど動かなかった。首のところ

に手をもっていこうとしたが、これも動かなかった。私には、床しか見えなかった。しかも、すぐ目の前にである。私は、現在のこの状態を知ろうと身を動かそうとしたが、できなかった。しかし身体を動かすたびに、カチヤカチャという金属音を聞くことができた。私は亀のように首を一生懸命動かし、もがき続けた。その結果、私が出たものは、私は金網の壁に頭と両手だけがつきでていることがわかったのと、身体を動かすたびに、空腹度が増していくということだった。私は胃袋と相談して、この場合は抵抗しないで静かにしていることに決めた。しかし金網の首枷とは。しばらくして、何の予告もなしに、突然明るくなった。まぶしくて私は、数十秒間、目を開けることができなかった。何度もまばた

きをして、私は、目をこの場の明るさにあわせようと試みた。しばらくして、おそろおそろ顔を上げた。その時、私は、二メートル程前方に、顔に一杯無精髭をたくわえ、髪をバサバサに乱した男の顔を発見した。彼は首と両手が金網から外に出ていた。私は、そこにあるのが鏡であるとは信じたくなかった。なぜなら、彼は金網の首枷をしていたのではなく、小さな檻に入っていたからだ。前面の首のでているところは金網で、横と上は鉄棒が平行に並んでいた。下は鉄板で、ひざだけがそこにふれていた。後ろは感触から察すると、前同様金網製で、足首から先が外へ出ているようだった。

突然、私の身体は右に回り、床の上を移動しはじめた。しばらくして、後の方から足音が聞こえてくるまで、私は、床が動いているものとはばかり思っていた。

頭がドアらしきものにぶちあたり、それを押し開けて次の部屋に進んでいった。その部屋に入ったとたん、私は、パブプロが実験につかった犬のような気分になった。胃を刺激する匂いを鼻が感じとり、ほおの奥の方から無意識のうちに、熱いものがわき出てきたからだ。もし私が犬だったらパブプロは大よろ

こびだろう。進んでいくにつれ、その匂いはいっそう激しく私の胃をなやました。

その部屋の中央にある、大きな長椅子のところにきたとき移動は止まった。そして足音が私の右側を通り、前にきた。つま先に毛のついた金色のバックレスのハイヒールをはいた足が目に入った。足の主は、私の前で一度たち止まってから長椅子に腰をおろした。

やはりそうだった。ユリだ。やさしく彼女の身体をつつんでいる真赤なひざまでの長さのネグリジェが優雅に椅子の上に広がった。この真赤なネグリジェは、確か前にも一度見たことがある……。



突然目がさめた。どうやら眠ったらしい。

私は、おそろおそろ目を開けた。いつもであると、きまってここでユリの鞭が私の身体を走ったからだ。しかし、今日は違っていた。

薬をのまされた次の日は、体内のすべてのものをきださせられ、その次の日は、ユリのおくことなき責めに、私の身体は傷だらけになってしまった。そして、今日、目を開けた時もそうだったが、昼の間も、何もされずに放置されていた——今は、腹ぐあいから察すると夜だろう——それに、部屋の様子が違っ

ていた。いつものように、まぶしいくらいに明るくはなく、うすぐらいといった方がピッタリするくらいの明るさだった。一番ちがっていたところは、私は、椅子にすわって、いや、椅子に縛られていたことだ。

それよりもまして驚いたことは、私は、きちんと、Yシャツを着ていた。下は……何んということだ。スカートをはいているのだ。私は、それがバ・ミ・ユ・ダ・パンツであればいいと祈りながら、何度も何度も見なおしたが、やはりスカートに間違いなかった。中央がつながっていた。とするとこれはYシャツではなく……やはりそうだった。袖や衿にフリルがついていた。ブラウスだ。暗くて色ははっきりわからなかったが、とにかくこれらは、私を異様な気分にするには、十分すぎるくらいの効果をもっていた。

今、実際に見たり考えたりしているのは、私自身なんだろうか。

今、下に見えるのは、本当に私の身体なのだろうか。

混乱した頭でこんなことを考えながら、もう一度下の方に目を移した。そのとたん、私は、再びショックにみまわれた。胸のところが突起していたからだ。ああ………なんと

いうことだ。私は、女装をさせられているのか。さてよ、すると、耳にへばりついているものは、髪が乱れたのではなく……カツラか?……ミニスカートでないだけが救いだ

突然、後方からドアの開く音がして、それから、部屋が明るくなった。私は、首を後方に精一杯回したが、誰の姿も見えなかった。

しかし、ユリに間違いないだろう。私は、この姿が——薄いブルーのブラウスに、黒いサテンのスカートをはいていた。それに加えてこのブラウスは、極く薄いナイロンでできていて、中のブルーのスリッパが、すけて見えた——恥かしかった。特に、この姿をユリに見られるなんて。彼女は、そこをねらったのかもしれないが。

私が恥ずかしさに身をふるわせていると、音もなく、私の両方のわきの下から、二本の手が出てきた。それが胸の突起物をつかんだのは、うなじに熱いものを感じたのと同時だった。二本の手は、それ自身一つの生きもののようにくねり、はげしく、やさしく、強く私の胸の異物を愛撫し出した。それは、カチカチになっていた私の身体を、溶岩のように熱くどろどろにし、又、私の身体の一部では

ない胸の異物を、まるで身体自体であるかのように、私の心にうえつけた。顔は熱くなつて声さえだせなかった。そしていつの間にか身も心も、二本の手と一つの口唇のかもしれない異様なリズムに合わせて、無意識のうちに動き出していることに気づいて、驚いた。

右の耳をもて遊び、頬をぬらした口唇は、声を出せずにあえいでいる私の口を、一気につつんだ。

彼女は、キスが上手だった。熱く焼けた舌は私の歯をいたぶり、奥でちぢまっている舌をたくみにリードして、彼女の神秘の世界へ招き入れた。

彼女は、キスが上手だった。私の舌は、彼女の口の中で存分にいたぶられた。

彼女は、キスが上手だった。彼女の舌が、私の口の中を優歩しているときに、私に、その舌をかみきる、という考えさえおこさなかった。

彼女の口唇が、左の耳の方に移動しはじめた時、私の上半身が、スリッパ姿になっていたのに気づいて驚いた。着ていたはずのブラウスは影も形もなくなっていた。

彼女は、キスがうまかった。私の頭は、もうろうとしてきた。彼女の手がスカートのジ

ッパーをはずしているのを見ても、何の抵抗も感じなかった。私はまさしく、彼女のなすがままであった。

私は、彼女が左の耳をやさしく噛みながら熱っぽく、これまで全く聞いたことのないハスキーな声で、何度も何度もささやいているのに気づいた。

「ああ……お姉さま、お姉さま。ユリは、こんなに愛しているのです。ああ……」

私は、ゾォーとなった。なんと言ったらいいのか……とにかく、口では言い現わせない恐怖に、おそわれた。しかしこの恐怖も、ユリのやさしい、奇術師のような手が私を立ち上がらせ、ゆっくりした仕草でスリッパを脱がせブラジャーとパンティ姿の私を抱きしめた時には、どこかへ消えてしまった。私の肌は、彼女の赤いネグリジェにまきつかれた時、一瞬、ヒヤリと感じたが、すぐ彼女の腕の中で、もだえだした。

「お姉さま、ユリを愛している、と言ってください。お姉さま……」

彼女は、あまえるように、湿った口調で私に——もちろん私は男で、彼女の姉でも何んでもないはずだが——さいそくしてきた。

私は、口を開くが、のどがカラカラに乾い

ていて声が出なかった。

ユリのシタールのように響く声は、いつのまにか、トランペットをフィーチャーした、ムード音楽に変わっていた。照明も前のように、うす明るい、幻想的な光を上から投げかけていた。その中で、ユリはたくみに私をあやつり、いつの間にか、私をベッドの上に横たえていた。私は起き上がろうとしたが、ユリの唇がおおいかがさってきた。その唇から私の口の中に、熱い液体が流れこんできた。ユリにつかまってから、私が口にした最初の食物？であった。

「お姉さまの好物のバーボンウィスキーよ」
それから又、かぐわしいトウモロコシからとった液体が流れ込んできた。私にとっては口の中を熱くし、頭を更にもうろうとさせる以外の何物でもなかったが。

私は、仰向きの姿勢でベッドの上に、横たわってはいたが、宙に浮いているという感じがしてならなかった。ユリはその上に馬のりのようにすわり、ゆっくり、甘ったるい口調で話した。

「お姉さま、ユリを愛していると言って」あまえるように、身体をうごかしながら、「ねえ、お姉さま」

「私は、私は瀬川です。英敏です」

声がスムーズに出た。われながらこれには驚いた。それに、まるで他の人が言っているようにさえ聞こえたからだ。

「まあ、また悪いくせがでたのね。あなたはおかだまき、岡田麻紀。私のいといい、いとお姉さまよ」

彼女は、いいきかせるようにしゃべった。

「おかだ？……」

「そうよ、岡田麻紀。ねえ、お姉さま、愛するユリまで忘れたんじゃないでしょうね。ユリは、悲しいわ」

「おかだまき、私が？」

「ええ、そうよ」

彼女はキスをした。長かった。私を岡田麻紀と信じさせるには、十分な長さだった。

「お姉さま、ユリを愛していると言ってください」

彼女は唇を離すと、あえぎながら言った。

私の声は、又、のどでひっかかり、音になって外へ出なかった。心の内では、いまや邪教とされた（瀬川英敏が自分である）と信じること（私は岡田麻紀である）と主張する心が、争い続けていた。自分自身、どっちなのかわからなくなってきた。

再び口の中に液体が入ってきた。この一杯は、私をあげっぴろげな気分にした。

「らくにして、お姉さま。らくにして」

彼女の声には、私の心を自由にあやつることができるよう、自信にあふれた響きもっていた。

「あなたは、岡田麻紀なのよ。わかった？」

私の心は一層激しく内乱を起こしていた。

「ち、ちがう。私は、私は、瀬川だ」

こう言っている自分でさえも、はたしてそうなのかどうか、あやしくなってきた。

「あなたは、岡田麻紀。私は、影山ユリよ」

「うそだ、うそだ」

「おちついて、お姉さま。大丈夫よ。ここには、私達二人しかいないんですから」

「……………」

「わかったでしょう、お姉さま」

「瀬川だ、瀬川だ。私だ。僕だ。俺だ。瀬川だ。男だ！」

彼女は、何かから、何かを口にふくみ、そして又、私の口におしつけてきた。どうしたことか、私はその時にかぎって、むせびだした。そのいきおいで、一旦流れ込んできた液体が、彼女の口へ逆もどりした。とたんに彼女は、あわててベッドからとびおり、

せきをしながらはきだし始めた。私はその間に起き上がろうとしたが、手足にはまるで感覚がなかった。酒の一口や二口で……までよ……どうして彼女ははきだしたのかな……パーボ……ンがきらいなのかな……突然、私自身が目ざめ、私に正常な思考作用をもたらしてきた。そうか、これは薬だな。これで催眠術をかけようとしたのか。私は立ち上がろうと懸命にもがいたがだめだった。そこで、なんとか自由のきくようになった口で、彼女めがけてうなり出した。

「どうして、私を女にしようとした。私に何をのませたんだ」

私は、とうとう、どなり出した。

彼女が、鞭で私をやすらかな眠りの世界に送り込む間の二十秒間だけだったが。

その時もこれを、この赤いネグリジェを着ていたんだ。



突然ユリは、私の目の前に底の深くなっている皿をなげだした。そして、その側に大きな牛乳びんとホットケーキの山をおいた。私は思わず生つばをのみこんだ。

「のみたいんでしょう」

と彼女は、はずんだ声でいった。

私の顔は無意識のうちに、ビンの方に近づこうと、もがいていた。

「やせがまんしないでいいのよ。四日も食べてないんだから」

しかし、こうまでされても、私の心にはプライドというものが、ほんの一片ばかり隅の方のこっていた。不思議なもので、私のようなマゾヒスト的な人間は、気ののらない相手に、自分の方からのぞんでいく時は、どんなことも平気なものだが、相手が積極的に、一人でどんどんやってくる時には、ついでにゆくことが、いやになったりする。まして憎んでいる相手のときなど。だから私はだまっていた。すると彼女は、靴のつまさきを私のあごの下にあて、自分の顔を見せるように、私のあごを上引きあげた。

それから、彼女は、わざとゆっくりした動作で、皿に牛乳をつぎはじめた。あの牛乳特有の胃のそこをかき乱すような感じの香りが私の鼻をくすぐった。

牛乳のしずくが、私の顔にかかった。とどかないとはわかっていても、舌の方が、無意識のうちに口の周りを一回りした。

「飲みたいんでしょう」

彼女は、ニヤニヤしながらくりかえした。

私は、あごを精一杯上げられているので、苦しくてしゃべることが出来なかった。

私が声を出せずに苦しんでいる間に、ユリは、「そう、飲みたくないの。それなら、私一人でたべるわ」と言うなり、たち上がり、私にしゃべるひまを与えないで、ミルクをもって、私の前から姿を消した。

しばらく、後の方から戸のきしむ音がしていた。それが止んでから数秒後、私の、ベトベトした唾液で一杯の口の中に、突然後ろから布切がおしこまれた。次に、あわてて空気を吸い込もうとした鼻の孔に、L字型になった金具を入れられ、その先についたロープを引っぱられた。再び私は、移動し始めた。

私が、入ってきた所は、どうやらキッチンらしかった。そこへ入ったとたん、私の胃は何か見えないものに、強くしめつけられた。胃は、たまりかねてグーグーいいだした。気が遠くなりそうにさえた。ユリは、私のこのような表情を見て満足そうにほほえみ、料理を作りにかかった。私は、猿轡をはめられたまま、部屋の中央にあるテーブルのそばに、放置されていた。

ジュージューとフライパンがかなでる音。トースターとパーコレーターの単調で、かぐ

わしいリズム。いそがしくその間を行きさするユリの口ずさむメロディーにあわせ、私は口の中に唾液をたくわえつづけた。

一年間とも思われる何分かがすぎ、彼女はテーブルについた。私はテーブルの上を見ることができなかったが、匂いから察すると、フルーツジュースに、ベーコンエッグに、トーストに、コーヒーに、それから、もう二、三種類あるだろう。彼女はそれらの全部を、たった一人でたいらげるつもりらしい。私の胃は一層激しくグーグーうなり出してきた。

彼女は、自分のすわっている椅子のそばに私の檻を固定した。そして、私の顔の下に、しみのついた二枚の布をしいた。それがパンティであることは一目瞭然であった。

彼女は、ゆっくりと時間をかけて——今、何々を食べている、とか、これから食べるのはこういう物だとか、色々私に説明しながら——ひととおり食べ終えた。それから、私の方を向き、私の鼻につけた、L字型の金具のロープを引き上げ、私の顔を上げさせた。

「食べたくないんでしょう？」

彼女は、いじわるそうに響く声を出した。

私は、何の抵抗もしめさず——抵抗を示す力は、とうになくなっていったんだが——顔を

懸命に、横に振った。

「食べたいの？」

彼女は、驚いてみせた。

私は、鼻のことにはかまわず——ユリが、私に首を振らせまいとして、強く引っ張り上げていたから——夢中で顔をたてに振った。三十回ぐらいも振っただろうか、ようやく猿轡がとかれた。ユリは、その布切れを下の二枚のパンティの上においた。それもやはりパンティだった。楽にはなったが、口の中がねばねばして気持ちがわるかった。

ユリはホットケーキの一切れを、三枚のパンティの上にほうり出した。私は、それが食物であるとわかった瞬間——ホットケーキがパンティの上に落ちる前に——食いつこうとして首をのばした。が、一瞬早くユリのハイヒールが、それをふみつけてしまった。そのため私の口は、ユリのハイヒールの飾毛を噛んでしまった。

「食べる時の挨拶はどうしたの？」

彼女は、するどく言った。

食べる時の挨拶。

「いただきます」

私は何の抵抗も示さず、すなおに言った。しかし、思ったより大きな声が出なかった。

「聞こえないわ」

案の定、ユリの鋭い声が降ってきた。

腹に力を入れて声を出そうにも、その腹が空腹なので、大声の出しようがなかった。そこで、のどに力を入れて、ザーザーした声で言った。

「いただきます」

彼女は、私の懸命な声を全く無視して、たばこでも踏み消すように、ホットケーキの上にのせた足を動かしだした。

「いただきます。いただきます。……」

自分でも、声がだんだんかすれていくのははっきりとわかった。

十回も繰り返した時、ユリはようやく足を上げた。しかし、そこにあったのはホットケーキではなく、みにくくつぶされた物でしかなかった。でも、私にとっては大切な食物にかわりなかった。彼女の気が変わらないうちにと、いそいでそれにかぶりついた。手をつかわずに食べるということが、こんなにむずかしいとは初めて知った。

彼女は、次の切れはしを、私の口の前五センチぐらいのところへ、さし出して言った。

「さあ、お食べ」

私は、口を大きくあけ、首を懸命にのばし

た。しかしユリの手は、私の齒がそれを噛む前に逃げ出した。そして、私の首がのびきって、とどかなくなる直前に、それが口の中に入れられた。……………

私は、五センチ四方ぐらいのホットケーキの切れはし四個にありつき、そして今、五個目に挑戦している。だが彼女は五個目は、すなおに口の中に入れてよこした。私は、それを取りあげられまいとして、急いでのみこんだ。一瞬、おかしいなと感じたが、その時はすでにおそかった。水気のまるでない口の中に、これまた水分のすくないホットケーキを急に入れるとどうなるかという実験を、ここで演じるはめになった。

五個目のやつは、いままでの四個に、個人的なうらみでもあるかのように、胃の方へ入っていかず、のどにひっかかり、空気をそこでせき止めて、私の胸を苦しめだした。私はでない唾液を懸命にのみこみ、のどにひっかったホットケーキを、何とか押し込もうともがいた。自分でも、顔が赤くなっていくのがわかった。彼女は、してやったりとばかりに顔中に微笑をうかべ、もう一個を押しつけてきた。

「さあ、遠慮せずに、もっともってお食べ。」

まだまだあるのよ」

目の前を、無数の星がいそがしく飛び交いはじめた。

「む……………み、みず、水……………」

私は、懸命に声をしぼり出した。その時、私は口のまわりに温かい液体を感じた。無意識のうちに舌をもっていったが、すぐにそれは、口唇がさけて血が出てきたのだと思われされた。

「まあ、もうたくさんなの」

彼女は、ゆっくりと言った。

「みず、みずを……………」

私は、首を上下左右に振りながら叫んだ。

「どっちなの。もっとたべたいの？ それとも……………」

「もうたくさんなの？」

彼女の声が、だんだん遠くなっていった。

「みず、みず……………」まるで傷のついたレコードのように、私は同じ言葉を繰り返した。

彼女は、まるでそれがこわれやすい貴重な物であるかのように、大げさなジェスチャーで牛乳ビンを手にとり、そして言った「もうたくさんでしょう？」と。その声には、そう答えた方が身のためよ、というような響きがあった。それを感じとった私は、苦しんではいるものの、一瞬のためらいをおこした。

「たくさんなんでしょう？」

彼女は、同じ調子で繰り返しながら、牛乳を静かにたらしはじめた。牛乳ビンからこぼれ落ちた液体は線となって、ちょうど、私の口の前五センチほどのところを無慈悲に通過して、下にしいてある三枚のパンティにすいこまれていった。

「どうなの？」

彼女の語調が、鋭くなった。

「も、もう、たくさんです。みず、みずを。」

いや、それでもいい、おねがいです」

彼女は、牛乳をこぼすのをやめ、「最初から、きちんと行ってごらんさい」と言い、私の首をつかんだ。

「もう、たくさんです。ですから、水をください……………おねがいます……………おねがいます」

「前にくらべて、だいぶ聞きわけがよくなっただね」

と言うなり、下の牛乳を吸いこんだ三枚のパンティを、私の口の中につめこんできた。味はどうあれ、私はそこから、少なくとも液体といえるものを得ることができた。

悪戦苦闘の末、やっとのことで口の中と、

のどにひっかかっていたホットケーキを、胃の方へ無事送りこんだものの、口の中にはベトベトしたパンティが三枚もつまっていた、食料の補給路を断っていた。私が食べたのはホットケーキ一枚分もなかったろうが、これからおこることに對しての不安と恐怖のために、胸は一杯になっていた。

彼女は、私が出済みになった三枚のパンティを吐き出すことを恐れてか、あるいは、もはやこれ以上の食物を与えないことを思いしらせるための、ナイロンストッキングで猿轡をはめた。

「さあ、これから食後の運動よ」

彼女はそう言うなり、また例のL字型の金具を私の鼻にはめてひっぱり出した。私は、再び床の上を移動し、前の部屋を通り、催眠術をかけられそうになった部屋、ユリの寝室につれてこられた。

朝っぱらなのに——たぶん朝なんだろう——

この部屋は暗かった。私は、部屋に入れられて、ドアのそばに置かれた。後ろでのカチツという音とともに部屋の中がうす明るくなった。この前の時は気付かなかったが、この部屋には窓らしきものが一つもなかった。このことは、ほんのわずかではあるが、私の不

安と恐怖で一杯の心のすみに、わすれかけていた安心感と、みだらな期待というものをうえつけた。

ユリが私の目の前に現われた。

赤いネグリジェは、どこかへ行き、かわりに、赤い、足のつけ根までの長さのエナメル製のブーツに、赤いビキニのパンティ一枚という姿で、私の前に仁王立ちしていた。

次に彼女は、私の前に片ひざ立ちになり、私の右手に手袋をはめにかかった。この手袋はかわっていた。指の出す所がなかった。まさに袋そのものであった。皮製で、私に握りこぶしをつくらせ、それをピッチリつつんでしまった。

私の右手は、握ったままで指を開くこともうごかすこともできなくなった。彼女は、それを手首のところでしたっきりと固定した。私の右手は、いまや自由のきかないただの肉片でしかなくなった。

彼女は次に、左手を攻撃してきた。私の中指と薬指のつけ根の間に、長いたばこのホルダーを入れ、その二本の指をまとめて、力まかせに握った。

「ウウッ」という私の悲鳴が、三枚のパンティの間からもれていった。二本の指の第二関節が、砕かれるような痛さにたえきれずギー

ギーいつている。彼女は、にぎっているだけではあきたらないらしく、二本の指を両掌でもみだした。

私は、目から涙がでてきているのに気がついていた。口からは、自分のものとも思えぬ奇声が、もれつづけている。

さらに彼女は、もう一本のホルダーを、今度は薬指と小指の間にも入れ、一緒に責め始めた。

ぞうきん 雑巾をしぼるように、ねじったり、一万人の人々と握手をかわすように、何度も何度も握りしめられた。

私の目は涙のせいもあって、かすれてしまい物が見えなくなってきた。悲鳴がとだえとだえになって指の感覚がなくなってきたときようやくこの責めから解放された。感覚のうすれた左手は、簡単に、手袋をはめられてしまった。

それがすむと彼女は、私の前に低い椅子をもってきて、それに腰をおろした。

しばらくして私は、右の耳のすぐ後に激痛を感じた。それは、だんだん熱くなり、私の頭をガンガンいわけだした。十秒後それが去り、かわりにユリの声が耳に入ってきた。

「これから言葉づかいを教えてあげるから、一度で覚えるのよ」

その声は、私のもうろうとした頭に、ガンガン響き渡った。

「わかったの！」

今度は、声と同時に、耳の裏側に又たばこの火がおしつけられた。

私は、首をたてにふりつづけたが、その間もしつこく、火は耳の裏側をこがしていた。それが最初の攻撃地点に移動してから、又ユリの声がした。

「はっきり、『はい、わかりました』と、お言い！」

火が、髪のはえている方へ移動し始めた。チリチリと髪のかげの音が耳に入ってきた。「ウムムッ、ムムア——」

私のだせる声は、これだけだった。

「もっとはっきり」

火が、再び耳のつけ根のところへもどってきて、そこを執拗にもやしだした。その火は頭蓋骨をとおりこして、直接脳をもやしているかのように、私の頭を苦しめた。だんだん腹の奥の方が、おも苦しくなってきた。そんな中で、私のやれることといえば、ただ、意味をなさない音をはくことだけだった。

ユリの火が、激しさを増せば増すほど、私の悲鳴も高くなった。

「さあ、はっきりお言い！」

彼女の火は、耳のまわりをまわりだした。

「ムアウア——」

私は、火からのがれようとして懸命に頭を左右上下に振るが、ユリの火は、接着剤でももっているかのように、しつこく耳のまわりにへばりついていった。

ユリが火をはなしても、私の悲鳴はやまなかった。ユリに両方の頬をなぐられるまで、気が狂ったように、首を振りながら悲鳴をあげつづけていた。

ユリは、私の口を横にさいていたナイロンストッキングをときながら、「ごめんなさいね。猿轡をしていたのね」と言ったが、すまなそうな気配は全くなかった。それどころかニヤニヤした顔つきで、目を異様にかがやかせていた。

「もう少しで、気が狂ってしまふところだったわね」

そう言いたしながら、私の口から三枚のパンティをつまみ出し、それを今度は、私の顔にかぶせた。それらは、目かくしの役わりどころか、鼻をまったくふさいでしまった。

「さあ、これではっきり言えるでしょう。言ってごらん」

私には、何んのことか、はっきりわからなかった。私がとまどっていると、突然私の口の中にユリの指が入ってきて舌をつかむなりそれを力まかせにひっぱりだした。

「グゲエ、ゲエエッ——」

自分でも信じられないような異様な声を、私は発した。

「何度、言ったらわかるの！」

彼女は、私の舌を持ったまま、もう一方の手で私の頬をなぐり、さげんだ。

「甘ったれるんじゃないよ！ これから、みっちりきたえてあげるから、覚悟を申し！」

八

私は、ひっくりかえされた。

私は、檻に入ったまま、その檻をひっくりかえされた。私の身体をささえているものは両手足首と、首の後側だけだった。ユリは、下の鉄板——今は上になっているが——を取りはずした。私は、その瞬間から、彼女に対して、全く無防備となった全身をさらけ出すはめになった。

彼女は、ほとんど目の見えなくなった私を

よそに、一人でガサゴソと、なにやら仕事にとりかかっていた。しばらくして後、何やら細い紐のようなものを、私の身体にまきつけた。特に、下腹部は念入りに。

私は、声もだせず、ただただ、彼女のなすがままになっていた。私の心の中には、恐怖しかなかった。不安などというものは、とうの昔に通りこしてしまっている。まして、みだらな期待など、しようとも思わなくなってしまうていた。

ユリは、私の折りたたまってある両方の足を、それぞれ左右にいっぱいひろげ、わきの鉄棒に固定した。

目の前が明るくなってくると同時に、胸の上に熱くドロドロしたものが落ちてきた。それは、私の胸にあたると、すぐそこに熱感を与えながら固まった。それは、私の左の胸を

Ⅱ御送金についてのお願いⅡ

現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願い致します。他に、小為替、定額小為替、振替等の方法もご利用下さい。封書の場合には切手代用でも結構ですがなるべく小額切手に願います。

しつこく攻撃してきた。

「ウァ——」自分でも驚くぐらい高い悲鳴が口からもれ出した。

それは、私に息つく暇を与えず、じつくりと、小さな山を築いていった。ろうそくがなくなる前に、私の悲鳴の方がかすれてきた。

それは、山を築き終ると、右の胸をちょっといたぶってから、下の方へ移動し始めた。そのとたん、私は、背中にも、ジワジワとした痛みを感じ取った。とっさに、こっちの方は、ろうそくの炎であぶられていることがわかった。これら二つの火と熱い溶液は、同じスピードで、下の方へ移動し続けた。

「ギャ、ウァ——」

腹の方へ移動してきたろうそくが止まったとき、私は、身をよじらせて絶叫した。

しかしそれはピクリとも動こうとせず、執拗に熱く溶けたろうを一点にたらし続けた。背中の方を移動してきたろうそくも、尻をちよつとなめただけで、腹部を責めているろうそくと合流すべく、上の方へあがってきた。私は、懸命に身体をよじって、二本のろうそくから逃げようと試みるが、だんだん火に近づいてしまう結果となる以外になかった。

それら二つの火は、私の悲鳴にあわせて、

徹底的にろうを落とす、固めつくした。

その間、私がやったことといえば、悲鳴をあげ檻をガチャガチャいわせることと、顔にかぶせられている湿ったパンティを、さらに涙でぬらすことだけだった。

声がかれ、身体が小さきぎみに慄え出したとき、ようやくろうそく責めから解放された。とはいふものの、皮ふがつっぱり、刺すような痛みが、身体中を走っていた。

突然、全身がピリピリッとしびれ出した。それは、約十五秒間続いた後、ユリの声と代って消えていった。

「これから言葉づかいを教えてあげるから、一度でおぼえるのよ。いいわね」

私が、何も答えられずだまっていると、又先程と同じ強さの電流が、身内を走った。

「いいかい。これからは、私の質問や命令には『はい、わかりました、女王様』と答えるのよ。間違えるごとに電圧が高くなっていくからね。さあ、いってごらん」

「は、はい、わかりました……ウウッ」

「低い！ もう一度」

「はい、わかりました……女王様」

「もう一度、はっきり言ってごらん！」

「はい、わかりました、女王様」

「よし。これから、お前は私の奴隷となるのよ。まず、その挨拶からしてごらん」

「ム……ウアッ、クッ」

「どうしたの、早くおやり」

「……ウア、ウア——」

「ええい、しょうがないわね。教えてあげるから一度でおぼえるのよ『奴隷である私めは女王様の御命令には、たとえそれがどんなものであっても、絶対に服従いたしますことをここに誓います。もし私めがこれを破った場合は、どんな責めをもすすんでおうけいたします』まず、ここまでを言っごらん」

「ど、奴隷の私は、グウッ、ウッ……ど、奴隷である私、私めは、女王様の御命令には、それが何んで……ウアアッ、ウウウ」

「最初から！」

「奴隷である、わ、私めは、女王様の御命令には、たとえそれが……それがどんな、ものであっても、ふ、ぜ、絶対に服従し、ハ、ウアーウッ、ハ、服従いたします。……もし、もし、わたし、私めが、これを破った時は、どんなことでもいたしま、アッ、アッ、アウウッ……ど、どんなこと、どんな責めもすすんで、おうけいたします」

「ふん、ものおぼえが悪いわね。次よ。『こ

の誓いは一生守りとおします。なぜなら、女王様に責められることは、この奴隷めにとってこのうえもない快楽だからです』さあ！」

「この誓いは、一生守り、守りとおします。なぜなら、女王様に責められることは、この奴隷めにとって……」

「低い！」

「ウアーウッ、ウッ、アアー」

「はつきり、お言い！」

「この……」

「女王様からよ」

「女王様に責められることは、この奴隷めにとっては、か、こ、このうえもない快楽だからです」

「事実、そうなんだろう？」

「……」

「返事はどうしたの、返事は！」

「は、はい。……ギャウアー」

「違う？」

「はい、はい、はいそうです。じ、女王様」

「そう。次に『この奴隷めは、こん後一切、人間様の御言葉は、話しません。話すのは、ただ、女王様に御返事申しあげることばだけです』と言っごらん」

「この奴隷めは、こん、こん後一切、人間の

ギャ、アアアウッ、に、人間様の、お、御言葉は、話しません。話すのは、ただ、ただ、女王様に……御返事申しあげる、こ、言葉だけです」

「今言ったことは、確かに守り通せるんだらうね、え？」

「……は、はい。……ギャ、アッ、ウアーウッ、はい、はい女王様」

「じゃ、これは何か言っごらん」

私の頬を、ブーツでこすりだした。

「ブ、ブーツです」

「それだけかい？」

「じ、女王様のブーツで……グッゲアアア」

「ふざけるんじゃないよ。何度言えばわかるの。『これは、女王様が奴隷の私めを、責めるときに御使いになるブーツ様です。私めはよろこんでブーツ様に、けられ、ふみつづられます。それが終わりましたなら、私めの舌でブーツ様をきれいにおふきいたします』と云うのよ。わかったの！」

「これ、これは」私の舌は、身体中を走りまわる電気のため、ろれつがまわらなくなってきた。「女王様が、奴隷の私めを、せむ、責めるときに御使いなる、ブーツ様です。私めは、ろ、ろ、よろこんで、ブ、ブーツ様にけ

られ、……グゲエ、ウウツ、け、けられ
ふむ、ふふ、みつけれられます。それが終わっ
たら私めの舌で、ブーツ様を、きり、きれ、
きれいに、おうきいたします」

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売！

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)
		郵便番号 558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、
或は地方のため、入手することが出来ないとか、
かいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い
目に、手に入れたたいという御寛望をよく承り
ます。そういった方々は、どうぞ是非月極御
予約下さるようお願い致します。毎月製本完
成と同時に、お手元までお届け致します。
○直接予約購読のお申込みを下さるのには
大阪市住吉局私書箱第四十一号出版株式会
社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお
払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指
定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装
代などは、総べて当社にて負担致します。但
し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分
二十円(切手可)の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為
替、定額小為替、切手代用、振替(大阪四二

「それなら、やってごらん」

私は、一瞬とまどった。

「なめるのよ！さっさとおやり」女王様は、
御自分の方から、私めの口の中に、ブーツ様

七八三番)のいずれかをご利用願います。
現金の場合、普通郵便封入は違法ですから、
必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印
刷完成と同時に、外部から見えないように厳
重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料
三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送
金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者
の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号
から何カ月分送れとお書き願います。第一回
分発送の際、明細を雑誌に添布致します。何
月号からとお書きにならないときは、重複や
欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が無くなりましたときは、封筒の上に
△本号にて前金切りの判を捺印致しますから
継続お払込み願います。継続のお払込みでも
何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方
は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局
留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受
取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構
です)と受取人のお名前とお知らせ下され
ば、当方では御指定の局留としてお送りいた
しますから、数日後その局で御受領願います
局での留置期間は十日間でその間にお受取り
にならないときは、発送人に返戻されます。

を押してこんでこられた。「しっかりおなめ」

「グウエツ、ゲゲエツ」

「どうしたの、もっともっと」

私の口の中を、存分にかきまわされた後に
ようやく私は、解放された。

「どう、味は。おいしかっただろう？」

私の口は、もう満足な発音のできる状態では
なかった。

「あ、ふア、あいじょうおうさま」

「はっきりおいしい！」

「ギャアウアアア、は、ふア、ふア、い、
じ……じ……じよふ・ろうさま」

「なんですって！もう一度言っごらん。

二度と口がきけないようにしてやるから。：

：そんなことを言ったからには、覚悟はでき
ているんでしょうね。死んでも、文句はいえ
ないはずよ」

カチ、カチ、カチッ、カチッ

「ギャアウアアア——」

カチ、カチッ

「グギャアアア——」

ずっと遠くの方から、急に黒い物が私に近
づき、私をつつんだ。そこは、やわらかく、
静かで、おだやかで、そして暗かった……。

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

エッセー

疑

問

アブノーマルな世界を知って、

その中で何かを

つかもうとしている者

ワタナベ

私は、今年二十二才になった、ある私立大学の第三年生である。私がこの「アブノーマルな世界」を知ったのは十七才（高校二年の後期）であった。

最初、十六才の時におもしろ半分哲学の本を読み始めてからであった。そして、人生とか恋愛に対して考えなやみ、疑問を持ち、そして「ノーマル」な人生等を否定するよ

うになった。それから、しばらくして友人から谷崎潤一郎の代表的な著書「痴人の愛」を借りて読んだ。それによって、私は「ノーマルな世界」から「アブノーマルな世界」へ第一歩の足をふみ入れる事になったといっていだらう。その後、「猫と庄造と二人のおんな」（谷崎著）によって同じ作家の著書の中に二つの世界があるのを私は見つけ出した。

それは、「痴人の愛」の主人公は「ノーマルな生活」から「アブノーマルな生活」へ入ろうとして、一人の女性に対して協力を求めた。しかし、この女性からの協力は得られなかった。だが、彼は「ノーマルな世界」へ戻ろうとしないで、あくまでも「アブノーマルな世界」へ入ろうとしているのである。次に「猫と庄造と二人のおんな」の主人公の場合には、現在自分が置かれているところの「ノーマルな世界」に不満を持ちながら、自分で「アブノーマルな世界」へ入ろうとしないでいるのである。そして私は、この時に「痴人の愛」の主人公を自分の理想像として英雄視し、「猫と庄造と二人のおんな」の主人公に対しては、私は軽蔑していたのである。今日考えてみると、この二人の主人公は「マゾヒスト」的要素を強く持っていたと思われる。

そして、私は再度「ノーマルな世界」の生活、人生または恋愛等のすべてのものを否定したのであった。この様に「ノーマルな」すべてを否定する事によって「アブノーマルな世界」に入れると思っていた。しかし、それは見事に失敗してしまい、私に残ったのは『無』であった。それは、私が接した人々に対して「アブノーマルな生活」を期待し

ぎた為であった。私の周囲の世界はあまりにも「ノーマル」すぎた為であった。そこで私は、すべてを失い孤独になってしまった。そして、私はここで元へもどってしまったのであった。

しかし私はあるテーマを設定し、それを考える事によって『無』からの脱出を試みた。そのテーマとは、「人生とは何か?」「恋とは、愛とは何か?」そして最後に「アブノーマルな世界とは如何なるものなのか?」であった。でも、この三つのテーマは、あまりにも大きすぎた。その為に十六才の時の私は、この三つのテーマから逃げたのであった。そして再び、一般世間(「ノーマルな世界」)の中へもどって行ってしまったのであった。それから、私は約二カ月の間は、ただなんとなくすごしてしまった。

しかし、この二カ月間の無気力な生活からついに脱出する時が来たのである。それは、私が十七才になった時であった。神田の本屋でマルキ・ド・サドの著書「悪徳の栄え」を立ち読みした時である。それまで私の頭の中から出て行ってしまっていた「アブノーマルな世界」がものすごい勢いで、再び私の中に飛込んで来たのである。そこで私は、すぐに

この本を買い求め、そして読みふけた。ここにおいて私は、今まで探し求めて来た「アブノーマルな世界」を見つけることが出来た思いであった。そして私は、この世界に入ることを決心したのである。

私は「悪徳の栄え」の主人公であるジュリエットに対して、あこがれの気持を持ったのである。このジュリエットは最初に自分の置かれた立場より、人として又は人間としては何が一番必要かを考え探し求めたのである。そして、その必要なものは欲望(物質的な欲望、性的な欲望)(appetite)である事を何人かの協力者及び指導者によって得ることが出来たのである。

私は、この欲望を持たないものは、人として、いや生物として、生きている価値の無いもの、すなわちその辺に落ちている石ころのようなものであると考えている。ここで、生物としたのは動物はもちろんの事で、植物でさえも自分が生きる(欲求)のためであったならば、他の草木を犠牲にしても大きくなるうとしているからである。この欲望とは、この世界に「生」を受けたるものすべての「本能」である。

しかし、現代の理想的社会においては「本能」を「理性」によって押える事が正しい事(美德)であるかのように言われている。

ここにおいてジュリエットは、人間として欲望と言うものが最も必要であるとの立場から、完全に美德を否定し、この世の中には善と言うものは存在しえないとしたのである。

この論理に対して、私は非常に共鳴したのであった。

ここでもって私は、かのニーチェの「神の否定」を思い出したのである。それは、ニーチェがキリスト教的神に対して、

(一) 自然性の欠無である。即ち、反自然そのものが道徳、法則、定言命題として人類の上にぶらさがっていることであり、

(二) 生命の根本である「本能」の輕蔑を教示していることであり、

(三) 魂と精神を偽造することによって肉体に侮辱を加えており、

(四) 生命の前提である性欲に対して不純な感情を与えるように教えており、

(五) 成長の必然性である利己に悪の原理を求めていることである。

と言ってニーチェは愕然としたのである。

おもしろい事には、以上の様な事がらを「悪

徳の栄え」の中において、ジュリエットが似かよった言葉でキリスト教を批判しているところがある。

もしも、マルキ・ド・サドがニーチェの後に生まれて、後の著書等を読んだとしたら、サドは以上の様な論理に対して共鳴していたと思われる。

ここでキリスト教に対するニーチェの批判を、私の考えを入れながらのべてみる。

まず、キリスト教的精神においては『欲情を殺さねばならない』と言う事が聖書の基礎となっているのである。故に、キリスト教による既成道徳における価値評価は、より高き善とは、より強い禁欲を意味し、人間はそこで訓練され遂には飼育された肉食の文明動物となった。ここでは道徳は人間の存在と、もはや無関係な距離の彼方に設定されている。故に、道徳は「飛び失せし徳」「永遠の壁」「神・天国等全ての形而上界」となり、そこでは人間の存在が破壊されるのである。

それでニーチェは、これをニヒリズムの公式として否定したのである。何故ならかかる既成道徳（キリスト教的精神）に対する盲目的服従こそ、「生命に対する『退歩』と『罪過』」であり、すべて不純という概念による

生活の純化（性的生活の軽蔑の如き）こそ、生命に対する「犯罪の罪悪」であったからである。

〔反自然性——欲望・否定——善
自然性——欲望・肯定——善〕

故に、ニーチェは「私は、あえて既成道徳の悪徳者となることによって、全種類の反自然及び理想主義と対決せんとする」と言っている。以上の様な事から、ニーチェはキリスト教から脱退することにより「神の否定」に発展していったと私は考える。

私が奇譚クラブを最初に手にしたのは、だいたい三年ぐらい前のことであった。それまでは「悪徳の栄え」の後に、同じくサドの著書「危険な戯れ」と「O嬢の物語」を読んできた。

ここで『危険な戯れ』（別名「愛の罪」）についてのべてみる。この本は、私がある古書店にて購入したもので、山本貢・訳にて、一九五一年十二月十五日に水谷書店にて発行されている。

内容について少々ふれてみると、場面は十八世紀の中ごろのイギリスはロンドンのことである。グランウェルという貴族が、ヘンリ

エッタという美少女に「一目惚れ」をしてしまふ。そしていかなる妨害も乗り越えて、ヘンリエッタを自分の妻にしようとして、いろいろな手段を用いるのである。そして、恋敵である彼女の恋人を殺害した事より、自分も彼女に殺されてしまふのであった。

この本は、「悪徳の栄え」が哲学的な内容が多分にあるのに対して、エロ的な場面が多く描かれている。

読まれた方も多いと思うが、グランウェルはヘンリエッタを、支配し征服しようとしているのである。自分の性的欲望を満足させる為の道具（女の肉体）として、支配しようとし、妻という名のもとに征服しようとしているのである。

ここにおいてグランウェル卿は「女は征服してこそ興味がある。つぎつぎに征服して行って、以前に征服された女たちの恨みが残るところに味がある」と主張している。これはマルキ・ド・サドの本心を代弁していると思われる。グランウェル（又は、サド）は「女とは、自分（あるいは、男）の性的欲望を満足させる為の道具である」と思っているのではないかと、考えられるような場面がかなりある。これは、封建的社會の「男尊女卑」に

おける通説である。

そして私は「危険な戯れ」の後に「O嬢の物語」を読み「サジズム」と「マゾヒズム」についてある程度、認識することができた。しかし、まだ疑問が多すぎた。その時はまだ私は「サジズム」とか「マゾヒズム」というものは架空のものと考えていた。それは、小説等の中だけのものではなく、現実のものではないと思っていた。そして、私はこの架空の、超現実的なものを探しているのではないかと、なやみ始めた。その時に神田の古本屋で奇譚クラブを手にした。そして「サジズム」と「マゾヒズム」は架空のものではなく現実のものであることを知ることが出来た。

ここで、「サジズム」と「マゾヒズム」に対して私の考えをのべてみようと思うが、まず事典をひらいてみよう。

★サジズム (Sadism) 性行為に関する性欲倒錯の一つ。加虐性愛ともいう。相手に苦痛、虐待を与えることによって、性的快感を覚えるもの。フランスの作家サドの名に由来し、オーストリアのR・V・クラフト・エービング(一八四〇～一九〇二)によって、マゾヒズムに対するものとして名づ

けられた。多くは身体的苦痛を与える(刺したり、むちで打ったり、かんだり、くびをしめたり)が、ときには精神的苦痛(持続的にいじめたり、はずかしめたり)を与えるものがある。誤って傷害、殺人などの犯罪をひきおこすこともある。精神分析学では、この語を広義に解して他者にたいして示す破壊的な本能、いいかえれば攻撃的性格を意味する。すなわち、残酷に他人を傷つけ、わずかの過誤をしつこく攻撃追究し、自己の利益と名誉のために他人を犠牲にして顧みないなどの傾向をいう。

★マゾヒズム (masochism) 性行為に関する性欲異常の一つ。被虐性愛ともいう。異性から打たれたり、かまれたり、首を絞められたりなどの苦痛、虐待を受けることによって性的快感を覚えるもの。名称はオーストリアの作家L・V・ザッヘル・マゾッホ(一八三六～九五)に由来する。サジズムとともに疼痛嗜愛とよばれるが、サジズムが能動的であるのに対し、マゾヒズムは受動的である。ときには同一人でサジズムとマゾヒズムの両傾向をもつ例もある。

(平凡社・国民百科事典より)
「サジズム」これは動物(生物)として本来

の欲望(本能)であると思う。それは、生物界でよく言われる弱肉強食のことである、と考える。自分が生きてゆく上に必要な物を得るには、他の者を攻撃し抹殺しても、それを獲得し、邪魔をする者には戦闘的な態度で立ち向かうということである。

これを、別の角度で考えてみると、他の者よりも上に立ちたい、他の者達を支配し、征服したいという欲望であると考えられる。これをニーチェは人間の欲望の中の「支配欲」と言っている。結局、エゴイストの殆どは、サジスト的要素を多分に持っていると思われる。

性的の場合でも、自分の欲求を満たすためには相手の意志を無視しても性的快感を得ようとするのである。そして、相手の自由をうばい(縛ったり、監禁したり)虐待するのである。又、虐待することによって相手の地位とか人権等を無視し、破壊して自分よりも見下げ支配し、征服することによって優越感を満足させようとするわけである。ところが、「奇譚クラブ」を読んで気付いたことは、読者諸氏の多くの方々は、この行為を「Play」すなわち「遊戯」としているである。それはこの行為を「ペッティング」の一部としてい

る為と思われる。ここで、私が疑問に思うのは、「Play」である場合は虐待するのではなく苦痛を与えるだけであって、そして相手の人権というものを無視せず認めている事である。いかに「Play」であっても、この一時の間は相手の権利を無視し、自分の支配下に置くべきではないかと思われる。そのようにすることにより、奴隷にしていまい、そして虐待すると言えるだろう。でも、夫婦あるいは恋人間での行為の場合には「Play」でもよいのではないだろうか？

それから、読者の方々の中には「苦痛でゆがんでいる女性の顔は美しい」と言うような発言をしていた方がおられたが、私は「苦痛でゆがんだ顔」は、美しいと言うよりも醜いものと思う。だが、相手の女性が「マゾヒスト」であるならば苦痛を快感として受けとるのであるから、その時の、その女性の顔は美しいと言えるだろう。

先日、ある友人と「女性が美しく見える時は、どのような時なのか」について話し合いになった。その時、我々は結論として、「女性が美しいと見える時は、欲求が満たされた時すなわち満足感を覚えた時である。生物として本来の欲望、つまり性的欲望を満足させた

時、性的快感を覚えた時にもである」とまとめた。（この結論は間違っていないものと思える）

ここで「花と蛇」について考えてみると、静子の前の女中であった千代と葉桜団の団長である銀子の二人の女性は、完全なる「サジスト」である。特に、それを明確に表わしているのは、静子を「なぶる」時である。静子が遠山夫人であった時の事を思い出させ、そして現在静子が置かれている立場を認識させる場合である。過去を思い出させることによって挫折感を感じさせるのである。そして監禁し、屈辱的な行為を強制することによって敗北を認めさせ、自分達の優越感を満足させるのである。又、静子はずかしい姿のまま長い間放置しておいて焦らすことにより、精神的苦痛（持続的にいじめたり、はずかしめたり）を与えるのである。ここに「サジスト」として、千代と銀子の二人を上げたが、他の人物が「サジスト」ではないと言うわけではない。ただ、この二人（特に女性である事から）を例にしただけである。この「花と蛇」の中に出て来る「責め」のうち「流腸責め」についてのべてみる。

ここに出てくるいろいろな「責め方」及び

「いじめ方」の中で私がいちばん興味を持ったのは「流腸責め」である。この「流腸責め」について初めて興味を持ったのは、もちろん「奇譚クラブ」を読んでからのことであるがそれと同時にストリップ・ショウを見た時のことである。

その時のストリップは「全スト」ではあったが、何故か前は見せるのには後は全てのストリップがかくすのである。この様なことはその後に見に行ったストリップでも、そうであった。その為に私は、余計にかくされた方に興味を持つ様になったのである。人が秘密にしたり、かくしたりするものに興味を持つ様に……。

「流腸」に関する文を読んでいて感じたことであるが、「縛り」とか「むちで打つ」ということは、体の外部に対して苦痛を与えることであるが「流腸責め」というのは、体の内部から苦痛を与えるのである。それは「流腸液」というものによって、間接的に相手の体の中に入りこんで「いじめる」ということである。この時の苦痛とは「縛り」とか「むちで打つ」等の苦痛とは異なるものである。それは排泄という生理現象を我慢させることによって、生理的苦痛を与えるのである。それ

と同時に、相手に「はずかしめ」をも与えるのである。生理的苦痛とは「刺したり」「むちで打ったり」する様な直接的ではないが、間接的による身体的苦痛であると思われる。すると、この「浣腸責め」では一度に二種類の苦痛（身体的苦痛、精神的苦痛）を与えることが出来ることになる。そして、最後に排泄させることにより、再度「はずかしめ」を与えるのであろう。

“マゾヒズム”に対して、私の考えをのべてみる。だが、私としてはこの言葉の語意について理解にくい点が多すぎる。ここで、私はこの“マゾヒズム”を理解しようとするにあたって、最も重要な意味を持つと思われるところを、読者諸氏に対して質問したいと思うのである。それは「異性から苦痛、虐待を受けることによって性的快感を覚えるとはどのような事なのか？」である。この事に対しての返答を、いただけたら有難いのだが……。

また「苦痛を受ける」といっても身体的苦痛、精神的苦痛なのか、それとも両方とも同時であるかも疑問である。身体的苦痛（特にむちで打つ）を受ける事によって快感を覚え

るという事は「悪徳の栄え」の中にも書かれているので、なんとなくわかる様な気もするが完全なものではない。そこで、私なりの考えをのべてみると、皮膚に刺激（むちで打たれたり、鍼を打たれたり）を受けると生体反応が活発になり、それが続くと興奮状態になり、最後に快楽の世界より快感を覚え、そして失神してしまうのではないかと思われる。

また、これは“サジズム”の方の論理にもいえる事ではあるが、他人あるいは自分の血を見ると興奮するという事も考えられる。たとえば、プロ・レスリング等の流血の場面を見ているとエキサイトしてくる様な事である。

“サジズム”においては、支配および征服をする事の快楽であろうと思うが、“マゾヒズム”では“奴隷状態”（束縛され、奉仕する）における快楽ではないか考える。すなわち奉仕する喜びであろうか。

男性の場合における“マゾヒズム”は“フェミニスト”（feminist）《男女同権論者、女性尊重論者》が進歩、発展し《女性崇拜》となった状態ではないかと考える。しかし、女性の場合はどうして“マゾヒスト”になるのか、今だに理由が分らない。だが、私の考えをのべてみると、女性の場合には男性とくら

べて、いろいろな事で受身の状態が多い為ではないかと思われる。又、精神的な苦悩では女性は男性よりも自暴的なところがある。そのため、自分の身体を「責める」事により精神的な苦悩から逃避するのではないかと考える。

数少ない“マゾヒズム”の代表的な小説、「O嬢の物語」について、私の考えをのべてみよう。これは、私が読んだ唯一の“マゾヒズム文学”である。

「O嬢の物語」の主人公であるOは“完全なマゾヒスト”であるのか？ という疑問が、初めてこの物語を読んだ時に起こった。そして、この疑問に対して私は“Oは完全なマゾヒストではない”と考えた。それは、彼女がいろいろな「責め」を受けても性的快感を覚えておらず、むしろ我慢をしているからである。この様に「責め」《拷問》に対して我慢をしているのは、彼女の恋人の為《初めはルキの為、後はステファン卿の為》にである。いろいろな「拷問」を受けている時でも、彼女にとっては恋人が常にそこに存在しているのである。

以上の事は前半の内容であるが、後半にな

ると拷問を好む様になり、それが残酷になればなるほど満足する様になったのである。これは、前半での状態で飼育された為と思われる。

飼育されて「マゾヒスト」になったのは「完全なマゾヒスト」であると私は思わない。

「飼育された」ということは、飼いなされた事、すなわちある状態に軟化させられたのだからである。軟化させられた行動は「自己の存在した完全な行動」であるとは私は思わない。それで、Oは「完全なマゾヒスト」ではないと否定したのである。これは、すべての事に対しても言える。

Oは「完全なマゾヒスト」になれなかったけれども「奴隷」となった。それはロワッシーの館の中にいる時ではなく、そこから外へ出て行った（ルキと元のアパートへ帰った）時からである。ロワッシーの館にいた時は、彼は自分から進んで「奴隷」になったのではなく、強制的にさせられたのである。

始めは、恋しい男（ルキ）の為に彼の言うことに従い、彼につかえることであった。それで、彼女はルキの「奴隷」となる事でルネは自分のものになると確信したのである。そして「奴隷状態」に置かれる事で満足する様

になった。ステファン卿の場合には、彼はルキの主人の様な存在である事、ルキが彼女を裏切った事と、ステファン卿の愛撫によってであると私は考えた。ここで、彼女はルキの裏切による絶望の時にステファン卿の愛を確認し、後半は彼のもの（「奴隷」となった。以上の事より、彼女は愛を確信する為に「奴隷」になろうとしたのだと考える。

Oがこの様に簡単に「飼育」されたのは、彼女が無気力の行動派（自分の考えを、殆ど持たず、他人の言う事を、なんの抵抗もなく受け入れ、行動してしまう人々）である為と思う。しかし、彼女の娑婆での仕事が写真広告社でのモード写真部門であることは、思考的行動派（自分なりの考えをしっかりと持ちそれによって行動して行く人々）でもあると考えられる。思考的行動派であったならば、この様に簡単に「飼育」されなかったのではないかと考えると、彼女の本当の姿はどちらなのか疑問になってくる。

○
いろいろと考えつくまま、思いつくままに書いて来ましたが「SMプレイ」等に対して未経験でありますので、おかしいと思われるところもあるでしょう。その時は、読者諸氏

からの御注意、御意見をお願いいたします。そして「自分は「マゾヒスト」である」という女性の方（特に東京近辺）と「サジズム」と「マゾヒズム」に対して論議をかわしたいと思いますので御連絡をお願いいたします。書き終わるにあたって現代は昭和元禄とか言われ「アブノーマルの」な事が多いのですが動物の本来の欲望を追求している我々の方が「ノーマルの」ではないかとさえ思います。最後に、私の好きなことわざと、自作の格言をのべて終わりたいします。

。なんじ自身を知れ

Know thyself.

。学者物知らず

A mere scholar, a mere ass.

○
☆私は、悪徳者である。

しかし、悪人ではない。

☆人生とは、ワラ山の中で

一本の針を、さがす様な事である。

だが、それを怠ってはいけな

——（終り）——

× × × × ×

× × × × ×

＝ 創 ＝ 作 ＝



暗い森が燃える

—— 木 暮 加 奈 子 ——

毛利薬局の前は稲荷神社の森がふさいでいて、その森の中を小川が流れてい、菊子は家から町へ出るのに、その小川にかかっている粗末な丸木橋を渡って、近道をとるのが習慣になっている。菊子の家は社の森の背後の、田圃の中に建っている新築間もない家で、町へ出るのに道はまどろしく迂回しており、田圃のあぜみちをよ切って稲荷神社の小さな森を抜けると、おどろくほど早いのであった。だから夫の幸司も、毎朝、小川の丸木橋を渡り、一人息子の幸雄もその近道を通して学校へ行く。

夫は東京に本社を持つ証券会社の支店に勤めており、文書課であったから、殆ど転動はないと思っていたのもよかったが、そのかわり待遇面ではあまり恵まれていなかった。夫は三十二、菊子は五つ下の二十七、幸雄は小学校三年生である。この三人家族の家庭は裕福とはいえず、加えてこれから十年にわたって住宅代金を月々返済していかなければならぬ。家を建てたのは、半分が会社を通じての銀行融資と、あと半分は夫の父親が出してくれた。いわば生きている間の遺産分けのようなものだった。二階建のモダンな住宅である住居の窓はみな南を向いていて陽当りがよく

北側は稲荷神社の森に面していてその部分はうす暗い。

社やしろの森は夜などはうすきみわるい。季節は初夏だが、菊子は森の中をひとりで抜けて行くとき、肌寒いような緊張を感じた。

「近道で便利だけど、あの森は怖いわ」

と菊子が言うとお化けが棲すんでいるかもしれないぞ、と夫は子供をからかうようなことを言った。

躰が小柄で、愛くるしい顔立ちをしている菊子は、どこかまだ娘々とした雰囲気を持っていた。学生時代、中学、高校を通じてずっとバレーボールの選手をしていた菊子の躰は、しなやかに緊きまつっていて、そのくびれ腰は弾力的で、夫をこよなく満足にもてなすと同時に、菊子自身も暫くはベッドから起てないほど燃えただれる。性感の繊細な感度の高い女体であった。

夫は、子供は一人で十分だと主張して、必ず避妊法を用いた。それは夫が、外で購う。いつもきままったように幸司は二打宛買かって来る。夫婦の寝室のベッドのサイドテーブルの抽斗の中にそれは蔵かくわれてあった。その小箱の包装紙は一定の薬局のものではなかった。いつも同じ店でそれを買うのは幸司は気がひ

けると見え、そのつど違った薬局で求めて来る。

或る日、菊子は毛利薬局の包装紙を見て悲鳴をあげた。魂消るような声だった。

「なんだい、びっくりするじゃないか」

夫は腕に軟膏を塗りながらふりむいて言った。彼はその日通勤電車の駅の階段で転んで肘をすりむいていた。その傷薬を求めたついでに、それも買って来たのだろうか。

「恥ずかしいじゃないの、ご近所の店でこんなもの買ったりしちゃ……」

と、菊子は羞恥し、上気した顔で夫の顔をにらんだ。そんなに神経質になることはないじゃないか、と夫は笑った。

「向こうは商売さ。別に興味を持ったりしないよ」

「しかし、いややわ……」

毛利薬局はこの界隈の将来の発展を見込んで店を構えたふうな、まだ真新しい薬局である。目下はどうしても町外れの淋しい場所だから、当分はソロバンに合わせぬことを覚悟しているのだろう、主人はしごくのんびりとして店先で暇をもて余している風情だった。主人といってもまだ若い。そう二十五、六だろ

うか、薬剤師の白衣姿が余り似合わぬよう

体格のいいスポーツマン風な男だった。女店員が一人いる。中年の、すが目の女で、スクーターにも乗り、自動車も運転していた。その女店員は夕方まで勤めるらしく、夜はいつも主人が一人店にいる。この若い店主は自炊生活をしているのだろうか、と菊子は、一度風邪薬を買いに店に行った折に軽い興味を覚えたものだ。

愛想もよく、物腰も上品な男だったが、やや執拗に菊子の顔を見た。顔ばかりでなく、目の線を眼が撫でているように菊子は思った。店を出て、自分が気をまわしたのだろう、と思ひ直した。――

「ねえ、今度からもうあの店では、これを買わないでよ」

寢室の小さな洋タンスの陰で、ピンクいろのネグリジェに着替えながら菊子は言った。

菊子はブラジャーもパンティもすっかりとり去って全裸のうえにネグリジェをまとう。そのうすい衣裳も、ベッドに身を横たえようとすぐに脱がされてしまうものだったが。



幸雄が腹痛を起こした。

夕食に八宝菜を作ったのだが、その材料がいけなかったようだ。子供ばかりでなく菊子

も胃腸に変調を覚えた。

食後五時間を経ており、十時でテレビを打ち切ったときに幸雄が苦しみだした。胃を痛めたのか腸を痛めたのか、判然としない。トイレへ行かせると、ひどく下したが痛みは一応去ったらしかった。ホッとして、入れかわりに菊子がいだったが、体質の相違か、彼女の場合は腸がせくような感じでありながら、少しも出ず、腹痛はおとろえなかった。

生憎と今夜、夫は土曜日なので同僚三人と泊りがけで沖釣りに出かけて行っている。

医者と呼ぶにしても電話がないので、町まで出かけて行かなければならず、それに馴染みの病院はなかった。町にたしかに二軒病院があるのは知っているが、それが内科なのか外科なのか菊子は覚えていない。

「ママ。お医者さん、呼ばなくてもいいよ」

何回かトイレに通いはしたが、青い顔色で幸雄が言う。菊子が医者を呼びに行くと一人になるので、それが彼は怖いようであった。

「浣腸してあげようか。早くキレイに出さなくちゃあね」

思いついて、菊子は言うのと、そこに出している薬箱の中を調べだしたが、浣腸薬は見当らなかった。もうずいぶん前に、以前の借家

にいた頃、隣家の夫人にイチジク浣腸を貸してそのままそれが切れてしまっていたことを菊子は思い出した。

「ないわ、切れちゃってる。ママちょっと買ってくるからね」

「いやだよ、ぼく、もう大丈夫だから」

「毛利薬局だから近いでしょう。すぐ帰ってくるわ」

「いやだよ、浣腸なんていやだよ」

もっと薬を飲むからと少年は言い、薬箱に手を差し伸べた。

「無駄よ。急病のときにこんな薬、効きやしないわ」

常備薬の胃腸の薬は、たしかに急場の間尺には合わなかった。幸雄は一応排泄しているからまだしもだが、菊子は錠剤を飲んでいたが、まるで効果がない感じた。食物が^{あた}いけなかったとすれば食中^{あた}りで、その急性の烈しい腹痛は、並の胃腸薬では、とうてい鎮め切れない。

「なんとか処置しなければ……」

菊子の腹の中で痛みが、にわかに嵐のように荒れ狂いだした。菊子は社の森の黒々とした暗い樹間を縫って行きながら、苦痛の生汗が全身に噴き出すのを覚えた。

ママ行かないでよう……と三つ児のように泣いた幸雄の聲が、お腹の苦痛にさいなまれながらも、妙に菊子の耳の底にこびりついて小さな音曲のように耳殻でひびいていた。夜のぶきみな森の中を抜けて行きながら、今、菊子は、こわいと思う気持はなかった。恐怖を忘れていた。

森を出ると、目の前に薬局がある。

だが、毛利薬局は表にシャッターをおろして暗かった。



表にはがんじょうなよろい戸が降りているが、裏の方を見ると灯影が漏れていた。その灯影が横合のせまい瀬戸を明るませていた。瀬戸にはスクーターが置いてあり、菊子はそのスクーターに一度つかまって息をととのえ、這うようにして勝手口の戸口まで行った。そのガラス戸を叩いた。

「どなたですか」

という声とともにガラス戸が勢いよく繰られたとき、菊子は瞬間、目を伏せた。

店主がバスタオル一枚の裸で、肩から湯気を立てながら立ちはだかっていた。

「やあ、奥さんですか」

と彼は、湯上りの裸形を照れもせずと言っ

た。たくましい男の裸体だった。筋肉質で、肉がもりあがっていた。胸一面で胸毛が黒々と濡れてひかっていた。動物的に、なまなましく男が、におった。

「すみません、遅くに。……じつは子供が」
菊子は症状を述べた。

「わかりました。それはきっと食中りでしょう。しかし奥さんも悪いのではないですか」

と言って、毛利は白い腕を握った。それは医者のように菊子の脈を診るようでもあったし、好色に、菊子の手の感触を愉しむようでもあった。胸毛の濃いかたく肉の緊まった胸が、菊子の目の前にそびえていた。男の精気がたちのぼっているようなその胸が、菊子にはまぶしかった。把られている手首が熱く、菊子は身悶えるふうに腕をくねらして手はずした。すると、毛利の手がこんどは顔に触れた。青ざめた菊子の頬を撫でて、
「生汗がいっぱいだ。……こりゃあ、いけませんね」

菊子のなおやかなお腹の中で嵐が荒れ狂っており、汗はしとど噴いて、うなじの髪まで濡らしていた。

「すみません、おトイレを——」

貸してください、と菊子はかすれた声で言

った。

「行っちゃって、出ないんでしょう」

「ああ、たまらないの——」

「奥さん、浣腸してあげますよ、私が」

「いいえ……」

「恥ずかしいの？ 奥さん」

「——」

あたりまえでしょう、という眼で菊子は毛利の顔をにらんだ。怒った目になると、かえって菊子の顔は色気がにじむぐあいで、この場合、腹痛で顔が蒼いから妙に凄艶だった。

「ご案内しましょう、トイレへ」

毛利は、菊子の細腰を抱いた。バスタオル一枚の裸体で大きな腕が菊子の小柄な軀を横抱きに抱えるように、いとも軽々と抱きあげた。抱きあげられてはじめて菊子は、「あ……」と言った。小さな叫びだった。弱い肯定的な声だった。

毛利は中廊下をあゆんで、トイレの前で菊子の軀をおろした。菊子は黙ってドアをあけると、あわただしく中へはいった。毛利はドアの前に立って動かなかった。

◇

病気なのだ。しかも突発的な急病なのだ。だから仕方がない……ソファの上で背を丸め

て、両手に顔を埋めたままの菊子は、自分にいきかした。

うすい化繊の下着を膝までおろして、白いスリップの裾は大きく背中までめくられてなよやかな白い腰が露わだ。薬剤室の黒いレザーのソファは病院の診察台に似ていた。しかしひとりの美しい女性患者がそこに這ってあられもなく円いしりをさらしている姿は、やはり病室の雰囲気ではなく、妖しい雰囲気だった。

依然、バスタオル一枚の姿で薬剤を調合している毛利の眼は、露骨に好色な光を湛えて白い下肢をむさぼるように眺める。そのために調剤の手が休みがちになるのだった。

「先生、はやく……」

両手で顔を覆ったまま菊子は蚊の鳴くような声を出した。「ママ早く帰ってきて……」という幸雄の声が聞こえたように思えた。

「待ってなさいよ、奥さん。特別いい薬を調合しているんだ。これだったら、かならず出て、うんと楽になるよ」

「ああ、くるしい……」

お腹の嵐はまだ熄まない。トイレを借りてみても、家での時と変わりなく腸管の末端に門がされているような感じで、苦痛はいっそ

う緊迫し菊子は軀がズタズタになりそうだ。「ウムム……先生、まだ、まだですの……ウムム……」

「辛抱なさい。奥さん」

眼で菊子の白い腰の丸みを撫でながら、毛利はイルリガートルにコバルト色の薬液を満たしだした。

「いい腰の線をしていますね、奥さん。いい恰好だ。白くて桃の実のようだ。喰べっちみたいよ」

「ああいや、見ないで……」

「奥さん、僕はね、前から奥さんに」

惚れていた、と毛利は言った。

菊子は、一種の戦慄を覚えた。

菊子の白いうなじに紅く血がのぼった。そして彼女はもう羞恥に堪え難く、うしろ手でスリップの裾をおろした。

「わたし、帰ります——」

「何をいう、いまさら。ほら、もう用意が出来た。すぐ楽になりますよ」

あらあらしくスリップを捲り上げられ、菊子はうめいた。毛利はまた腰の形を賞めた。緊まった少女のような腰だという。菊子は苦痛の感覚の中で甘ずっぱい戦慄を感じた。それは勝手口で横抱きに抱えられたときに、胸

の底ですでに兆候のあったものだった。戦慄がいまは鋭く深まった。

牀の奥深くで甘ずっぱいおののきが生じると、菊子はいつそう深くその愛くるしい顔を両手で掩い包んだ。

「特製の浣腸だよ、奥さん」

ノズルが触れた。ひいやりとしたガラスの感触だった。菊子の牀の中に薬液がはいり出した。

充満し、溢れ出るような心地に、

「ウムム……ああ、ウムム……」

菊子は全身をひきしめてうめいた。

「うごかないで、うごかないで。うごくところぼれるよ……奥さん、僕はほんとうにずっと前から奥さんに惚れていましたよ……ほんとうに奥さんが好きで……ああこうして奥さんの肌が見られるなんて夢みたいだ……うごかないで、うごかないで」

「アア……ウムム……いや、もういや……」

「うごくなよ！」

毛利は大きな手でびしっと白いしりを撲った。つづけてびしっぴしっと撲ち据えた。

「ああ、先生——」

菊子は、よわよわしい悲鳴をもらした。

「ひどいわ、ひどいことなさるのね……」

「こないだ、貴方のご主人がいい物を買いに来たけど、僕はそのときジェラシーを感じたよ、ご主人がうらやましくって……いや、うらやましいというより憎たらくて殺してやりたいような気がした……」

「いや、そんなことおっしゃらないで……わたしは患者で、あなたは薬剤師。それだけのことよ」

「ウフフ、奥さん、ほんとに唯それだけのことかね？ それだけの気持で、こうしてうっとりと浣腸されているのかね？」

「うっとりだなんて……わたし苦しいのよ、いちどにこんなに沢山お薬を入れられるなんて……ウウム！」

菊子は、にわかに高く苦痛のうめきをもらすと、片肢を突っ張り腰を振って、ガラスのノズルから逃げようと試みた。すると、猛烈な平手撲ちが、しりを襲った。

「あッ」

菊子は叫んで、おとなしくなった。

「賜りものにしてるのね……」

うら若い美しい人妻は涕泣した。

八百CC。一滴残さず、毛利は注入し了えた。

激烈な排泄の衝動。

ソファの上で波うつ黒い髪。のたうつ白い腹。毛利の笑声。しりが打ちしばかれる音。悲鳴。そして悲鳴。



トイレの白い扉を出ると、菊子はその扉に背を凭して肩で大きく息をした。

「出ただろう？」

うんと出ただろう、と毛利は笑って菊子の青ざめた額に手を当てた。手は頬を撫で、ほっそりとした咽喉を愛撫する。

「楽になっただろう」

「ええ……」

菊子は青白い頬に羞恥の血のいろを見せてかすかに笑った。

「もう一度腸を洗ったら、もう大丈夫だよ、奥さん」

菊子の腕を捉えて毛利は言う。その笑っている目に嗜虐的な陰気な光が宿っているのを菊子は仰ぎ見て、

「子供のことが心配だわ、きっと泣いているでしょう。早く帰ってやらねば……」

言って、彼女は目を伏せた。腕をひっぱられると「苦しいからいや……」と拗ねるようにならかった。

「あなた、わたしの苦しむ姿が面白いのね」

菊子はふたたび目を挙げて毛利の厚い胸を見た。胸毛におおわれたたくましい筋肉の隆起が、目くらみがするほどまぶしい。男の精気がたちのぼっているこの男の軀にくらべると、夫の軀はなんと貧弱なことだろう。

「病氣は治らなくてもいいのか」

と、毛利は強い力で菊子をうしろむきにさせ、おしりを打ちしばいた。ゆるしてー、と菊子は悲鳴をあげた。甘えた音色の悲鳴だった。屈服を暗示している音色だった。

「来い」

「ああ、そんなに腕を……」

菊子は、薬剤室の黒いレザーのソファの上に糸つけない姿で横たわった。おしりをしばかれると、観念した様子で、服は自分で脱いだ。

「その手をどけろ」

毛利が言うと、菊子は毛利の筋肉を凝視していた目を静かに閉じて、両手を脇腹におろして双つの乳房をさらけだした。

薄紅い乳くびがつんと尖った、ゆたかな美しい乳房だ。

白い乳房の白い谷間でペンダントがそれ自体息づいているようにうごいた。貝を形どった素朴で上品な水晶のペンダントだった。

「奥さん——」

うめくような声を出して、毛利の顔が白い美しい胸に襲いかかった。菊子は甲高い悲鳴を立てた。

男の歯が柔らかい丘を噛みちぎるようだった。苦痛で、目尻からなみだが流れた。なみだをこぼしながら菊子は苦痛に堪えた。赤い歯型が無数に刻みつけられた。

「サディストね、貴男って方……」

菊子の声はふるえていた。恐怖のおののきと情感のおののきとが、妖しく交錯した声で菊子は言い、涙で濡れた異様に輝いた目で男のしぐさを眺めた。

容量八百CCのイルリガートルにコバルト色の薬液を毛利はみたしている。

「いややわ、もういややわ……」

菊子はソファの上で身をくねらした。白い蛇体のようだ。菊子は自ら慰撫するようにすべすべとした円い尻を撫ぜた。挑発されて、毛利の眼はいっそう残忍な光を増し、

「この阿魔……」

可愛い阿魔め……唇を歪めて彼は声なく笑い、イルリガートルを懸架すると、柱にかかっているズボンからベルトをひきぬき、それをくねくねと宙で振ってみせた。打つ、とい

う示威であった。

「いや——」

菊子は、おびえた。

「乳暴しないで——」

といううちに、鞭がびしっ！と腰に炸裂した。同時に悲鳴が空気をつんざいた。

「ゆ、許して……お願い、許して……」

「夫がありながら、子供もありながら、このみだらな女め、こらしめてやるぞ」

毛利は、より強く柔肌に鞭を見舞った。その鞭の痛みよりも、毛利の罵るような言葉が菊子には痛かった。肉体の苦痛に加えて精神的な苦痛をも与えてこの男は欲ぶのだと菊子は思った。理由はともあれ、夫以外の男に肌を見せ、なお逃げ出し得ない自分は、鞭で打たれるにふさわしい堕ちた女だという意識が胸に広がって、菊子は心が汚辱にまみれた。それは、不思議にも一種の快感であった。「どうやらお前は鞭の味が分かるようだな」鞭で打たれるのは初めてか？と一旦、手を休めて毛利は言った。

「はい……」

打たれて紅い柔肌の炎症をさすりながら、菊子は、うなずいた。

「ほんとうか？」

「はい……初めてです……生まれて初めて……本や映画などでアブティクなプレイがあることは知ってましたけど、体験するのは初めてです。」

菊子は哀れな奴隷のように、言葉づかいもへりくだったものになっていった。

毛利は五、六回たてつづけに菊子のしりに鞭を振った。菊子の悲鳴は半ばかすれて、天井へむかってただ火のような息を吐くのだった。

「ああ、あなたお許しを……」

「次は浣腸だ」

「……」

「お願いいたします、と言え」

女性写真モデル募集

分譲写真撮影のため

奮て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。

○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。

○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記

「おねがい……いたし……ます」

「ご主人さま」

「ご主人さま、おねがいいたします……」

菊子は黒いソファの上でさきほどと同じ姿勢をとった。半ば夢遊病者のようであった。

菊子は頭の隅で叫ぶ声を聞いていた。

「なんてことするのッ。早く、早く逃げないと駄目じゃない！」

「バカッ、こんな気狂い男のことを諾いてどうする気？」

だが、菊子の体はじっとしたままだった。

毛利は不満で鞭を浴びせた。菊子は同型の姿勢で下肢の角度をひろげた。さらに鞭打たれ、小柄な美しい女体は完全な被虐のフォー

載の上編集部宛お申込み下されば、報酬その他詳細につき、お返事いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮て御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。

○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようになります。

△奇ク編集部▽

ムを取った。

イルリガートルの、青い薬液が流下しだした。焼け爛れるような苦痛が菊子をさいなんだ。その時、菊子はなぜか、毎日通るあの暗い社の森をイメージした。

日中も陽をとおさないあの暗い森が炎えているイメージが、この苦痛の感覚から、もうろうとして生じた。

「森が……」

菊子は、あえいだ息づかいで言った。

「森が燃えているわ……」

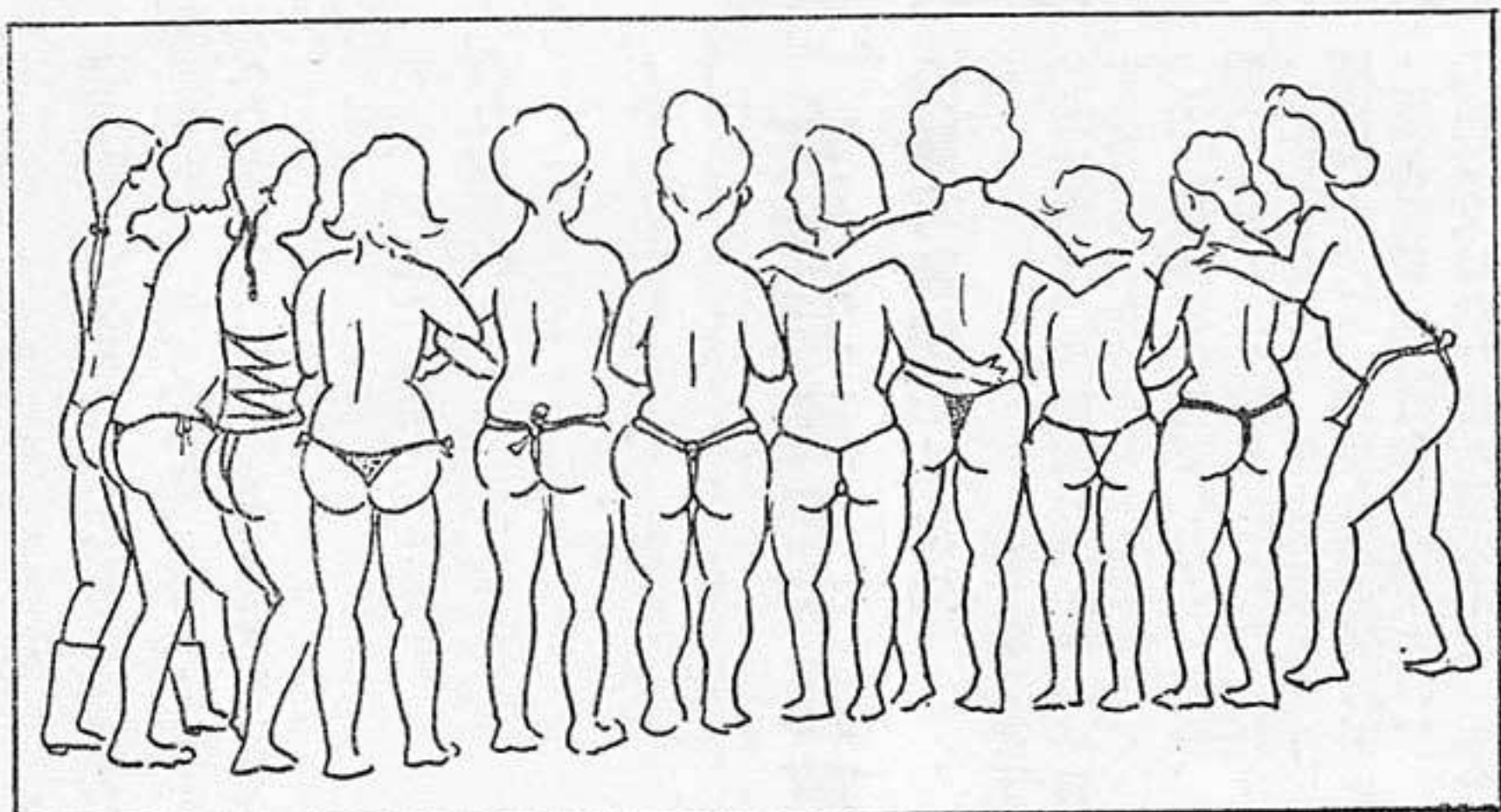
「森が——？」

毛利は、ちょっと顔を起こして窓の方を見た。その窓から森は見えはしなかったが、毛利は怪訝な思いで窓をふりむいたのだった。

空荷神社の森の中を小川が流れていて、その小川にかかっている粗末な丸木橋を渡ると田圃の中にモダンな一軒家が建っているのが見える。

その屋根の下での日々の平凡な生活を、この人妻は今忘却していた。不可思議な被虐心理に溺れこんだ菊子の脳裏には、暗い森が燃えるイメージが湧いたが、現実の森の向こうの小じんまりとした家も、その家に住む者の姿もうかばなかった。

(了)



「ふんどし百科」

本屋をひやかしていたら「世界原色百科事典」という全八巻の立派な本がありました。「ふんどし」という所を見ると、「下帯を見よ」とありますので「したおび」を引いてみ

私の体験談

ふんどし物語

—— 文 と 絵 ——

鈴木 ゆり 子

わざわざ「男子の」と書いてあるところを見ると、私が現にスカートの下に締めているのは、「ふんどし」ではない、と言うのでし
ようか？

私だけではありません。真赤な三角ふんどしを締めた大先輩の松原三千代さんを先頭に同じく赤三角の加茂和子さん。玉田良江さん黒いモッコふんどしの池田ふみ子さん。白い乙女ふんどしの若柳キミコさん。赤い六尺ふんどしの井上ますみさん。文田利子さん、越智かおりさん。晒の六尺を締めた布施ひきのさん。その上に腹巻をした山田美智子さん。水色の六尺の小倉いくよさん。亀山ふんどしの亀山順子さん。デニムふんどしの村田武子さん。サイズを締めた出雲肌香さん。生物ふんどしの柳井敬子さん。バタふんどしのミニブーツさん。それにフォトでおなじみの柄物三角ふんどしの梨花悠紀子さん。絹川文代さん。四方清美さん。須川令子さん。長野良子さん。六尺ふんどしの関谷富佐子さん。栗本ミチさん。細川アヤ子さん。三木乃々子さん。山原清子さん。玉田美佐子さん。横屋峯子さん。腹筋もみごとな左近麻里子さん。刑部典子さん。男物の黒帯をさいて締めた遠藤百合子さん。ビキニふんどしの伊吹真佐子さん。

ました。

すると原色のさしえはおろか、わずか十一行、「男子の陰部を覆う布。六尺、越中、もつこの三種がある」という程度のことしか出ていません。

野田進さんの奥さん。晒の九尺ふんどしの大塚啓子さん。桜井葉子さん。黒い水泳ふんどしの愛川悦子さん。すもうふんどしの東浦ひかるさん。木村洋子さん。それにサイズをキリリと締めた舢倉島の海女さんと、ヘコ一本の対馬曲部落の海女さん大勢が、百科事典の編集長をとりかこみ、サツと上衣を脱ぎ捨てて、ふんどしの男女同権を認めさせてやりたと思うわ。

言いたいことは、まだまだあります。ふんどしが、わずか三種とは何事ですか？ 色とりどりの私たちのふんどしを見てごらんない。

「下帯を見よ」とは何ですか？ ふっくらとした美しい「ふんどし」ということばを、どうして使わないのですか？ 夫と私の命の宝物、草木で言えば美しい花を、「陰部」と呼ぶのも不愉快です。

本屋を出てから、歩きながら考えました。ひとりで腹を立てていても、しょうがない。

私は、やがて、あの百科事典ぜんぶぐらいの豪華な「ふんどし百科」を完成させよう。日本海の海女さん、インドの奥地、南アメリカのインディオの部落などをたずねて取材しよう。

数年前、朝日新聞の女性記者、有馬真喜子さんが、舢倉の海女さんといっしょに暮らし、連載記事を書いて評判になった。けれども、文章にも写真にも、肝腎のふんどしの事は少しも出なかった。あれは、有馬さんが、潜水服を着て水に入るぐらいの事で満足してしまっただけに違いない。私なら、まず、素っ裸になって、海女さんと、ふんどしの交換をしたのに。

どこへ行っても、その土地のふんどしを締めて仲良しになろう。そして、世界じゅうの男女のふんどし姿の原色写真をうつして、さしえにしよう。

あらゆるふんどしの作りかた締めかた、特徴などをくわしく説明しよう。あたらしい、ふんどしファッションや、ふんどし文学も収めよう。

モデルには、私と夫の他に、山でふんどしの交換をした、みどりちゃんのような、可愛い少女をたのもう。倍賞美津子さん、小川ロザーさん、アン・マーグレット、ミレーヌ・ドモンジョなんかも、どうかしら？ みんなそのふんどしを締めて美しく体をやいてもらいましよう。生っ白のお尻じゃあ、ふんどし美が引き立たないものね。

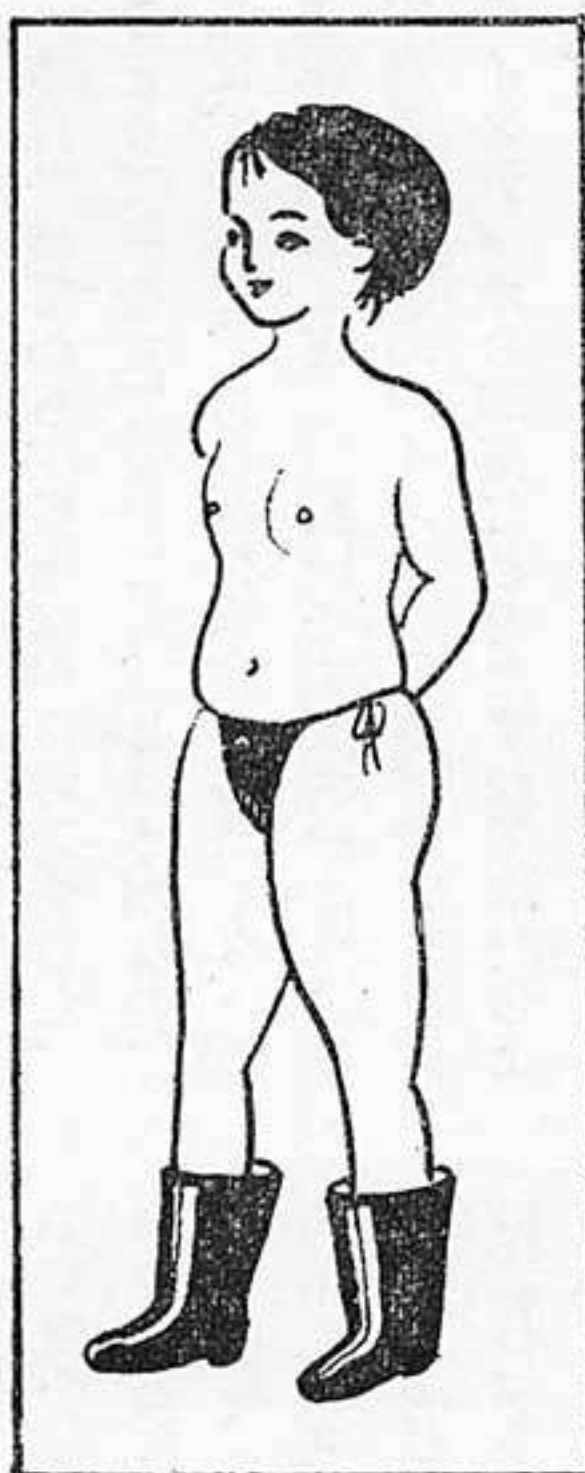
梓みちよさんのソノシートを添えましょうか？ ホホホ、あの歌は、いつ聞いても「ふんどしの赤ちゃん……」と聞こえたわ。こんどは、ほんとに「ふんどしの奥さん……」と歌ってもらおう。もちろん、ふんどしひとつで歌うのよ。そして美しいアングルからの写真を入れるの。

ああ、空想だけでは、つまらない。大出版は、またの機会として、とりあえず、ふんどしの話題を拾ってみましょう。

「水泳ふんどし」

今でも夏、いなかへ行くと、雑貨屋の店先などに黒いふんどしを束にして売っているのを見ることがあります。高知県ではエッチュウ。山口県ではサツポタ。東京ではバイク。その他、商品名から来たのか黒猫まわしと呼ぶところもあります。この黒い三角ふんどしの正式な名前は何というのか知りませんが、とりあえず、松原三千代さんのまねをして、「水泳ふんどし」と名づけておきます。

私が小学生の頃は、男の子は水泳パンツの下に締めていました。これだけで泳ぐ、センスの良い子もいました。昭和二十年ごろまでは、男の子は子供もおとなも、水泳ふんどし一本で泳いだと言います。戦争ちゅうの写真



集に、小学生の団が、水泳ふんどしだけの姿で、荒地を耕している場面が収められています。軍人たちがいばる戦争は、全体としてとても耐えられませんが、ふんどし風俗がまかり通った点だけは、昔は良かったのだなあと思います。

私が小学校三年のときのことでした。田口君という、色が黒く、ひたいがツヤツヤと広く、目が大きくて唇が厚く、肉づきが良くて可愛い男の子がいました。この子が、バンドを締めなおそうとして、一たんゆるめて、しばらく放心したように、自分のズボンの中を見おろしていました。

私はすぐ横にいたものですから、何の気なしにのぞき込んだら、パンツをはかずに、ズボンの下に、すぐ、水泳ふんどしを締めているのです。少年の白い、太腿と、着古した黒いふんどしの対照は、ひとつの美でした。田

口君も、我ながら、つい、その美に見とれていたのでしょう。パツと目が合ったとき、田口君は、あわててバンドをしめてひたいまで真赤になってしまいました。

その日、家へ帰ってからふしぎに、田口君のことがまぶたを離れません。夜、夢とも、うつともつかず、田口君の姿を見ました。日がさんと輝く大海原を、一隻の漁船が木の葉のように揺れています。ひとりでこの船をあやつっているのは、黒ふんどし一本の田口少年でした。

私の方が勉強もできるし、田口君を、かわいい弟分ぐらいに考えていたのですが、その田口君が、自信にあふれる、たくましいおとなに見えて来ました。それにひきかえ、私なんか、世の中の役に立たない虫ケラみたいなものだわ、という気がしました。

しかし翌朝、学校へ行ってみると、田口君は、やっぱり、あどけない少年です。私は、ゆうべの幻を吹きとばすように、「お早う、田口君。今日もふんどししてきてるの?」

と言いました。物のはずみは、おそろしい

ものです。田口君は

「うん。見せてやろうか?」

「良いわよ、そんなもの。あんたって、なぜパンツはかないの?」

「ふんどしの方が坐りが良くて、良い気持ちだぜ。ゆりちゃんも、ふんどしにしなよ」

「バカ。私、持っていないもん」

「おれのをやるよ」

それから数日、そっと、田口君にもらったふんどしを締めたのです。

ふんどしのままお風呂に入り、われとわが身をいつくしました。そしてきれいに洗って固くしぼって、私のひきだしの中で乾すのです。

ある日、私が風呂場にいると、脱衣室にいきなり母が入って来ました。

「加減はどう? 入るわよ」

私は、大あわてで風呂桶の中にしゃがみ込み、ふんどしをはずして丸めてみたものの、かくす所がありません。しかたなく、口の中にふくんで出て来ました。

「アラ、もう出るの?」

私は口がきけませんから、コックリコをして、サッと出て来たのです。

これにこりて私はふんどしをやめました。

しかし、数年後、娘になってから、本式のふんどし生活に入るようになった種は、このときに蒔かれたのだと思います。

あの時の田口君は、今はお父さんの後をついで、ほんとうに、遠洋漁業に出ています。職業がら、きつともふんどしを締めているだろうと思っていましたが、この間、田口君の家の前を通りがかったら、若い奥さんが洗濯物を干していましたが、その中に男物のブリーフがありました。

いつか同級会の際にでも、尻をまくって「しっかりしろ！」とタンカを切ってやろうか、と思っています。

さて、私の「初ふん」である水泳ふんどしには、他のふんどしにはめったに見られない特徴があります。それは、公然と売られていることです。私は、バスの窓などから、店先にこのふんどしが見えると、途中でおりて買わずには居られません。

「ふんどし、ください」

と言うときの胸のときめき。売り手が、おばあさんだったり、中年すぎの男だったりしたら、サッサと買って出て行きますが、同年代の若い女の人だと、つい露出的なおしゃべりをしてしまいます。

「夏は、これに限るわね、涼しくって」

とか、

「歩くと汗でグッショリになるから二本くださいな」

とか、ちょっと当て

て、首をかしげてニツ

コリ笑って、

「似合う？」

とか。

そんなことで、ずいぶんたまってしまいました。商標ではオリソック印。飛魚印。ヒコキ印。古い所では白い菱形にブラック・キャットなど、いろいろあります。布地はガーゼのようにうすいもの。メリヤス地。シユス等。紐にも、うす地の一重。厚いテープ。袋縫いになった二重のもの等、種類があります。前袋とたてみつのつなぎ目は、前袋をひだにしてあるのがふつうですが、左右にゴムを入れて弾力を持たせ、ひだを取ってない珍しいものもあります。

前袋は正三角形に近いものから、かなり縦長のものまであります。おとな用には、巾広い方が実用的。こども用には縦長の方がかわ



いらしいのではないだろうか？

私は、小学生のとき、口の中にかくした思ひ出が忘れられないのでしょうか、生地がうすくて紐が細く、小さくたためるようなのが好きです。

売っているものは例外なく長すぎます、そのまま締めたのでは、おへそがかくれそうになるか、さもないければユルフィンになります。ですから、私は後のひも通しを使わず、腰紐をギュッとむすんでから、股をくぐらせたたたみつを、腰紐の後にゆわえつけます。こうすれば、心ゆくばかりきつく締め上げることができますし、後がはずせるので、用便も、らくです。

用便と言えば、ズボンをはいた男の人には市販の水泳ふんどしは、極めて不便ではないでしょうか？ この点からも、陸上のふだん

着としての水泳ふんどしは、元来、スカートをはく女性向きのものだという気がします。黒のミニブラジャーに小さい水泳ふんどし、

これは若い女の人なら、だれにでもよく似合います。やせた人にも太った人にも、色が黒くても白くても、幼稚園のこどもでも、年をとって、肌にタルミが来ない内に、ぜひ、ためしてごらんなさい。但し、堂々とした姿勢でなければだめです。演出された適度の羞恥はけっこうですが、心までイジイジしたら、その瞬間に、ふんどしがオムツに見えるものです。

さて、水泳ふんどしには吊るし売りからセロハン袋入りまでありますが、ねだんは十五円から、せいぜい五十円どまりです。安くてもうけが少ないためでしょうか、近頃は後がV字ベルトになったゴム入りのサポーターが出まわり、なつかしい水泳ふんどしが、世の中から消え去ろうとしています。これが消えない内に、私には、ぜひ、しておきたい仕事があります。

商標入りで全国的に売られている以上、どこかに「ふんどし会社」がある筈です。その会社には毎日、朝から晩まで、ふんどしに埋もれて仕事している若い女工さんが居ること

でしょう。この人たちと仲良しになりたい。

「あなた、会社で何作ってらっしゃるの？」

「ふんどしよ」

クルツと後を向いて、たくし上げて、

「こういうの？」

「マッ、この人！」

なんて、考えただけでもゾクゾクします。

「越中ふんどし」

奇クのふんどし女性たちに、およそ人気がないのは越中ふんどしでしょう。大戦中の写真集を見ると、戦地の兵隊さんの越中姿がたくさんあります。大きなシャベルでお尻をすくったような、あのかっこうは、どう見てもほめたものではありません。

しかし、ブリーフや、縞のパンツにくらべれば、はるかに清潔ではないでしょうか？ いなか道を歩くと、物干竿に越中ふんどしがはためいていることがあります。その度に、持ち主は、おじいさんかしら？ 若い人かしら？ と、おせっかいな事を考えます。今、このふんどし受難の時代に、越中にせよ、常用している若い人があれば、すばらしい事ではないでしょうか。

さて、私は去年の冬、事故で右足を折って入院しました。

片足を固定したままでねたきりになってみると、六尺はもちろん、水泳ふんどし型の三角ふんどしも、もっとふんどしも不便です。ここに至って、私は越中を見直さざるを得ませんでした。

私は、夫に細目のテープを買って来てもらいました。そして、六尺ふんどしを切って、越中を製作しました。

御存知のとおり、六尺一本から、越中が二本できます。越中には、紐を縫いつける方式と、ひも通しにする方式があります。私は、むろん、ひも通し式を作りました。これですと、後の方は、カーテンを片寄せたように狭くまとめて、お尻に食い込ませることができます。そして、前だれをギュッと引っ張ってしめ上げた所に、目立たないようにホックをつければ、使用感は、もっとふんどしと変わりません。

私は、手術のときも、これを締めて行きました。片足が固定されていてパンティの着脱ができませんから、言い訳は立ちます。若い看護婦さんが、私のゆかたの前をひらいて、小さい声で「アッ」と言いました。まないたの鯉は、ふんどしを締めていたのです。

外科の主任看護婦は、事務的に

「T字帯もとって」

と命令しました。

病院では、ふんどしと言わずに、T字帯と言うのですね。

申し訳ていどに白い布をかぶせ、寝返りを打たせて、腰椎麻酔を打ちました。茶色い肌に灼きついた象牙色のふんどしあとを見ているのでしょうか、後にまわった執刀の先生は、

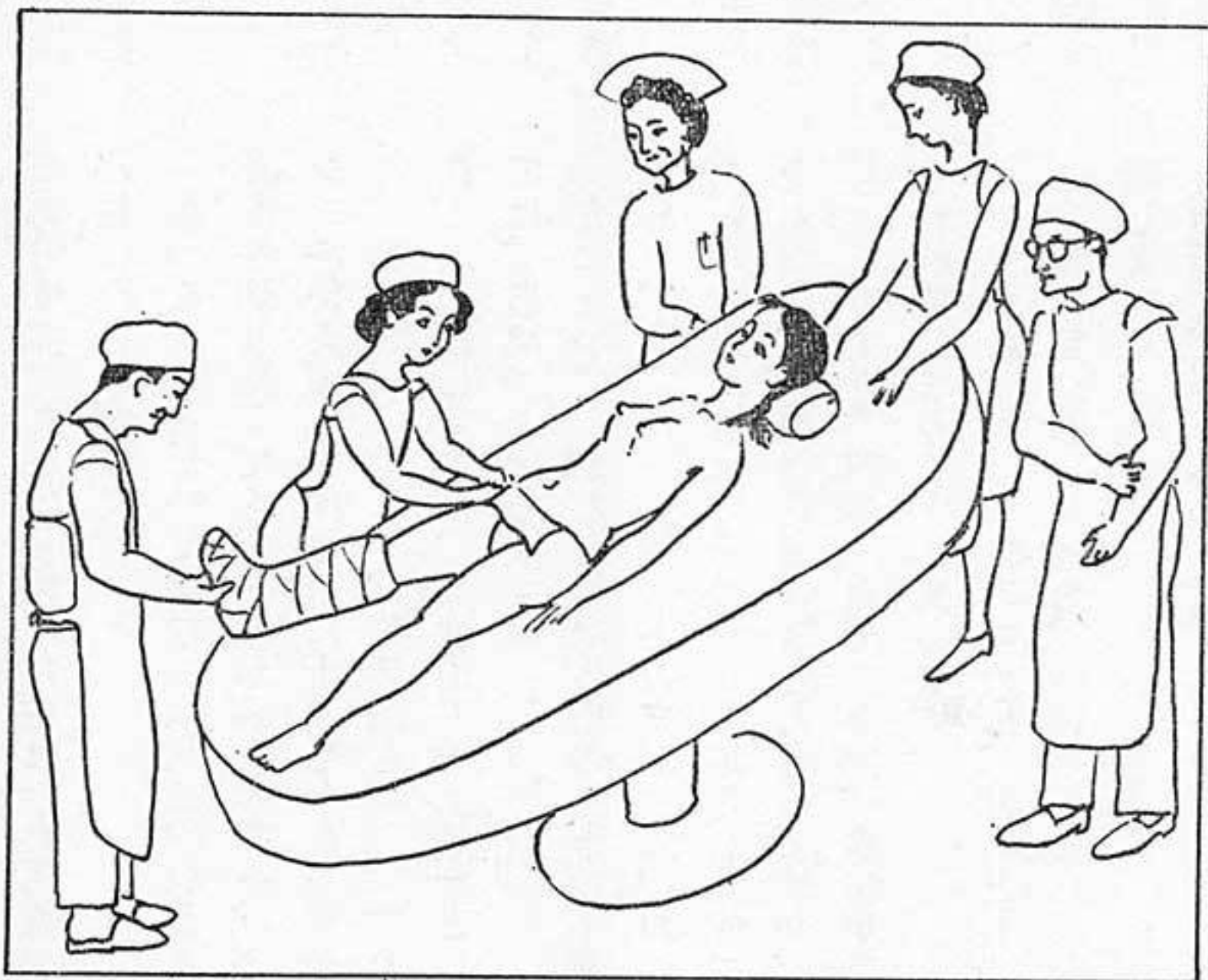
「ほう、奥さん、健康的ですな。お若いから、すぐ恢復しますよ」

と言ってくれました。

切開して、骨を出して、ドリルで孔をあけて、ステンレスのボルトで締めて、縫合して手術が終了しました。

ひろげたゆかたの腰のあたりに、文字どおりT形に置かれたふんどしの上に、ドッコイショと移されました。下半身、

しびれたままでしたが、あの、かわいらしい看護婦さんが、ふんどしの腰紐をしぼり、布をくぐらせて、グツと引っぱって、ホックをかけてくれたのがわかりました。私は、看護婦さんにニッコリと目礼しました。主任さんも、先生も、インターンの若い男の人も、みんなが見守っていました。



翌々日は日曜で、病室は何となくのんびりしています。注射に來た当直の目の大きい、グラマーな看護婦さんが、気さくに話しかけます。

「鈴木さん。はい、お手々出して。あんた、勇ましいんですってね。外科のナオちゃんから聞いたわよ」

「何のことかしら？ 困っちゃうな」

「フの字よ。はいてるの？ 今でも」

「ああ、ふんどしね。いつでも、キリリと締めてるわよ。見たいの？」

「いやだ、大きな声で。皆、聞いてるわよ。」

ああ、はずかしい」

それ以後、どの看護婦さんも、私には仲間同様に、気さくにつきあってくれるようになりました。しぜんに、病室ぜんたいがほがらかになり、もともと内臓の病気でない私は、快適な病院生活を送ることができました。見舞に通う夫も、廊下で若い看護婦さんに「ゆり子さんのだんなさん、コンチワツ」とお尻を叩かれたり、満更でもありません。

二カ月半で、私は惜しみ惜しまれて退院することになりました。夫と暮らせること、越中と訣別して本格的なふんどし生活にもどれること、アスパラガスのように色あせてしまったお尻を日に灼くことができること、この三つの楽しみに胸をふくらませながら。

人生、いつも順風満帆とは限らない。時に越中の御厄介になる事だってあるんだわ。そう思って、昔の兵隊さんの越中姿の写真を見ると、越中を頭からバカにする気にはなりません。これはこれで、やっぱり日本人の生活

の智慧なんだわ、と思います。

「もっこふんどし」

むかし、体面を重んずる武士や金持ちは六尺ふんどしを、貧乏人は越中を締め、更に布地が少なくてすむ、もっこふんどしを締めたのは伊勢者などの守銭奴だったと言います。

今でも、「もっこふんどし」というと、何となく品がないような響きを与えます。

ところが、今から約十二年前、女子高校生が堂々と、もっこ党の名乗りをあげました。御存知の池田ふみ子さんです。

昔の合戦絵巻などで、「もっこふんどし」にお目にかかることがあります、ほとんどがダラリと長く、風とおしの良いものです。越中なら、しばらくでもギュッと締められますが、もっここのゆるいのと来たら、救いがありません。

池田さんのは、布の長さ約四十五センチというものですから、ピッタリと、体の中にはまり込んだように締まる筈です。同じもっこでも、まったく違います。

さて、蛇足とは思いますが、「もっこふんどし」とは、さらしの布の一端を紐に縫いつけて他端を紐とおしにしたものです。昔の男は縫いつけた方を後にして締めたのではない

かと思っています。池田さんのは、むしろ逆で、後は細くなって、お尻に食い込みます。私が夫のために作っていたのは、前後とも、ひも通しにしました。後のひも通しは巾一センチぐらいにして、狭く寄りやすくし、前のひも通しは巾五ミリ以下にして、両手で左右に引っ張っておくと、自然には中へ寄りにくくしてあります。これは、ズボンをはいた男性の小用のための配慮です。

「もっこふんどし」は、古い六尺の、いたんだ所を切り捨てても、一本から三本でき、ミシンを使えば三本作るのに十分もかかりません。嵩ばらず、涼しく、繫縛感もあり、すぐれたふんどしですが、男性用の「上着」としては、ちょっと困ります。

夫にとって、ふんどしは外出のときの下着であり、家では上着でもあります。気のおけない来客のときは、そのままで応待します。そんな時、六尺なら堂々としたものですが、もっこですと、前が一重ですので、感情があらわれてしまうことがあります。

ですから、私は、夫のために、越中ともこの長所をつき合わせた、次のふんどしを発明しました。

「前垂れつきもっこふんどし」

これは、もっこふんどしの前のひも通しのところを、それで終らせず、更にのばして前垂れを作ったものです。言い方を変えれば、後を紐通しにした型の越中ふんどしを、ギュッと締めた所で、ゆるふんにならないように前も紐通しとして固定したと考えても良いわけです。

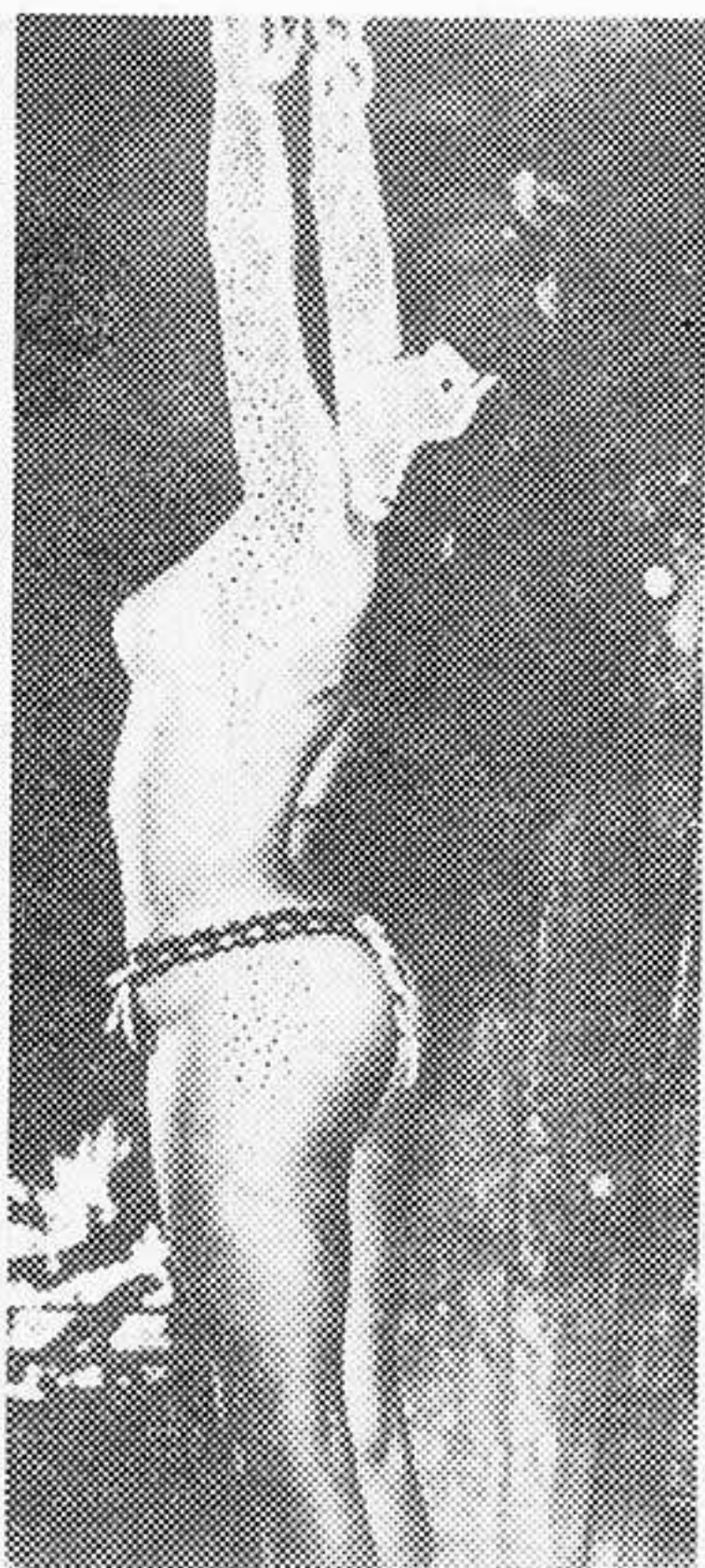
重要な点は前垂れの長さです。短かすぎたは用をなさないし、長すぎると、エプロンのようで、何ともやばったいものです。体格にもよるでしょうが、私の家では十六・七センチにしています。この程度ですと、四角い前垂れの下に、前袋の丸いふくらみがチラホラ見えて、かくす目的と美観の双方が叶えられます。

さて、このふんどしにも、まだ欠点があります。後のたてみつが、クシャクシャと縦じわになって、どうも、イキでないのです。そこで、現在のところ、わが家の男性用ふんどしとしては、六尺と、九尺と次のふんどしの三種類に統一されるようになりました。

「前だれつき三角ふんどし」

これは、水泳ふんどし、越中ふんどし、もっこふんどしの三者のもつ長所をつき混ぜたものです。結論を申しますと、前だれつきも

フランス映画「悲しい奴」スチール



つこふんどしの、前袋とたてみつの所を水泳ふんどし型にしたものです。

後ろは水泳ふんどしと同じですから、たてみつは殆どお尻にかくれて、キリッとしています。前垂れがありますから、上着にしても失礼に当ることがありません。水泳ふんどしと違って、前も紐通しになっていますから、ズボンをはいた時の小用もらくです。

くわしい製法は、次のとおりです。

さらしを、約四十一センチに切って、一端を縫いおさめして前垂れにします。この端から約十七センチの所で折り曲げ、約五ミリの巾をとって縫いつけ、前の紐通しにします。一方、長さ二十四・二十五センチ、巾九センチのさらしの一片を、縦に二つに折り、端を

収め込んで筒状に縫いつけ、一端を巾約一センチの紐通しにしますこれで、巾約四センチのたてみつができました。

さきに作った前袋の端にひだをつけて、約一・五センチの深さにたてみつの筒の一端に押し込んで、形よく縫いつければ出来上ります。あとは、紐を通せばよい訳です。

「女性用三角ふんどし」

男ものが続いたので、ここで、女ものの話をして息をつきましょう。

三角ふんどしとは何かという点ですが、私はこんなふうに考えています。前が三角形、後ろは縦一本。或いは、後ろも三角形だが、前の三角にくらべて面積が狭い布でできていて、腰まわりは細いひもになっているもの。水泳ふんどしも、もちろん、三角ふんどしの一種です。

三角ふんどしについては、一九五六・七年にかけて、松原三千代さんが、くわしく書いておられます。

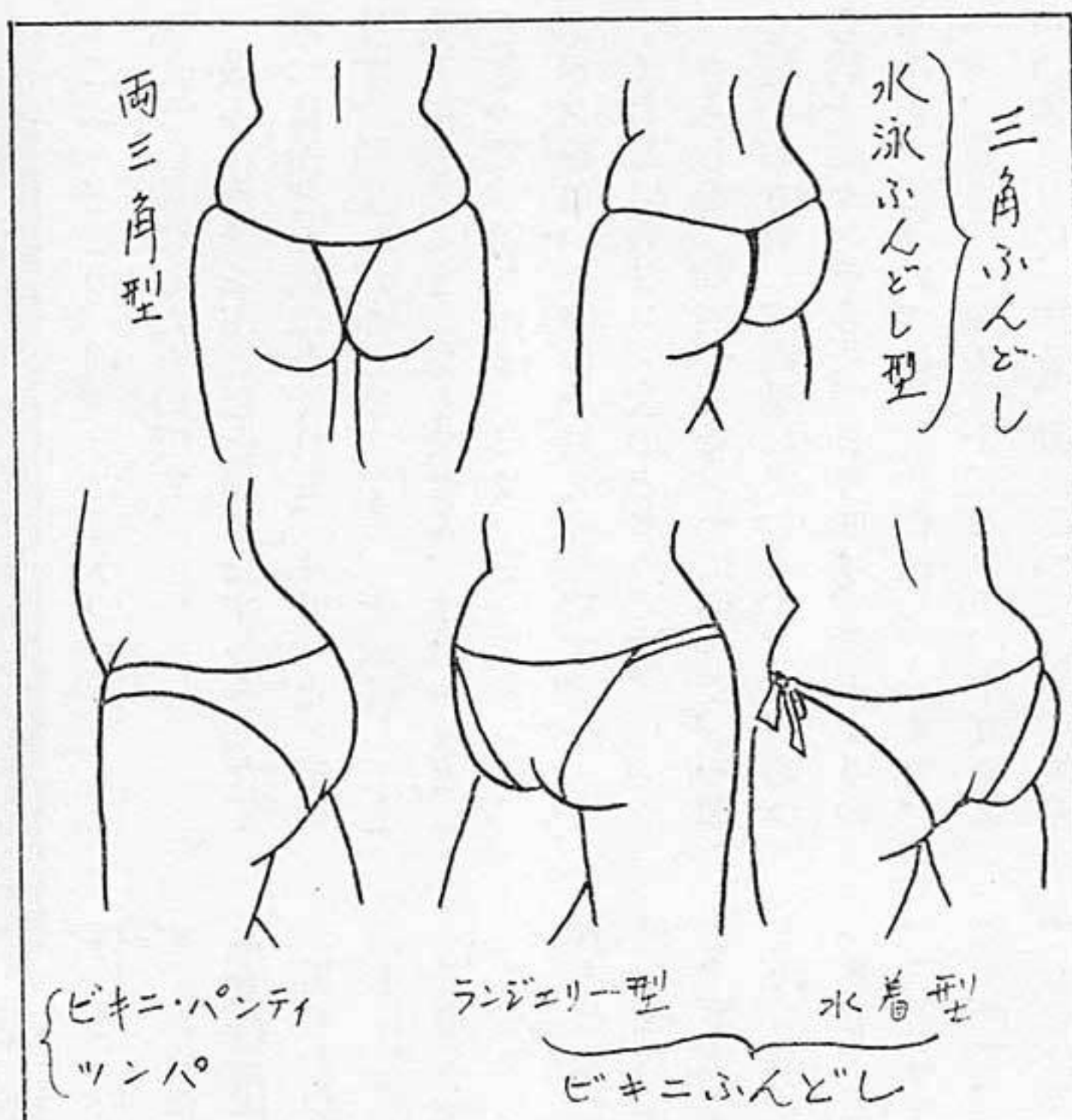
出雲肌香さんは、ゴテゴテした三角ふんどしを好まないと書いておられますが、私も同意見です。

亀甲しぼりの梨花悠紀子さん。ジャングルスタイルの四方清美さん。女奴隷の絹川文代さんなどは、洋服がらの三角ふんどしの、美しい後姿を見せておられます。マゾ傾向が強い人が、がら物をうまくこなすのかしら、とも思います。

お恥かしい話ですが私がいちばんよく使う三角ふんどしは、男用の、市販の水泳ふんどしなのです。前にも書きましたが、これは長すぎるので、グーツと引っ張って後ろに締め上げると、前袋の部分で股下が覆われてしまいます。巾が狭いたてみつの部分は、ほんとうに後ろのたての所だけになりますので、たとえあぐらをかいても、だいじょうぶです。

私たちは、衣服や家は必要悪だという考え方をしています。女の美は衣服には無くて、あくまで体にあり、衣服は、それを引き立たせれば良いと思います。若い女の美しさの中心は、何と言ってもヒップから太腿にかけてのあたりでしょう。これを引き立たせるものは三角ふんどしに限ります。

洗濯して清潔ではあるが、着古した黒い三



角ふんどしをきつく締めて、汗で多少しめっ
ていて、ニッコリ笑って手をひろげ、

「お帰りなさい！」

と言う姿を想像すると、夫は仕事中でも、
ゾクッと来て頬がゆるむそうです。

私は以前、紀志栄子さんから七色の三角ふ
んどしを戴いたことがあります。これは、メ
リヤス製で、ひだの無い水泳ふんどし型でし

た。黒なら水泳ふんどしが良い
し、青や緑や黄は、何か落着か
ないので、赤だけ、しばらく使
ってみました。けれども、やは
り、何かフワフワしているみた
いで、結局、しまい込んでしま
いました。同志、栄子さんの友
情のしるしとして、ときどき出
して頬ずりをしています。

話は交わりますが私は緊縛感
というものは圧力と面積をかけ
た値であらわされるのではない
かと思います。

ふんどしを常用していない人
は、巾広い帯ならきつく締めら
れるが、細い紐をつく締めたら
痛かろうと思うでしょう。しか
し、一日締めていると、実は逆なのです。腰
まわりが二重になる九尺ふんどしなどは、ゆ
るふん気味に締めても、時間と共にグイグイ
と圧迫感がつのって来ます。

紐も股下も細い三角ふんどしは、からだか
縦横に切れるかと思う程きつく締めて、鏡で
見ると、くびれの中に紐がかくれてしまうよ
うにしても、三十分もすれば忘れるぐらいの

ものです。ですから、きつく締めるなら三角
ふんどしを、と言うことになります。

数年前、フランス映画で「悲しい奴」とい
うのを見ました。気のきいたSMもので、美
女が次々と裸にされて殺されます。アンナ・
アスターだったかと思いますが、グラマーな
ウェイトレスが、「次はお前だぞ」とからか
われて、「マア、うれしい！」と、うっとり
した表情になります。ここで、観客がドツと
笑いました。「美人扱いされるのが、死んで
もううれしいのか。バカな女だ」という笑いで
した。しかし、私には、ムンムンするような
グラマーな体の中で、銀の針のようなマゾ美
が光ったのを見ました。

それはさて置き、このヒロインがワンピ
ースをむしり取られると、みごとな水泳ふんど
し型の三角ふんどし一本の姿が出て来ます。
この姿で、さまざまの拷問にあって殺される
のです。効果を高めるためにこのような服装
にしたのだとは思いますが、フランスでは、
処女のウェイトレスのワンピースの下が、三
角ふんどしひとつという設定が不自然でない
のでしょうか？

チーズを食べて作ったみごとな体にキリッ
とアクセントをつけた三角ふんどしが、今で

懸賞入選作品

<三回分割発表の2>

(4)

ぼくは、生まれてからずっと灰色の独房で育った。ぼくが物心ついた時、いちばん先に気がついたのは、ぼくが記憶する限り、独りぼっちだった、ということだ。過去の記憶をどう探っても、その灰色の部屋に独りでいる自分の姿しか浮かんで来ないんだ。その頃ぼくは五歳にはなっていたと思うが、不思議なこと、同じ屋根の下に住んでいるはずの家族の顔も名前も想い出せなかった。

白

い

牡

(しろいおす)

麒麟田欧二

部屋には窓があったので、そこから樹木の繁った広い庭が見えた。建物が古い煉瓦造りで、一面に蔦が絡んでいるのもわかった。だが、それ以外は、灰色に沈潜した四角い空間だけが、ぼくの世界だった。床には古いが贅沢な絨氈が敷きつめられ、こどもには不相応のピアノが据えてあった。書棚には真新しい絵本や童話の本がぎっしり詰まり、玩具箱にはおもちゃが溢れていた。ぼくは、ともかく何ひとつ不自由しなかった。だが、不自由しないために、ぼくは凡ゆる自由を奪われてい

たんだ。早い話が、小便をする時間まで決められていたんだからね。ぼくが、どれほど不自由しなかったか、概要説明しよう。

朝、七時になると婆やが起こしに来る。先ず小便だ。それから洗面、着替え。三十分もすると、朝食が運ばれて来る。結構なデザートもある。それが終わると「お坊ちゃま、ウンチをなさいまし」ぼく自身の便意なんかとは全く無関係にことが運ばれる。いつの間にか、ぼくのからだの機能の方がそれにならされてしまっていた。十時、おやつ。十二時十



五分前になると、また婆やが現われて小便、手洗い、そして昼食。これで半日は終わった。三時、おやつ。夕方、五時三十分びったりに入浴だ。それが済むと夕食。最後に婆やが来るのが八時三十分。小便ならびに着替え。そこで「おやすみなさいまし」ってことになり有無を言わず灯火が消される。ざっと、こんなあんばいだ。毎日がこの時間表通り、機械みたいな正確さで繰り返される。ぼくが灰色の部屋を出るのは、一日に三回の小便と、一回の大便と、そして入浴の時だけ。婆やはぼくの世話をするためにだけ、通いで雇われていた。

家族だって？ だから、前にも言ったように、ぼくの口から家族と呼べるような人間、あるいは人間関係は、最初から存在しなかったんだ。ただ、世間並みに言えば、戸籍ではぼくの祖父にあたる男と、母にあたる女が、同じ屋根の下に住んでいた。むろん、すべてはあとになって知ったことだが、当時、すでに彼らは、ぼくにとって祖父でも母でもない関係にあったんだ。ぼくが生まれる前からこの二人は完全に家族構成の埒を破った。父が家出して消息を絶った、その直後に生まれたのがぼくだ。何とも間の抜けた登場者さ。当

然のこと、ぼくは生まれた途端、余計者という運命になった。事実上、ぼくは生まれながらの孤児だったわけさ。

ぼくが生まれた時、祖父はこう予言をしたんだそうだ。

「此奴は、どのみち長生きせん。十五まではもつまいて。放っておいても心配は要らん」それから、ぼくの余計者としての、しかもなに不自由のない生活が始まったわけだ。

ぼくの家が、家族ごと——つまり第三者の言う母と祖父だが——あの空襲で一瞬に吹き飛ばされたことは、君も知ってるだろう。だが、恰度その瞬間にも、かれらはたった二人きり、しかもあの真ッ昼間、素ッ裸で抱き合っていた、ということだ。ふたりは、その呪われた関係を、いかにもかれらしいやり方で、最後の瞬間まで全うしたわけだ。その時確かにぼくは、表面的には肉親を一時に失ったことになるが、失ったことによって、初めてかれらの存在を確信したほど、かれらはもともと、ぼくにとって存在しなかったのだ。

同じ屋根の下に十何年、ともかく一緒に住んでいたんだから、その間かれらとぼくが全然顔を合わせなかったと言ったら嘘になるが顔を見たといっても、多分、二度か三度、そ

れも母だけで、祖父の方にはどうだったか記憶がない。おそらく、一度も会っていないように思う。母が、いちばん長くぼくの部屋に居たのは、ぼくが肺炎で死にかかった時だ。それも祖父が、自分の予言を確認するために母を寄越したんだ。それ以外の場合も、ぼくが病気の時だけ、祖父の指図で、ぼくが死ぬのを見に来たんだ。予言通りにならないと、祖父の機嫌が悪かったんだろう。

ともあれぼくは、祖父や母にとって死に損いとして細々と成長した。小学校へ入ってもぼくの生活は、特に変わることはなかった。だが、それまでのぼくの人生——というのも大袈裟だが——に、一大転機が来たのは、小学校二年の春だった。理由は知らないが、婆やが突然、故郷へ帰ることになったと聞いた時、ぼくは正直、死にたいと思った。

小学校の二年にもなりながら、ぼくは自分で衣服を着たり脱いだりする習慣を持たなかった。生まれた時からぼくの世話一切をして来たこの婆やは、ぼくのことを『着せ換え人形』のように心得ていたのだろう。無論、ぼくの身に着けるものは何もかも婆やの好みで選ばれたし、またそれを一分の隙もなく着付けさせるのが、婆やの唯一の愉しみであった

らしい。

「さあ、ご覧なさいまし。婆やの眼に狂いはございません。この洋服なら、きつとお坊ちゃまにぴったりだとにらんだのでございますよ。まるで華族様のお子のことですこと」
 ぼくを鏡の前に立たせて、婆やはうっとり
 と見入るのだ。

しかも婆やの着付けは、どんな物を着せても、ぼくの身体に全然違和感を与えず、まるで自分の皮膚の一部みたいに軽く快く、眼をつぶっていると知らないうちに衣服が変わっている魔法みたいな、そんな技術を持っていることが、子供心にも感じられた。

この婆やが急に居なくなることは、だからぼくの手足を挽がれるのと同じだった。明日からのぼくの生活は否応なく変わるだろう。ぼくの手足だった婆やの代りに、ぼくは自身自身の手で、洋服を着たり脱いだりしなければならぬだろう。その上、これまで、ぼくの眼で物を見、ぼくの耳で物を聞き、ぼくは感覚で物を感じてくれた婆やの代りに、ぼくは自分自身で凡ゆる判断を迫られるだろう。どう考えても、ぼくには、そんな自信はなかった。ぼくは、地の底へ引き摺り込まれるような絶望感に打ちひしがれ、これから先、生

きて行くことさえ不可能に思われた。

ぼくが涙を流したのは、だから婆やとの別離を悲しんだからでは決してない。明日からの自分の運命に泣いたのだ。

そこへ、忽然と、桐子が登場したんだ。

彼女がどういう経緯で来たのかは知らないが、婆やが去った同じ日、絶望に満たされたぼくの部屋に現われた。

彼女が、婆やの代りに来た新しい女中だと知った時、ぼくは二重の絶望に襲われた。すべてはこれで終わりだという気がした。彼女を見るまで、ぼくは一縷の望みを繋いでいた。それが、見事なまでに打ち砕かれたんだ。先ず何よりも、彼女が『若い』女であるということだ。彼女は一体、ぼくに何をしてくれるというんだろう。

これまで、皺だらけの手と、石のような踵を持った年寄しか知らなかったぼくを、第一に混乱させたのは、彼女の肌から匂う甘い化粧品の香りだった。その上、最も意外なことに、彼女は洋服を着ていた。そのスカートの下から出ている二本の白い脚を見た時、ぼくは眩暈を感じ、彼女はきつと、その真紅な唇で、ぼくに最後の宣告をしに来たんだ、と思った。ぼくにはもう明日なんかないんだ、と

いう気持が、却ってぼくを、恍惚とした放心状態にした。

ところが、意外なことが起こったんだ。

総ての面で女中というものに対するぼくのイメージを完膚なく破壊し、ぼくを絶望のどん底へ突き落とした筈の桐子が翌日から忠実に、全く一分の狂いもなく婆やの仕事を引き継いだのだ。彼女は、ずっと以前からそうしていたように、ぼくの一日のスケジュールに僅かの誤差も与えなかった。これは確かに、ぼくにとって二重の意外であり、奇蹟の復活だった。絶望の淵から這い上ったぼくは、これとさら柔順に、桐子の世話になった。

といって、ぼくの意志と身体が、婆やの時のように、あるがままに彼女の一つ一つの動きに順応するには、時間がかかった。殊に、衣服の着せ替えに関する限り、ぼくは昨日までの「着せ替え人形」にはなれなかった。ぼくは否応なく、自分の身体を意識した。これまで婆やの手に、殆んど無感覚に触れられていた全身の皮膚が、彼女の指先に微妙に反応を示した。

婆やの、かたいが温もりのある指に、すっかり馴れきった犬のように、何の抵抗もなく甘えていたぼくは四肢が、桐子の、やわらか

いが、しっとり湿ったような指に、ちょっと触れられただけで忽ち硬直し、操り人形みたいにスムーズさを失ってしまう。全身の毛孔の一つ一つが反撥し、手足は強情に、彼女の意志とは反対の方へ動こうとするんだ。

しかも、ぼくの皮膚は、日が経つにつれて彼女の指先になれるどころか、一層はつきりした反応を示すようになって行った。

ぼくの身体の一部に、彼女の冷たい指先が微かに触れただけで、ぼくの四肢は細かく痙攣し、その接触点を中心に、不思議な戦慄が全身にひろがる。身体の芯が火のように熱くなり、それとは逆に、寒くもないのに鳥肌だって、震えが止まらないんだ。

それは、桐子の指先が、ぼくの身体の奥深くから引出した今まで経験したことのない感覚だった。彼女の指は、『肉体の存在』をぼく自身にはつきりと意識させた。ぼくの身体——その意識は、同時に、生まれて初めての羞恥を、ぼくの中に呼び起こしたのだ。

一枚ずつ、身に着けたものが、彼女の手によって脱がされる時、ぼくはそのまま消えてしまいたいと願った。ぼくは、自分に身体のあることを、心から不幸に思った。身体は羞恥のためにだけ存在するんだ、ということ

桐子は、ぼくに教えた。

しかも彼女は、一カ月ばかり経った或る日突然、昨日までの習慣を破ったのだ。

その夜も、時計が九時をうつと、何となく身を固くして待つぼくの耳に、彼女の軽やかな足音が聞こえ、やがて白いかが咲いたようにぼくの前にあった。今日最後の着換えは彼女の羽根のような両手の動きとともに、ぼくから一枚一枚取り去って行き、初秋のやや冷やかさを感じさせる大気の中に、ぼくをすっかり裸にした。そこまでは、何時もと変わることはなかった。

昨日までの、機械のように正確な手順が、無視されたのはこの時だった。今夜に限って桐子は、ぼくを裸にしたまま、代りのパンツもパジャマも着せてくれようとしななんだ。ベッドの、不安定なクッションの上に、股をすぼめ、両手をだらりと下げたまま、ぼくは不恰好に立っていた。気がつくと、桐子の両の掌が、左右から挟むように、ぴったりと腰に触れていた。ぼくは殆ど無意識に腰をひねり、抗議しようとしたが、咽喉がからからに乾いて、声が出て来なかった。△まあ、何て可愛らしいんでしょう△その時、桐子が叫んでいるのが、遠い筈のように聞こえた。△坊

ちゃま、ご覧あそばせ。うしろに可愛いお人形さんが……△彼女の手が、優しく、しかし有無を言わせぬ強引さで、ぼくの顔を振り向かせた。ぼくの立っている真後に楕円形の鏡を嵌め込んだ衝立があり、その鏡に、白い『もの』が写っていた。△どうして女の子に生まれなかったのかしら。薔薇色のお人形さん△ぼくは初めて自分のはだかの裏面を見た。そこに含羞んだ少女のように赤らみ、身も世もなく顫えているぼくのお臀があった。(おお厭だ。人間にはどうして、こんなものがあるんだろう)それが、見ている前で腐ってしまえばいい、とぼくは思った。にも拘らず、ぼくは眼を閉じようとはしなかった。鏡の中で、桐子の白い手が、少しずつ動くのをぼくは見た。それは羽毛のように軽く、デリケートに、ぼくの背筋から臀部の膨らみを刷いた。△可愛いお臀。おいしい果物みたい△い△いやだ△突然、瘡のような震えがぼくを襲った。もう我慢出来ない。

この無礼な女中を、思いきり殴ってやりたかった。しかしぼくは、相も変わらずベッドの上に立ち竦んだまま彼女を正視する勇氣さえなかった。そればかりか、咽喉の奥で弱々しく△寒いんだ△と、言訳がましく訴えるの

が精一杯だった。

その夜、ぼくは眠れなかった。ひどく疲れ
ているのに、全身の細胞の一つ一つが目覚め
ていた。身に纏ったパジャマの違和感が、皮
膚を窒息させそうになり、思わず身動きする
と、その動作が却ってパジャマの異物感を強
め、重苦しいものにした。ぼくは、のろのろ
とベッドに起き上り、パジャマとズボンをも
おっと脱いだ。灯を消した部屋の中に浮かび
上った白々とした自分の身体が他人のもの
のように、奇妙になまめいて感じられた。

ぼくは、丹念にシーツの皺を伸ばした。僅
かの皺も、現在の鋭敏な皮膚には違和感と与
えずにはおかまいだろう。ぼくは、極めて細
心の注意を払って、裸の身体を横たえた。綿
密に地均しされたシーツの過不足ない柔らか
さが快くぼくの背を迎えた。肌にまつわりつ
いた異物感を取り除いた爽さが、ぼくの心を
休めた。ぼくは、不思議な陶酔に包まれて、
静かに眼をつむった。が、矢張り、何時まで
経っても眠れはしなかった。深夜、ふと気が
つくと、ぼくの掌は、自分の臀部をまさぐっ
ていた。

その夜から、ぼくと桐子の奇妙な交渉が始
まった。ぼくの皮膚は日毎に鋭敏になり、馴

らされた猫のように自分から甘えて、桐子の
掌に応えるようになった。その感触への欲求
は、機械のような生活の繰返しの中で、欠く
ことの出来ないアクセントとなった。

ある日、ぼくが学校から帰ると、迎えに出
る筈の桐子の姿がなかった。不審に思いなが
ら自室に走り込んだ瞬間、ぼくは叫んだ。

あの灰色の牢獄は其処にはなかった。その
代りに、匂うような緑が部屋に満ちていた。

昨日まで総ての窓を覆って、ぼくから光を奪
っていた分厚い羅紗の窓掛けが取り払われ若
草色のカーテンを透す午後の陽光が、室内の
天井も床も壁も調度も、空気まで緑色に染め
ていた。そして、その緑のカーテンの蔭から
だしぬけに、桐子が姿を現わした。

「坊ちゃま、びっくりなさって。大旦那様に
お願いしたんです。だって、あんまり陰気臭
かったんですもの」

ぼくは言葉もなく、桐子を凝視めた。彼女
も、部屋の緑から脱け出したような緑のワン
ピースを着ていたからだ。周囲の緑と洋服の
緑が融け合い、桐子の白いかおが、花のよう
に笑っていた。

「恰で森の中みたいでございませよ。お気に
召しましたか」

そうだ。奥深い森の中に居るようだ。ここ
はお伽話の森で、桐子は緑の精か、森の妖精
だ。ぼくは、彼女に抱きつきたかった。

この森の中の生活は、すっかり、ぼくの気
に入った。昼も夜も、ぼくはカーテンを閉め
切って、部屋の中の緑を逃がさないようにし
た。ことに夜の灯を受けたカーテンには、昼
間とはまた違った、しっとりとした潤いがあ
った。しかもそれは、ベッドの上で裸になる
ぼくの、効果的なホリゾントの役目をした。
ぼくの白い量感が、緑を背景としてくっきり
と浮かび上り身体の総ての線が生き生きと描
き出されるのだ。この緑の部屋の思いつきに
ついて、桐子は単に「私の好きな色だから」
と言ったが、そうした色に対する嗜好とは別
に、彼女らしい演出効果を考えていたのかも
知れない。ともかく、ぼくは、緑の森の虜と
なってしまった。

夕方、入浴後の一、二時間が勉強にあてら
れていたが、ぼくは机に向かったままぼんや
りと夢想に耽ることが多くなった。ぼくの身
体の芯に、鉛のような疲れが残っている。入
浴前の脱衣から、入浴後の着衣まで、桐子の
手は絶えずぼくの身体の上にあった。繊弱な
花卉の一枚一枚を扱うように、永い時間をか

けた入浴が済むと、だから、ぼくは何時でもぐったりした。しかも、桐子の繊細な指先とデリケートな触感が、まだ火照の消えないぼくの皮膚の到るところに、眼に見えない斑点となって歴然と残っているのだ。その全身に散らばった個々の感覚は、やがて静かに、摺鉢の底へ落ちるように一点に集結し、そこに感覚の一大プールが出来る。それは、ぼくの臀部だ。その時、ぼくは、自分が臀だけしかない奇態な動物のような錯覚に襲われる。

ぼくは勉強机を離れ、注意深くドアに鍵をかける。無論、そんな必要はないんだがね。それからベッドの上に立って、静かにズボンとパンツを下ろす。鏡の中に、下半身を剥き出したぼくの背面が羞らいつながら現われた。白いセーターの下に、柔らかそうな丸い肉がふたつ、微かに顫えている。(ほんとうだ)胸を熱くして、ぼくは思う。(おいしい果物みたいだ)ぼくの全身を、甘い戦慄が突き抜け、泣きたいような遺瀨なさが、ぼくをだるくした。

ぼくの手は、桐子の動きを真似て、自分の皮膚を探る。すると、ぼくの手の下にある皮膚の総てがそれに応えて薔薇色に変わってゆく。それを鏡の中に、うっとり凝視めてい

るうち、ぼくは眩暈に似た陶醉に陥るのだ。当然のこと、ぼくは勉強が手につかなくなった。学校の教室でも運動場でも、ぼくは独り夢想到に耽り、先生からも級友からも隔絶していた。成績も自然極度に落ち、第三者の眼からは、ぼくが突然、痴呆化したように見えたりしい。

桐子は、まる三年、ぼくの家に住したが、急に辞めた。理由は判らない。

「坊ちゃんまは、お知りにならなくても、よろしいんですわ」

桐子はそう言ったが、ぼくはその言葉の裏から、広い家の中に居る三人の「おとな」——祖父と母と桐子との間に何かあったのに違いないという、莫然とした感じを受け取り、しだいに、そう思い込むようになった。

桐子の手と、ぼくの皮膚との上に成り立っていた、ぼく的生活は失われたが、桐子の手によって存在を与えられた『可愛いお人形』『美味しい果実』はぼくの手の中に残った。

桐子は去ったが、彼女はそれ以来、ぼくの中に棲みつき、ぼくの手は立派に彼女の代役を果たすようになっていた。彼女は「^{エコー}」となつてぼくの奥深くから、あの優しい囁きを繰返すのだ。

ぼくが、ナルキソスの名を知ったのは、それからずっとあと、中学へ入ってからだ。この薄命の美少年の物語は、ぼくの身体を熱くし、ぼくの魂を薔薇色の霧に包んだ。水晶のような泉の水に写る自分の姿に焦れて死んだナルキソスの、美しくも短い生涯に思いを馳せながら、生温い涙が快くぼくの頬を濡らした。

(ぼくは——ぼくは、ナルキソスだ)

恍惚が、ぼくの気を遠くした。

ぼくは何時の間にか、緑の森を走り廻るナルキソスだった。ぼくは、泉を発見する。銀のような水がふつふつと湧き出している美しい泉だ。ぼくは水面に自分の姿を写し、うっとり凝視める。「ああ」ぼくは我知らず溜息を吐く。と、別の声が「ああ」といった。

エコーだ。——桐子だ、と気がついた時、ぼくは緑の部屋で鏡の前に立っていた。桐子の声は絶えずぼくの耳を快く擦った。彼女こそ姿を奪われた森のニムフェ・エコーだ。そして、その美しいニムフェの姿を奪った女神へラは邪欲に狂った母だ。さらに、ナルキソスが生まれた時、彼の運命を予言した盲目の予言者チレシアスを祖父とすれば役者はすっかり出揃うわけだが、そんなことに思い当たっ

たのは、もつと後のことだ。

「さあ、これでは桐子をニムフェと呼んだ理由が判ったろう。」

(5)

桐子についての彼の話を、私は無論そのまま信じたわけではない。が、全部が全部、作り話にしては、出来すぎていると思った。それに、私の記憶の中で、いろいろと思い当たる節もあった。

中学生時代の彼を知るものなら、仮に彼が△ぼくは、ナルキソスだ▽などと言っても、おそらく誰も、彼を笑ったり嘲ったりはしなかったろう。それは単に、彼が誰の目にも美少年であったという理由だけではない。彼には、一瞥、人の言葉を奪い、有無を言わせず自分の意志に従わせる奇妙な引力のようなものがあった。彼の深い色を湛えた瞳に凝視められると呼吸が苦しくなり、やがて自分が全く無力になるのを感じる。彼の言動のすべては、だから第三者の判断や認識を超えて、常に冒すべからざる真実として受けとられた。常識的にはそれがどんなに気障であり、傍若無人の言動であっても、現実には誰ひとり気障とも傍若無人とも感じないし、感じないこ

とを不思議とも思わないのであった。

そういう意味では、彼の昔話に、不自然さは聊かも感じなかった。私が過去に知っていた彼も、慥かに美しいナルキソスだった。

そして今もって、彼はナルキソスなのだ。汚れて、うらぶれて、年を取り過ぎたナルキソス。現在の彼を見て、しかし誰が、それを信じよう。

現在の彼を、第三者はせいぜい、女の腐ったような男、といった表現で片づけようとするだけだ。中には、彼奴は薄穢い男色者さ、などと穿った想像をする連中もいる。そんな連中は当然、彼と共同生活をしている私に、その歪んだ人間関係の分担者としての役割を与え、彼に対すると同じ眼で、私を見るのである。かれらにとって私は、極く常識的にペダラスティということになるのだ。

それが、或いは自然な解釈かも知れないがそのために私たちが受けた被害は尠くなかった。変態、同性愛、男色者、ソドマイト、おかま野郎——あらゆる声のない罵倒が、私たちの背中に突き刺さり、常に白眼と嫌悪の中に身を置かねばならなかった。周囲の眼は、私と彼の関係を、勝手に自分たちの頭の中にある一つの類型に嵌め込もうとするのだ。

△不潔なホモ野郎▽

それというのも、彼の肢体や動作の特徴がそうした想像を起こさせるに充分な類似性を持っていた、というより、その典型とも見えたらからだろう。長い黒い睫と、紅い唇、やや猫背な女性的骨格、ズボンの上からも歴然と判る臀部の表情、内側に弯曲した両膝、小刻みな内股の歩行——それらを見ると、周囲の眼は、この軟体動物のような男を裸にして抱き締め、夢中で愛撫しているもう一人の男——私を、何の苦もなく思い浮かべる。かれらは反吐を吐く時の不快な表情の上に、侮蔑と敵意の隈取を重ねて、私をながめる。

私たちは、一つ場所に永く住むことが難しかった。遅かれ早かれ、周囲の眼に追い立てられるか、逃げ出すかして、転々とねぐらを換えなければならなかった。だからと言ってそのために、二人の関係を犠牲にしようなどとは考えもしなかった。

三年の間に、私たちは、だんだん粗末なアパートに移り住んだ。

だが、犠牲はそれだけではなかった。元来小規模な勤め先の同僚が、唇の端に奇妙な笑いを泛かべ、汚物でも踏んだような眼で私を見るようになるまでに暇はかからなかった。

気がついたら、完全に独りになっていた。私は覚悟した。だから、営業部長に呼び出された時、私は、相手が何も切り出さないうちに辞意を告げた。今更釈明したり、説明したりすることが、私にあるだろうか。「私はホモでも、ペダラスティでもない」そう言ったところで、それが一体、何になるだろう。説明しようがしまいが、かれらにとって、どれだけの違いがあるというのか。だから、私が、五年間勤めた会社を辞めるのに、五秒とはかからなかった。

私は、S子を訪ねなければなるまいと思った。そう遠くない将来に結婚しようと互いに考えていたS子が、病氣療養で居合せなかったことは、私にとって一つの救いであった。久しぶりに彼女を見舞いがてら、退社のことを話さねばならないだろう。やがて彼女が、私の退職理由を知る時のためにも、私は先手を打っておく必要がある。或る程度の実実は知らなくてもおくべきだろう。

私は、会社を出た足でC県まで三時間ほど電車に乗った。赤土の道を三十分も歩いた。

S子の病室は、殺風景な大部屋で、カーテンに仕切られただけのベッドが幾つも並んでいた。私の胸は、さすがにときめいた。途中

で花でも買って来るんだと、軽い後悔を感じながら、彼女のベッドのカーテンをあけた。枕から首をもち上げたS子の、青白く肉が落ちて、それだけが際だって目立つ大きな眸が、私を見上げた。

「やあ」私は気軽に、しかし熱っぽい懐しさをこめて声をかけた。

彼女は、応えなかった。石膏のような無表情な貌を私に向けたまま、その黒い眸は、しだいに大きく瞳かれた。戸惑いが、私を沈黙させた。睨み合いに似た固い空気が、二人の周囲に静止した。やがて、彼女の唇が微かに動いた。何か言おうと努力しながら、口中の熱い乾きに妨げられるもどかしさを、その唇の動きは物語っていた。

「帰って」

かすれた、殆んど聞き取れぬほどの声で、彼女が言った時、私は聞き違いだろうと思っただ。だが、次に唾を嚥み、充分呼吸をためてから、別人のようにはっきりした、しかも動かし難い冷静さを伴って彼女の咽喉を押し出された低い声は、私の胸を深々と刺した。

「不、潔、よ」

それまで持ち上げていた頭が、急に力を失って、がくんと枕の上に落ちた。それっきり

彼女は、私の方を見なかった。彼女の身体を包んだ毛布が、烈しく痙攣しているのを呆然と凝視めているうち、私の視界は、真黒な闇に閉ざされた。(S子は知っていたんだ)しばらくしてから、私は眼前の闇の中へ「さよなら」と言った。

一日のうちに、職と恋人を同時に、しかもあっさりと私は失った。

翌日から、私は職探しに歩かなければならなかった。手許にある僅かばかりの退職金だけでは、彼という扶養家族を持った生活の、先は見えている。職安へ日参し、新聞広告を見ては、シラミつぶしに歩き廻った。重苦しく疲れきってアパートへ帰る日が続いた。

半月も経つと、焦りが出て来た。苛々と毎日が息苦しく、理由もなく彼を呟鳴りつけたりした。

そんなある日、もう暗くなってから、鉛のような重い足を引摺って帰ると、何時も夜食の支度をしている筈の彼の姿がなかった。しかも、それを不審に思うより先に、私を待っていたのは、アパートの居住者全員が連署した立退き要求書だった。

蒼い顔を絶えず痙攣させる居住者代表が、無言で突き出した要求書には、彼を出て行か

せるか、二人一緒に立退くか、どっちかを選ぶようにと、読み難い文字で書いてあった。似たようなことにはこれまでも出遭ったが、これ程はつきりした追い立ては初めてだ。私は正直のところ、驚くより呆氣にとられた。この唐突の連署要求が理解出来なかった。何かあったのか、と訊いてみたが、相手はわざとらしく口を歪めて、私の目の前に唾を吐くと、遂に一言も口をきかず、管理人室へ消えてしまった。

深夜、彼が帰って来た。彼は、黙って何枚かの紙幣を畳の上に置いた。「どうした？」と尋ねても、応えない。私の胸に、不快な想像が突き上げて来たが、それ以上、何も訊かなかった。それより、立退き要求書を見せて心当りがある筈だが、と言うと、彼は突然、顔を赫らめて呟いた。

「鍵をかけなかったもんで……」

何故、鍵なんかかける必要があるんだ、と訊いても、彼は唇の端に微かな笑いを浮かべるだけだった。

立退き要求の理由について、居住者の一人から、それとなく聞き出したのは翌朝だったが、私にとってもそれは意外な事実だった。彼にはまだ私の知らない一面があったのだ。

昨日の午後、管理人の細君が、私宛の電報を届けに来た。部屋には彼が居ることを、彼女は知っている。が、いくらノックを繰返しても応えがないので、やや腹立ち紛れに、荒っぽくドアを引き開けた。その途端、彼女は「きゃっ」と叫んで、卒倒しかけた。彼女が牛のように肥った更年期の女であることが、この場の「まずさ」に輪をかけた。

部屋の真ん中で、四つん這いになっている素っ裸の男を、彼女は見たのだ。しかも彼は壁に小さな鏡を立てかけ、その中へ様々な角度から自分の臀部を写しながら、両手で撫で廻しているではないか。そのポーズは、時には優雅に、時には奇怪に、時には淫らに、凡ゆる構図を次々と展開した。

その間、男は、呪文のような言葉を、絶えずぶつぶつと呟き続けているのだ。ムフエ……エコー……ヘラ……それ是一種の、自己犠牲的恍惚を伴った神秘的宗教的儀式のようであった。

ちょうど、男が、ひっくり返された亀の子のように、畳の上で仰向きになった時、この更年期と欲求不満が重った管理人の細君は、彼の腹の上に、春画に描かれたような巨大なものを見たという。

私は、職と婚約者に続いて、さらに住む場所まで失う羽目になった。

(6)

私たちは、四、五日後にアパートを出たがあては何もなかった。で、彼が以前泊っていたという新宿の安宿にひとまず落着いた。

歩けば足の裏がめり込みそうな古畳と、不快な臭気の染みついた三畳に、それでも私と彼は、二人だけのプライベートな空間を確保することが出来たが、最低の人種だけを相手にしているこの種の宿では、狭い一間に何人もの人間を、檻に入れるように押し込むことも極く当り前のことにされていた。粗末な建付けの屋内には、社会の片隅に吹き寄せられた人間たちが、塵芥溜めのように犇めき合い不潔な淀んだいきれに満ちていた。

次の日、私は失業保険を受け取りに職安へ出かけた。

職業安定所——表面は不運な人間たちの味方のような名前を持ったこの役所ほど、いやらしく、不快な場所を私は知らない。胸がむかつくような不快に耐えて此処へ足を運ぶ、誰でも陰鬱な表情がそれを物語っている。職員と称する、黄色い痩せた顔に、いずれも

眼だけが狡そうな薄笑いを浮かべた連中は集まって来る生気のない失業者たちを、野良犬でも眺めるような眼付きで見下げた。「まるでめえの金を恵むような、つらあしてやがる」誰かが、吐き出すように呟く。

代理人は認めないとか、支給時間にその都度時差をつけたりするの、二重取りをされまいという見えすいた意図からだ、こうした姑息な考え方が、かれら自身の卑しい根性を露呈したものであることに、当の連中は気がつかない。かれらを含めて、この種役所に共通しているのは、人間を頭から信用しないことだ。

従順な家畜を意のままに扱うように、理由もなく彼方へ並ばされたり、此方へ移されたりして、たっぷり二時間、私たちは無駄な時間を費した。

長い行列が、やっと私の番に来た時、窓口の男は、私の保険証を一瞥して、隣の男に囁いた。隣の男は、メモのようなものをひろげて見ていたが、黙ってうなずいた。

「君、相談係の杉原さんのとこへ行つて」

窓口の男は、保険証をぱんと投げ返して寄越すと、私の方は二度と見ようと思しないで「次」と言った。

杉原というのは、私が失職後、相談に来た時の係で、狐のような顔に細い縁の眼鏡をかけた中年男である。此処でも私は、また三十分余も待たされた。

「やあ、待たせたわね」

杉原は、女性的な鼻にかかった声で、私を彼と向かい合った椅子に坐らせた。

「ちょっと、それ」

彼は、私の手にある保険証を受け取り、迂散臭そうに暫く眺めていた。

「あんた、今日の通知、どこで受取ったの」

「その、保険証の住所です」

「おかしいわね。それで、翌日発送したこれは受取らなかったの」

杉原は、抽斗から符箋のついたはがきを摘み出して、ひらひらさせた。

「これはね、呼出し状なのよ。あんたに向きそんな求人があったので、保険金支給通知の翌日に出したんだけどね、この通り」

戻つて来た、と私の前に投げて寄越した。

眼鏡の奥から、窪んだ小さな眼が意地の悪い光を湛えて、私の表情をうかがっている。

「実は、その」私は、咄嗟に適当な嘘が思いつかないまま、本当のことを言うより仕方がないと思った。

「支給通知を受取った翌日、アパートを出たんです」

「へえ、なぜ？」

「理由って、別に」

「理由もなく急に――変だわね」

唇の端に奇妙な薄笑いを浮かべた杉原の顔を見た時（この男は、何か知ってるんじゃないかろうか）私は不意に、そう思った。

「それで、いまどこに？」

「新宿の方です」

「新宿の方って、どこ？」

「適当な部屋が見つかるまでと思って、旭町の……」

「ああ、ドヤに居るの」

杉原の顔が、はっきりした侮蔑の表情に変わるのを私は見た。彼は椅子の上にゆっくりとそり返り、煙草に火を点けた。そのままの位置から、彼の眼は哀れむように、私を見下ろすのだ。

「まあ、それは兎も角だ。困ったわね」

杉原は、私の保険証を掌で弄びながら、「あんたは、すでに此の住所に居ない、ということは、この証書は無効、つまりお金をあげるわけにはいかない、ということ」「しかし」私は、狼狽せざるを得なかった。

「お気の毒とは思わ。しかし、規則を破るということは」

杉原は、今や、得意絶頂というところだ。一人の人間を掌の上に置いてゐる優越感が、その貧弱な顔いっばいに拡がり、彼を雄弁にした。

「現状では、あんたは法を犯したことになるよ。現に住んで居ない住所を記入した証書で、あんたはお金を貰いに來た。偶然、このはがきが戻つて來なかつたら、不正にお金が支払われてしまったかも知れない。そこで」

「どうしたらいいと言ふんです」

私の声も、我知らず昂ぶつていた。金が貰えないことが判つたら、こんな男の演説を聞いている理由はない。

「まず、住所が変わつたら住所変更の届けをして、それから、その新住所で登録をし直さなければならぬけれど、この場合、住所というのは定住の場所のこと、ドヤ住まいは、一種の住所不定と見做されるのよ。住所不定者というのは」

「もう結構」

私は、杉原の言葉を遮つて、立ち上つた。これ以上、この狐の顔を見ていることに、我慢出来なくなつた。

「ま、待ちなさい」

可笑しいほど周章てて杉原も腰を上げた。

「だから、新しい住所が」

彼の顔から薄笑いが消え、懸命に私を引き止めようとした。彼は、優越感を中断されたことで、いささかペースを乱したらしい。私が泣きつくか、彼の力に縋る態度に出ることを多分、杉原は期待していたのだろう。ちょっとした形勢逆転だ。

「何も、ぼくは」

「もういいんだ」

泳ぐように前へ出て來た杉原の手を、私は手荒く振り払つた。

「そう」

彼は奇妙に調子が変わつた声を出すと、再び先刻までの薄笑いを再現しようとしたらしいが、今度はうまくいかなかった。自分の意図が根底から覆され、心の余裕を失つたいまは、それは泣き顔のように唇を醜く歪めたに過ぎなかつた。だがこの男は、今まで隠していた切札を出すのを忘れなかつた。

「でも、知ってるんだよ。アパートを追い出された理由は」

その声はしかし、咽喉の奥に引っかかつて悲鳴を上げているような敗者の声だった。

出口で、私が何気なく振り向くと、杉原は一通の封書を、そのひきつった顔の前で、子供がするようにひらひらさせていた。

私は、歩きながら幾度も唾を吐いた。いくら吐いても、胸のむかつきは癒らなかつた。私はどうして、あの男を殴らなかつたのだらう。どうせ、就職の道は絶たれたのだ。思い切り杉原を殴り倒してでもいれば、この胸だけでもすっきりしたと思う。私は唾を吐き吐き、目的もなく歩いた。

何れにせよ私には、現在ポケットにある若干の金しか残されていない。このままでは、あのドヤにさえ、あと何日居られるか。ちきしょう。私はポケットの中の僅かな紙幣を握つて、夕暮の街を駆け出していた。買物籠を提げた女たちの黄色いお喋り、チンドン屋のサククス、泣いている子供、向こう見ずなオートバイの爆音、うなぎの蒲焼の匂い。そんなものが、車窓の景色のように、私の脇をうしろへ飛んで行った。

夜、私がドヤに帰つた時、ポケットには、一銭の金もなかつた。私は泥酔していた。

「おかえり」

醉眼に、彼の白いかおがぼうつと写つた。「おそかつたね。ごきげんじゃないか」

彼はにっこり笑ったようだ。そして彼の手が、介抱するような仕草で肩にかかった時、私は力まかせに彼の胸を突き飛ばしていた。

「呀っ」

と叫んで彼は背後の壁にぶつかり、その振動で、天井からざらざらと埃が降って来た。

「どうしたの。え、どうしたの」

蒼ざめた彼の顔が、再び私の視界に拡大された時、私の掌は、その頬へ烈しい響きを立てた。彼はもう一度叫んで仰向けにひっくり返った。彼の半面は真赤になり、唇が切れて鮮かな血の糸が一筋流れ出すのを私は見た。だが、片手で頬を押えて私を見上げた彼の貌には、何か照れたような、微かな笑みさえ浮かんでいた。

彼は、よろよろと立ち上った。

「何か、気に入らないことがあったんだね。聞かせてほしいな」

平常と少しも変らない声で彼がそう言った時、彼の頬には小さな笑窪が出来、血をしたたらしたままの唇には、何時も彼が見せる媚がただよっていた。それを見ると、私は更に全身が熱くなった。三度目の、こんどは拳が彼の顔に鈍い音で炸裂した。彼の小柄な身体は、殆ど一回転してぶっ倒れた。鼻血が恐ろ

しい勢いで噴き出し、彼の顔全体を天狗の面のように染めたばかりか、畳の上にも壁にも飛び散った。返り血を浴びた私の拳に、火のような痺れが来た。

今度は、彼は起き上ろうとはしなかった。一直線に、静かに伸びていた。私はかがんで彼の顔をのぞいた。そして、呼吸を呑んだ。顔中を染めた真紅な血の中から、彼の両眼ははっきりと見ひらかれ、しかもその瞳は、優しい潤いを帯びて、凝然と私を見詰めていたのだ。

この狂気じみた衝動が、どこから来たのか私自身にも解らない。ともかく私は、今夜、彼の顔を見た途端、突如として兇暴な血に馳られたのだ。

いつも相手を誘うような潤んだ瞳、長い黒い睫、絶えず含羞んだような微笑を浮かべた朱い唇、それらを含めて彼の全身で無意識に計算された完璧な媚び——だが、それらは、その裏に隠された恐るべき強引さ、図太さ、専横さ、残虐さなどを甘くくるんだオブラートに過ぎない。表面の優しさとは反対に、彼の中にはいつ如何なる場合でも、相手を自分の思い通りの支配下に置かずにはいない一種の暴力が潜んでいるのだ。

彼の美しい仮面の下にあるのは、独裁者であり、専制君主である。

こうした徹底したエゴイズムをその下に隠した『虫のいい』顔——それを目前にした時私は逆上したのだ。その厚顔、恥知らずの仮面を、滅茶滅茶にぶち壊してやりたい衝動に動けなくなったのだ。しかし、血に染まり、四肢がうとはしなかった。

私は、更に追討ちをかけた。動けない彼の胸倉を掴むと、続けざまに力一杯の平手打ちを食わせた。私は、狂っていたのかも知れない。ついには、彼も私も血みどろになった。彼の頭はでくのように、がくんがくんと抵抗を失って、ただ咽喉の奥で、声にならない音を断続させていた。

(俺は、貴様の思い通りにはならないぞ)

私は、心の中で繰返しそう叫びながら、彼を殴り続けていたが、ふと、疎然となって、手を止めた。不意に、私の胸をかすめるものがあった。

(馬鹿、そんなことをして何になる。そんな行為そのものが、彼の支配下にある証拠だ) そういう声が、私の耳許でした。

(お前は所詮、どんなに足掻いても、この男

の奴隷、いや敢えて道具といおうか。それから脱け出すことは出来ないのだ」

声は、更に嘲笑した。

「畜生」

私は、叫んだ。そして、その声に挑戦するように、自分の狂気に拍車をかけた。

しかし、私の狂気が奔騰すればするほど、一層、私自身が彼の道具としての完全さを備えるのだという事実が気がつかなかった。私は、彼の計算通りに動く、哀れにも滑稽なゼンマイ人形だった。

荒れ狂う嵐の下で木の葉のように反転し、叫び、呻きながら、彼は奥深い身体の一カ所に静かな無風地帯を作り、そこで処方箋通りの官能を煮つめていたのだ。

その夜も結局、私は、彼の手なれた道具に過ぎなかった。

翌朝、私が目を覚ますと、彼の姿はなかった。彼の唯一の所持品であるズックの鞆も、同時に失くなっていた。

彼は、去った。

(7)

彼は、帰って来なかった。

私は、軽い後悔を感じはした。が、彼がま

た戻って来ることを疑わなかった。彼はもはや私から離れられまい、という奇妙な確信みたいなものがあつたからだ。

何よりも先ず職探しが、私にとっては差し迫った問題だった。失業保険の道も断たれた以上、どんなことをしても食って行かなければならない。当分は、まともな仕事でなくていい、と覚悟はしたものの、それすら簡単には見つからなかった。

足を鉛のように重くした私は、やっと路上の電柱に貼ったビラを頼りに、場末の映画館に雇われた。仕事はフィルム運びと、写真替りのビラ貼りだった。

「自転車はないんですか」

フィルム運びは同じ区間の系列館へ、一日に三回、都電で三丁場の距離を徒歩で往復しなければならぬ。ビラ貼りにしても、誘客範囲はかなり広い。その地域を、糊とビラの束を抱えて歩くのは肉体的にも相当の重労働だった。

「そのうち買うさ。当分、辛抱してくれ」

館主は、不機嫌にそう言ったきりだった。

私の前に居たフィルム運びが、自転車もろとも姿を消してしまった直後ということ、館主はそれでも人間不信にとりつかれ

ていた。

(いまだき、すんなりありつけた仕事だ。こんなことだろうと思った)

私はうんざりしたが、贅沢が言えるほどの余裕など、現在の私には無論ない。ともあれ何とか食い繋ぐことは出来た。私は、映画館の近くにある駄菓子屋の二階を借りた。老夫婦二人きりの生活で、子供相手の駄菓子は婆さんが商い、爺さんは私と同じ映画館で中売りをしていた。

映画館の従業員は映写技師が一人、切符売りともぎりの娘が二人、それに私を含めて四人しか居なかったが、一日せいぜい百五、六十人の入場客を扱うには充分な構成だった。映写技師のHは二十三か四の若い男だったが他の三人とははっきり区別された待遇を受けていた。彼は謂わば映画館にとって最も重要な技術者だ。俺とお前たちは同列ではないという意識が、年上の私を『川瀬君』と呼ぶHの態度に歴然とあらわれていた。だから、開閉館時の雑務は二人の娘と私の仕事で、その間Hは、口笛を吹いたり、雑誌を読んだりしていた。

映画がはねたあと、看板をしまったり、客席の整理を済ませて私が自室へ帰るのは、毎

晩十時半を過ぎていた。駄菓子屋の裏口からとつくに寝入った老夫婦の脇を通り抜けて、ぎしぎし軋む狭い梯子段を上ると、あの新宿のドヤより更に粗末な三畳の、腐りかけた畳が疲れた私を待っていた。私は下着だけになると、崩れるように万年床に倒れ込むのだ。

曲りなりにも職が見つかり、どうやら生活の目鼻がついた時、私が真先に思い出したのは、彼のことである。無論、それまでも忘れていたわけではないが、旭町のドヤには新住居をことづけて来たことでもあり、彼が戻れば、当然此処へ訪ねて来るはずなのに、ひと

月経っても、ふた月待っても、全く音沙汰なしということが、私に一種の自信喪失に似た不安と焦燥を掻き立てさせた。こんな筈はないという自信が、日が経つにつれて意気地なく崩壊し隙間風のような寂寥のなかで、彼のことを考える時間が多くなった。さらに日中フィルムを担いで同じ道程を往復するだけの単調な仕事で、それを一層強めた。夜ともなると、なおひどかった。やり切れない孤独が私の血を、水銀のように重くした。

湿っぽい万年床にくるまって横になると、彼が其処に居ない空虚さが胸の中を冷たく吹き抜けた。彼と共に、転々と住居を換えなが

ら過ごした三年余の生活が、感傷のフィルタ―をかけて、私の脳裏に鮮かなスクリーンを展開した。これまで考えてもみなかったが、彼との生活の記憶を念入りに辿っても、彼が私の視界に居なかった日を想い起こすことは出来ない。多分、一晩も彼と別々に過ごしたことはなかったのだ。自分たちこそこの世で最高の幸福を掴んだと確信する男女の夫婦生活でも、彼らの親密の時間を、私たち以上に持つことは恐らく不可能ではなかったか。

黒い長い睫をもった潤んだ瞳、金色の産毛に覆われたロースを思わせる丸い肉——それがダブって、オブジェのような幻影が、私の頭を熱くした。(逢いたい)重苦しく灼けた焦燥が眠りを妨げ、輾々して朝を迎える日が続いた。寝不足が私の貌まで変えたらしい。「川瀬さん。このごろ、変——」

私の陰湿な変化をめざとく見つけたのは、もぎりの富江だった。

「口きかなくなつて、笑わなくなつて、考え込んで……」

彼女は的確に私の症状を指摘してから、不自然に浮わついた声でいった。

「わかった。振られたんでしょ」

富江のむくんだように膨れた顔が、奇妙な

皺を作つて崩れるのを、私は無感動に見ていた。十七か八だろう。同じ年頃でも、切符売り場のA子は目鼻だちの整った、十人並の娘だが——と、私が二人を比較して考えるずっと以前から、もうA子はHのものになつていたのだ。この若い色事師さえ食指を動かさなかつた富江の、五尺に満たないゴム毬みたいな丸いからだ、浅黒い顔にせわしく瞬く小さな目が、全身で私を見上げていた。その鳥を連想させる両眼を見詰めているうち、不意に、私の中に、彼女に対するいとしさが湧いて来た。それは、不思議な感傷みたいなものだったろう。

「おれにはね」私の声は、自分でも信じられないくらい優しかった。「そんな相手は、もともと居ないのさ。淋しい人間なんだよ、おれは」

「あら」

富江の顔が一瞬、上気したように染まるのを私は見た。赤茶けた髪の毛に包まれた単純な脳の組織までむきだしにしたような彼女の眼が、私の胸を熱くした。

その時、アベックの客が入って来た。

「いらっしゃあい」

富江は何時になく弾んだ声で、二枚の切符

を重ねて千切った。

「ああいうひとが……」

十代と思われる少女の腰に手を回した青年の後姿を見送って、私はいった。

「富江ちゃんにも、居るんだろ」

軽い冗談のつもりだった私は、彼女のあまり極端な反応に驚いた。「いや」と叫ぶと、富江の表情は奇妙に歪んだ。それは、泣き顔のように醜かった。次の瞬間、その顔を両手で覆って、くると背を向けた。

「ほら、お客さんだよ」

私は富江の背に声をかけて、其の場を離れながら、それまで胸の中に塊を作っていた熱い重苦しさが、僅かずつ、ほぐれてゆくのを感じていた。

閉館後、客席の整理をしていた私の側へ、箒を持った富江が近づいて来て、独り言のようにつづった。

「A山公園へ、行ってみようかしら」

「これから？ 何しに」

「盆踊り」

A山公園は、映画街とは目と鼻のところにある。彼女の瞳に、私は無言の誘いを感じ取っていた。

「だが、もう十時過ぎだ」

「まだ、やってると思うけど」

彼女は、じいっと耳を澄ます表情になり、

「ほら、聞こえる、太鼓の音——」

「そうかな」

私には聞こえなかった。しかし、或いは聞こえても不思議はない距離だ、とも思った。

「じゃ、おれも行ってみるか」

何となく私が言うのと、

「ほんと」

しごく真剣な丸い顔が、半信半疑で見上げて来た。そして、何を思ったか、

「意地悪」

と叫ぶと、そのまま跳ねるように富江は箒を動かした。彼女のこんな生き生きとした動作を、私は見たことがなかった。

桜の名所として古くから知られているA山公園は、山の半分を楕円形に削ってグラウンドになっている。そのグラウンドの中央に仮設された櫓には、まだ華やかに灯が点っていたが、踊りはたった今終わったばかりと見え、浴衣や軽装の男女が三々五々散って行くところだった。

「おれの言った通りだろう」

殆ど走るようにやって来た富江だが、しかし、さほど失望した様子ではなかった。

「少し散歩したいわ。折角来たんだから」

彼女は、低くつぶやいた。

二人はグラウンドを横切り、山の石段を昇った。山の上は、今まで盆踊りが行なわれていたグラウンドとは対照的に、静かな闇に桜の木立が黒々と影絵を描き、生い繁った雑草に虫が鳴いていた。ところどころに常夜燈が淡い光を投げていたが、その光芒が届かないベンチには、盆踊りとは全く関係のない男女が思い思いに身を寄せ合っていた。「あら」とか「いやだわ」とか、そうしたアベックの姿態を目にする度に、富江は口の中で呟いていたが、何時の間にか、その丸く肉づきのいい腕が、ぎこちなく私の腕に絡んでいた。

闇に眼が馴れるに従って、思っていたより数多いベンチと、そこに陣取ったアベックの影が二人の視界に次々と現われて来た。彼等は、同類という気易さからだろう。私たちが近づいても、一向にそれぞれのポーズを崩さずとしなない。手を取り合って囁き合い、顔と顔をぴったりとつけて虫の音に耳を傾け、あるいは声もなく抱擁に我を忘れている若い男女の群——まして他人の視線や常夜燈の光が届かない場所では、もっときわどい構図さえ展開されているだろうことも、容易に想像で

きた。

「盛況だね」

私が言うのと、

「いや」

富江は咽喉が詰ったようなかすれた声をあげて、絡んだ腕に力をこめて来た。

彼女は、懸命に正面だけを見て歩こうと努力しているらしかったが、それとは反対の力が彼女の視線を落着かないものにしていて、視界に入るものは、どんな細かいことも見逃すまいとするように、超人的な素速さで彼女の眼は、ベンチからベンチを一瞬に観察し、何食わぬ顔で正面へ戻って来る。

富江の足が、だんだん遅くなった。私の腕

に絡んだ丸い腕の内側がじっとりと汗ばみ、彼女の重心が次第に私の方へ傾いて来るのを感じた。

「休もうか」

私は、彼女の顔を見ないで言った。

その時は、殆ど富江の、体重の全量と思われるずっしりした重味が、湿っぽく私の側面にかかり、微かな乳房の喘ぎが、私の肘の辺りに伝わって来た。

彼女が答える代りに、忍びやかな音を立てて唾を嚥み下すのを、私は見逃さなかった。

無言で、私は立ち止った。この唐突な行為に、富江はびくっとしたように、顔を振り上げた。瞬間、私は、量感のある彼女の丸い腰

を右腕に抱えて、強く引き寄せた。

彼女は低い叫びをあげかけたが、その唇を私の唇が塞いだ。炎のような鼻息を私の顔へ吹きつけ、彼女はやみくもにもがいた。私の腕の中で、彼女の丸い全身が窮屈な踊りをしているようであった。その癖、彼女の両脇は貝殻みたいに固く閉じたままだ。

私の腕の中で、次第に彼女の抵抗が弱まった。と、私の舌端は極く自然に彼女の唇を押し開き、小刻みに震えている前歯を割って行った。彼女は一瞬、しんと身を固くしたが突然、強く私を抱いて来た。互の歯がかちかちと音を立てた。私は彼女の唇を吸い上げながら、恰で苦痛にでも堪えているように充血し、醜く歪んだ富江の顔を凝視していた。

唇を離れた時、私の口の中に、不快にべとつく富江の唾液と、虫歯のにおいが残った。進一の唇を吸った時のあの不思議な爽かさ、芳しい清涼感とは似ても似つかない後味が、白々しく私の血をさました。

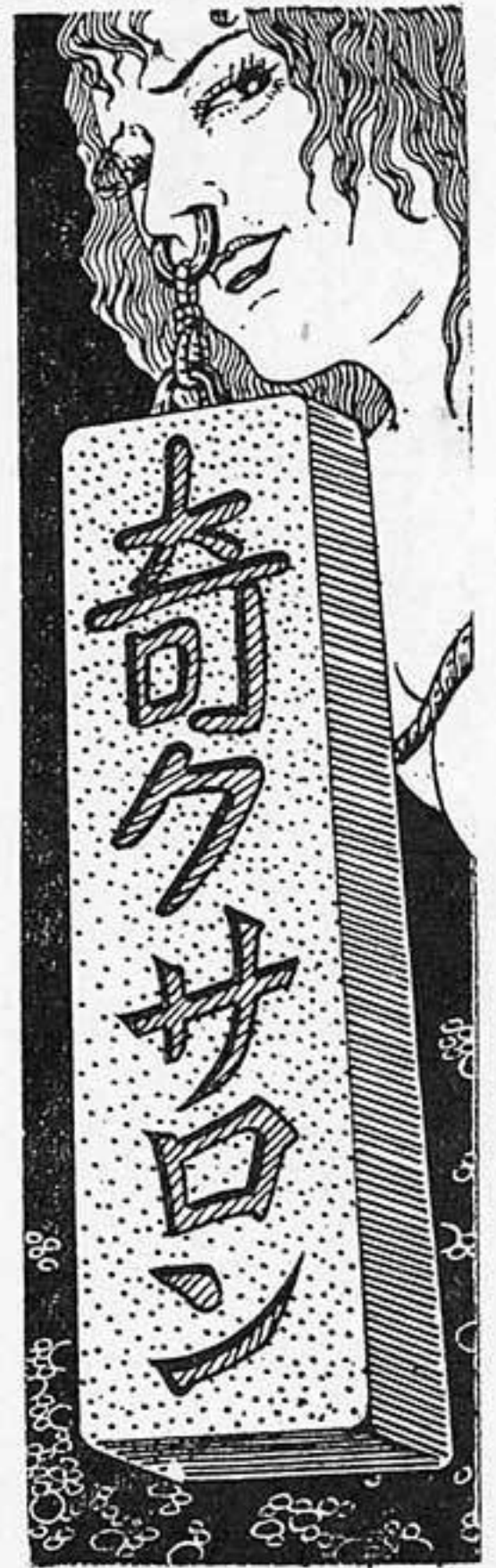
私は、急に不機嫌になり、全く放心のまま私の胸に熱い顔を埋めている富江を、邪慳に突き離れた。

櫓の灯も、何時の間にか消えていた。

〔伝言板〕

○分譲品総目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申し上げます。今暫くお待ち下さるようお願いいたします。尚 フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛願います。○御送金は、現金書留、小為替、定額小為替、切手代用、振替にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留（封筒は郵便局で売っています）にて御送金下さい。○既

刊の臨時増刊号〈花と蛇〉第一回分（前篇写真と絵画特集）第二回分（続篇小説絵画特集）第三回分（前篇続篇収録小説特集）のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してありましても最近号に掲載していないものは在庫のないものがありますので、旧号に依ってのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社へ願います。



団鬼六先生へ珠江夫人への羞恥責の序曲として私案を捧げます。

珠江夫人の登場の予告を読んだとき、私の初恋の女性である乱歩の『妖虫』のヒロイン相川珠子の名に似ているのでドキッとした。私の聞くところでは珠江夫人は医博との新婚早々で博士の腕に加えて新夫人の美貌とやさしさにより、医院は最近急に繁昌し特に夫人は患者たちから観音様のように渴仰されているとのことだ。

さて、その近くに住むヤクザな医者があり、彼は内科婦人科を業としますが前に患者にイタズラをしかけて問題を起こした様な人物です。そして長く使っていた看護婦（彼女によってやっと医院の面目を保っていた）まで珠江夫妻の医院にひきぬかれ、借財に首もまわらなくなり酒場で安酒をあふる毎日を送っていました。たまたま美沙江の宿所である珠江美人の医

院を偵察にきた川田達とその酒場で会って意気投合し、今度の誘拐の計画に参加して珠江夫人に恨みを晴らそうとするのでした。

美沙江と珠江夫人の誘拐に成功した川田達は、二人を別々に監禁し終ると酒場に集って祝盃をあげます。そのとき関西の岩崎親分が急に再上京してくるとのニュースが入ります。前回に味をしめて再び美女の饗応にあずかるうというのです。彼はそのおかえしに関西関東合同の大賭場を開くことを許可します。川田の意見で今夜は先ず珠江夫人を抱かせ、最後の夜は美沙江の処女を提供することになります。

夕方、岩崎が到着し打合せのあと入浴します。川田は珠江夫人のところへ来て、今回の誘拐は美沙

江一人が目的だったのに夫人が巻添えをくって気の毒だから、岩崎の背を流してくれば直ぐ帰してやると偽ります。風呂場の脱衣所に連れ込まれた夫人にズベ公達もついてきて、夫人の白足袋を脱がせ二の腕や湯文字を必要以上に露出させて支度をしてやります。

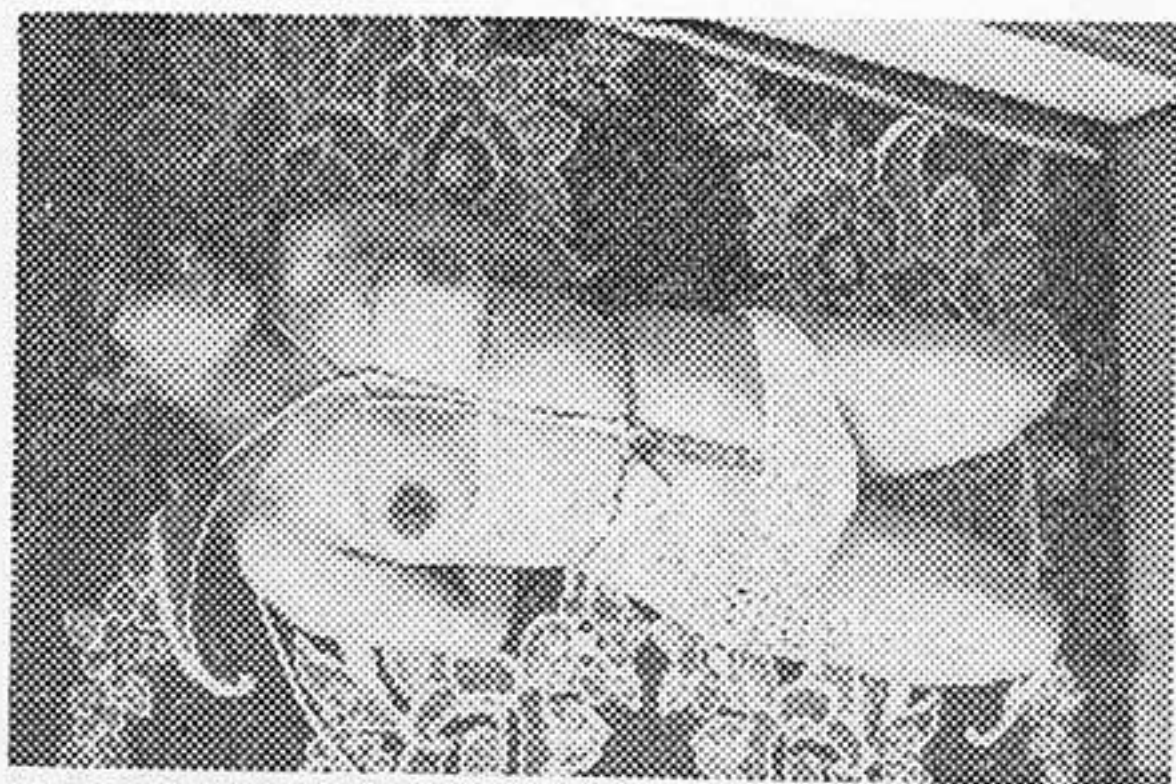
たよりない風情でこわごわ風呂の敷居をまたいで入ってきた夫人を見て、湯につかっていた岩崎はいよいよ天女の御入来とばかり目を細めます。そしてやおら立ち上り湯舟から出て洗場にドッカー腰をすえ夫人に背を向けます。そしてオズオズと手拭を動かしはじめた夫人に、「もっと強く」とか、「ケツも洗え」とか命じます。

馴れない仕事にハッハッという夫人の可愛い息づかいを背後に快く聞きながら「奥さん、裸になっ

になって岩崎の伸ばした左腕を洗いはじめます。見れば夫人の美しい顔にも、はだけた胸にも腋まで露出した二の腕にも汗が玉の滴となつて流れています。外から見えない体の他の部分もグッショリ濡れてしまっていることを想像して岩崎は悦に入ります。そして、まだ調教を受けていない珠江夫人は今夜、あの静子夫人にない初々しい抵抗を示すであろうことを夢想して、この場に押し倒してしまいたい衝動にかられます。

じつと我慢した岩崎は悪戯心を起こし伸ばした腕をグッと動かすと夫人はよろめき膝が割れてフクイクとした体臭がたちこめます。遂に夫人はかすかな声で「もうカンニンして。気分が悪くなつてしまいましたので……」と許しを乞います。岩崎は承知したような顔をして夫人を安心させ、やにわに利腕の手首をつかむと押し倒し夫人の右の足首をつかんで持ち上げます。アッと叫んで夫人が思わずあらがうと岩崎は故意によりけて頭を湯舟のへりにぶつけて大げさな悲鳴をあげます。それを聞きつけた川田がかねての手筈通り駆けつけオロオロと立ちすくむ夫人をとりおさえてしまふのでした。

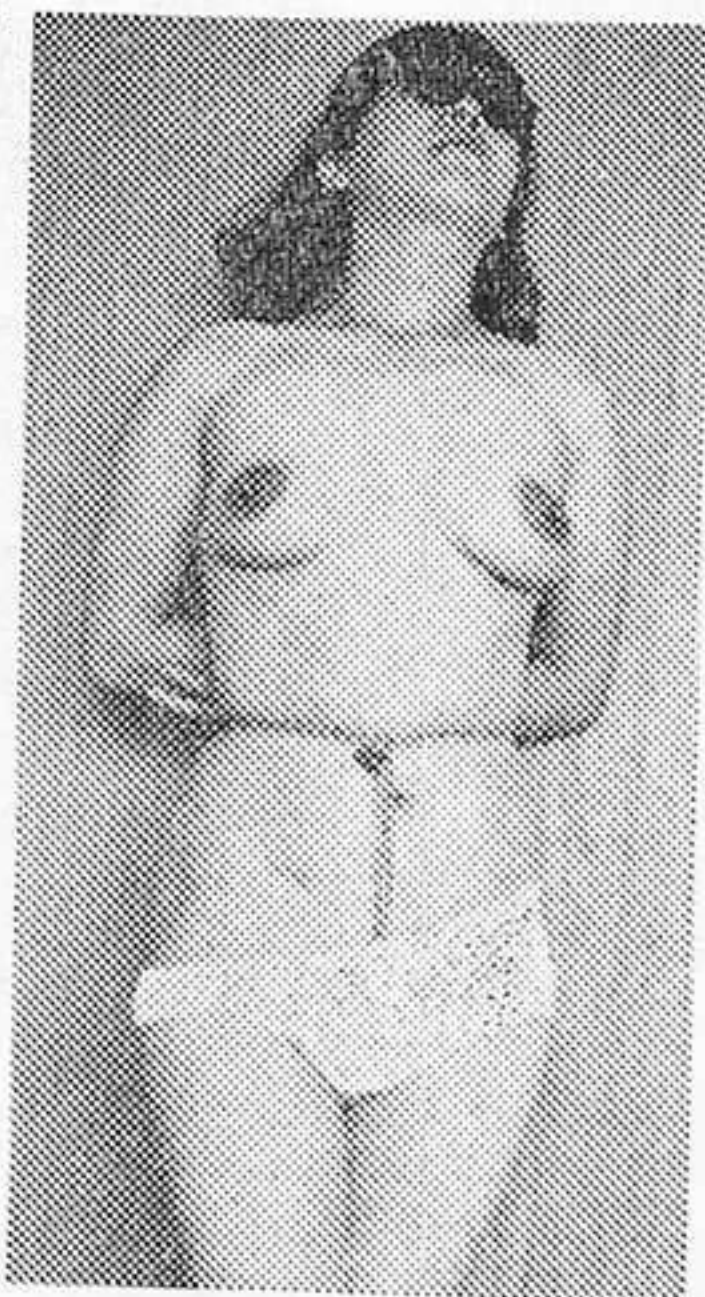
珠江夫人羞恥責私案 東山 大作



私は大阪に住む愛読者です。誌上で、皆様のプレイのようを知ることにつけ、深く抑圧している告白の衝動が、胸底に充満してきて爆

私たちの—— ——プレイ

橋本二郎



発しそうになったことが、何度あったことでしょうか。

結婚生活六年目の私たち二人は今、性愛の快楽の深みに驚きながら、あくことのない欲望に燃えています。かつての「妻を縛らせるの記」〈風流極道軒氏〉を読ませてもらったとき、私は自分の心をそこにハッキリ見る思いがしたのです。

私たちもまた、二人のSMプレイの一端を誌上を通じ皆様にお知らせして、交歓をしたいと思うのですが、私が妻、八重子のM性を発見し、飼育訓練を実施しはじめてからは二年ぐらいです。

その間に剃毛五回。自宅内では回復期間のパンティ禁止、鎖のT字帯着用というプレイが、大きな特徴だと思っています。

鎖による心理的な羞恥責めが目

的で、他意はありません。小さな南京錠が意外に被虐感高揚に効果的ですが、日常のことには、特別の支障はきたさないようです。

下着禁止は、せっかくのT字帯が見えないからというばかりではなく、鎖が早く錆るのを防ぐためです。

T字帯の長さは二メートルで、ふんどしの要領で着用させますが、妻も被虐感が味わえるらしく、外してくれとはいいません。

このT字帯の上からきびしく縛り、よく外出します。全身に縄がけした上で、私のコートを着せて深夜映画を見に出掛けることもあります。

私の訓練

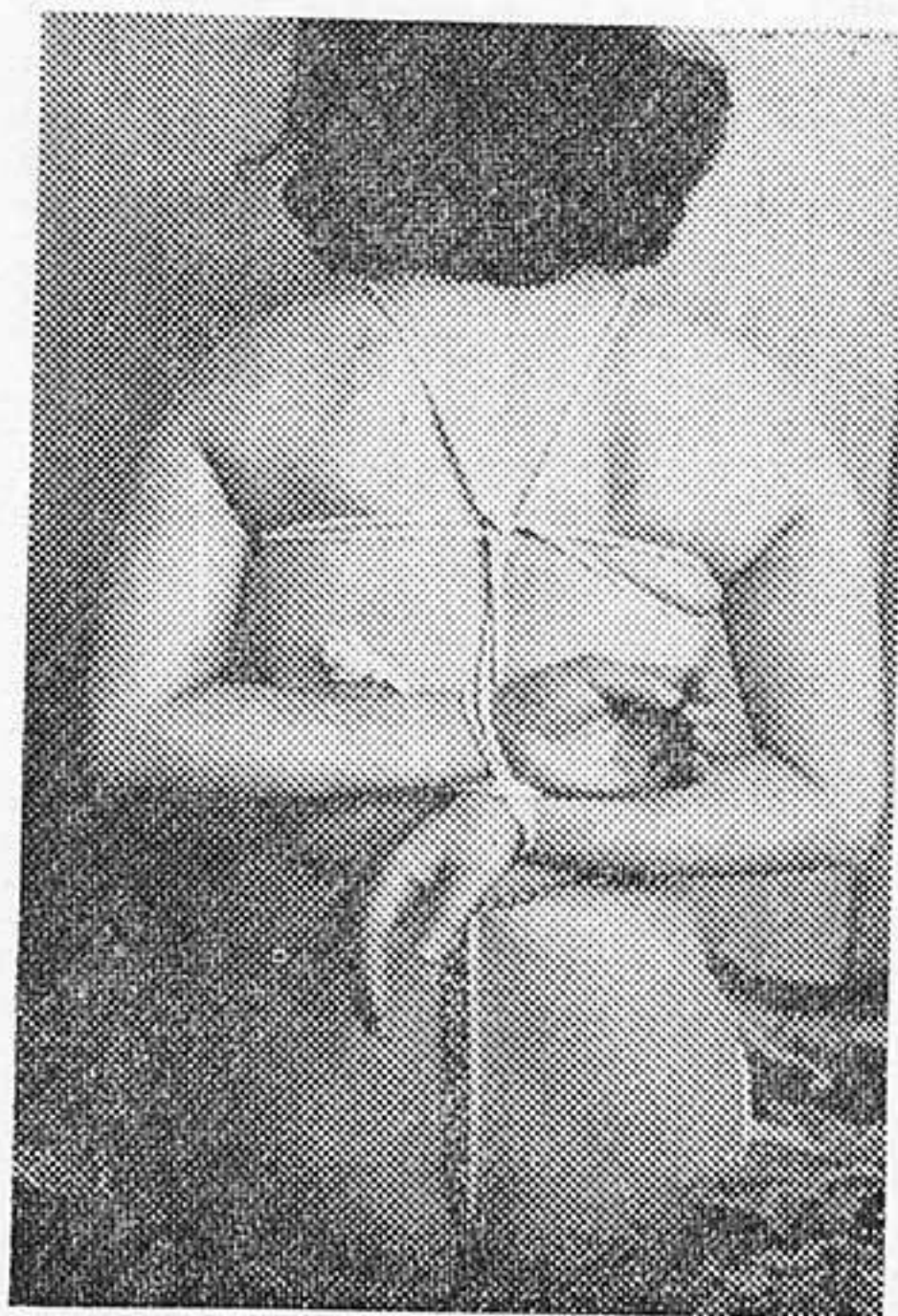
ぶりがいいのか、妻のM性が増大したのかはわかりませんが、全身緊縛で外出すること妻はそれほどいやがりません。た

だタクシーの車内などで、わざと大胆な足の組み方を要求してやると、とても恥ずかしそうに、おずおずとします。

そんな時のふるまいは、本当に可愛い。

妻も近頃は、自ら緊縛を要求したり、縛られ方に注文を出したりするほどになりましたし、冗談めかしてはいますが、複数プレイを期待しているようです。

同好の皆様とプレイ写真の交換などでも、できるものならお願いしたいと思いますが、どうでしょうか。田宮御夫妻、風流軒御夫妻など、誌上の諸先輩の皆様のご多幸を祈り、またお便り致します。





(第六十三回)

辻村 隆

昭和三十九年の五月号に「楽我記」第一回を奇クサロン欄に書き始めてから、毎月一回も欠かさず五年以上、経過してしまつた。

恰度「奇譚三十九夜物語」の執筆中に、カメラ・ハントのハシリのような物語をのせ出した頃のように、なものを書き出したのがそのキツカケである。気が向けば断片的に書き綴る筈が、調子にのって皆勤になり、仲間からもそれだけよくネタがあるねえなどと、感心したりアキレたりされる。我ながら根気のいい事である。「楽我記」の前身が「話の屑簞」で、これは昭和三十一年の、復刊第三号の四月号から始めて、昭和三十五年の一月号まで、つづいた。「話の屑簞」「楽我記」に登場したモデル嬢、同好諸氏は百人以上にものぼるだろうか。去る者は日々に疎しの例え通り、その後全然音沙汰の

ない人もいるし、十数年交友の続いている人もいる。フランスの名画「舞踏会の手帖」ではないが、旧知を辿って輪廻の糸を遍歴して見たい気も、しきりである。かつて紅顔の美青年？ だった私が、もう来年は五十の初老を迎えようとしている。曙書房時代長女を抱いて堺市の編集部を訪れ帰りがけ、堺大浜の海岸でヨチヨチ歩き、長女に水遊びさせたのに、その娘がこの九月に結婚するのだから、うたた感慨無量もむべなるかな。

× × ×
理髪店の娘、小池美喜が同僚を紹介するといふので、ハントの可否は別として松山真樹子と三人で食事する。それとなくプレイをほめかしたが、SMに全然ケのない大柄の娘で、何か私を懼れている様子なので、その夜はあっさりと別れた処、数日後彼女から電話

があつて、小池美喜と一緒にプレイするのが羞かしいから、二人きりで一度会って欲しいということであつた。大いに脈ありで、早速と思ひながら、今もって逢っていない。ミキとマキがレスボスの関係にあることは判つきりしていても対男性が一枚加わるとなると恥かしいらしい。そのウブなところ

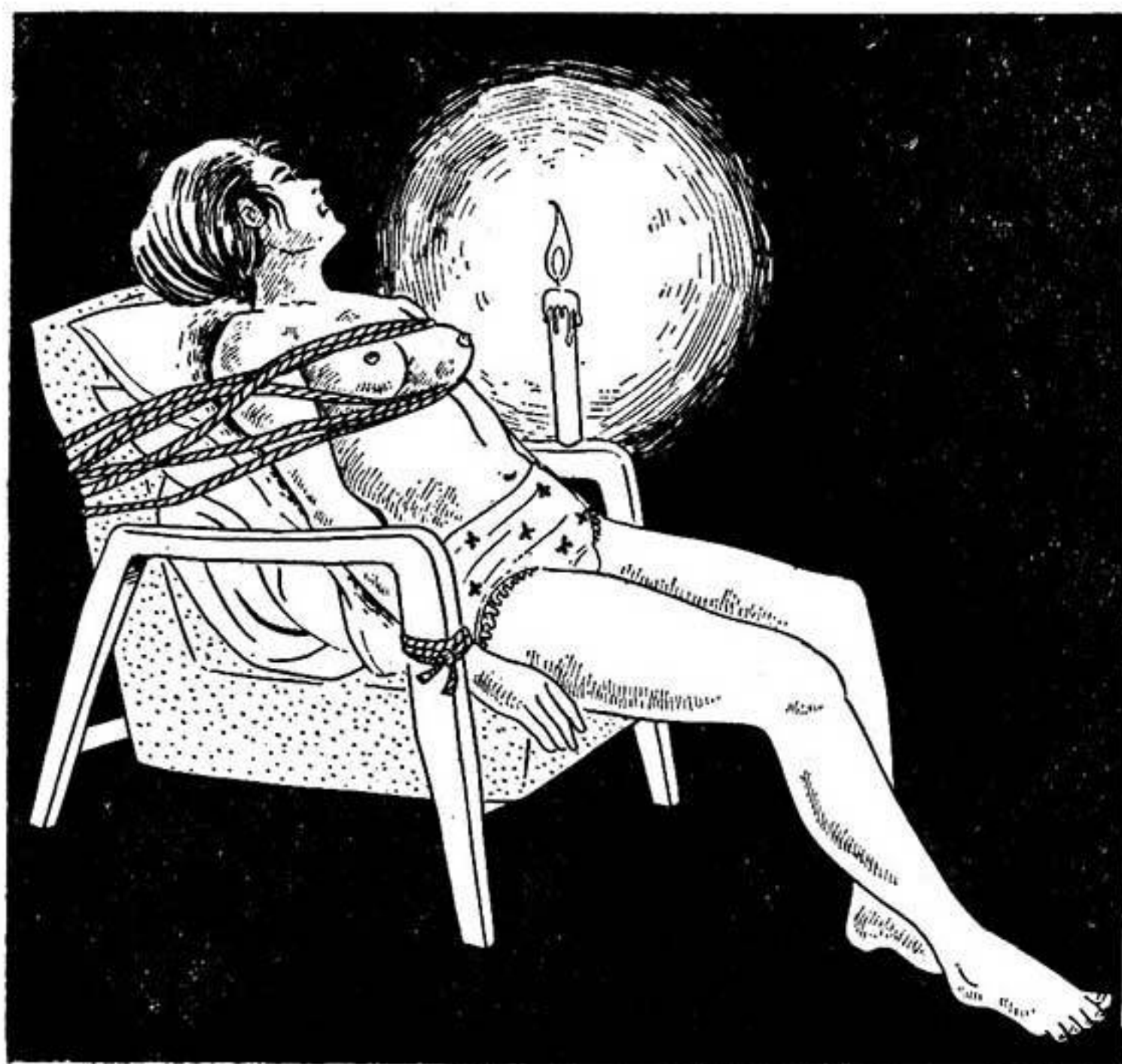
に尚更興味を惹かれ、そのうちそのうちで日が経っている。私の悪いくせで、相手がその気になつて、いることが判つきりすると、つい放つたらかし勝ちになつてしまふのである。

× × ×
谷山久美子もののびのびだし、肥満型中村万里も一度撮ったきりでハント用フォトはなく、川口有里子、金原奈加子、小池美喜、松山真樹子と、多士済々で、さてどれからにしようかと、本職の仕事に追われながら、嬉しい悲鳴をあげている。

を紹介すると、
「貴男に逢つたその日から恋の奴隷になりました
貴男の膝にからみつく
小犬のように
だからいつもそばにおいてネ
邪魔しないから
悪い時はどうぞぶってネ
貴男好みの
女になりたい」

この唄をラジオで始めてきいた時、正直いつて私は、ドキリとした。連想がすぐ、SM的に働くからであろうか。小犬のようにひざにからみついて、悪い時はぶってくれと願ひ、貴男好みの女になりたいと切望しているこの女心を分析したら、Mへの願望そのものでひたすらに男の気に入る女になりたいといういじらしさがよく出てくる。

× × ×
この唄をうたっている奥村チヨが、最近遽かに女らしい色気を漂わせ出して、彼女の周辺を知る同好者の話では、彼女自身「恋の奴隷」になつてゐるらしい様子で、私はテレビでみる奥村チヨの肢態からMを感じとるのであつた。梨花悠紀子の若い頃とそっくりの顔立ちで、かねてから秘かな彼女のファンであつた私は、今「恋の奴



S・コレクション 「しろい涙」 豪 城 二

隷』の一作で、尚更に梨花のイメージとダブリ出し、年甲斐もなく妙な幻想を抱いて、この唄をきいているのである。諸君も一度、じっくりとこの唄をきいてみられては如何？

× × ×
いつかこの欄で一寸触れたこと

のある、伊藤晴雨氏の生涯を網羅した豪華本が、東京のノーベル書房から出版される準備が着々と進められていて、先日同書房の女カメラマンが私宅を訪れてきて、晴雨氏の絵巻物をカメラに撮っていた。よみうりテレビ11PMのディレクター氏の紹介なので、快よ

く協力したが、今度は東京より電話で、晴雨氏の撮ったフォトがあれば全部貸して欲しいという。貸すといっても、私も大切な資料だから全部アルバムに保存してあるのだが、借用証を折返し送るからという程度では、フォトに対する保証は何もない。協力に対して、その本一冊でも贈呈してくれるのかときいたら、どうも口を濁した返事で、バカバカしくなって協力する気になれなくなった。秘蔵のコレクションを貸与して欲しいのなら、やはりそれだけ礼をつくして、東京からでも一度は編集者自身、訪れるのが当然であろうと思う。タダで他人のフンドシで角力をとって、超高価本で売ろうとする、曲学阿世的なやり方が気に喰わない。

× × ×

編集部から（秘）親展で私宛に転送されて来た女性名の手紙に、心躍らせて開披して読んでみると絶対身許確実、安心な奴隷的M男性を紹介して欲しいという便りである。私にあててくるなんて一寸お門違いとも思うが、要約してみると、次の様なことである。
女性 は五十四才で未亡人、お手伝いの婆やさんとの二人暮らしで甲

子園に大きい遺産の邸宅がある。数年前に亡くなった夫は、典型的なMで、夫人自身全然S気がなかったのが、夫の飼育によってS的女性に仕立てられたる由。それが習性になって、現在判っきりSを自認している。

彼女の条件は、三十才から四十才までの、奴隷的献身男性で、週一回（二十四時間）奉仕して欲しいとのこと、報酬は月十万円まで出しますという。

一カ月四回で十万円になるのなら、私もちょい行きたいぐらいのものだが、条件は、かなりむづかしい。御存知、沼正三氏の名作、『家畜人ヤプー』を地地といったようなもので、彼女の御主人が、果たしてそこまで実行したかどうかは大いに疑問である。

意外に真剣らしい手紙だけに、彼女の要求の行為を公開していいかどうか、ちょっと二の足を踏んでいるが、真性M男性にとっては垂涎ものかも知れない。未亡人の年令五十四才が幾分ひっかかるが「三時のあなた」の高峯三枝子さんだってもう五十才近いとなれば案外、結構愉しめるのではなからうか。

—テレビと雑誌に見る—

女性上位時代

麻曾比須人

最近の映画や小説に影響され、お茶の間のテレビにもSやMの傾向が現われてきている。読者の中で見た方もいると思うが、さる六月七日、夜九時、TBS系で放映されたキイハンター「宝の山は地獄の一丁目」は、ちょっと面白かった。

冒頭でコソ泥のアネゴ、ローザー(根岸明美)と子分の野呂(高島稔)が、国宝の黄金仏像が展示されている美術館を狙う場面が、すこぶるM好みであった。窓が高いので、かぎのついた縄を投げ、その縄にローザーがつかまって登ってゆこうという設定。

「バカヤロ、ぼやぼやしないで早く馬になれ」

とローザーが、子分の野呂を叱りとばす。野呂が四つん這いになるとその背中へ、ローザーはハイヒールのまま乗る。さらに首から頭の上まで登って行く。ハイヒールで頭を踏みつけられた苦しそうな野呂の顔のアップ。ローザーはそのまま立てと命じる。立ったとたんに、野呂のズボンのバンドが

切れ、派手な柄の下着が丸出しになる。ハッとして野呂がズボンを直そうとした途端、ローザーは手をすべらして野呂の背中に馬乗りの恰好になってしまう。ミニスカートの馬乗りになったローザーのパンティまで、はっきり映し出され、そのままカメラにおさめたい一瞬であった。そのあともM好みの場面が二、三あったが、それよりもキイハンターの一員である、大川栄子のスラックス姿がよかった。パンティの線までハッキリ見えるキッチリとしたスラックスをはき窃盗団に追われて逃げるのだが、とくに人間が這って歩けるほどのコンクリート管の中へ逃げるところは圧巻だった。カメラアングルがよく、その形のよい臀部が真後ろから眺められた。臀部愛好者にとっては、なかなか見のがせない一瞬だった。

六月九日のTBS系で放映された「お昼であいましょう」の「おんな大学」で、川崎敬三が「女性上位時代」について、スタジオオへ招待した若い女性から意見を聞いた。



イメージ画「獲物」宇都宮 宏

た。「あなたの周囲には、カカア天下と亭主関白のどちらの家庭が多いか」という質問に、全員「カカア天下が多い」と答えていた。川崎敬三が「女性上位時代」でなく「男性下位時代」なることを使っていたのも、何となく興味のあることばであった。

いささか古くて恐縮だが、フジテレビ系の、テレビナイトショウの火曜日(関西テレビ制作)で、「おとなの玩具」を特集したことがあった。その中でブリジッド・バルドーや、マリリン・モンローのプロマイドを表示した缶詰を紹介した。

介した。なかには、その女優の「ある種の気体」がはいっているとのこと。司会のはかま満雄が缶を切って、なかの匂いをかいでいたが、気体でなくて液体だったら、思った人も多かったに違いない。しかし、いくらレッテルに表示してあっても、こればかりは自分自身で確かめた上でなければ信用する気になれないと思う。

「小説宝石」の七月号の、カラーページ、(秘)レポート女類学に興味ある記事が出ていたから紹介しよう。

二十一世紀の女性の地位は、ど



「給料日」

春川ナミオ

イメージ画

これまで変化するかを予想した記事中に「コンセイ・アクセサリー」なるものが登場する。コンセイとは金精機——つまり男性性器をかたちづくったものであるという。

『本物そっくりの形、色を持ったそれを合成樹脂で作らせて、女類』

「何本もベルトからつるすようになる。むろんドレスは「シースルー・ルック」でパンティなんかもはいていないから、女性のすぐそこにそれがぶらぶらする。「あなただけの向こうから三番目のコンセイすごいわね」去年、アフリカ旅行したの？」

の時の記念よ。マウマウ族のものよかったわよ」なんて会話を平気でレディがなさるようになる」

ついで「ハナ輪マン」の話。コンセイ・アクセサリーが、もう少し進歩すると「愛玩マン」を連れて歩くのがはやるという。

「ウウウ」

「おやそう。ヘソクツテないっていうのネ。怪しいものだわ。いいこと、白状するんなら今のうちよ。わかってるんでしょ、うね。今日は給料日だからこそ、こうして特別サービスしてあげてるんよ。素直にいわないんなら、それでもいいのよ。あたいにだって考えがないわけじゃないし、テはあるのよ」

「ウウウ……」

「そんなに首を振るところをみると、本当にこれだけしかないってわけ？」

「ウウウ……」

「そう。そりゃ、お前が毎晩残業して、先月より多くなってるのは認めたげる。でもこれじゃ強盗ごっこが勿体ないくらいだわ。馬責めや、脚締めして欲しいんなら、もっと稼ぐことね」

『美青年は牛のような鼻輪をつけられ、きれいな金の鎖によって引っぱりまわされる。男性の部分には高価なレイなどがかざられ飼主の命令によっていつでもそびえ立たせて見せなければならぬ』

さらに「無重力体位マシン」なる機械が発明される。そのころになると自由に、しかも自力を必要とせず空中で行なえるような機械が現われる。むろん男性は女性のお好み次第に、その機械にとりつけられる部分にすぎない。テキが気のすむまで、徹底的に行なわれ生命の保証はないという。そのあげくに発明されるのが「精巧なるダッチハズバンド」。本物の男はパワー不足で、お払い箱になり、その代りに五十人力の、ダッチハズバンドが登場する。本物そっくりで動きも微妙。そして女性の会話。

「まあ、おたくじゃあ、まだナマの男を使っていらっしゃるの？ あんなもの下手くそで仕方ないでしょ。うちじゃ五年も前からダッチですの。とても使い心地は、およろしいわよ。オホホ……」

ということになるらしい、という、お話。M好みには、なんとも楽しいような二十一世紀の女性の地位である。

私の選評

恍惚の映画

佐藤光雄



新東宝映画が落伍したとき、もうこれからは面白い映画が見られないのではないかと、私は失望したのであった。ところが、新東宝の俳優はテレビや他社へ移って、にわかに脚光を浴びて人気スターとなり、映画の方は「大蔵映画」として、より面白い映画が製作されていくことは、誠に同慶の至りである。これまでに私が見た中で責める映画として面白かったものを拾い上げてみると、

「女の防波堤」敗戦となって占領軍が進駐するところから始まり、主役の小島絹子が友達の荒川さつきを鳩小屋へ訪ねていく。そこで働く気はないかと誘われるが「こんな汚い所で働けますか」と痰呷を切って帰ろうとすると、そこで働いているパン助が四、五人、小島絹子を打倒し大勢で彼女を踏みつける。つぎに仲間を裏切ろうとした三原葉子が黒いショーツとブラジャーのまま横浜の地下室で仲間から責められている。一打ちごとに足が宙を蹴って、高いハイヒールをはいた女達が交互に、ゴムの鞭を振りかぶって、這いずり廻る彼女を責めたてる。カメラがうまくグラマーの肢体のあがきをとらえていて、ぞくぞくする映画である。ヒップを打たれると、ちょうど駿河責めのように両足を揃えて蹴り上げ、バタバタさせるところなど最高。惜しいのは網タイツとハイヒールをはいていなかったことだ。このあとで、小島絹子が三原葉子を助けて二人が支那服の

まま脱走し、ボスに追いかけられる所がある。私はここで、捕えられた二人が手錠をかけられ、自動車に引かれて無理矢理に走らされるところがあったらよかったと思う。支那服の裾から太股がチラチラして、その上、大きな乳房が大きく上下に揺れるところなど面白かろう。この映画の面白味は、女が女を責めるところにある。

「バラと拳銃王」これも主役は小島絹子だが、幼い頃の父母の仇を討とうと、ナイトクラブへ乗り込む。荒川さつきが、彼女に秘密を洩らしているのを見つけられ、地下室へ連行される。ここで彼女はゴム管ムチで豊満な肉体へ目もあてられぬほどのリンチを受ける。このあと、小島絹子の正体がバレて地下へ閉じこめられるが、うまく逃れる。ここで二人を木馬に背中合わせに縛って、両足に重りを吊り下げ、顔をゆがめて玉の汗を流す所が欲しかった。ハイヒールをはいて、ストッキングをガーターで吊り上げた両足を映せば、より一層、責めが強く感じたと思う。「スパイと貞操」とにかく、新東宝の女優はグラマーが多く、しかも責められるのは順番になっていくらしい。この映画では戦時中、スパイがいると感じた憲兵は、不意に軍の仕事をしている女性の服装検査をする。くすぐったいのと恥ずかしいのとで抵抗する女性を「これは何だ。小娘のくせによく肉がついとるな」などといって乳房をもんだり、モンペのポケットの破れているのを幸いと、手をつっこんだりするところがあってもよかったと思う。とうとうグラマーの万里昌代が憲兵につかまり、シユミーズ一枚で天井から吊るされ、黒髪を引っぱって美しい鼻を上に向かせ責め立てられる。そして割れ竹で彼女をピシピシと打ちすえ、水をぶっかけたりする所があったが、万里昌代が、もっと搾り声をあげて、息も絶え絶えに、すすり泣くところや、腰から下をもっとよじって、あがくところが欲しかった。憲兵隊の拷問だからもっと、むごいところがあってもよいと思う。

「女体地獄絵巻」谷ナオミが主役で、東京へ家出てきて悪い男にだまされ純潔を奪われた上、山の温泉宿へ売りとばされてしまう。ここを逃げ出そうとした彼女は、すっ裸のままさるぐつわを噛まされ正座させられている。向い側には仲間のもう一人の女が、恨めし気



にナオミを横目でにらんでいる。やがて宿の主人夫婦が、ホースのむちで裸のナオミを、しばき倒すところがある。おかみは、更にナオミの髪の毛を足で押えつけ、逃げられぬようにして責める。つぎに向いの女にもナオミを打たせようとするが、女は、おかみのいいつけをきかない。そこで、おかみが又、この女の顔を、いやというほどホースで打つ。ところが、この女、逆におかみに掴みかかっていく。ここで天然色に変わり、谷ナオミが風呂場で髪の毛を吊るされ顔をゆがめているところが大きく映る。大きな乳房、市松模様のパンティと、谷ナオミの全身をたっぷり映してくれる。厚い氷の上に立たされて、足をガタガタ震わせているのを見てハッとと思う。「少

しは骨身にしみるだろう」という宿の主人に、「身体は縛れても、心までは縛れないわ」とナオミがつばきを吐きかける。主人は氷に湯をかけて溶かし、ナオミの足がつかないようにする。ナオミは全身の重みが髪の毛にかかってくるから、ものすごい油汗を流して、苦痛にのたうつ。またもう一人の女は、同じ浴場で、ふくらはぎに金属製のミザラを挟まされ、正座させられている。もちろん裸で上から下まで大写しになる。中腰になって、この痛みを逃れようとすが、おかみが風呂の蓋を首に押しつけ、彼女の足には、算盤が挟まれて、泣かされる。二人とも、しこたま擦られた後は、ショーツ一枚のまま、失神状態で倒れている。千金に値するヌード映画だ。

「女拷問」これも谷ナオミの主演映画で、大沢男爵を自分の男を使って殺害したという濡れ衣をさせられ、駿河責め、股開き木馬責め、水責めなどでグラマの谷ナオミが



拷問される。「日本刑罰史」以来木馬責めはよく映画で使われる。乳房を縄で締め上げられたまま下ろされてきて、すっぽりと木馬を跨ぐ。鉄で作ってあるから鉄馬というのか。つぎの瞬間、痛烈な痛みに襲われて身をよじる。身体の重量が大きいほど、自分で自分が責められるので、正に責めの極致である。ミニスカートの場合、あ

るいは水着の場合、皮の衣裳をつけている場合などと、私の空想を起こさせる。「徳川女刑罰史」これは三つの話が集められて、その罰の恐ろしさ物語っている。三段斬り、火責め、股裂き、駿河責め、エビ責め、カラシ責め、どじょう責め、串刺し、木馬責め、水平責め、などである。最後の二話で、十頭ぐらいの背の高い木馬が並んでいるので

一斉に裸にされて木馬に跨がされるのかと思っていたら、三十過ぎとしか思われない年増の女だけでよく見ると坐りやすいように削ってあるし、足の重りも見えない。ただソロバン板に正座して石を抱かされている女が、まあまあのお出でであった。

「東京女地図」これは日活映画であるが、佐藤サト子が自動車で記憶喪失になったのを幸いに秘密クラブで責めのショーに使われる。彼女は、すっぽ裸に皮の衣裳をつけさせられて、ムチ打ちにあう。ライトが、先ず彼女の黒皮で締められた乳房から写し、次第に全身に浴びせられる。非常に立体的で、豊満なボリウムが眺められる。鞭が乳房と太股へとび、クサリで足を開かされて、数匹の蛇が太股のあたりを這いまわる。あがく女の呻き声が、十分、楽しませてくれる。このあと洋式便所を跨いで浣腸される女のあられもない姿。ここまで写しては芸術が泣くだろう。第二、第三の作品が楽しみ。以上は、特に私が選んだものであるが、あまり残酷なものより、あくまでも芸術的に女の美しさを写すよう考えてほしいものだ。

スチールは「徳川女刑罰史」



最近の緊縛映画

東山映史

何といっても東映の「徳川いれずみ師、責め地獄」が最高の緊縛振りを見せてくれたが、五社以外では「女犯刑罰史」をはじめ「情痴逆さ吊り」など、見るべきものがある。

「女犯刑罰史」は「日本刑罰史」の小森白監督が監修で監督は「火の前夜」などのベテラン萩原遼監督。明治新政府の悪政で、鉾山から父母を奪われた真湖道代の受難史。谷ナオミの「拷問史」をしのぐ、逆さ吊り、水責め、火責め、ローソク責めなどの受難シーンが続く。美女だけに、すさまじい迫

力があり、これに同情して手を貸し、捕えられて拷問される瑛波美也子の女スリが、爪の間に竹をさしこまれて拷問されるなど、手を変え品を変えての拷問ぶりは、目をそばたしたしめた。

これにつぐ萩原監督の「情痴逆さ吊り」は、美也かほるを始め美女三人を、つぎつぎと逆さ吊りにするという、すさまじさで、とくに美也かほるなど最大の悪女というので、長時間、逆さ吊りにされさぞ、苦しかったことと同情される。ここでも瑛波美也子は逆さに吊られる。

その他「魔性の夜」で、サドの女流画家の一星ケミが、そのサド性を見破られ、男女の賊にクサリで縛られ責められる。「分娩」では、町で黒人兵と関係し妊娠した山の娘が、責め殺されるが、その女親が生き埋めにあう。死んだ娘が両足をひろげて木に縛られるなど異色風景。

五社作品中では、東宝の「御用金」で浅丘ルリ子がいカサマバクチのために、後手に緊縛され、馬につながられ、雨中の泥だらけの中を引きずりまわされるといふ五社監督の迫力のあるシーンが楽しかった。

東映では、女賊ものの宮岡純子の「人斬りお勝」が長襦袢一枚に剥かれ、柱にしぼりつけられての浮世絵的責め。また「女刺客」のファースト・シーンで、芸者が勤王派のスパイと間違えられ、新選組の壬生屯所で拷問されるとこ

浣腸シーンの

登場映画

南美川 喬

先日、日活系の封切館へ「夜の最前線シリーズ」『東京女地図』を観に行きました。

この映画のストーリーは、両親のない二人きりの姉妹が、田舎から出て来て東京で働くのですが、別々のところにそれぞれ住込み、時々会うのを楽しみにしていたのですがある日、妹（佐藤サト子）が、姉と別れた直後に車にハネられ、そのまま連れ去られて、記憶喪失症になったまま、秘密シヨールのスターにさせられてしまう、というものです。

最後はハッピー・エンドとなるのですが、この秘密シヨールに出演させられる場面の中で、佐藤サト

ろなど、頂けた。その他、日活の「夜の最前線」『東京女地図』は、前回の貞操帯につぐ皮の拘束服で十字架に縛りつけられてのムチ打ちシヨールなど趣向をこらしていた。

子がガラス製浣腸器で赤い色付きの液を注入され、透明の便器に腰かけさせられるシーンがあったのです。もちろん、排泄する場面まではありませんが、今までには見られなかったことでしよう。

特に「浣腸」に興味をもって見る私には価千金の想いで、高い入場料も、この一場面であちまちに安いものに思われました。

この他にも、秘密シヨールの場面では、鞭打ちや、蛇責めなどいろいろのシヨールが出てきます。

私は、別に浣腸シーンがあったからということではなく、東映の「異常性愛路線」よりもキャストも脚本もよく、映画そのものの出来も、この『東京女地図』のほうが、ずっと良かったように思います。これから大手の会社が、この種の映画を、よりよいスタッフよいキャストで製作されることを望みたいと思います。

私の不満

東京・赤ちゃん

最近の奇クには、私にとって心から心酔できる小説が少なく残念に思っております。

M傾向の小説で、今までに掲載されたものの中では、田代俊夫氏の『薔薇と蜜蜂』や、芳野眉美氏の『水中花』のようなものを、私は最も愛読してきました。「花と蛇」でも、文夫の出る場面は全体からみれば当然稀少であるわけですが、それでも、その部分を丹念に拾い読みしているくらいです。

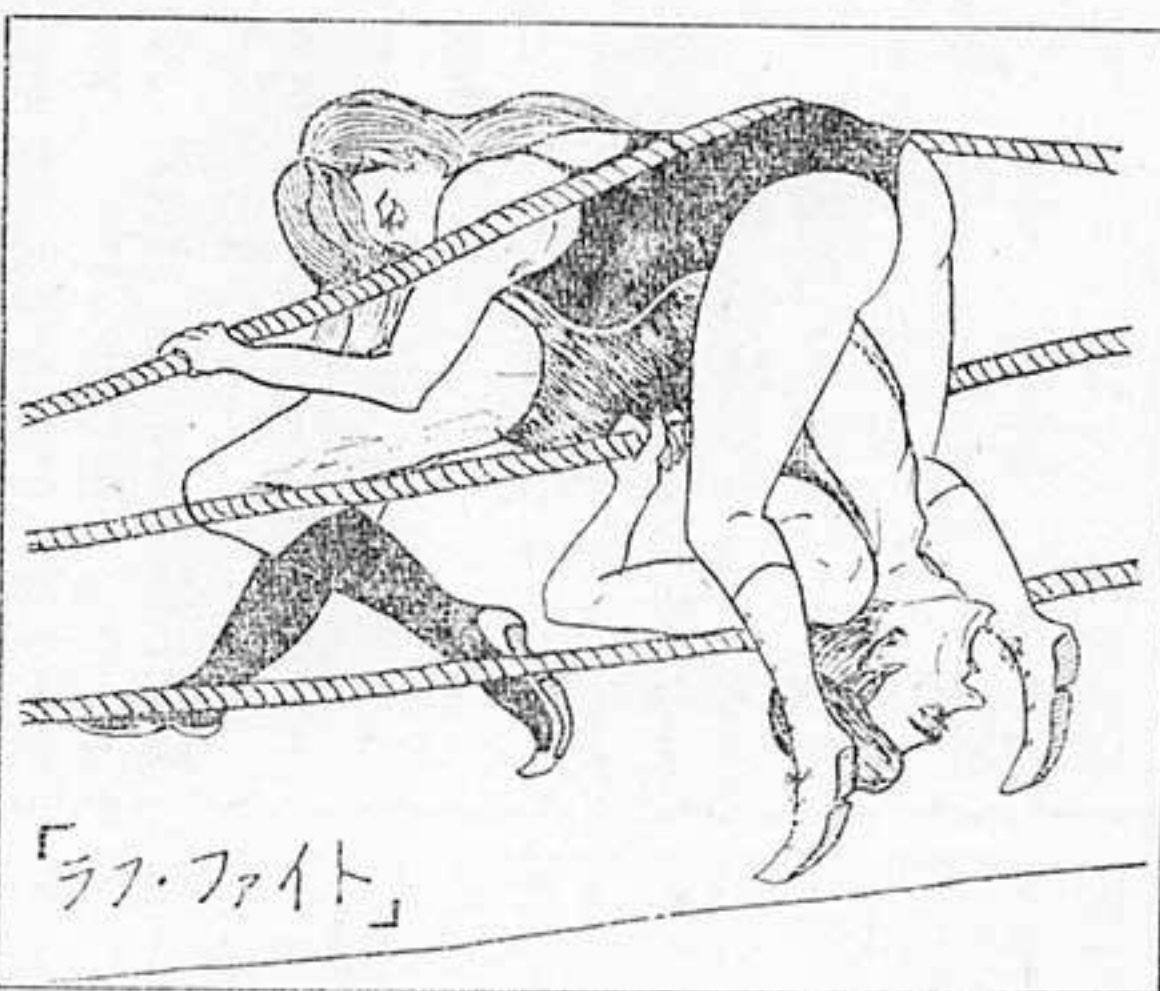
りとしたネチッコさが感じられない点や、プレイがあまりにもプロ的というか、ビジネス的な点が不満なのです。「ピエロ床屋」にしても、女主人公が38才というのが私にとって魅力半減のタネです。もっと若い、せめて20才前後のサディスチンが登場してくれば、この小説を、きっと好きになれると思うのですが……。

昨年来、東映の「異常性愛シリーズ」が上映されましたが、これに対応できるような、M的世界を描いた映画は出来ないものかと思っています。私には、映画界ばかりでなく、奇ク七月号の、辻村隆氏の「映画ハント」がかなりのページ



「耳いじめ」

を占めていたことも、大きな不満でした。たしか、日活で「女番長仁義破り」というのがありました。この映画の内容は、私の好きなものの一つでしたが、ああいう



「ラフ・ファイト」

傾向のものの紹介なら、私の不満も、ずい分、解消されるのでしようが……。

数年前、サスペンスマガジン誌に、田沼醜男という人の一連のM傾向小説が載っていました。その中に、女番長グループとMの学生を扱ったものがありました。私はこれに心から感激し、体をしびれさせたものでした。以後、これほどの感激を味わえるものにはお目にかかれずにいます。とにかく、若くて美人で清純でかつ精力的な乙女が、若い逞しい

男(M男に限らず)を叩きのめして、滅茶苦茶に踏んづけ、小水を浴びせて……というような場面を私は最も期待しているのです。

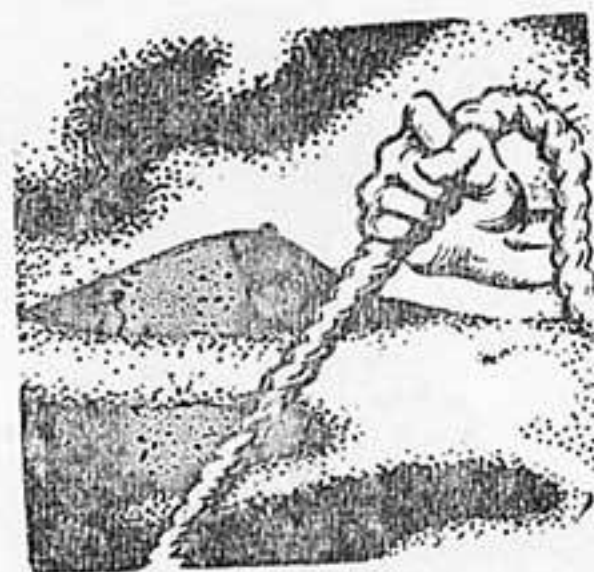
虫プロ製作の漫画映画「千夜一夜物語」が今、話題になっていそうですが、以前の「薔薇と蜜蜂」的なものを、漫画映画化したら素晴らしいものになるのでは、などと所詮かなわぬ夢を抱いたりも、しています。

もっと私の願いを言わせていただくなら、春川ナミオ氏の、M漫画特選集のようなものを、発刊していただけないでしょうか。

春川氏に限らず、一般投稿家のものの特集でも大いに結構だと思います。

実際にプレイするほどの、時間的、経済的余裕のない自分は、せめて奇クの中に欲望を慰めてくれるものを求めているわけです。その期待に応えて下さるようお願いしたく、勝手なことばかり書きました。お許し下さい。

——イメージ画も筆者——



告

白

「甘い空想」のつづき

有田 久美子

幸崎様にまずお応え致します。
一生懸命に書いたつたない私の告白を、たとえ一人でもこんなによく読んで下さったと思うと、恥ずかしさと嬉しさで一杯です。私も又、幸崎様の文を何度も読み返しました。

奴隷の分際で何をほざくか、と云われるでしょうが、でもまだ競売？　されたわけではありませんので、今のうちに、つべこべ申させて下さい。

「それぞれ最も得意とする責め方を各部門に別けて、三日間ずつ交替で……」などとかい事を、私の面前で相談するなんて、眼もあいてられないホテリを全身に感じます。勿論私の選択権なんてないんでしょから、じっと目をつむって、夢の中で期待と恐怖にふるえるでしょう。

私の「夢の部門」を語る前に、私がこんな恥ずかしい期待ばかりする様になった動機、かもしれない一つの女学校時代の思い出を、申し上げます。

それは、四〇才位のとても可愛い体操の先生に、どうみても私が悪くて、そしてその先生を甘くみて大きな違反を平気でやって叱られた時でした。

先生は、半シャツ、ショートパンツの体操着のままの私をプール場に引きずって行き、私の両足を持ち上げて、逆さまに吊るされてしまいました。まだ私は、先生がふざけているとばかり思っていました。逆さまのままプールに落とされたのです。

必死で上ってきた私の体は又、真逆さまに……。三度目は、足をもって吊したまま、先生は哀願し

てあやまる私にお説教を続けるのでした。

他に誰もいないプール場でしたが、濡れねずみの私の体がどんなであるか、女学生だった私にも良くわかり、先生の視線を意識して猛烈にあばれました。

しかし後で、泣いている私に同情する友人達の心とは別に、それが強烈にしてたまらない耽美的な思い出となって心で反逆したのです。年を経るに従って、それがもし素裸のままであつたらとか、いえ両手をしっかり縛られ、裸のまま私の足は先生の手で強引に開股され、さかさまに吊るされたらとか、だんだん淫らな空想に発展してゆくのでした。

幸崎様。私は自分をそうとうなナルシストだと思っております。下着は大変にこりますし、又夏に下着は全くだ着なしのままで、ワンピース一枚だけで東京の繁華街に出かける事があります。さすがに、いくら「シー・スルー」の時代でも、透けた洋服ではありませんが、思い切りミニのスカートを着るのです。頭がクラクラする様な羞恥心と、のぞき見られはしないかと云う被虐感で、一時間も出ているとびっしょ

編集部だより

○懸賞応募原稿と添記したぶ厚い原稿を受取り期待して開封した途端、がっかりすることがある。読者通信や読者原稿であれば或程度仕方ないかも知れないが、いやしくも懸賞応募原稿ともなれば正式の原稿の書き方をしてほしいものだ。原稿の書き方を知らない者の書いた原稿は殆どといってよい位ろくなものはない。だから第一頁を見ただけで、これは駄目だと感づいてしまう。

○折角何十枚時には百数十枚という大量の懸賞応募原稿を書かれるのだから何故きちんとした原稿の書き方をしないのかと不思議にさえ思う。別にむづかしい規則がある筈もなく小学校の作文の時間に習ったそれだよいのだが、そんな初歩的なことさえ守らぬ懸賞応募原稿に接した時は悲しく思う。

○本誌に対する通信の宛名は巻末に記してある通り大阪市住吉郵便局私書箱第四十一号 暁出版株式会社宛で迅速且つ確実に到着する。中には大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号 暁出版として投函される方



愛妻 ゆう子
新田 英雄

りと汗をかく程、陶醉してしまうのです。

私は、不潔な事はとても嫌なのです。それがどんな汚い事でも女の羞恥を責める事と結合していなければ、単にいやらしく感じるだけです。体が拒絶反応を示すだけなのです。ですから、オムツとか、よごれ物のマスク等は唯それだけでは嫌悪感に終るだけでしよう。

私は「見られ」「無抵抗」にされ、思い切り露出されて玩具のようにならされたのです。どんなに嫌がっても、泣きわめいても、それなら我慢出来ないようにして欲しいのです。

前日の、生まれてはじめてのいたびりに身も心もぐったりして、ベッドに寝ついた私の体は、知らぬ間に素裸にむかれ、白いフンドシを男の人の様にしっかりと締められたまま、朝を迎えます。

朝の第一のお仕置は、芋虫のうに縛られた昨日と異って、今度は、広い応接間のまん真中で、くものように大の字に肢体を展げられ、眺められるのです。朝、目覚めの時ですもの、お小水の要求を強制され、その為フンドシを一寸刻みに、長い時間をかけて脱がされてゆく羞恥の声を、テープでおりになろうと、口を縛ろうと御自由なのです。

この私の「夢の部門」を担当なさる、凄くHなおじ様はいらっしゃいませんでしょうか。それは、しなやかな、デリケートで、しつこい各羞恥のポイントへのバイブレーションに、我を忘れて失禁する様を、沢山のお客様方のカメラの放列が迎えて下さってもいいんです。

私は、こんな状況でなら続いても流暢もこらえます。いいえ何度

も申しませんが、我慢できなくともいいんです。実は「アヌス」は私にとって一番のウィーク・ポイントじゃないかと思っています。無理にでもやって下さい。

コヨリ責めなんか背後からされたら、大抵の事は白状してしまうでしょうし、とても失礼なんです。が、もしも面白半分でも、そこに次々とディープ・キスでもされたら、最高のエクスタシーで物凄い恥ずかしい声を出して暴れるかもしれないから、その時ばかりは痛いのはいやですけれど、思い切り、足をきっちり縛りつけて下さい。

最後に、奴隷にでも言葉は優しくして下さい。暴君である事は、行為で肉体に示して下さいればいいんですから。

芦屋市の山本隆様。あんな短い文ですのにお人柄が感じられ、何度も読み返しました。他の方に呼びかけられたのに私が横取りしてははしたないと思いますが、私は貴方の様な方に捕えられたいと思います。よかったですら誌面で御返事下さいませ。

でも「あなたが私にして下さるサービスプロジェクト」って、何でしょう。

もあるが、阿倍野局私書箱第十四号宛に出される場合は天星社とされたく、その何れでも確実に受信可能。尚、箕田京二宛の郵便物は大阪阿倍野局私書箱第14号天星社内、箕田京二として頂きたい。

○局留で郵便物を受領される方が大部分は順調に受渡し出来ているが、中には郵便局から通知があるかと思つて局へ出頭されない方がある。局留の郵便物受領は二度三度と足を運ぶ程の気持ちでいて貰いたいものだ。原稿の返事などは局留だと、何時受領に行くのか不安心なものだ。嘗て沼正三氏などは局留連絡だったが三日か四日毎に確実に局へ受領に行かれるのでスムーズに連絡出来たものである。

○最近SMに関する文献や資料を編集部宛寄贈される方が多いので感謝しているが、編集資料として価値のあるものは内容数量の如何に拘らず購入したいので希望価格を附してご照会願いたい。門外不出の特に貴重なものには条件についてご相談に応ずる準備がある。

○告白や手記を書くこと予約しながら長井葉津子さんや木戸悦子さんから送稿がなかった故、督促の便りを出しておいたので、いずれ誌上を飾れることと思う。

奇クへの短信——小杉千恵

カメラ、ハントへの願望

女の裸が、ヌードと云う美句で風俗を象徴したのは、二十年も前のこと。私の知る世俗はもう、女の全裸はスキヤンダラスな絵画でもなければ、性の解放でもない。

その珍しくもない女体からアブの造型を見出そうと試み、緊縛する。何程、素裸の美しい女の縛られた姿は倒錯の美を匂わす。しかし、奇クの緊縛は納得づくの悦虐であり、唯一の望みであるカメラの目のいたぶりにも、まことの羞恥に悶えた女体はいくつあっただろうか。縛られて、何もかも丸出しにされた上、カメラでハントされるのが事実であっても、発表不能という抑制が、彼女等の安堵の表情を生む。

ヌードが目録では無く、これを手段として、遙か彼方にある人間の本質を求めようとするのが、私達の奇クである。その進化発展をこのカメラ・ハントに求めたい。

私は実のところ△花と蛇▽を愛し、△カメラ・ハント▽は軽視していた。しかし、金原奈加子のフオートによって、羞恥の至美を発見

し、大きく気持ちに変化を来した。

それは奈加子の素晴らしさに加味して、対比の巧みさに魅せられたからである。妊娠前の可愛い奈加子のフオートと、生々しい腹部の奈加子の同時掲載。双方に現われた、奈加子の羞恥の表情はプロ女性の作ったそれとは、全く異質の耽美さを生んだ。それよりも、何にも増して、アブの極限の美態を表現していたフオート。即ち、私をしてこの筆をとらせたものは、恥ずかしい妊娠腹をハンターに覗き込まれ目を閉じて辱かしめに耐える奈加子と、生まれたままの軀を抱きあげられて、思わず火照る頬を手で押えた奈加子の恥ずかしそうな姿態である。身籠った恥しい肉体を、夫以外の男に体よりも高く、高々と抱き上げられ、次の間の悦虐の舞台を垣間見て、不安と期待に慄える風情。

倒錯とかSMの耽美の表現を、ある過程における一変型と見なすか、アブの造型と見なすかは読者の自由であるが、私は常に倒錯の極限的至美を造型したいと思う。

僕の………イメージ画集 「追憶」 室井亜砂路



女の裸体と縄だけでは到底およびもつかない極限だけに、その限界に挑戦して、その羞恥の背景を考慮してハントを望む。

抱きあげられた妊婦がそれであるが、又、着衣による恥ずかしい肢態がそれであり、裸身の周りに並べられた小道具がそれである。袖なしセーターに下半身露出。

捲られたミニスカ。周りに放置された、へしゃげたイチジク浣腸。剥かれたバナナ。こぼれた洗面器の水。ころんだ数個の卵、等のパツクを求めたい。云い換えれば、羞恥を着せてやって頂きたい。羞恥を着た奈加子の再登場を祈るのみ。

(終)

五色の甘夢を詩う

女装の悦び

中村 純

こちよくブラジャーくいこむ
 感触に女となりし喜悦噛みしむ
 化粧終え女となりて責めを受く
 プレイは楽し夏のひととき
 うしろ手に縛られしわれ待ちお
 りき楽しき責めは如何なることか
 責めプレイもだえ苦しむ喜びは
 女装マゾのわが願いなり
 恥ずかしきヌードの責めに泣き
 叫ぶ声にまじりて響く鞭音
 女装せし肌にしたたるローソク
 の激しき責めにむせび泣くわれ
 縛られし女装のわれ恥ずかし
 股にくいこむ三角木馬
 緊縛と目隠しのまま待ちわびる
 つぎなる責めに胸はときめく
 目隠しの暗黒のなかに受くる責
 め刺激加わり悦びに泣く
 皮バンド肌をいたぶり泣き叫ぶ
 声をさえぎる猿ぐつわかな
 二時間の激しき責めを耐え抜き
 て汗と涙に濡れしスリッパ
 くつきりと肌に残りし縄の跡い
 たぶりにくれしひとの恋しく

肥満女体愛好

私の描く絵

肥美好也



とに角、私は肥満体の女性を描
 かずにはいられないのです。
 肥満は女性の敵とか、悩みとい
 って毛嫌いされ、およそ一般受け

がせず、喜ばれない
 のはよくわかってい
 ても、私の絵には中
 年の肥満体の婦人が
 いなければ、どうし
 ても納まらないので
 す。それに私は、い
 つも実にいろいろな
 ものをゴタゴタとか
 きそえて失敗するの
 です。

この絵も、人気の
 ない倉庫の地下室に
 連れこまれた肥満体
 の中年婦人を、ゆっ
 くりと餌食にして責
 めさいなみ、弄んで
 楽しもうという悪人
 を、最初は、鍵をお
 としていた男（自由

を奪われて全裸に近いあられもな
 い姿にむかれた肥満美人の耳に、
 その錠をおとす音は無情にひびき
 これから始まる地獄風景の序曲と
 して、悲痛に夫人の心をえぐるこ
 とでしよう）と、責め道具の一パ
 イ入った箱からいろいろなもの
 取り出してある女（これは私の設
 定にいつも登場する、女とは名の
 みの下卑た醜いこと類を見ないと
 いうような、昔、この肥満美人の

邸で女中、といっても汚いこと専
 門の下女として働いていた女で、
 遠山静子夫人に対する千代よりも
 もっともつと下等な女です）の二
 人だけのものにしようとしていた
 のが、肥満体とはいえ、肌が雪の
 様に白く、艶があつてきめまか
 しい美しい肉体の夫人を二人だけ
 楽しむのは勿体なくて、つい一人
 ふやし、二人ふやして、結局、五
 人でたっぷりと……ということに
 なってしまいました。

これだけ道具を揃えれば、この
 肥満体の婦人がこれからどの様な
 姿にされ、どの様な苦しみで太鼓
 腹をゆすぶり、臀部をふって裸踊
 りを踊りつづけて、口にかまされ
 た汚い男のふんどしの奥で、声に
 ならぬ泣き声をたててもがくか
 がお分りになるとは思いますが、
 あまりにもゴタゴタとしすぎて、
 我ながら感心したものではありま
 せん。

しかし、私は今更の様に自分の
 変った欲望をしみじみと感じつつ
 も、何故一般に、こういう貫録十
 分の、中年の美しい肥満体の女性
 が、いろいろな責めに遭ってもだ
 える、すばらしい姿が、喜ばれな
 いのかなあ、と残念に思い、不思
 議に思っております。

テレビ画面

の

フェチズム

牧 高 志



去る6月22日、東京地方で夜8時から放映された、日本テレビのカラー番組『裏番組をぶっ飛ばせ』の中で、黒眼鏡と毒舌をもつてその名を天下に轟かす野末陳平講師による大学院大学講座に、あろうことか目にも鮮かな真紅の腰巻が翻った。

……「今日はコマーシャルとスターについて勉強することにしよう。つまりだね、スターともなれば、コマーシャルの一つや二つが出来ないようじゃしょうがない。それでこれから、この袋の中から出てくるものについて、ゼスチャアよろしくやって貰おうという寸法だ。いいね。文句はちゃんと台本に書いてある。じゃあ桑原幸子（か高田恭子のうちどちらか。筆者不勉強のため、歌謡歌手の名前

を失念したので申訳けないが、皆んな夢の中」というデビュー作で一躍のしあがった歌手であるそう（な）さん。さア思い切ってやって御覧……」

と、やおら袋の中から取り出したものは、なんと真白い腰布と、2本の紐のついた悩ましい真赤な腰巻であった。

場所柄、もちろん新品で折目もちゃんとついたままというしろものだ。こりゃ無理も無理、果たして彼女どう処理してよいのやらハタと困惑顔であったが、そばから野末先生に、やいのやいのとつかれて手渡された赤い腰巻を、両手でパアッと拡げるだけ拡げた。そして蚊の鳴くような声で台本を素読みしたのである。

「あのう……お婆ちゃんの頃から母娘（これを最初、ハハムスメと云った）代々愛用してきたもので

す。こうして腰に巻くと（云いながらスカートの上からちゃんと正式に巻きつける）とってもいい気持ち……」

「そこですかさず腰巻の宣伝をやるッ、いいね」

「ハイ、皆さまも腰巻をどうぞ」と言って、ウフッフッフ……と笑った。

時間にして僅か三、四分。あつと云う間にこの場面は終わったが、

視聴率もコント55号でワリカシ高いこの番組は、結構お年寄にも受けているというから「婆さんや、とうとう赤い腰巻がテレビにまで出て宣伝する世の中になりましたよ。長生きはするものじゃ」と云ったかどうかは別として、いい意味でのフェチは、テレビでも結構抵抗なくやってゆけることを示唆するものとして、採りあげた次第である。



女性乗馬フォト

アマゾンの面影

佐野 寿

（1）スエーデンの女馬丁で、今レースが済んだばかりの優勝馬に跨って、厩舎に連れ帰るところ

のスナップです。まだレースの興奮が残っているこの馬は、この若く美しい女性馬丁の手でいろいろと世話を受け、また次のレースに備えての予備調教を受けることでしょう。

（2）ドレシールの最高権威者ともいわれるニーナ女史の調教中ス

悦 虐 の 詩 這 松 の 褥 葉 月 由 紀 夫

遠くの緑は厚い布のように

ながながと山肌を這っている。

濡れた岩肌に陽は光り

光りも緑もほのかに匂っている。

這い松を褥にひとりの女が

縛しめられている。

瞳はうつろにひらかれ

宙空をさまよう。

軽やかにいたぶる

男の仕草には山が漂う。

もだえを見詰める男の

脚許に一卷のザイル……

火照った女体に松葉が

ときおり悪戯をする。

美しい山の生贄はそのたびに

麗わしい柔肌を慄わす。

おお、高山の中腹に狂い咲く

花の綾なす形と色よ。

かすかに喘ぐ唇は半ば開かれ

青い果実は仄かに色づく。

ふくふくと波打つ腹部は

喜悅と苦痛の悶えを伴い、

白樺のムチがベニヒカゲ蝶のように

しなやかな女体の上に舞い落ちる。

夕陽の弱い光がほのかな影を描き出し

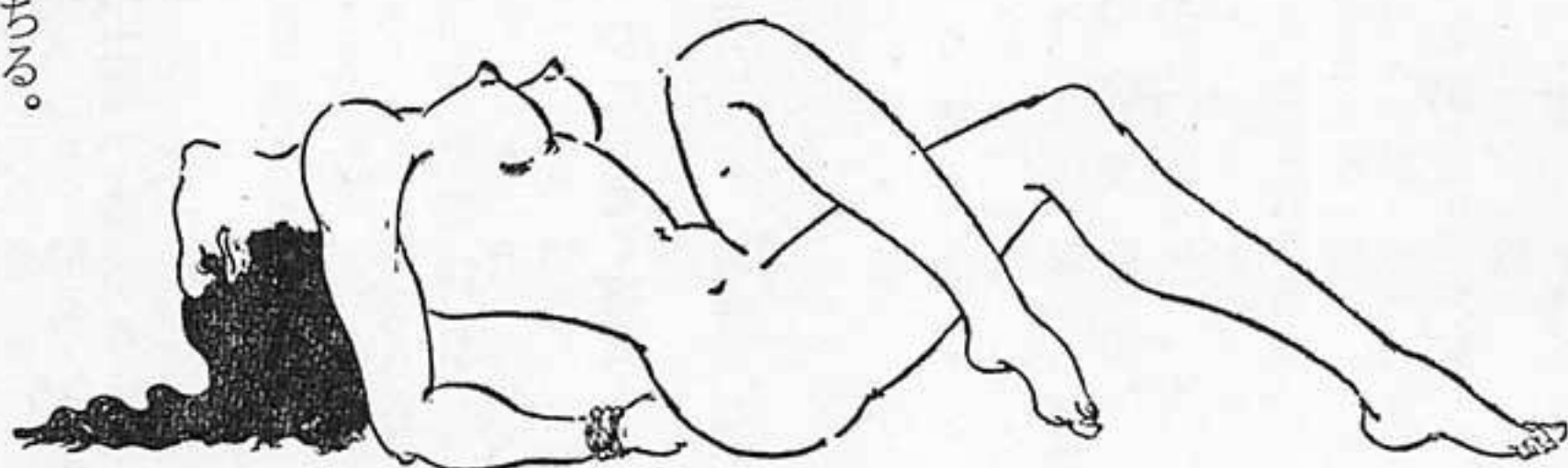
柔肌に浮かぶムチ痕を静かに包む。

激しく燃え尽した倒錯の快美……

だが、余りにも浮世と隔絶せる幸福の感情。

いい知れぬ一抹の悲哀と空しさが二人を包み

ほのかに匂う松の褥に、ホロリと露の玉が落ちた。



ナップ。このニーナさんの乗馬は柔軟性に富み、非常に優れた調教ぶり、その美しさと共に定評ある女性です。連日のように、この美人に乗り廻される馬は、まことに幸福そのものといわねばならぬでしょう。

品に溢れた乗馬姿勢で、美しいグラマーぶりは、練習場でもいつも一際目立ち、見る者の眼を奪うに十分です。シャースチンさんの乗馬はなかなか激しいもので、障碍跳びがお好きだそうです、火の出るような猛練習を常とされています。素晴らしい弾力に圧伏された馬は泡を吹くことでしょう。

(3) 美貌のアマゾン、シャースチンさんの勇姿です。いかにも気

〔秘蔵版特選 S M 資料〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

入墨女賊仰向け木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よひ V

全裸入墨女賊拷問折檻

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よせ V

女賊答打ち白洲糾問

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よゆ V

入墨女賊ハリツケ拷問

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よめ V

入墨女賊海老責め拷問

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よす V

入墨女賊全裸四這い木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よも V

入墨女賊逆さ吊り仕置

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よき V

女賊全裸大の字磔処刑

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よさ V

女囚拷問木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もと V

女囚石抱き算盤責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もへ V

美人女囚海老責め拷問

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もに V

白洲女囚竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もち V

美人女囚答打ち折檻

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もほ V

女囚開股羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もぬ V

美貌女囚土壇で胴斬り

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もり V

艶美女囚白洲に悶える

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もは V

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号△なの V

猿ぐつわにあえぐ裸女

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号△なむ V

女奴隷を弄ぶ二人の女

大手札八枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△きあ V

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚・東浦 略号△きす V

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚・東浦 略号△きせ V

豊満な乳房を責める女

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きそ V

女奴隷を飼育する美女

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きて V

凌辱されるマソ女

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きと V

鼻責め悦楽

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚・東浦 略号△きな V

可憐な牝犬の調教

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めあ V

足舐めをたのしむマソ女

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めく V

足舐めを強要されたマソ女

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めゆ V

足舐め訓練を受ける牝犬

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めや V

愛玩用牝犬の生態

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めえ V

足首縛りの表情美

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あひ V

美しき足首の縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あは V

素足を縛られる快味

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あふ V

生ゴムの猿ぐつわに喘ぐ

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△むこ V

股間縛り恍惚境場面

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△るね V

鼻責めいたぶられ集

大手札四枚一組 五〇〇円
一宮百合子 略号△るえ V

首縄股間膝頭縛り

大手札五枚一組 六〇〇円
一宮百合子 略号△るそ V

鼻いじめ三態

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△はね V

鼻責め万華鏡

大手札八枚一組 一二〇〇円
山原清子外一名 略号△はた V

乳房責め五態

大手札五枚一組 六〇〇円
山原 清子 略号△てら V

全裸女麻縄強烈縛り

大手札十枚一組 一五〇〇円
山原 清子 略号△いね V

刺青裸女を踏みにじる

大手札八枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号△いつ V

洋髪全裸刺青強烈縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△いこ V

可憐島田髻全裸縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△いみ V

黒フンドシ高手小手縛り

大手札八枚一組 一二〇〇円
山原 清子 略号△ひろ V

刺青女体エビ責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△ほか V

文身女体股間縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△ほき V

「最近版」粒選り麗美女体緊縛力作写真

Z組百態

大手札型印画紙(9×13) 極鮮明焼付

各組 一組一枚(送料共)

四組四枚 五〇〇円

十組十枚 一〇〇〇円

二十組二十枚 一八〇〇円

五十組五十枚 四〇〇〇円

百組百枚 七〇〇〇円

(郵便番号 545-91)

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号
天星社宛お申込み下さい。

一枚一枚、いずれも一粒選りの素晴らしい緊縛フォトばかりを集めました。お好みのモデルの、好きなポーズをお選び下さい。

☆

☆

1 鞭打条痕の臀部(関谷富佐子)
2 後手は高く縛る(佐々木真弓)
3 八の字の開股縛(左近麻里子)
4 狂う女体の表情(ローズ秋山)
5 縄に苦しむ長身(川越美佐子)
6 弄ばれる全裸縛(長井葉津子)
7 ゴム衣縛りの極(木村 洋子)
8 白肌輝く股間責(山原 清子)
9 全身縛りを吊る(大塚 啓子)
10 悦虐に悲泣する(関谷富佐子)
11 亀甲股間縛り晒(山原 清子)

12 開股強烈羞恥責(木村 洋子)
13 妊婦の太鼓腹縛(中河 恵子)
14 縛りの好きな顔(一宮百合子)
15 美貌の妊婦緊縛(中河 恵子)
16 縛の全裸を見て(金原奈加子)
17 憂愁の佳人縛り(左近麻里子)
18 前面を晒す裸像(長井葉津子)
19 亀甲縛りの正面(左近麻里子)
20 後手縛を見せる(川越美佐子)
21 鞭は女体に炸裂(ローズ秋山)
22 逞ましき臀部晒(左近麻里子)
23 真白の柔肌責め(左近麻里子)
24 ムチ責めの果て(安井喜久子)
25 鉄砲逆海老縛り(関谷富佐子)
26 湯責めにあう女(山原 清子)
27 変型高手小手縛(川越美佐子)
28 洋子をいじめて(木村 洋子)
29 緊縛のホステス(佐々木真弓)
30 柔肌に喰込む縄(長井葉津子)
31 均齊のとれた体(佐々木真弓)
32 蠟涙責めの熱演(ローズ秋山)
33 脚吊りで責める(ローズ秋山)
34 片足吊りの狂態(大塚 啓子)
35 猿轡の開股縛り(木村 洋子)
36 股間縛の縄掛け(ローズ秋山)
37 妊婦仰臥猿轡責(中河 恵子)

38 二つ重ねの裸女(佐々木真弓)
39 縛られた洋裁生(長井葉津子)
40 椅子開股羞恥責(左近麻里子)
41 責め抜いた挙句(安井喜久子)
42 黒髪をいたぶる(大塚 啓子)
43 全裸の股間縛り(山原 清子)
44 黒総ゴム衣縛り(木村 洋子)
45 パンティを剥く(大塚 啓子)
46 緊縛に頬赤らむ(一宮百合子)
47 猿轡の妊婦縛り(中河 恵子)
48 全裸高手小手縛(長井葉津子)
49 黒髪をいたぶる(ローズ秋山)
50 後手の嚴重縛り(左近麻里子)
51 麗わしの妊婦縛(中河 恵子)
52 炸裂する革ムチ(安井喜久子)
53 剥がされた布片(金原奈加子)
54 浴槽と荒縄の責(山原 清子)
55 髪吊りの擦り責(ローズ秋山)
56 高手小手の裸女(左近麻里子)
57 海老縛りに泣く(関谷富佐子)
58 恐怖の滑車吊り(大塚 啓子)
59 悶える全身縛り(一宮百合子)
60 伸びやかな素足(一宮百合子)
61 卓上の人身御供(左近麻里子)
62 皮紐の柔肌責め(中河 恵子)
63 股間縛を羞らう(金原奈加子)
64 宙吊りにもがく(木村 洋子)
65 裸身を晒す表情(金原奈加子)
66 輝く全裸の悶え(関谷富佐子)
67 全裸をもがく女(ローズ秋山)
68 豊満な臀部晒し(佐々木真弓)

69 乳房強調縛猿轡(左近麻里子)
70 媚を撒く縛り女(佐々木真弓)
71 縄のブラジャー(左近麻里子)
72 逆手吊りの鞭打(関谷富佐子)
73 逆エビで責める(ローズ秋山)
74 美しき緊縛立像(関谷富佐子)
75 悶える緊縛全裸(金原奈加子)
76 鞭で責める女体(ローズ秋山)
77 両手吊りで晒す(金原奈加子)
78 豆絞りの猿轡縛(川越美佐子)
79 あどけなき表情(金原奈加子)
80 厳しい縄目の肌(金原奈加子)
81 白肌にむごき縄(左近麻里子)
82 両手大の字吊り(関谷富佐子)
83 首縄縛りの裸女(佐々木真弓)
84 美しき全裸肢体(佐々木真弓)
85 柱に繋がれた女(長井葉津子)
86 尻挙げ海老縛り(安井喜久子)
87 鑑賞用全裸緊縛(川越美佐子)
88 荒縄縛りの刺青(山原 清子)
89 股裂きで責める(ローズ秋山)
90 ドレイ洋子の姿(木村 洋子)
91 後手に縛上げる(ローズ秋山)
92 滑車吊りの裸女(大塚 啓子)
93 若々しき緊縛美(佐々木真弓)
94 S男がいたぶる(佐々木真弓)
95 強烈縛りに喘ぐ(山原 清子)
96 正面全裸柱晒し(長井葉津子)
97 開股縛りに羞う(左近麻里子)
98 白肌に喰込む縄(大塚 啓子)
99 尻立て股間縛り(木村 洋子)
100 悦虐に泣く美女(安井喜久子)

〔優秀緊縛写真特選集〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

緊縛女体撮影風景

大手札三枚一組 略号(むら) 五〇〇円

足挙げ開股責め

大手札三枚一組 略号(あけ) 四〇〇円

猪吊り三態

大手札三枚一組 略号(いの) 四〇〇円

責め衣縛り

大手札三枚一組 略号(せめ) 四〇〇円

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号(ねむ) 四〇〇円

後手首の高縛り

玉田美佐子 略号(ねへ) 四〇〇円

椅子またぎの責め

大手札三枚一組 略号(ねと) 四〇〇円

全裸脚挙げ縛り

大手札三枚一組 略号(てい) 四〇〇円

全裸アグラ縛り

大手札三枚一組 略号(てへ) 四〇〇円

全裸屈伸縛り

大手札三枚一組 略号(てほ) 四〇〇円

強烈エビ責め

松本アサ子 略号(まと) 四〇〇円

吊り打ち

大手札三枚一組 略号(やり) 四〇〇円

股間縛り法悦境

大手札三枚一組 略号(ぬこ) 四〇〇円

踊り子緊縛

大手札三枚一組 略号(りこ) 四〇〇円

月経帯のまま縛り

遠藤百合子 略号(ゆす) 四〇〇円

縄目に悶える夫人

大手札三枚一組 略号(ほく) 四〇〇円

髪を引き回される夫人

関谷富佐子 略号(ほむ) 四〇〇円

膨満正面縛り

大手札三枚一組 略号(へな) 四〇〇円

マニヤ全裸緊縛フォト

栗本ミチ子 略号(いな) 四〇〇円

強烈エビ縛り

大手札三枚一組 略号(もい) 四〇〇円

乳房責の苦悶

関谷富佐子 略号(もろ) 三〇〇円

全裸ムチ打ち

大手札四枚一組 略号(もた) 五〇〇円

強打に泣く裸身

関谷富佐子 略号(むち) 五〇〇円

裸身の晒し

大手札三枚一組 略号(わあ) 四〇〇円

全裸股間縛

関谷富佐子 略号(せら) 五〇〇円

双胸の強調縛り

大手札三枚一組 略号(そう) 四〇〇円

動感海老責地獄

大手札三枚一組 略号(とう) 四〇〇円

色禪の開股縛り

大手札三枚一組 略号(いふ) 四〇〇円

鼻責めのアップ

大手札三枚一組 略号(はす) 四〇〇円

乳房しばり

大手札三枚一組 略号(うは) 四〇〇円

鼻責めと緊縛

大手札五枚一組 略号(うい) 六〇〇円

木馬責三態

大手札三枚一組 略号(もく) 四〇〇円

椅子責めの果て

大手札二枚一組 略号(いす) 四〇〇円

檻に入れられた女

山原清子 略号(もの) 三〇〇円

浴室の全裸刺青

山原清子 略号(よな) 六〇〇円

鼻いじめ三態

大手札三枚一組 略号(はね) 四〇〇円

鼻責め万華鏡

山原・鈴木 略号(はた) 一二〇〇円

碧玉裸身緊縛

大手札三枚一組 略号(のん) 四〇〇円

くすくす責め地獄

大手札三枚一組 略号(きす) 四〇〇円

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 略号(きせ) 五〇〇円

豊満な乳房を責める

大手札五枚一組 略号(きそ) 七〇〇円

女奴隷を飼育する

大手札五枚一組 略号(きて) 七〇〇円

凌辱されるマソ女

大手札五枚一組 略号(きと) 七〇〇円

鼻責め悦楽

大手札二枚一組 略号(きな) 三〇〇円

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 略号(なの) 四〇〇円

猿ぐつわにあえぐ裸女

大手札三枚一組 略号(なむ) 四〇〇円

全裸の緊縛姿態開陳

遠藤百合子 略号(ゆり) 五〇〇円

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かみ)

強制 空気浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かく)

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かな)

浣腸 責の極致

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かむ)

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(れち)

強制 女体浣腸三態

大手札三枚一組 四〇〇円
絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かふ)

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

浣腸 器と女

大手札三枚一組 四〇〇円
絹川 文代 略号(ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号(るは)

女体浣腸ブレイ

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ほは)

進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ほい)

浣腸 後の排便

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号(へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号(へか)

浣腸 される清子

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(かる)

浣腸 に興ずる女

大手札八枚一組 一三〇〇円
山原 清子 略号(かへ)

浣腸 に悶える女

大手札七枚一組 一二〇〇円
山原 清子 略号(かに)

イルリガートルの浣腸

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号(けか)

いちじく浣腸の実施

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号(けき)

百CCのポンプ浣腸

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号(けく)

オマルに排便の姿態

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号(けし)

浣腸 後オシメ着用

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(けこ)

浣腸 と便意の苦悶

大手札三枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(のけ)

高圧 空気浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(むい)

浣腸 場面大写真

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(むは)

施 される浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(むろ)

浣腸 をする女

大手札三枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

自ら 施す浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ちぬ)

浣腸 器を弄ぶ女

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ちり)

浣腸 を施される女

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ちら)

浣腸 後介添排便

大手札六枚一組 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かね)

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かて)

シリンドラーにて浣腸

大手札六枚一組 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かた)

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かち)

アーヌス浣腸補助

大手札四枚一組 七〇〇円
山原・東浦 略号(かの)

浣腸 に興ずる清子

大手札四枚一組 五〇〇円
山原・東浦 略号(うも)

浣腸 される浣腸マニア

大手札四枚一組 五〇〇円
山原 清子 略号(うわ)

浣腸 悦楽独りブレイ

大手札五枚一組 六〇〇円
美木乃々子 略号(ぬる)

施 される浣腸の美味

大手札五枚一組 六〇〇円
美木乃々子 略号(ぬか)

捜入 された嘴管

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(るて)

襲い くる浣腸器

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(るち)

女体浣腸 独り遊び

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ると)



これまで何度か奇クを手にした事はありましたが、実際自分の所有にしたのは今回が初めてです。「カメラハント」「花と蛇」etc、楽しく読ませてもらいましたが、こういった趣向のミニコミもしゃれたものだと思います。かといって、それが複雑になっては、全くナンセンスになってしまします。今後ともそのシンプルな内容編集のもとに健全な読者を増やしていける事を望みます。夫婦プレイの楽しさ、その意味めいた事

は、チョンガー族には分らない事ではありますが、ありふれた言葉ながら一つの刺戟としてその効用も大なる事と察します。今後とも奇クとのつき合いが続くでしょうが、「花と蛇」に対抗するような時代物的なものがあってもよいのではないのでしょうか。

(横浜市・小松正)

貴社いよいよご繁栄のことお喜び申し上げます。さて私は毎月貴社の奇譚クラブを楽しく読ませていただいております今年二十才になったばかりの女性です。まだ読みはじめて日は浅いのですが、マゾヒストという文字の意味もこの頃になってやっとわかるような気がします。文章はどれもこれも隅から隅まで読みますが、特に『花と蛇』は自分が責められている立場になっっているようで、胸がどきどきして思わず全身がふるえてしまいます。こわいこわいと思いつながら、何だか自分もそうされてみたいような気がします。私は今年の春、田舎から出てきて知り合いの家でお手伝いをしています。日曜日は休みなもので、一人で映画を見に行ったりしますが、一度御誌のモデルになって縛られてみたい

などと大それた望みをいだいたりしています。夜一人でそんな空想をしているときが、とても楽しいのです。両手をうしろに回して鏡にうつしてみたりしますが、どんなか私をやさしく縛って下さる方があったら、どんなにうれしいかなどと夢のようなことを考えています。都会へ出てきて間なしでお友達もありませんので淋しさのあまり、お便りを書いてしまいました。どうかお読みすて下されば幸いです。

(大阪府茨木市・岡本優子)

ながく奇クに親んだ投稿者が突然誌上からきえてしまうのを奇異に思ったことが一度ならずありました。が、同じことが自分の上に起こって成程とよく分かりました。全く関がなくなりました。転職になりました2年間に役職が二つも上り、好きな本もろくに読めない程、仕事に追いまわされております。幸い上司と部下の双方から好かれていようとして、時間で割れば腹の立つような俸給でも、何とか気げんよく勤めている次第です。辻村さんがレポートでM傾向を出しておられるのはたのしいですね。河津さんもやはり忙しくな

られたのでしょうか。誌面に見られないのは、さびしゅうございませす。「悪女の手紙」4は早くから構想だけはできているのですが、ザラ紙に書くひまがなくて、そのままになっていきます。箕田さんは奇クを発行なさって二十年以上、SMのみならず戦後の定期刊行物の発行史に一つの偉業をなしとげられたわけですね。今後一層のご発展を念じます。

(大阪・福田久文)

私は貴誌を愛読しかけて数年になる今年二十八才になる女性に対しM系の男性です。私は今まで本格的なプレイの経験皆無ですが、貴誌はじめ同系統の雑誌をいろいろと読んで一人空想に耽るしだいです。私のようなM系男性にとって、相手の女性を求めることは非常に困難で日夜只々さびしく思っております。さて私の理想としますプレイは女性に対する奴隷的行為ですが、夫婦の男女に対しての共通の奴隷又は複数の女性に対する奴隷的行為は特に好むもので、それらの人達のペットとして喜んで奉仕するしだいです。私は会社員ですので休日は日曜日しかありませんが、私を飼育して下さる方

の現われますことを心からお待ちします。
(愛知・織田日出男)

○ 向夏の候御社益々御清栄の趣お慶び申し上げます。扱小生S30年大
学卒業以来の愛読者で御座います
が、最近幾多の好読物が連載され
ておることが、御同慶に耐えませ
ん。然乍イスラエル、アラブ問題
ネオ・ナチズム抬頭、南アフリカ
独立等、人種問題が提起されてい
る今日、花影叢氏の「夜と霧の群
像シリーズ」こそ、貴誌最良の訴
求力ある読物と信じている一人で
す。何卒上記シリーズの継続をお
願ひします。同思の士多数と信じ
ます。
(東京都・上井猛)

○ 八月号のピエロ床屋、最高です
ね。栄子に叛逆を考えた政吉を逆
手で制圧し、逆に離婚か屈従か二
者選択を迫り、遂にスーパーウー
マン栄子の前に屈服した夫政吉を
足蹴にかけ、美事な肢体を翻して
情人善夫が息をころして待つ二階
へ！ 全く女が階段を上るときの
壮観には思わず身震いがします。
見送る夫政吉の無力さ！ スーパー
ウーマンの前のプアマンの存在
の小さく醜いこと。さて期待の二
階では雨か嵐か？ 夫政吉を屈服

させたスーパーウーマン栄子の颯
爽たる雄姿に胸焦がす読者は私一
人ではないでしょう。今後、続々
と栄子の力強さを書き立てて下さ
い。妻に屈従を誓わされた政吉は
正ハズの座を降ろされスペアハズ
として栄子の店に居ることを許さ
れる。そして夜は正ハズの座につ
いた善夫のために、発火剤あるい
は起爆剤としての役目を負わされ
善夫のために前座をつとめ、栄子
から色々の屈辱責めを受けながら
己の情慾をかきたてるとともに、
栄子の情慾をも、そり上げる。
また政吉は栄子に情交を哀願する
が、栄子は、いつもきまって燃え
る肉体を善夫の許に運び、長時間
かかって燃えてしまう。そのあと
で政吉は、やっと許されて栄子の
中へ入って行くことができるが、
そのとき栄子は燃えつくしており
政吉は栄子の残り火をかき立てん
とするが、思うように行かず、残
飯をあさる野良犬のような有様で
自己の情慾を燃焼させ、グツタリ
と倒れてしまう。栄子は、妻妾同
居ならぬ、正副ハズを同居させて
最上の快楽に耽溺するが、政吉と
善夫が、いずれもM要素のある同
じ型の男なのが一つの不満で、次
第に善夫の新鮮さが薄れてくると

二人を放置して東京の清太郎の許
で一両日を過ぎてくるようにな
る。清太郎は、政吉や善夫と違っ
た男の味を持っているので、栄子
にとって東京行きは、ウキウキし
た気分を味わうことになる。その
内、店の方は内輪のゴタゴタとは
反対に次第に繁昌して、人手不足
が感ぜられる。その頃になって、
先に栄子と喧嘩して退店した友市
が遅く成人して、店に遊びに来
て、もう一度、店で使ってくれな
いかと頼み込む。政吉と善夫は反

対するが、栄子は住込みを許して
しまう。そして友市が、一人男ら
しく栄子を抱くので、栄子の女ら
しさの残りが、友市を慕うことと
なり、三人の男の中で一番年下の
友市だけが栄子を征服し第一ハズ
の座を奪い権力を持つ。しかし栄
子のスーパーウーマンぶりは、友
市だけに征服されることに満足で
きず、従来通り二人のM性、政吉
善夫を情慾の起爆剤として翫るこ
とが、自分の情慾完全燃焼の必要
条件であることを知って友市とか

木戸悦子妊婦写真

本誌十月号のSMカメラハント
「胎児の喘ぐとき」八妊婦九カ月
の妊婦を縛るVでその便々たる太
鼓腹をカメラの前に晒した木戸悦
子夫人のフोटオを特に同好者の方
に左記の通り分譲します。

九カ月妊婦全裸立像正面

大手札三枚一組 略号「のま」 四〇〇円

羞らう妊婦の裸身前向立像

大手札三枚一組 略号「のめ」 四〇〇円

九カ月の妊婦腹を晒す

大手札三枚一組 略号「のや」 四〇〇円

九カ月の妊婦腹を縛る

大手札三枚一組 略号「のこ」 四〇〇円

便々たる太鼓腹に縄掛け

大手札三枚一組 略号「のし」 四〇〇円

膨満腹も露わな両手挙げ縛り

大手札三枚一組 略号「のろ」 四〇〇円

竹棒責めに喘ぐ九カ月妊婦

大手札三枚一組 略号「のは」 四〇〇円

十文字縛りの妊婦腹

大手札三枚一組 略号「のに」 四〇〇円

柱縛りに苦しむ九カ月の妊婦

大手札三枚一組 略号「のほ」 四〇〇円

開股責めと椅子縛りの妊婦

大手札三枚一組 略号「のへ」 四〇〇円

木戸悦子

らみ合う前には二人の男を散々屈辱責めにかけ、その頂点に近づいたときに友市を引き出して、まともな交りで完全燃焼を遂げる。その後は、二人の男が前後して残飯あさりをやる。こんなテーマは、どうでしょう。(松田四郎)

神戸の小杉千恵様。もう、がまん出来ません。自分の気持が押えきれなくなつたのです。貴女という人が現われたから……。私はK誌を見はじめて幾星霜。人前に顔を出す職業故に、ひそかに押えてきたものが貴女の手記によって、ついに……。プレイ用の部屋も道具も、ひそかにととのえておりますが、陽の目をみぬままです。ぜったいに秘密を守ってもらえる人でないと、お逢い出来ないからです。SにもMにもなれるのは貴女と同じです。また、むち打ちなどを好まないのも貴女と同じです。神戸にお住まいとのこと、ぜひお目にかかりたいものです。

(大阪・富田登)

縛られた女性……これほど美しいものが他にあるでしょうか。まだ小生は実際に縛った経験はなく映画や奇ク等で自分をなぐさめて

いる現状です。いつの頃からか同封の写真のように、映画スター等を写真の上で緊縛するようにになりました。それでも縄をかけ、さるぐつわをノリではりつけるときには、感無量の心境になります。もし奇ク誌上に小生の作品が載ったならば、違った趣きが味わえると思うのですが……。桐葉先生。小生の望みをかなえて下さい。夢にまでみた小百合ちゃんと、まりちゃんの緊縛写真……。それから山内毅先生。園まりと吉永小百合の緊縛イメージ画を、ぜひおねがいします。(刈谷・金岡直行)

塚原信夫様。七月号の通信欄、拝見いたしました。私も永い間、SMに憧れていましたが、ただK誌を愛読することによってのみ一人で楽しんでいきます。むしろ、これが最終の目的ではなく、できれば、いつか貴方のようにプレイをしたいと、ねがっていました。ところが幸運にも貴方の呼びかけに応じることができたのです。私も貴方のおっしゃるように、羞恥責めこそが真のSMプレイだと信じています。浣腸責め、排便、放尿、バイブレーター。これだけの言葉を並べただけで興奮を覚える

安井・中河・金原緊縛写真

大手札印画紙極鮮明焼付フォト

開股羞恥責めの姿態

安井喜久子 大手札四枚一組 略号△しう▽ 五〇〇円

安井喜久子 大手札四枚一組 略号△した▽ 五〇〇円

片足首引きつけ縛り 安井喜久子 大手札四枚一組 略号△しち▽ 五〇〇円

尻立て鞭打ち艶姿 安井喜久子 大手札四枚一組 略号△しつ▽ 五〇〇円

柔肌に炸裂するムチ 安井喜久子 大手札四枚一組 略号△して▽ 五〇〇円

エビ縛りの鞭打ち 安井喜久子 大手札四枚一組 略号△しと▽ 五〇〇円

貞操帯着用鞭打ち 安井喜久子 大手札四枚一組 略号△しよ▽ 五〇〇円

痛打にもかく美女体 安井喜久子 大手札四枚一組 略号△しゆ▽ 五〇〇円

あぐら縛りの羞恥責め 安井喜久子 大手札四枚一組 略号△しよ▽ 五〇〇円

片脚挙げで晒す裸身 中河 恵子 大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

強烈エビ縛りで苦悶 中河 恵子 大手札三枚一組 略号△とに▽ 四〇〇円

膝頭縛り開股竹棒責め 中河 恵子 大手札三枚一組 略号△とほ▽ 四〇〇円

竹棒開股足首縛り 中河 恵子 大手札三枚一組 略号△とへ▽ 四〇〇円

股間縛りの裸身表情 中河 恵子 大手札三枚一組 略号△とち▽ 四〇〇円

菱縄縛り猿ぐつわの表情 中河 恵子 大手札三枚一組 略号△とり▽ 四〇〇円

乱痴戯騒ぎの結末 中河 恵子 大手札三枚一組 略号△とぬ▽ 四〇〇円

菱縄縛りで床に喘ぐ 中河 恵子 大手札三枚一組 略号△とる▽ 四〇〇円

浣腸責めの甘い恐怖 中河 恵子 大手札三枚一組 略号△とか▽ 四〇〇円

浣腸液の注入直後 中河 恵子 大手札三枚一組 略号△とま▽ 四〇〇円

強制浣腸の各姿態 中河 恵子 大手札三枚一組 略号△とみ▽ 四〇〇円

浣腸責めの美態開陳 中河 恵子 大手札三枚一組 略号△とめ▽ 四〇〇円

浣腸を待つポーズ 中河 恵子 大手札三枚一組 略号△とも▽ 四〇〇円

次第です。私の思うのに、人の心というよりは心理の奥底には、常にSMの両方が共存しているのだと思うのです。これは実に野性的なもので、性慾の基本となるものですが、現代では文明の蔭にかくれているのです。それを、さらけ出すことが人間性の否定、つまり羞恥心の現われです。私も世間では一応、普通人として通っています。ですから貴方のいわれるような、信頼できる方という点では十分、答えられると思います。ぜひとも貴方のSMの極意を伝授していただきたいと思っています。

(大阪・中尾昌憲)

最近、奇クには私もオムツマニヤのための記事が少なく淋しく思っています。私は船に乗って、まず自分で自身でプレイをすることはできませんが、奇クに載っているオムツマニヤの記事を見て楽しんでます。最近、オムツに關する記事が少ないのも、多分、投稿する人が話題もなくなっただけであらうではないでしょうか。今まで載せられたオムツの記事の抜萃集などを作ってほしいと思っています。またゴム製のオムツカバの発売元などを、ご存知でし

たら、お教え下さい。それからオムツカバーは、生ゴムよりもウルゴムの製品が大好きです。最近ではビニール製品になってしまいが、ゴム製のカバーを製作している売店は皆無のような状態のようですが、作ってくれる店がありましたら、ご紹介下さい。何分にも、よろしくおねがいいたします。

(神戸・正岡 剛)

左近麻里子さんへ。あなたの美しい体に魅せられた者です。早く結婚して、お腹をふくらませて下さい。あなたの妊娠したお腹を見るのがたのしみです。誌上に、羞恥に悶えながら開陳する貴女の妖美な肢態は、貴女のファン達に、貴女の与えられた恥かしい行為を想像させ、貴女をしてマゾの極限を味じあわせると思っています。私達ファンは、貴女の結婚を名犬二頭をかけた合やすような気持で期待しているのです。貴女はファンのために蛙腹を開脚したり、四つん這いになったりして開陳しなければいけないと思って下さい。

(兵庫・左近麻里子ファン)

最近の週刊誌に比較して、余りに奇クが真面目なので齒がゆい。

可憐表情の全裸縛り 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆめV	立縛り正面裸晒し 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆえV	両手吊り全裸晒し 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆひV	雁字搦目後手縛り 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆあV	股間縛り柔肌責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆもV	猿ぐつわ開股責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆにV	豊満な臀部強烈責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆほV	強制全裸開股責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆみV	股間縛りで悶える 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆらうV	全裸縛りに羞らう 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆへV	私の妊娠腹を見てね 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河恵子 略号 八ゆわV	縛られた妊婦横臥す 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河恵子 略号 八ゆよV
被虐に燃える全裸妊婦 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河恵子 略号 八ゆぬV	尚も見せたい妊婦腹 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河恵子 略号 八ゆるV	股間縛り首縄正面 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よれV	両手吊り正面晒し 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よそV	全裸高小手の麗身 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よのV	全裸股間縛りの媚態 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よやV	強烈な変型エビ縛り 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よいV	正座猿ぐつわの仕置 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よふV	凄絶海老責め地獄 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よえV	女体二つ折り縛り 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よぬV	あぐら縛り全裸晒し 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よあV	イルリの浣腸責め 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よたV

私の書いたカットも落書きではない。もっと顔も書いて、上手に、いふなればエロティックに、トミイという名入りのカットに、ちゃんと割れ目いりで、週刊実話五月十九日号一一八頁に載せられた作品の写しなのだ。平凡パンチ五月十二日号、四六頁にはお毛々入りの人形の写真あり。このような点を加えて、羞恥責めや縛りのカットを奇クに載せてほしい。浣腸排尿シーンに思いついたカットを願う。他誌に敗けては、資料集めの文献誌として、おかしいと思う。でも行きすぎて、もともともなくさないでね。

(奇クを愛する人間より)

男女の下着をとりあげて、論説に小説に、いろいろと魅惑的な印象をあたえてくれる本誌。サドもマゾも、描写から下着を除外することはできない。この欄にもフェチストの文をたびたび見るが、大いに共鳴する。牧氏の和服腰巻の読物は、ぞくぞくする。同氏と親しく会ってみたい。またマゾ党、禪、腰巻に魅力を感じている同好の士の交誼をおねがいする。

(東京・中村生)

○

赤畑修造様、奇ク五月号のサロンの写真と文、何にもかえがたく拝見いたしました。にも拘わらず便りがおくれて申しわけありません。実は貴兄に見ていただこうとして肥満体の婦人の画をかいでは消し、消してはかいていたので……私がこう申しては失礼ですが貴兄の曰く「豚妻」の実に見事な肥満体のサイズ年令ともに誠に結構で申し分ありません。写真がハッキリしないのが残念でしたがスカートからハミだした、たくましい太股に胸の躍る私なのです。貴兄のお蔭で「小説宝石」の二月号のグラビアの二十六頁の海女の実に見事なる乳房も見ることができました。「華麗なる賭け」も、わざわざ神戸まで見にいって参りました。私が奇クに「肥満体の郷愁」なる拙文をのせてもらってから肥満体讚美の草分けと自負していたお株を奪われた形ですが、仙台の美川美美子さん、福岡の緒方則子さん、京都の美恵子さん御夫妻の出現等全く嬉しい限りです。肥満体の同好者という願ってもない貴兄が住むというだけで懐しくてたまらず、広い滋賀県のどこにおられるかも分らないままに、貴兄と願わくば八十キロの肥満体の

〔緊縛女体美のシリーズ〕

大手札印画紙焼付

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

両手吊りに悶える女体

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

鞭は柔肌を炸裂する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

浴後の剝玉子縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

投げだす白い緊縛裸身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札三枚一組 略号 五〇〇円

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 略号 五〇〇円

柱の前に緊縛された全裸

大手札三枚一組 略号 五〇〇円

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子

略号 八はひ

奥様に会える日の近からんことを念じて、五月の第二日曜日に大津市へ参りました。そして大津の駅で、実に見事なヒップ、もちろん太鼓腹の肥満体の婦人を見かけて思わず貴兄の奥様ではないだろうかと、錯覚を起こしたぐらいでした。歩くたびにムクムクと盛り上ってゆれる臀部に見とれて、私はそこから一キロほど、ついて歩いたほどです。年の頃は四十前後、堂々たる風格、今思い出しても胸がときめく感じでした。だからということではありませんが、また出かけるつもりです。京都の美恵子様も、貴兄のランクされた女優にたとえと、大関クラスとかさぞ素晴らしい方だと思います。とにかく、中年の肥満体の美しさ？のために大いに気炎をあげたいものです。なにとぞ今後のご健闘を祈ります。

○ (尼崎・高浜満六)

私は二十一才の女性です。女子寮に住んでいるのですが、よくレスを見せつけられます。私は同性に興味がありませんが、友達が奇クを見せてくれ、大変、私の悩みを救ってくれました。私は恥かしいけど便秘症で浣腸をするのに女子寮のために困っていたのです。

でも浣腸のたのしみを知り、だれにも迷惑のかからない倒錯を味わっています。どなたか真面目な男の方に、浣腸の色々な方法や、たのしい姿勢を指導していただけたらと考えてみたりすることがあります。同好の方のお便りをお待ちしております。

○ (神戸市兵庫区・左根敏子)

私は二十才になります。ごく最近、始めてこの本を読んだわけですが、ぜひとも私の熱望を実現させていただきたい、ペンをとった次第です。幼くして母親に死別され、他人の家で育った私は、母親の愛情というようなものは全く知りません。小さいとき、他の子が母親に甘えているのを見て、子供心に淋しくて涙を流した事実が、いくたびかありました。どなたかこの私を、母親のような愛情で可愛がって下さる女性の方は、いらっしゃらないでしょうか。それがかなえられるならば、夢のような幸福であり、いかなることでもする覚悟です。どうか、よろしくおねがいいたします。

○ (川崎・田中秋男)

梅川様、貴女に役立ちそうなゴ

開股縛りに喜悅する女

大手札四枚一組 略号△はわV 五〇〇円

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 略号△はふV 四〇〇円

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 略号△はほV 四〇〇円

悦唐に身もたえる美女

大手札四枚一組 略号△はあV 五〇〇円

菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 略号△はうV 四〇〇円

柱に立縛りでさらす

大手札四枚一組 略号△はさV 五〇〇円

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号△はめV 五〇〇円

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 略号△はしV 五〇〇円

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 略号△はもV 五〇〇円

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 略号△はむV 四〇〇円

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 略号△はめV 四〇〇円

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 略号△はもV 四〇〇円

ムチ打ちの陶酔境

大手札三枚一組 略号△はさV 四〇〇円

両手吊りで痛める女身

大手札四枚一組 略号△はしV 五〇〇円

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 略号△はすV 五〇〇円

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 略号△はせV 四〇〇円

両手吊りであえぐ女体

大手札四枚一組 略号△はゆV 五〇〇円

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 略号△はたV 四〇〇円

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 略号△はちV 五〇〇円

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 略号△はつV 五〇〇円

竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 略号△はてV 五〇〇円

竹棒開股胴絞め縛り

大手札四枚一組 略号△はとV 五〇〇円

ム衣装を私のアイデアから記してみます。一、ゴムマント。現在、市販されているマントは総ゴム製でなく、表が黒いゴム張り、裏が茶色い布地のため、全体に薄っぺらで余り拘束感がない。そこで更に一着。表が紺色の布張り、裏に同色のゴムが張ってあるマントを下に、その上から先のマントを前後、逆（下が後、上が前）に重ね、工業用ミシンで縫い合わせるが、その場合、縫合せる二枚のマントの間に胸当て、前掛けを前後二枚入れるか、フォームラバーを入れると、雨水を充分に含みマントが重く肩にのしかかり、一そう拘束感が増し、投網にかかった獲物のようであり、マント自体、部厚くなり、裾等が破損する心配もない。二、ゴムグツワ。顔の下半分を覆うもので、マスク兼用でゴム地は前掛け等の厚手のものを使用し、裏面に薄い、しなやかな羽二重ゴムをハリ合わせ、クツワの部分に二枚のゴム手袋（炊事または手術用）をノリづけし、舌の上一枚、舌の下に一枚。舌をはさみ込むと唾液でゴム手袋がベツトリと口中にまつわりつき、快よい拘束感が味わえる。呼吸用の空気穴を鼻腔の当るマスクの部分に二

つ開け、全体が脱げ落ちないようにマスクの先端にゴムベルトをつけ、前額部から後頭部に廻し、首の後ろで固定する。クツワの拘束は、首の後の部分にハトメか尾錠をつけ、ゴムひもかベルトでしめ上げ、更にその上からゴムベルトを口の部分にパツクルが当たるように二重に廻し、しめつける。三、水中胴衣。現在、一着使用とありますが、ぜひもう二着そろえ、一着は現在、使用している下にはき、もう一着は股下の部分を首が通るほどの穴に切りとり、ゴム長の足首から先端をカットし、頭からかぶり着用、胴ベルトを締め、はき口についているハトメ穴からゴムひもを股下に通し、前後を締めつけ、拘束する。以上ですが、小柄な貴女に似合うことと思う。なお現在、梅川様への、ささやかなプレゼントのつもりで創作ものを執筆中で、すでに初稿を脱稿し、二稿へと進行していますのでご期待下さい。

（東京・菅原敏夫）

貴誌七月号、二四四頁、結城志運氏の「団先生へのお願い」の記事に、小生も全く同感です。ヒロイン静子、その他、小夜子、桂子

最新撮影総天然色 カラー・プリント写真	
両手吊りに悶える女	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
後手裸身柱縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
大手札四枚一組	略号一〇〇〇円
大塚 啓子	略号一〇〇〇円
縄目にあえぐ裸女	大手札四枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子	略号一〇〇〇円
豊麗な裸身をくびる縄目	大手札四枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子	略号一〇〇〇円
後手高小手縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子	略号一〇〇〇円
長襦袢の緊縛色模様	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる	略号一〇〇〇円
緋の腰巻緊縛色模様	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる	略号一〇〇〇円
猿ぐつわに呻く女	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる	略号一〇〇〇円
柱宙吊り強烈縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる	略号一〇〇〇円
ポリウムを縛りあげる	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる	略号一〇〇〇円
縄に苦悶する裸女を狙う	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる	略号一〇〇〇円
真紅の腰巻着用姿態	
大手札二枚一組	略号八〇〇円
大塚 啓子	略号八〇〇円
縄に悶える緊縛色模様	大手札二枚一組 略号八〇〇円
東浦・大塚	略号八〇〇円
真紅の腰巻着用縛り	大手札四枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子	略号一〇〇〇円
華麗なる緊縛裸身	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子	略号一〇〇〇円
みだらな開股縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子	略号一〇〇〇円
責めに疲れた諦観	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子	略号一〇〇〇円
真紅の腰巻姿で緊縛	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子	略号一〇〇〇円
羞らしいの真正面縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子	略号一〇〇〇円
若肌に喰い込む縄目	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子	略号一〇〇〇円
高手小後手縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子	略号一〇〇〇円
股間縛りの開股姿態	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子	略号一〇〇〇円
羞らしいの股間縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子	略号一〇〇〇円

美津子、文夫、等々、いずれも個性のない温順、平凡な連中を、相も変らぬ似たような方法で、いたぶるのは、読んでいて「またか」と嫌悪感すら覚えます。それに反し、気の強い（腕力も強い）現代娘を特異な環境の下で、いたぶると、こういうことになるという意味で、京子こそ、この読物のヒロインたるべきものとさえ、思います。そのいたぶりの方法は結城氏の主張される浣腸責めのみに限らず、性的攻勢に「負けまい感じまい」と頑張っているのを、遂に陥落させたり（シスターボーイ登場の項で少々あり）また「負けて」「感じて」しまった罰として獣姦の刑に処したり、あるいはその反対に長期間、男断ちして性に飢えさせた上で、他人の情事を毎日、目撃させるなど、色々あると思います。結城氏の主張されるように、京子をマゾ的にしてしまっでは、全く無意味になってしまいます。最近、第二の静子として、生花の家元の女を登場させておられますが、静子と同じようなことをするのでしたら、意味はないと思います。もっとも、この女を「外に出てはニコヤカに虫も殺さぬ美人として振舞っているものの

家の中では驕慢で我ままで、女中や内弟子を毎日、泣かせている生意気な娘」という風に、いたぶることにすれば面白いと思いがすが……。いずれにしろ小生、日頃、感じていますことを結城氏が述べられたので、我が意を得たりと、一筆する次第です。

（神戸・石部金吉）

○ 奇クの皆様、お元気ですか。小生は、異常なほどオムツに関心を抱いている一人です。出張に出かけるときは、必ずオムツを鞆に入れて、宿に着くと待ちわびたようにしてオムツをあてがい、一夜を楽しんでいました。その頃は大人のオムツカバーがあることを知らず、幼児用のなるべく大きなものを二枚、買い求めて、小生の大好きな雪花模様のオムツ地を愛用していました。ある日、偶然、神田の古本屋に立ち寄って、何気なく奇クの本を捲り、オムツを無理にさせられている女学生の挿絵を見たときには、思わず胸が詰まると共に、ジーンと熱いものが込み上ってくるのが分りました。早速買い求め、帰ると同時に頁を開きオムツマニアの告白がのっているのに二度びっくりすると共に、小

<p>双胎臨月蛙腹鮮烈写真 大手札六枚一組 二〇〇〇円 増田みゆき 略号八れやV</p> <p>双胎臨月腹強烈縛り 大手札六枚一組 二〇〇〇円 増田みゆき 略号八れゆV</p> <p>臨月腹裸身の媚態 大手札六枚一組 二〇〇〇円 増田みゆき 略号八れえV</p> <p>黒縄縦縛りの媚態 大手札三枚一組 一〇〇〇円 中河 恵子 略号八れぬV</p> <p>立縛りにあうの裸女 大手札三枚一組 一〇〇〇円 木村 洋子 略号八れねV</p> <p>開股された股間縛り 大手札三枚一組 一〇〇〇円 木村 洋子 略号八れのV</p> <p>豆絞りの猿ぐつわ縛り 大手札三枚一組 一〇〇〇円 木村 洋子 略号八れむV</p> <p>柱縛りに喘ぐ刺青女 大手札三枚一組 一〇〇〇円 山原 清子 略号八やかV</p> <p>高手小手に悶える全裸 大手札三枚一組 一〇〇〇円 山原 清子 略号八やきV</p> <p>緊縛に映える入墨の肌 大手札三枚一組 一〇〇〇円 山原 清子 略号八やくV</p> <p>脱がされた緊縛刺青女体 大手札三枚一組 一〇〇〇円 山原 清子 略号八やもV</p> <p>縄にのたうつ入墨裸身 大手札三枚一組 一〇〇〇円 山原 清子 略号八やしV</p>	<p>腰巻一つで縛られる刺青女 大手札三枚一組 一〇〇〇円 山原 清子 略号八やみV</p> <p>女相撲迫力投業連続動作 大手札十二枚一組 五〇〇〇円 大塚・東浦 略号八なるV</p> <p>恵子の妊孕美観賞 大手札四枚一組 一〇〇〇円 中河 恵子 略号八ぬめV</p> <p>孕み若妻の差らい 大手札四枚一組 一〇〇〇円 中河 恵子 略号八ぬねV</p> <p>八の字の開股責め 大手札三枚一組 一〇〇〇円 愛知 葉子 略号八しいV</p> <p>足枷強制開股責め 大手札三枚一組 一〇〇〇円 愛知 葉子 略号八しみV</p> <p>全裸強烈逆エビ責め 大手札三枚一組 一〇〇〇円 愛知 葉子 略号八しけV</p> <p>両手吊り足枷責め 大手札三枚一組 一〇〇〇円 愛知 葉子 略号八しこV</p> <p>両腕逆手吊り責め 大手札三枚一組 一〇〇〇円 愛知 葉子 略号八しらV</p> <p>豊満なる臀部責め 大手札三枚一組 一〇〇〇円 愛知 葉子 略号八しれV</p> <p>大の字縛りと足挙げ責め 大手札三枚一組 一〇〇〇円 愛知 葉子 略号八しわV</p> <p>お申込みは大阪阿倍野局私書箱 第14号天星社宛へ願います。</p>
--	---

生以外に、マニアが多いことを知り、異常ではないかと思った小生も、これで安心しました。現在はオムツプレイを、いろいろと考えては楽しんでるのですが、ぜひ一度、異性の方と、オムツに関するの思い出や話題について語り合えたら、どんなに素晴らしいかと思っています。オムツに愛着をもっている小生の夢をかなえて下さる女性の方は、おられないでしょうか。ぜひ、あなたの出現をお待ちしています。
(東京・遠藤)

私はKK誌を愛読して二年になる大学生です。幼い頃より私はSMの両面を持ち、また縛り、羞恥責め、浣腸……など、その興味は現在では、SMの世界の、あらゆる方面に、おおよぶようになりました。しかし最近、私はこれらのものの中より、自分自身で見つけるよしもあります。このような私を、KK愛読の女性の皆様、どうか指導下さい。もし幸いにして私の文面がお目にとまりましたらお便り下さい。名古屋近県の女性の方、また藤村由紀子、中野昭子若宮沙登子様、もしお目にとまりましたならば、お便り下さい。
(名古屋・紀田健一)

○ 神戸の小杉千恵様。貴女の通信を拝見させていただきました。小生は京都に住む妻子ある三十八才の肥満体の男子ですが、小生も貴女のような同好のマニアの一人です。特に浣腸に興味を持っており、時々、ときどき一人でイチジク浣腸三十グラムを一度に三個、浣腸して楽しむこともあります。貴女とプレイをしたいと思ひまして、初めて通信させていただいた次第でございます。小生は貴女を最高に満足させてあげると思ひます。小生は文章も字も下手で、自分の思うことが十分、書けません。プレイは誰にも知られぬよう、こっそりいたしますから、ご安心の上、ご返事下さるよう、お願いいたします。
(京都・加藤博)

○ 各地の方々から呼びかけて頂いておりますが、未知の方々故、あなたの調教を受けてよいのか迷っております。仮に応じましても、どんな調教法で泣かせ悲鳴を上げさせられるのか知りませんが、全然、縛られた経験のない私が想像している奴隷教育と違い、自分の言動が後悔の種になるような結果になったらと、急に不安な気持ちで

全裸後手柔肌縛り	大手札三枚一組 略号△こよ▽	四〇〇円
乳房強烈膨隆責め	大手札三枚一組 略号△こわ▽	四〇〇円
海老責めに苦悶する	大手札三枚一組 略号△こお▽	四〇〇円
全裸の緊縛全身晒し	大手札三枚一組 略号△こる▽	四〇〇円
煙草責めに喘ぐ女	大手札二枚一組 略号△こぬ▽	三〇〇円
緊縛麗姿に映えるライト	大手札三枚一組 略号△こほ▽	四〇〇円
臀部強調後手縛り	大手札三枚一組 略号△こころ▽	四〇〇円
羞恥に悶える全裸緊縛	大手札三枚一組 略号△こに▽	四〇〇円
ホステスの緊縛姿態	大手札三枚一組 略号△こち▽	四〇〇円
二つ折りで責める女体	大手札三枚一組 略号△こへ▽	四〇〇円
佐々木真弓	略号△こへ▽	四〇〇円
脈打つ全裸の臨月腹	大手札三枚一組 略号△こふ▽	四〇〇円
中河 恵子	略号△こふ▽	四〇〇円
臨月腹の革紐股間縛り	大手札三枚一組 略号△こや▽	四〇〇円
中河 恵子	略号△こや▽	四〇〇円
猿轡の臨月妊婦腹縛り	大手札三枚一組 略号△この▽	四〇〇円
中河 恵子	略号△この▽	四〇〇円
卓上の股間縛り狂態	大手札三枚一組 略号△こそ▽	四〇〇円
長井葉津子	略号△こそ▽	四〇〇円
羞恥の足挙げ責め	大手札三枚一組 略号△こた▽	四〇〇円
長井葉津子	略号△こた▽	四〇〇円
悦虐責めの女体終着駅	大手札三枚一組 略号△こら▽	四〇〇円
片足挙げの鞭打ち責め	大手札三枚一組 略号△こな▽	四〇〇円
関谷富佐子	略号△こな▽	四〇〇円
柔肌に弾ける惨酷な答	大手札三枚一組 略号△こえ▽	四〇〇円
関谷富佐子	略号△こえ▽	四〇〇円
あぐら縛りの女体鑑賞	大手札三枚一組 略号△こて▽	四〇〇円
対談用に縛られた女	左近麻里子 略号△こて▽	四〇〇円
左近麻里子	略号△こて▽	四〇〇円

もありです。といひますのも、身体を束縛されますと、どうしても無受身になり、抗するすべもなく無防備状態におかれることと思ひますので、万一、冷静さを欠き操を

い気持が大きく自心に浮かび上って尻込みしてしまいそうです。でも私に呼びかけて下さった方は、理性的で充分、信頼できる方々と推測いたしますが、くれぐれも女の無知につけ入るような行為は絶対にしてないと、確約して頂きたいのです。守って下さる自信がありましたら、場所、内容など、具体的にお知らせ下さい。また、奴隷の品質検査のため来直下さいませんか？ 東京の田端さまは同性の奉仕者を求めておられますが、同性の心理を心得ておられる貴女に犬のように命令され支配されますのは、より強い屈辱を味あわされたいと思います。できましたらリストに加えて下さいませんか。それと、奉仕生活を詳しくお知らせ下さいませんか。小田信正さま、お金は大変魅力ですし、欲しうございますね。代償に牝犬にされる、それだけでも惨めで哀れです。加えて厳しい訓練を心身に強要され耐えさせられる羨望の的です。しかし一寸、長期間故、私には到底かなえられぬ夢です。どうぞ、よき牝犬を求められ、飼育日記を拝見させて下さる日を心待ちしております。

○ (福岡・緒方則子)

私は、美川美子さんのようにデブプリと肥った、お腹が妊婦のように出っぱった女の人に憧れています。滋賀の赤畑さん、尼崎の高浜さん、いつもお便り楽しく拝見しています。今後とも、よろしくおねがいいたします。私は肥った女の人と話をするだけでも、なんとなく楽しい思いです。こんな女の人とプレイできたら……と想像しています。大きな乳房やお腹で口をふさがれて息も絶え絶えにされたり、大きなお尻を胸の上にどっかかと下ろされ、身動きもできぬようにされるのを夢みている中年の男です。肥っておられる女の方のお便り、お待ちいたしております。

○ (岡山・西田すすむ)

東区の女王様、通信にて感激いたしました。奴隷と女王様の通信が肩を並べて出ているのも頭が下がります。女王様は、いつの日にか会えるのを楽しみにしておられるとのことですが、女王様の奴隷犬は、貴女の強烈なるムチを一日も早くいただきとうございます。このM犬を早く飼育下さいませ。下男として女王様の命令に従い、すばらしい、以前の犬に負けないような犬になります。以前にも述べ

ましたが、犬はどのような恥かしめや責めをうけても、女王様のためなら喜んでお受けいたします。犬は女王様の排泄物にも、すぐく愛着を感じます。女王様の汚れたパンティ、それに顔を埋めたり、しみにになったところを口に含んだり、女王様の匂いをみんな取ってしまいたいくらいです。すばらしい犬とはお思いになられませんかそれに女子プロレスラーのように犬を散々たたきつけて動けなくなるようにして下さい。その上でローソク責めにして下さい。犬は泣いてお許しを願うことでしょう。だが女王様は「これぐらいのこと、がまんできないの」と責めつけて下さるでしょうね。女王様には、この犬が一番、好条件かと思えます。人間性を捨て、犬となり如何なる事にも服従いたします。女王様の体内から出される物は、たとえ、どのような物でも犬はいただきます。他にはいただきます。他に女王様の下着をきせられ責めて下さってもかまいません。女王様の神酒なら、お茶がわりに毎日でもいただきます。早く奴隷を飼育下さいませ。

○ (横浜・M茂男)

曾根葉子様、ご元気ですか。私

は貴女のお隣りの高岡市に住み、もう十数年もKK誌を愛読している一読者です。同郷の女性読者の通信文が載ったのは、かつて戸破貞子様以来、貴女で二人目ではなからうかと思うのですが、とにかく同郷の同じKK誌の読者として大変うれしいことです。貴女は羞恥責めが大好きとか。私も刃物や鞭など、目を覆いたくなるような血なまぐさいことは嫌いです。永い間に集めた資料など少しは整理したいと思っています。もし貴女がお望みなら差し上げてもよいと思います。一度お会いしてプレーの事など語り合えたらどんなに楽しかろうと思います。ベビードールの似合う貴女に行なってみたいプレーを色々考えてみました。二、三お伝えしましょう。某月某日、私は貴女の指定のように富山駅に出かけました。待つほどもなく若き女性二人（これは、貴女がぼくを信用できなくて友達を連れてきたのです）私の目印に目をとめて寄ってきます。舞台は変って、静かなレストハウスで食事を取りながら、熱心にプレーについて語り合った末、今日は初対面でありますので軽くプレーということになりました。貴女たち二

(次号十月号)は八月二十五日に発売いたします

人は軽いレス関係(失礼、想像ですからご免なさい)でペッチングには少し慣れておられたとしてもブラジャーとパンティ姿になった貴女は、異性の目を意識しただけで、もう大分、上気した頬を染めて、もう大分、上気した頬を染めて

いる姿が如何にも初々しく、ベビードールとは旨い形容だと思えます。状況描写はそれぐらいにして、つぎにプレーを考えてみましょう。両手を頭上に軽く組合わせ緊縛し、テーブルの上に横たえられた上で「悦特」の名場面が迫力も十分に貴女に伝えられますと、それだけでも貴女は恐怖に身を揉みますが、まだ経験の浅い貴女に実際に行なわれるのは操り責めです。先をほぐした毛筆、鳥の羽毛、丸められた毛皮などが、ふれるかふれないかの柔らかさで、足の裏や指の間、膝の後ろからヒップ、臍の周囲から脇腹、練絹のよな貴女の白い裸身の隅から隅まで這い廻れば、貴女はお友達の前であることも忘れて、羞恥と苦痛と甘美のカクテルの中に溺れなければなりません。そして夢の中へと誘うことになりました。最

後の一線とお互いのプライバシーは固く守りますから、以上のべました極めて初歩のプレーに対する覚悟ができましたら、お便りを下さい。(富山・高岡久人)

○ピンク映画の谷ナオミ、林美樹辰己のり子の出ているのは殆ど見ているし、団先生脚本のものも必ず見えていますね。それがYプロダクション、脚本団鬼六、主演谷ナオミのポスターが全然、見られなくなりしました。また期を同じくして都内のS座チェーンでやっていた実演も見られなくなりました。そのわけは、奇ク六月号の鬼六談義を読んで始めて分かりました。谷ナオミファンにとっては、とにかく淋しいかぎりです。団先生、何卒一日も早く問題を解決し、我々ナオミファンのために頑張ってくださいと思います。またYプロもナオミちゃんを他社の作品に、どんどん出演させてほしい。このままでは宝の持ちぐさです。ピンク映画界にとっても大きな損失だと思えます。その上、奇クにも、団先生のシナリオが出なくなりました。

した。団先生はYプロの他にも色々シナリオを書いておられるのですから、その中からSMシーンのあるものをえらんで誌上に公開して下さい。たとえば「素肌の密戯」「情事の後始末」「色道仁義」などで、まだまだ、その他にもあると思いますから、ぜひとも実現して下さい。(東京・大山純)

○私は女装愛好者です。最近、女装に関する読物や投稿がなくなり寂しいかぎりです。読者のなかには私と同じ考えの方もおられると思います。編集部にお願いたいののは、たまには女装関係の読物なども掲載してほしいことです。奇クの性格として、単なる女装だけではなく、女装者の緊縛や責めを中心としたSMがよいのではないのでしょうか。女装はお化粧をして女性の下着や衣服をまとうことです。私の考え方としては、ただそれだけではなく、女性として扱われ、男性から恥かしめられたりいじめられたりし、そして責めを加えられる、ときには女として犯される願いであり、よろこびではなからうかということ。現在、私は女装に必要な一式(洋装)を

持っており、二カ月に一度は、この願いを果たしています。趣味を趣味として消化すれば、健全な社会的、家庭的破壊はないと信じています。諸兄姉のご批判をおねがいいたします。(大阪・中村純)

○ぼくは二十才の奇クの愛読者で「カメラハント」SM同好の皆様通信などを楽しく拝見させて頂いておられます。近頃、実際にSMプレイをしたくてたまらなくなり通信させて頂きました。秘密を守って下さる女性の方で、一週間二万円、一日三千円ほどで、ぼくをペット、愛奴として教育して下さい人は、いらっしやいませんか。どうか。キズさえつけなければ、他のことは何でも貴女の言うことに従う愛奴として忠実に仕えます。それから、ぼくはまだ一度も経験がありませんので、その点にご了承下さい。身長一六八センチ体重五十八キロで身体に自信があります。ご主人になって下さる方は年令三十才未満の女性で、中肉中背の方を望みます。では、よきご主人が現われることを祈って、お待ちいたしております。

○(東京・小川秀人)

☆編集後記☆

○本月号は、当初に肚づもりしていた創作ものの掲載を二、三延ばして、「告白」を比較的多く採り上げさせて貰った。以前にもこの欄で書いたと思うが、本誌に寄せられるものは、形式の如何によらず総べて告白と受取っていいだろうから改まってる区分は必要ないかも知れないのだが、やはり卒直な吐露は独特な分野の感を受け、貴重だと思ふ。

○五人の執筆者を対比された「常連作家を批評する」八山本八郎君を巻頭に掲載した事で山本氏の味読ぶりに敬意を表した恰好になったが、氏の独自の好みと受取り方の表明という意味で、やはり「告白」とみてよいのではなからうか。人それぞれの感覚によって、その

の当否は分かれることだろうが、いずれにせよ薬餌に親しみながらのご投稿とか。ご自愛を念じながら、労を謝したい。

○映画批評「徳川いれずみ師・責め地獄を見て」八絵面優美子君は、他誌引用が長すぎるようにも思ったが、石井監督の発言紹介の意を尊重して、あえて掲載した。引用についていのでながらお願いしておくが、別項で映画や雑誌の通信は募集しているし、歓迎したいとは思ふが、中には週刊誌や雑誌の記事や小説を、そのまま転記して送って来られるものがある。いくら本誌向きだとお考えになっても少々の抜萃ならともかく、全文では？と思えるような長々とした転写のご投稿には「ご苦労サマ」としかいいようがない。あくまで「紹介通信」の意味の理解を乞う。

「懸賞原稿募集」

△体験、告白、手記▽

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけ、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千円以上の賞金を贈呈します。

△創作、小説、物語▽

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未

発表作品に限ります。これはと思う作品は必ず誌上に取り上げます。腕試しの意味で奮って御投稿願います。採用篇には賞金十万円迄贈呈。

△感想、論評、批判▽

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌憚なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千元以上の賞金を呈します。

△(映画、雑誌)通信▽

映画、雑誌、演劇、新聞、単行本或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出

処は詳しく明記願います。採用篇には本誌三月分以上又は二千円以上の賞金贈呈。

◎御送付下さいました原稿は原則として返却の求めに応じないことになっております。故に悪しからず御諒承願います。

◎本文記事中に各種の「懸賞原稿募集」を致しております。故に御応募の方は項目を御明記の上御送稿下さい。

△読者通信原稿▽

巻末の読者通信欄は読者の皆さま方のための公共の広場として開放してあります。御遠慮なくお寄せ下さい。

☆本誌御購読の栞☆

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

九月号

〔第二十三巻第十号〕
〔通刊第二百五十七号〕

昭和四十四年八月二十日 印刷
昭和四十四年九月一日 発行

編集人 杉原虹児
発行人 北村俊夫
印刷人 北村俊夫

郵便番号558 大阪市住吉郵便局私書函第四十一号
発行所 暁出版株式会社
△振替口座大阪四二七八三番
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二二日)
国鉄大局特別扱承認雑誌第二二〇号

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努める各条例に指定されないうえ、本誌は充分に注意して編集いたしておりますが、本誌成人向として発行を企図しておられます関係上、十八才未満の方には絶対販売下されませんよう、特にくれぐれもお願ひ申し上げます。